秋田県文化財調査報告書第189集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書IV

――下田遺跡・下田谷地遺跡――

1990・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書IV

——下田(しもだ)遺跡・下田谷地(しもだやち)遺跡——

1990・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるもので、すでに秋田市から横手市までの57.4kmについては、平成３年度の完成を目指して着々と工事が進められております。秋田県教育委員会では、昭和60年度から遺跡の発掘調査を実施し、歴史的に貴重な資試料を得て逐次その成果を公表してまいりました。

本報告書は、昭和62年度・昭和63年度に調査しました下田遺跡と下田谷地遺跡の調査成果をまとめたものであります。下田遺跡においては縄文時代の土坑や平安時代の竪穴住居跡が検出され、平安時代の竪穴住居跡からは火山灰とともに県内ではきわめて類例のない羽釜が出土し、下田谷地遺跡では縄文時代の竪穴住居跡が検出されました。これらは地域の歴史研究に欠くことのできないものであります。

本書が学術上は無論のこと、埋蔵文化財に対する御理解と保護のために広く御活用いただければ幸いです。

最後に本書を刊行するにあたり、御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、大曲市・大森町教育委員会並びに関係各位に対し心からの感謝の意を申し上げます。

平成２年１月20日

秋田県教育委員会

教育長　橋本　顕信

例　言

1. 本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の4冊目の報告書である。
2. 本報告書は昭和62・63年度に調査された大森町所在の下田遺跡、大曲市所在の下田谷地遺跡の調査の結果を収めたものである。
3. 執筆分担は以下のようにした。

はじめに ……柴田陽一郎
遺跡の立地と環境1・2 ……谷地　薫
遺跡の立地と環境3 ……柴田陽一郎
下田遺跡 ……谷地　薫
下田谷地遺跡第2章第1節（1） ……和泉　昭一
下田谷地遺跡第2章第1節（1）以外 ……柴田陽一郎

4. 自然科学的分析のうち下田遺跡の火山灰分析は東北大学農学部　庄司貞夫氏、山田一郎氏（現　農林水産省農業環境技術研究所土壌調査分類研究室）にお願いし、玉稿を賜わった。心から感謝申し上げる。他に、下田遺跡の放射性炭素年代測定は学習院大学に、下田谷地遺跡の花粉分析・鉱物分析はパリノ・サーヴェイ（株）に委託した報告書である。
5. 石器の石材鑑定は秋田県立博物館　佐々木　厚氏にお願いした。
6. 土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帳』に拠った。
7. 発掘調査および遺物整理にあたって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（順不同）

岡田茂弘　高橋亜貴子　高橋与右エ門　伊藤博幸　佐々木和博　三浦圭介　手塚　均
小松正夫　石川恵美子　石郷岡誠一　赤平智尚　千田和文　奈良正毅　能登谷宣康
白鳥文雄　板橋範芳　本間　宏　鈴木　徹　鈴木俊男　澤谷　敬　島村英之

凡　例

1.　柱穴に付した数値は、床面からの深さで、単位はcmである。

2.　各遺構・遺物に付している略記号は以下のとおりである。

下田遺跡

建物跡……ＳＢ　　竪穴住居跡……ＳＩ　　土坑……ＳＫ

竪穴遺構……ＳＫＩ　　焼土遺構……ＳＮ　　柱穴様ピット……ＳＫＰ

その他の遺構‥ＳＸ

下田谷地遺跡

竪穴住居跡……ＳＩ　　土坑……ＳＫ　　フラスコ状土坑‥ＳＫＦ

焼土遺構……ＳＮ　　柱穴様ピット‥Pit　　その他の遺構……ＳＸ

3.　遺構はすべてその性格に関係なく通し番号とした。

4.　挿図中の遺物実測図と拓本は下田遺跡では節毎に、下田谷地遺跡ではすべて通し番号とし、図版中の遺物もそれにしたがった。

5.　文章中および表中の法量の推定値は（　）で表示した。

6.　須恵器は土師器と区別するため、挿図中の実測図断面を黒く塗りつぶした。

7.　石器のアスファルト付着部分の範囲は黒く塗りつぶした。

8.　挿図中のスクリーン・トーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。

下田遺跡

地山　　地山土の再堆積・地山ブロック　　● 土器

焼土（火焼面）　　炭化物　　▲ 石器

焼土・黒色処理(土器)　　土器の付着物（スス）　　■ 礫

火山灰　　土器の付着物（ウルシ）　　✱ 金属製品

下田谷地遺跡

地山　　煤状炭化物　　石器の敲き

灰白色火山灰　　焼土　　● 土器

石器の擦り　　朱付着の石器　　▲ 石器

目　次

序
例　　言 …… iii
凡　　例 …… iv
目　　次 …… v
挿図目次 …… vii
図版目次 …… x
表 目 次 …… xiii

はじめに

1　調査に至るまで …… 3
2　調査の組織と構成 …… 5
3　調査の方法 …… 6
4　調査の経過 …… 7

遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地 …… 11
2　遺跡周辺の地質 …… 13
3　歴史的環境 …… 15

下田遺跡

第1章　調査の概要 …… 23
　第1節　遺跡の概観 …… 23
　第2節　調査の経過 …… 23

第2章　調査の記録 …… 27
　第1節　遺跡の層序 …… 27
　第2節　縄文時代・弥生時代の遺構と遺物 …… 28
　　1　検出遺構と遺物 …… 28
　　2　遺構外出土遺物 …… 52

第３節　平安時代の遺構と遺物 …… 134
1　中央部遺構群の検出遺構と遺物 …… 134
2　中央部遺構外出土遺物 …… 172
3　南部遺構群の検出遺構と遺物 …… 180
4　南部遺構外出土遺物 …… 222
5　東部遺構群の検出遺構と遺物 …… 228
6　東部遺構外出土遺物 …… 240
7　北部遺構群の検出遺構と遺物 …… 241
8　北部遺構外出土遺物 …… 241

第３章　自然科学的分析 …… 250
第１節　放射性炭素年代測定 …… 250
第２節　火山灰分析 …… 251

第４章　まとめ …… 252
図　版 …… 283

下田谷地遺跡

第１章　調査の概要 …… 341
第１節　遺跡の概要 …… 341
第２節　調査の経過 …… 347

第２章　調査の記録 …… 349
第１節　検出遺構と遺物 …… 349
第２節　遺構外の出土遺物 …… 382

第３章　自然科学的分析 …… 411
第１節　花粉分析・鉱物分析 …… 411

第４章　まとめ …… 425
図　版 …… 431

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡位置図 …… 11
第 2 図　遺跡周辺地形図 …… 12
第 3 図　地形区分図・表層地質図 …… 14
第 4 図　遺跡位置図及び周辺遺跡図 …… 16
第 5 図　調査範囲図 …… 19

下 田 遺 跡

第 1 図　遺跡配置図 …… 25
第 2 図　基本層位 …… 27
第 3 図　SK113・51 土坑 …… 29
第 4 図　SK95・96 土坑 …… 30
第 5 図　SKI91 竪穴遺構、SK116・121・120 土坑 …… 31
第 6 図　SKI91 竪穴遺構、SK120 土坑出土遺物 …… 32
第 7 図　SI37 住居跡 P1 …… 34
第 8 図　SI37 住居跡 …… 35
第 9 図　SI37 住居跡 P2 …… 37
第 10 図　SI26 竪穴住居跡、SK32 土坑 …… 38
第 11 図　SI26 竪穴住居跡、SK32 土坑出土遺物、SK25・21・22・23 土坑 …… 41
第 12 図　SK19・41 土坑、SKP52 ピット …… 42
第 13 図　SK33 土坑 …… 43
第 14 図　SK33 土坑出土遺物 …… 44
第 15 図　SK62 土坑 …… 45
第 16 図　SK63 土坑 …… 47
第 17 図　SK34・35・53・70・45 土坑 …… 49
第 18 図　SK39・44・47 土坑 …… 50
第 19 図　SKP77・105・40・46 ピット、出土遺物　51
第 20 図　遺構外出土土器 (1)　第 I 群 …… 55
第 21 図　遺構外出土土器 (2)　第 I 群 …… 56
第 22 図　遺構外出土土器 (3)　第 I 群 …… 57
第 23 図　遺構外出土土器 (4)　第 I 群 …… 59
第 24 図　遺構外出土土器 (5)　第 I 群 …… 60
第 25 図　遺構外出土土器 (6)　第 I 群 …… 61
第 26 図　遺構外出土土器 (7)　第 I 群 …… 63
第 27 図　遺構外出土土器 (8)　第 I 群 …… 64
第 28 図　遺構外出土土器 (9)　第 I 群 …… 65
第 29 図　遺構外出土土器 (10)　第 I 群 …… 66
第 30 図　遺構外出土土器 (11)　第 I 群 …… 67
第 31 図　遺構外出土土器 (12)　第 I 群 …… 69
第 32 図　遺構外出土土器 (13)　第 I 群 …… 71
第 33 図　遺構外出土土器 (14)　第 II・III 群 …… 73
第 34 図　遺構外出土土器 (15)　第 IV 群 …… 75
第 35 図　遺構外出土土器 (16)　第 IV 群 …… 77
第 36 図　遺構外出土土器 (17)　第 IV 群 …… 78
第 37 図　遺構外出土土器 (18)　第 IV 群 …… 79
第 38 図　遺構外出土土器 (19)　第 IV 群 …… 80
第 39 図　遺構外出土土器 (20)　第 IV 群 …… 81
第 40 図　遺構外出土土器 (21)　第 IV 群 …… 82
第 41 図　遺構外出土土器 (22)　第 IV 群 …… 83
第 42 図　遺構外出土土器 (23)　第 IV 群 …… 84
第 43 図　遺構外出土土器 (24)　第 IV 群 …… 85
第 44 図　遺構外出土土器 (25)　第 V 群 …… 87
第 45 図　遺構外出土土器 (26)　第 V 群 …… 88
第 46 図　遺構外出土土器 (27)　第 V 群 …… 89
第 47 図　遺構外土器出土分布図（第 I・II・III 群） …… 90
第 48 図　遺構外土器出土分布図（第 IV・V 群） …… 91
第 49 図　遺構外出土石器 (1) …… 93
第 50 図　遺構外出土石器 (2) …… 95
第 51 図　遺構外出土石器 (3) …… 97
第 52 図　遺構外出土石器 (4) …… 98
第 53 図　遺構外出土石器 (5) …… 99
第 54 図　遺構外出土石器 (6) …… 101
第 55 図　遺構外出土石器 (7) …… 103
第 56 図　遺構外出土石器 (8) …… 105
第 57 図　遺構外出土石器 (9) …… 107
第 58 図　遺構外出土石器 (10) …… 108
第 59 図　遺構外出土石器 (11) …… 109
第 60 図　遺構外出土石器 (12) …… 110
第 61 図　遺構外出土石器 (13) …… 111

第 62 図　遺構外出土石器 (14) ……113
第 63 図　遺構外出土石器 (15) ……115
第 64 図　遺構外出土石器 (16) ……116
第 65 図　遺構外出土石器 (17) ……117
第 66 図　遺構外出土石器 (18) ……118
第 67 図　遺構外出土石器 (19) ……119
第 68 図　遺構外出土石器 (20) ……120
第 69 図　遺構外出土石器 (21) ……121
第 70 図　遺構外出土石器 (22) ……122
第 71 図　遺構外出土石器 (23) ……123
第 72 図　遺構外出土石器 (24) ……125
第 73 図　遺構外出土石器 (25) ……126
第 74 図　遺構外出土石器 (26) ……127
第 75 図　遺構外出土石器 (27) ……128
第 76 図　遺構外出土石器 (28) ……129
第 77 図　遺構外出土石器 (29) ……130
第 78 図　遺構外出土石器 (30) ……131
第 79 図　遺構外石器出土分布図（篦状石器・不定形石器 ……133
第 80 図　遺構外土器出土分布図（土師器）と遺構群区分 ……135
第 81 図　SI69 竪穴住居跡 ……137
第 82 図　SI69 竪穴住居跡カマド ……139
第 83 図　SI69 竪穴住居跡遺物出土状況 ……142
第 84 図　SI69 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……143
第 85 図　SI69 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……144
第 86 図　SI69 竪穴住居跡出土遺物 (3) ……145
第 87 図　SI69 竪穴住居跡出土遺物 (4) ……146
第 88 図　SI69 竪穴住居跡出土遺物 (5) ……147
第 89 図　SI69 竪穴住居跡出土遺物 (6) ……148
第 90 図　SI69 竪穴住居跡出土遺物 (7) ……149
第 91 図　SI74 竪穴住居跡遺物出土状況 ……151
第 92 図　SI74 竪穴住居跡カマド ……153
第 93 図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……155
第 94 図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……157
第 95 図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (3) ……158
第 96 図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (4) ……159
第 97 図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (5) ……160
第 98 図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (6) ……161
第 99 図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (7) ……162
第100図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (8) ……163
第101図　SI74 竪穴住居跡出土遺物 (9) ……165
第102図　SK87 土坑 ……166
第103図　SK87 土坑出土遺物 ……167
第104図　SK89 土坑 ……168
第105図　SK90 土坑 ……169
第106図　SK13 土坑 ……170
第107図　中央部遺構外出土遺物 (1) ……171
第108図　中央部遺構外出土遺物 (2) ……173
第109図　中央部遺構外出土遺物 (3) ……174
第110図　中央部遺構外出土遺物 (4) ……175
第111図　中央部遺構外出土遺物 (5) ……176
第112図　中央部遺構外出土遺物 (6) ……177
第113図　中央部遺構外出土遺物 (7) ……178
第114図　中央部遺構外出土遺物 (8) ……179
第115図　中央部遺構外出土遺物 (9) ……181
第116図　SB92 建物跡 ……182
第117図　SB92 建物跡検出状況 ……183
第118図　SB92 建物跡 ……185
第119図　SB92 建物跡遺物出土状況 ……187
第120図　SB92 建物跡出土遺物 (1) ……189
第121図　SB92 建物跡出土遺物 (2) ……191
第122図　SI93 竪穴住居跡 ……192
第123図　SI93 竪穴住居跡カマド ……193
第124図　SI93 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……194
第125図　SI93 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……195
第126図　SK98 土坑 ……196
第127図　SI100 竪穴住居跡 ……199
第128図　SI100 竪穴住居跡 ……201
第129図　SI100 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……203
第130図　SI100 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……204
第131図　SI100 竪穴住居跡出土遺物 (3) ……205
第132図　SI100 竪穴住居跡出土遺物 (4) ……206
第133図　SI100 竪穴住居跡出土遺物 (5) ……207
第134図　SI100 竪穴住居跡出土遺物 (6) ……208
第135図　SI100 竪穴住居跡出土遺物 (7) ……209
第136図　SI100 竪穴住居跡出土遺物 (8) ……211
第137図　SK99・101・108 土坑、SN102・107 焼土遺構 ……213
第138図　SK108 土坑、SN103 焼土遺構 ……215
第139図　SN101 土坑、SN102・107 焼土遺構 ……217
第140図　SK112 土坑 ……219

第141図　SK111・115 土坑，SN110 焼土遺構 ‥220
第142図　SK30 土坑・SX130 柱穴群出土遺物 ‥221
第143図　SX130 柱穴群 ……223
第144図　南部遺構間遺物接合状況 ……225
第145図　南部遺構外出土遺物(1) ……227
第146図　南部遺構外出土遺物(2) ……229
第147図　南部遺構外出土遺物(3) ……230
第148図　南部遺構外出土遺物(4) ……231
第149図　南部遺構外出土遺物(5) ……232
第150図　SB24 建物跡 ……235
第151図　SB24 建物跡 ……237
第152図　SB24 建物跡遺物出土状況 ……242
第153図　SB24 建物跡出土遺物(1) ……243
第154図　SB24 建物跡出土遺物(2) ……244
第155図　東部遺構外出土遺物(1) ……245
第156図　東部遺構外出土遺物(2) ……246
第157図　東部遺構外出土遺物(3) ……247
第158図　東部遺構外出土遺物(4) ……248
第159図　SK14 土坑・SK16 土坑 ……249
第160図　グリット別文様判明破片出土数と
　　捨場の変遷 ……261

下田谷地遺跡

第 1 図　遺跡周辺地形図 ……335
第 2 図　遺構配置図 ……337
第 3 図　水田部分平面図 ……339
第 4 図　水田部分第 2 トレンチ断面図 ……342
第 5 図　遺跡基本土層図 ……345
第 6 図　深掘土層断面図 ……347
第 7 図　SI01 竪穴住居跡 ……351
第 8 図　SI01 竪穴住居跡・炉 ……352
第 9 図　SI10 竪穴住居跡 ……353
第 10 図　SI10 竪穴住居跡・炉 ……354
第 11 図　SK 土坑(1) ……364
第 12 図　SK 土坑(2) ……365
第 13 図　SK 土坑(3) ……366
第 14 図　SK 土坑(4) ……367
第 15 図　SK 土坑(5) ……368
第 16 図　柱穴様ピット配置図（全体）……370
第 17 図　柱穴様ピット配置図（部分）……371
第 18 図　柱穴様ピット配置図（部分）……372
第 19 図　遺構内出土土器(1) ……374
第 20 図　遺構内出土土器(2) ……375
第 21 図　遺構内出土土器(3) ……376
第 22 図　遺構内出土土器(4) ……377
第 23 図　遺構内出土土器(5) ……378
第 24 図　遺構内（ピット）出土土器(6) ……379
第 25 図　遺構内出土石器(1) ……380
第 26 図　遺構内出土石器(2) ……381
第 27 図　遺構外出土土器(1) ……388
第 28 図　遺構外出土土器(2) ……389
第 29 図　遺構外出土土器(3) ……390
第 30 図　遺構外出土土器(4) ……391
第 31 図　遺構外出土土器(5) ……392
第 32 図　遺構外出土土器(6) ……393
第 33 図　遺構外出土土器(7) ……394
第 34 図　遺構外出土土器(8) ……395
第 35 図　遺構内(7)・外出土土器(9) ……396
第 36 図　遺構外出土土器(10) ……397
第 37 図　遺構外出土土器(11) ……398
第 38 図　遺構外出土土器(12) ……399
第 39 図　遺構内(3)・遺構外(1)出土石器 ……400
第 40 図　遺構外出土石器(2) ……401
第 41 図　遺構外出土石器(3) ……402
第 42 図　遺構外出土石器(4) ……403
第 43 図　遺構外出土石器(5) ……404
第 44 図　遺構外出土石器(6) ……405
第 45 図　遺構外出土石器(7) ……406
第 46 図　遺構内(4)・遺構外(8)出土石器 ……407
第 47 図　水田部分第 2 トレンチ花粉分析資料
　　採取地点土層柱状図 ……412
第 48 図　水田部分第 2 トレンチ花粉化石
　　群集変遷 ……417・418
第 49 図　水田部分第 2 トレンチの断面 ‥421・422
第 50 図　分析資料の重鉱物組成ダイヤグラム　423
第 51 図　分析資料の軽鉱物組成ダイヤグラム　424
第 52 図　出土遺物分布図(1) ……427

第 53 図　出土遺物分布図 (2) ……428
第 54 図　出土遺物分布図 (3) ……429
第 55 図　出土遺物分布図 (4) ……430

図　版　目　次

下　田　遺　跡

図版 1　1　調査後近景（南東▷北西）……283
2　SK113 土坑（南▷北）
3　SK51 土坑（北▷南）
図版 2　1　SKI91 竪穴状遺構（西▷東）　……284
2　SK95 遺物出土状況（南▷北）
3　SK95•96 土坑（東▷西）
図版 3　1　SK121 土坑（北▷南）　……285
2　LC36 遺物出土状況（南東▷北西）
3　LC•LD34 遺物出土状況（南▷北）
図版 4　1　SI37 住居跡（西▷東）　……286
2　SK37 土坑遺物出土状況（東▷西）
3　SK36 土坑遺物出土状況（東▷西）
図版 5　1　SI26 竪穴住居跡・SK32 土坑（南▷北）　……287
2　SK25 土坑（東▷西）
3　SK21 土坑（西▷東）
図版 6　1　SK41 土坑（北東▷南西）　……288
2　SKP52 ピット遺物出土状況（南▷北）
3　SK33 土坑遺物出土状況（南東▷北西）
図版 7　1　SK62 土坑遺物出土状況（西▷東）　289
2　SK62・63 土坑（北▷南）
3　SK34 土坑遺物出土状況（東▷西）
図版 8　1　SK53 土坑遺物出土状況（西▷東）　290
2　SK70 土坑（東▷西）
3　SK44・39 土坑（東▷西）
図版 9　1　SI69 竪穴住居跡（西▷東）　……291
2　SI69 竪穴住居跡 P1 土層断面（北▷南）
3　SI69 竪穴住居跡 P1 遺物出土状況（北▷南）
図版 10　1　SI74 竪穴住居跡（北東▷南西）　‥292
2　SI74 竪穴住居跡カマド遺物出土状況（東▷西）
3　SI74 竪穴住居跡・P4 土層断面（北▷南）
図版 11　1　SI74 竪穴住居跡・P4 遺物出土状況（北▷南）　……293
2　SI87 土坑（西▷東）
3　SK90 土坑確認面（北西▷南東）
図版 12　1　SK90 土坑土層断面（西▷東）　‥‥294
2　SK90 土坑
3　SK89 土坑
図版 13　1　SB92 建物跡（西▷東）　……295
2　SB92 建物跡炭化壁材（西▷東）
図版 14　1　SB92 建物跡炭化壁材（南東▷北西）　……296
2　SB92 建物跡遺物出土状況（南▷北）
3　SI93 竪穴住居跡遺物出土状況（東▷西）
図版 15　1　SI93 竪穴住居跡遺物出土状況（南▷北）　……297
2　竪穴住居跡カマド遺物出土状況（南東▷北西）
図版 16　1　SI100 竪穴住居跡土層断面（北▷南）　……298
2　SI100 竪穴住居跡煙道（南東▷北西）
3　SI100 竪穴住居跡完掘（北▷南）
図版 17　1　SK101•108 土坑（東▷西）　……299
2　SK101 土坑土層断面（東▷西）
3　SK101 土坑遺物出土状況（北▷南）
図版 18　1　SK108 土坑遺物出土状況（北▷南）　……300
2　SK112 土坑（西▷東）

3　SK115 土坑遺物出土状況
（北▷南）
図版 19　1　SX130 柱穴群（東▷西）　……301
2　SX130 柱穴群和鏡出土状況
（南東▷北西）
図版 20　1　SB24 掘立柱建跡完掘
（北西▷南東）　……302
2　SB24 掘立柱建物跡火山灰
（東▷西）
3　SB24 掘立柱建物跡柱穴（南▷北）　302
図版 21　1　SB24 掘立柱建物跡柱穴確認面
（南▷北）　……303
2　SB24 掘立柱建物跡柱穴確認面
（東▷西）
3　SB 掘立柱建物跡土層断面
（南▷北）
図版 22　1　SK30 土坑火山灰（南▷北）　……304
2　SK30 土坑土層断面（東▷西）
3　SK30 土坑完掘
図版 23　1　SK14 土坑確認面（北＞南）　……305
2　SK14 土坑土層断面（北東▷南西）
3　SK14 土坑完掘（南東▷北西）
図版 24　1　SK16 土坑土層断面（南▷北）　……306
2　SK16 土坑（南▷北）
3　SK13 土坑土層断面（北東▷南西）
図版 25　遺構内出土遺物 (1)　……307
図版 26　遺構内出土遺物 (2)　……308
図版 27　遺構外出土土器 (1)　……309
図版 28　遺構外出土土器 (2)第Ⅰ群　……310
図版 29　遺構外出土土器 (3)第Ⅰ群　……311
図版 30　遺構外出土土器 (4) 第Ⅰ群　……312
図版 31　1　遺構外出土土器 (5) 第Ⅱ・Ⅲ群　……313
2　遺構外出土土器 (6) 第Ⅱ・Ⅲ群
図版 32　遺構外出土土器 (7) 第Ⅳ群　……314
図版 33　遺構外出土土器 (8) 第Ⅴ群　……315
図版 34　遺構外出土石器 (1)　……316
図版 35　遺構外出土石器 (2)　……317
図版 36　遺構外出土石器 (3)　……318
図版 37　遺構内出土石器 (4)　……319
図版 38　遺構外出土石器 (5)　……320
図版 39　遺構外出土石器 (6)　……321
図版 40　平安時代遺構内出土土器 (1)　……322
図版 41　平安時代遺構内出土土器 (2)　……323
図版 42　平安時代遺構内出土土器 (3)　……324
図版 43　平安時代遺構内出土土器 (4)　……325
図版 44　平安時代遺構外出土土器 (1)　……326
図版 45　平安時代遺構内出土土器 (5)　……327
図版 46　平安時代遺構内出土土器 (6)　……328
図版 47　1　平安時代遺構内出土土器 (7)　……329
2　平安時代遺構外出土土器 (2)
図版 48　1　平安時代遺構内出土土器 (3)　……330
2　平安時代遺構内出土土器 (8)
図版 49　1　平安時代遺構内出土土器 (9)　……331
2　平安時代遺構外出土土器 (4)
図版 50　平安時代遺構外出土土器 (5)　……332

下　田　谷　地　遺　跡

図版 1　1　遺跡遠景（東▷西）……431
2　A 区（右）と水田部分の調査前
（北東▷南西）
図版 2　1　A 区南側斜面調査後
（南西▷北東）　……432
2　A 区北側斜面調査後（（東▷西）
図版 3　1　A 区北側斜面調査後（（東▷西）　‥433
2　B･C 区調査後（南▷北）
図版 4　1　MJ58 グリッド RP9 遺物出土
状況（南▷北）……434
2　MC42 グリッド RQ5 遺物出土状況（北
▷南）
MB43 グリッド RQ3 遺物出土状況
（南▷北）
図版 5　1　水田部分第 1～3 トレンチ
（南西▷北東）　……435
2　水田部分第 2 トレンチ南東部
（南西▷北東）
図版 6　1　水田部分第 2 トレンチ南東部状況
（北西▷南東）　……436

2　水田部分第2トレンチ南東部
（南西▷北東）
図版 7　1　基本層位土層断面-A区北側斜面
（南西▷北東）　……437
2　基本層位土層断面-A区北側斜面
（南▷北）
図版 8　1　基本層位土層断面-A区LT42・
MA42グリッド（北西▷南東）　‥438
2　深堀箇所土層断面-B区MH57グリッド西壁（東▷西）43
図版 9　1　SI01竪穴住居跡検出状況
（南▷北）　……439
2　SI01竪穴住居跡完掘後（東▷西）
図版 10　1　SI01竪穴住居跡検出状況
（東▷西）　……440
2　SI01炉土層断面（東▷西）
3　SI01石皿・土器出土状況
（南東▷北西）
図版 11　1　SI10竪穴住居跡完掘状況
（南東▷北西）　……441
2　SI10竪穴住居跡炉土層断面
（北東▷南西）
図版 12　1　SI01竪穴住居跡炉検出状況
（南西▷北東）　……442
2　SI01竪穴住居跡検出状況
（北東▷南西）
3　SI01竪穴住居跡炉土層断面
（北東▷南西）
図版 13　1　SI01竪穴住居跡ピット21・
ピット1（東▷西）　……443
2　SI01竪穴住居跡ピット2・3間の
壁溝（北▷南）
3　SI01竪穴住居跡ピット5以北
の壁溝（東▷西）
図版 14　1　C-Dセクション（北西▷南東）　‥444
2　G-Hセクション壁溝ピット
（南▷北）
3　I-Hセクション壁溝内
（南東▷北西）
図版 15　1　SK 06土坑完掘（南▷北）……445
2　SK 07土坑完掘
（西▷東）
3　SK 08土坑土層断面
（北東▷南西）
図版 16　1　SK08土坑完掘（西▷東）……446
2　SK14土坑完掘（(東▷西）
3　SK15土坑完掘（南東▷北西）
図版 17　1　SK17土坑完掘（東▷西）……447
2　SK18土坑完掘（南▷北）
3　SK19土坑完掘（東▷西）
図版 18　1　SK20土坑火山灰検出状況
（南東▷北西）　……448
2　SK24土坑火山灰検出状況
（南▷北）
3　SK25土坑完掘（東▷西）
図版 19　1　SK26土坑完掘（北▷南）……449
2　SK27土坑完掘（南▷北）
3　SK 27土坑断面（南▷北）
図版 20　1　SK 28土坑完掘（(東▷西）　……450
2　SK29土坑MD43グリッド
ピット1・8・9（南▷北）
3　SK29土坑MD43グリッド
ピット1～11（西▷東）
図版 21　1　SK30土坑完掘ピット群（東▷西）451
2　SK31土坑完掘（南東▷北西）
3　SK 32土坑完掘（南東▷北西）
図版 22　1　SK34・35・36土坑MDグリッド
ピット群（西▷東）……452
2　SKF38フラスコ状土抗完掘
（南▷北）
3　MD 43グリッドピット3・4・5
（完掘（南▷北）
図版 23　遺構内出土土器(1)　……453
図版 24　遺構内出土土器(2)　……454
図版 25　遺構内出土土器(3)　……455
図版 26　遺構内出土土器(4)　……456
図版 27　遺構内出土土器(5)　……457
図版 28　遺構内出土土器(6)　……458
図版 29　遺構内出土石器(1)　……459
図版 30　遺構内出土石器(2)・遺構外出土
土器(1)　……460
図版 31　遺構外出土土器(2)　……461

図版 32　遺構外出土土器(3) ……462
図版 33　遺構外出土土器(4) ……463
図版 34　遺構外出土土器(5) ……464
図版 35　遺構外出土土器(6) ……465
図版 36　遺構外出土土器(7) ……466
図版 37　遺構外出土土器(8) ……467
図版 38　遺構外出土土器(9) ……468
図版 39　遺構外出土土器(10) ……469
図版 40　遺構外出土土器(11)……470
図版 41　遺構外出土土器(12)……471
図版 42　遺構内・外出土石器・遺構外出土石器(1) ……472
図版 43　遺構外出土石器(2) ……473
図版 44　遺構外出土石器(3) ……474
図版 45　遺構外出土石器(4) ……475
図版 46　遺構外出土石器(5) ……476
図版 47　遺構外出土石器(6) ……477
図版 48　遺構外出土石器(7) ……478
図版 49　花粉顕微鏡写真(1) ……479
図版 50　花粉顕微鏡写真(2) ……480
図版 51　鉱物顕微鏡写真 ……481

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡一覧表

下　田　遺　跡

第 1 表　粒径組成 ……251
第 2 表　1 次鉱物組成 ……251
第 3 表　第 I 群土器類別破片数表 ……254
第 4 表　グリット別 RL 比率区分表 ……255
第 5 表　(1)　RL 比率別破片類別比率表 ……257
　　(2)　時期別破片類別比率表 ……257
第 6 表　平安時代遺構変遷表 ……267
第 7 表　遺物観察表(1)縄文土器第 I 群 ……273
第 8 表　遺物観察表(2)縄文土器第 I 群 ……274
第 9 表　遺物観察表(3)縄文土器第 I 群 ……275
第 10 表　遺物観察表(4)縄文土器第 I 群 ……276
第 11 表　遺物観察表(5)平安時代 ……276
第 12 表　遺物観察表(6)平安時代 ……277
第 13 表　遺物観察表(7)平安時代 ……278
第 14 表　遺物観察表(8)平安時代 ……279
第 15 表　遺物観察表(9)平安時代 ……280
第 16 表　遺物観察表(10)平安時代 ……281
第 17 表　遺物観察表(11)平安時代 ……282

下　田　谷　地　遺　跡

第 1 表　水田部分第 2 トレンチ土層観察表(1)　343
第 2 表　水田部分第 2 トレンチ土層観察表(2)　344
第 3 表　石器観察表(1) ……408
第 4 表　石器観察表(2) ……409
第 5 表　水田部分第 2 トレンチ花粉分析結果　416
第 6 表　重鉱物組成の内訳 ……423
第 7 表　軽鉱物組成の内訳 ……424

はじめに

はじめに

1　調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、秋田市一横手市一岩手県北上市を結ぶ県期待の高速交通体系の基幹をなす道路であり、昭和53年11月には、秋田市－横手市間57.4kmについて第8次施行命令が下された。これに伴い昭和54年11月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和55・56年の2ケ年にわたって遺跡の分布調査を行い計画路線内に44遺跡が存在することを報告した。(註1・2) さらに昭和58年にはこれら遺跡の詳細分布調査を行い、最終的に路線内に37遺跡が存在することを報告している。(註3・4)

その後、路線内におけるこれら37遺跡の保存について、日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議されたが、路線変更の不可能のことから最終的には記録保存の措置をとることで合意し、昭和60年度から調査が開始されたのである。(註5)

調査は秋田市寄りの遺跡から順次着手され、昭和60年には河辺郡河辺町七曲地区の6遺跡、(註6) 翌61年には仙北郡協和町中淀川地区の上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・館野遺跡の3遺跡、(註7) それに同町峰吉川地区に所在する半仙遺跡の一部の調査が実施されている。さらに昭和62年には半仙遺跡の残りの部分と、西仙北サービスエリア予定地の上野台遺跡とその北側の寺沢遺跡、(註8) 仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅲ・小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の一部、大森町の下田遺跡、横手市の手取清水遺跡の調査を行っている。そして昭和63年には小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の残りの部分と小出Ⅳ遺跡、北田山田ケ沢遺跡、(註9) 大曲市の石神・太田・下田谷地遺跡の調査を実施したのである。

註1　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第79集　1981（昭和56年）

註2　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第93集　1982（昭和57年）

註3　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第116集　1984（昭和59年）

註4　その後の範囲確認調査などで遺跡の範囲が路線内に及んでいないことが判明したものがあり、37の遺跡のうち、実際の調査の対象となる遺跡は24遺跡である。

註５　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』　秋田県文化財調査報告書第166集　1988（昭和63年）

註６　７遺跡の範囲確認調査を実施したが、石坂台Ⅴ遺跡（遺跡No.32）は路線内に範囲が及んでいなかったので調査対象から外された。
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第126集
1985（昭和60年）

註７　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』　秋田県文化財調査報告書第166集　1988（昭和63年）

註８　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』　秋田県文化財調査報告書第180集　1989（平成元年）

註９　昭和63年に新たに確認されたもので、同年８月に遺跡範囲確認調査を実施している。

2　調査の組織と構成

調査主体　秋田県教育委員会

遺跡名・所在地・調査面積・調査期間・調査担当者

番号	遺跡名	所 在 地	調査面積	調査期間	調査担当者
10	下　　田	平鹿郡大森町板井田字下田7-8外	18,400㎡	昭和62年4/27～8/7	谷地　　薫（学芸主事） 船木　義勝（学芸主事） 沢田　康志（非常勤職員） 和泉　昭一（非常勤職員） 小山内　透（非常勤職員）
11	下田谷地	大曲市内小友字下田谷地130外	3,600㎡	昭和63年5/9～7/12	柴田陽一郎（文化財主事） 和泉　昭一（非常勤職員）

専門指導員

昭和62年度

工楽善通　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長
桑原滋郎　宮城県多賀城跡調査研究所長
小林達雄　国学院大学文学部教授
白石建雄　秋田大学教育学部教授
須藤　隆　東北大学文学部助教授

昭和63年度

白石建雄　秋田大学教育学部教授
戸沢充則　明治大学文学部教授
林　謙作　北海道大学文学部助教授
吉岡康暢　国立歴史民族博物館考古研究部教授
渡辺　誠　名古屋大学文学部助教授

（五十音順）

総務担当　加藤　進　　秋田県埋蔵文化財センター主査（現　秋田県立博物館主査）
佐田　茂　　秋田県埋蔵文化財センター主査
高橋忠太郎　秋田県埋蔵文化財センター主事

協力機関　大森町・大森町教育委員会
大曲市・大曲市教育委員会

3　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。東北横断自動車道秋田線路線内には、20m毎に中心杭が打設されており、その中心杭１箇所を選定し、これをグリットの起点MA50とした。MA50から磁北を求めて南北基線とし、それと直交するラインを東西基線とし、４ｍ×４ｍのグリットを設定し、数箇所の杭をレベル原点とした。起点とした中心杭は下田遺跡ではSTA200＋60、下田谷地遺跡ではSTA202＋80である。グリッド杭には、下田遺跡は東西方向にMT→LA、LT→LA、KT→KAとし、下田谷地遺跡は東西方向にKA→KT、LA→LT、MA→MTというふうにアルファベットを、南北方向には49・50・51……というふうに南から北に向かって昇順となる連続する２桁の数字を用い、MA50というふうにこの両者の組み合わせを記入し、４ｍ×４ｍの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。

両遺跡とも範囲確認調査の結果、遺物包含層は薄く、遺構確認面までは浅いものと考え、全て人力による表土除去から開始した。遺物の取り上げは、遺構外出土のものは、出土グリット・出土層位・出土年月日を記入し、遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。また、これら遺物の出土状況は必要に応じて適宜図面作成や写真撮影を行った。遺構の確認はできるだけ掘り込み面において確認するよう努めたが、下田谷地遺跡は畑の耕作による攪乱が著しく、地山面で確認される遺構が多かった。

遺構の調査については、主に四分法を用いている。住居跡などの、面積規模の大きな遺構は、そのプラン確認後、東西及び南北の二方向または長軸及び短軸の二方向に直交する埋土堆積状況観察用のベルトを残して調査を進めている。また、規模の小さな土坑などの遺構にかんしては、長軸に沿ってベルトを残して二分割して調査している。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、基本的には１／20の縮尺で作図することとしたが、竪穴住居跡の炉・カマドなど、細部の表現が必要な遺構に関しては１／10で行った。また遺構図面は、遺物出土状況・重複関係などから数回にわたる図面作成も行っている。この他、下田谷地遺跡では平板測量による地形図の作成も行った。

写真撮影については、基本的には35㎜、必要に応じて６×4.5㎜のモノクロとリバーサルフィルムを使用した。この他、下田遺跡・下田谷地遺跡では遺跡の古環境や年代把握のため、科学分析を行った。

室内における整理は、遺構については現場で取った平・断面図より第２原図を作成し、これをトレースしている。遺物については洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行っている。

4　調査の経過

下田遺跡・下田谷地遺跡の調査の経過は下記の通りであるが、両遺跡の詳しい経過は、後述する遺跡毎の経過を参照されたい。なお、両遺跡は調査年度が異なるので、遺跡毎に記述する。

下田遺跡

調査は昭和62年４月27日から開始した。この前の４月10日に調査地の下見、４月24日には作業員募集のため、大森町袴形環境改善センターにて大森町民を対象とした作業員説明会を開催した。

４月30日には、現場にて、大曲市民を対象にした作業員説明会を開催した。

８月７日に調査を終了したが、この間、川西小学校６年生、大曲小学校６年生、大曲西中学校郷土史クラブをはじめ、地元の下田婦人会、大森町老人クラブなど多数の人々が来訪した。また、角間川昔を語る会や大森町郷土史研究会などの郷土史研究家も来跡した。

７月下旬、白石建雄専門指導員の来跡を仰ぎ、遺跡周辺の地質や、遺跡内の第四紀の地質堆積状況について指導をうけた。

下田谷地遺跡

調査は昭和63年５月９日から開始した。この前の４月27日に、大森町袴形環境改善センターにて、大森町民を対象とした作業員説明会を開催した。５月17日までには調査地の下見・調査準備を行った。

７月12日に調査を終了したが、この間、７月８日に戸沢充則専門指導員の来跡を仰ぎ、遺構・遺物について指導をうけた。

両遺跡の遺物整理・報告書作成などは、調査終了後から平成元年度にかけて、秋田県埋蔵文化財センターで行った。

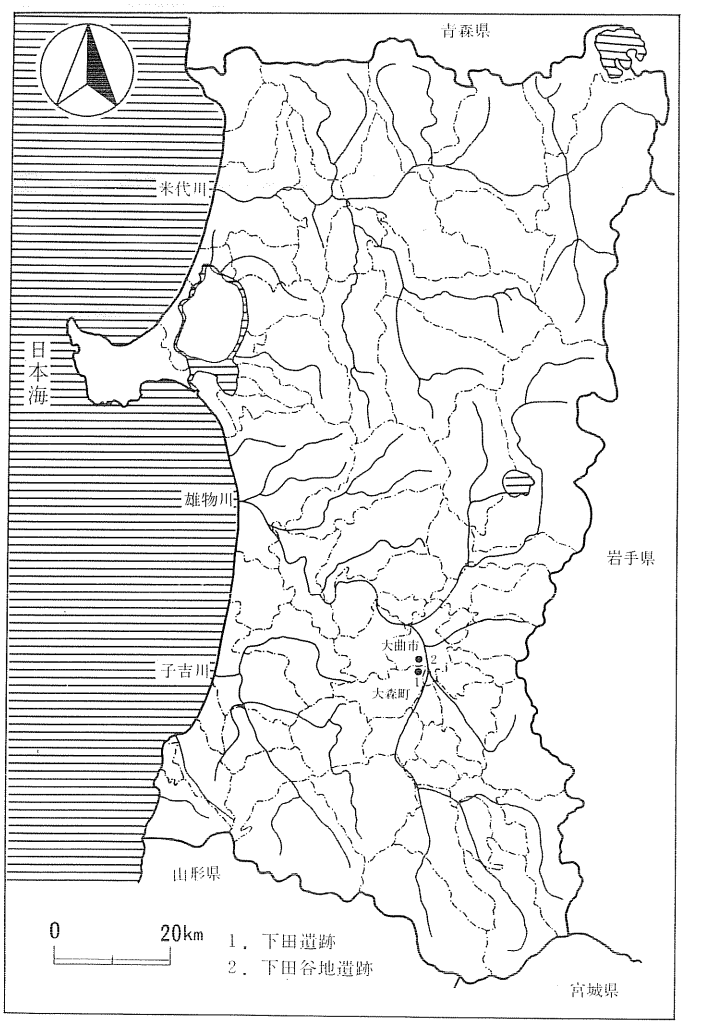
遺跡の立地と環境

遺跡の立地と環境

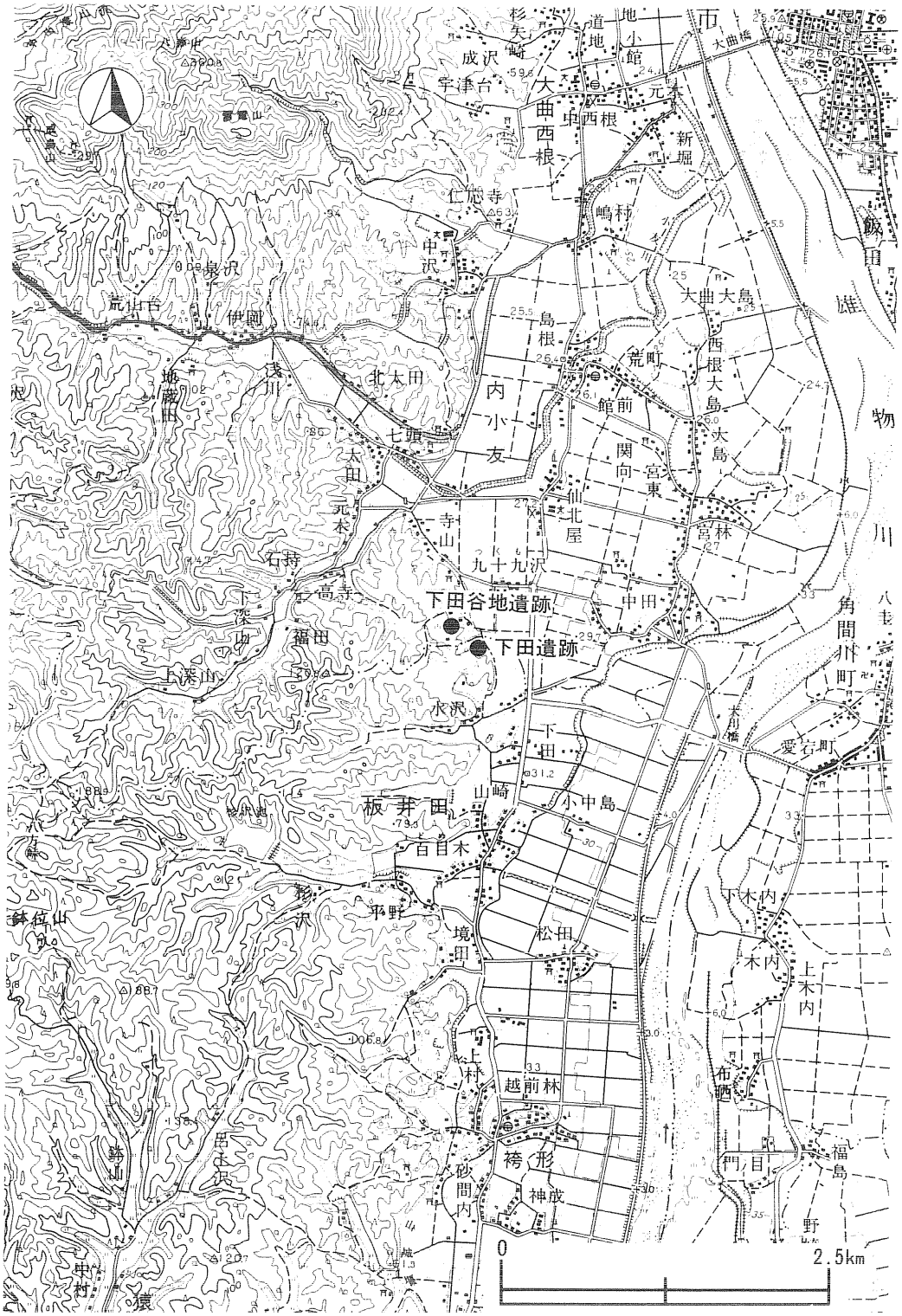
1　遺跡の立地

下田遺跡、下田谷地遺跡は、秋田県南部の内陸部に位置する。東経140度26分、北緯39度24分である。両遺跡の西側は出羽丘陵（出羽山地ともいう）で、東側には横手盆地が広がっている。下田遺跡は平鹿郡大森町、下田谷地遺跡は大曲市にあり、大森町と大曲市の境界をはさんで南北に直線距離で約150m離れている。

出羽丘陵には起伏量200m以上の中起伏山地はごく狭く、300m以上は姫神山(387.6m)、勝軍山（339.5m）保呂羽山（438.0m）の３カ所の孤立竣峰化した岩頚地ないし脈岩地で、これらの間を埋めるように山頂の定高性をもつ新第３紀層基盤の丘陵地が発達し、背面を遠望すると南から北へ低平な山稜の連続性を呈している。両遺跡は、この出羽丘陵東縁に帯状に発達する丘陵地で、起伏量100m未満の低位侵蝕面（大森層）に立地している。この面は面状侵蝕による盆状谷でできている低位波浪状面で、地形面はうねみぞ状の特色を示す。大森町板井田字水沢から大曲市内小友字寺山にかけては、大森面の東縁に大小の侵蝕谷が発達しており、両遺跡はこの小侵蝕谷によって区切られた南西から北東に延びる小丘陵上にある。



第１図　遺跡位置図



第２図　遺跡周辺地形図

2　遺跡周辺の地質

秋田県は東北地方グリンタフ地帯の一角を占め、新第三紀以降の地層が先新第三系を不整合に覆って広く分布している。この新第三紀の地層(新第三系)は伝統的に上下に二分される。下部は「下部グリンタフ」とよばれ、主として火山噴出物から構成されている。一方上部は「含油新第三系」とよばれ、泥岩・砂岩などの堆積岩からなる。

含油新第三系を構成する地層は下位から順に女川層、船川層、天徳寺層、笹岡層に区分されている。これら含油新第三系を構成する堆積物は上位のものほど粗粒になる傾向がある。すなわち最下位の女川層は層理が発達した硬質で均質な頁岩からなるが、天徳寺層のシルト岩を経て、最上位の笹岡層では主として砂山から構成されている。このことは含油新第三系を堆積した海が時間とともに浅海化していったことの反映であると解釈されている。

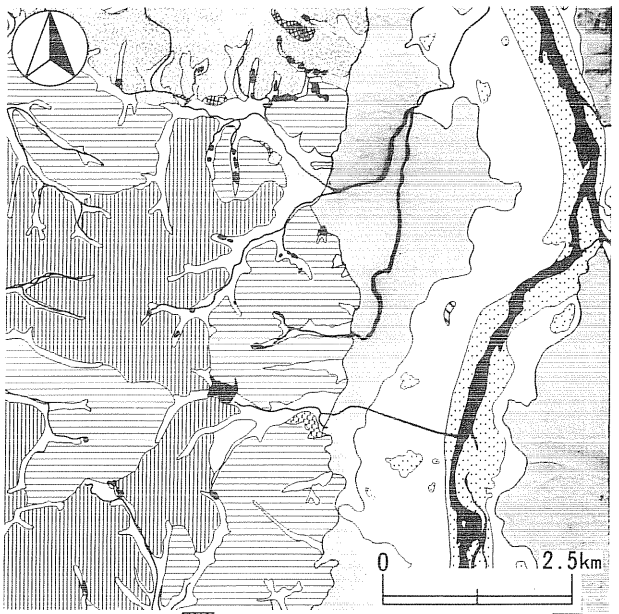
下田遺跡、下田谷地遺跡の立地する丘陵の基盤層は最下位の女川層である。女川層は硬質泥岩を主とする“hard shale”の名で親しまれている岩相である。10～20cmの層理単位を示し、暗い灰色で硬軟互層を呈する。硬質部はフリント質であることが多く、軟質部は下位船川層と同質の葉片様に細かく砕ける泥岩である。苦灰質団塊を含んでいる。下位の大森層及び須郷田層とは整合である。石器の石材として多く用いられている頁岩は主として女川層由来のものである。

表層を覆う土壌は淡色黒ボク土である。緩斜凸地形には寺山統ａ、緩斜凹地形には寺山統ｂが発達している。寺山統ａは黒ボク土に近似するが、色調は黒ボク土より淡い。表層、下層とも堅密である。寺山統ｂは、一部では黒ボク土壌として発達するが、寺山統に随伴して出現するため寺山統ｂとして分類されるものである。表層はやや厚く色調も濃く黒褐色を呈するが、特に顕著なものとはならない。概ね表層、下層とも堅密である。下田遺跡と下田谷地遺跡の間に入る沢は、地下水位が高く常に下層が還元状態となっており、地下水位30～60cmの位置から出現し微粒質の幡野統（グライ土壌）が発達している。

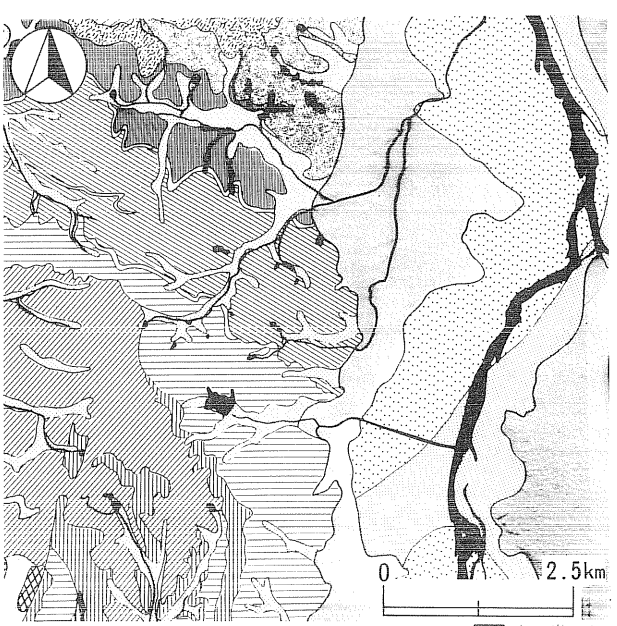
引　用　文　献

秋田県文化財調査報告書第180集　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ―上野台遺跡・寺沢・半仙遺跡―』　1989（平成元年）

秋田県農政部農地整備課　「大曲」『雄平仙中核都市建設計画地域　土地分類基本調査』　1978(昭和53年)



中起伏山地(起伏量400～200m)
小起伏山地(起伏量200m未満)
山麓地
丘陵地Ⅰ　(起伏量100～100m)
丘陵地ⅠⅠ(起伏量100m未満)
砂礫段丘Ⅰ+
砂礫段丘Ⅳ
砂礫段丘Ⅴ
谷底平野，氾濫平野
扇状地
河原，砂堆地
崖錐，土石流
旧河道



各種岩屑
泥がち堆積物
砂がち堆積物
礫・砂および泥
凝灰質泥岩（石灰質団塊を伴う）
泥岩（石灰質団塊を伴う）
石英安山岩質凝灰岩
硬質泥岩（団塊を伴う）
硬質泥岩凝灰岩互層
硬質泥岩
凝灰岩（軟泥礫を含む）大森層
凝灰岩（軟泥礫を含む）畑村層
角礫岩および火山角礫岩
石英安山岩（一部流理構造を伴う）
輝石安山岩
変質輝石安山岩

第３図　地形区分図(上)、表層地質図(下)

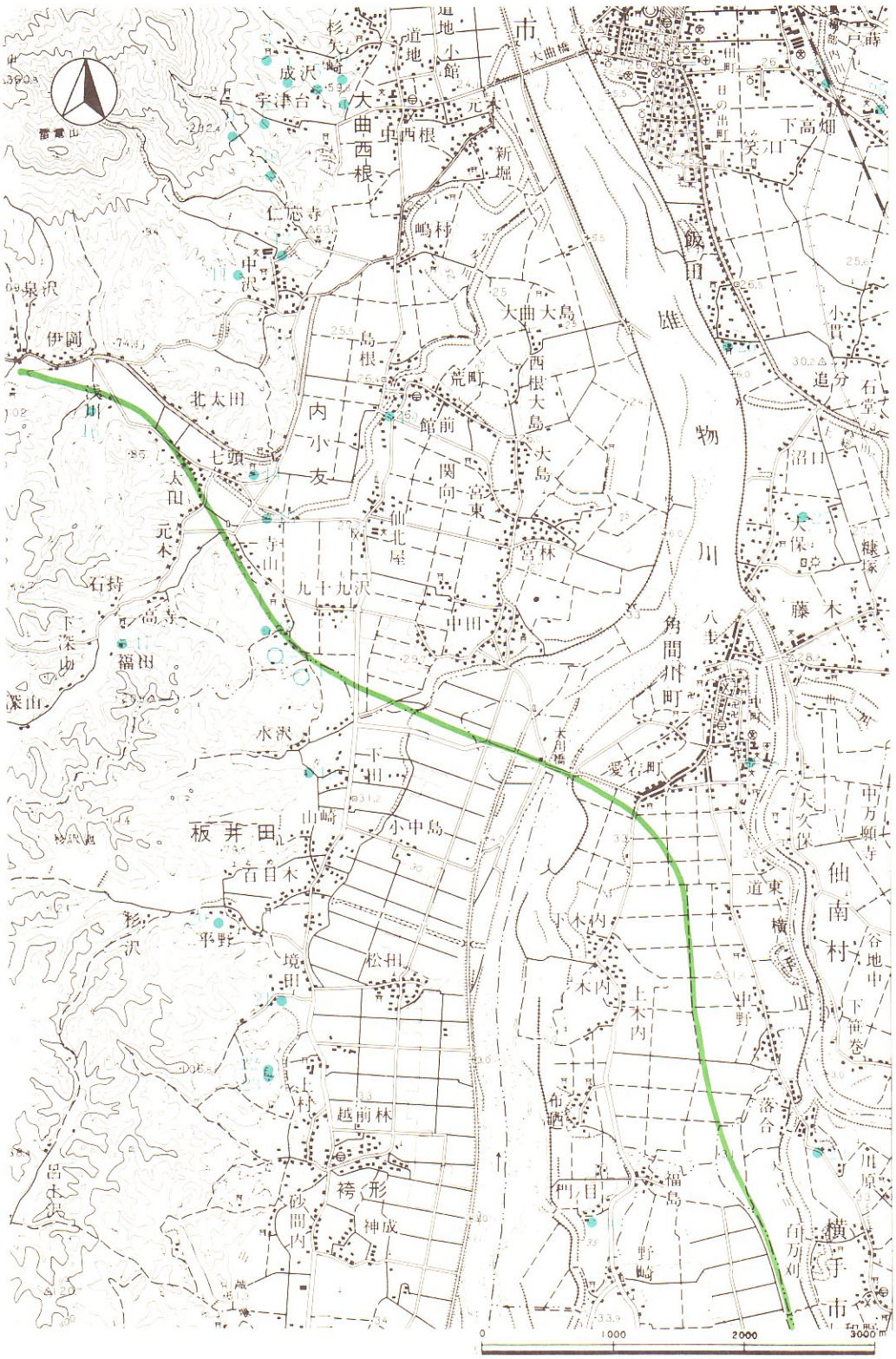
3　歴史的環境

下田遺跡は大森町、下田谷地遺跡は大曲市に所在し、いずれも横手盆地の北西部に位置する。盆地内には県内三大河川のうちの１つである雄物川が北流し、その両岸と支流沿いに多くの遺跡が分布（第１図、第１表）している。

大曲市における遺跡の分布[註1]は、雄物川左岸では沖積地である砂礫段丘や、起伏量100m未満の丘陵地に縄文時代から中世までの遺跡が多くあり、特に大川西根と内小友地区でその傾向が著るしい。縄文時代の遺跡は、昭和49年に大曲市教委によって発掘調査された成沢Ⅱ遺跡[註2]（４）があり、後期の竪穴住居跡２軒、土坑２基などが検出され、晩期の土器なども出土している。同じ晩期では、隣接地の成沢Ⅰ（６）・成沢Ⅲ（５）遺跡でも土器や石鏃などの石器が確認されている。中期の遺跡としては昭和63年度に東北横断自動車道秋田線関連で調査された太田遺跡[註3](16)があり、中期末葉の竪穴住居跡が14軒検出され、集落であることが判明している。この遺跡からは、「葉脈状文」を施文した土器が出土し、北陸地方との関係があったと考えられている。他に縄文時代の遺跡としては仁応寺Ⅰ（９）・仁応寺Ⅱ（10）・中沢Ⅰ（11）・中沢Ⅱ（12）の各遺跡がある。弥生時代の遺跡は数が激減し、宇津台遺跡（８）の１箇所のみである。この遺跡から昭和35年～昭和36年にかけて興野儀一氏によって表面採集された遺物がありそれについて昭和44年に須藤隆氏の報告[註4]がある。古代においては成沢窯跡[註6]（７）・九十九沢窯跡[註5](18)がある。成沢遺跡は昭和50年の発掘調査で３基の窯跡が検出され、その年代は８世紀末～９世紀中頃とされている。中世城館は丘陵地にある山城や、沖積地にある平城があり、前者には成沢館跡（３）、前崎山城跡（14）、高寺山城跡（17）、後者には三浦館跡（15）などがある。

雄物川右岸では、中世城館が沖積地に分布しており、大槻城跡（24）佐戸館跡（25）、河野目館跡（26）、四十二館跡（27）、門野目城跡（30）、落合館跡（29―横手市）などの平城がある。県指定史跡である四十二館跡は昭和56～58年の３ケ年にわたって大曲市教育委員会により発掘調査が実施され、掘立柱建物跡３棟、井戸跡８基、鍛冶遺構３基などが検出されており、その時期は出土遺物から中世から近世初頭とされている。他に、須恵器、土師器[註7]も出土している。

大森町では大曲市と同様に雄物川左岸の起伏量100m未満の丘陵地に縄文時代・中世の遺跡が多い。縄文時代では平野（20）・影取Ⅰ（22）・影取Ⅱ（23）遺跡があり、土器や石器が確認されている。中世城館は、丘陵地の端部で平野が見渡せる高台に位置する五庵昼館跡[註8](21)と、その他に館小山跡（19)がある。



第４図　遺跡位置及び周辺遺跡図

第１表　下田・下田谷地遺跡と周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代（時期）
1	下田（しもだ）	縄文（前期～晩期）平安
2	下田谷地（しもだやち）	縄文（後期～晩期）平安
3	成沢館	中世
4	成沢 II（下成沢）	縄文（後期～晩期）
5	成沢 III	縄文（晩期）
6	成沢 I	縄文（晩期）
7	成沢窯跡	平安
8	宇津台（うつのだい）	弥生
9	仁応寺（におうじ） I	縄文
10	仁応寺（におうじ） II	縄文，平安
11	中沢 II	縄文
12	中沢 I	縄文，平安
13	三浦館	中世
14	前崎山城	中世
15	七頭館（ながしら）	中世
16	太田	縄文（後期）
17	高寺山城（やましろ）	中世
18	九十九沢窯跡（つくもざわ）	平安
19	館小山（たてこやま）	中世
20	平野	縄文
21	五庵昼館（ごあんひるだて）	中世
22	影取（かげとり） I	縄文
23	影取 II	縄文
24	大槻城	中世
25	佐戸館	中世
26	河野目城（かわのめ）	中世
27	四十二館（しじうにだて）	平安，中世～近世
28	大館城（おおだてじょう）	中世
29	落合館跡（おちあいだてあと）	中世
30	門野目城（かどのめ）	中世

註１　「遺跡位置及び周辺遺跡図」中の遺跡の分布は下記の文献に拠って作成した。

秋田県教育委員会　『出羽丘陵総合開発事業遺跡分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第42集　1977（昭和52年）

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城跡』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和57年）

大曲市教育委員会　『大曲市遺跡分布地図』　1987（昭和62年）

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県南版）』　1987（昭和62年）

註２　大曲市教育委員会　『成沢遺跡発掘調査略報』　1974（昭和49年）

註３　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会』発表要旨

1989（平成元年）　報告書は平成３年度に刊行予定である。

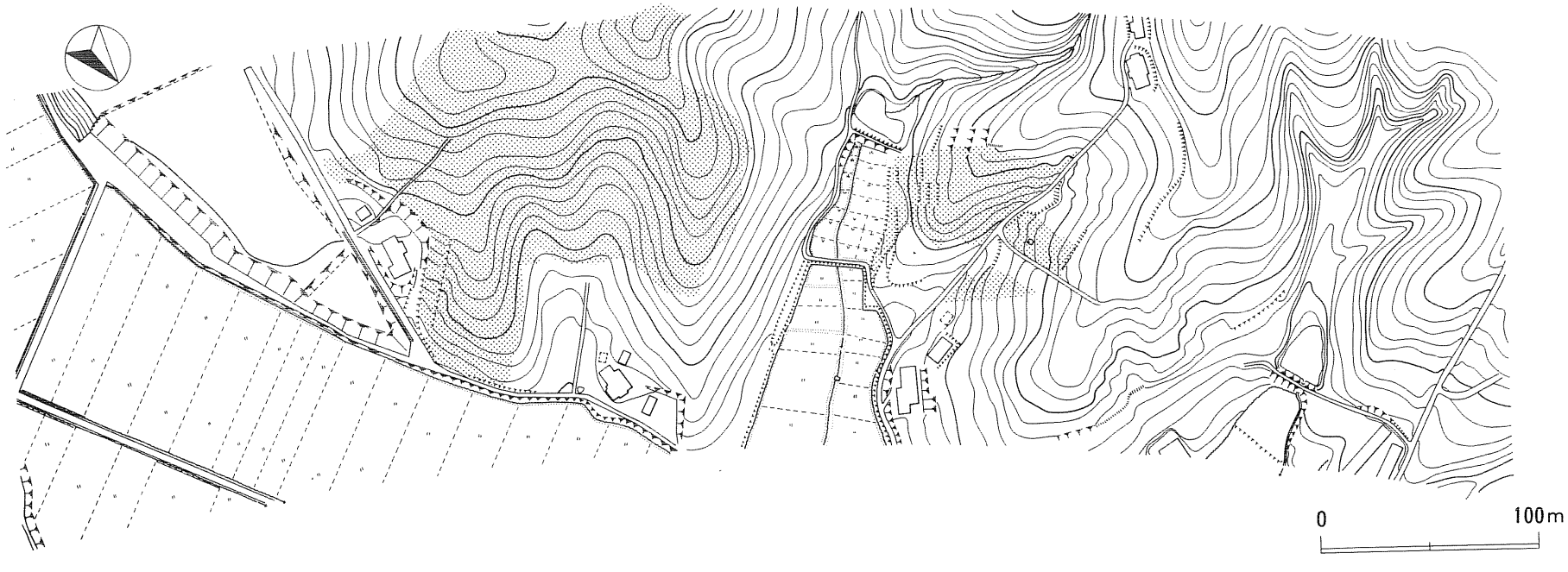
註４　須藤　隆　「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』　第33刊第３号　東北大学文学会　1969（昭和44年）

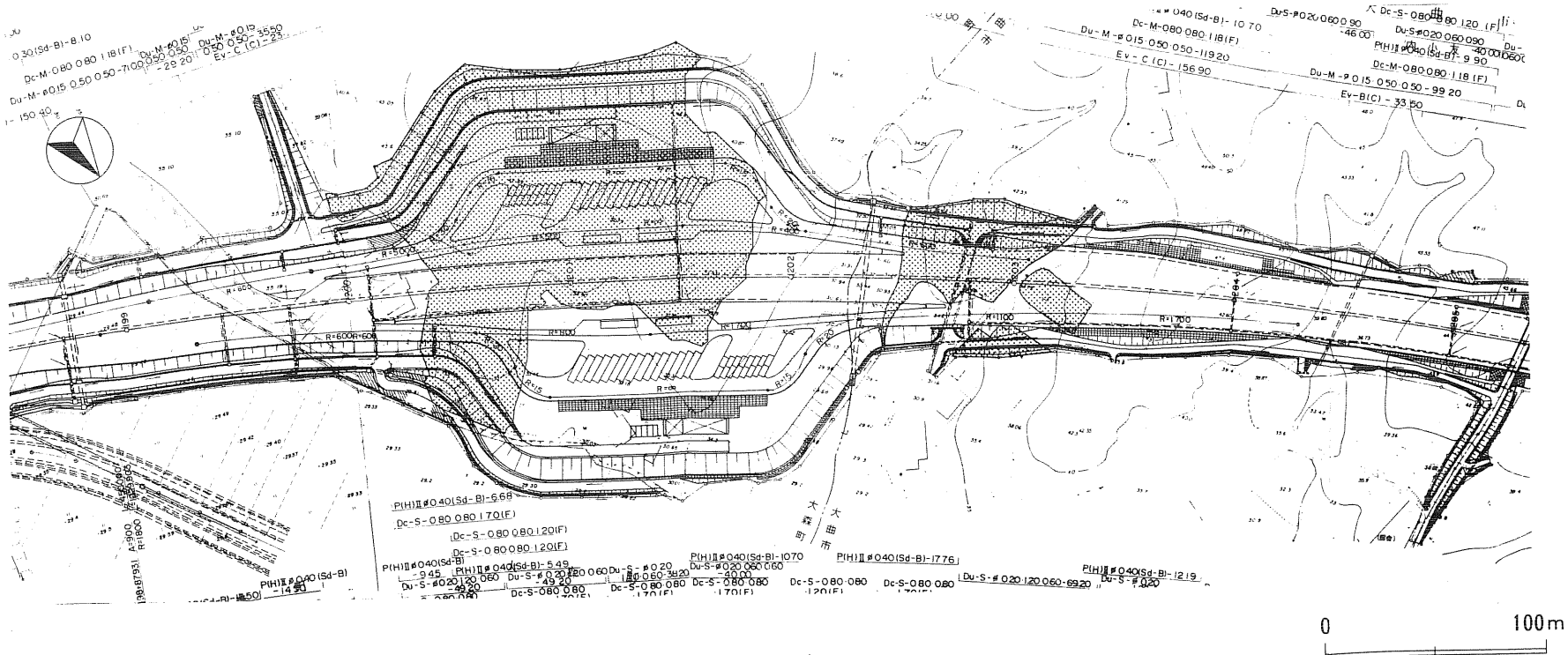
註５　秋田県　『秋田県史考古編（復刻版）』　1977（昭和52年）

註６　秋田県教育委員会　『成沢遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第36集　1976(昭和51年)

註７　大曲市教育委員会　『四十二館跡発掘調査報告書』　1984（昭和59年）

註８　本遺跡の名称については『秋田県の中世城跡』によれば「昼館」とあるが、発行年が新しい『秋田県遺跡地図（県南版）』に掲載されている遺跡名をとって「五庵昼館」とした。





第5図　調査範囲図

下　田　遺　跡

第１章　調査の概要

第１節　遺跡の概観

遺跡は平鹿郡大森町の北端にあり、北側は大曲市に隣接している。主要地方道大曲・大森・羽後線を大曲市から南下すると、大曲市内小友地区を抜けて大森町下田地区に入る前に右手になだらかな丘陵が見える。この丘陵の東端部が遺跡である。大森町の中心部から北へ直線距離で約7.2km、ＪＲ大曲駅から南南西に約7.2kmの地点にある。この丘陵には北東から南西方向に幾つもの沢が入り、南北に並ぶ連続した尾根状の丘陵列となっている。下田遺跡ではこの尾根状の丘陵２列とその付け根を結んで南東～北西に伸びる尾根の頂上部と斜面で、遺構・遺物が検出された。

発掘調査区の北東部にある小さい尾根を北側に越えると、北東から南西に入り込む幅約20mの沢があり、この沢の中央を流れる用水路が大曲市と平鹿郡大森町の境界である。大曲市側には境界に接して下田谷地遺跡があり、この沢を挟んで両遺跡では縄文時代晩期前半と平安時代の遺構・遺物を検出したのをはじめ、縄文時代後期の遺物も出土し、それぞれの時期において密接な関連があったことがわかった。また、平安時代の遺構の多くには両遺跡とも埋土中に火山灰が堆積し、両遺跡の間に入る沢の泥炭層中にもこの火山灰層が認められたことで、火山灰層を鍵層として相対的な年代を遺跡間で対比でき、自然環境を復元する手掛かりも得られた。一方、縄文時代前期には下田遺跡の調査区南部で多量の土器・石器が出土したのに対して、下田谷地遺跡ではこの時期の遺構・遺物は検出されず、際立った違いが認められた。

第２節　調査の経過

発掘調査は４月中に現地調査を行った後、４月27日から８月７日まで行った。

４月27日　発掘機材の搬入とプレハブ小屋設置と併行して、調査区南東部の丘陵から粗掘作業を開始した。縄文土器や石匙が出土しはじめる。南東部丘陵北斜面下に土留めのための土手をつくり排土の仮置き場を造成する工事と、グリッド杭打設も行う。

４月30日　粗掘が南東部丘陵のつけ根部分に近付くにしたがって遺物量は多くなり、土師器が主体となる。MH48グリッドで内面に漆が付着した小型の皿形土器（第156図363）が出土した。

５月15日　北東部丘陵南側斜面の粗掘に入る。弥生時代後期の土器が出土しはじめた。

5月18日　中央部の北東側で単独で検出した土坑（SK13）の埋土中に火山灰が堆積していることが判明。さらに北東部丘陵の南側斜面でも、埋土中に火山灰が入っている土坑を2基(SK14、SK16)検出した。羽後町教育委員会の鈴木俊男氏が来跡し、火山灰と溝をもつ建物跡についての教示を受けた。羽後町で古墳の周濠から検出される灰白色火山灰と類似しているとのことであった。

5月29日　南東部の畑地の粗掘に入る。削平が著しく遺物が露出している。

5月30日　調査区内で最も標高の高い南西部の丘陵頂部の粗掘に入る。北東部丘陵では、竪穴遺構（SI26）などの遺構精査に入る。

6月15日　南西部丘陵上の縄文時代晩期の遺構群は丘陵頂部に集中することが判明した。調査区外にも遺構群が広がっているようである。

6月22日　南部丘陵上とその南北の斜面から多量に出土している縄文前期の土器と石器類は、丘陵頂部では少なく斜面に多い。捨場が形成されている。

6月24日　大曲西中学校郷土クラブ員、約25名見学に来跡。

6月26日　排土運搬路、土留め柵等の工事を終了する。南東部に一部残っている未掘部分の粗掘に入る。川西小学校六年生が校長先生の引率で来跡し、熱心に見学していく。

7月3日　南東部で竪穴住居跡（SI100）を確認。カマド煙道には土師器甕形土器が入っている。

7月9日　南東部で、焼土遺構を切るピット中から銅鏡が出土する(第143図287)。全面緑青に覆われているが、八稜鏡のようである。下田部落婦人会25名来跡。

7月10日　SB92建物跡は焼失遺構で、柱間を結ぶ溝には炭化した板材が残っていた。

7月16日　土層観察のための深掘りトレンチが、地表下約3mで硬質泥岩の岩盤に達する。また、北東部丘陵のつけ根部分で行った深掘りでは、地表下約1mより下位で土石流のような大きな表層の変動によると思われる土層が確認された。

7月20日　大森町郷土研究会、九十九沢部落婦人会、角間川昔を語る会の一行が来跡。地元の人達の来跡が相次いでいる。大森町老人クラブ、約100人来跡。身体の不自由をおして調査区内を回り、熱心に遺構や遺物に見入る人もいた。

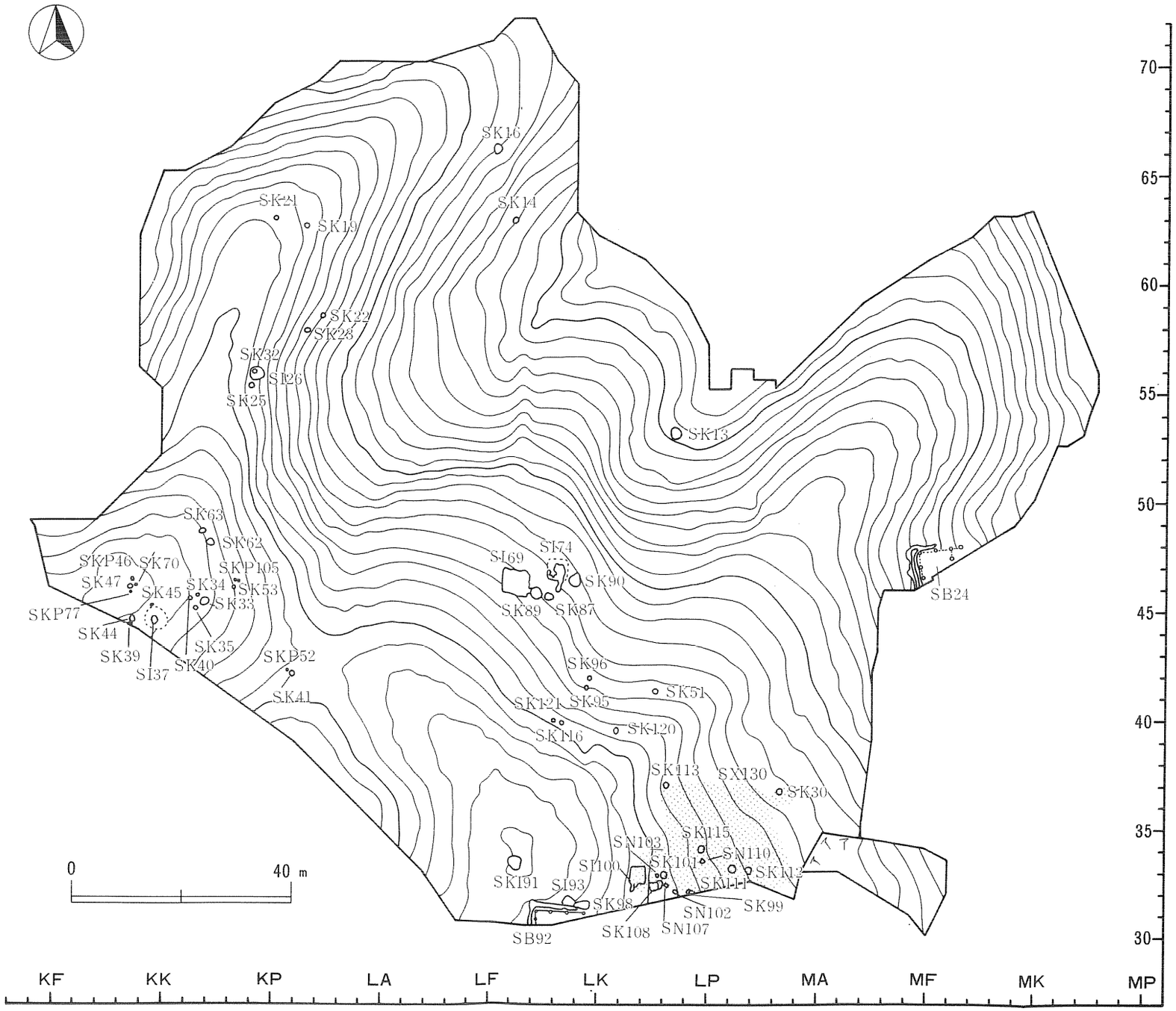
7月22日　専門指導員白石建雄秋田大学助教授が来跡し、SI100竪穴住居跡埋土中に堆積する火山灰と基本層位について教示していただく。

7月24日　若干の実測、撮影等を残して、本日で現場作業の大半を終了する。

8月6日　残っていた実測、撮影等すべての現場作業を終える。

8月7日　残った機材を撤収し、発掘調査の現場作業を完了した。

この後、埋蔵文化財センターで遺物、図面類の整理作業を行い、報告書の作成を行った。


SK16
SK14
SK24
SK19
SK22
SK23
SK32
SI26
SK25
SK13
SK63
SK62
SKP46
SK70
SK47
SKP105
SK45
SK34
SK53
SK33
SKP77
SK44
SK39
SK35
SI37
SK40
SKP52
SK41
SI69
SI74
SK90
SK89
SK87
SK96
SK95
SK51
SK121
SK116
SK120
SK113
SX130
SK30
SK115
SN103
SN110
SI100
SK101
SK112
SK111
SK191
SI193
SK98
SK99
SN102
SK108
SN107
SB92
SB24
0
40 m
70
65
60
55
50
45
40
35
30
KF
KK
KP
LA
LF
LK
LP
MA
MF
MK
MP

第１図　遺跡配置図

第２章　調査の記録

第１節　遺跡の層序

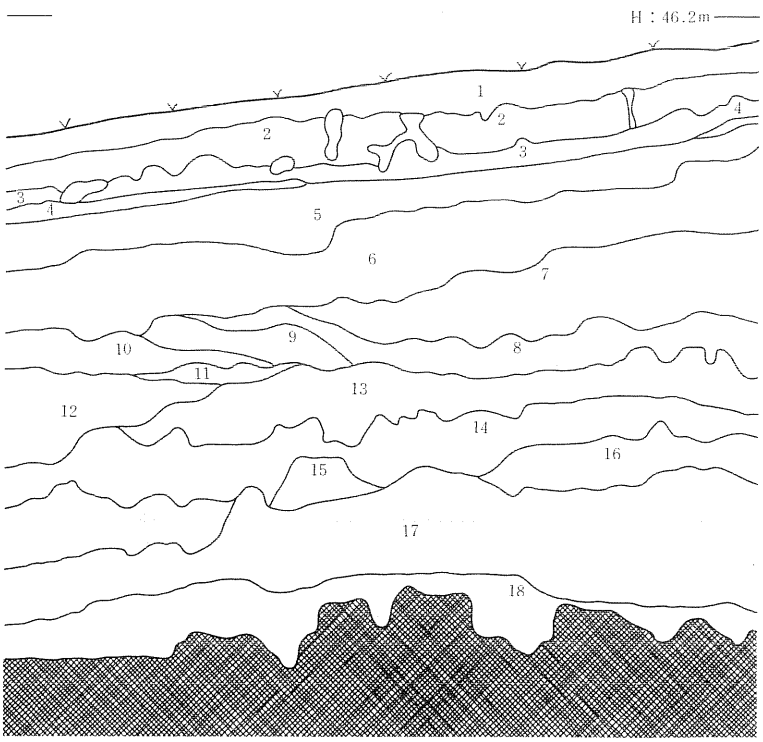
図示したのは、縄文時代前期の遺物包層があったLC34～LD34ラインの土層図である。基盤である硬質泥岩（女川層）の上に厚さ２m50cm～２m80cmの粘土層・シルト層が、不整合面を２面挟んで堆積し、その最上部の黄褐色土（粘土）が地山である。表土は、

１層：黒色～黒褐色土、

２層：暗褐色～褐色土、

３層：褐色～黄褐色土、

の３層に分けられ、縄文時代の遺物は１・２・３層から、平安時代の遺物は１・２層から主に出土した。標高の高い尾根部分では地表から地山面までの土層が薄く、逆に沢地形の部分では１層が厚く堆積している。



基本層位

1　10YR3/3：黒褐色土　表土

2　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。炭化物が１～２mm、１～２%混入。地山粒（一部ブロック）２～10%混入。

3　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまりかなり有り。炭化物が１mm、１%混入。

4　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。（地山）

5　10YR5/6：黄褐色土　粘性有り。しまり強。

6　10YR5/6：明黄褐色土　５より粘性強し。しまり強。

7　10YR6/6：明黄褐色土　基本的には、６と同じだが、５ＹＲ4/6（赤褐色土）が、微量に混入。全体的に白っぽくにじんだように見える。粘性、しまりとも６に同じ。

8　7.5YR5/6：明褐色土　7.5ＹＲ5/6を基本として、10ＹＲ6/6（明黄褐色土）と、7.5YR5/6（明褐色土）が、混じり合って、層をなしている。さらに、５ＹＲ4/6（赤褐色土）と、7.5Ｙ5/2(灰白色土)が、微量に混入。粘性、しまりとも６に同じ。

9　10YR5/6：明黄褐色土　粘性有り。しまり強。基本的には、７と同じだが、５ＹＲ4/6（赤褐色土）と、白いにじみが少ない。

10　7.5YR5/6：明褐色土　５より粘性強し。しまり強。基本的には、８と同じだが、7.5Y5/2（灰白色土）と、５ＹＲ4/6(赤褐色土）が、８よりもさらに少ない。

11　10YR6/6：明黄褐色土　５より粘性強し。しまり強。基本的には、９と同じだが全体的に、やや明るい感じがする。

12　7.5YR5/6：明褐色土　５より粘性強し。しまり強。7.5Y5/2と、５ＹＲ4/6の混入が、10より多く、８より少ない。

13　10YR5/6：明黄褐色土　５より粘性強し。しまり強。10ＹＲ5/6を基本として、7.5Y5/2と、５ＹＲ5/6（明赤褐色土）が、混じり合って層をなしている。細かな網目状に、５ＹＲ5/6（明赤褐色土）が混じる。

14　7.5Y5/2：灰白色土　粘性６よりやや強。しまり６と同じ。7.5Y5/2を基本として、7.5ＹＲ5/6（橙色土）が混じる。（橙色土が灰白色土の中に、にじんだように混じる。7.5ＹＲ5/6がブロック状に入っている。

15　7.5Y5/2：灰白色土　粘性６よりやや強。しまり６と同じ。7.5Y5/2を基本として、7.5ＹＲ5/6（橙色土）と、7.5ＹＲ5/6(明褐色土）が混じりあって、層をなしている。５ＹＲ4/6(赤褐色土)がにじんだように、全体に入っている。

16　10YR5/6：黄橙色土　粘性６よりやや強。しまり６と同じ。10ＹＲ5/6を基本として、7.5Y5/2が、しま模様に入っている、５ＹＲ5/6(赤褐色土)が、微量に、にじんで混入している。黄橙色土の中に、灰白色土が斜め（右上がり）に入り、互層をなす。灰白色土の層厚は、30～５mmで厚めである。

17　10YR5/6：黄橙色土　粘性６よりやや強。しまり６と同じ。10ＹＲ5/6を基本として、7.5Y5/2がしま模様に混入して層をなしている。7.5YR5/6（明褐色土）が、ブロック状に入っている。（黄橙色土の中に、灰白色土が斜めに層状に入り、互層をなす。灰白色土の層厚は、20～５mmと、16に比べてややうすい。また灰白色土層は連続せず、断裂が多く入っている。この互層は、著しくしゅう曲している。）

18　7.5YR5/6：灰白色土　粘性６よりやや強。しまり６と同じ。7.5Y5/2を基本として、10YR5/6（黄橙色土）が混じって層をなしている。粘土。（灰白色土の中に黄橙色土が層状に入る。黄橙色土の層厚は、50～10mmであるが、断裂が多く、ブロック状になっている。）

第２図　基本層位

第2節　縄文時代・弥生時代の遺構と遺物

1. 検出遺構と出土遺物

SK113土坑（第3図、図版1・25）

LO36・37グリッドで検出した。上端部径約82cm、底径約50cm、深さ約1m18cmの円筒形の土坑である。平坦な底面の中央には直径約8cm、深さ約13cmのピットが1個ある。埋土の14層のあり方からみて棒状のものが立てられたまま土坑が埋没したと考えられる。埋土中からは縄文土器細片、フレークが出土した。縄文土器はすべて胎土に繊維を含むものであるが、文様の判明するものはなかった。

SK51土坑（第3図、図版1・25）

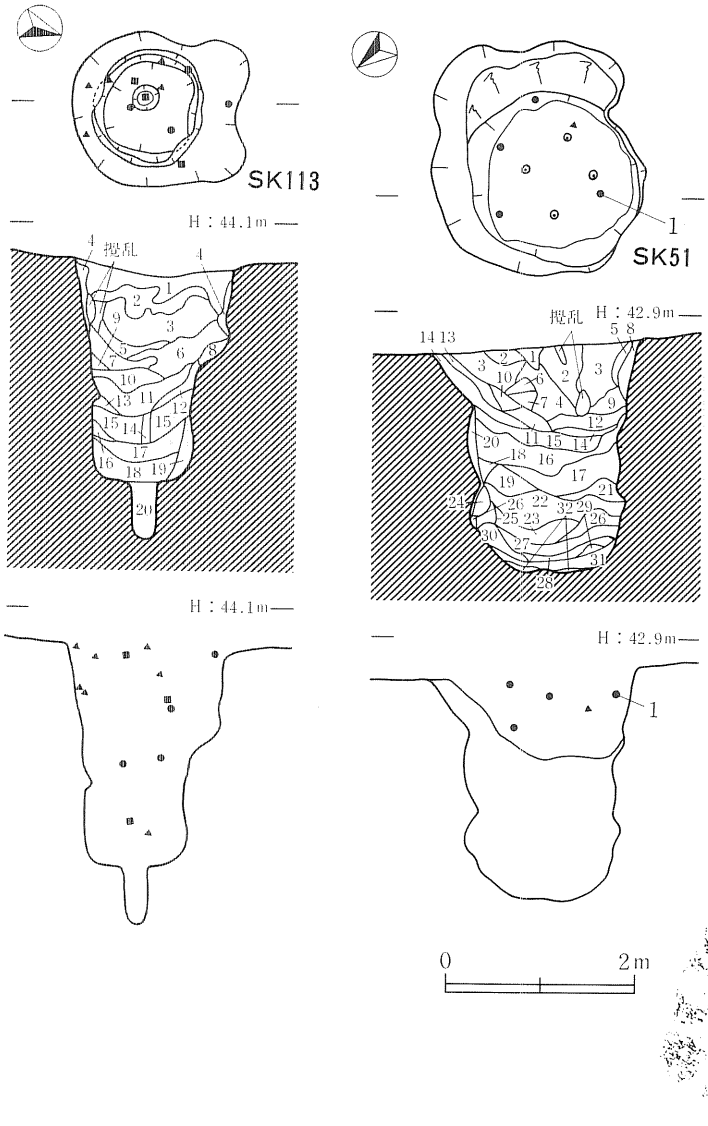
LN41グリッドで検出した。上端部径約1m10cm、底径約75cm、深さ約1m20cmの円筒形の土坑である。底面には径3～5cm、深さ7～12cmの小ピットが4個配置される。一度土坑が埋没した後で再び深さ約50cmの土坑が構築され、粘土を貼った新たな底面を形成して再利用されている。最初に構築された深い土坑は自然堆積であるが、再利用された土坑は、人為的に埋められたものである。上部の土坑からは繊維を含む縄文土器細片、フレークが出土した。1は口唇部にヘラ状工具の側面を用いたキザミ目を施す。口縁部の文様は半截竹管または、ヘラ状工具側面を用いた横位の連続刺突文が施される。胎土は細粒砂を多く含みもろい。繊維は少量含まれる。

SK95土坑（第4図、図版2・25）

LK41グリッドの中央で検出した。SK96土坑と近接する。上端は長径約90cm、短径約74cmの不整円形、底径は約60cmで、断面形が袋状となる土坑である。深さは約46cmである。上端から約10cm下で、開口部がやや狭くなり、長さ約55cm、幅約45cm、厚さ約3～6cmの凝灰岩の平石を置いて開口部のほぼ全面を塞いでいる。埋土は人為的堆積である。遺物は開口部を塞ぐ平石より下の埋土中から縄文土器破片が1点、小礫が2点出土した。縄文土器は磨滅していて文様は不明であるが胎土に繊維を含んでいる。

SK96土坑（第4図、図版2・25）

LK41グリッドの北側、SK95土坑の北東約80cmで検出した。上端は長径約71cm、短径約60cmの楕円形を呈し、深さは約37cmである。SK95土坑と同様に、断面形は上端の開口部より底径が大きい袋状となる。埋土は人為的堆積である。確認面上では2の須恵器甕形土器胴部破片が出土し、埋土中からは縄文土器破片が2点、不定形石器が1点出土した。縄文土器はいずれも磨滅した小破片であるが胎土には繊維が含まれている。3の不定形石器は表面が礫皮面である。縦長剥片の表面の一部に2次加工を施して刃部を作出したものである。刃部と反対側の側辺の一



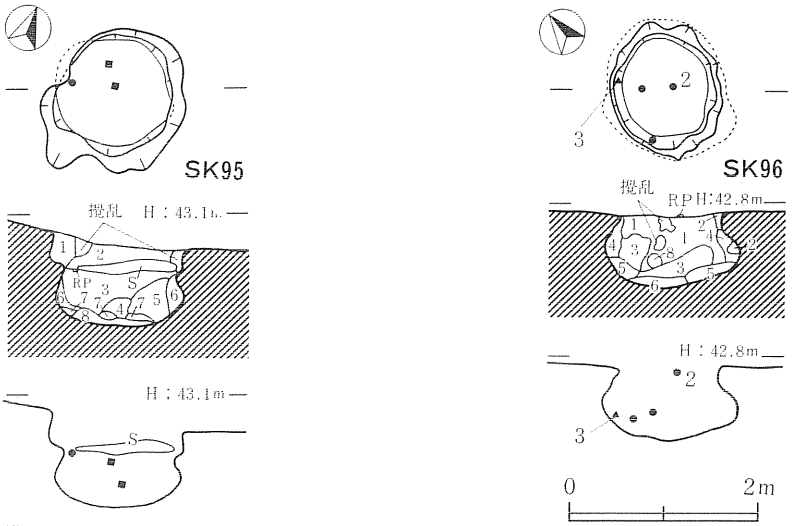
SK113

1　7.5YR3/4：褐色土　粒子やや細かく、粘性無し　しまり有り
2　10YR2/2：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性無し　しまり有り
3　10YR3/4：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り　しまり強い　地山の土が混じりあった状態で10%混入。
4　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り　1の土がブロック状に30%混入。
5　10YR2/2：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性有り　しまりやや有り　炭化粒φ1mm大2%混入
6　10YR3/4：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り　地山の土がブロック状に5%混入。炭化粒を微量に含む
7　10YR3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り　しまり無し　7の炭化粒と9の土が混じりあった状態で混入
8　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り　しまり有り。
9　10YR5/6：黄褐色土　粒子やや細かく、粘性有り　しまりやや有り
10　10YR3/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し　しまり無し。ボソボソした状態　地山の土がブロック状に3%混入　炭化粒を微量に含む。
11　10YR4/4：褐色土　粒子やや細かく、粘性有り　しまり無し。地山の土が混じりあった状態で20%混入。炭化粒を微量に含む。
12　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまりやや有り　地山の土が混じりあった状態でブロック状に混入。
13　10YR4/4：褐色土　粒子粗く、粘性無し　しまり有り　地山の土がブロック状に10%混入。炭化粒を含む
14　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り　しまり無し　ボソボソした状態で15の土を10%含む
15　10YR6/6：明黄褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り　しまり有り　全体的に黒褐色土φ1～2mm7%混入　炭化粒も微量に含む
16　10YR3/2：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り　しまりやや有り　15の土が混じりあった状態で15%混入　炭化物も微量に含む
17　10YR3/4：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り　しまりやや有り　15の土がブロック状にφ1～5mm7%混入
18　10YR6/6：明黄褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り　しまり有り　地山の土に18の土が混じりあった状態で10%混入
19　10YR5/6：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまりやや有り　18の土がブロック状に混入
20　10YR5/4：にぶい黄褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り　しまり無し。地山に含まれる白い土（10YR8/1灰白色土）が全体的に混入

SK51

1　10YR3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　1と2の土がブロック状に混じりあった状態
2　10YR2/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまり有り
3　10YR3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまり有り　4の土をブロック状に20%含む　張り土
4　10YR2/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまり強　張り土
5　10YR5/6：黄褐色土　地山の土に1の土をブロック状に15%含む
6　10YR3/4：暗褐色土　粒子細かく、しまり強　1の土がブロック状に混入
7　10YR2/2：黒褐色土　粒子細かく、しまり強　1の土がブロック状に混入
8　7.5YR5/6：明褐色土　粒子やや細かく、粘性無し　しまり強　ほとんど地山の土に近い
9　10YR3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　ややしまり有り（φ1～5mm）の1と4の土が20%含まれている
10　10YR3/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し　ぼそぼそしている　地山粒（φ1～5mm）、5%混入
11　10YR3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまり有り　地山粒（φ1～5mm）、10%混入
12　10YR3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまりかなり強
13　10YR5/6：黄褐色土　地山の土に1の土をブロック状に15%含む　張り土。
14　10YR5/6：黄褐色土　しまりかなり強。地山の土に1の土をブロック状に15%含む　張り土
15　7.5YR5/6：明褐色土　粒子細かく、粘性有り　しまり強　褐色土をブロック状に含む。
16　10YR3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性有り　しまり強　14の土をブロック状に20%含む　15～18炭化物（φ1～5mm）、全体的に15%混入
17　10YR4/4：褐色土　粒子やや粗く、粘性有り　しまり強　褐色土の割合が多く、黒色土を30%含む　15～18炭化物（φ1～5mm）、全体的に15%混入
18　7.5YR5/6：明褐色土　粒子やや細かく、粘性無し　しまり強　褐色土をブロック状に含む
19　7.5YR5/6：明褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　黒色土φ1～7mmの状態でブロック状に20%含む
20　7.5YR5/6：明褐色土　粒子やや細かく、粘性無し　しまり強　ほとんど地山の土に近い。
21　7.5YR5/6：明褐色土　粒子やや細かく、粘性無し　しまり強　褐色土をブロック状に含む。
22　10YR3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性有り　しまりやや弱　15～18炭化物φ1～5mm、全体的に15%混入
23　10YR4/4：褐色土　粒子やや粗く、23の土に黒色土、ブロック状に20%混入
24　10YR7/6：黄橙色土　20の土にやわらかな黄色の土、ブロック状に10%混入
25　10YR7/6：黄橙色土　粘性弱く、しまりあまり無し　20の土にやわらかな黄色の土、ブロック状に10%混入。
26　10YR4/4：褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り　しまり弱い
27　10YR5/6：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまりやや有り。黒色土30%混入
28　10YR3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し　しまりなくぼろぼろした状態　炭化物φ1～5mm、5%混入
29　7.5YR5/6：明褐色土　26の黒色土の中に、褐色土がブロック状に混入
30　10YR4/4：褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り　しまり弱い
31　10YR4/4：褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り　しまり弱い
32　10YR4/4：褐色土　粘性有り　しまりやや有り　26の土と地山の土がブロック状に混入

第3図　SK113土坑・SK51土坑

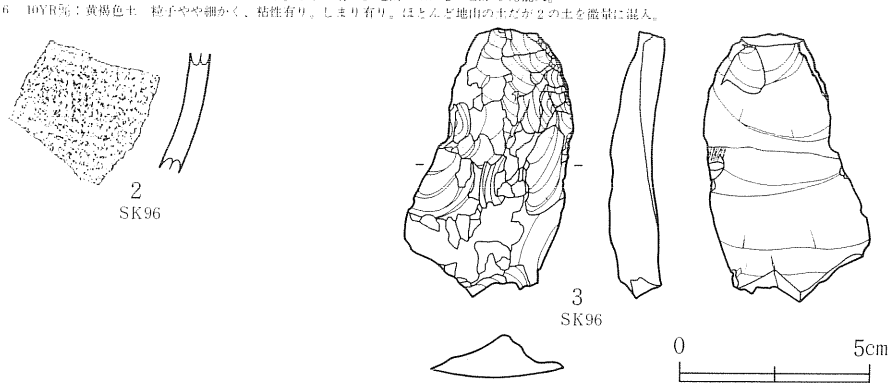


SK95

1　10YR5/2：黄褐色土　粒子ややや細かく、粘性無し。しまり有り。2の土がブロック状に15%混入。
2　10YR3/2：黒褐色土　粒子ややや粗く、粘性無し。しまり無く、パサパサした状態。
3　10YR3/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無し。パサパサした状態で2と似ている。地山の黄褐色土が（φ1mm～5mm）微量（3%）に含まれる。
4　10YR3/2：暗褐色土　粒子細かく、粘性有り。地山の土が微量に混入。
5　10YR5/6：褐色土　粒子ややや細かく、粘性有り。しまり有り。
6　10YR5/6：褐色土　粒子ややや細かく、粘性有り。しまり強い。
7　10YR3/2：暗褐色土　3と4の土と、地山の土が交ざり合った状態で半分ずつ混入。
8　10YR5/6：黄褐色土　粒子ややや細かく、粘性有り。しまり有り。地山の土に3、4の土がブロック状に20%混入。

SK96

1　10YR3/2：暗褐色土　粒子ややや粗く、粘性無し。しまり有り。地山土（黄褐色土）が、混じりあった状態で、5%混入。
2　10YR5/2：にぶい黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。地山の土に1の土が5%混入。
3　10YR3/2：黒褐色土　粒子ややや粗く、粘性無し。しまり有り。
4　10YR5/6：褐色土　粒子ややや細かく、粘性無し。しまり有り。地山の土に1の土がブロック状に混入。
5　10YR5/6：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。地山の土に2の土が5%混入。
6　10YR5/6：黄褐色土　粒子ややや細かく、粘性有り。しまり有り。ほとんど地山の土だが2の土を微量に混入。

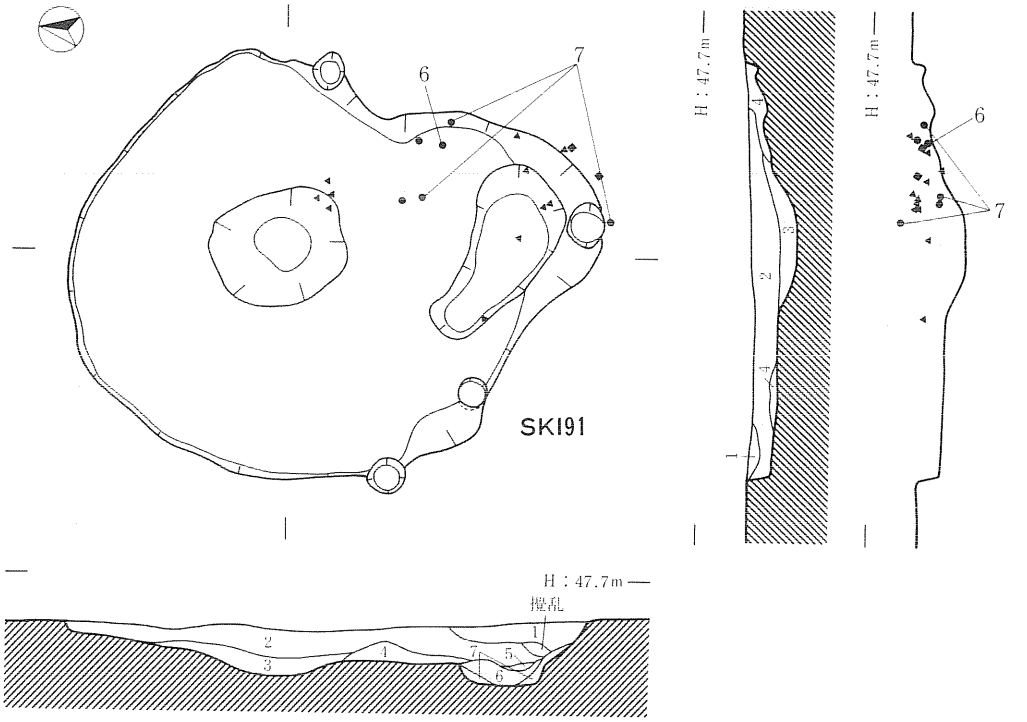


第4図　SK45土坑、SK96土坑

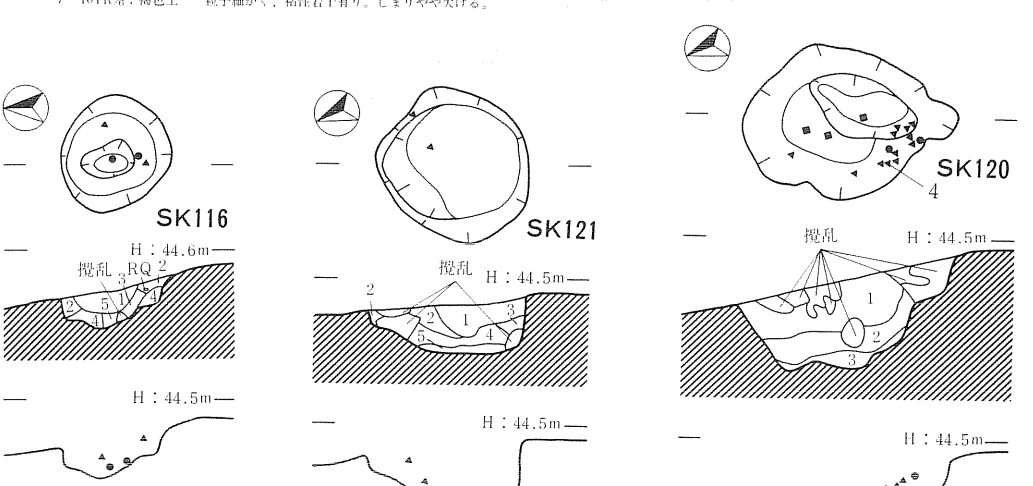
部にも素材剥片の鋭い縁辺を潰すための2次加工を施している。

SKI91竪穴遺構（第10図、図版2・25）

LG32・33、LH32・33グリッドにまたがって検出した。検出状態での長径は約2m90cm、短径約2m30cm、深さ約12cmで不整楕円形を呈する竪穴状遺構である。底面はほぼ平坦であるが南側は木根が入り込み、壁、底面ともに壊されている。中央部に長径約74cm、短径約60cm、深さ約10cmの楕円形の浅い掘り込みがあるが、焼土は認められない。壁に沿って4ケ所に深さ10



SKI91
1　10YR塙：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり無し。10ＹＲ塙の褐色土をブロック状で５㎜大20%混入。炭化物若干含む。
2　10YR当：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１㎜大１%混入。褐色粒φ１㎜大10%混入。
3　10YR当：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。褐色粒10㎜大ブロック状に10%混入。１㎜大10%混入。
4　10YR塙：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物若干含む。
5　10YR当：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ１㎜大若干混入。
6　10YR塙：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ１㎜大若干混入。
7　10YR塙：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。

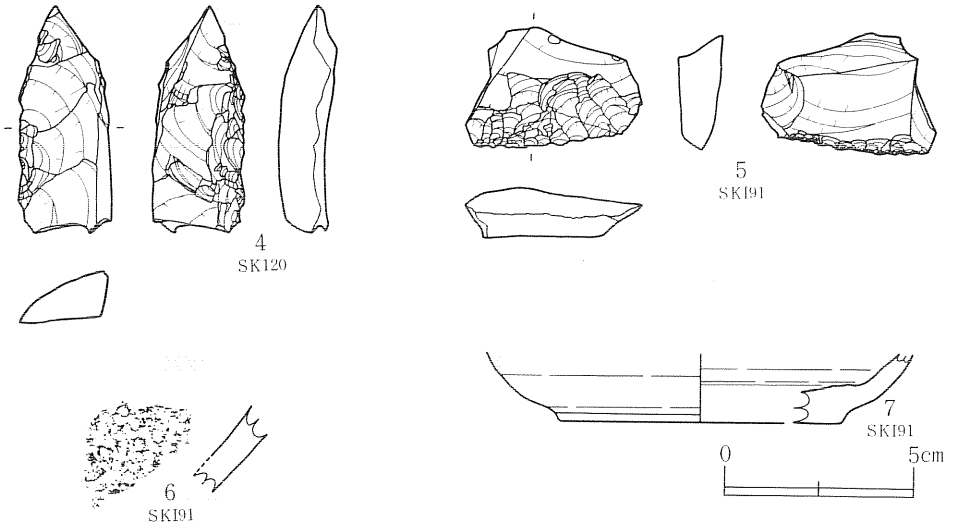


SK116
1　10YR当：暗褐色土　ややしまり有り。地山崩壊土20%。
2　10YR塙：褐色土　　ややしまり有り。地山崩壊土30%。
3　10YR当：褐色土　　しまり有り。炭化物細粒１㎜以下７%。
4　10YR塙：褐色土　　しまり有り。地山崩壊土50%。
5　10YR塙：褐色土　　ややしまり有り。

SK121
1　10YR当：暗褐色土　しまり有り。炭化物小粒５㎜以下７%。
2　10YR当：暗褐色土　きわめてしまり有り。
3　10YR塙：褐色土　　きわめてしまり有り。地山小粒５㎜以下15%。
4　10YR%：黒褐色土　きわめてしまり有り。地山小粒５㎜以下15%。
5　10YR当：暗褐色土　しまり有り。地山崩壊土30%。

SK120
1　10YR塙：褐色土　　粘性大、しまり有り。
2　10YR当：暗褐色土　ややしまり有り。地山小粒５㎜以下７%。
3　10YR%：黄褐色土　きわめてしまり有り。地山崩壊土10%。

第５図　SKI91竪穴遺構、SK116土坑、SK121土坑、SK120土坑



第６図　SKI91竪穴遺構・SK120土坑出土遺物

～25cmのピットが4基ある。埋土は自然堆積である。

遺物は縄文土器、石器、土師器が出土した。埋土中及び木根による撹乱部分のものがほとんどである。5は不定形石器である。やや厚みのある横長剝片の打面と両側辺を折り取り、他の一辺に刃部を作出したものである。5の他にフレークが埋土中から9点出土した。6はRL縄文が施文された土器片で胎土に繊維を多く含んでいる。その他に胎土に繊維を含む土器片が2点出土した。7は土師器杯形土器の底部で、遺構確認面と撹乱部分から出土したものである。内外面ともロクロ成形で回転糸切りである。ケズリ等の調整はない。

SK116土坑（第５図）

LG39グリッドで検出した。平面形は径約62cm、深さ約20cmの円形である。底面中央は浅いピットがある。底面近くから胎土に繊維を含む縄文土器片が２点、埋土中からフレークが２点出土した。

SK121土坑（第５図、図版３）

LI40グリッドで検出した。平面形は径約84cmの円形で深さは約24cmである。底面は平坦であるが北側は一段高い平坦面があり、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は自然堆積である。埋土中からはフレークが2点出土した。

SK120土坑（第５・６図、図版25）

LL39グリッドで検出した。平面形は長径約１m、短径約82cmの楕円形で、深さは約44cmである。底面は凹凸があり底面近くには拳大の小礫が３個あった。壁は底面からゆるやかに開き気味に立ち上がる。遺物は埋土中からの出土である。胎土に繊維を含む縄文土器片が２点とフレーク及びチップが多く出土した。４は２次加工のある剝片で、素材剝片の２辺を折り取り、表裏

両面に２次加工を施しているが、刃部とはなっていない。刃部作出の途中で放棄された不定形石器の未製品であると思われる。

SI37竪穴住居跡（第７～９図、図版４・25）

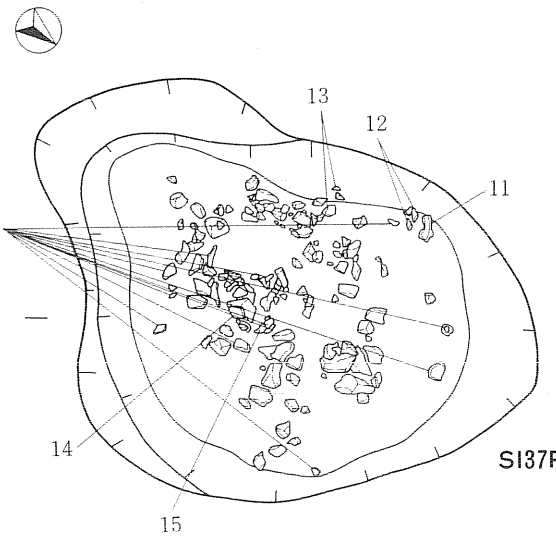
KK44・45、KL44・46グリッドで検出した。検出時には中央のＰ１が単独の土坑であるかに見えたが、その後周囲を精査したところ、Ｐ１を取り囲むようにＰ２～P12の10基のピットを検出した。壁は検出できなかったが、これらのピットによって囲まれる長軸約４ｍ、短軸約３ｍ20cmの楕円形の範囲を住居跡と判断した。ピットは径36～20cm、深さ50～24cmであるが、比較的深く径の大きいＰ２、Ｐ８、P10、P11、P12が主柱穴と考えられる。これらの柱穴は、住居跡の短軸にＰ２、Ｐ６、Ｐ３とP11、P10、Ｐ８、P12が対になって不整７角形に配置され、長軸のＰ２とP11、Ｐ３とP12の間が広く開いている。長軸方向はおよそN―75°―Eである。床面はほぼ平坦である。

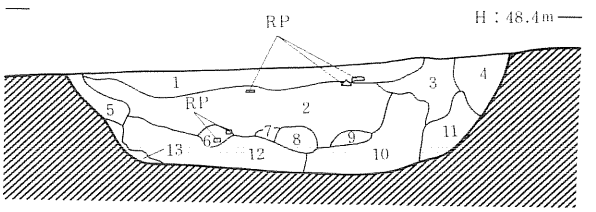
柱穴群の中央にあるＰ１は平面形が長径約119cm、短径約96cmの不整楕円形で、深さは25～28cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。底面や壁面は焼けていない。埋土中には、火熱を受けて表面が赤変した大きさ10cm以下の泥岩の小角礫が多量に含まれている。これらは本来ある程度大きい岩石であったものが、埋土に混入する際に砕けて小角礫になったものである。確認面及び埋土中には炭化物と焼土粒が含まれており、ピット群の中心部にあることから、炉の機能を果していたと考えられる。埋土の堆積状態は自然に流入したのではなく、人為的に埋め立てられたものである。住居跡が廃絶する時点でＰ１を埋め立て、その際に炉石として使用した泥岩も周囲に散乱していた土器片とともに埋土に入ったと考えられる。

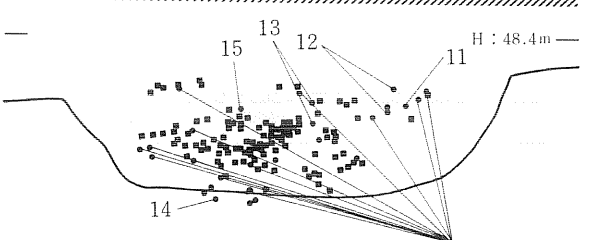
遺物はＰ１、Ｐ２、Ｐ５、Ｐ８、Ｐ９、P10、P12から縄文時代晩期の土器片、Ｐ２から２次加工のある剝片、P10、P12からフレークが出土した。９・11・12は精製土器の浅鉢形土器、10・13・18は深鉢形土器、17は鉢形土器である。８・14・15・16は粗製の深鉢形土器である。14・15・16は同一個体で、Ｐ１の埋土全体に泥岩の小角礫とともに含まれていた。17は口縁部に羊歯状文が施文されている。20の注口土器はＰ２の周囲の浅い掘り込みの埋土中から出土した。口縁部と注口部及び胴部の一部から器形を推定復元したものである。推定口縁部径約13cm、最大径25cmと大型である。注口部の付け根には上下にヒレ状の突起がつき、左右には２個一対の小突起がつく。胴部は雲形文が施される。19は２次加工のある剝片である。礫皮面のある小剝片を素材とし、表裏両面に細かい剝離痕があるが、刃部はない。

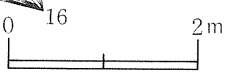
SI26竪穴住居跡（第10・11図、図版５・25）

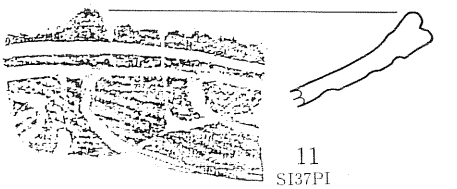
KP55・56、KO55・56グリッドの斜面で検出した。平面形は径約２ｍ35cmの円形で掘り込みの深さは約20cmである。斜面上部側の北側でSK32土坑を切っており斜面下部の南側は倒木痕による撹乱を受けている。床面は平坦で北から南に若干傾斜している。南側は倒木痕の影響でや

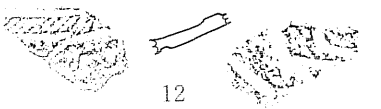


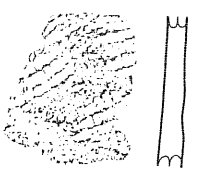


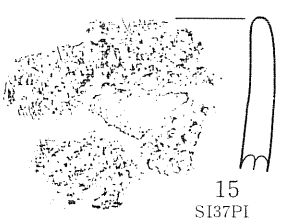


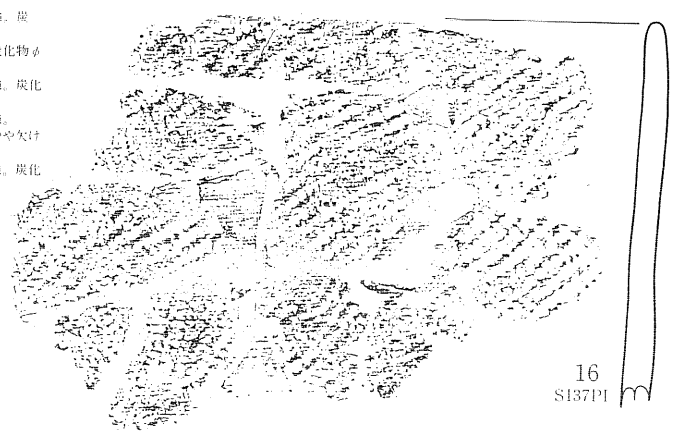








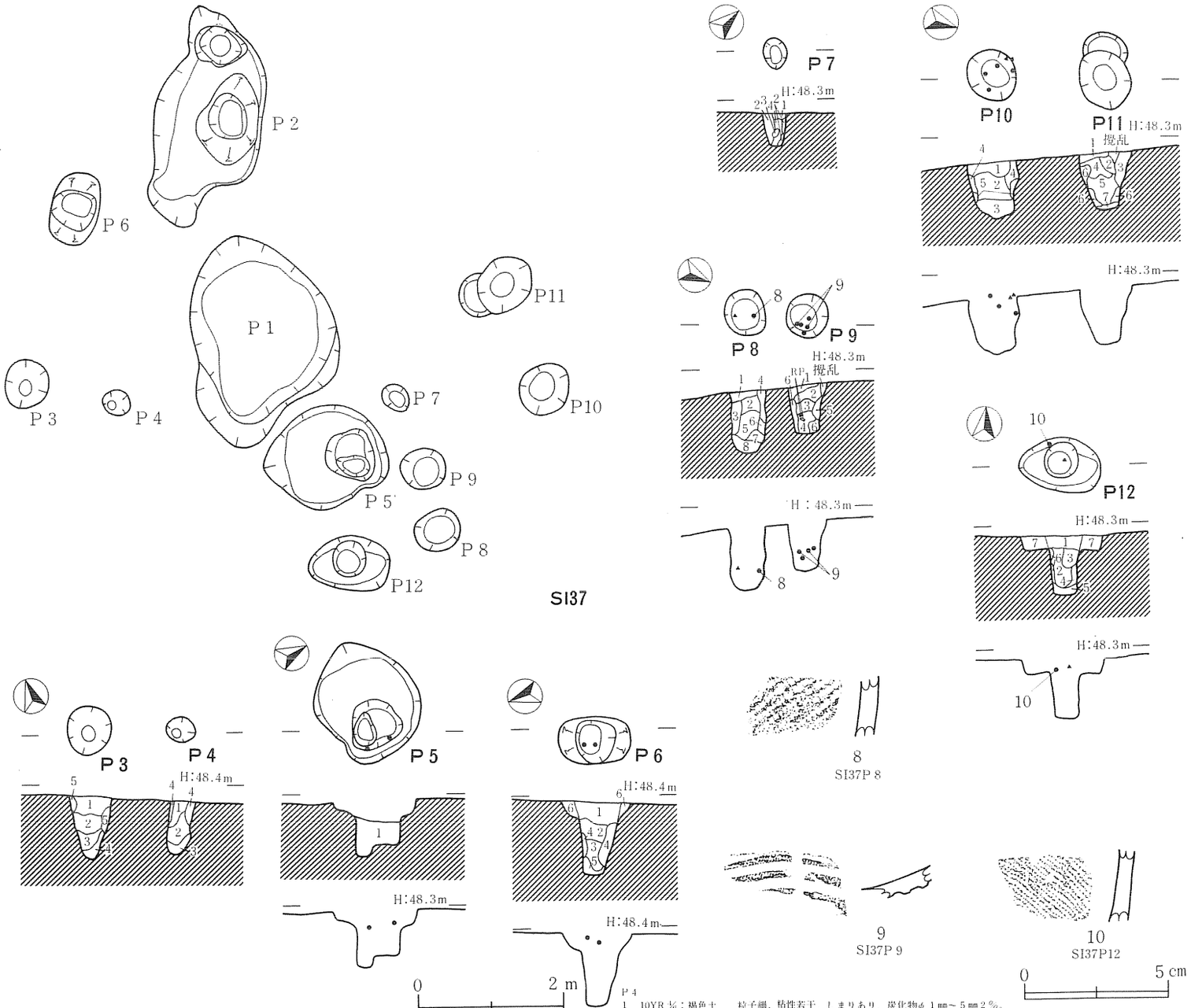




SI37PI

1	10YR5/2：黄褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物1～3mmを3%、焼土粒（7.5YR5/6、5YR5/6）を2%含む。
2	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1～5mmを3%、ブロック状1cmを2%、焼土粒φ1～2mmを1%含む。
3	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1～2mmを1%含む。
4	10YR5/2：にぶい黄褐色土	粒子細かく粘性無し。しまり強。炭化物φ1～2mmを若干含む。
5	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1mmを若干含む。
6	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ1mmを若干、焼土粒を若干含む。
7	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。
8	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物をブロック状に含む。
9	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物を若干含む。
10	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性無し。炭化物φ1～5mmを3%、焼土粒φ1mmを1%、地山ブロックを若干含む。
11	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1mmを若干含む。
12	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ1～5mmを1%、焼土粒を若干含む。
13	10YR4/2：褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。焼土粒、及び地山ブロックを若干含む。

第7図　SI37住居跡PI



P 3
1　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性若干、しまり強、炭化物φ１㎜～３㎜２％。
2　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性あり、しまり強、炭化物φ７㎜～10㎜１％、地山粒10％。
3　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性あり、しまり強、炭化物φ３㎜～８㎜２％、地山粒10％。
4　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性中、しまり強、炭化物若干、地山粒50％。
5　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性あり、しまり強、地山ブロック多量。

P 4
1　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性若干、しまりあり、炭化物φ１㎜～５㎜２％。
2　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性あり、しまりややや欠ける。炭化物ブロック状30％、地山粒20％。
3　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性あり、しまり強、炭化物φ５㎜～10㎜15％、地山粒30％。
4　10YR 5/2：褐色土　　粒子細、粘性なし、しまり強、炭化物φ１㎜大１％。

P 5
1　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭火物φ１～７㎜を３％、焼土粒３㎜を若干、地山粒10mを５％含む。

P 6
1　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～５㎜を２％含む。
2　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～２㎜を３％、地山粒を10％含む。
3　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまりややや欠ける。地山ブロックが50％混入。
4　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ１㎜を若干含む。
5　10YR 5/2：黄褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりややや欠ける。炭化物φ１～２㎜を１％、地山粒10％を含む。
6　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１㎜を若干含む。

P 7
1　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ２㎜を１％含む。
2　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１㎜を若干含む。
3　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。炭化物φ２㎜を１％含む。
4　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～３㎜を５％含む。

P 8
1　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１㎜を若干含む。
2　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～２㎜を３％含む。
3　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～10㎜を10％、焼土粒φ２㎜を若干、地山粒を10％含む。
4　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ１～５㎜を５％、焼土粒φ２㎜を１％含む。
5　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１～５㎜を２％、地山粒を10％含む。
6　10YR 5/2：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１㎜を１％含む。

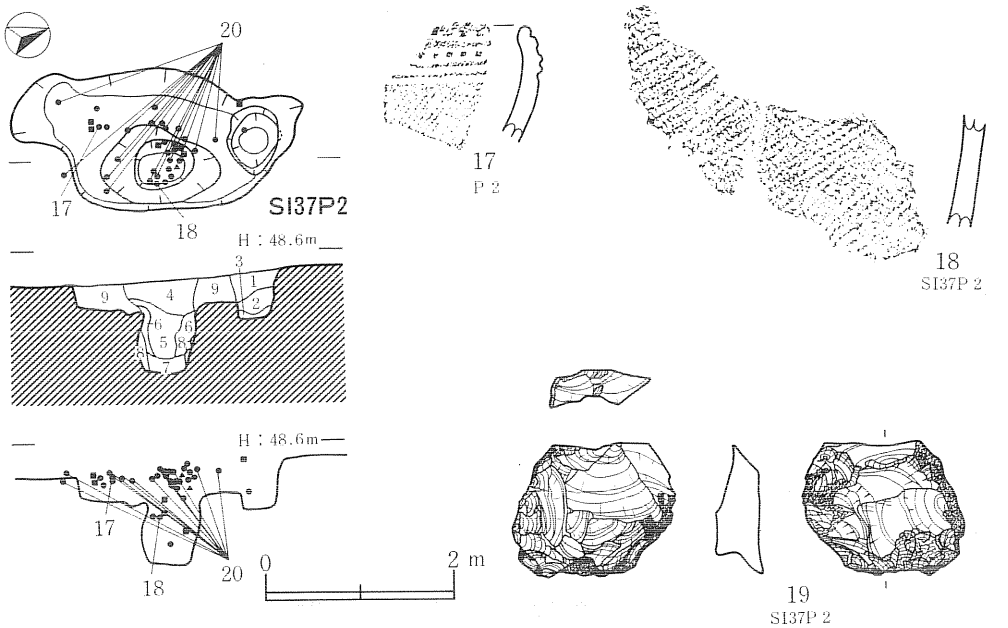
P 9
1　10YR 5/6：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１㎜を若干含む。
2　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまりややや欠ける。炭化物φ１～５㎜を１％、地山粒を若干含む。
3　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまりややや欠ける。炭化物φ１㎜を１％、地山粒を10粒を10％含む。
4　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～３㎜を１％、地山粒を若干含む。
5　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ１～10㎜を３％、地山粒を５％含む。
6　10YR 5/6：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ１㎜を若干含む。
7　10YR 5/6：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまり強。地山粒をブロック状に50％、炭化物φ１㎜を１％含む。
8　10YR 3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。炭化物φ10㎜を１％、地山ブロックを10％含む。

P10
1　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～３㎜を若干含む。
2　10YR 3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～３㎜を２％、地山粒を３％含む。
3　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性中。しまり強。炭化物φ１～２㎜を５％、地山粒を10％含む。
4　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～５㎜を１％含む。
5　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物を若干含む。

P11
1　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～５㎜を１％含む。
2　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～５㎜を２％含む。
3　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１㎜を若干含む。
4　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～３㎜を２％含み、一部ブロック状である。
5　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまりややや欠ける。炭化物φ１㎜を１％、地山ブロックを50％含む。
6　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１㎜を若干含む。
7　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり最強。炭化物をブロック状に２％含む。

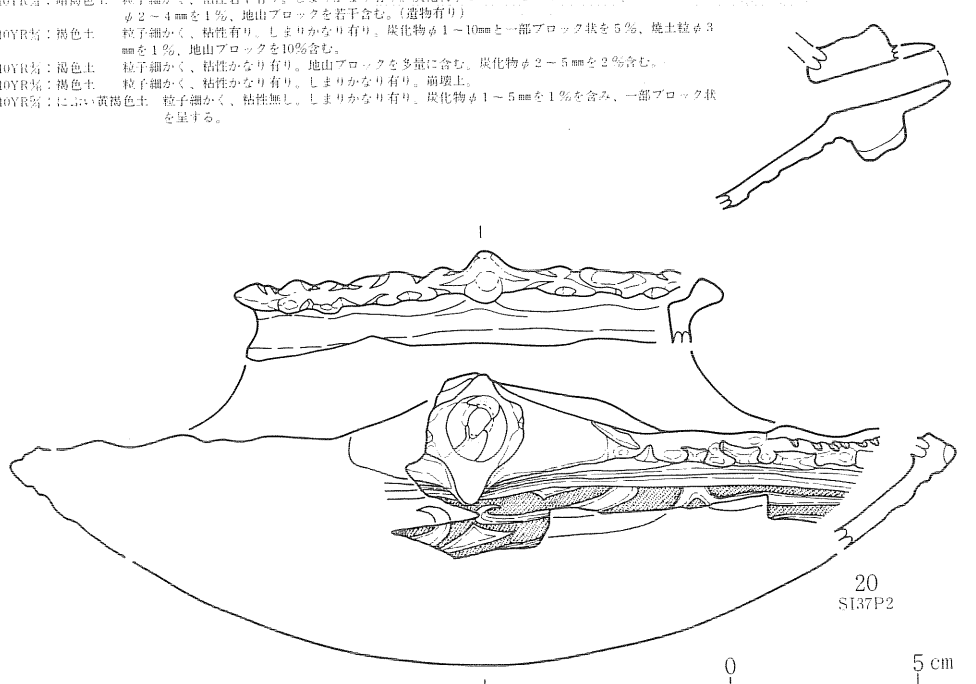
P12
1　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～８㎜を２％含む。
2　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまりややや欠ける。炭化物φ２～５㎜を２％、地山粒を10％含む。
3　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ２～５㎜を２％、地山粒を50％含む。
4　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。炭化物φ３㎜を１％、地山粒を２％含む。
5　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性有り。しまりややや欠ける。炭化物φ１㎜を１％、地山粒を50％含む。
6　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまりややや欠ける。炭化物φ１㎜を若干含む。
7　10YR 5/3：褐色土　　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１㎜を若干含む。

第８図　SI37住居跡

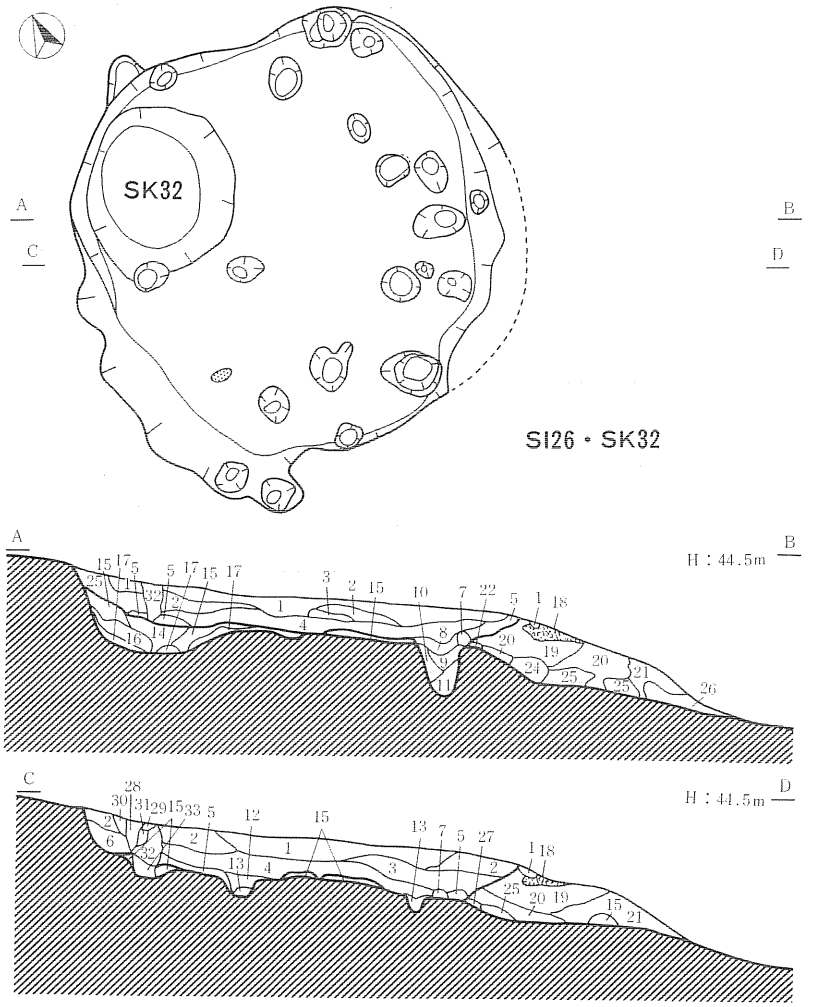


P２

1　10YR5/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１～２mmを１%、焼土粒φ１mmを若干含む。
2　10YR5/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ１～３mmを２%含み、一部ブロック状を呈する。焼土粒φ１～２mmを１%含む。
3　10YR5/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまりかなり有り。炭化物φ１mmを１%、地山ブロックを若干含む。
4　10YR5/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまりかなり有り。炭化物φ１～６mmを２%、焼土粒φ２～４mmを１%、地山ブロックを若干含む。（遺物有り）
5　10YR5/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりかなり有り。炭化物φ２～10mmと一部ブロック状を５%、焼土粒φ２～４mmを１%、地山ブロックを若干含む。（遺物有り）
6　10YR5/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまりかなり有り。炭化物φ１～10mmと一部ブロック状を５%、焼土粒φ３mmを１%、地山ブロックを10%含む。
7　10YR5/3：褐色土　粒子細かく、粘性かなり有り。地山ブロックを多量に含む。炭化物φ２～５mmを２%含む。
8　10YR5/3：褐色土　粒子細かく、粘性かなり有り。しまりかなり有り。崩壊土。
9　10YR5/3：にぶい黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりかなり有り。炭化物φ１～５mmを１%を含み、一部ブロック状を呈する。



第９図　SI37住居跡Ｐ２



SI26・SK32

1　10YR2/2：黒褐色土　粒子細かくサラサラした状態。粘性無し。しまり若干有り。炭化物φ2～4㎜を2％、褐色粒1～3㎜を5％含む。
2　10YR3/2：黒褐色土　粒子細かくサラサラした状態。粘性無し。しまり有り。炭化物φ1㎜を2％、褐色粒φ1㎜を5％含む。
3　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ3～5㎜を10％、焼土粒1㎜を若干、地山ブロックを20％含む。
4　10YR2/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりに欠ける。炭化物φ2～10㎜を10％、焼土粒φ1～3㎜を2％、褐色粒φ1～3㎜を10％含む。
5　10YR3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり無し。炭化物φ1～5㎜を5％、褐色粒φ1㎜を3％含む。
6　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりに欠ける。地山ブロックを10％含む。
7　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ1～2㎜を2％含む。
8　10YR3/3：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ2～5㎜を10％、褐色粒φ2～6㎜を5％含む。
9　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ3㎜を1％、地山粒を50％含む。
10　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。地山粒が多量に混入。
11　10YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ3～5㎜を3％含む。
12　10YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり欠ける。炭化物を若干、地山粒を20％含む。
13　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。
14　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ2㎜を1％、地山粒を20％含む。
15　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ2㎜を2％、褐色粒φ1～5㎜を20％含む。
16　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。地山粒が多量に混入。
17　10YR4/4：褐色土　地山ブロックである。
18　10YR7/3：にぶい黄褐色　火山灰である。
19　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ1㎜を1％、褐色粒φ1㎜を10％含む。
20　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ1～5㎜を2％、褐色粒を10％、小礫を含む。
21　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり欠ける。炭化物φ1㎜を1％、褐色粒を10％含む。
22　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。（ブロック）
23　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり無し。褐色粒を20％含む。
24　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。炭化物φ1㎜を1％、地山粒を若干含む。
25　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。
26　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。
27　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり無し。褐色粒φ1～2㎜を10％含む。
28　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。褐色粒φ1㎜を10％含む。
29　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。
30　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり欠ける。炭化物φ1～2㎜を1％、褐色粒を10％含む。
31　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。炭化物若干、褐色粒を5％含む。
32　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり欠ける。炭化物φ1～2㎜を1％、褐色粒を10％含む。
33　10YR4/3：褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。地山粒が50％混入。

※H～Dは SK32。1～33は柱本番号である。

第10図　SI26竪穴住居跡、SK32土坑

や隆起している。斜面のため北側壁は残りが良いが南側はほとんどない。床面で深さ５～24cmのピットを計18基検出した。うち６基は壁に取り付いている。床面の南西側に約11×６cmの赤変部があり地床炉かと思われる。埋土は自然堆積である。

SI26竪穴住居跡を切る倒木痕には、地山土の隆起部を取り囲む黒色土の落ち込みの上部に古代の遺構内から検出されたものと同じ火山灰が堆積していた。遺物は埋土中から2次加工のある剝片が１点出土した（23）。両面加工の篦状石器ｃ類の刃部である。刃部の裏面側から表面の基部側に向かって斜めに強い力が加って折れた状態であり、使用中に折損したものと考えられる。

SK32土坑（第10・11図、図版５・25）

SI26竪穴住居跡床面の北側で検出した。SI26竪穴住居跡によって切られている。検出面の平面形は上端の長径約90cm、短径約80cm、底面の長径約66cm、短径50cmの楕円形である。残存部の深さは約20cmである。底面と壁は連続的につながりゆるやかに外反して立ち上がる。埋土は人為的堆積である。埋土中から土器片が２点出土した。21は壷形土器の口縁部である。無文で研磨されており、口唇部は折り返し気味に肥厚する。縄文晩期後半の精製土器である。22はＲＬ縄文の上から横位に沈線が引かれている。小破片のため文様構成は不明であるが縄文晩期の土器と思われる。

SK25土坑（第11図、図版５）

KP50、KO50グリッドで検出した。SI26竪穴住居跡、SK32土坑の南側に隣接する。平面形は上端の長径約１m18cm、短径約96cm、下端の長径約60cm、短径約48cmの円形に近い楕円形である。深さは約56cmである。底面はほぼ平坦である。底面から壁は丸みを帯びて立ち上がり、上端部ではやや内湾気味になる。埋土は自然堆積である。遺物は出土しなかった。

SK21土坑（第11図、図版５）

KQ63グリッドで検出した。平面形は上端径約１m、底面径約72cmの円形で深さは約45cmである。底面は平坦で、壁は直線的にやや外反して立ち上がり、断面形はバケツ形である。底面に10～20cmの礫が３個置かれていた。このほかには遺物は出土していない。埋土は人為的堆積である。形状、礫、埋土の堆積状態はSK41と類似する。

SK22土坑（第11図）

KS58グリッドで検出した。平面形は径約80cmの不整円形である。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。斜面で検出したので斜面上部の北西側では深さ約20cmの壁があるが、南東側はほとんど壁が残っていない。北東側には径約20cm、深さ約25cmのピットがある。本来はもっと深い土坑であったと思われる。遺物は出土しなかった。

SK23土坑（第11図）

KR57グリッドで検出した。SK22土坑の南西側約５ｍの位置である。平面形は径約84cmの不整円形である。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。北西側で深さ約20cm、南東側では深さ約10cmである。SK22土坑と形態、規模ともによく似ているが、底面にピットはない。遺物は出土しなかった。

SK19土坑（第12図）

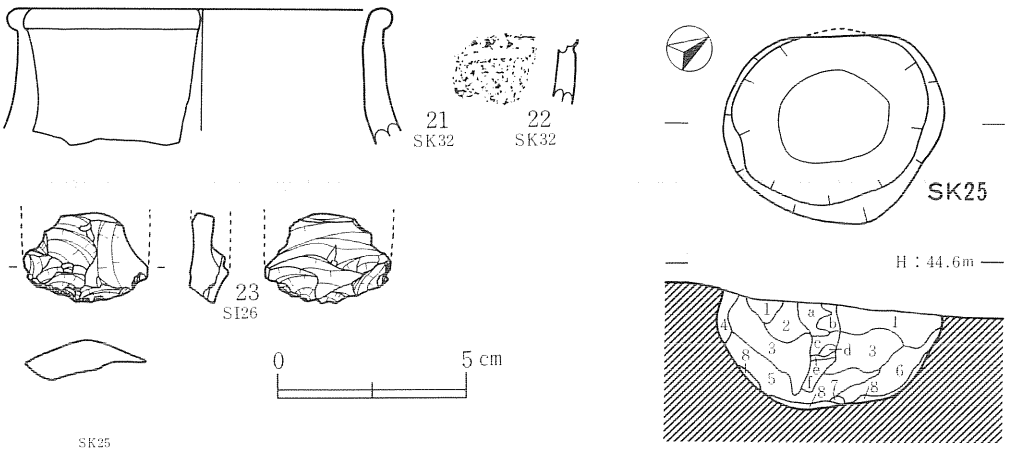
KR62グリッドで検出した。平面形は径約１ｍ10cmの不整円形で、深さは約24cmである。北西側の壁は底面からゆるやかに連続的に立ち上がるが、南東側ではやや傾斜が急である。遺物は出土しなかった。

SK41土坑（第12図、図版６・25）

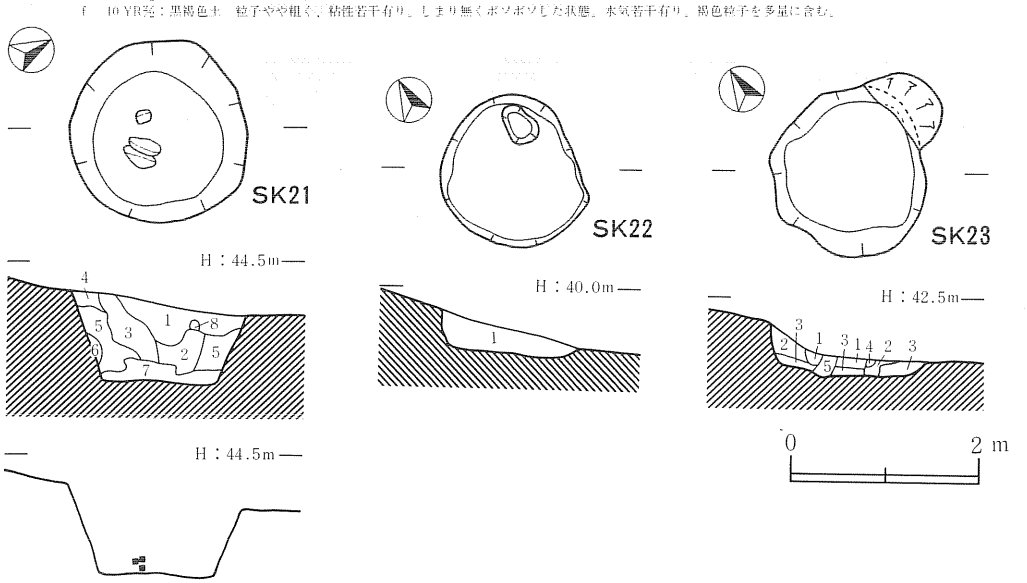
KQ42グリッドで検出した。上端の平面形は径約92cmの円形である。底面は平坦で、径約60cmの円形である。深さは約70cmで、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。東側には大きな木痕があって撹乱を受けているためやや形が乱れているが、本来は円筒形の土坑である。底面には長さ約10cmの礫が1個置かれていた。埋土は人為的堆積である。すぐ北西に隣接して、SKP52ピットがある。底面及び埋土中から遺物は出土しなかった。

SKP52土坑（第12図、図版６・25）

KQ42グリッドで検出した。SK41土坑の北西にほとんど接している。径約16cm、深さ約13cmの円筒形のピットである。埋土には地山ブロックを多く含み、人為的堆積である。埋土の上部で、26の台付鉢形土器の台の部分が正立した状態で出土した。胴部は同一地点の遺構確認面よりも若干上層の黒色土中から、24の小型壷形土器と25の小型浅鉢形土器とともに出土した。24は全体に赤色顔料が塗られている。胴部は丸く膨らみ、勁部は内傾して、肩部に４ヶ所突起がつく。口縁部は屈曲して外反し、口唇部が立ち上がる。胴部の文様は上部に３本の沈線が横位にめぐり、その間に細かいキザミが入る。その下は雲形文が描かれるが、縄文は充塡されていない。文様帯の下端は２本の沈線が横位にめぐる。器壁は薄いが焼成は良好でしっかりしたつくりである。25も全体に赤色顔料が塗られている。24と同様の胎土、焼成で、色調もよく似ている。口唇部に１ヶ所突起がつき、口唇直下に１本の沈線が横位にめぐる。26は突起とキザミの施された外反する口縁をもち、胴部上半に文様帯が構成されている。文様は24の小型壷形土器とよく似ているが、雲形文にはＬＲ縄文が充塡されている。２本の沈線で区切られた胴部下半にも縄文が施文されている。台部は無文でよく研磨され、１本の沈線によって区切られた下端部に縄文が施文されている。これらの遺物は、SKP52ピットに台部を埋め込んで26が正立し、その周囲に24・25が一緒に置かれ、SK41土坑に伴うものであると考えられる。SK41土坑は堆積状態が人為的であることや24～26の遺物の出土状況からみて、葬送も含めた祭祀的性格の



SK25
1　10 YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり若干有り。炭化物を若干、黄褐色粒φ１～２mmを10%含む。
2　10 YR5/6：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまりに少し欠ける。褐色粒φ1～2mmを５%、下端より７cmは植物根による撹乱。
3　10 YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性有り。ボソボソした状態。炭化物φ1～3mmを30%。褐色粒φ1～6mmを10%含む。
4　20 YR5/6：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりかなり有り。地山ブロックを多量に含む。
5　10 YR3/4：暗褐色土　粒子細かく、粘性有り。ボソボソの状態で、水気若干有り。地山ブロックを多量に含む。
6　10 YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり若干有り。炭化物φ２mmを若干、地山ブロックを多量に含む。
7　10 YR5/6：褐色土　粒子細かく、粘性に富む。しまりかなり有り。
8　7.5YR5/6：明褐色土　粒子細かく、粘性に富む。しまりかなり有り。壁崩壊による地山土。
a　10 YR3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまりに欠ける。褐色粒φ２mmを３%含む。
b　10 YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりかなり有り。炭化物φ１～２mmを２%、褐色粒を若干含む。
c　10 YR3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり有り。褐色粒φ１～２mmを３%含む。
d　10 YR5/6：褐色土　地山ブロックである。
e　10 YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。ボソボソした状態である。炭化物がブロック状に50%混入。
f　10 YR3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり無くボソボソした状態。水気若干有り。褐色粒子を多量に含む。



SK21
1　10YR3/3：暗褐色土　しまり無し。地山小粒を10%含む。
2　10YR3/4：暗褐色土　ややしまり有り。地山細粒を20%含む。
3　10YR3/4：暗褐色土　ややしまり無し。地山細粒を３%含む。
4　10YR5/6：褐色土　しまり無し。

SK22
1　10YR3/3：暗褐色土　ややしまり無し。壁崩壊の地山土がブロック状に15%混入。

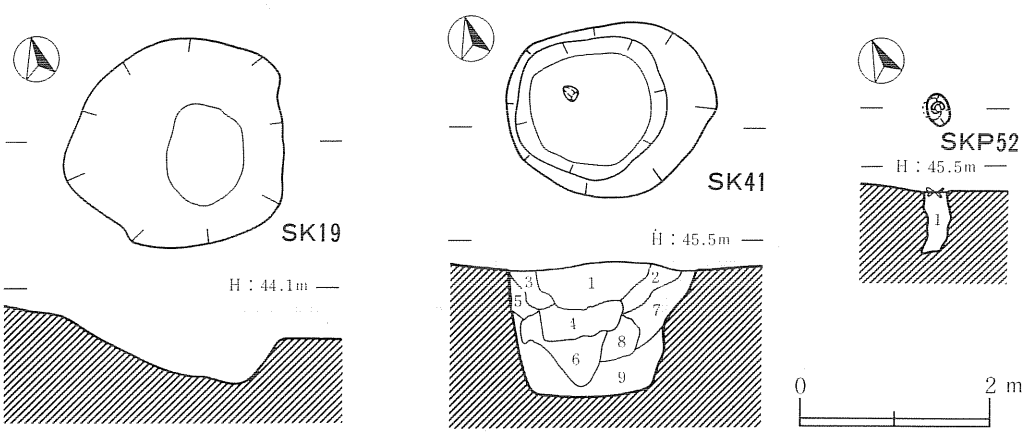
SK23
1　10YR3/3：暗褐色土　しまり無し。壁崩壊の地山土が粒子及びブロック状に３%混入。
2　10YR3/4：暗褐色土　ややしまり有り。壁崩壊の地山土がブロック状に15%混入。
3　10YR5/6：明黄褐色土　粘土、しまり有り。暗褐色土15%混入。
4　10YR5/8：明黄褐色土　地山ブロックである。

第11図　SI26竪穴住居跡、SK32土坑出土遺物、SK25土坑
SK21土坑、SK22土坑、SK23土坑

土坑であると考えられる。

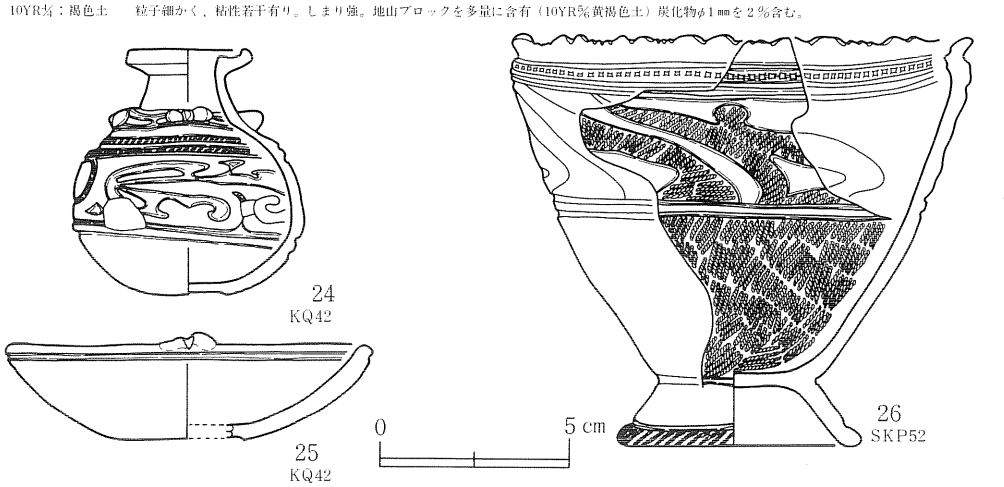
SK33土坑（第13・14図、図版6・25）

KN45、KM45グリッドで検出した。平面形からは長径約1m50cm、短径約1m20cmの楕円形である。深さは約45cm、長軸方向はN—70°—Eである。底面はほぼ平坦、壁は底面から垂直に近い角度で立ち上がり、上端近くではゆるやかに外反して広がる。埋土は全体に焼土粒と炭化物が入り、各層中に地山ブロックが含まれており、人為的堆積と思われる。埋土の各層中には、多量の土器片が含まれていたが、完形または全体の形が復元できるものはなく、すべて破片である。

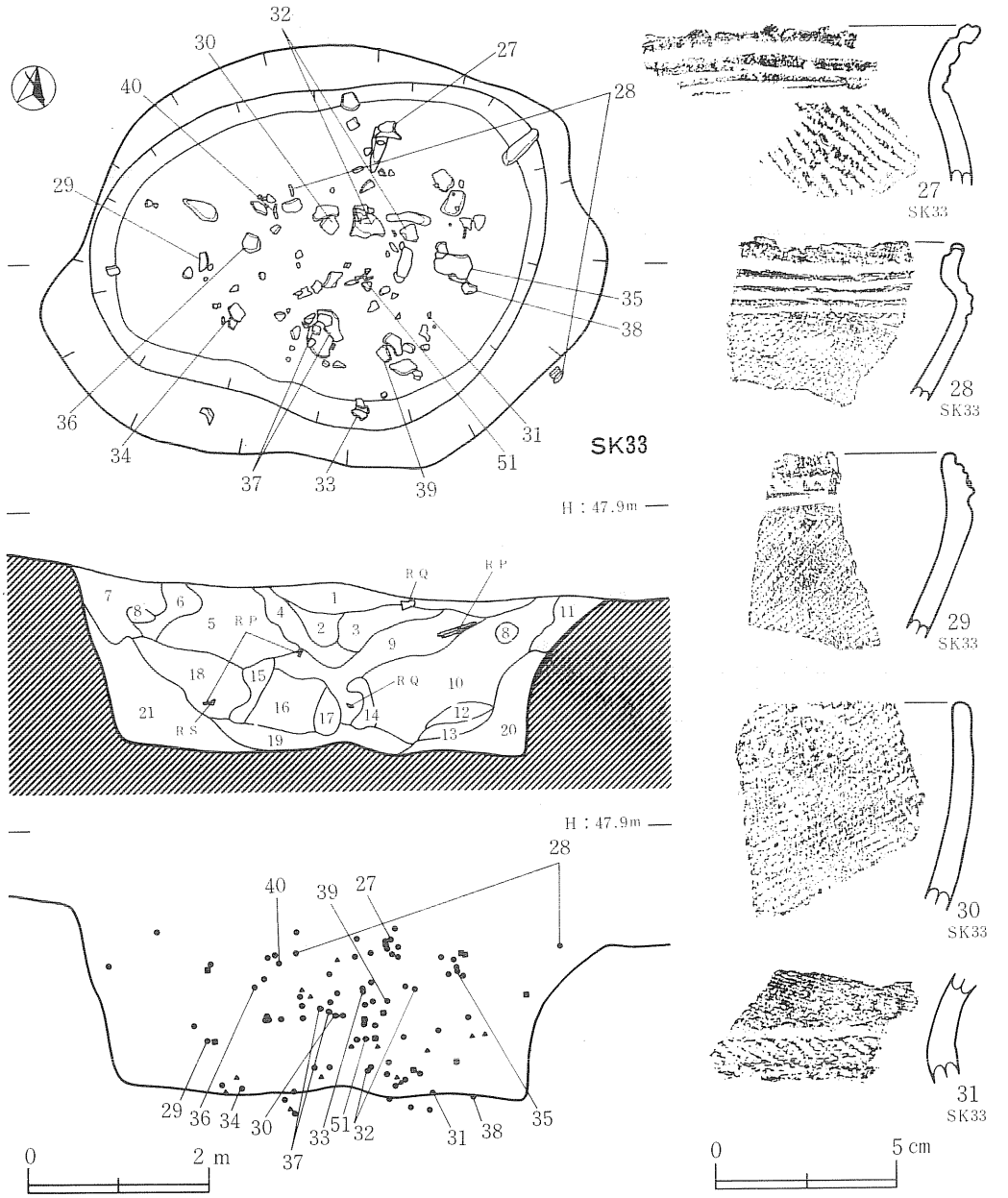


SK41
1　10YR3/4：黒褐色土　しまり強。粘性中。植物痕の攪乱多し。暗褐色土（10YR3/3）と地山粒子がブロック状に（φ3～10cm）30%混入。
2　10YR3/4：褐色土　しまり、粘性とも強。黄褐色土（10YR5/6－地山か？）が50%混入。
3　10YR3/4：褐色土　しまり、粘性とも強。炭化物粒子が1%混入。
4　10YR3/3：暗褐色土　しまり、粘性とも強。黒褐色土（10YR2/1－1層）が、小ブロック状に30%混入。
5　10YR3/4：褐色土　しまり、粘性とも強。地山・炭化物粒子1%混入。
6　10YR3/4：暗褐色土　しまり、粘性とも強。暗褐色土（10YR3/3）が50%混入。地山粒子φ10mm、焼土粒子φ10mmが5%混入。
7　10YR5/6：黄褐色土　しまり、粘性とも非常に強。炭化物粒子1%混入。崩壊土。
8　10YR3/4：褐色土　しまり、粘性とも強。地山、炭化物粒子10%混入。
9　10YR5/6：褐色土　しまり、粘性とも強。地山土が小ブロック状（φ2～3mm）に30～40%、炭化物粒子が5%混入。
※⑤・⑦～⑨は、しまり、粘性とも大変強く、地山が主体と思われる黄褐色系の明るい土色を呈す。

SK52
1　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。地山ブロックを多量に含有（10YR5/6黄褐色土）炭化物φ1mmを2%含む。



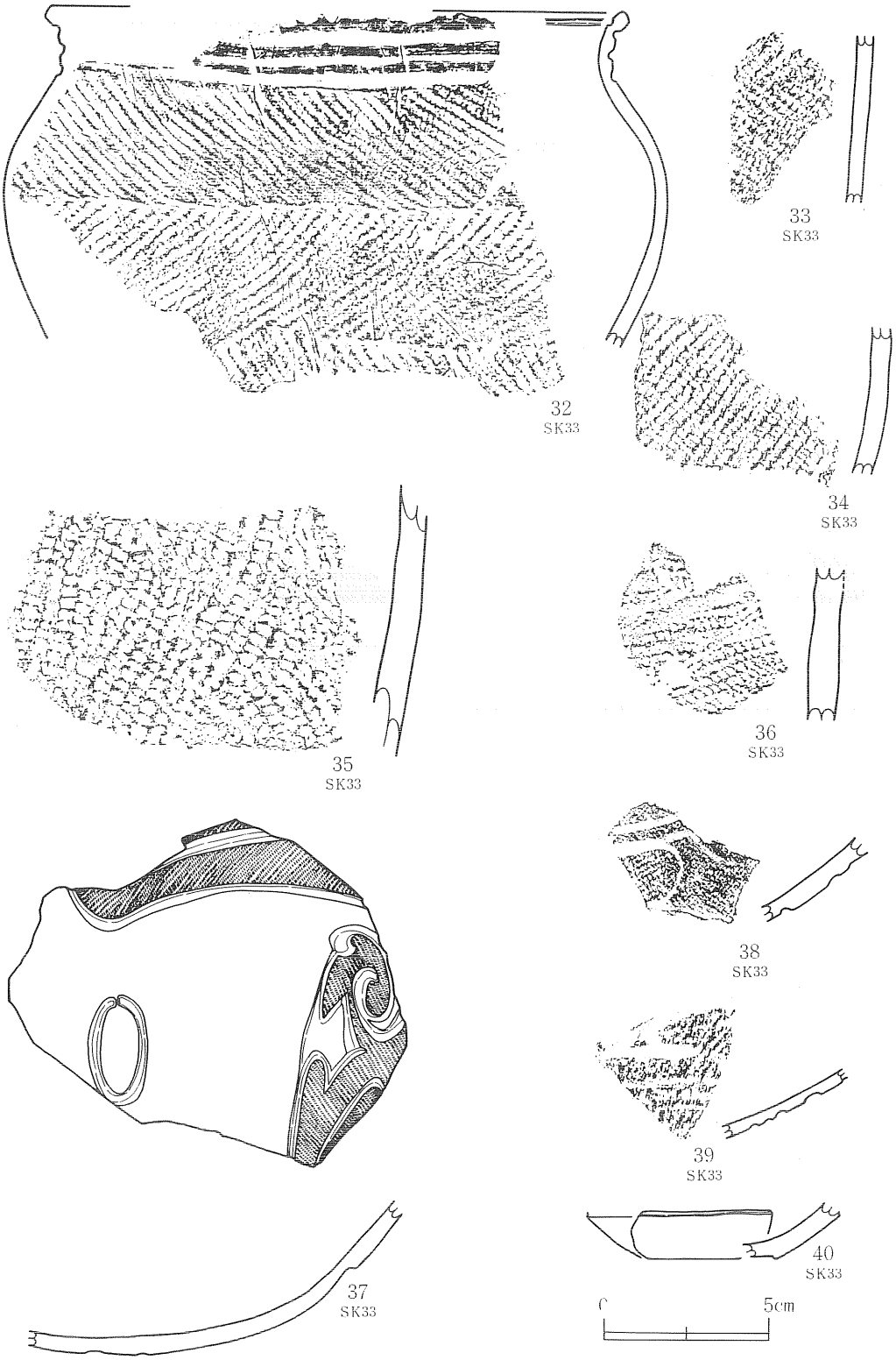
第12図　SK19土坑、SK41土坑、SKP52ピット



SK33

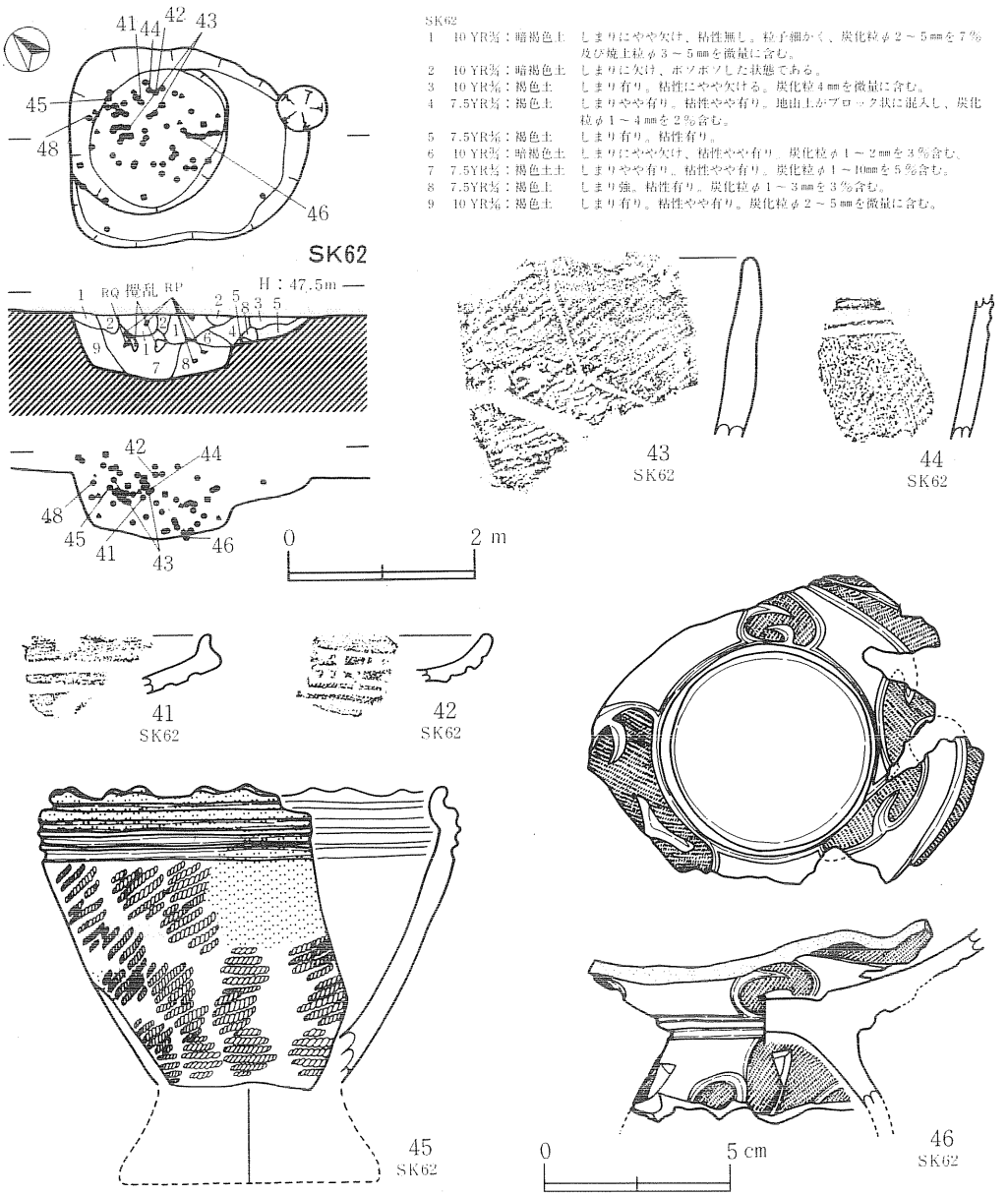
1　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し、しまりやや欠ける。炭化物1～7mmを2％、褐色粒φ1mmを5％含む。
2　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり無し。ボソボソした状態である。炭化物φ1～3mmを2％、褐色粒φ1mmを2％含む。
3　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。ややしまりに欠ける。炭化物φ2～5mmを2％、焼土ブロック(5YR5/6赤褐色)φ10～20mmを若干含む。
4　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。焼土粒φ2～5mmを1％、炭化物φ1～7mmを3％含む。
5　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ2～3mmを1％、褐色粒φ1mmを5％含む。
6　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。地山ブロックを5％含む。
7　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ1～5mmを1％、褐色粒φ1mmを10％含む。
8　10YR5/3：褐色土　地山ブロックである。
9　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。炭化物φ1～10mmを3％、焼土粒φ1mmを若干、小礫10mmを若干含む。
10　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ1～5mmを2％、褐色粒φ1～2mmを5％含む。
11　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1mmを若干含む。
12　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ1mmを若干含む。
13　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干、しまり有り。地山ブロックが多量に混入。
14　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。炭化物φ1mmを若干、地山ブロックを若干含む。
15　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ1mmを若干、地山ブロックを若干含む。
16　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ1～5mmを2％含む。
17　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり無し。炭化物がブロック状に50％混入。
18　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性なし、しまり有り。炭化物φ1～3mmを1％含む。
19　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ2mmを1％、焼土粒φ2mmを若干、地山ブロックを10％含む。
20　10YR5/3：褐色土　地山ブロックである。
21　10YR5/3：褐色土　地山ブロックである。

第13図　SK33土坑



第14図　SK33土坑出土遺物

27・32は、胴部上部が張り口縁が外反する深鉢形土器である。台付の可能性もある。口縁部内面には１条の沈線がめぐり、口唇には突起とキザミが施され、勁部に横位の３～４本の沈線がめぐる口縁部文様体をもつ。32の胴部には、同一原体の施文方向を縦と横に組み合わせて非結束羽状縄文が施文される。33は32と同一個体の胴部下半の破片である。28・29はSK41土坑周辺で出土した第12図26と同様な小型の台付深鉢形土器と思われる。28の口縁部文様は27や32と同じである。29は4条の細い沈線が横位にめぐり、その間にキザミが入る。37・38・39は浅鉢形土器である。いずれも沈線で雲形文が描かれ、細かい縄文が充塡されている。37は丸底風で



第15図　SK62土坑

あるが、底部の中心にあたる部分には沈線で楕円が描かれている。部分的に赤色顔料が残っており、本来は全面に赤色顔料が塗られていたと思われる。40は浅鉢形土器の底部である。胴部下半を横位にめぐる沈線部分で欠損している。

SK62土坑（第15図、図版７・25）

KN47・48、KM48グリッドで検出した。上端の平面形は長軸約１m30cm、短軸約１mの不整方形で、その北側に径約80cmの円形の掘り込みがある。上段までの深さは約15cm、底面までは約35cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。段の底面は外側に向かってゆるやかに上がり、上端部付近で再びほぼ垂直に立ち上がる。埋土中には全体に炭化物粒が含まれ、上部では焼土粒も混じる。堆積は人為的であると思われる。埋土中からは多量の遺物が出土したが、いずれも破片で、完形または全体の形が復元できるものはない。

41・42は浅鉢形土器である。41は口唇部がくの字形に内傾し沈線がめぐる。42は口縁部に羊歯状文が施され口唇が若干内湾する。45は小型の台付深鉢形土器である。口唇部にB突起をもち口縁部には4条の平行沈線が横位にめぐる。外面にはススが多量に付着している。底部と台部は接合面で剥離している。44も同一の器形文様であると思われる。46は台付浅鉢形土器で、台部には３ヶ所にスカシが入る。胴部上半の文様と台部をつなぐ雲形文は２単位で、その他に１ヶ所異なるモチーフが入る。全体に赤色顔料が塗られている。SK63土坑から出土した浅鉢形土器の破片（第16図48）の一部がSK62土坑から出土し接合した。

SK63土坑（第16図、図版７・25）

SK62土坑の北西約１mのKM48グリッドで検出した。平面形は長径約１m32cm、短径約1cmの楕円形で、北側にさらに１段径約80cmの円形の掘り込みがある。上段までの深さは約20cm、底面までは約32cmである。底面は平坦で壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。上段の平坦面から上端に向かってさらに垂直に立ち上がっているが、北側は段をもたず底面からゆるく傾斜して立ち上がる。埋土中には全体に焼土粒と炭化物粒が混じっている。遺物は埋土中に縄文土器破片が多く含まれていたが、完形のものや全体の形が判明するものはない。

47～49は浅鉢形土器である。横位に２～３本の沈線がめぐり、48・49はその下に細かい縄文の充塡される雲形文が描かれている。50は台付深鉢形土器である。内湾したのち外反ぎみに立ち上がる短い口縁をもち口縁部下には沈線の間にキザミ、胴部には雲形文が施されている。

SK62土坑とSK63土坑は規模、形態、埋土の状態、遺物出土状況が類似し、48のように双方から出土した破片が接合する。したがってこの２基の土坑は同じ性格の土坑で構築廃絶も同時期であったと考えられる。また、遺物の接合関係はなかったがSK33土坑も規模、埋土の状態、遺物出土状況が類似しており同じ性格の土坑であると思われる。

SK34土坑（第17図、図版７・25）

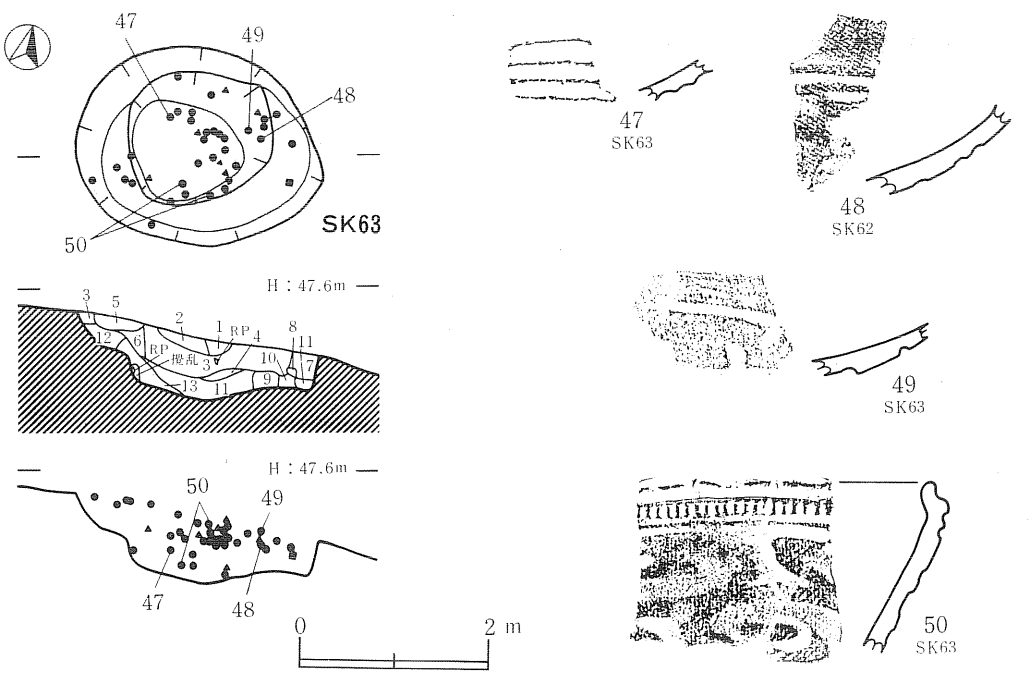
SK33・35土坑、SKP40ピットに接近してKM45グリッドで検出した。平面形は径約45１mの不整方形で深さは約22cmの小型の土坑である。埋土中から深鉢形土器が出土した(51)。口縁部が外反し肩が張る器形で、口縁内面には１本の沈線が横位にめぐる。口唇部にはキザミ、その下には両端が鉤形に曲がる短い沈線を横位に組み合わせて２段、その下に沈線が３本めぐる。胴部はＬＲ縄文である。

SK35土坑（第17図）

KM44グリッドで検出した。平面形が径約45cmの不整方形で深さは約16cmである。近接するSK34土坑と規模、形態が似ている。遺物は出土しなかった。

SK53土坑（第17図）

KO46グリッドで検出した。平面形は径約45cmの円形で深さは約32cmである。埋土中からは縄文土器破片が4点とフレークが1点出土した。



SK63
1　10YR3/2：黒褐色土　しまり有り。粘性無し。炭化粒φ２～４mmを７%含む。
2　10YR3/3：暗褐色土　しまり有り。粘性無し。炭化粒φ１～４mmを５%、焼土粒φ２mmを微量含む。
3　10YR3/3：暗褐色土　しまり有り。粘性やや有り。焼土粒φ１～４mmを３%含む。
4　10YR3/3：暗褐色土　しまり強。粘性あり。黄褐色土が混入。炭化粒φ２～５mmを微量含む。
5　10YR3/3：暗褐色土　しまりに欠け、ボソボソした状態。粘性無し。炭化粒φ１～２mmを微量含む。
6　10YR3/3：暗褐色土　しまりに欠ける。粘性やや有り。炭化粒φ２mm、焼土粒φ２mmを微量すつ含む。
7　7.5YR3/4：褐色土　しまり、粘性ともやや欠ける。暗褐色土が多量に混入。炭化粒φ１～２mmを微量含む。
8　10YR3/3：暗褐色土　しまり有り。粘性やや有り。炭化粒φ２mm、焼土粒φ２mmを微量すつ含む。
9　10YR4/6：褐色土　しまり有り。粘性有り。
10　10YR3/4：褐色土　しまり有り。粘性有り。暗褐色土の混入が微量認められる。
11　7.5YR3/4：褐色土　しまり強。粘性有り。明褐色土の混入が認められる。炭化粒φ２～５mmを３%含む。
12　7.5YR3/4：褐色土　しまり、粘性ともやや欠ける。暗褐色土が多量に混入。炭化粒φ１～２mmを微量含む。
13　7.5YR5/6：明褐色土　しまり強。粘性有り。暗褐色土の混入が微量認められる。炭化粒φ１～２mmを微量含む。

0　5 cm

第16図　SK63土坑

SK70土坑（第17図）

SK47土坑、SKP46・77ピットと近接してKJ46グリッドで検出した。平面形は径約32cmの不整円形で深さは約23cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK45土坑（第17図、図版25）

SI37竪穴住居跡の北側に近接してKK45グリッドで検出した。平面形は径約33cmの円形で深さは約26cmである。細かいＬＲ縄文の施文された小型深鉢形土器の胴部破片（52）が埋土中から出土した。

SK44土坑（第18図、図版8）

KJ44グリッドで検出した。平面形は長径約１m22cm、短径約95cmの楕円形で深さは約20cmである。南東側にはSK39土坑が隣接する。SK44土坑とSK39土坑の接する部分に木根による撹乱と思われるピットがあり、切り合い関係は不明である。底面は平坦であるが南東側に若干傾斜している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中からは縄文土器破片が10点出土した。53の深鉢形土器口縁部は、SK39土坑の埋土中から出土した破片と接合した。

SK39土坑（第18図、図版8）

KJ44グリッドのSK44土坑の南東側で検出した。南側半分は調査区外で全体の形状は不明だが、推定長径約80cm、短径約50cmの楕円形の土坑になると思われる。確認面からの深さは約20cmであるが、調査区境界の壁面の土層では、基本層位の３層上面から掘り込まれており、掘り込み面からの深さは約27cmである。底面は２段になっており、土坑中央部が一段低い。埋土中からは縄文土器破片が4点出土した。

SK47土坑（第18図）

SK70土坑、SKP46・77ピットと近接してKJ45グリッドで検出した。径約20～25cm、深さ45～48cmの２本のピットを囲んで、径約65cm、深さ約15cmの不整円形の掘り込みがある。埋土中から縄文土器細片が１点出土した。

SKP77ピット（第19図）

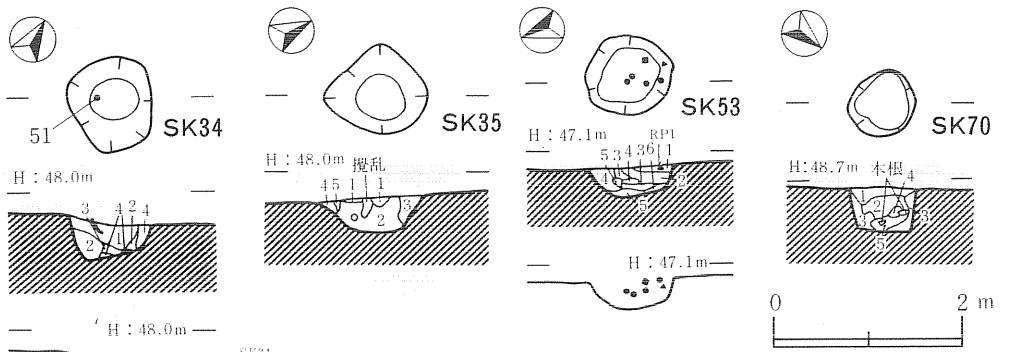
SKP46ピット、SK47・70土坑と近接してKK45グリッドで検出した。径約42cm、深さ約44cmである。遺物は出土しなかった。

SKP46ピット（第19図）

SK47・70土坑、SKP77ピットと近接してKJ46グリッドで検出した。径約30cm、深さ約50cmである。確認面で縄文土器破片が１点出土した。

SKP40ピット（第19図、図版25）

SK33・34・35土坑に近接してKM45グリッドで検出した。径約25cm、深さ約28cmである。確

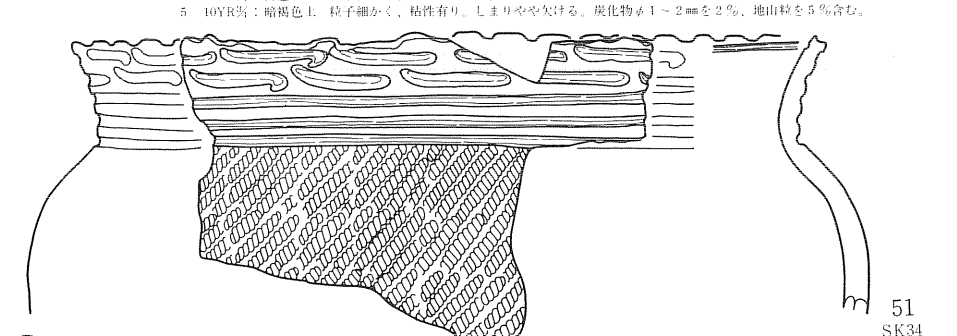


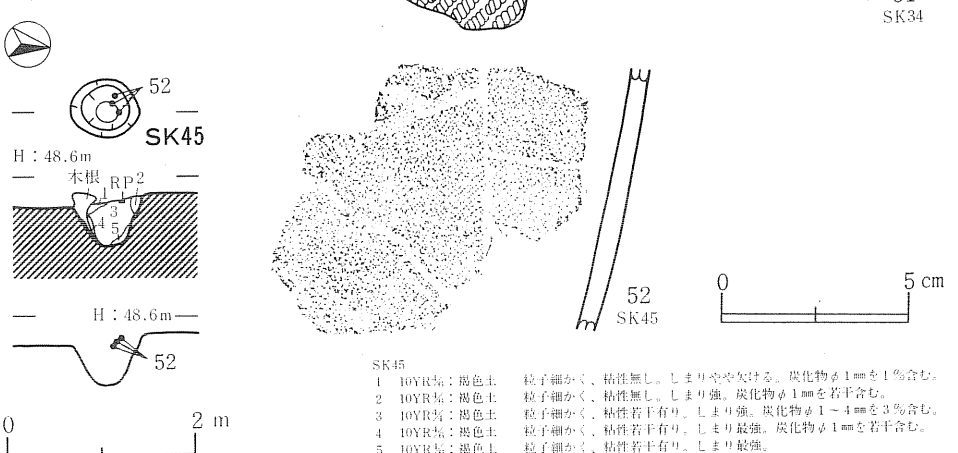
SK34
1　10YR5/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりあり。炭化物φ１～３mmを２%、褐色粒を10%含む。（遺物出土）
2　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ１～２mmを１%、地山ブロック状に若干含む。
3　10YR5/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。かなりしまりあり。
4　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。かなりしまり有り。
　　地山ブロック。粒子細かく、粘性若干有り。しまりかなり有り。

SK35
1　10YR5/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性なし。しまり有り。褐色粒φ１mmを10%含む。
2　10YR5/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性なし。しまり有り。炭化物φ１～２mmを１%、褐色粒φ１mmを10%含む。
3　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性なし。しまり強地山ブロックを多量に含む。
4　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性なし。しまり強褐色粒φ１mmを20%含む。
5　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性なし。しまり強。

SK53
1　10YR5/3：暗褐色土　しまり有り。粘性無し。粒子細かく炭化粒φ１mmを１%未満含む。
2　10YR5/4：褐色土　しまり有り。粘性無し。粒子細かく炭化粒を微量含む。
3　10YR5/4：褐色土　しまり有り。粘性やや有り
4　10YR5/4：黄褐色土　しまり有り。粘性やや有り。黒色土の混入が微量に見られる。
5　10YR5/4：黄褐色土　しまり有り。粘性有り。黒色土の混入が見られる。
6　10YR5/4：黄褐色土　しまり有り。粘性有り。

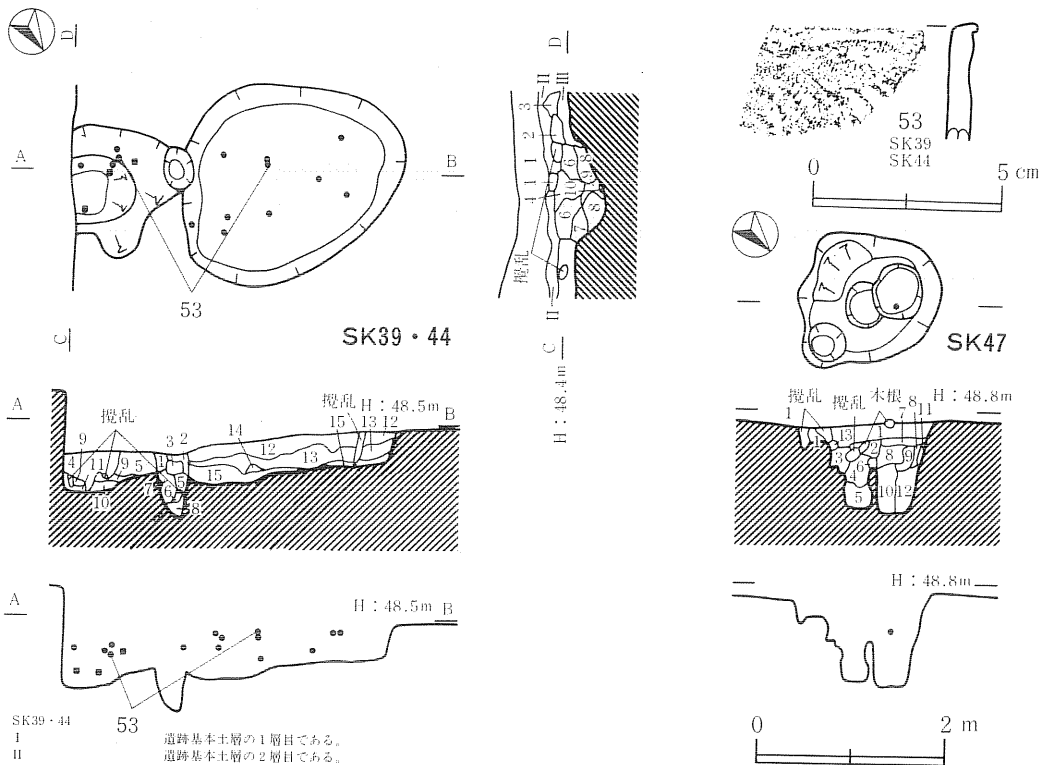
SK70
1　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１mmを若干含む。
2　10YR5/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～10mmを20%、地山粒φ１mmを10%含む。
3　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１mmを若干含む。
4　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ１mmを２%、地山粒を20%含む。
5　10YR5/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまりやや欠ける。炭化物φ１～２mmを２%、地山粒を５%含む。





SK45
1　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。炭化物φ１mmを１%含む。
2　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１mmを若干含む。
3　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～４mmを３%含む。
4　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり最強。炭化物φ１mmを若干含む。
5　10YR5/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり最強。
　※４と５は崩壊土か？

第17図　SK34土坑、SK35土坑、SK53土坑、SK70土坑、SK45土坑



SK39・44

I　遺跡基本土層の1層目である。
II　遺跡基本土層の2層目である。
III　遺跡基本土層の3層目である。

1　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり弱。炭化物φ1㎜を1％含む。
2　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり弱。褐色粒φ1～5㎜を5％含む。
3　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや有り。褐色粒φ5～6㎜を20％含む。
4　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり欠ける。炭化物φ1㎜を若干、褐色粒、地山粒を3％含む。
5　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ1㎜を1％含む。
6　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりかなり有り。炭化物φ1～2㎜を3％含む。
7　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物無し。
8　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ1㎜を若干含む。壁崩壊による褐色土がブロック状に50％混入。
9　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり無し。炭化物を若干含む。
10　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1㎜を1％含む。
11　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。
12　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1㎜を1％含む。
13　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ1㎜を若干含む。
14　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ2㎜を若干含む。
15　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。

Pit

1　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。炭化物φ1㎜を若干含む。
2　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり無し。地山粒・炭化物φ1㎜を1％含む。
3　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり無し。地山粒・炭化物φ1㎜を3％含む。
4　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。地山粒を10％含む。
5　10YR3/3：褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。地山粒を10％含む。
6　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり無し。地山粒を20％含む。
7　10YR3/3：褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり無し。地山粒を80％含む。
8　堀り過ぎ

SK47

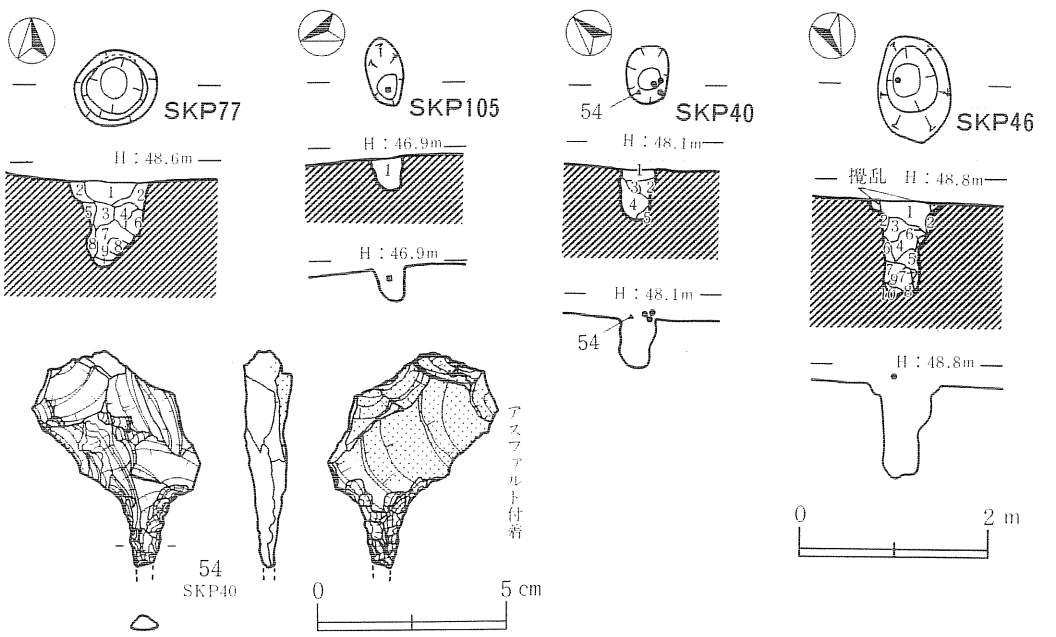
1　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ1～2㎜を1％含む。
2　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。炭化物φ1～7㎜を2％、焼土粒φ1～5㎜を若干（5YR5/8赤褐色）、褐色粒を5％含む。
3　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1～4㎜を4％、褐色粒を5％含む。
4　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1～10㎜を10％、焼土粒φ1～10㎜を1％、地山ブロックを10％含む。
5　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ1～7㎜を4％、地山ブロックを20％含む。
6　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ1㎜を若干、地山ブロックを10％含む。
7　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1㎜を2％含む。
8　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1～3㎜を2％、焼土粒φ6㎜を1％、地山ブロックを1％含む。
9　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ1㎜を若干、焼土粒を若干含む。
10　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ1㎜を1％含む。
11　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ1㎜を1％含む。
12　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ1㎜を2％、焼土粒φ1㎜を若干、地山ブロックを5％含む。
13　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。（崩壊土）

第18図　SK39土坑、SK44土坑、SK47土坑

認面で縄文土器破片が３点、石錐が１点出土している。54は楕円形のつまみが錐部に斜めにつく石錐である。つまみ部の両面に２次加工を施し、素材剥片の鋭い縁辺をすべて打ち欠いている。錐部の先端は折損し、つまみ部の片面のほぼ全面にアスファルトが付着している。

SKP105ピット（第19図）

SK43土坑に近接してKO46グリッドで検出した。径約20cm、深さ約18cmの小さいピットである。埋土中には焼土粒がブロック状に混じっている。遺物は出土しなかった。



SKP77
1　10YR3/2：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～10mmを２％含む。
2　10YR4/6：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～２mmを１％含む。
3　10YR4/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～５mmを10％、地山粒を10％含む。
4　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ２～10mmを１％、地山粒を10％含む。
5　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１～２mmを２％含む。
6　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。
7　10YR3/4：暗褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。炭化物φ２～５mmを20％、地山粒を10％含む。
8　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまりやや欠ける。炭化物φ２～４mmを２％、地山粒を10％含む。
9　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性強。しまり有り。炭化粒φ２mmを１％含む。

SKP105
1　7.5YR4/6：褐色土　しまりにやや欠ける。粘性なし。粒子やや粗く、地山土に焼土がブロック状に多量に混入、炭化粒φ１～２mmを微量に含む。

SKP40
1　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１mmを若干含む。
2　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ２～３mmを１％含む。
3　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。炭化物φ１mmを１％含む。
4　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ３～４mmを２％、地山ブロックを10％含む。
5　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。壁崩壊の地山土である。

SKP46
1　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１～２mmを１％、焼土粒φ３mmを２％含む。
2　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１mmを１％含む。
3　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ１～３mmを１％、地山ブロックを10％含む。
4　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり最強。炭化物φ２～６mmを３％、地山ブロックを20％含む。
5　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり最強。炭化物φ１～２mmを２％、焼土粒φ１mmを若干、地山粒５％含む。
6　10YR4/6：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ１mmを１％、焼土粒φ２mmを若干含む。
7　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性中。しまり強。炭化物φ１～８mmを１％、焼土粒φ１mmを１％、地山粒20％含む。
8　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性強。しまり強。焼土粒φ１mmを若干含む。
9　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性強。しまり強。炭化物φ１～３mmを10％、焼土粒φ１～２mmを２％、地山粒20％を含む。
10　10YR4/4：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり最強。炭化物φ１mmを若干、地山粒を２％含む。

第19図　SKP77ピット、SKP105ピット、SKP40ピット、SKP46ピット

2. 遺構外出土遺物

(1) 土器（第20～46図、図版27～33）

遺構外出土土器は時期毎に次のように群別する。

第Ⅰ群　縄文時代前期

第Ⅱ群　縄文時代中期

第Ⅲ群　縄文時代後期

第Ⅳ群　縄文時代晩期

第Ⅴ群　弥生時代後期

第Ⅰ群土器はすべて深鉢形土器である。第Ⅴ群土器は注口土器１点を除いてすべて甕形土器である。これらは文様によって類別する。第Ⅱ群土器と第Ⅲ群土器はほとんど深鉢形土器であるが、数量が少ないので類別しないで記述する。第Ⅳ群土器は器種別に記述する。

第Ⅰ群土器：縄文時代前期の土器（第30～32図、図版27～30）

第Ⅰ群土器で器形が判明したのは復元できた55のみで、他はすべて破片である。第Ⅰ群土器は器面に施文された最も主要な文様（地文）の種類によって６類に分類し、口縁部、胴部、底部の各部位に施文された、地文以外の文様（装飾文）によって以下の基準に従って細別する。

《分類基準》

◎　地文

１類　半截竹管又は棒状工具による連続刺突文

２類　斜縄文

３類　結束羽状縄文

４類　非結束羽状縄文

５類　ループ文

６類　組紐文

◎　口縁部装飾文

a.　棒状工具又は半截竹管によるキザミ

b.　撚紐原体閉端刺突

c.　指頭押圧

d.　撚紐原体側面押圧

e.　撚紐原体回転押圧

f.　なし

◎　胴部装飾文

（ア）　コンパス文

（イ）　撚紐原体閉端の刺突又は押圧

（ウ）　綾絡文

（エ）　ドングリ圧痕

（オ）　なし

◎　底部装飾文

A　棒状工具又は半截竹管による同心円状キザミ

A′　半截竹管による平行押引文

B　撚紐原体閉端刺突

C　棒状工具先端刺突

C′　沈線文

D　なし

第１類：半截竹管または棒状工具によって横位に連続刺突文が施文される土器で、１つの刺突がある程度幅をもち、刺突と刺突の間がやや開くもの(55～58・62～65・68～73)、細い刺突が間隔をあまり置かずに連続するもの（59～61・66・74・75)、刺突を加える毎に施文原体を器壁から離さず、連続刺突を行うことにより押引文が施文されるもの（67・76）の3種類がある。68と77以外は胎土に繊維を含まず細粒砂を多く含む。器壁はザラザラしていてもろい。68と77は胎土に繊維を含み焼成は良好である。(第20図55～76)

口縁部

１a：(第20図55～61、図版28)

55～61はいずれも口唇に胴部と同様のキザミが施される。

胴部

１(ア)：(第20図68～73、図版28)

68～73は連続刺突文の間に半円を交互に組み合わせて連続させたコンパス文が横位にめぐるものである。71・72から推測すれば、コンパス文が多段に連続して器面を埋めていくのではなく、器面に施文された連続刺突文の間を横位の帯状にコンパス文がめぐるようである。

１(オ)：(第20図62～67、図版28)

62～65は連続刺突文のみが施文された破片で、67は半截竹管による押引文である。

底部

1A：（第20図74・75、図版28）

74・75は平底で胴部下端に横位に連続刺突がめぐり、さらに底面にも同一原体による連続刺突が同心円状に施文される。

1A′：（第20図76、図版28）

76は丸底風の平底で、底面が肥厚し乳頭状に突出する。底部の側面には、胴部から続いていたと思われる半截竹管押引文がめぐる。この押引文が底面には6条平行に施文されている。

第2類：撚紐原体を同一方向に回転させた斜縄文が施文される土器で、原体の種類は多様である。撚紐原体の閉端を刺突するものもある。胎土には繊維を含み、焼成はおおむね良好で堅緻である。（第21図77～94・第22図100・第23図102～112・114・第24図121・123・第25図120・128～140・第26図143～第28図172・第29図175～191・193～204・第32図231～235・239～243・246・247・249・250）

口縁部

2a：（第21図77～81、図版28）

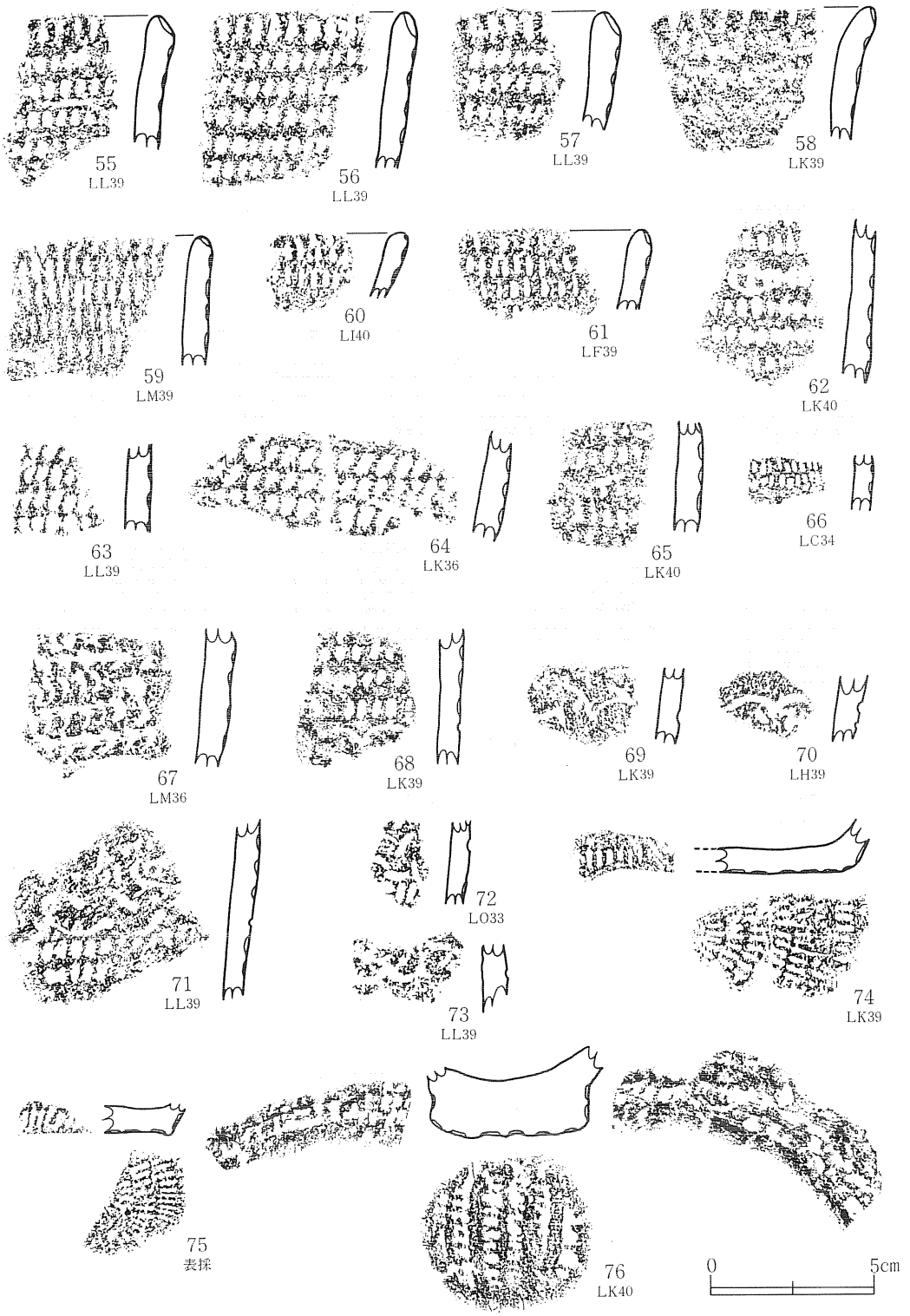
77～79は口唇部に細い棒状工具の側面を連続して押しあててキザミをつけたものである。80はやや太めの棒状工具の先端を連続して斜めに押し当てている。81は細い棒状工具の先端を斜め上方から器面に平行に連続して突き刺している。78・80は口唇部が平坦に面取りされ、80のキザミは、77・79と同様に器表面側から口唇部の表面側をつぶすように施されているが、78は平坦な口唇部上面に施される。78は口縁の一部が山形に突出している。81は胎土に極細粒砂を多く含む。77は0段多条の単節RL縄文、78・79はRLR、80はLRL、81は0段がℓのLRL複節斜縄文である。

2b：（第21図82～92、図版28）

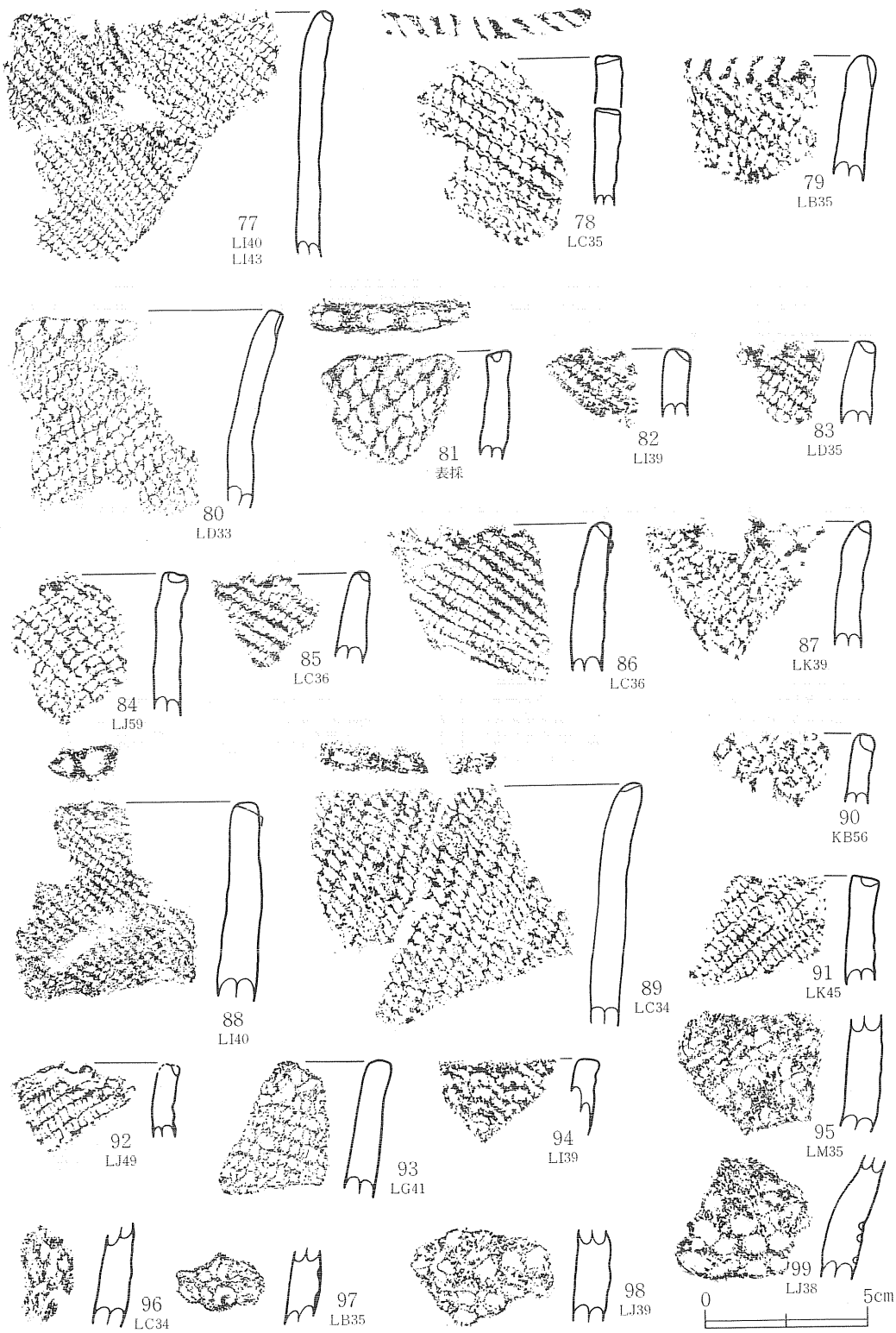
81・83・84・91は平坦な口唇上に撚紐原体の閉端を連続して突き刺している。82・83・85～88・90は丸みを帯びる口唇に外側から斜めに刺突したものである。89は器内面側から口唇端にかけて刺突が加わる。82・86～90は刺突をやや斜め方向から加えて、指頭押圧痕のように大きく凹ませている。刺突に用いた撚紐原体は、胴部に施文されている地文の原体と同一のものと思われる。82～89・91・92は0段多条の単節斜縄文で、82～88がRL、89・91・92がLRである。90はRLRの複節斜縄文である。

2c：（第22図・第23図104～112、図版28）

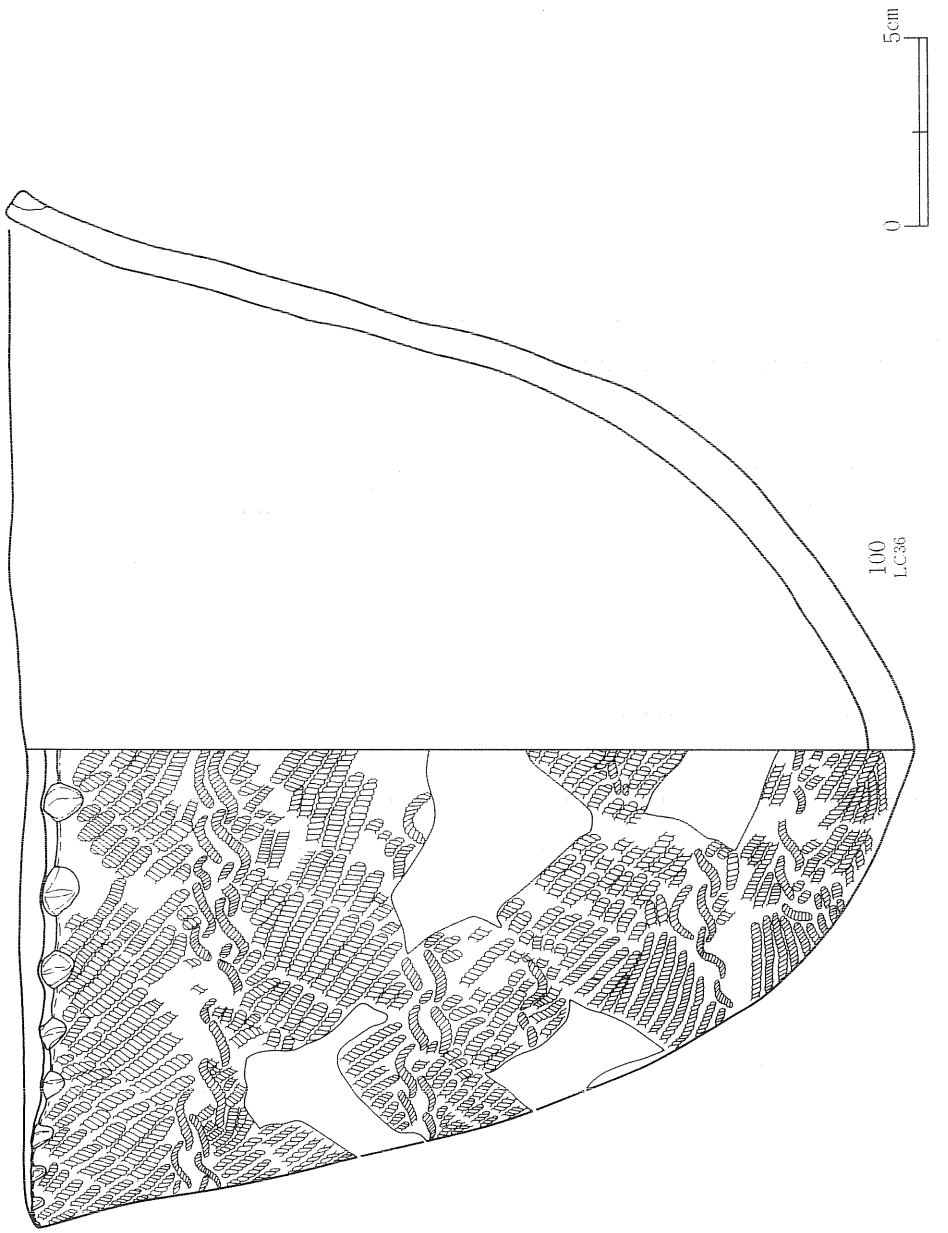
100は口径27.2cm、器高23.6cmの尖底深鉢形土器である。胴部下半がやや膨らみ、口縁部が外反気味に立ち上がる。胎土には繊維を含み、焼成は良好である。口唇は平坦に面取りされているが、ヘラ状工具でそぎ落としたものではなく、丸みを帯びる部分もある。内面には成形時の



第20図　遺構外出土土器(1)（第Ⅰ群）



第21図　遺構外出土土器(2)（第Ⅰ群）



第22図　遺構外出土土器(3)（第Ⅰ群）

指頭押圧痕が若干残るがほぼ平滑である。口唇部外側から指頭押圧によるキザミが付けられている。文様は全面に0段多条のRL縄文が施文されているが、途中に2条1組の綾絡文が横位に5段めぐる。しかし全周を完結しているのは上の2段までで、下3段はいずれも全周せず途中で途切れている。105は平坦な口唇部の真上から口唇端部全体を凹ませる指頭押圧を隣接して規則的に行い、口唇部を鋸歯状にしている。109・112は表裏両面から指頭押圧を加え、その部分の端部が山形に薄くなっている。111は平坦な口唇部上に浅い指頭押圧を加えている。胎土には繊維を含む。104・110は胎土に多量の極細粒砂を含んでいる。104～110は0段多条の単節斜縄文で、104～109はRL、110はLRである。111・112は0段がℓのLRL複節斜縄文である。

2d:（第23図114～116・第24図117、図版28）

114は撚紐原体の側面を山形に突出した口縁の口唇部にほぼ垂直方向に連続して押圧している。115・117は器表面に平行に近い角度でやや斜めに口唇部に撚紐原体の側面を押圧する。116は面取りして平坦な口唇の上面に浅く撚紐原体の側面圧痕がある。いれずも胎土には繊維を含み、焼成は堅緻である。114・115は0段多条のRL単節斜縄文、116は0段がℓで多条のRL単節斜縄文、117はLRL複節斜縄文である。

2e:（第24図118～121、図版28）

いずれも口唇端を平坦に面取りし、その上面に撚紐原体を回転施文する。118・119は胎土に繊維を多く含む。120・121は同一個体で、胎土には繊維とともに多量の細粒砂を含む。118・120・121はRLR、119はLRLの複節斜縄文である。

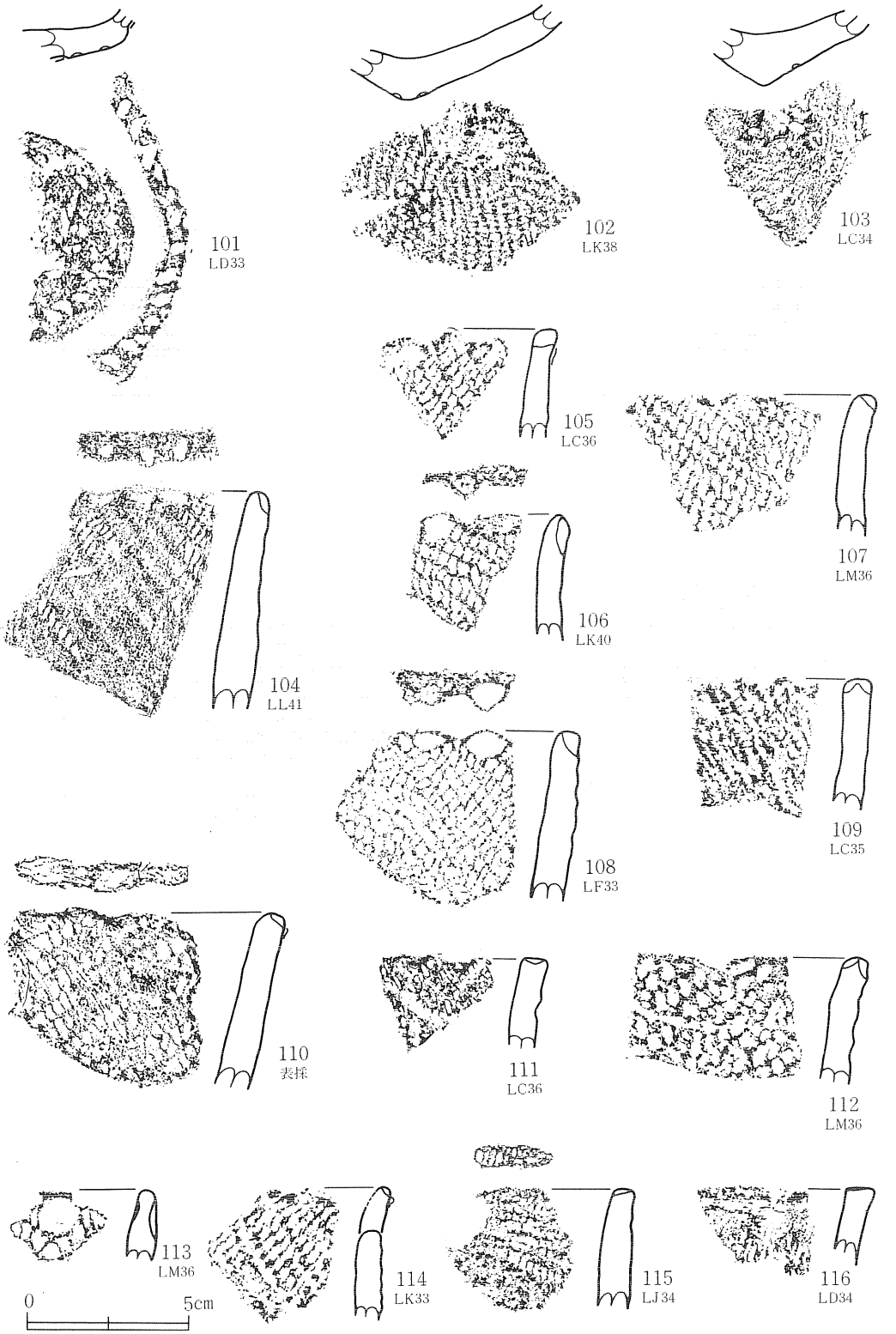
2f:（第21図93・94・第24図123～125・第25図126・128～140・第30図195、図版28～30）

口唇部にキザミ等が施されないものである。口唇の形状は平坦に面取りされるもの（93・94・124・129・130・136・137・140）と、丸みを帯びるものとがある。94・123～126・128～130・195は単節斜縄文で、123・126が0段多条のRL、124・125は0段多条のLR、94・128はRL、129・130・195はLRである。93・131・135はRLR、132～134はLRLの複節斜縄文で、135は0段がrである。136・137は0段がrの多条で、2段を反撚り、3段で正撚りにするRLLの複節斜縄文である。93・94には撚紐原体端部による刺突が施されている。195は綾絡文が施される。138の施文原体は、RとLの1段の撚紐をLの撚りで合わせ撚りにし、さらにRに撚ったものである。全破片中、1点のみの出土である。139は無節斜縄文である。140は単節のRL縄文であるが、0段がℓで撚りがゆるいため1本置きに深い条と浅い条が現れる異条縄文である。125、126、131、135は、胎土に極細粒砂を多く含み器壁がもろい。他は繊維を多く含み、堅緻である。

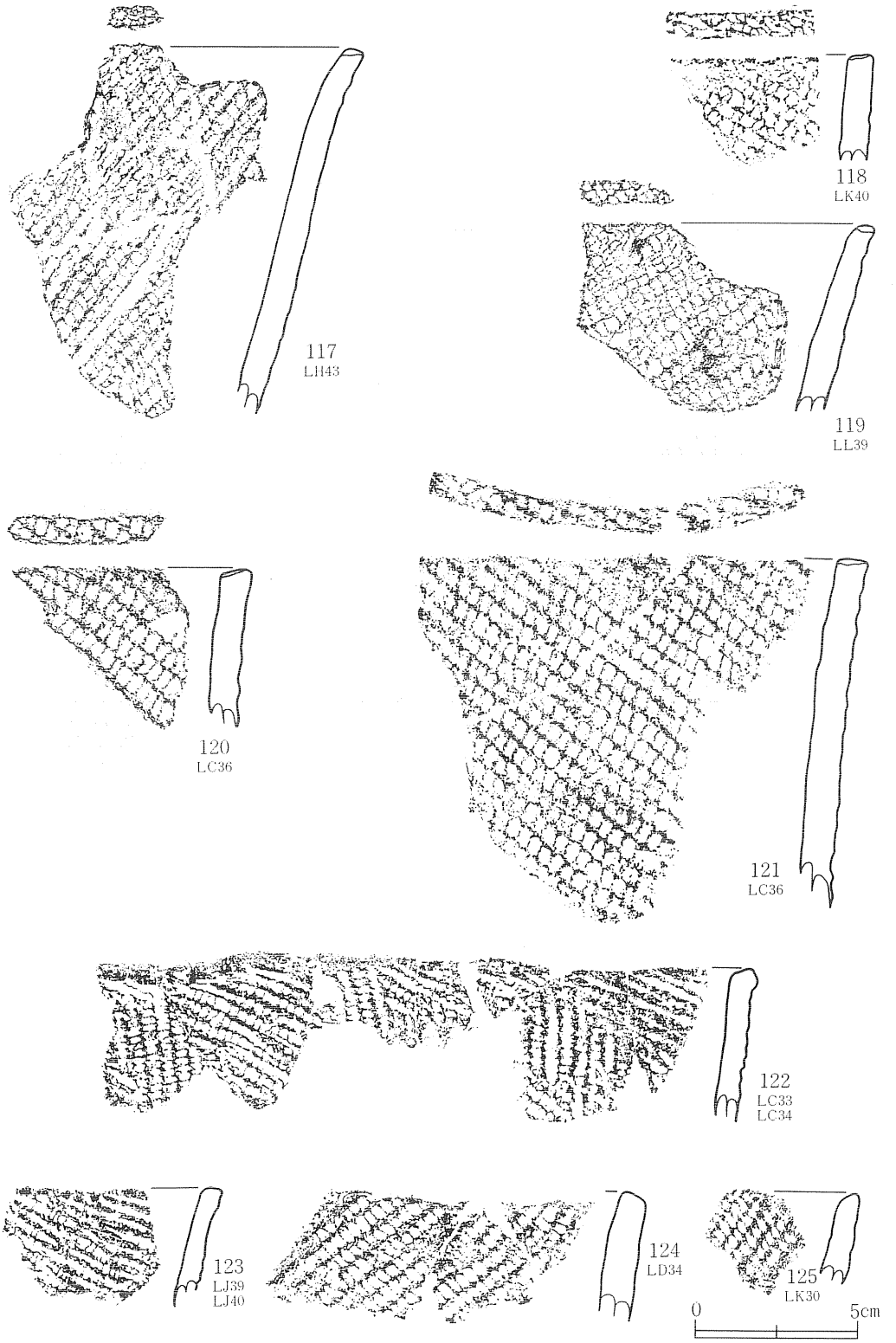
胴部

2（イ）:（第21図93～95、図版28）

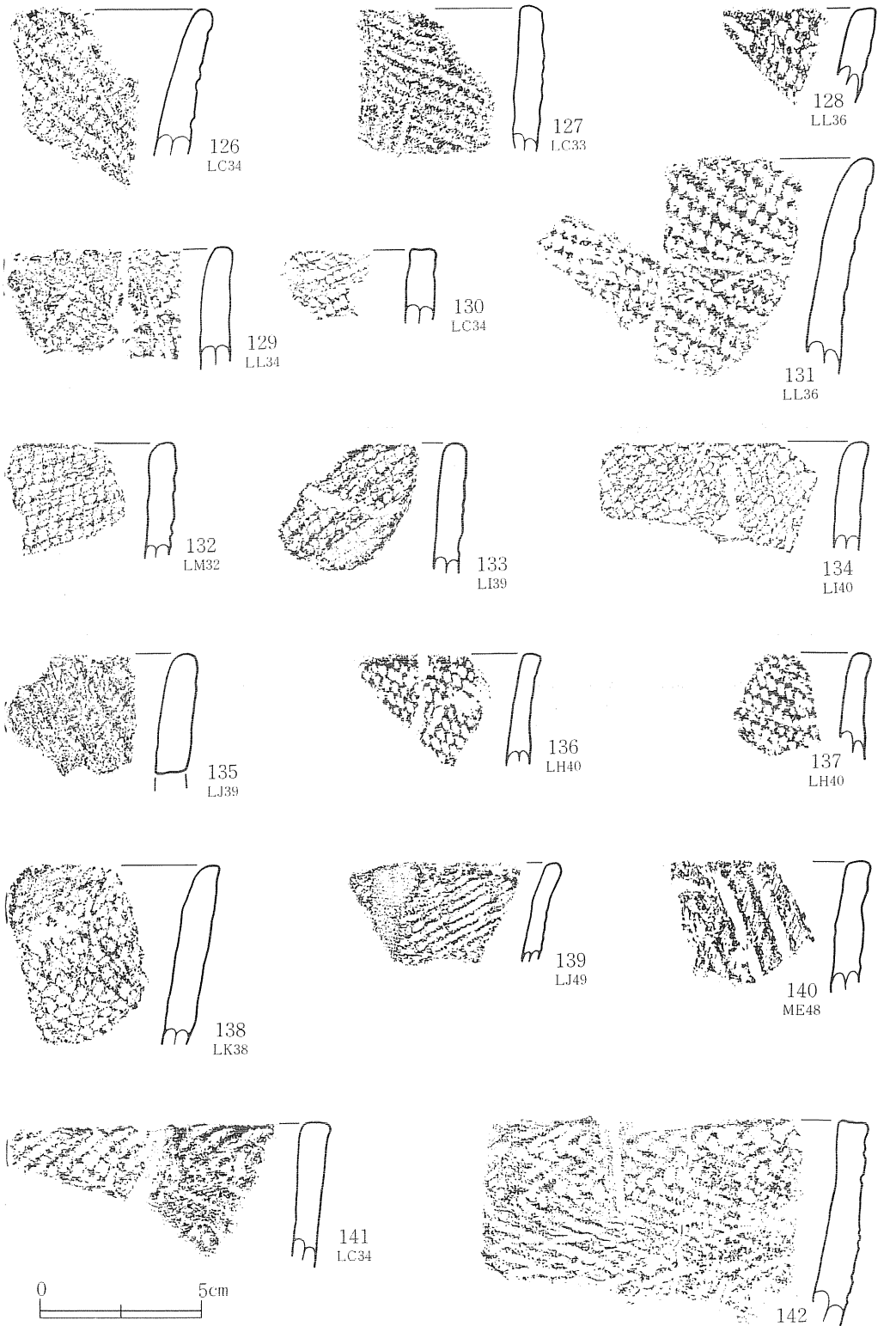
斜縄文の上から撚紐原体の閉端による刺突を加えるものである。93は全体にRLR複節斜縄文



第23図　遺構外出土土器(4)（第Ⅰ群）



第24図　遺構外出土土器(5)（第Ⅰ群）



第25図　遺構外出土土器(6)（第Ⅰ群）

が施文され、口唇直下に同一原体の閉端による刺突が横位に連続して施される。94はRL単節斜縄文の上から撚紐による馬蹄形の刺突が縦方向に重ねて並べられ、それが列となって全体をめぐるようである。95はLR単節斜縄文の上から撚紐による馬蹄形の刺突が施されている。いずれも胎土に繊維を多く含む。

2（ウ）:（第22図100・第30図195～204、図版30）

100・196～200は、2本1組の綾絡文が施される。203は4本以上の綾絡文が施されている。195・202はLR、100・196～201・203はRLの単節斜縄文で、100・197・202は0段多条である。204は無節のL斜縄文である。

2（エ）:（第32図231・234・235、図版30）

231は裏面、234・235は表面にドングリの実を押しあてたものと思われる楕円形や円形の凹みがついている。いずれも焼成前につけられた圧痕である。231はLR、234はRLでいずれも0段多条である。235はRRの反撚りの原体である。

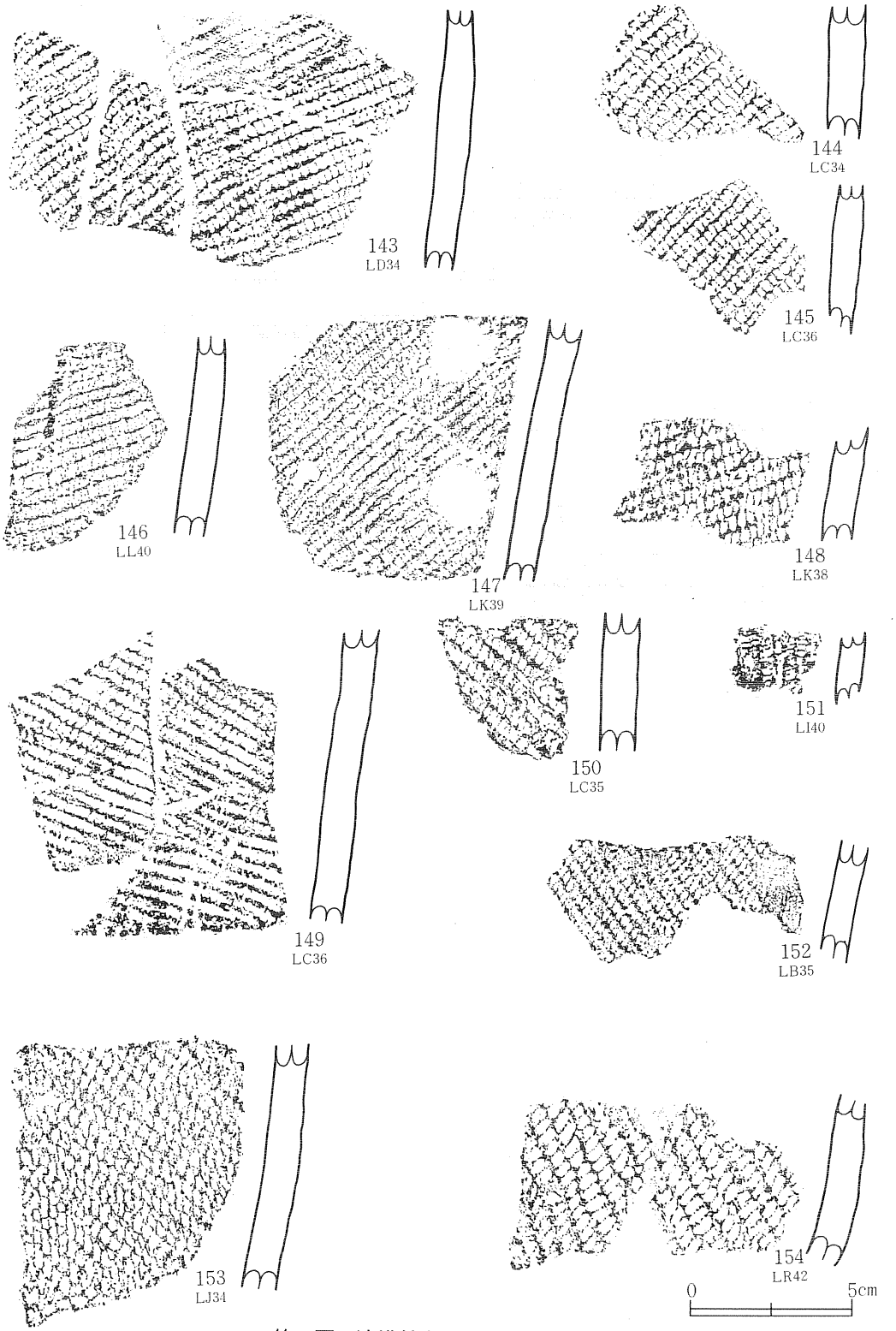
2（オ）:（第26図143～第28図172・第29図175～191・193・194・第32図239、図版29・30）

斜縄文のみが施文されている胴部破片を一括した。縄文の原体は多様であるが、数量的にはLR、RLの0段多条単節斜縄文が多く他は少ない。143～148は0段多条のLR単節斜縄文である。146は施文単位の端の粘土が盛り上がって残っており、原体の長さは約2.5cmであることがわかる。いずれも胎土に繊維を含み、焼成は良好である。239・149～157・190・193は0段多条のRL単節斜縄文である。239は表面側から貫通しない孔が1個あけられている。190は器壁の接合面にも縄文が施文されていて、その部分で器表面が剝落したものである。193は撚紐原体の開端をしばったと思われる細い紐の痕跡が残っている。155～157は同一個体であるが接合はしない。器形は第27図100と同様に尖底深鉢形と推測される。100よりはやや胴部下半の膨らみが小さく、器高が高くなると思われる。胴部の上半に2個の補修孔があけられている。153は胎土に多量の極細粒砂を含むが、他はすべて胎土中に繊維を多く含み、焼成は良好である。158～171・175・176・178・188・194は複節である。158～161はLRL、162・163はRLR、164～171は0段多条の前段反撚りの原体で、164～167はLRR、168～171はRLLである。172・175・176・178は0段多条の前々段反撚りの原体を使用している。177・179～182はRL、183～187はLRでいずれも0段多条前段反撚りである。1段の撚りの強さが異なるため、条は交互に深い条と浅い条が現れる。188の原体はRLRLの4段の縄である。189はRRの反撚りの原体を使用している。191は無節L斜縄文である。194の原体はLとRの1段の縄を合わせてRに撚り、さらにLに撚ったものである。

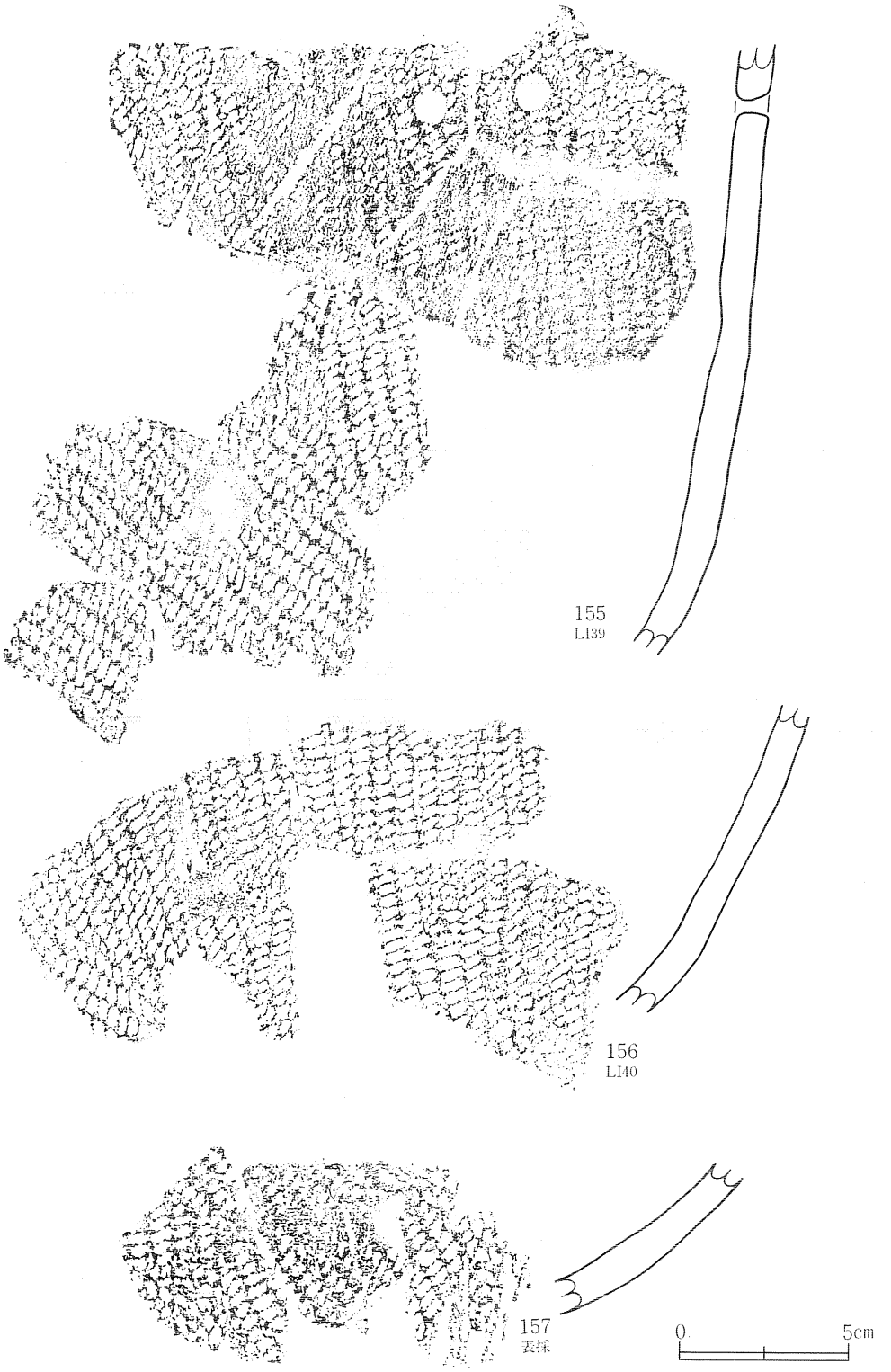
底部

2B:（第23図102、図版28）

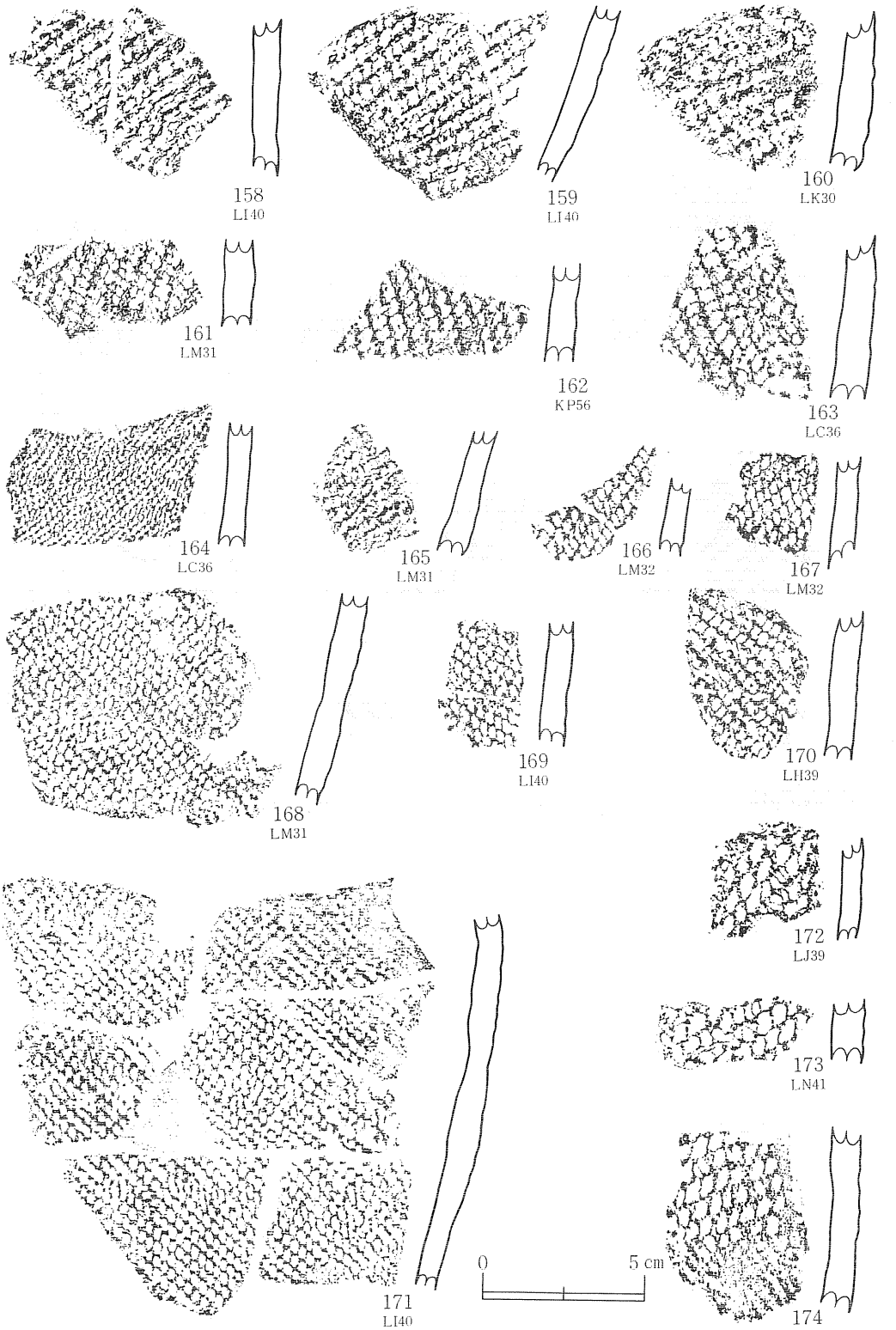
角度の広い尖底で、撚紐原体閉端による刺突が尖端を取り囲んで5個施されている。胴部の文



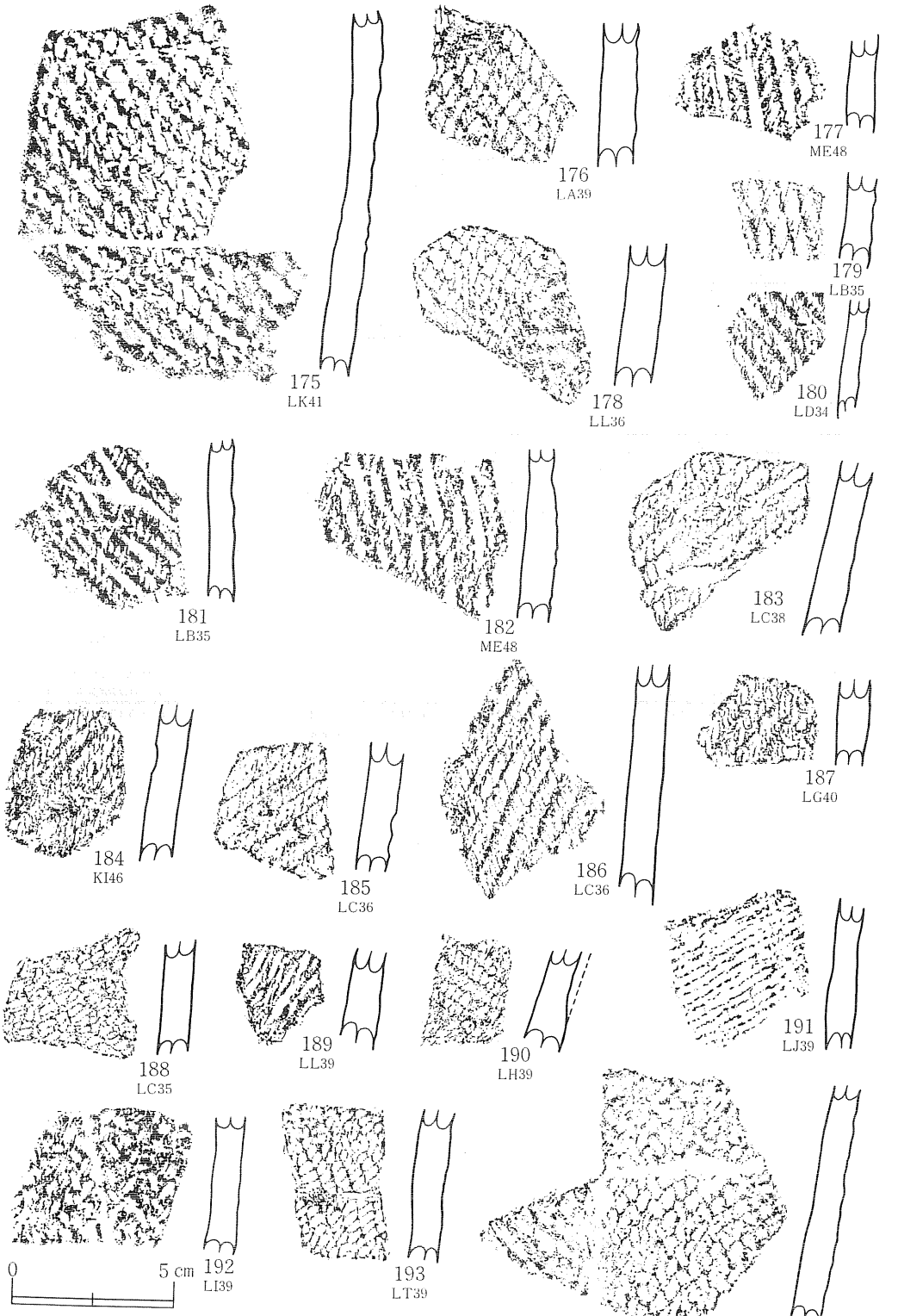
第26図　遺構外出土土器(7)（第Ⅰ群）



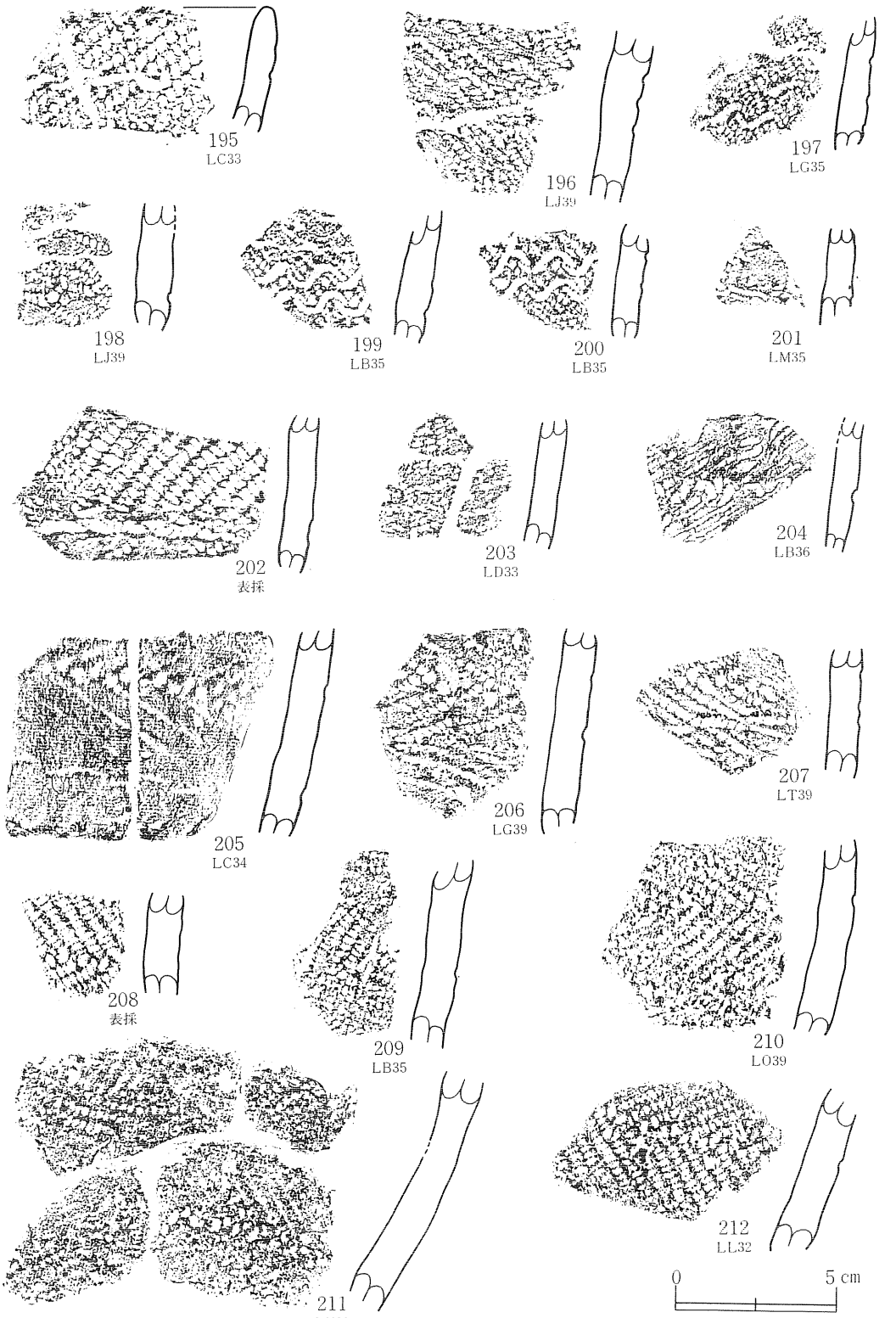
第27図　遺構外出土土器(8)（第Ⅰ群）



第28図　遺構外出土土器(9)（第Ⅰ群）



第29図　遺構外出土土器(10)（第Ⅰ群）



第30図　遺構外出土土器(11)（第Ⅰ群）

様は0段多条のLR単節斜縄文である。胎土には繊維を多く含む。1点のみの出土である。

2C:(第23図103、図版28)

尖底端部を取り囲んで、細い棒状工具の先端による刺突が5個施されている。胴部の文様は0段多条のLR単節斜縄文である。胎土には繊維を多く含む。1点のみの出土である。

2D:(第32図240～243・246・247・249・250、図版30)

いずれも尖底である。断面形は240・242・244がやや急角度であるが、他はゆるやかで丸底に近い。尖底端部はやや肥厚する。244は尖底部に近い部分に焼成後に貫通孔があけられている。240・242・246・249は0段多条のRL単節斜縄文、241・243・247は0段多条のLR単節斜縄文、250はRLRの複節斜縄文が尖底端部まで施文されている。いずれも胎土には繊維を多く含む。

第3類:結束羽状縄文が施文される土器である。

口縁部

3f:(第25図141・142、図版29)

いずれも口唇部を平坦に面取りしている。口唇部にキザミや刺突の施文はない。結束羽状縄文が胴体部から口唇部まで施文される。142には綾絡文が施されている。いずれも、胎土には繊維を含む。

胴部

3(ウ):(第25図142・第30図205～207、図版29・30)

結束羽状縄文と綾絡文が組み合わさるものである。綾絡文は、2(ウ)の多くと異なり、2条1組ではなく1条が1単位として横位にめぐるようである。いずれも胎土には繊維を含む。

3(オ):(第30図208～212、図版30)

結束羽状縄文が横位に施文される。208～210・212は0段多条の原体を用いている。いずれも胎土には繊維を含む。

第4類:非結束羽状縄文が施文される土器である。

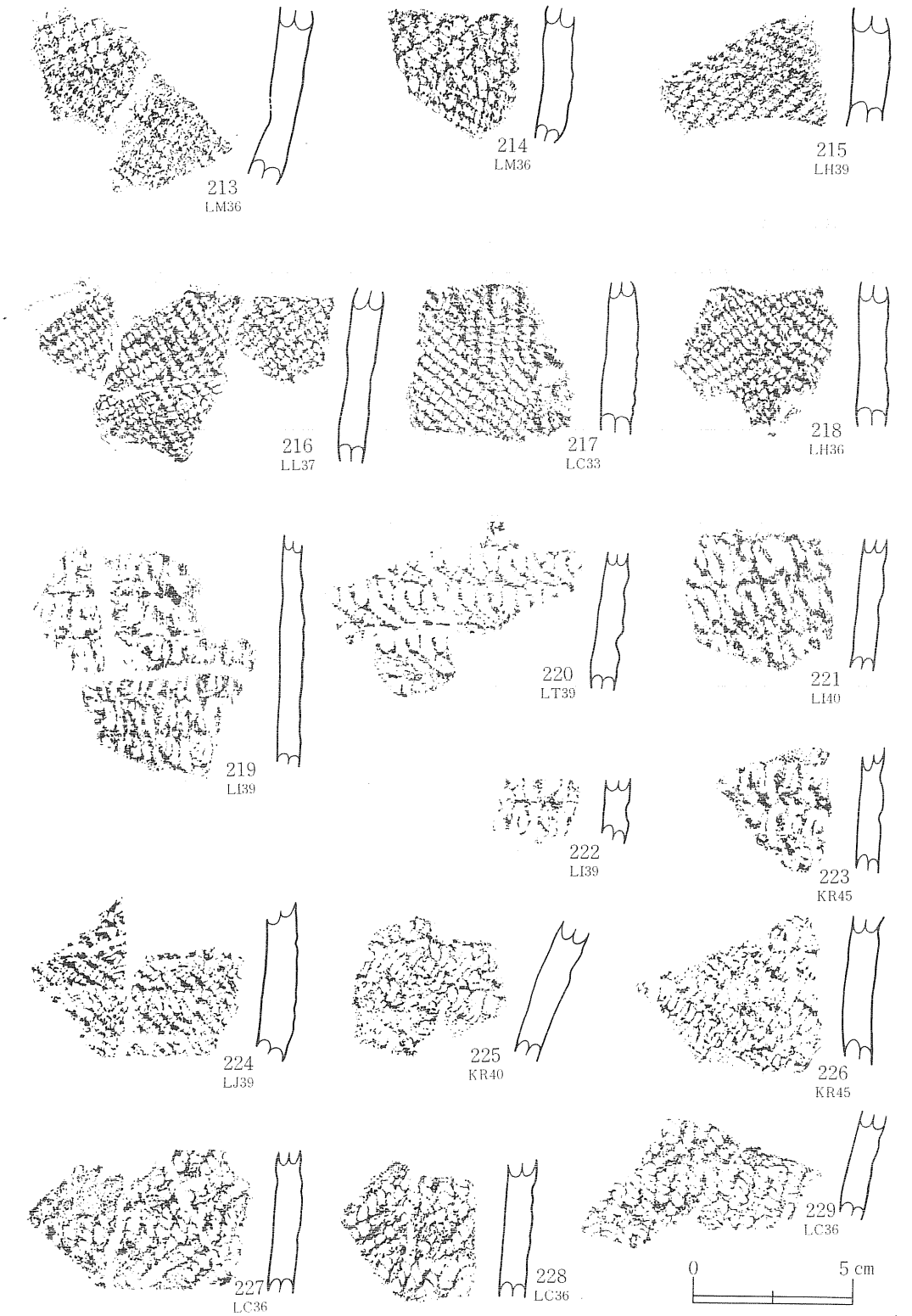
口縁部

4f:(第24図122・第25図127、図版28・29)

122は口唇部を平坦に成形し、口唇の上端部の表面に3～6㎜の幅で粘土を盛り上げて厚くしている。0段多条のRL単節の原体を横方向と左上→右下へ斜め方向に、交互に回転させている。127はRL単節の原体を交互に横方向と縦方向に回転させ、縦位の羽状縄文を施文したものである。いずれも口唇部は平坦で、口唇部や胴部にキザミや刺突は施されない。

4(エ):(第32図230・236、図版30)

230は裏面、236は表面にドングリ圧痕のある土器である。230は0段がℓで多条のLRL複節と、0段多条RL単節の異種原体を用いた非結束羽状縄文である。236は0段多条RL単節原体の回転



第31図　遺構外出土土器⑫（第Ⅰ群）

方向を変えて縦位の羽状縄文を施文したものである。いずれも裏面には化粧粘土を貼り、ナデ調整の痕跡が明瞭である。胎土には多量の繊維を含み焼成は堅緻である。

4（オ）：（第28図173・174・第31図213～218、図版29・30）

173・174・213・214は230と同一個体で異種原体を用いた非結束羽状縄文である。215は横位に、216～218は縦位に同一原体で回転方向を変えて施文した非結束羽状縄文である。いずれも胎土に繊維を含み、焼成は堅緻である。

第5類：ループが施文される土器である。すべて胴部破片で装飾文が加わるものはない。（第31図219～229、図版30）

219～227はRL、228・229はLRのループ文が、横位の帯状に施文されている。224は細い撚紐原体のループ部分から撚紐部分までを連続押圧しているが、他はループ部分のみを押圧する。いずれも一段の幅が狭く、重層的に施文される。胎土には繊維を含み焼成は堅緻である。

第6類：組紐文が施文される土器である。192、1点のみの出土である。（第29図192、図版30）

第7類：地文は不明であるが装飾文が判明するものを一括した。

口縁部

7b・c：（第23図113、図版28）

口唇を器内外両面から指でつまんで円形に押し凹め、その周辺を取り囲むように撚紐原体の閉端による刺突を加えている。口唇部の指頭押圧部分はやや突出気味になる。

胴部

7（イ）：（第21図96～98）

96・97は、2（イ）の94・95と同様に撚紐原体による馬蹄形の刺突が施されている。98は撚紐原体の閉端による刺突である。99は細い竹管状の工具の先端による刺突が面的な広がりをもって施されている。

7（エ）：（第32図232・233・237・238、図版30）

ドングリ圧痕がつく土器破片で、小破片のため地文が不明なものである。232・233は裏面、237・238は表面に焼成前にドングリ圧痕がつけられたものである。

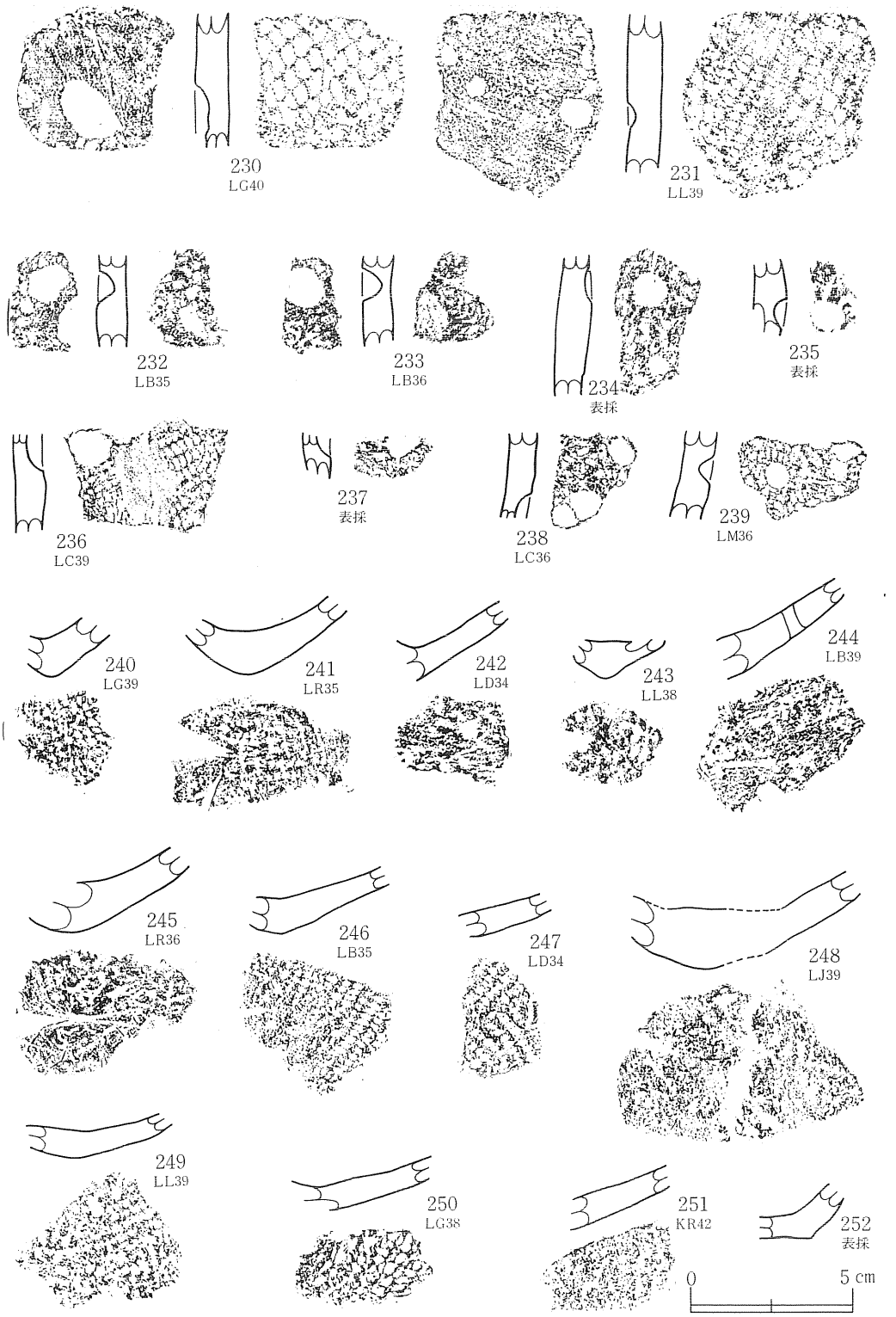
底部

7B：（第23図101、図版28）

平底風の丸底で、底部と胴部の境界が階段状に屈曲して底部が突出気味の器形である。底面には同心円状に撚紐原体閉端による刺突が施される。底部側面にも同じ刺突が横位にめぐる。胎土には繊維を含む。

7C′：（第32図245、図版30）

尖底で尖底端部を通る沈線が2本引かれている。



第32図　遺構外出土土器⒀（第Ⅰ群）

7D：（第32図244・248・251・252、図版30）

244・251は尖底である。244には底部に焼成後に貫通孔が穿たれている。248は丸底風の尖底で、尖底部と胴部の境界が屈曲する。252は推定底径約2cmの小型の平底で、底面は無文である。底部周縁がやや張り出し気味である。

第Ⅱ群土器：縄文時代中期の土器（第33図253～258・260・261、図版31）

すべて縄文時代中期後半の土器である。253～258は磨消縄文土器で、253は縦方向の平行沈線によって囲まれる部分に縄文が施文され、254～257は平行沈線による曲線的なモチーフの中に縄文が施されている。263・264は葉脈状の文様が沈線で描かれる土器である。264は沈線によって囲まれた曲線的なモチーフの中に、葉脈状の沈線を充塡している。

第Ⅲ群土器：縄文時代後期の土器（第33図259・262～281、図版31）

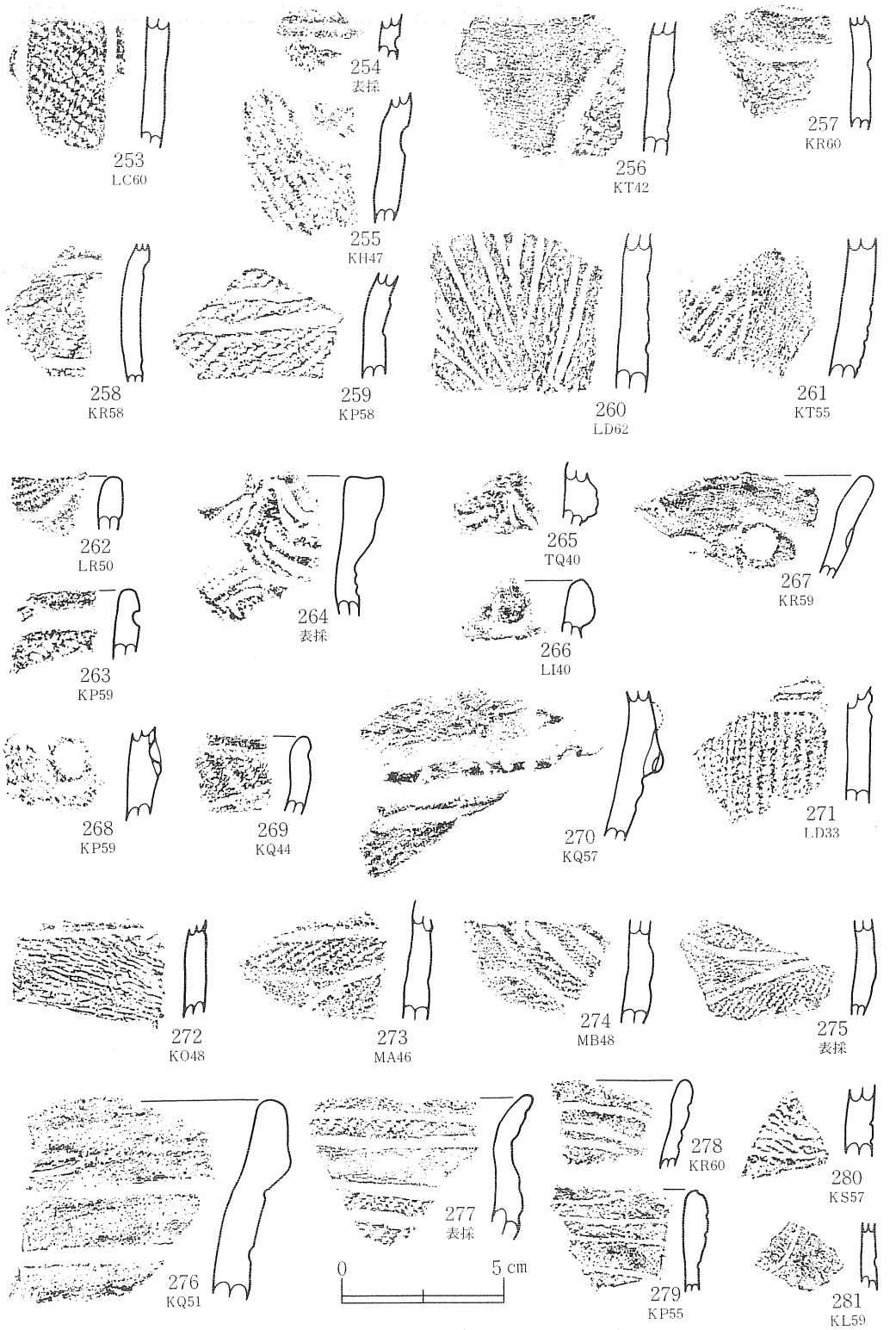
縄文時代後期前葉の土器（262～271）と後期後葉の土器（259・272～281）に大別される。

後期前葉の土器：（第33図262～271、図版31）

262～267は波状口縁または口縁に突起をもつ土器である。262・263は口縁部に曲線的なモチーフが磨消縄文手法によって描かれる。264は口唇部につけられた突起部分が肥厚し、突起の先端が円形に平坦につくられ、中心がやや凹んでいる。口縁部にはこの突起を中心として左右に下がる沈線が、左右に各5本ずつ描かれる。さらに突起の下には、円形か渦巻き、もしくはS字状のモチーフの一部がみえる。265・266も口唇部につけられた突起の部分である。これらは264と異なり、先端が突出する。265はこの突起の左右に下る複数の沈線が描かれる。266は突起を囲む沈線が描かれている。これらは同一個体で、264のような大突起の間に265・266の小突起がつくものと考えられる。267・268はボタン状の円形貼り付け文のある土器である。267は無文のゆるやかな波状口縁である。ボタン状の円形貼り付け文は波頂部下につけられている。269は口縁部に地文にRL縄文を施文した後に、同一原体と思われる撚紐原体の押圧による区画文が描かれる土器である。270は2条1組の隆帯が貼りつき、さらに隆帯の下部に2条の太い沈線がめぐる。隆帯には棒状工具による刺突によってキザミ目が付けられている。271は地文の縄文を施文した後に沈線で方形のモチーフが描かれる土器である。

後期後葉の土器（第33図259・272～281、図版31）

272は細かい無節R縄文を地文とし、その上から沈線で文様を描く土器である。273～275は磨消縄文手法で三叉文が描かれる土器である。276・277・259は太めの沈線が横位に平行に多数めぐるものである。276はゆるやかな波状口縁の一部で、波頂部は外面が肥厚する。277は胴部がやや膨らみ、頸部がくの字形にやや内湾して立ち上がった後口縁部が外反する器形である。外反する口縁部と胴部には横位の平行沈線が2条めぐり、頸部の沈線間は磨消されている。259も同様の胴部破片である。278～281は細く鋭い沈線で文様が描かれる土器である。278・



第33図　遺構外出土土器⒁（第Ⅱ群、第Ⅲ群）

279は口縁端部と平行に３～４条の沈線が横位にめぐる。いずれも縄文は施文されていない。279は口縁部が肥厚し直立気味に立ち上がる。278はやや外反気味である。280は胴部のRL縄文の上から横位に平行沈線が引かれている。281は曲線的な区画文を描いている。

第Ⅳ群土器：縄文時代晩期の土器（第34～48図、図版27・31・32）

浅鉢形土器（第35図285～298、図版31）

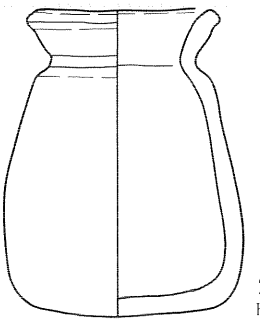
285・286は口縁が外反し、287～292はやや内湾気味に立ち上がる。285は口唇部と口唇部直下にキザミがあり、口縁部文様は平行沈線とその間にキザミが入るものである。285・286・289・290は口縁内面に一条の沈線がめぐる。287～292は口縁端部が肥厚し、口唇部上面に沈線がめぐる。292は突起がつく。286～289・291・292の胴部は細かい斜縄文の充塡される雲形文である。290は口唇にキザミ目があり、口縁部に羊歯状文を施文している。293・294・297は胴部で、いずれも細かいLR縄文の充塡される雲形文である。295・296・298は底部で、295は内面に沈線で不規則な格子目状の文様が描かれている。296は底部を沈線が２本めぐっている。

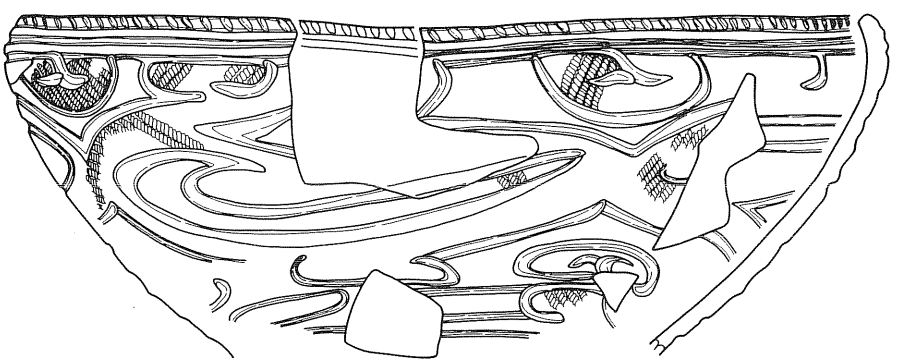
鉢形土器：（第34図283・第35図299～314・321・322・324・325、図版31）

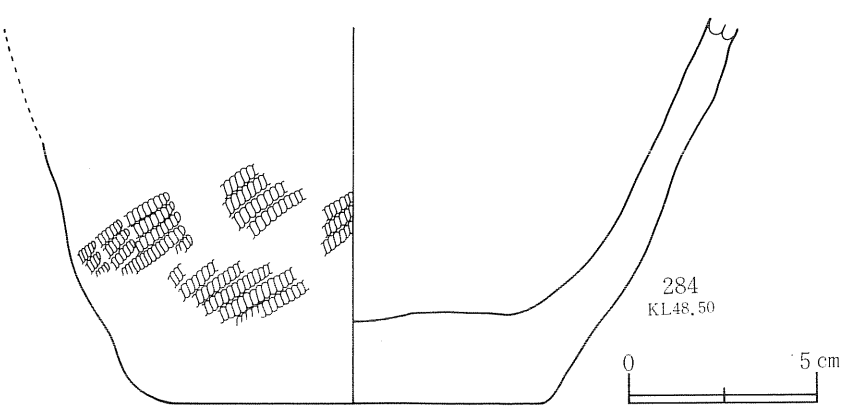
300は、胴部から頸部にかけて内湾し口縁部が外反する鉢形土器で、299も同一個体の胴部である。口縁部には太い沈線で上下に半円、中央に剣菱状のモチーフが描かれる。頸部に２条の沈線がめぐり、その下はLR縄文が施文される。底部は欠失するが、台付鉢形土器の可能性もある。301～314は口縁が内湾する鉢形土器である。301～304は口縁部に羊歯状文、305～314は平行沈線文が描かれている。307は全体が無文で研磨されている。321～324は口縁部がくの字形に内傾し、先端部が外反する鉢形土器である。321・322は口縁部に羊歯状文が描かれる。324・325は口縁部と胴部の接続する屈曲部に突起がつく。口唇部は平坦につくられ１条の沈線がめぐる。口縁部は横位の沈線が3本描かれ胴部は無文である。全体に赤色顔料が塗られている。283は胴部が直線的に立ち上がり口縁部が内湾する鉢形土器である。口唇にキザミ目が入り、口縁部には横位の沈線がめぐる。胴部全面に沈線で雲形文が描かれる。文様単位は４単位であるが、各単位が均等ではない。LR縄文が部分的に充塡されるがほとんどは無文である。

深鉢形土器：（第36図315～320・323・第38図341～第40図369、図版31・32）

315～320・323は、精製で小型の深鉢形土器である。器形は口縁部が胴部から続いて直立するもの（315）、口縁部で１度内湾し、口唇部が外反して立ち上がるもの（316・318・319・320）、胴部から続いて直立するが、口唇部がそれに内湾するようにつくもの（317）がある。口縁部文様は、320は羊歯状文、他は横位にめぐる沈線文が描かれている。316～319は第17図26のような台付深鉢形土器の可能性がある。341～344は大型の深鉢形土器である。341は口唇部に指頭押圧によるキザミがあり、口縁部は無文帯となる。342は口唇部に篦状工具によるキザミが入る。口縁部は上下各1本の沈線が横位にめぐり、その間は無文である。343は口縁部が胴部より器厚が







第34図　遺構外出土土器⑮（第Ⅳ群）

薄い。胴部から口縁部にかけては内湾し、口縁部は外反する。352・353は同一個体である。胴部と外反する口縁部は1条の沈線で仕切られている。344は口唇部にキザミが入り、口縁は外反する。345～353・356は口縁が内湾または直立気味に立ち上がるものである。346には口唇部にキザミが付けられている。全体に大型である。354・355は細かい縄文が胴部全面に施文されたものである。357～366は粗製の深鉢形の破片である。357・363は同一原体を用い回転方向を変えて縄文を施文している。364・365は横方向、366は縦方向の綾絡文の入るものである。367・368は不規則な網目状撚糸文が施されている。369は全面研磨されている。

注口土器：(第37図326～328・第43図403)

326・327は雲形文が胴部上半の沈線区画の中に描かれる注口土器である。口縁部は緩い角度で外側に湾曲して立ち上がる。328は注口部で、根本が太く先端に向かってしだいに細くなる。先端は欠失している。装飾的な文様は全くない。403は本遺跡から出土したものではなく、下田部落内の畑地から出土したものである。本遺跡出土の土器群よりは若干古い大洞BC式の注口土器である。参考資料として掲載した。口縁部を欠失するが、ほぼ完全な形である。口縁部には太い羊歯状文が描かれ、注口部のつけ根が帯状に盛り上がる。口縁部はやや急角度で直線的に立ち上がる。

壺形土器：(第34図282・第37図329～337)

282は完形の小型壺形土器である。底部は丸底、口縁は外反する。頸部に1条の沈線が引かれる。全面無文で研磨されている。329は外反する口縁上部が肥厚し、口唇部に突起が1個付けられる。口縁部の文様は横位に縄文帯と無文帯が重層的に配される。330は曲線的に外反する口縁部で、全面に細かいRL縄文が施文されている。331は胴部上半の破片で、LR縄文の上から横位の2条の沈線の間に縦に沈線を入れて、台形に区切る文様が描かれている。332・333は無文の口縁部である。334・335は同一個体である。いずれも壺形土器の口縁部である。口縁部下部には低い隆帯が2本貼り付けられる。その隆帯同士を連結する形で、部分的に突起が縦型につけられる。全面に黒い漆が厚く塗られて入る。336・387は334・335の胴部下と思われる・全体に沈線で入組文や三叉文を描いている。表面は赤色顔料を塗った上から、黒い漆を塗ったようである。

台付土器の底部：(第37図338～340、図版32)

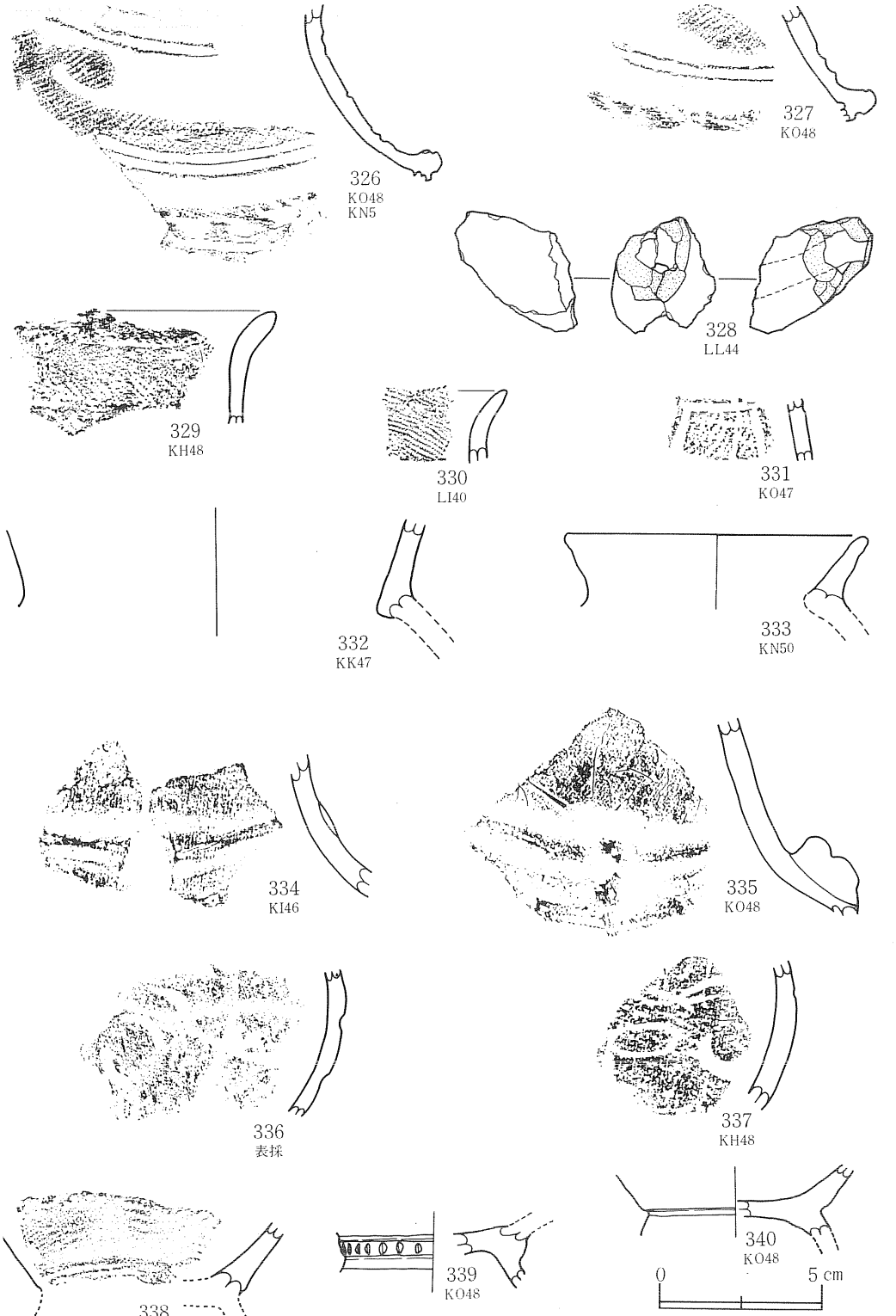
339は底部と台部の間に2本の沈線とキザミ、338・340は1本の沈線が入る。

底部：(第34図285・第40図370～第42図402、図版32)

鉢形土器、深鉢形土器の底部破片を一括して掲載する。371・375・376・378～381・386は精製土器の底部である。371・376以外はいずれも、細かいLR縄文が施文される。376・381・386は底部近くに沈線がめぐり、381・386はそれより下が無文帯となる。285・372～374・377・382～385・

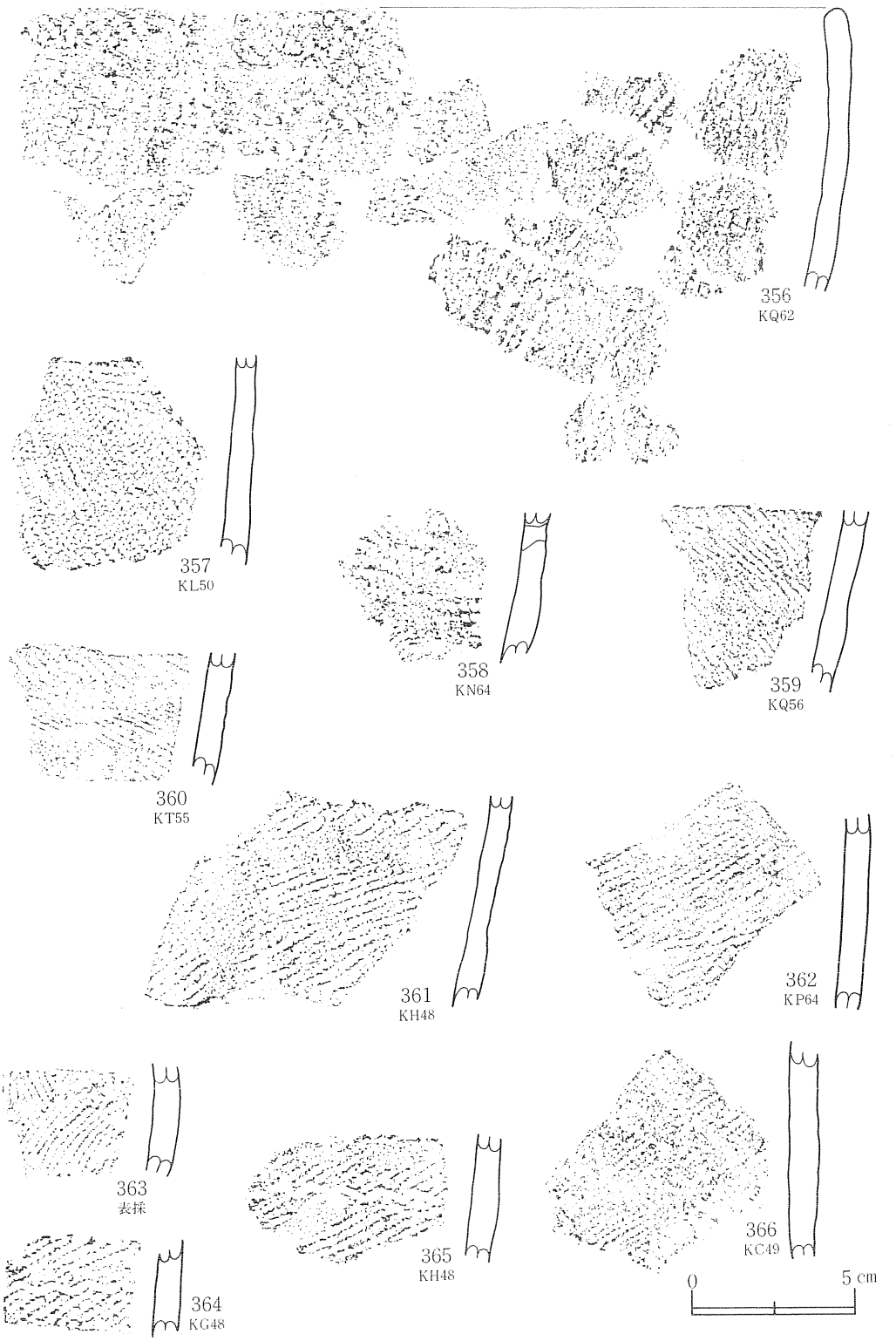
第35図　遺構外出土土器⑯（第Ⅳ群）

第36図　遺構外出土土器(17)（第Ⅳ群）

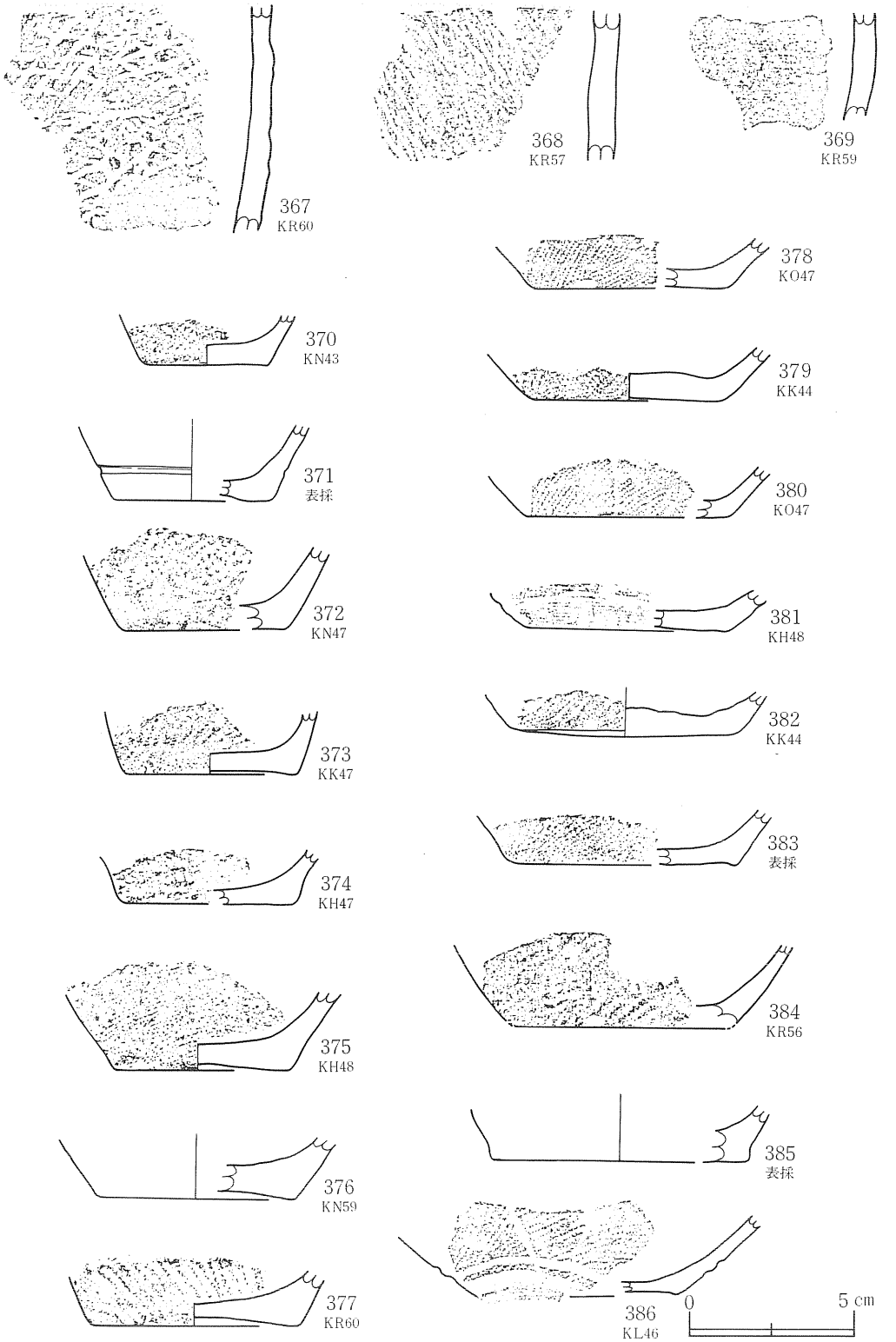


第37図　遺構外出土土器⑱（第Ⅳ群）

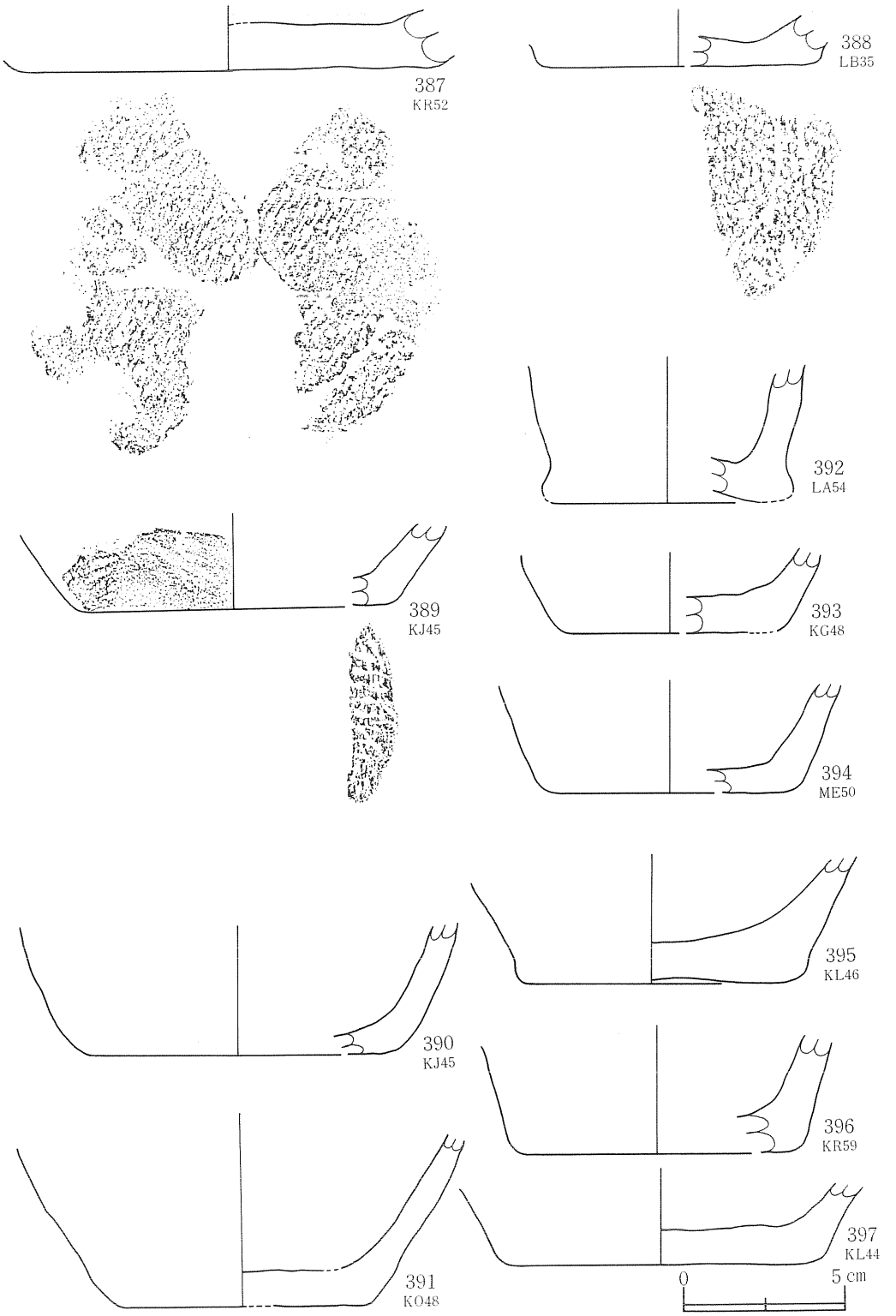
第38図　遺構外出土土器⑲（第Ⅳ群）



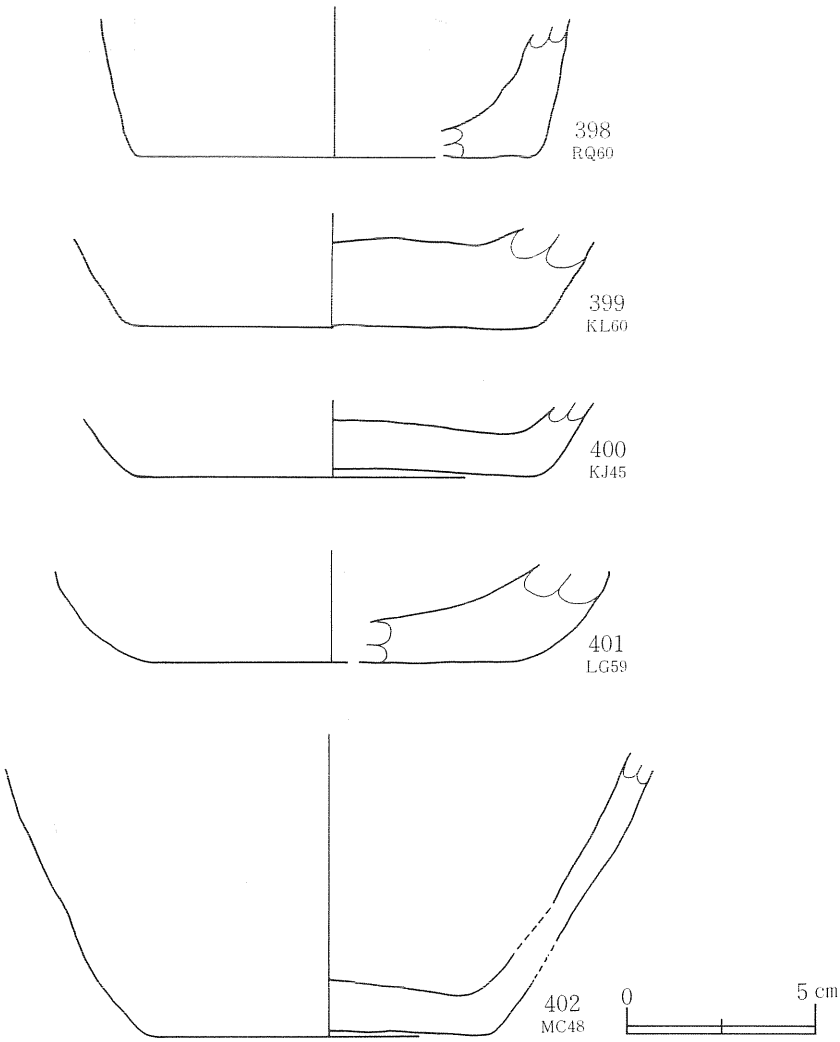
第39図　遺構外出土土器⑳（第Ⅳ群）



第40図　遺構外出土土器(21)（第Ⅳ群）



第41図　遺構外出土土器(22)（第Ⅳ群）



第42図　遺構外出土土器(23)（第Ⅳ群）

389～394・396～398・402はいずれも胴部に縄文が施文されている。387～389は底面に網代痕が残る。401は丸底風の平底で、底面と胴部の境界の稜を削って丸くしている。

第Ⅴ群土器：弥生時代後期の土器を一括する。（第44～46図、図版33）

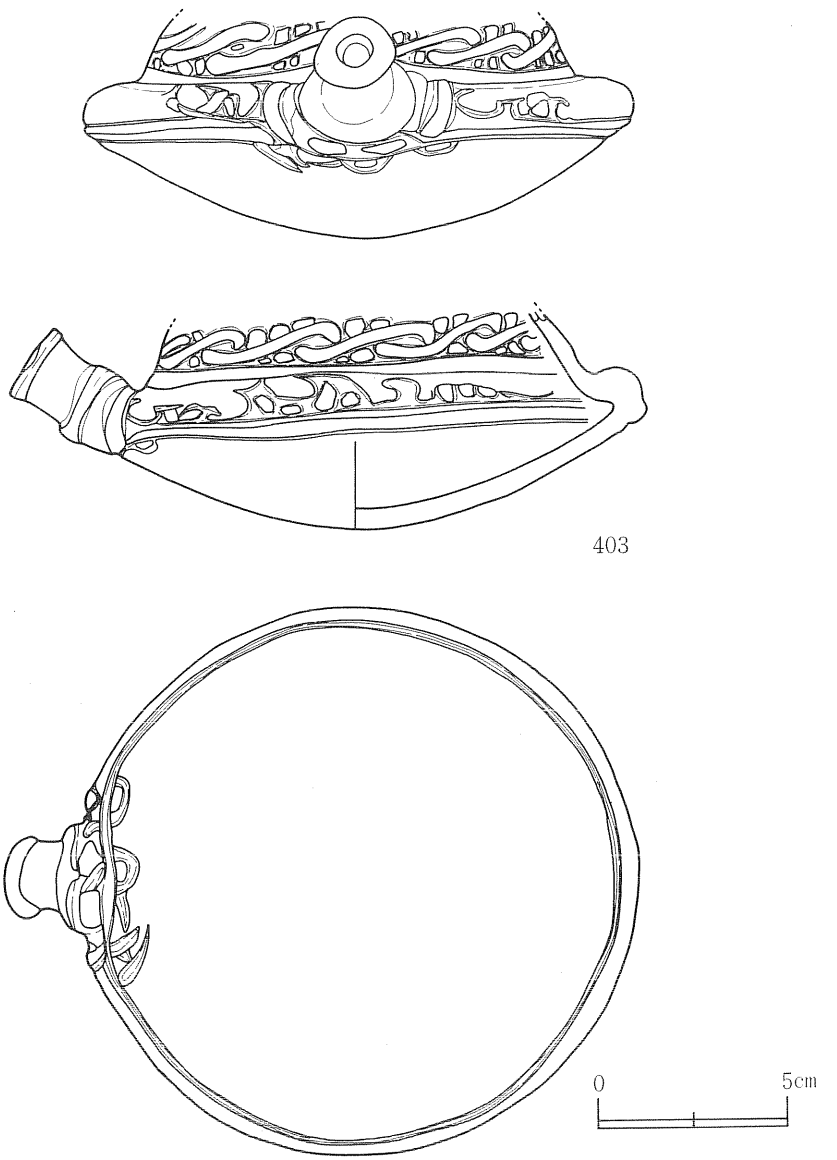
第Ⅴ群土器は、注口土器が１点の他はすべて甕形土器である。口縁部から底部まで接合し器形が判明したものはなくすべて破片である。甕形土器の文様は、縄文を施文するものと撚糸文を施文するものの２種類がある。口縁部破片の中には無文のものもある(405・406)。甕形土器の破片で文様が施文されているものは、以下の5類に分けられる。

甕形土器

ａ１類：斜縄文が施文されるものである。第Ⅴ群土器の中では少量である。（404・415・452・

458・459）

404は大きく外反する口縁部で、口唇から約8㎜下に幅約1.2㎝の0段多条RL縄文が施文される。その下から頚部にかけては横方向にヘラ状工具によるヘラナデが施され、無文帯となる。415も0段多条のRL縄文を器表面全体に施文し、その後に不規則に横方向のヘラナデが行われて部分的に無文化している。このように縄文を施文した後に器表面をヘラナデするのは、a 2類にも見られる。a 3類の帯状に施文された縄文の間の無文部も、施文手法は異なるが、器表面に縄文の施文された部分と無文の部分を作出することでは、視覚的効果に共通性が認められる。458・459は器壁が厚く大型の甕形土器で、LR縄文が施文された後に縦方向のヘラナデが



第43図　遺構外出土土器(24)（第Ⅳ群）

部分的に行われている。458は綾絡文が入る。

ａ２類：回転方向を１施文単位ごとに縦横に変えながら不規則な羽状縄文のような縄文が施文されるもので、節の細かい０段多条のRLまたはLR単節の原体を用いている（408・409・412～414・416～418・420・421・423・425・448・455～457）。

408・409は小破片で口縁全体の形は不明である。408は口唇部には縦位、その下には斜位に回転した０段多条のRL縄文が施文されている。409は縦位回転の０段多条のRL縄文が施文されている。412～414は焼成、色調から同一個体と思われる破片である。410（口縁部）、448（底部）も同一個体と思われるが接合しない。これらの破片から、全体の器形は底部から外反して胴部が立ち上がり、胴部上半で内湾し、頸部がしまり口縁部が大きく外反する器形になると思われる。器表面には縄文を施文した後に、ヘラ状工具の木口によるヘラナデが斜位に不規則に施される。底部側面には条が横方向に取り囲むように、斜位に原体を回転させている。底面には中央部に回転方向を縦横に変えて羽状に縄文が施文されている。416～418・420・421・423・425も0段多条のLR原体である。455～457はLR原体であるが、いずれも節の幅が大きく、太い原体を用いている。

ａ３類：原体の施文部位を少しずつずらしながら縦方向に回転を連続し、縦位または斜位の帯状に縄文を施文するもので、節の細かい０段多条のRLまたはLR単節の原体を用いている（407・422・424・426～428・431・432・434・438・439・443～447）。

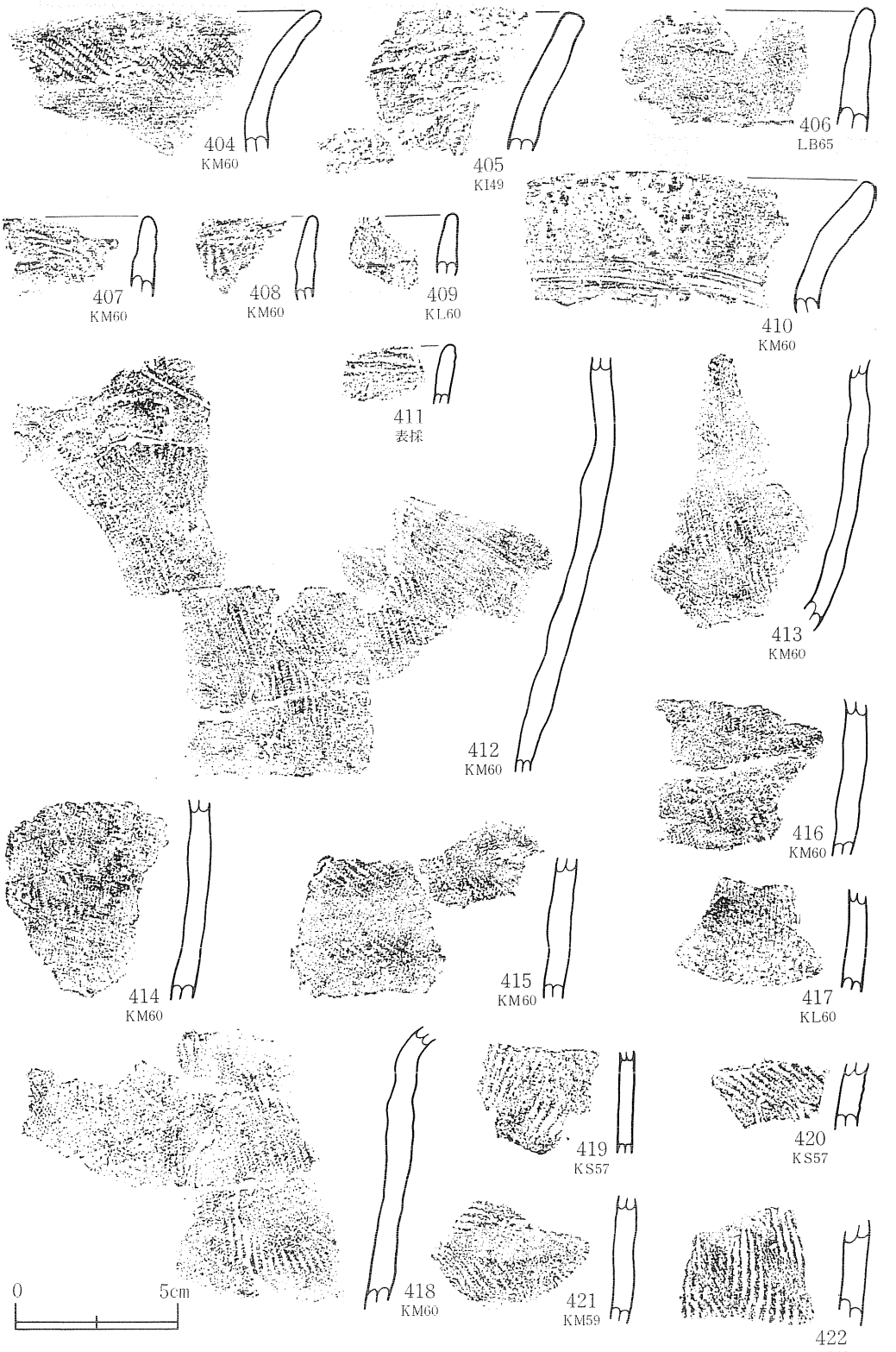
407は小破片で口縁部全体の形は不明だが、０段多条のRL縄文が斜位の帯状に施文されている。424・432は0段多条のRL縄文、422・426～428・431・434・438・439・443～447は０段多条のLR縄文で、ａ２類はLR原体を用いるものが多い。434は内面の一部にヘラ状工具の木口を用いた斜め方向のヘラナデ痕がある。同様のヘラナデは口縁部破片の404・410の頸部外面にも施されている。これらの破片は、いずれも薄手で焼成は良好である。443～447は色調、焼成から同一個体と思われる破片である。胴部には帯状の縄文が施文され、底面の中央にも同一原体による斜縄文が施文されている。

ｂ類：撚糸文が施文されるもの。（411・429・433・435～437・440・449～451・453）

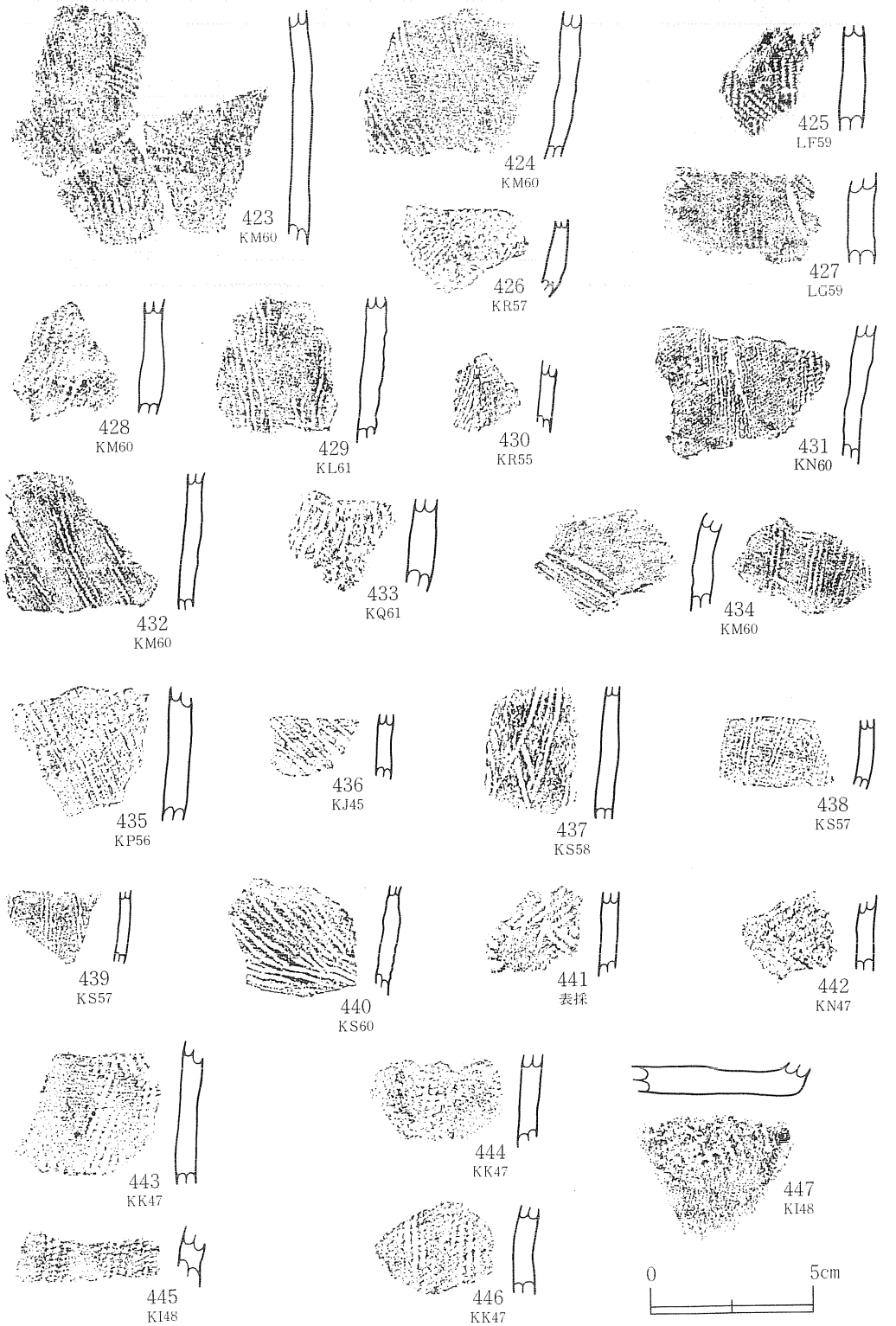
411は口縁部にＬ撚糸文が横走するものである。小破片のため全体の形状は不明である。433・436はＲ撚糸文、429・435・437・440・449～451・453はＬ撚糸文である。胴部の撚糸文の施文方向は、縦方向（429・433・437・449）、斜め方向（435・436）、異方向の組み合わせ（440）の３種類がある。底部の側縁には横方向に施文され、449は底面中央部、451は底面周縁にも施文されている。

ｃ類：結束羽状縄文が施文されるもの。（441・442）

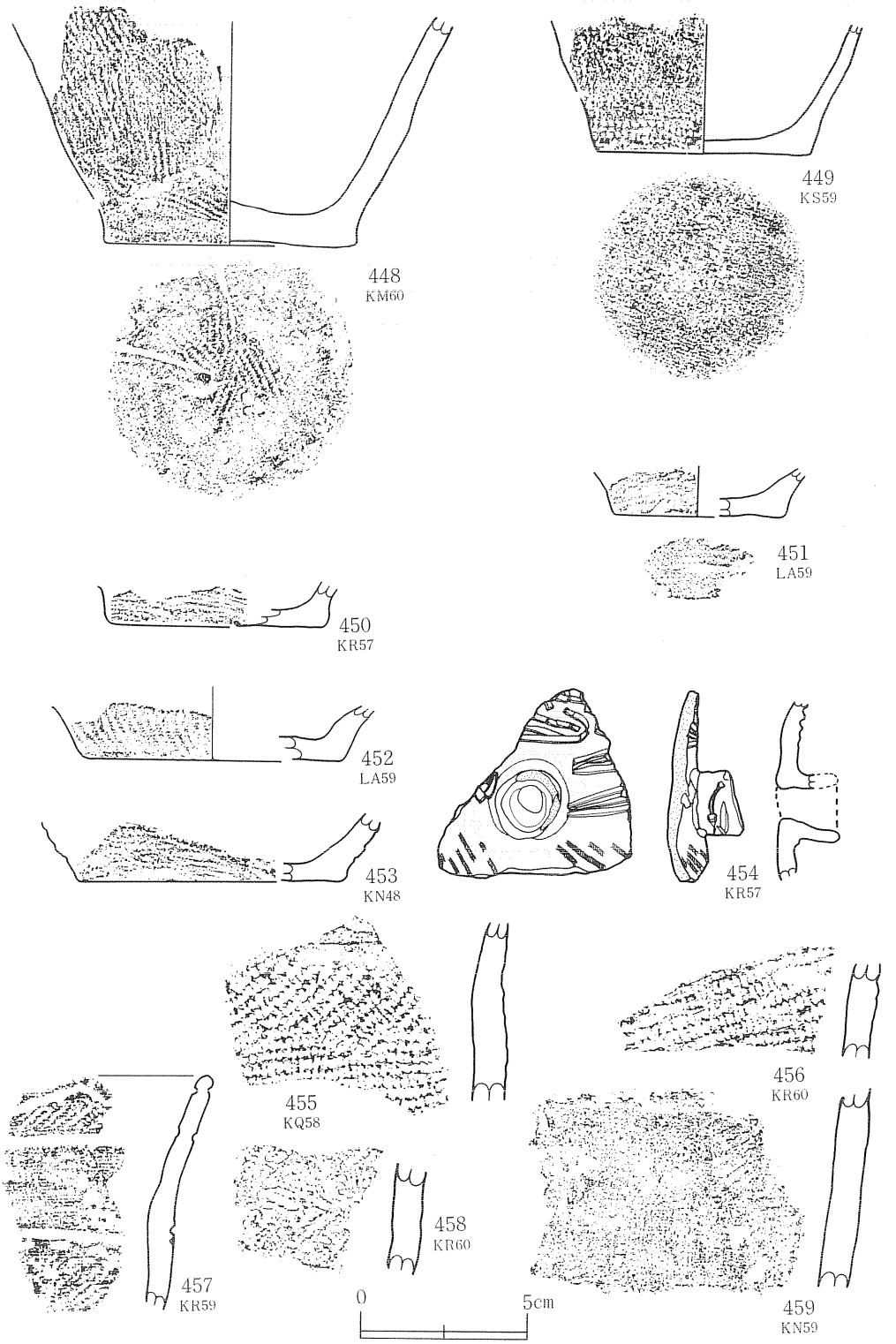
２片のみである。０段多条の細かい撚りの結束羽状縄文が施文されている。



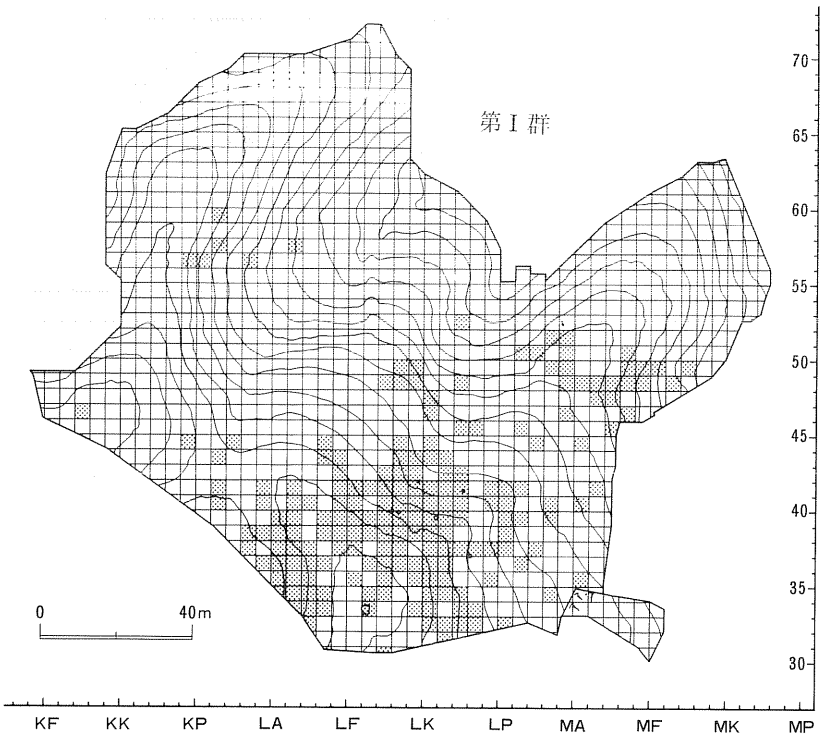
第44図　遺構外出土土器(25)（第Ⅴ群）

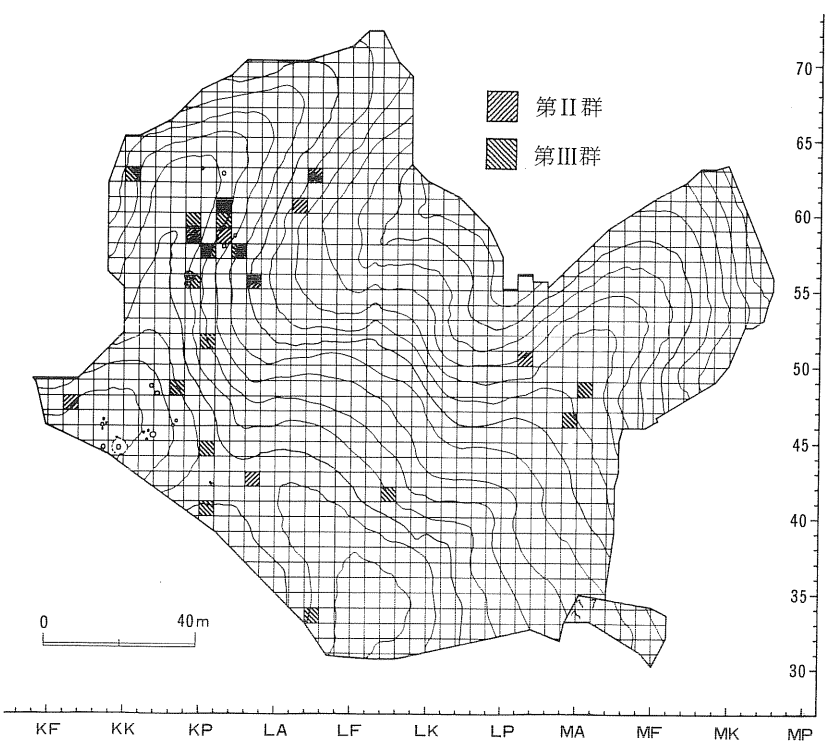


第45図　遺構外出土土器(26)（第Ⅴ群）

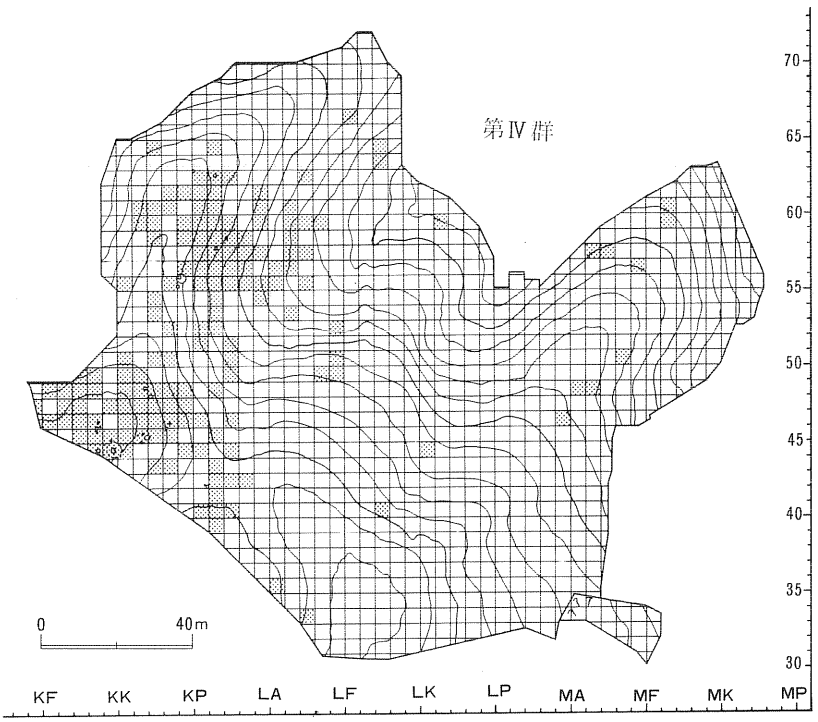


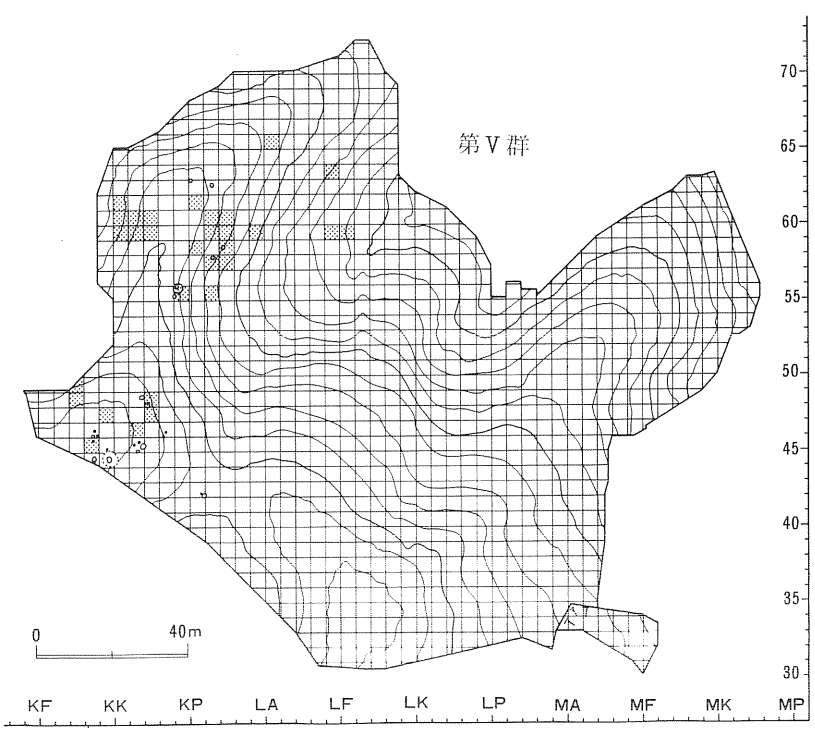
第46図　遺構外出土土器(27)（第Ⅴ群）





第47図　遺構外土器出土分布図（第Ⅰ群、第Ⅱ群、第Ⅲ群）





第48図　遺構外土器出土分布図（第Ⅳ群、第Ⅴ群）

注口土器（454）

1点のみの出土である。胴部には0段多条の細かいL撚糸文が施文され、注口部より上部には末端を刺突する沈線でくずれた変形工字文のようなモチーフが描かれている。胴部下半に施文されている撚糸文は甕形土器b類と類似している。沈線の原体は、末端の刺突部から見れば、断面形の1辺が2～3mmの方形で90度に近い角がある工具である。注口部の側面にも同じ原体で両端を刺突した短い曲線を組み合わせた沈線文がめぐっている。注口部の側面と周囲、及び沈線文の描かれる注口部より上部には焼成前に赤色顔料が塗られている。注口部が胴部のやや上部につき、胴部下半がふくらみをもった卵形になり、胴部上半が内傾する器形になるものと思われる。

(2)　石器（第49～78図、図版34～43）

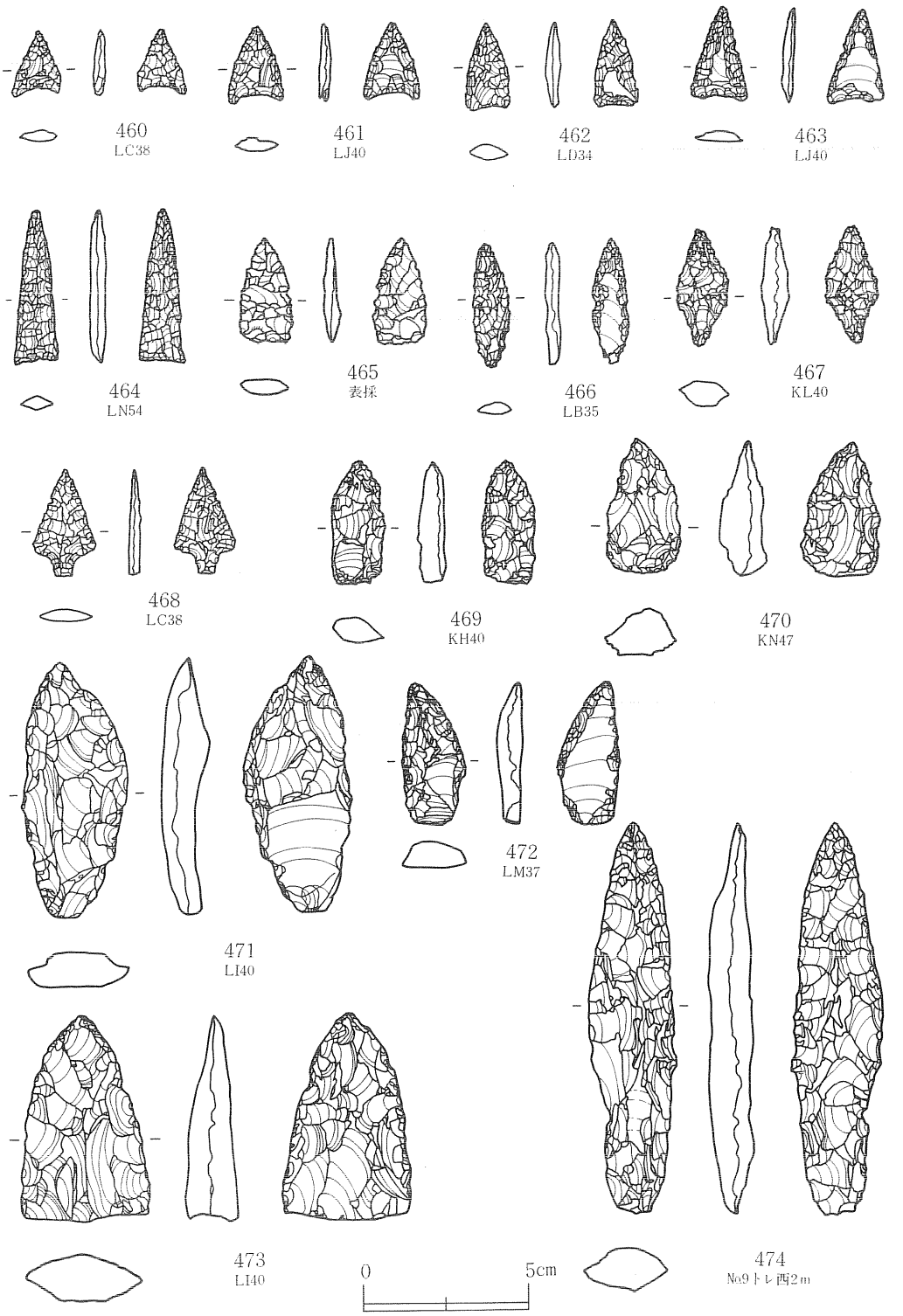
石器類は、コンテナで約90箱と多量に出土した。Toolは多様な器種があるが、多いのは篦状石器と不定形石器である。剥片類の中には使用によると思われる微小剥離痕のある剥片や、Toolの未製品と思われる2次加工のある剥片、用途が不明の2次加工のある剥片、剥片の接合資料もある。石核も多数出土している。ほとんどは縄文時代前期の土器の出土分布範囲からの出土である。磨製石器は少なく、礫石器では凹石が87点と多く出土した。

石鏃（第49図460～470・472、図版34）

石鏃は、全部で17点出土した。Toolの中では出土数の少ない器種である。凹基無茎鏃（460～464）、平基無茎鏃（465・469・472）、尖茎鏃（466）、凸基有茎鏃（467・468）の各種がある。素材の剥離面を両面に残すもの（463）、片面に残すもの（461・462・466・470・472）、両面とも2次加工が施されているもの（460・464・465・468）がある。467・469・470・472はやや厚手である。464・468は、両面とも丁寧に細かい2次加工が施され、先端も鋭利である。いずれも頁岩製である。

石槍（第49図471・473・474、図版34）

471・474は完全な形であるが、473はおそらく中央部で折損したと思われ、基部を欠失している。471は表面は全面に2次加工が施されるが、裏面は刃部側のみに両側縁から2次加工が入り、基部は素材剥片の剥離面を残したままである。先端は両面とも細かな2次加工によって鋭利に仕上げられている。474は、範囲確認調査の際に出土したもので本調査ではLP55グリッドにあたる所で出土した。両面に細かな2次加工が施され、特に先端は鋭利である。基部は刃部に比べてやや幅が細く厚みがあり、断面形が円形に近くなる。471が中央より刃部側に最大幅をもつのに対し、474は基部側に近いところに最大幅がある。473は石槍の刃部である。基部を欠失している。両面とも2次加工され素材剥片の剥離面は残っていない。先端は細かな剥離が両面から施され鋭利である。いずれも頁岩製である。



第49図　遺構外出土石器(1)

篦状石器（第50図475～第52図492、図版34・35）

篦状石器はToolの中では不定形石器についで多く出土した。完形品67点の他、刃部または基部の一部を欠失するもの61点である。未製品も多く出土している。これらを2次加工の仕方によって次の3類に分類する。

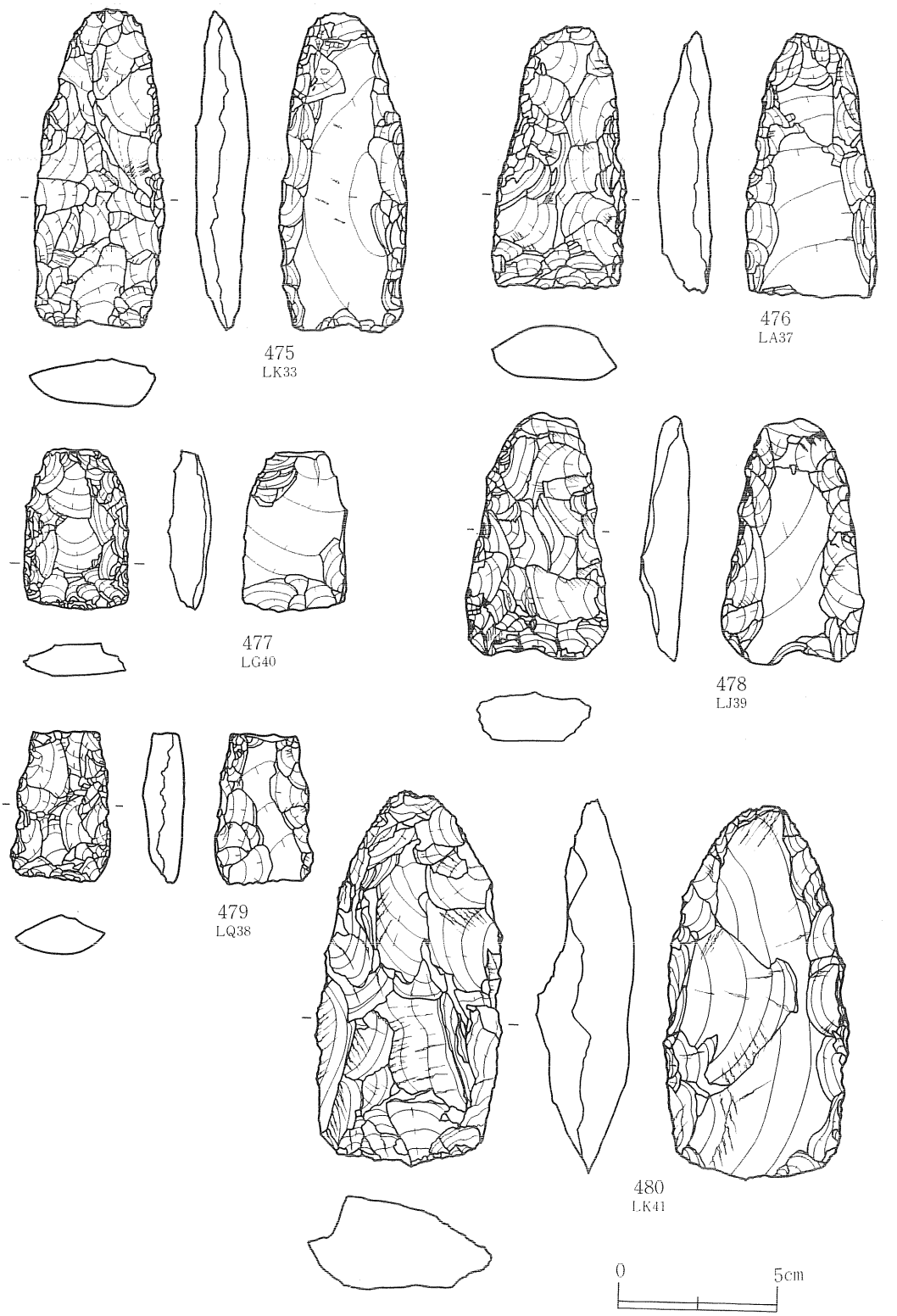
a類：素材剥片の先行剥離面側は全面に2次加工を施し、主要剥離面側は基部の端部と両側縁にのみ2次加工を施して、主要剥離面の一部をそのまま残すもの。

b類：素材剥片の先行剥離面側は全面に2次加工を施し、主要剥離面側は一方の側縁にのみ2次加工を施して、他の側縁は素材剥片のヒンジフラクチャーや折り取り面をそのまま残して利用し、素材剥片の主要剥離面の一部はそのまま残すもの。

c類：素材剥片の両面に2次加工を加え、素材剥片の剥離面を残さないもの。

a類：（第50図475～480・第51図481・482・486～488・第52図489・490、図版34・35）

篦状石器の中で最も多く109点(85%)を占める。横長剥片を素材とし、剥片の打面側と末端の主要剥離面を先行剥離面側から急角度に連続的な小さな剥離を加えることによって取り除き成形する。そしてこの急角度な剥離面を打面として、先行剥離面側に両側縁から中心に向かってやや大きな剥離を全面に加えている。これによって先行剥離面側は素材剥片の剥離面をすべて取り去り、凹凸の少ない平坦面を作出している。この両面からの2次加工が基部先端まで及ぶものと、基部先端が素材剥片を折り取ったのみで2次加工を加えず折れ面がそのまま残るものとがある。形態は、基部の先端がやや細くなり最大幅を刃部または基部の中央部にもつものが多い。刃部は直線的なもの、曲線的にふくらむもの、曲線的に内側に入り込むものがあるが、直線的なものが多い。刃部は素材剥片の主要剥離面の平坦面をそのまま利用し、先行剥離面側から細かい2次加工を加えて斜めに作出している。使用による微小剥離痕は表面側に多く、裏面にはほとんどない。直線的な刃部の一部には使用によるやや大きめの剥離痕のあるものがあり、さらにそれを取り除いて刃部を再生したことによって曲線的に刃部が内湾しているものもある。完形のもの67点の長さと刃部幅は、刃部幅が2.4～4.8cm、長さが4.6～11.6cmの範囲であるが、刃部幅が3cm、4cm、長さは5cm、8cm、10cmのところにまとまりがあり、一定の規格性があるようである。475・476・478は使用によって刃部が一部欠けている。475・478は表面が平坦になるように2次加工を施し断面形が逆台形を呈しているが、476・479・480では表面が盛り上がり曲面となっている。477は縦長剥片を素材とし主要剥離面側の刃部と基部の一部に浅い角度の剥離を加え、先行剥離面側全面に細かな2次加工を施したものである。刃部には使用による微小剥離痕がある。481は基部に成形時の素材剥片の折り取り面をそのまま残し、刃部は曲線的に内湾する。刃部には使用による微小剥離痕がある。482は裏面の側縁に施される2次加工の角度が浅く、その剥離面を打面として行われる表面全体の剥離の角度が急になるため、断面形が台形に



第50図　遺構外出土石器 (2)

ならず3角形になるものである。刃部には使用による微小剥離痕がある。486・487はa類の基部で、使用あるいは製作途中で折損したものである。488は基部の一部で、基部先端と刃部が折損している。489は使用によって折れた刃部である。折れ面は表面から裏面に斜めに走り、末端の形状はややヒンジ気味に湾曲したフェザーである。このような折れ面ができるのは、基部側から刃部側に向かって器表面に平行に近い浅い角度で強い力が加わることによるものである。490もa類の刃部で基部は折損している。折れ面には折損後に加えられた剥離があり、折損後も再加工して使用したことがわかる。刃部には微小剥離痕がある。

b類：（第51図483～485、図版34）

483は横長剥片の打面側にはa類と同様の2次加工を施しているが、ヒンジフラクチャーの末端側は2次加工が全くない。基部側もほとんど2次加工がなく素材剥片の縁辺をそのまま利用している。484は薄い素材剥片の打面側と1側辺を折り取り、末端にはa類と同様の2次加工を加えて、他の側辺に刃部を作出したもので、折れ面はそのまま残っている。表面は全面に2次加工が施される。基部が斜めに折り取られたままの形状である他は、形態はa類とよく似ている。刃部は表裏両面から加工されている。485は484と同様に薄い素材剥片を用い成形の際の折れ面をそのまま1側縁に利用したものである。もう一方の側縁に施される2次加工はa類と同じであるが、その剥離面を打面として表面全体に行われる剥離は全く行われず、表裏両面とも素材剥片の剥離面を残したままである。刃部は表裏両面から加工され、さらに使用による微小剥離痕がある。

c類：（第52図492、図版34）

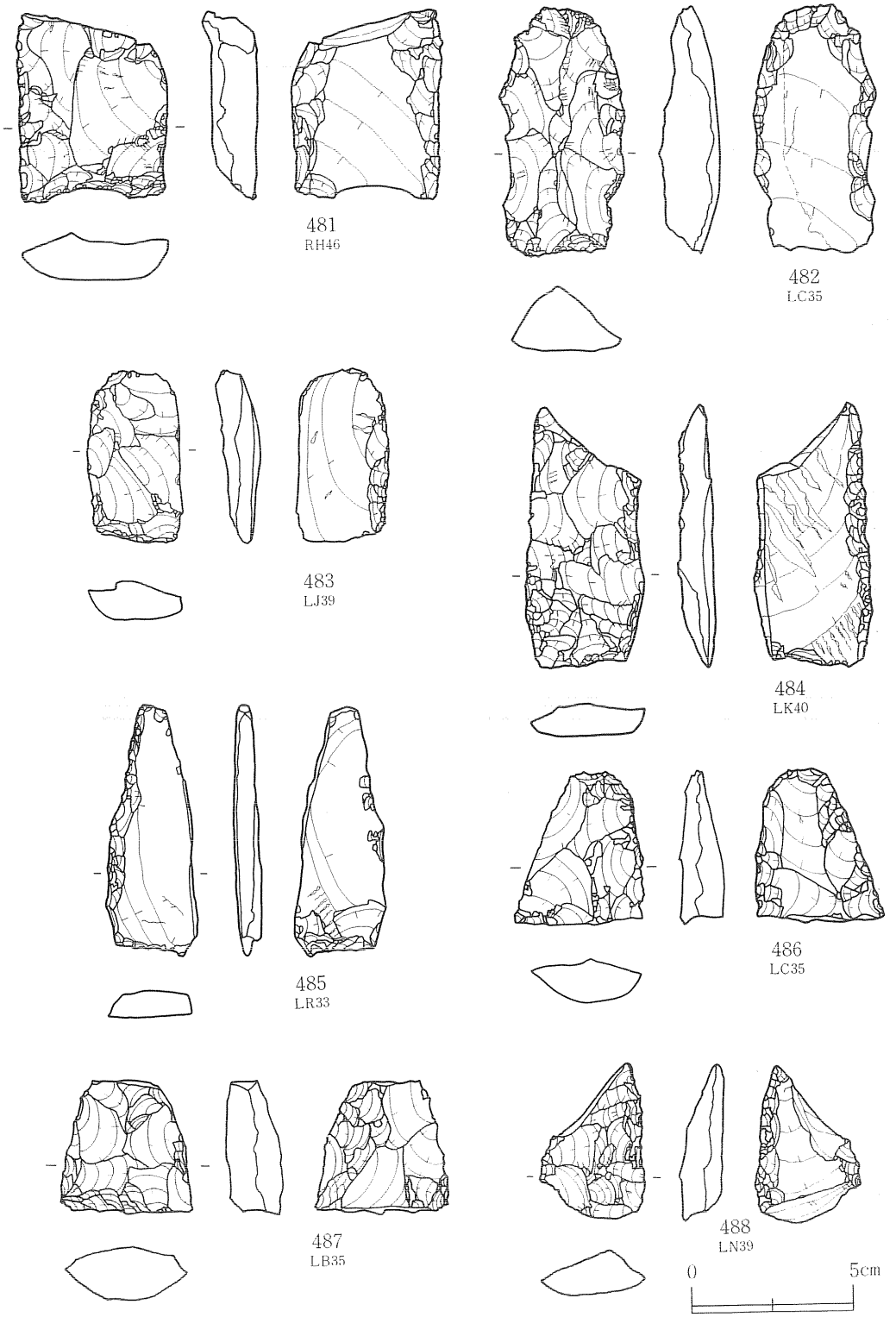
492は表面は四方から、裏面は両側縁から全面に2次加工を施し、素材剥片の剥離面を残さないものである。刃部は裏面に側縁から施されたやや大きな剥離面をそのまま残し、表面側に縦方向の剥離を入れて形状を整えている。c類は5点出土した。

ピエス・エスキーユ（第52図491、図版34）

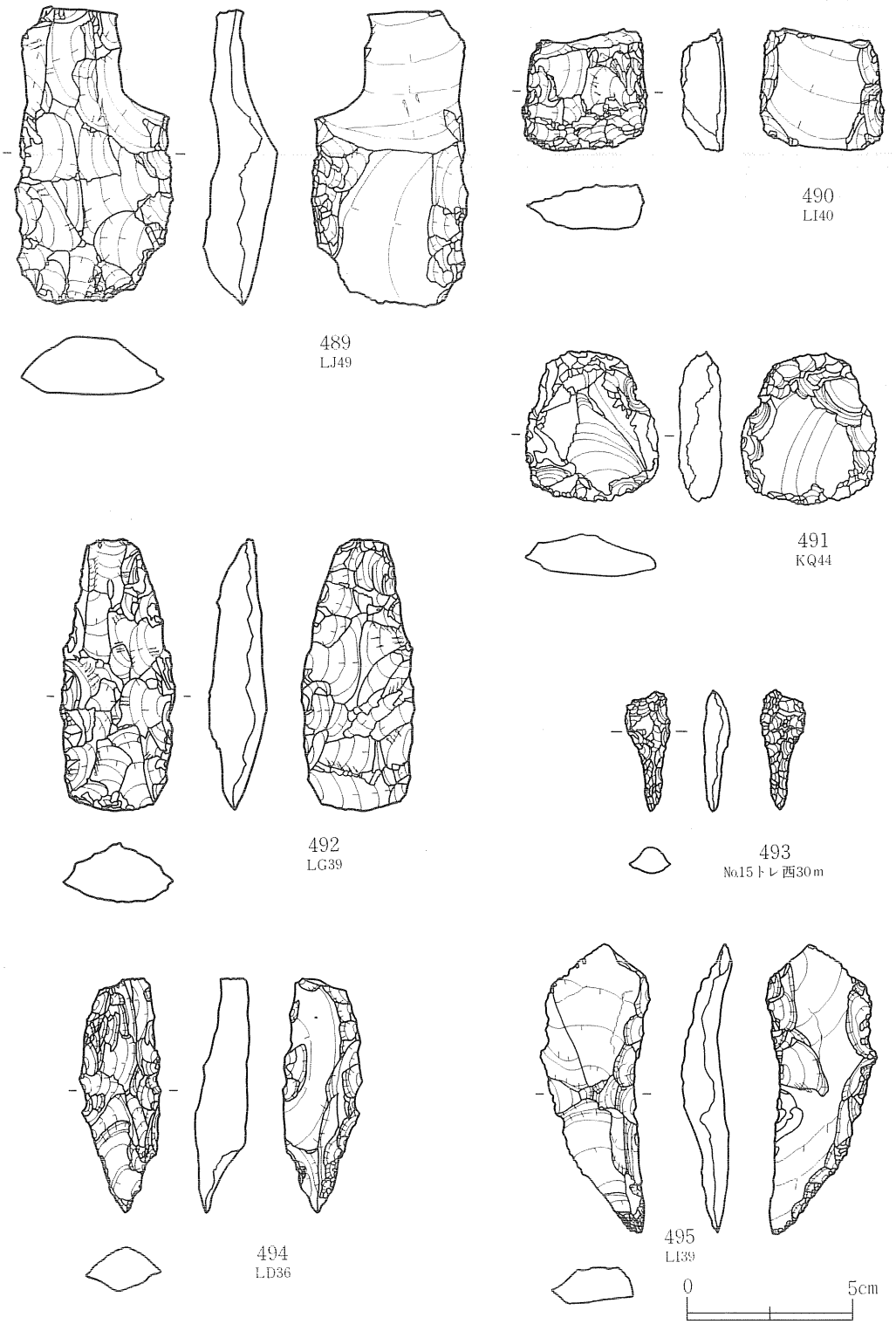
491は隅丸方形で上部の幅がやや狭い形態で、上下2方向の剥離痕がある。上辺、下辺ともに剥離面の潰れが認められる。これとは垂直方向の左右2方向にも剥離が加わり、上下辺ほどではないが剥離面が潰れている。1点のみの出土である。

石錐：（第52図493～495、図版34）

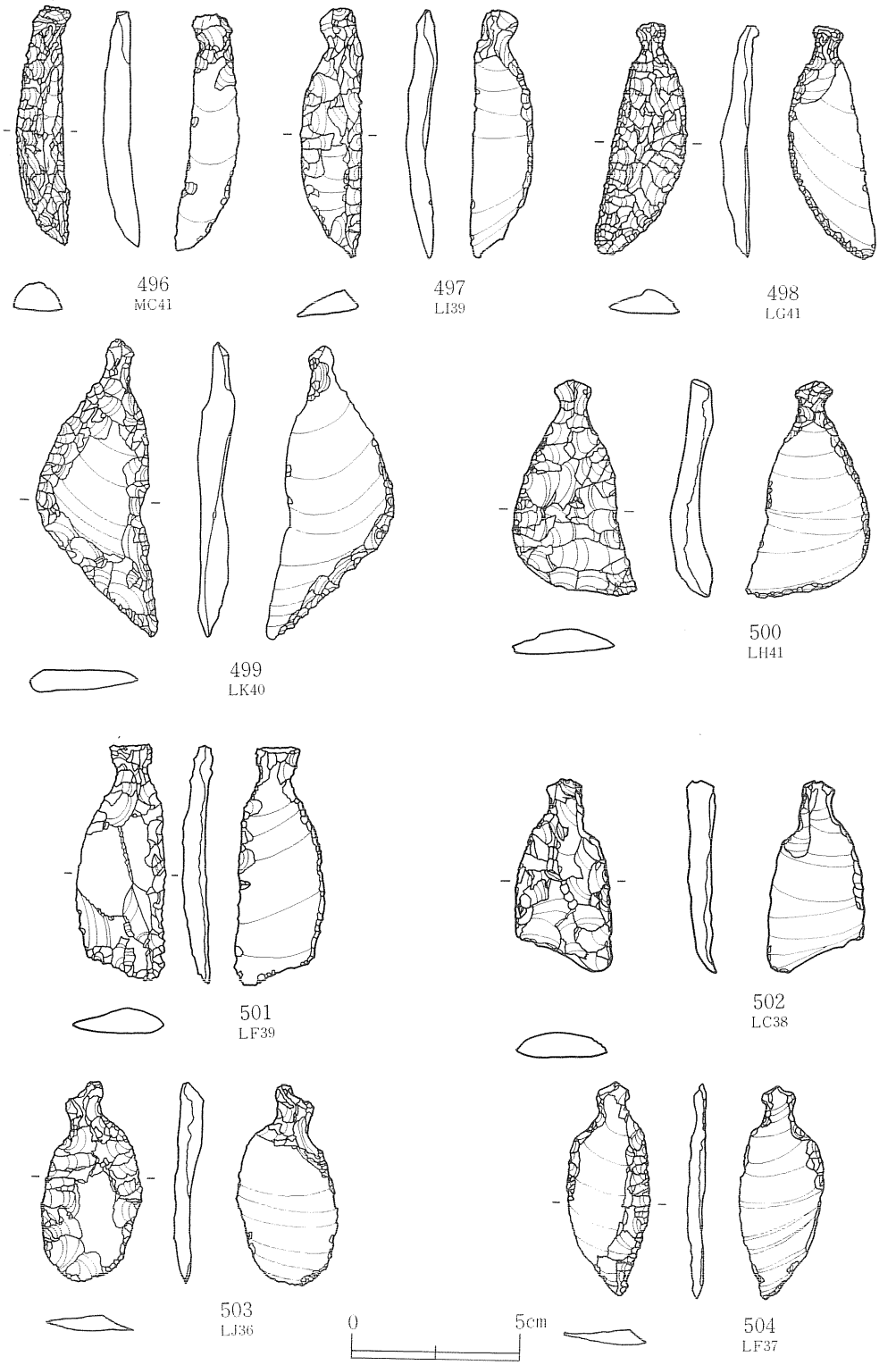
493は、全面に2次加工が施されている。先端は使用による磨滅が認められる。494は裏面に、495は表裏両面に素材剥片の剥離面を残す。いずれも打面側を折り取って細長い形に成形し、さらに錐部先端を作出している。剥片の鋭い縁辺には刃潰しの2次加工を施す。先端は使用による刃こぼれや磨滅が認められる。



第51図　遺構外出土石器 (3)



第52図　遺構外出土石器(4)



第53図　遺構外出土石器 (5)

石匙：（第53図496～第54図511、図版34）

縦形は45点、横形は3点出土した。496～507・509は縦形、508・510・511は横形である。縦形のものは506以外はすべて素材剥片の打面側につまみが作出される。496～498は幅が狭く縦に長い形態である。496・498は表面の全面に2次加工が施されるが、297は表面の一部に素材剥片の剥離面を残している。直線的な側縁が刃部で3点とも使用による刃こぼれが認められる。曲線的な側縁には、498は側縁全体に、496・497は側縁の一部に、刃潰しの2次加工が裏面側に施されている。499はやや大型で刃潰しの行われる側縁の屈曲が大きく3角形となるものである。刃部の中央には大きな刃こぼれがある。500も499と同様の特徴をもつものであるが、刃部は499より短く、刃潰しの行われる側縁の屈曲がさらに大きい。501は打瘤の両側にノッチを加えてつまみを作出し、つまみの上面には打面が残っている。表面にも素材剥片の剥離面が残る。つまみの対辺にも刃部が作出されている。502は幅に比べて長さが短い。つまみの上面には打面が残り、反対側はフェザーの末端がそのまま残っている。503は楕円形のものである。刃部は表面の左側縁で、刃こぼれがある。右側縁も裏面に刃潰しの2次加工がなく、刃部として利用されていた可能性がある。504は先端が鋭く尖ったもので、2次加工はあまり多く施されず、両面とも素材剥片の剥離面を残している。表面の右側縁が刃部で、左側縁の上半には両面から刃潰し加工があるが、下半にはなく、素材剥片の鋭い縁辺が残っている。505・506は素材剥片の周縁にのみ2次加工を行ったもので、つまみ部の作出も未熟である。505は素材剥片の主要剥離面の打瘤の両側から軽いノッチが入りつまみをつけようとする意図は認められるが、他の石匙のようにしっかりしたつまみはない。表面の右側縁が刃部である。506は素材剥片の末端側にノッチを入れてつまみを作出したもので、石匙の先端は打面と打瘤が残り盛り上がっていて厚い。507は3角形で刃潰しが2側縁に行われている。509は3角形であるが、499・507が3角形の1つの頂点につまみがつくのに対して、3角形の一辺につまみがつく。他の1辺は素材剥片のもっていた折れ面をそのまま残し、刃部は最長辺に表裏両面から剥離を加えて作出している。刃部が内湾するのはこの1点のみである。510・511は楕円形の長軸辺につまみがつく横形石匙で、表裏両面とも素材剥片の剥離面を残している。刃部は表裏両面から2次加工を施して作出している。いずれの刃部もゆるく湾曲している。

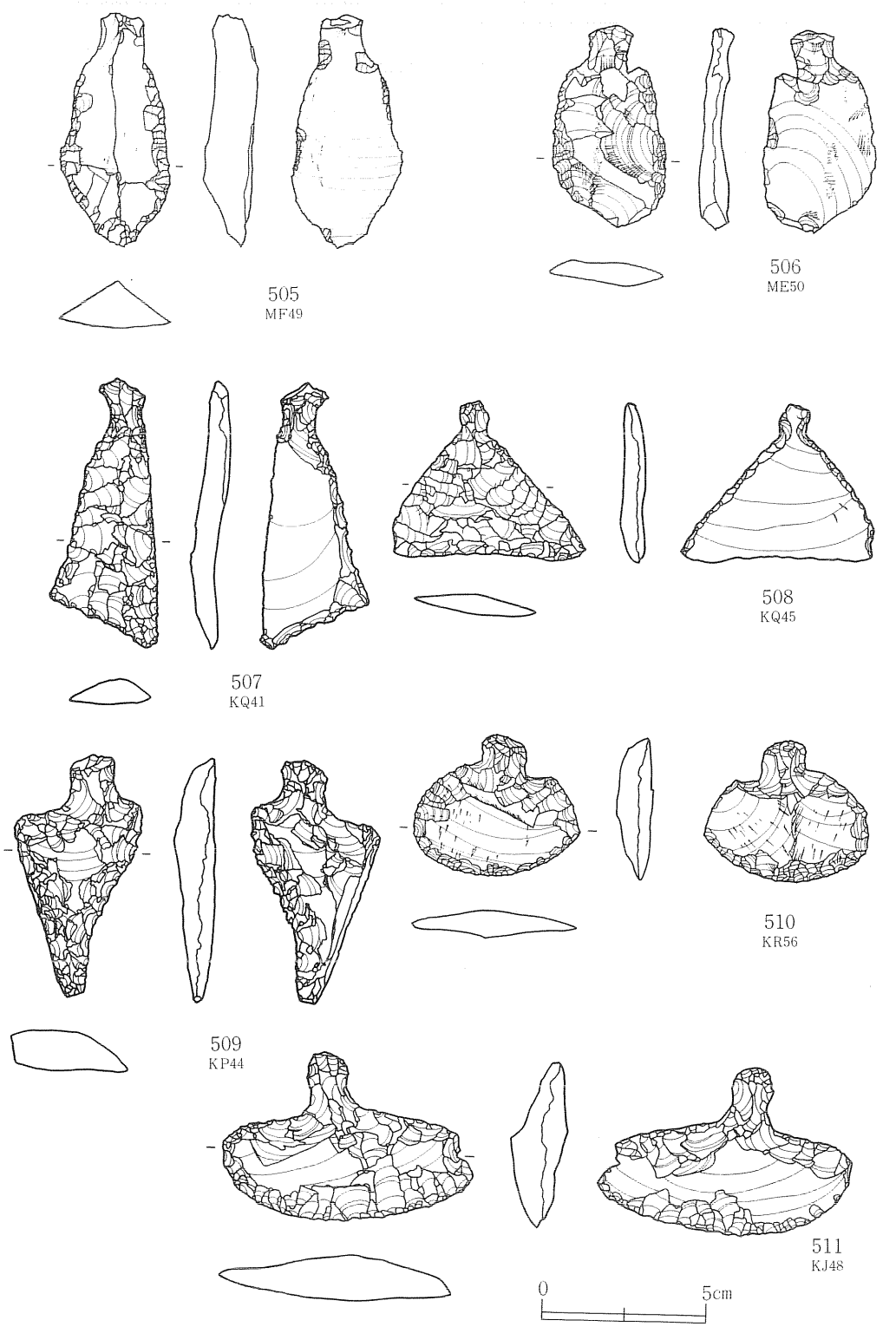
不定形石器：（第55図512～第61図555、図版34・36・37）

不定形石器は、不定形の剥片に2次加工を加え刃部を作出しているものを一括した。Toolの中では最も多く、205点出土した。製作技法や刃部の形状の特徴から以下のように分類する。

a　類：素材剥片の周縁全体に2次加工を施し、その一部に刃部を作出するもの。

b　類：素材剥片の周縁の一部に2次加工を施し、刃部を作出し刃潰しも施すもの。

c_1　類：素材剥片の一部を折断して成形し、その周縁に2次加工を施して刃部を作出し刃潰



第54図　遺構外出土石器 (6)

しも施すもので、折断面を残さないもの。

c_2 類：素材剥片の一部を折断して成形し、その周縁に2次加工を施して刃部を作出し刃潰しも施すもので、折断面をそのまま残すもの。

表裏面の状態

①：表裏両面とも素材剥片の剥離面を残さず2次加工が施されるもの。

②：片面に素材剥片の剥離面を残すもの。

③：両面に素材剥片の剥離面を残すもの。

刃部の状態

A：表裏両面に2次加工を施して作出した刃部をもつもの。

B：片面に2次加工を施して作出した刃部をもつもの。

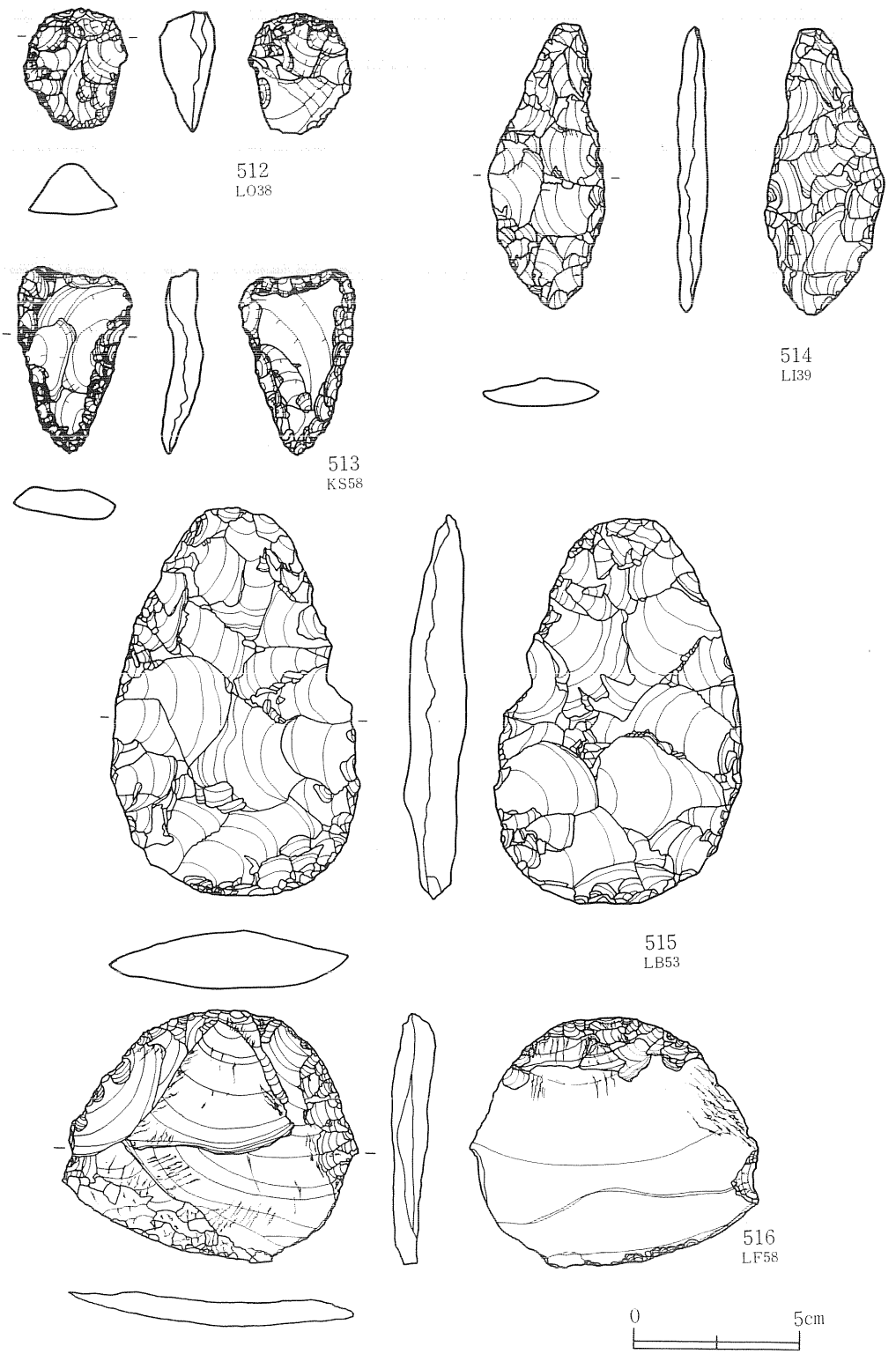
C：素材剥片の鋭い縁辺をそのまま刃部としたもの。

a類：（第55図512～516、図版34）

512はa②B、513はa③A、514・515はa①A、516はa③Bである。512は刃部が曲線的に突出する。513は表面の左側縁が刃部で、刃部以外の周縁には、両面から細かい加工が施され、素材の鋭い縁辺と打面を潰している。514・515は全面に2次加工が施されたもので、刃部は表面左側縁の上側に細かい剥離によって作出されている。516は表面の右側縁が刃部であるが、下半分ほどが折損し欠失している。薄く鋭利な刃部である。

b類：（第56図517～523・第57図524・第58図531・第60図549～551・第61図555、図版34・36・37）

517・521・531・549～551はb③B、518・519・523・524・555はb②B、520・522はb③Cである。517～522・524 1 m549～551は打面が残り、打面以外の周縁に2次加工を施す。523・531は打面にも2次加工を施して打面を取り去っている。517は表面の右側縁下半から先端部にかけてが刃部で、刃部以外は裏面の周縁にも加工を施して刃潰しをしている。518・519も表面右側縁下半に刃部があり他の周縁は刃潰しを行っている。これらは素材剥片の主要剥離面側の周縁に急角度の加工を施し、その剥離面を打面として先行剥離面側に浅い角度の2次加工を施している。このような技法は石匙や箆状石器の側縁にも見られるものでる。520は表面に礫皮面が残り、表面の側縁上半部に刃潰しを施しているものである。刃部は表面右側縁下半で、使用による微小剥離痕がある。521の表面右側縁は両面からの交互剥離によって刃潰しが行われ、左側縁の表面に細かい2次加工を施して刃部を作出している。刃部には使用による微小剥離痕がある。522は素材剥片の打面を残し、打面の両側縁の表面に部分的に刃潰しを施したものである。刃部は素材剥片の鋭利な縁辺をそのまま使用しており、使用による微小剥離が著しい。523は右側縁が礫皮面に近い部分で風化している。右側縁には両面から刃潰しを施し、左側縁が刃部



第55図　遺構外出土石器(7)

である。524は横長剝片を素材とし、左側縁に直線的な刃部を作出している。531は表面に礫皮面が残る。打面と側縁に刃潰しを施し、末端のやや裏面に湾曲する周縁の表面に2次加工を施して刃部を作出している。549は素材剝片の1側縁の表面側に細かい剝離を入れて曲線的な刃部を作出している。刃部は裏面側に所謂エンドスクレイパー様に湾曲している。550・551は刃部の反対側の側縁に風化の著しい礫皮面が大きく残る。刃部は直線的で表面のみに2次加工が施される。555は原石を大きく分割したのち、礫皮面を残したまま表面の一部と裏面のほぼ全面に2次加工を施して成形したものである。刃部の先端は両面に2次加工が施されて曲線的に突出している。

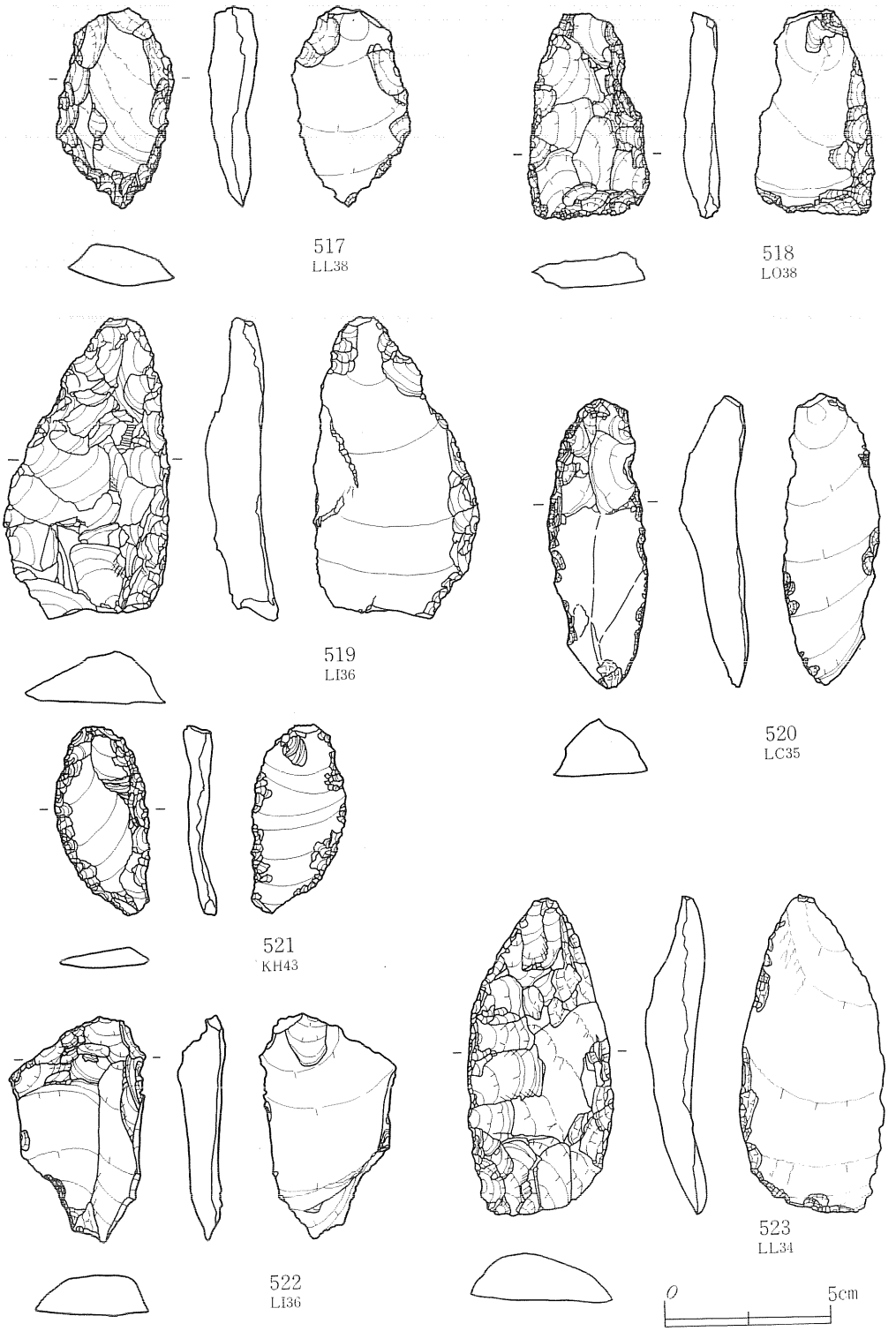
c_1類：（第57図526・第58図530・532・第60図548・第61図554、図版34・36・37）

526は$c_1$③C、530・548は$c_1$③B、532・554は$c_1$②Bである。526は大部分が風化した礫皮面で右側縁のみが硬質である。右側縁の上部には素材剝片の鋭利な縁辺が残り、これを刃部として利用している。刃部より下の右側縁には表面に刃潰しが入り、刃部が鋭角であるのに対し鈍角に仕上げている。530・532は素材剝片の鋭い縁辺の表面側に小さな2次加工を施し刃部を作出している。刃部以外の側縁には、裏面に深い角度の剝離を行ったあとにその剝離面を打面として表面に2次加工を施している。548は縦長剝片の打面側を折り取って除き、3角形に成形した後、左辺と下辺の2辺に刃部を作出している。いずれも表面に細かい2次加工を施している。他の1辺は両面に交互剝離を行って刃潰しをしている。554は風化した礫皮面の残る素材剝片の上半を折り取り、両側縁の両面に2次加工を施して成形している。刃部は下辺で、表面側にのみ剝離痕がある。折れ面にもやや大きな剝離痕が1枚ある。

c_2類：（第57図525・527～529・第58図533～547・第60図552・第61図553、図版34・36・37）

c_2類は不定形石器の中では最も数が多い。表面や裏面の2次加工の度合いで多様なバラエティーがあるが、基本的に折れ面をそのまま残し、刃部以外の側縁に刃潰しを行っていることでは共通する。不定形石器の中にあって製作技法的には一定のまとまりがある。形態的にもさらに細分できそうであるが、今回はc_2類として一括する。

525は$c_2$①B、527・528・537・539・540・544は$c_2$②B、529・533～535・542・543・545～547は$c_2$③B、536・538・541は$c_2$③C、552は$c_2$①A、553は$c_2$②Aである。527・528は折れ面の延長上、529・546・552・553は折れ面の対辺に刃部がある。525・533～539・547は折れ面を下に置いたときの右側縁、540～545・547は左側縁に刃部がある。525は素材剝片を2カ所で折り取って方形に成形したもので、表裏両面とも2次加工が全面に及んでいるが、折れ面は上下ともそのままである。刃部は右側縁上部で、右側縁下部と左側縁には刃潰しが行われている。527は横長剝片の打面を折り取り3角形に成形している。刃部は左側縁の上半部に作出され、折れ面以外の辺は刃潰しされている。528は素材剝片の打面側を節理面から折り取り、折れ面以外の

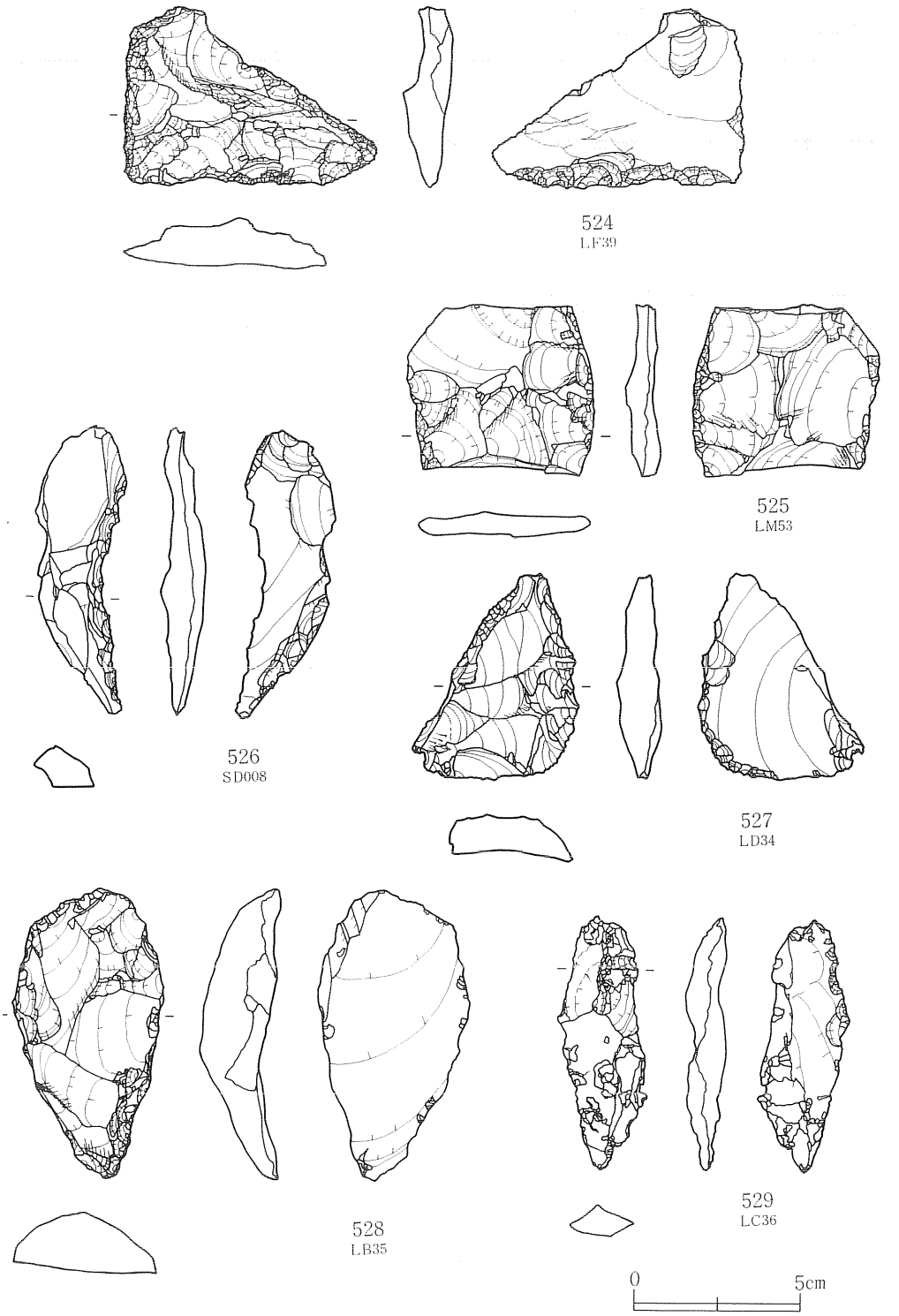


第56図　遺構外出土石器(8)

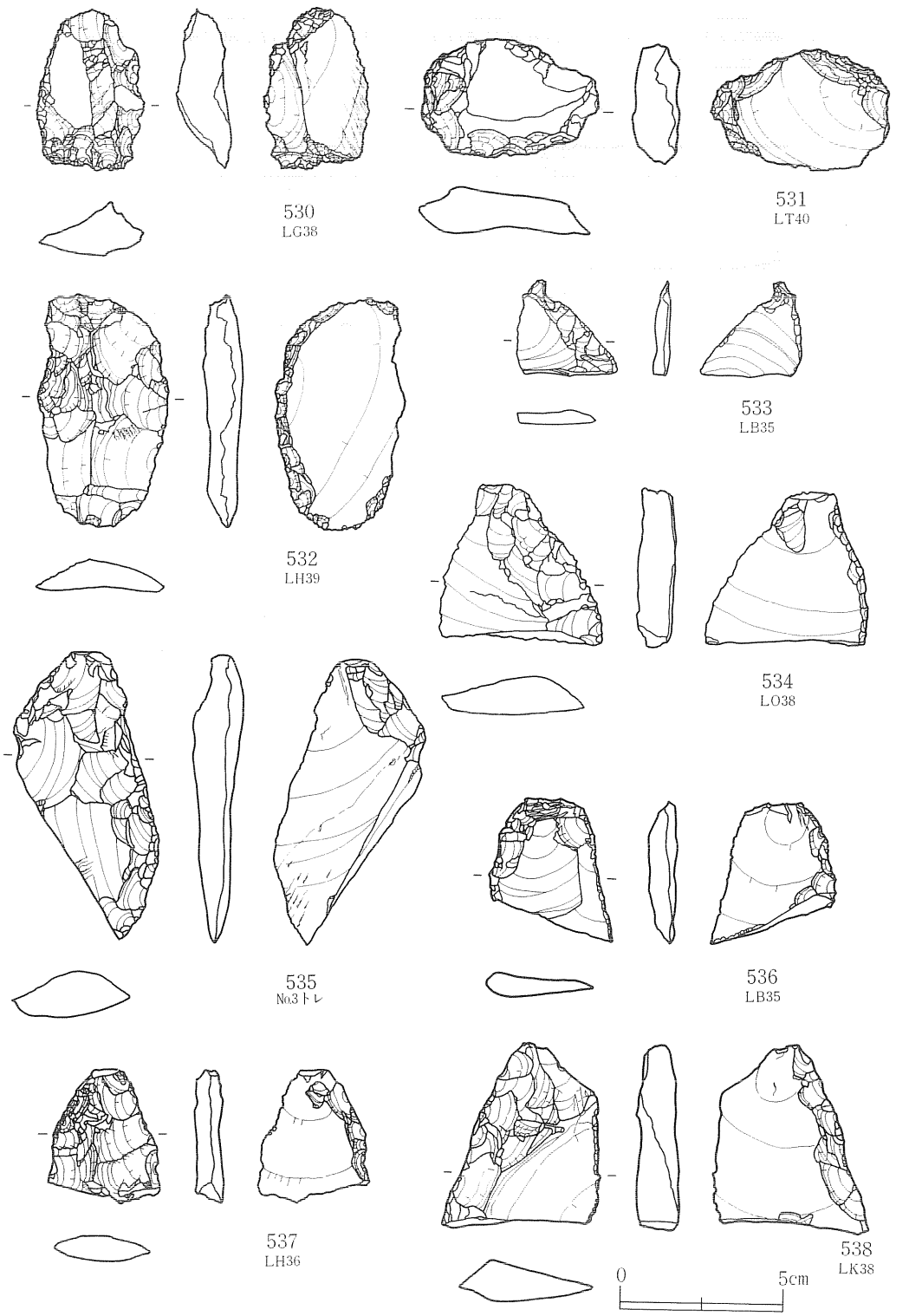
側縁の表面に2次加工を施している。表面は全面に加工が及んでいるが、裏面は全くない。左側縁の中央部から上半部にかけてが刃部として使用されている。529は表面が風化の著しい節理面で、左側縁上部には裏面側に細かい加工を施した刃部がある。右側縁が折れ面である。533は打面側を折り取り3角形に成形している。刃部は右側縁で表面に2次加工を施し、左側縁は逆に裏面から角度の大きい2次加工を施して素材剥片の鋭い周縁に刃潰しをしている。534～538・540は打面を残し剥片の末端側を折って取り去っている。534は、533と同様に3角形に成形され、2次加工も全く同様に行われている。大きさには違いがあるが、533・534は同一の形態、製作技法である。535は打面に対して折れ面が斜めになるものである。左側縁には裏面に2次加工を施し、それを打面として表面中央に及ぶ加工を行っている。右側縁は表面のみに2次加工が施される。刃部は右側縁の中央から下半で、打面側は刃潰しされている。536・538は縦長剥片の鋭利な縁辺をそのまま刃部として利用している。左側縁には表裏両面から交互に2次加工を施して刃潰しをしている。537も左側縁に交互剥離による刃潰しを行うが、右側縁の刃部は表面に2次加工を施して作出したものである。539は上下両辺が折れ面で、左側縁は裏面に角度の大きい加工を施し、その剥離面を打面として表面の2次加工を行っている。形態と表面の2次加工の状態からみて縦型石匙の上部が欠失したものである可能性もある。

540は533・534・537と同様に3角形に成形され、左側縁の表面に2次加工を施して作出した刃部がある。右側縁は交互剥離による刃潰しが行われている。542も3角形に成形され、左側縁に刃部、右側縁には539・541のような刃潰しの2次加工を施している。541は左側縁に素材剥片の鋭い縁辺を残し刃部としている。刃部と折れ面の対辺には裏面から大きい角度で2次加工を施し、その剥離面を打面として表面を加工する技法で刃潰しを施している。543は平行四辺形に成形したもので、折れ面の対辺は素材剥片の末端がそのまま残っている。刃部の対辺に539・541・542のような刃潰しを施している。545も543と同様に平行四辺形に近い形態で、刃部の対辺と折れ面の対辺に連続して交互剥離による刃潰しを行っている。

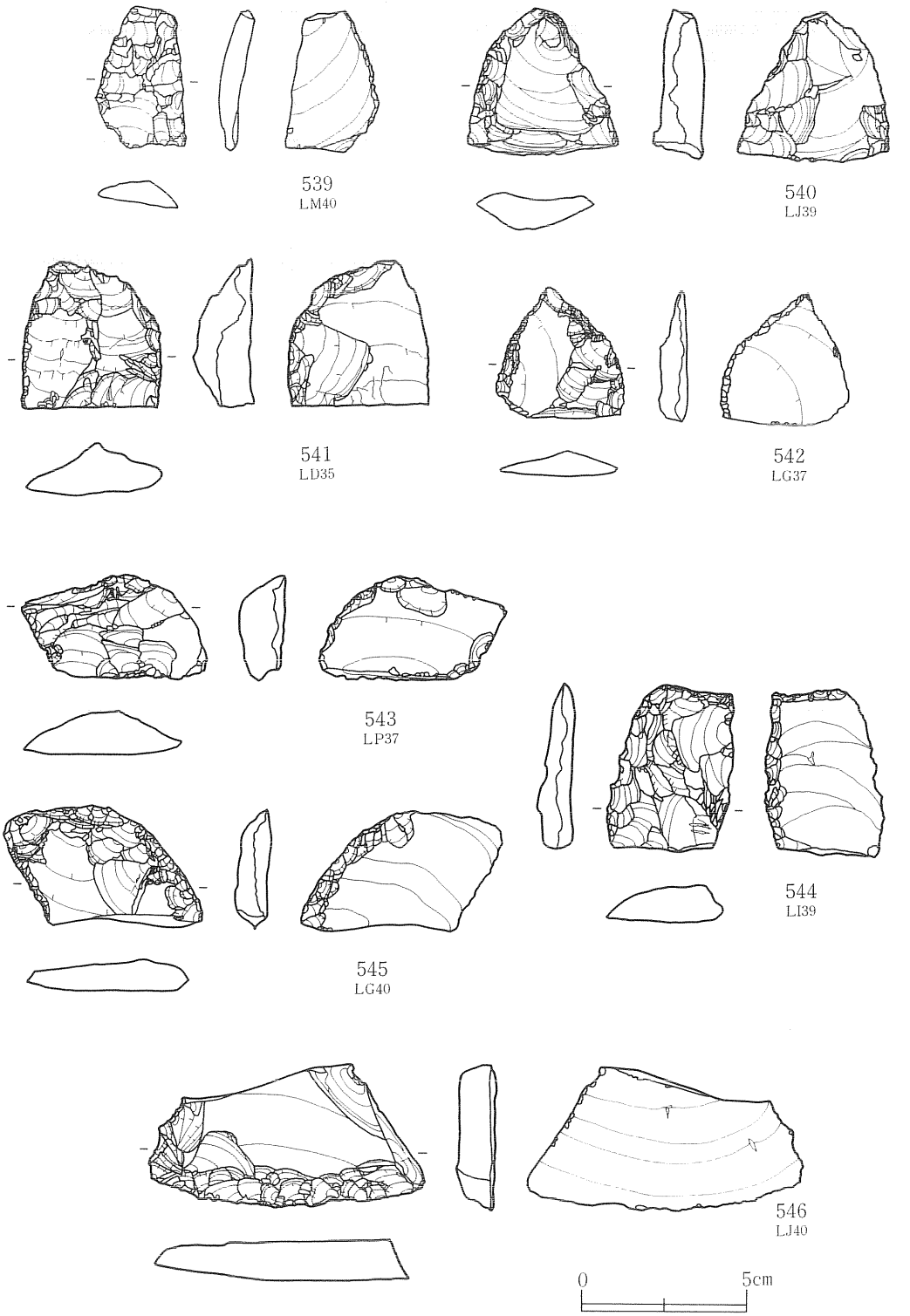
544は長方形に成形され左側縁に刃部がある。刃部と折れ面の対辺には539・541・542のような技法で刃潰しを行い、表面全体に2次加工を施している。546は横長剥片の末端近くを折り取り、さらに左側辺も折り取って成形している。刃部は表面に2次加工を施して作出している。刃潰しは右側縁にわずかに施される。表面は節理面で平坦である。547も側縁の刃潰し加工はなく、折れ面や素材剥片の縁辺が残る。552は折れ面の対辺が刃部である。表裏両面とも全面に2次加工が施され、折れ面のみが加工されていない。刃部と折れ面以外には刃潰しが施されている。553は打面のある側を折り取り半円状に成形している。刃部は表面から2次加工を施して作出しており、折れ面を除く刃部以外は交互剥離によって刃潰しがなされる。



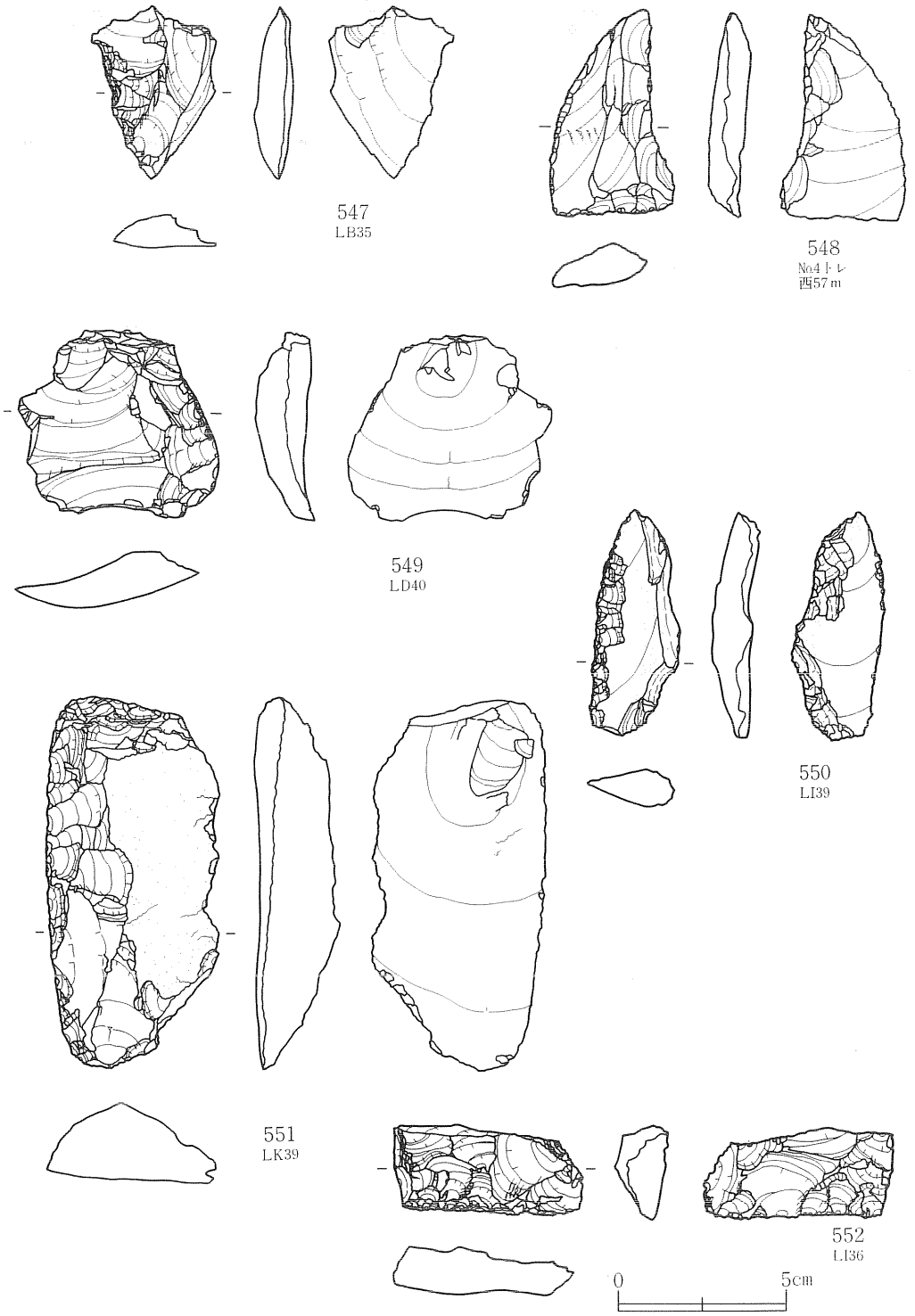
第57図　遺構外出土石器(9)



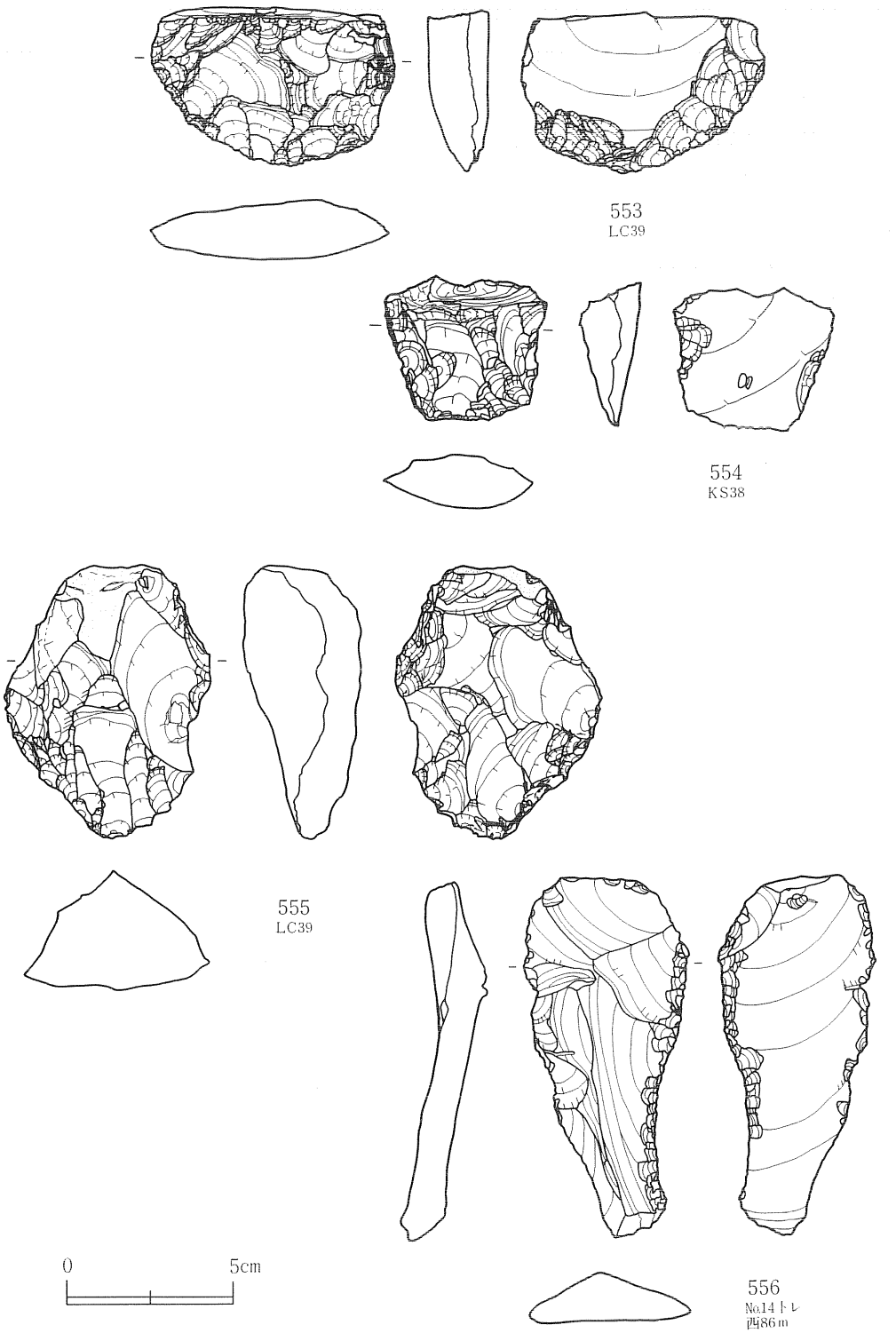
第58図　遺構外出土石器(10)



第59図　遺構外出土石器 (11)



第60図　遺構外出土石器(12)



第61図　遺構外出土石器(13)

微小剥離痕のある剥片：（第61図556、図版37）

使用による刃こぼれ等の微小剥離痕のある、２次加工の施されない剥片である。556は縦長剥片の両側縁に微小剥離痕がある。

打製石斧：（第62図557・558、図版38）

打製石斧は４点と少数である。557は大型の縦長剥片を素材とし、全周にわたって表裏両面から２次加工を施し撥形に成形している。刃部には使用によってできた潰れがある。基部は折損している。凝灰質頁岩製である。558は短冊形の礫の上部に左右から抉りを入れてくびれ部を作出している。この基部の抉りと刃部以外には２次加工はない。刃部は使用によって潰れている。凝灰岩製である。

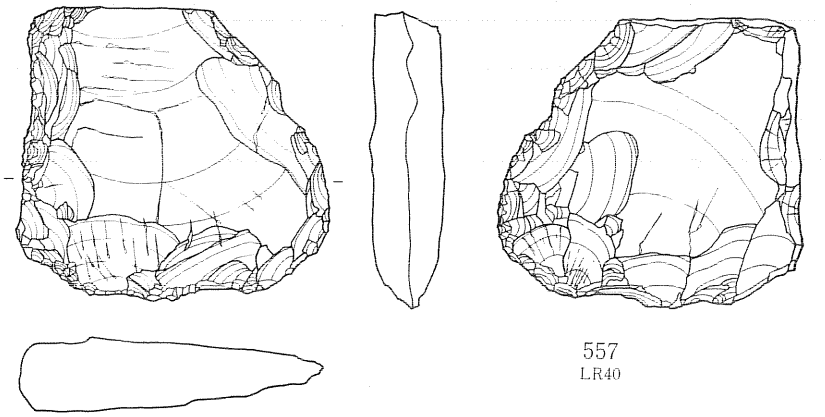
２次加工のある剥片：（第63図559～第70図587、図版38）

剥片に２次加工を施したもののうち、定形石器及び刃部の作出されたものを除き、刃部をもたない２次加工の施された剥片を一括した。中にはToolの未製品や折損した石器の基部等も含む。

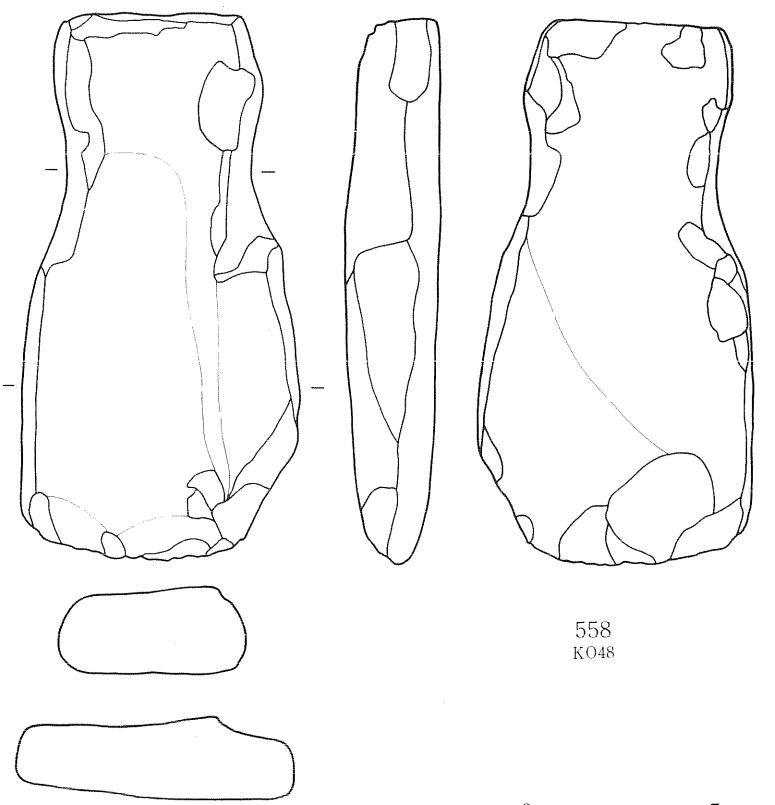
559～565は箆状石器ａ類の未製品と思われる。559～563は横長剥片を素材とし、打面と末端に主要剥離面側から角度の大きい２次加工を施し、その剥離面を打面として表面全体に角度の浅い２次加工を施すものである。この剥離の段階で基部側を細く、刃部側を広く作出している。559は中央部で折れた状態で出土し、接合したものである。中央部より下部には素材の表面にあった瘤状の高まりがあり、これを除くために中央から折り取ったものと考えられる。560～563も両側縁と表面の加工が行われており、刃部を作出する前の段階で棄てられたものと思われる。564・565は箆状石器ｃ類の未製品と思われ、両面に２次加工が施されているが、刃部は作出されていない。

566～569は石槍の未製品と考えられるものである。566は第49図471と同じ形態の石槍を製作する途中のもので、先端と基部が細く中央が幅広に加工され先端には裏面にも２次加工が施される。しかし器形は左右対称ではなく先端はまだ鋭利ではない。567も表裏両面とも全面に２次加工が施され形態が整えられているが、先端には節理面が少し残り鋭利に仕上げられていない。中央から折損し基部は欠失している。568・569はやや厚みのある石槍の未製品で、先端が鋭利に加工されていないものである。570・571は石槍の基部と思われる。

572～575・577は全面に２次加工が施され丸みのある先端を作出しているもので、いずれも途中から折損している。石槍の基部の可能性もあるが、多量に出土しており接合する先端はない。折損品ではなく、不定形石器c_2類のように、折れ面を有するこの状態で何か他の機能を果す石器かも知れない。577は粘板岩製、他は頁岩製である。576は凝灰質頁岩製の横長剥片の一端を折り取り、両側縁に２次加工を施して折れ面の反対側を細く尖らせたものである。578は厚



557
LR40



558
KO48

0　5cm

第62図　遺構外出土石器 (14)

みのある素材剥片の全面に2次加工を施し棒状に仕上げたもので、上部が細く中央から下半はやや幅広である。上下両端とも丸みを帯びる。石材は頁岩で全体に磨滅が著しくスベスベしている。用途は不明である。

579は大型の横長剥片を用い、表裏両面に2次加工が施し成形している。表面に一部節理面が残っている。下辺は折れ面で、両面に2次加工を施した後で折れたものである。580は表裏両面とも素材剥片の剥離面を残さず、やや大きめの剥離痕がある。一端を尖らせているが刃部や鋭い先端を作出してはいない。

581・583は2辺に折れ面があり、折れ面には表面側に角が潰れたような細かい剥離痕があるが裏面側には到達していない。581は裏面に素材剥片の剥離面を残すが、583は全面に2次加工が施されている。側縁には細かな剥離痕があり、ピエス・エスキーユの可能性もある。剥離痕のある両辺が平行でなく、剥離の方向も角度がややずれるのでピエス・エスキーユとはしなかった。

582は不定形石器の未製品である。一辺に折れ面を有し、他の一辺には表面側に刃部を作出するような幅が狭くて長い2次加工を連続的に施している。しかしこの辺の平面形も正面形も不規則な出入りが著しく、刃部としてはまだ未完成である。この部分のみ裏面は素材剥片の剥離面が残る。585～587は大型の横長剥片を用い、側縁に2次加工を施し全体の形態を長方形ないし楕円形に成形したものである。素材剥片の一部を折り取っておよその形態を作り、その後主要剥離面側に角度の大きい2次加工を施し、その剥離面を打面として表面に側縁からやや大きめの2次加工を施している。585・587はこの加工によって表面が平坦に仕上げられている。585の短辺は2辺とも折れ面のままで、裏面からの角度の大きい剥離痕はない。586・587は一辺に折れ面が残るが、その対辺は丸みを帯び曲線的に作られている。

礫石器：（第70図588～589、図版38）

588は頁岩の偏平な礫を用い、表裏両面から2次加工を施して1辺に刃部を作出している。

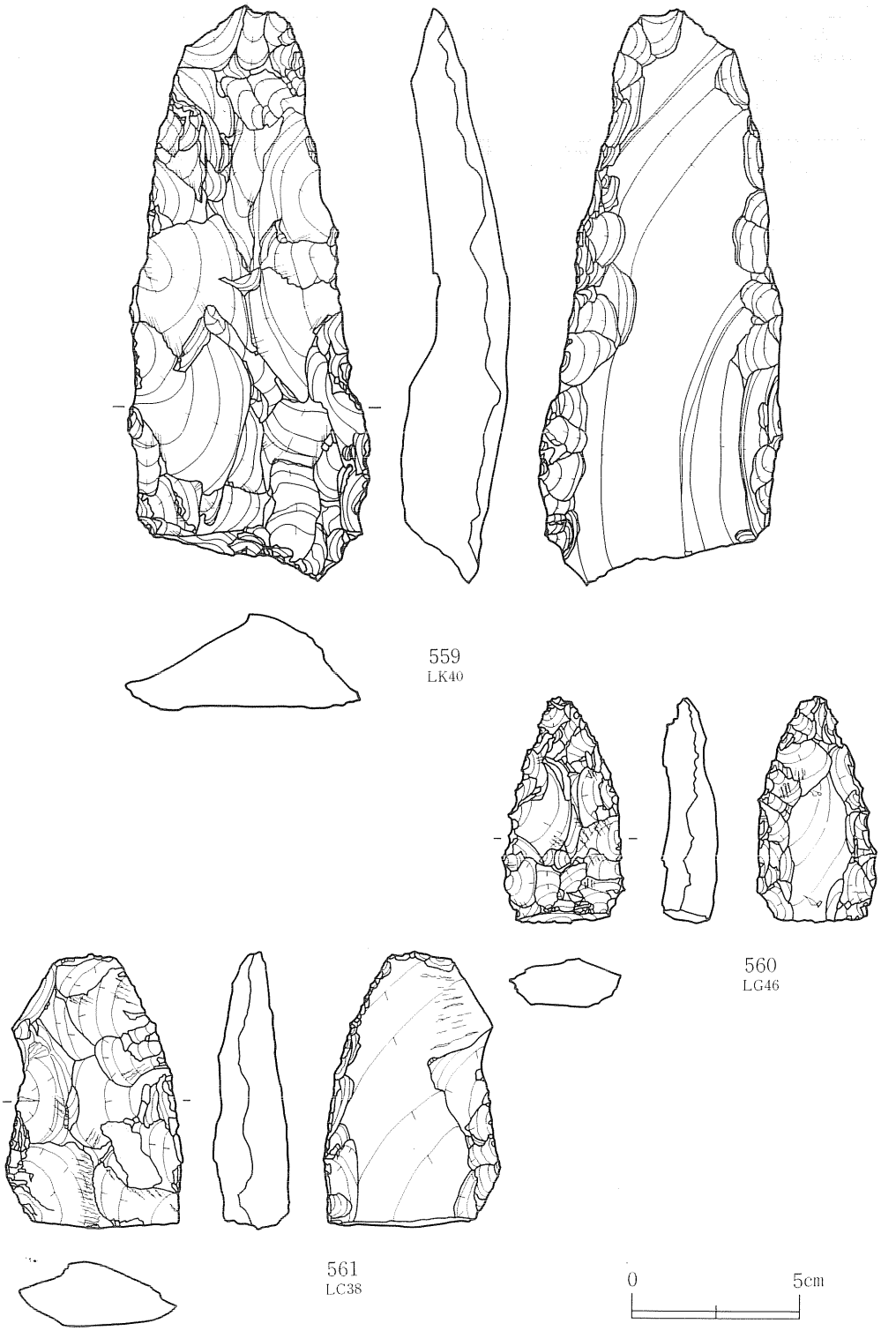
589は凝灰岩製で、周縁を潰すような加工が施されている。

石核：（第71図590、図版39）

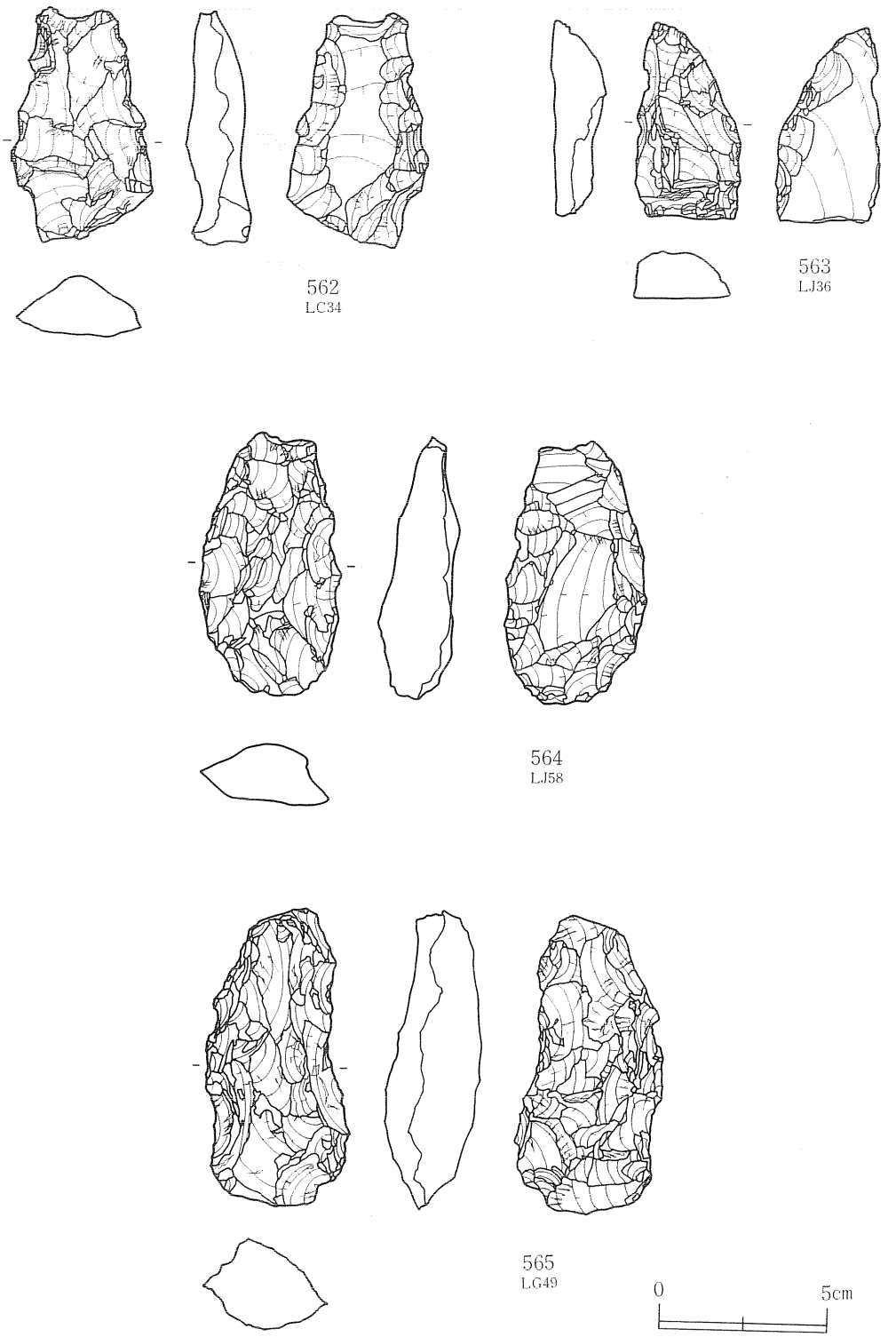
頁岩の原石を分割して取り出した石核である。平坦な打面から長さが3～4cmの剥片を連続して剥離している。先行する剥離痕は末端がフェザーであるが、しだいに末端がヒンジになり、長さも短くなっている。さらに打面を180度転移し、作業面も90度変えて剥片剥離が行われている。石核はこの他にも多数出土している。これらの石核は打面と作業面を様々に転移しており、打面は分割面または先行剥離面で特別な打面調整はしていない。

接合資料：（第71図591～第73図596、図版39）

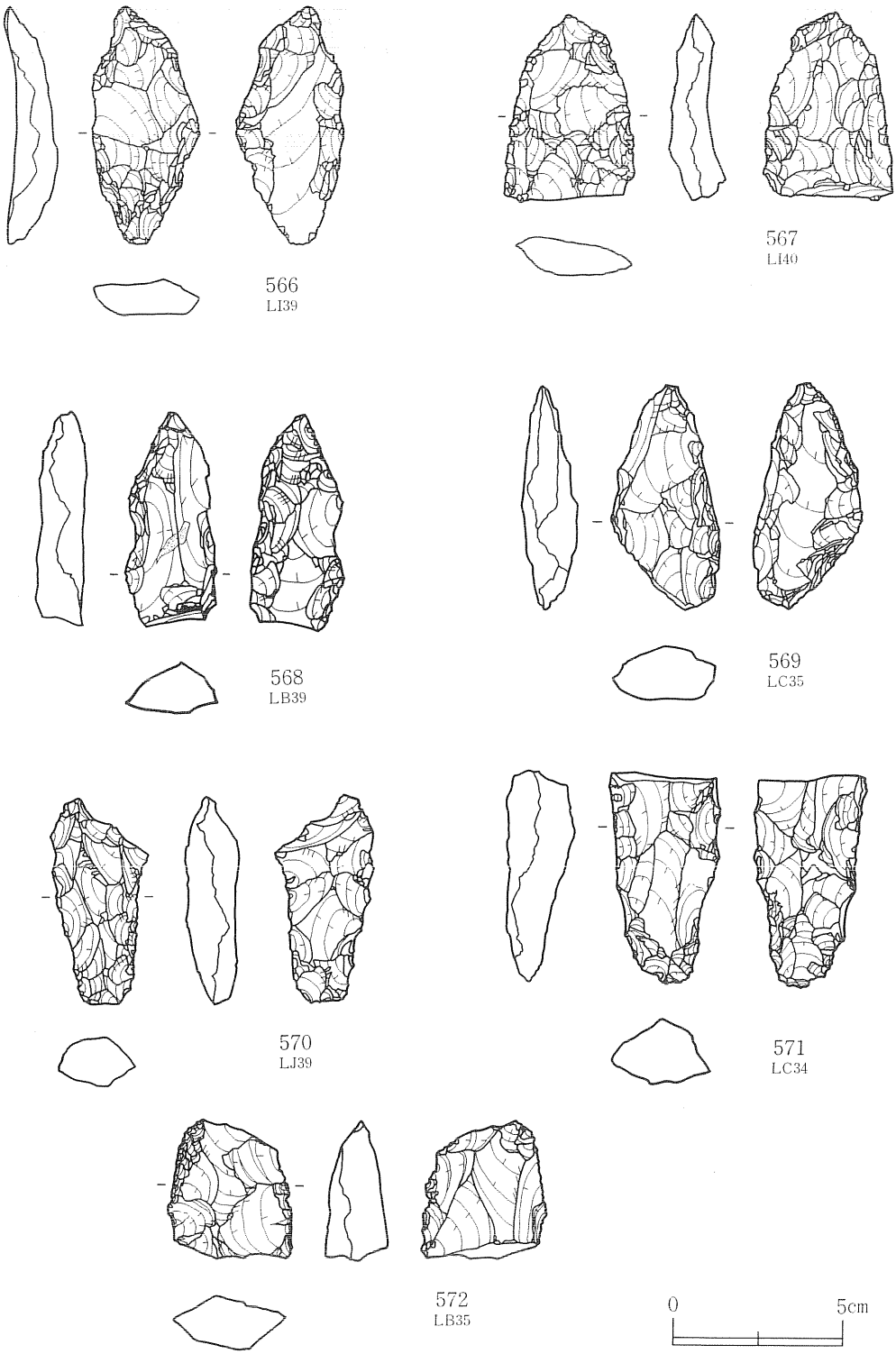
591は原石を節理面で分割した石核と剥片の接合である。分割によってできた面を打面とし、



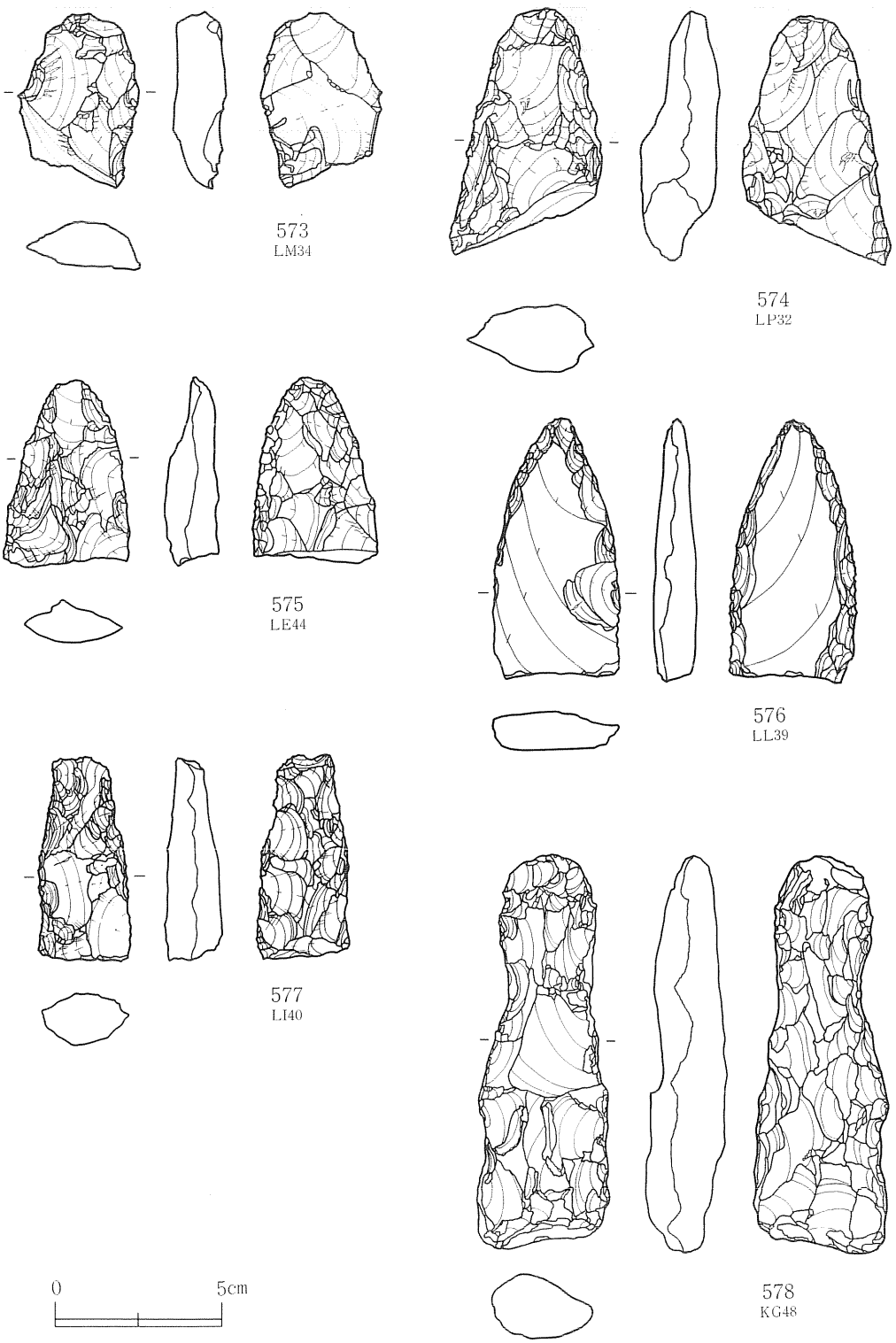
第63図　遺構外出土石器 (15)



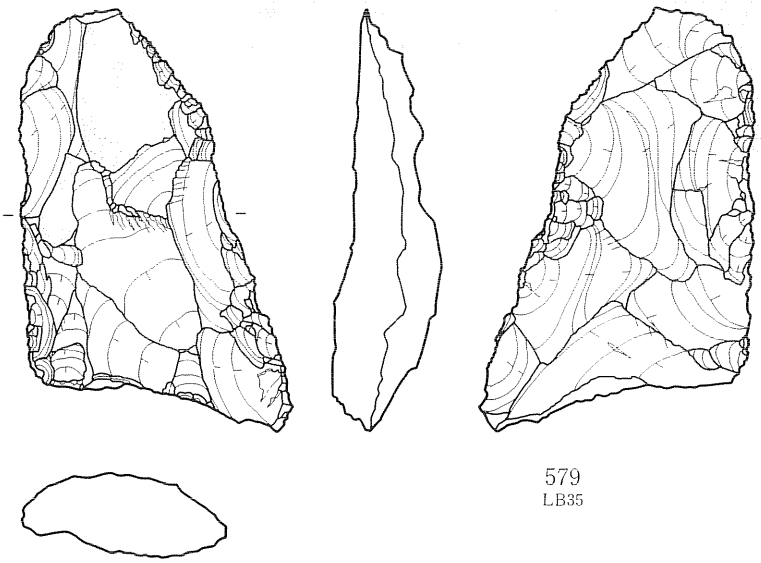
第64図　遺構外出土石器(16)



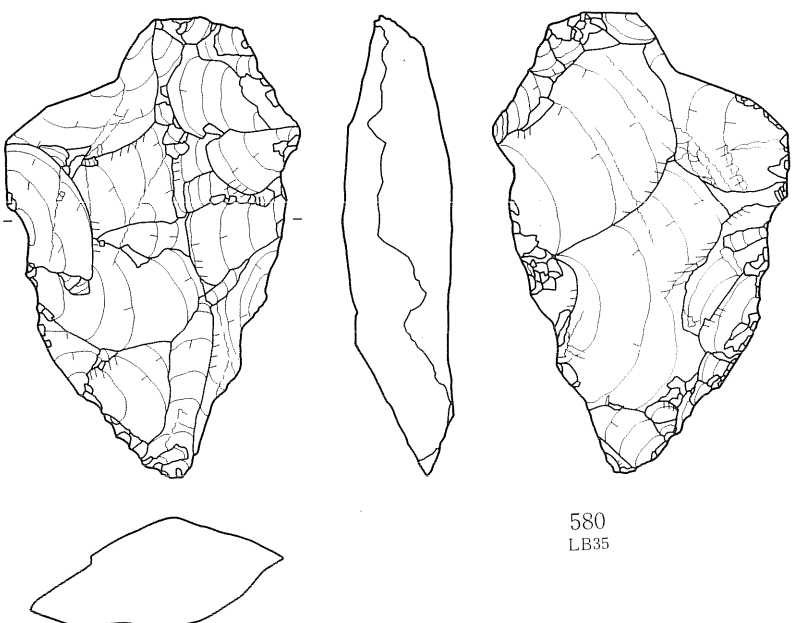
第65図　遺構外出土石器 (17)



第66図　遺構外出土石器(18)



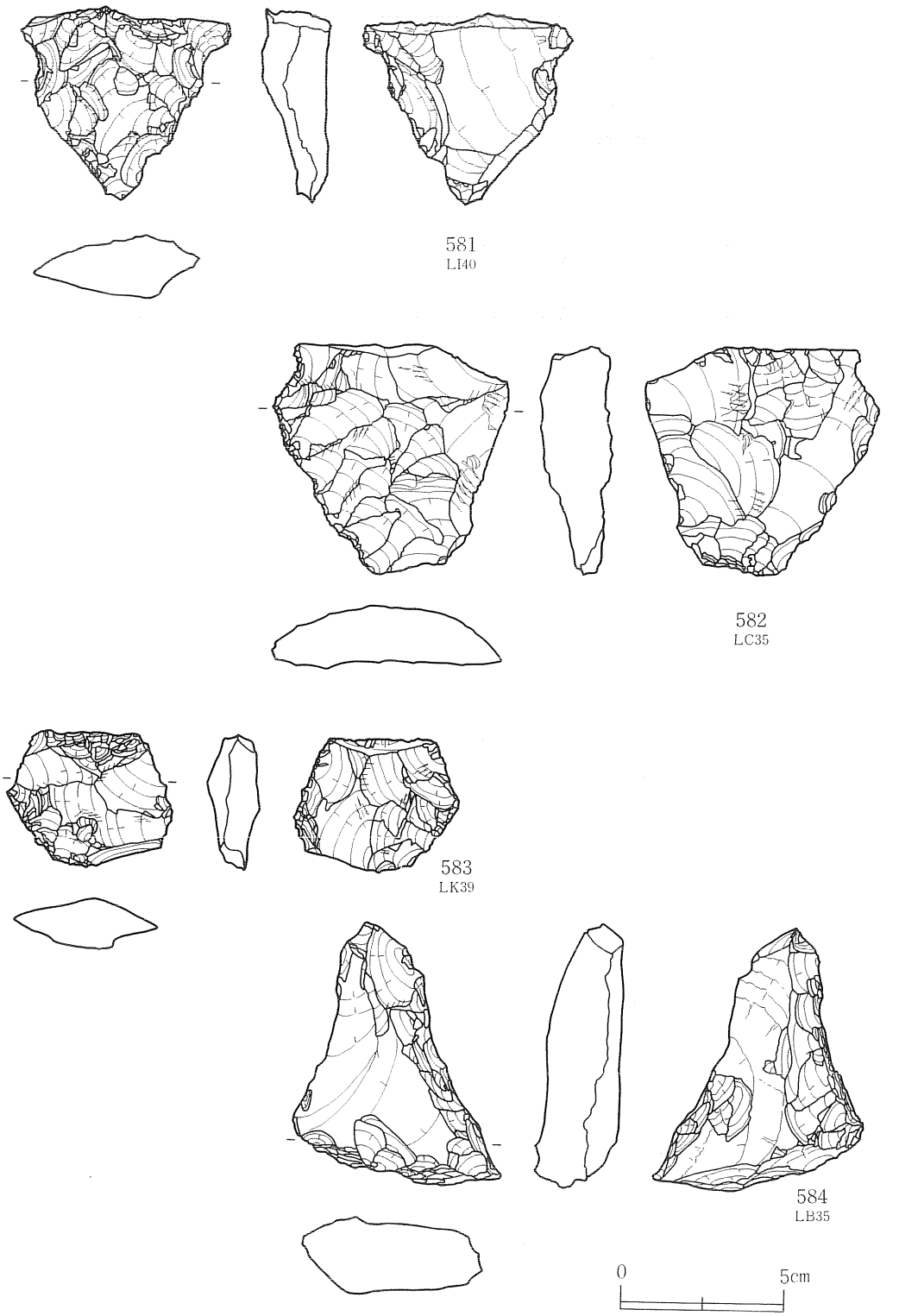
579
LB35



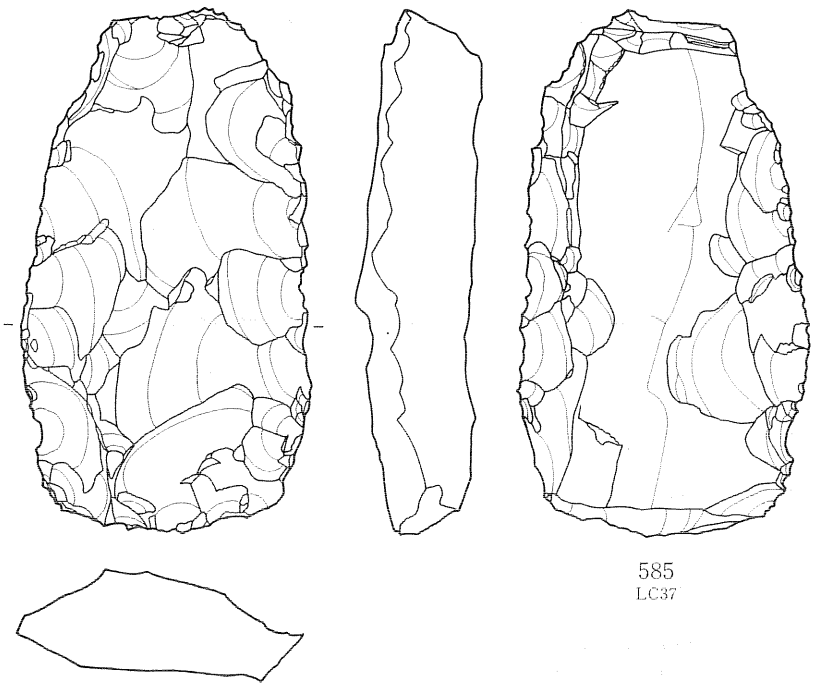
580
LB35

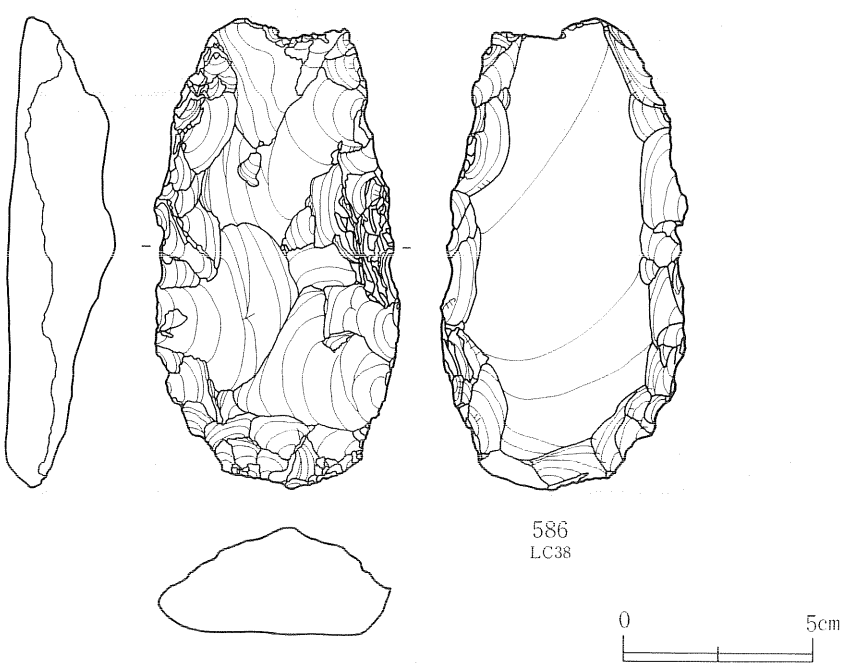
0　5cm

第67図　遺構外出土石器(19)

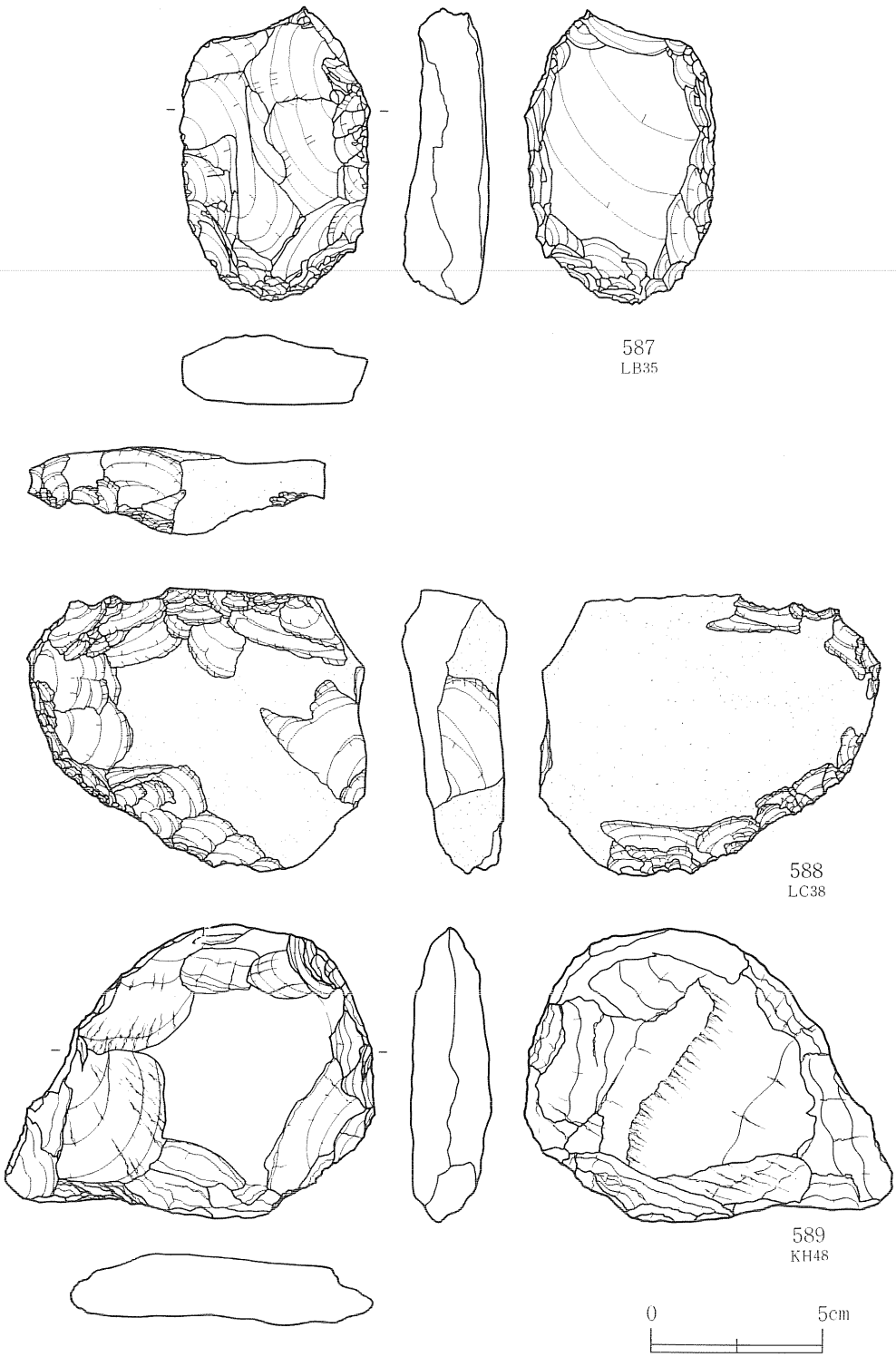


第68図　遺構外出土石器 (20)

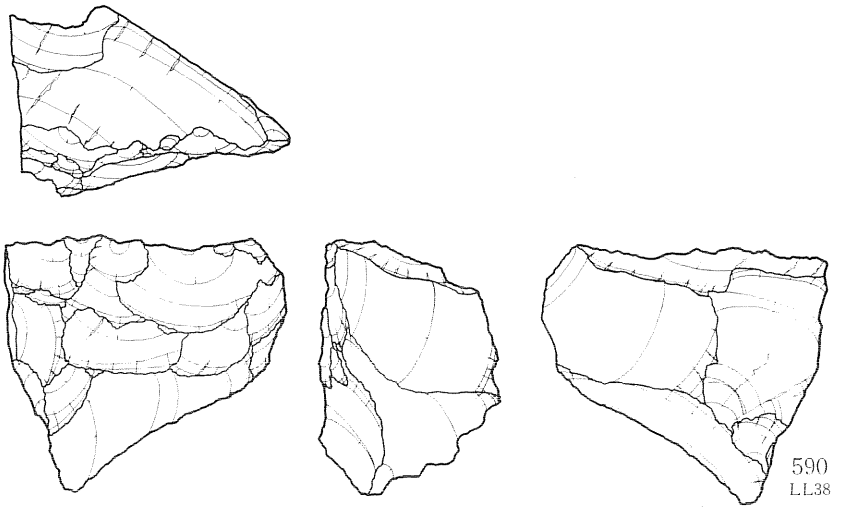


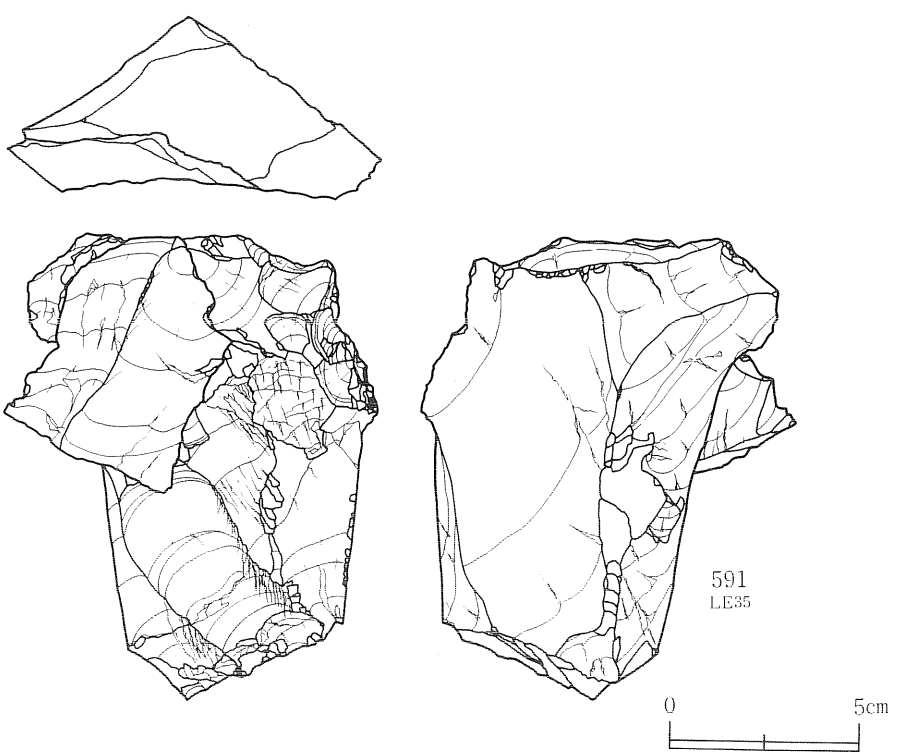


第69図　遺構外出土石器 (21)



第70図　遺構外出土石器 (22)





第71図　遺構外出土石器(23)

同様の作業面で打面を周縁全体に転移させながら剝離を行っている。接合した剝片はこの作業面においては上辺からの最終剝離によって剝ぎ取られたもので、この後打面を下辺に転移しさらに剝離を継続している。592は剝片どうしが5枚接合した。剝片の表面はいずれも石材の節理面である。剝離は向き合う2辺を打面として行われ、両方の打面から交互に剝ぎ取られている。剝片の末端はいずれもフェザーで、5枚のうち3枚は横長剝片である。石核の表面の節理面を剝ぎ取るための剝離を連続的に行ったもので、直方体に近い形をした石核表面の角の部分から剝離を開始し、次に辺を取り除いている。加撃の方向は一定ではなく、剝ぎ取ろうとする面に合わせて変化させている。594は打面をほぼ90度転移して剝ぎ取られた2枚の剝片が接合したものである。いずれの剝片も表面に節理面が残っており、石核の表面にある節理面を取り除くための剝離によってできた剝片である。595も表面に節理面のある剝片が接合したものである。一方の剝片は折損し打面側が欠失している。596は同一打面から4枚の剝片が剝ぎ取られているが、3枚を連続して剝ぎ取った後、他の1枚は作業面を90度変えて剝ぎ取っている。打面は石核表面の節理面である。

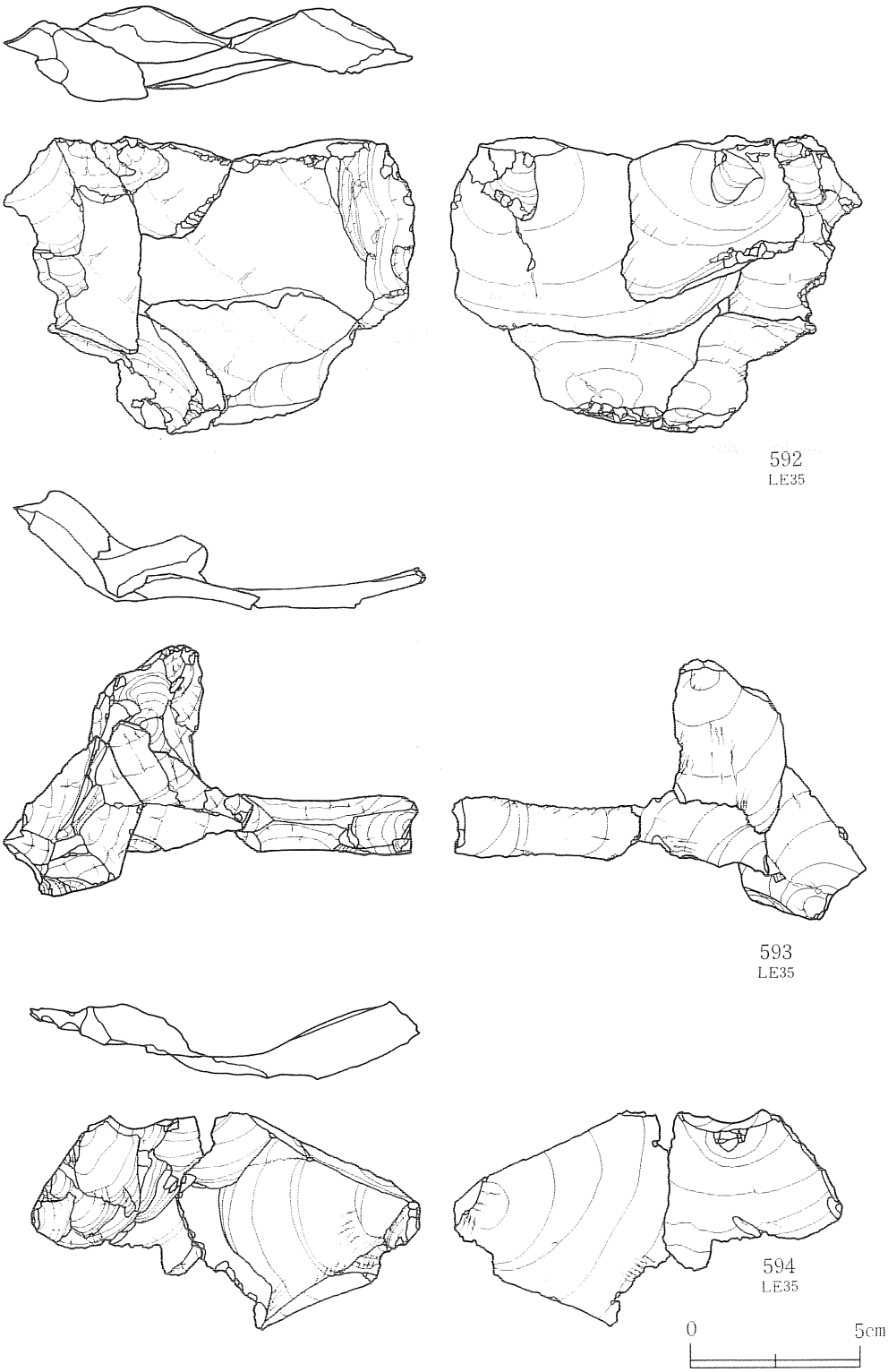
591～595の接合資料は石核の表面に節理面があり、その節理面を取り除く剝離という共通点が認められる。原石の節理面を利用して分割して石核とし、まず石核表面の節理面を打面を変えながら全面にわたって剝ぎ取り、さらに同一打面から作業面を整えるための剝離を行って石核を整形するという工程が復元される。

磨製石斧：（第74図597～第76図605、図版39）

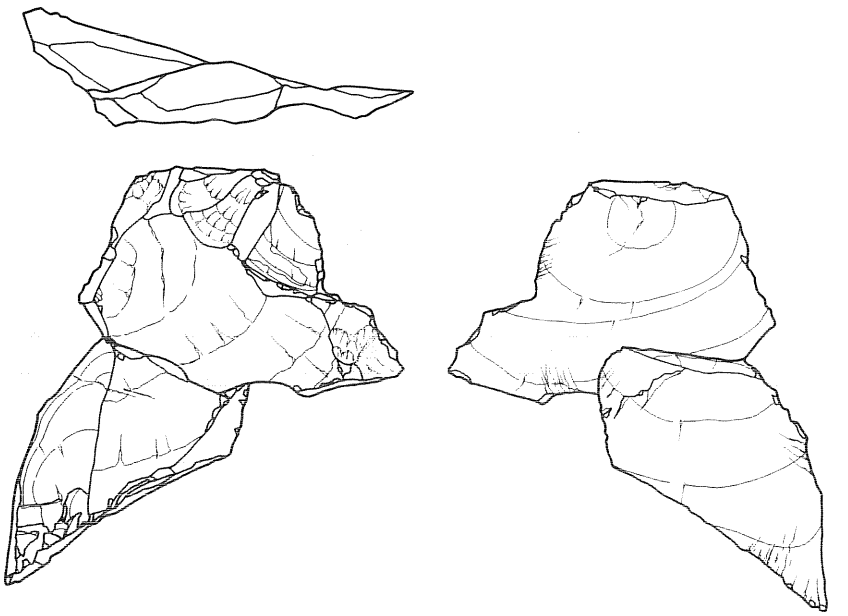
597・598は砂岩製で、598の刃部に磨面を残しているが、全体に表面が磨滅している。基部に明瞭な稜線をもち刃部は曲線的に突出するが、使用によって欠けている。599～605・607は緑色凝灰岩製の磨製石斧である。599は基部に明瞭な稜線をもち、表裏両面とも研磨によって平滑にされ、薄く板状の形態である。刃部は使用による潰れが著しい。600は小型の礫を素材にしており、表裏面とも素材の礫皮面が部分的に残り凹凸がある。刃部は不規則な曲線で、使用して刃こぼれした後に研磨して刃部を再生している痕跡がある。601は最も刃こぼれの少ないもので、基部は明瞭な稜線をもち刃部は曲線的でやや斜めに傾いている。602・603は中央より上部で折れ、基部の先端が残ったものである。602は基部の先端が鋭く尖っているが、603は明瞭な稜線をもち長方形の平坦面になっている。604は602・603とは逆に中央より上部で折れ、基部が欠失し、刃部側が残ったものである。丸味のある稜をもち、刃部の先端は研磨して再生しておりやや斜めである。

石剣：（第76図606・607・609、図版39）

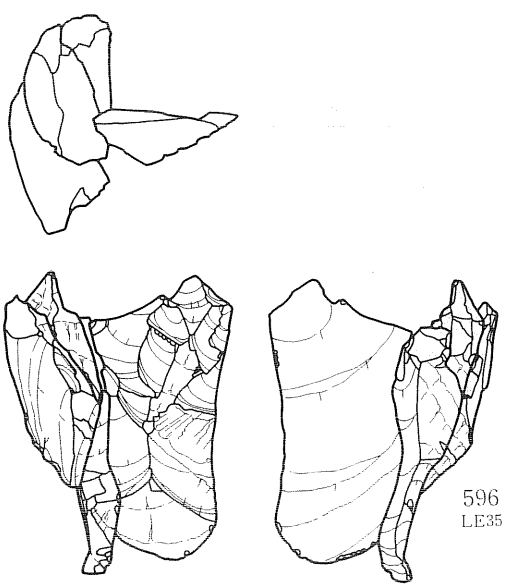
606は石剣の基部で、断面は楕円形で明瞭な稜線はない。基部の末端に近いと思われる部位に2本の沈線がめぐり、そのうちの1本のところで折損している。全体を丁寧に研磨している。



第72図　遺構外出土石器 (24)



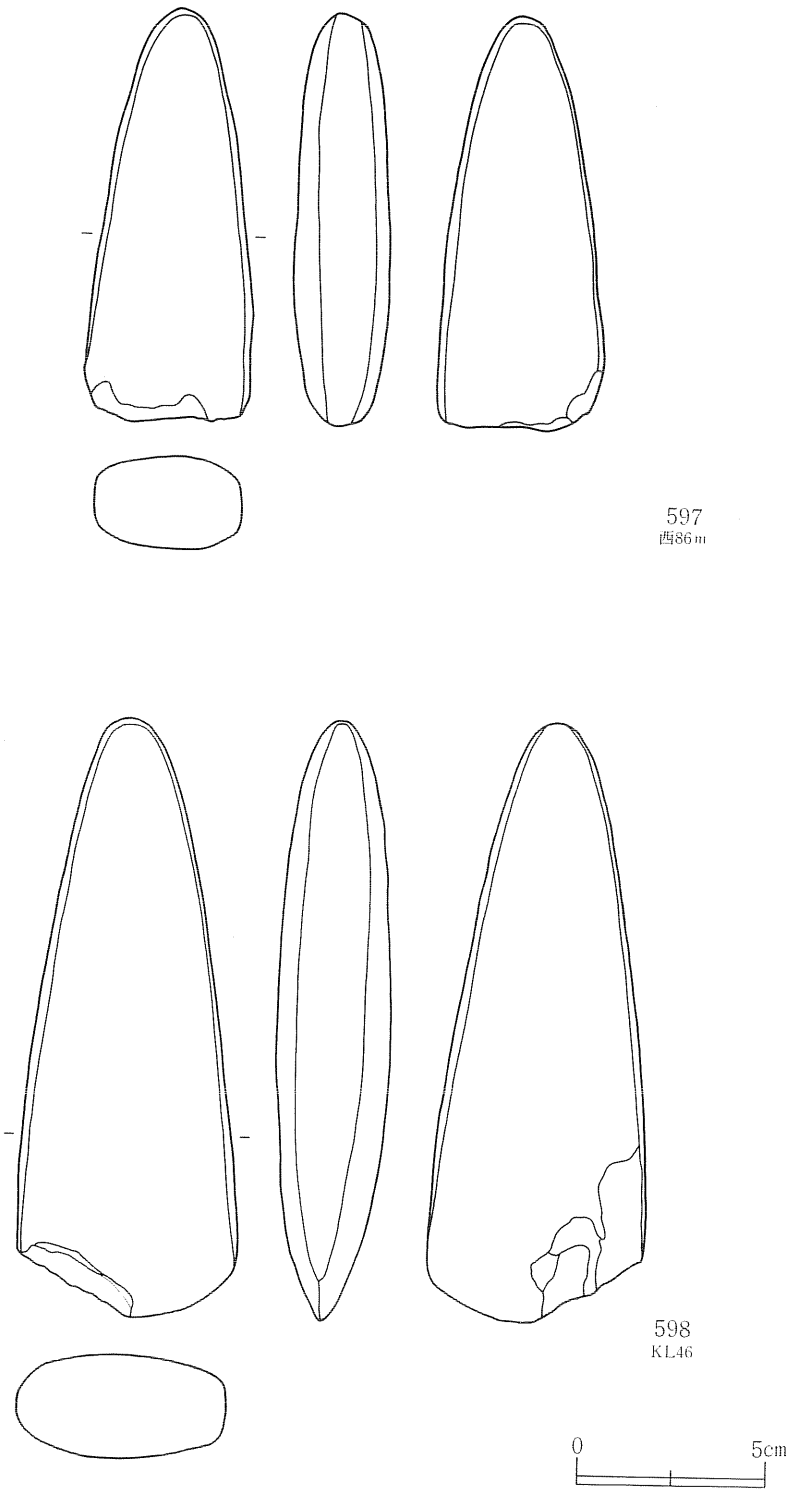
595
LE35



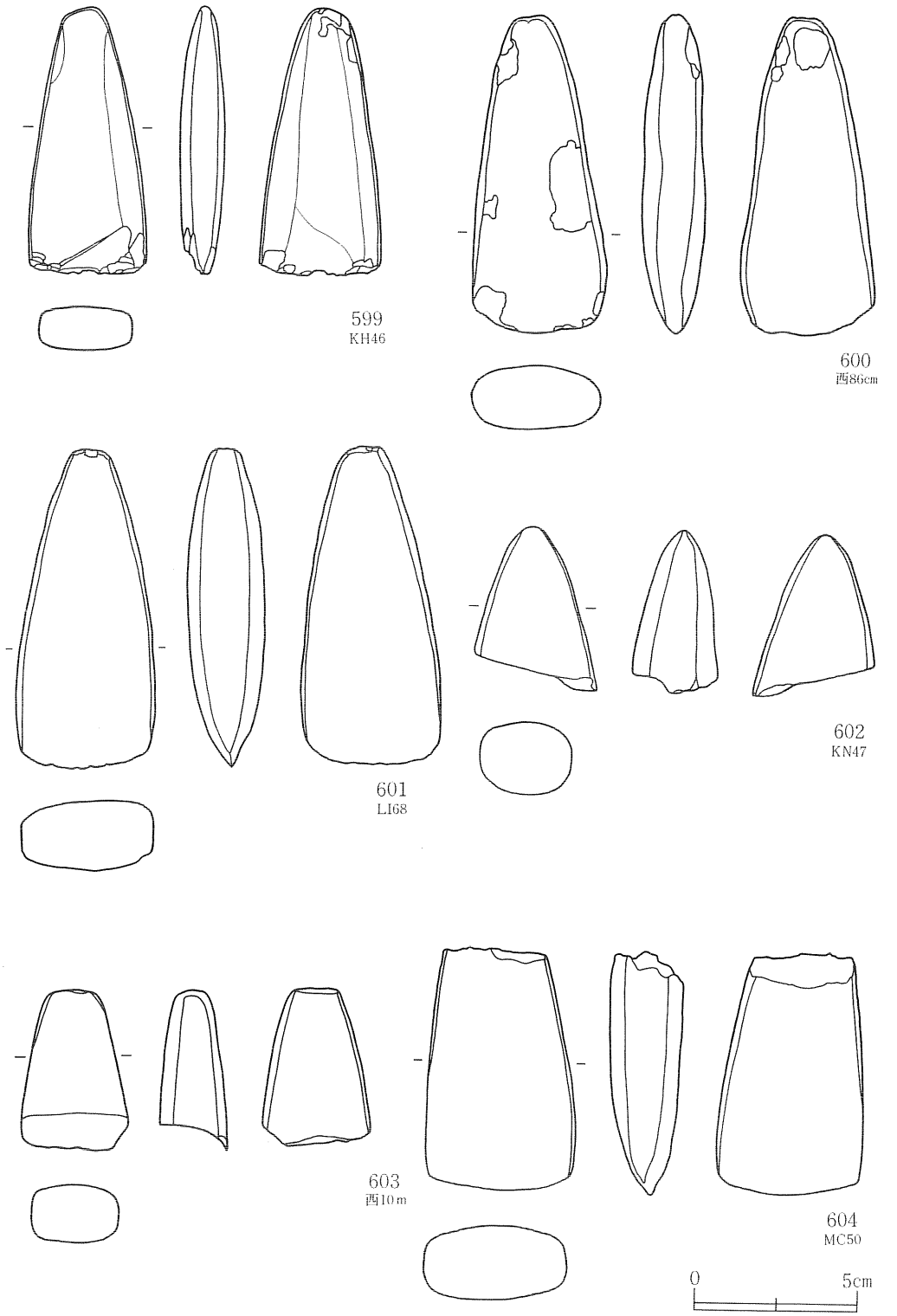
596
LE35

0　5cm

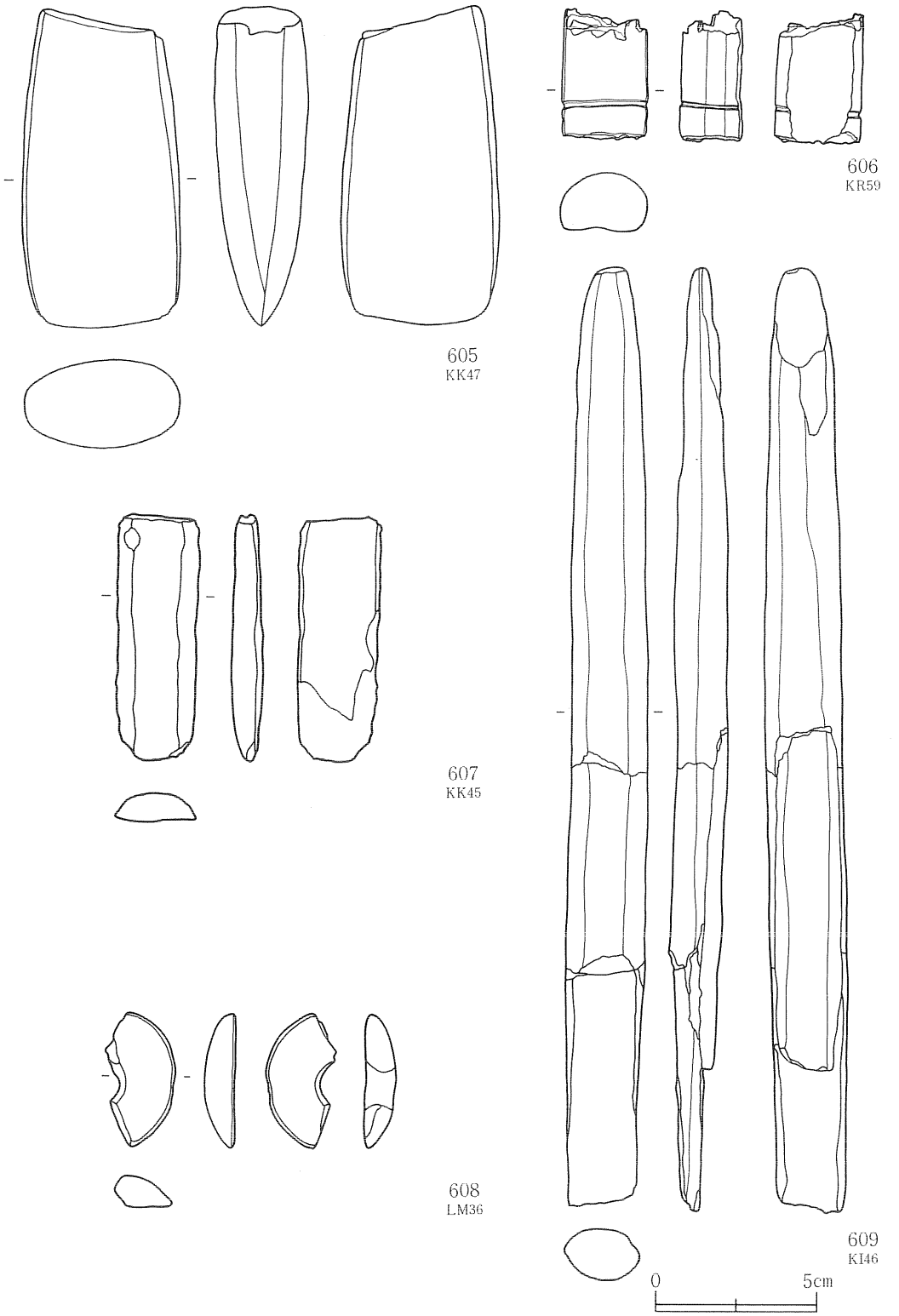
第73図　遺構外出土石器 (25)



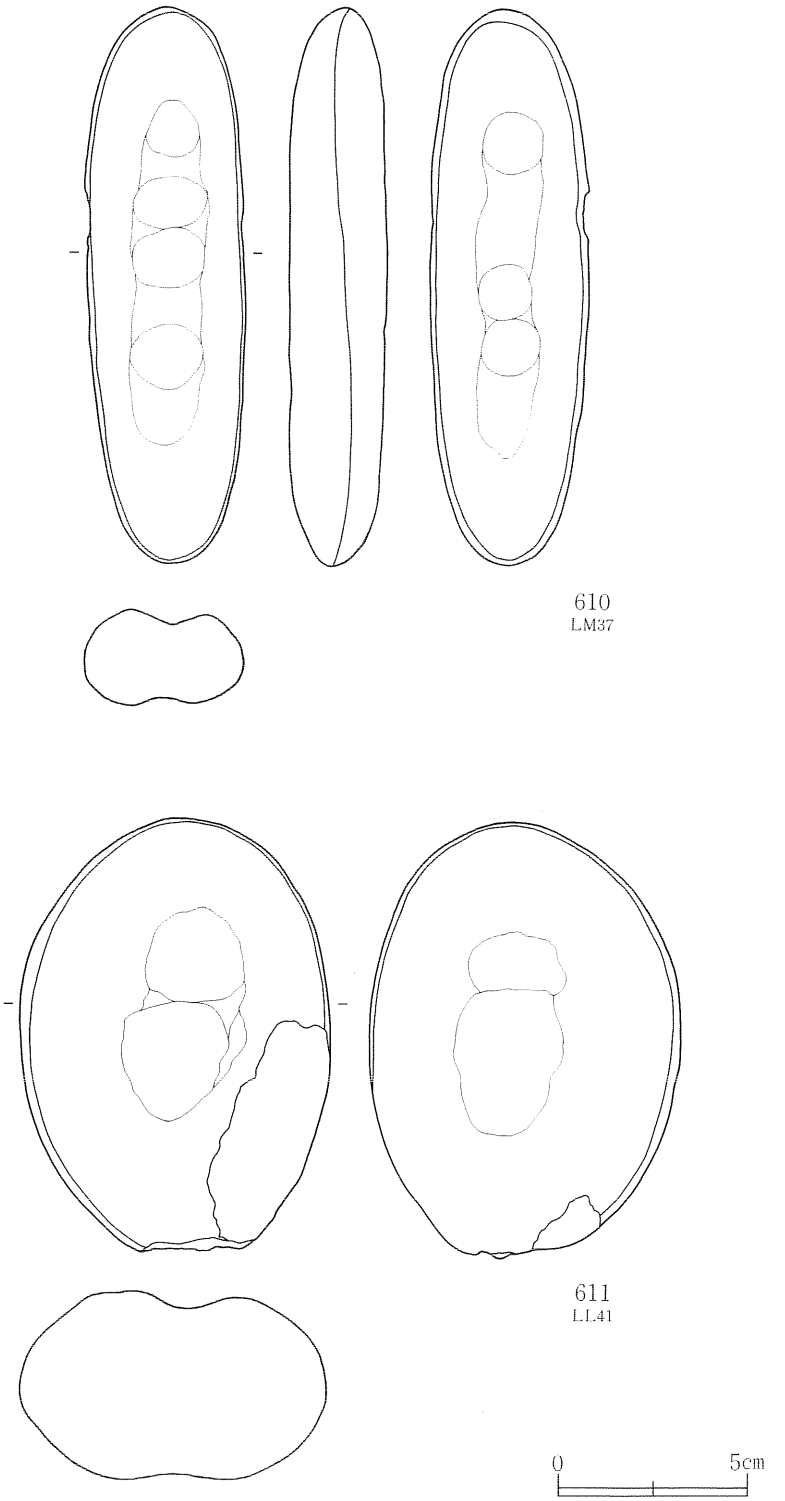
第74図　遺構外出土石器 (26)



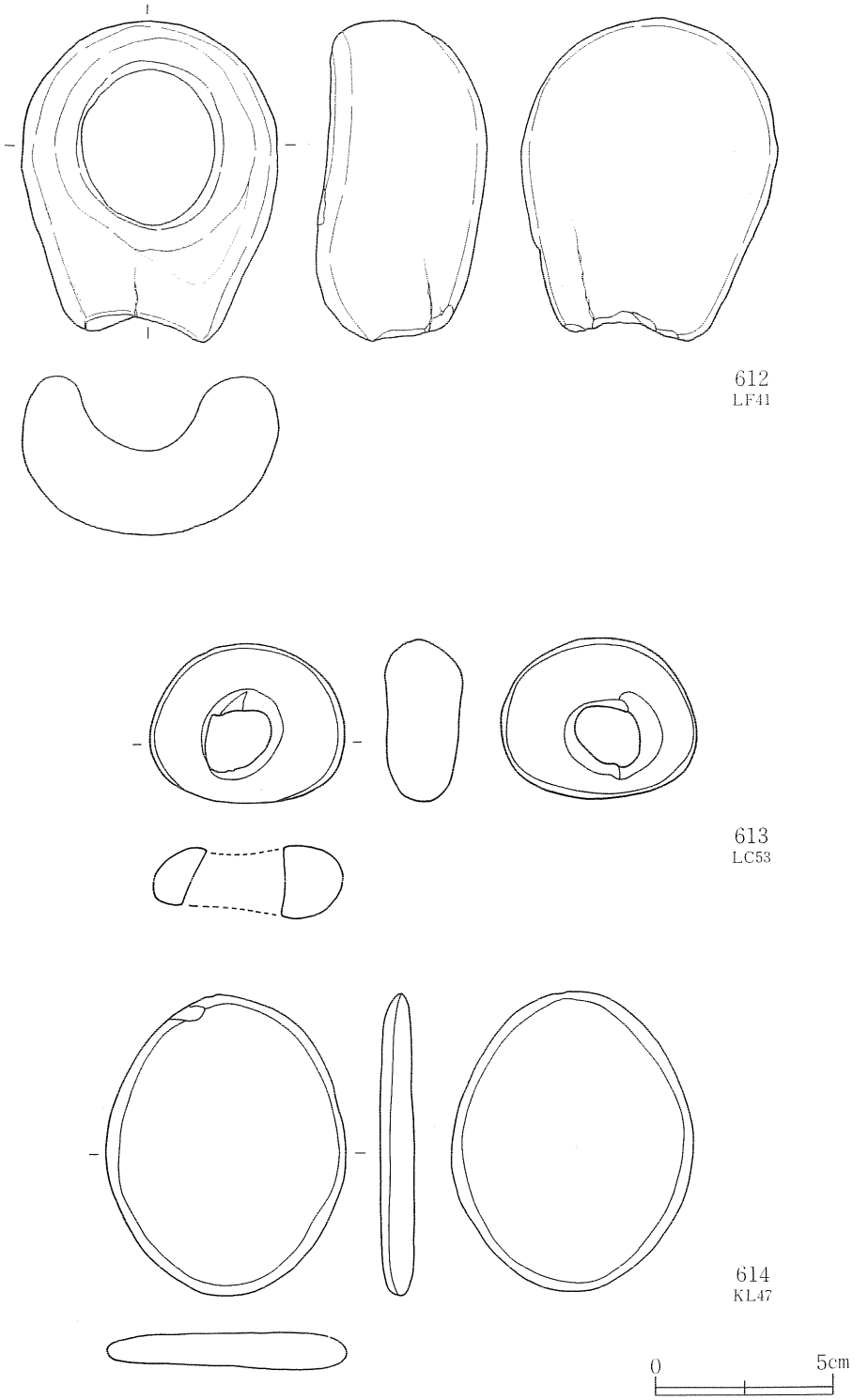
第75図　遺構外出土石器 (27)



第76図　遺構外出土石器 (28)



第77図　遺構外出土石器 (29)



第78図　遺構外出土石器 (30)

606・607・609はいずれも緑色凝灰岩製であるが、607・609は風化が著しく層理状に剝離している。607と609はつくりが類似するが別個体である。609は先端に向かって次第に細くなり、先端部は丸みを帯びた長方形に作られている。表裏両面とも平坦面が作出されている。側縁は明瞭な稜線があり、断面形はこの稜線に対して表裏面が対称の丸味を帯びた6角形を呈している。

玦状耳飾：（第76図608、図版39）

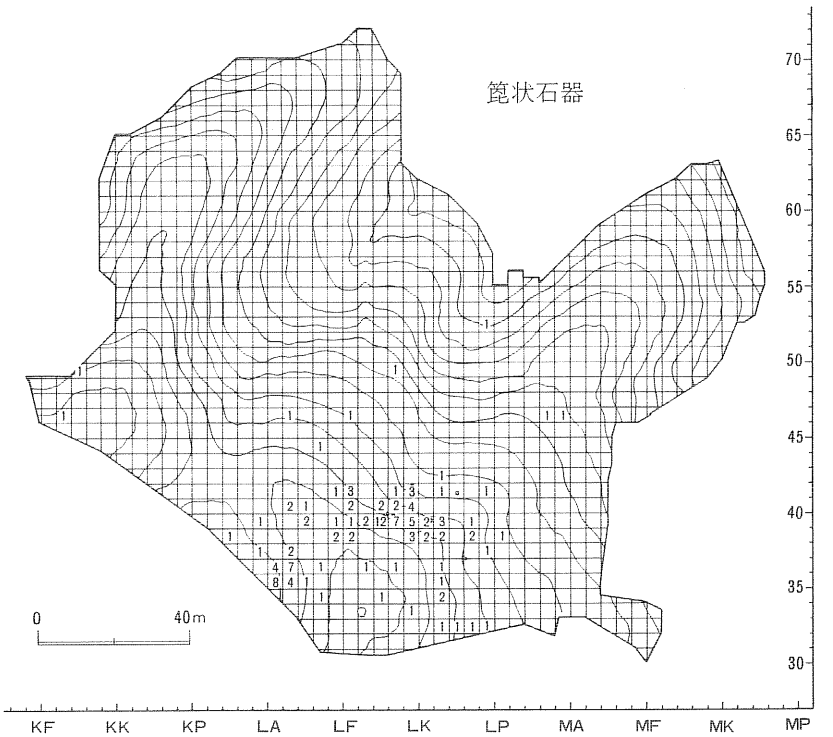
1点だけ出土した。黒色の頁岩製である。中央部で折損し右半分のみ残っている。表面を球面に、裏面を平坦に研磨し、断面形はカマボコ形である。平面形はやや縦長の楕円形であるがほとんど円形に近い。中央の円孔は表裏両面から穿たれ、孔の側面には工具を回転させた痕跡が筋状に残り、下部の切れ目も表裏両面から擦り切られた際の擦痕が残っている。いずれも表面と裏面のほぼ中央に稜線が残る。

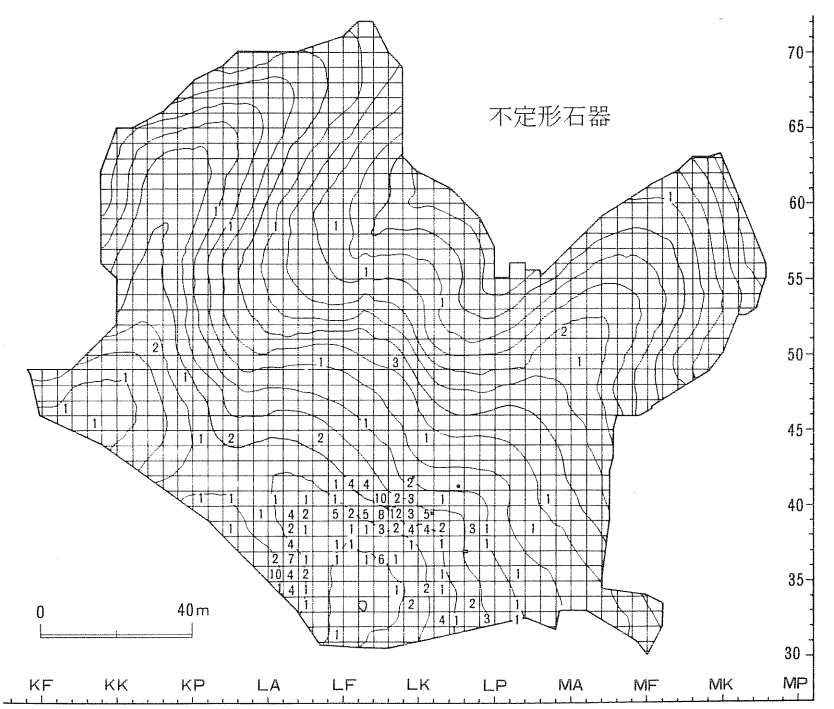
凹石：（第77図610・611、図版39）

凹石は合計87点出土した。ほとんどは両面に複数の凹みがある。素材の礫は610のように細長いもの、611のように円形もしくは楕円形で厚みのあるものがある。石材はほとんどが凝灰岩で軟質のものが多い。

有孔礫・扁平礫：（第78図612～614、図版39）

いずれも自然の営力による自然礫であるが、遺跡内に普遍的に存在するものではなく、人為的に収集されて遺跡内に持ち込まれたものである。612は凝灰岩の円礫で表面と側面に円形の凹みがある。全体に磨滅が著しくスベスベした感触である。613は中央に孔のあいた小円礫である。孔側面も含め全体に磨滅している。614は平面形が楕円形の薄い扁平礫である。全体に磨滅し、側縁も丸味を帯びる。このような円形もしくは楕円形の扁平礫は縄文時代前期の遺物出土範囲で多く出土し、遺跡内でも限られた出土分布を示しており、何らかの意図をもって人為的に遺跡内に持ち込まれたものと思われる。





第79図　遺構外石器出土分布図（箆状石器、不定形石器）

第3節　平安時代の遺構と遺物

調査区には南東から北西にのびる尾根線に向かって北東から南西に2本の沢が入り、その間が北東側にせり出すテラス状の斜面となっている。この沢の北西側と南東側は細長い丘稜で北東に張り出している。平安時代の遺構・遺物は、この中央部のテラス状の斜面、南側の丘稜尾根上とその東側斜面、調査区南側の北東に張り出す丘稜の南東側の斜面、調査区北側の北東に張り出す丘稜の南東側斜面の4地点に分かれて検出された。ここではそれらを中央部遺構群、南部遺構群、東部遺構群、北部遺構群として遺構群単位で記述する(第80図)。各遺構群に属する遺構は以下のとおりである。また遺構外出土遺物も各遺構群単位にまとめて記述する。

中央部遺構群

SI69竪穴住居跡、SI74竪穴住居跡、SK87土坑、SK89土坑、SK90土坑、SK13土坑

南部遺構群

SB92建物跡、SI93竪穴住居跡、SK98土坑、SI100竪穴住居跡、SK99土坑、SK108土坑、SN103焼土遺構、SK101土坑、SN107焼土遺構、SN102焼土遺構、SN110焼土遺構、SK112土坑、SK115土坑、SK111土坑、SK30土坑、SX130柱穴群

東部遺構群

SB24建物跡

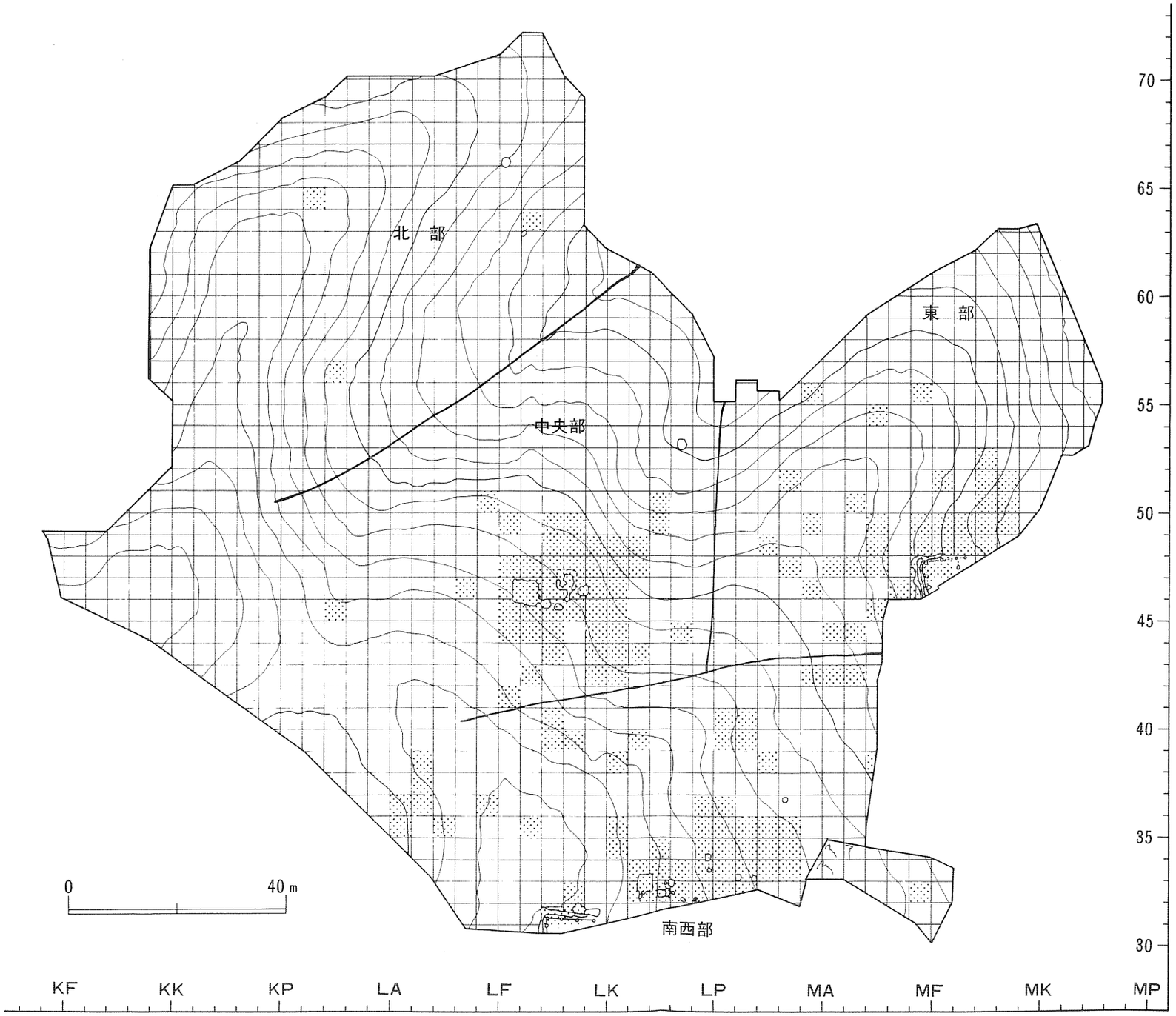
北部遺構群

SK14土坑、SK16土坑

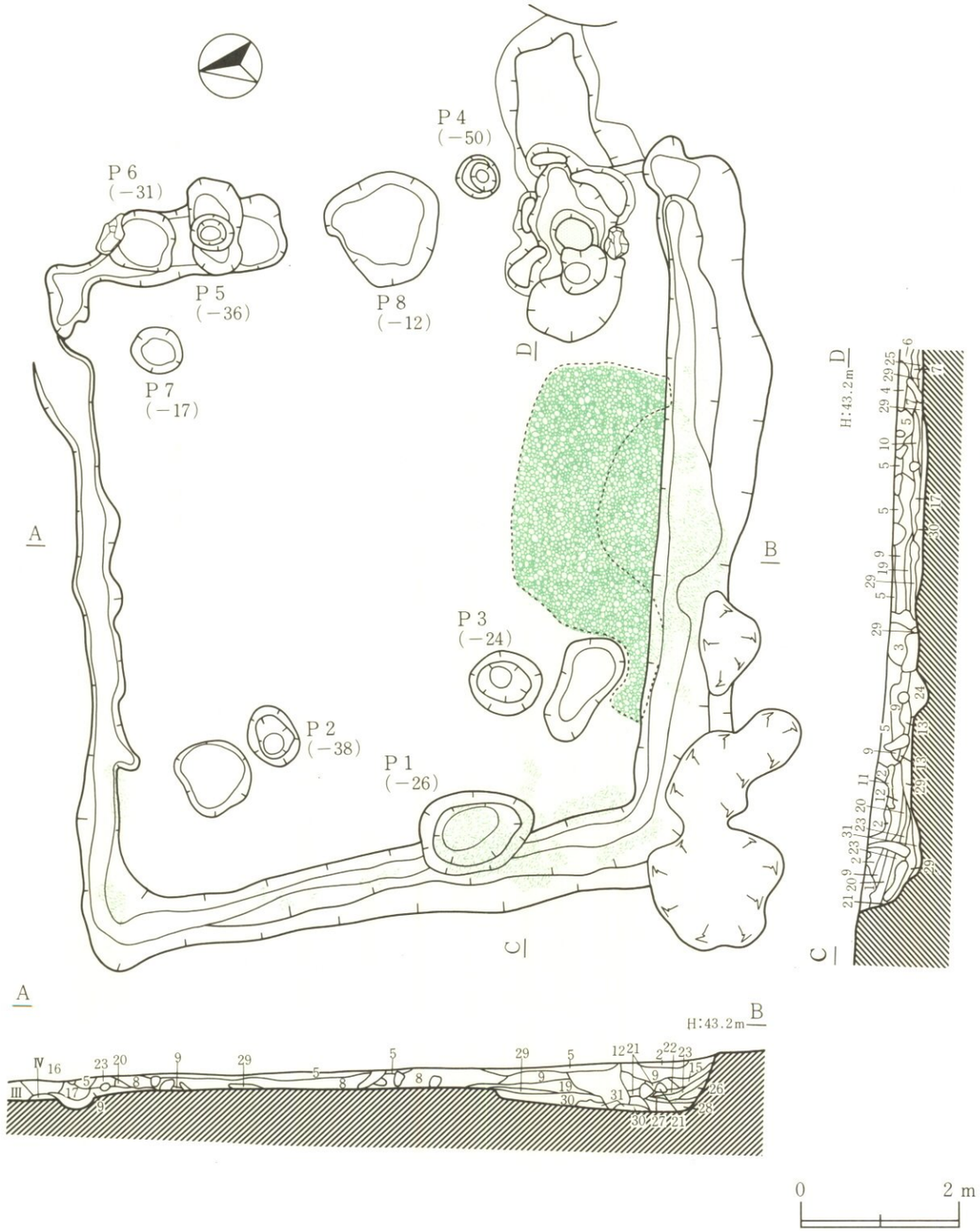
1.　中央部遺構群の検出遺構と遺物

SI69竪穴住居跡（第81～90図、図版9、40・41）

LH46グリッドを中心としLH45、LG45、LG46グリッドにまたがって検出した。北東側にSI74竪穴住居跡、東側にSK89土坑、SK87土坑が隣接し、SI69竪穴住居跡のカマド煙道がSK89土坑によって切られている。平面形は方形であるが、南東隅がやや内側に入り込んでいるため平行四辺形に近い形態である。カマドは東壁の南寄りに構築されている。長軸は南壁で4m68cm（15.5尺）、北壁で4m52cm（15尺）、短軸は東壁で4m56cm（15尺）、西壁で4m12cm（14尺）である。南壁・西壁は残存状態が良好で壁溝の深さは約40cmであるが、北壁・東壁は削平されてほとんど残存しない。壁には全体に壁溝がめぐるが東壁のカマドとカマド横の中央部には壁溝がない。北東隅は削平が壁溝にまで及んでいる。壁溝の幅は南壁と西壁で約50cmと広く北壁では約24cmとせまいが、これは壁溝の断面形がU字形で底面に近いほど幅がせまくなっているので壁の残存状態によるものと思われる。



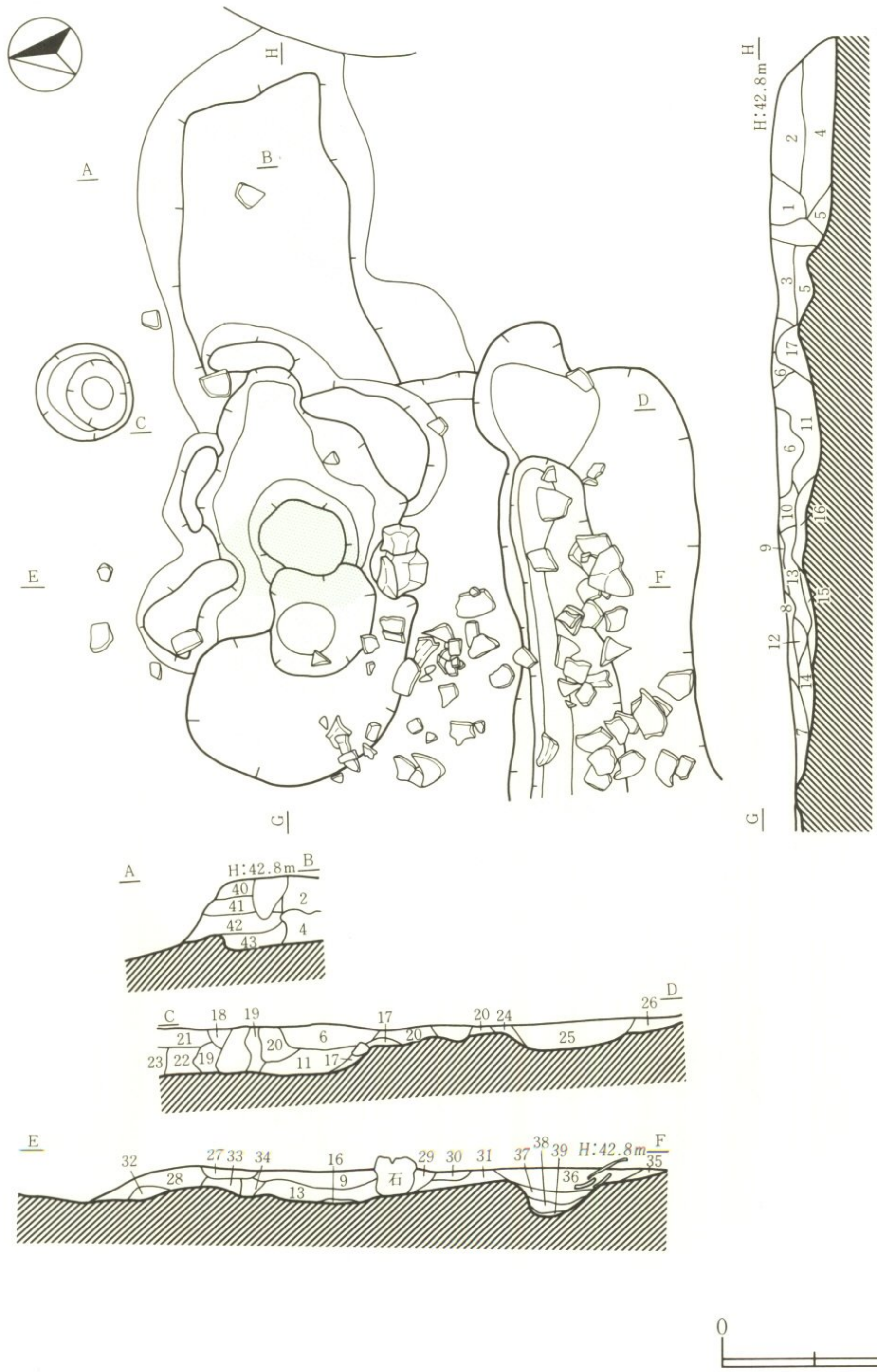
第80図　遺構外土器出土分布図（土師器）と遺構群区分



SPA～SPB・SPC～SPD

Ⅲ　10YR⅓：褐色土　しまり有り。炭化物粒φ３mmと焼土粒φ５mm以下を７％含む。遺跡基本土層の第Ⅲ層である。
Ⅳ　10YR⅓：褐色土　ややしまり有り。炭化物粒φ５mm以下と焼土粒φ５mm以下を20％含む。遺跡基本土層の第Ⅳ層である。
1　10YR⅚：明黄褐色土　しまり有り。地山ブロックである。
2　10YR⅜：暗褐色土　しまりやや有り。混入物無し。均質である。
3　10YR⅓＋10YR⅜：黒色土　しまりやや有り。炭化物及び焼土をφ２mm以下の細粒状に５％含む。
4　10YR⅜：暗褐色土　しまりやや有り。地山土及び焼土をφ２mm以下の細粒状に７％含む。
5　10YR⅜＋10YR⅙＋10YR⅜＋10YR⅓：黒褐色土＋褐色土＋暗褐色土　しまり無し。第Ⅲ層と黒色土の混じり合った物。軟質である。炭化物φ１mm以下を２％含む。
6　10YR⅓：褐色土　しまり有り。粘性大。炭化物φ２～３mmの細粒と焼土粒φ２～５mmを７％含む。
7　10YR⅜：黒褐色土　しまり有り。炭化物φ３mm以下と焼土粒φ２～５mm、及び地山粒を７％含む。
8　10YR⅜＋10YR⅜＋10YR⅜：暗褐色土＋黒褐色土　しまりやや有り。地山の小粒φ５mm以下を20～30％、壁崩壊による地山土を20～30％含む。
9　10YR⅜：黒褐色土　しまりやや有り。
10　10YR⅜：黒褐色土　しまりやや無し。火山灰が微量混入する。
11　10YR⅓：褐色土　火山灰が固まりとなって層状に50％混入する。
12　10YR⅜：黒褐色土　しまりやや有り。粘性小。さらさらした状態。火山灰が極めて微量混入する。
13　10YR⅜：黒褐色土　しまり無し。壁崩壊による地山土を20％含む。
14　10YR⅜＋10YR⅜＋10YR⅓：暗褐色土＋褐色土　しまり有り。ざらざらした状態。火山灰が混入する。焼土粒φ８mm以下を２％含む。
15　10YR⅜＋10YR⅜：暗褐色土　しまり有り。火山灰が少量混入する。
16　10YR⅜：黒褐色土　しまりやや無し。
17　10YR⅓：褐色土　しまり極めて有り。火山灰が微量混入する。
18　10YR⅜：黒褐色土　しまりやや有り。
19　10YR⅜：暗褐色土　しまり有り。壁崩壊による地山土の微細粒を含む。
20　10YR⅜＋10YR⅜：暗褐色土　しまり有り。火山灰が少量混入する。
21　10YR⅓：褐色土　しまり有り。粘性大。炭化物粒φ１～３mmと焼土粒２～５mmを７％含む。
22　10YR⅓：褐色土　火山灰が固まりとなって層状に50％混入する。
23　10YR⅜＋10YR⅜＋10YR⅓：暗褐色土＋褐色土　しまり有り。ざらざらした状態。火山灰が混入する。焼土粒φ８mm以下を２％含む。
24　10YR⅜：黒褐色土　しまりやや有り。粘性小。さらさらした状態。火山灰が極めて微量に混入する。
25　10YR⅓：にぶい黄褐色土　しまりやや有り。粘性有り。炭化物粒φ３mm以下と焼土粒φ５mm以下を７％含む。壁崩壊による地山土を10％含む。
26　10YR⅝：黄褐色土　しまり有り。粘性大。炭化物粒φ２mm以下を２％、焼土粒φ３mm以下を５％、27の焼土の崩壊土を５％含む。
27　7.5YR⅓：褐色土　しまり有り。炭化物φ３mm以下を２％、焼土粒φ10mm以下を20％含む。強く火熱をうけた焼土である。
28　10YR⅝：褐色土　しまり有り。27の焼土を10％含む。
29　10YR⅜＋10YR⅓：暗褐色土＋褐色土　しまり有り。壁崩壊による地山土を40％含む。
30　10YR⅝：黄褐色土　しまり極めて有り。粘性大。黒褐色土がしみ状に混じる。地山の漸移層である。竪穴の堀方の埋土である。褐色土が20～30％と地山ブロックφ50mm以下を含み、混ぜてたたきしめたように固い。
31　10YR⅓：褐色土　しまり有り。地山ブロックφ20mm以下を10％含む。

第81図　SI69竪穴住居跡



SI69　カマド
SPA～SPB

1　10 YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。炭化物粒φ1㎜以下を2％含む。
2　10 YR4/6：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ8㎜以下を5％、炭化物粒φ2㎜以下を5％含む。
3　10 YR4/3：にぶい黄褐色土　しまり有り。粘性中。炭化物粒φ2㎜以下を2％、地山の崩壊土を5％含む。
4　10 YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。炭化物粒φ2㎜以下を5％、地山の崩壊土を7％含む。
5　10 YR5/4：にぶい黄褐色土　しまり有り。粘性大。炭化物粒φ1㎜以下を1％、地山の崩壊土を30％含む。
6　7.5YR4/3＋75YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ10㎜以下を10～20％、炭化物粒φ3～10㎜を5％、地山の崩壊土φ20㎜以下を2％含む。
7　10 YR3/4：暗褐色土　粘性小。さらさらした状態。焼土粒φ5㎜以下を10％、炭化物粒φ5㎜以下を20％含む。
8　7.5YR3/4：暗褐色土　しまりやや無し。粘性小。ボロボロした状態。焼土粒φ5㎜以下を20％、炭化物粒φ5㎜以下を10％含む。
9　7.5YR3/3：暗褐色土　しまり有り。粘性小。ボロボロした状態。焼土粒φ20㎜以下を20％、炭化物粒φ5㎜以下を5％含む。
10　7.5YR3/4：暗褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ3㎜以下を5％、炭化物粒φ2㎜以下を2％含む。
11　10 YR3/4：暗褐色土　しまりやや有り。粘性中。焼土粒φ10㎜以下を5％、炭化物粒φ3㎜以下を20％含む。
12　7.5YR5/8：明褐色土　しまり無し。粘性小。ボロボロした状態。焼土粒φ10㎜以下を30％、炭化物粒φ3㎜以下を2％含む。
13　7.5YR5/8＋2.5YR5/8：明褐色＋明赤褐色　しまり無し。粘性小。ボロボロした状態。焼土粒φ5㎜以下を20％一部ブロック状に含む。炭化物粒φ3㎜以下を2％含む。
14　7.5YR4/6：褐色土　しまりやや無し。粘性大。焼土粒φ3㎜を5％、炭化物粒φ3㎜以下を2％含む。
15　5 YR5/8：明赤褐色　しまり極めて有り。粘性大。炭化物粒φ5㎜以下を2％含む。地山が火熱で硬化赤変したもの。
16　焼土
17　5 YR4/6：赤褐色土　しまり極めて有り。粘性極めて大。焼土粒φ5㎜以下を10％、炭化物粒φ2㎜以下を10％含む。カマドの袖が強く火熱をうけたもの。

SI69　カマド
SPC～SPD

2　10 YR4/3：にぶい黄褐色土　しまり有り。粘性中。炭化物粒φ2㎜以下を2％、地山の崩壊土を5％含む。
4　10 YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。炭化物粒φ2㎜以下を5％。地山の崩壊土を7％含む。
40　7.5YR5/4：にぶい褐色土　極めて固くしまり有り。粘性大。焼土粒φ1㎜以下を2％、炭化物粒φ1㎜以下を2％、地山の崩壊土粒φ3㎜以下を2％含む。煙道の壁、あるいは天井か。
41　7.5YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ3㎜以下を2％、炭化物粒φ2㎜以下を2％、地山の崩壊土粒φ2㎜以下を2％含む。
42　10 YR3/4：暗褐色土　しまりやや有り。粘性中。炭化物粒φ2㎜以下を2％、地山の崩壊土を10％含む。
43　10 YR4/4：褐色土　しまりやや有り。粘性中。炭化物粒φ2㎜以下を1％、地山の崩壊土粒φ3㎜以下を5％含む。

SI69
SPE～SPF

6　7.5YR4/3＋7.5YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ10㎜以下を10～20％、炭化物粒φ3～10㎜を5％、地山の崩壊土φ20㎜以下を2％含む。
11　10 YR3/4：暗褐色土　しまりやや有り。粘性中。焼土粒φ10㎜以下を5％、炭化物粒φ3㎜以下を20％含む。
16　焼土
18　10'YR3/4：暗褐色土　しまり有り。粘性大。炭化物粒φ1㎜以下を1％含む。
19　10 YR4/6：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ2㎜以下を5％、炭化物粒φ1㎜以下を1％、地山の崩壊土粒φ1㎜以下を2％含む。
20　7.5YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ5㎜以下を2％、炭化物粒φ1㎜以下を1％、地山の崩壊土粒を20％含む。
21　7.5YR4/6：褐色土　しまり極めて有り。粘性中。焼土粒φ10㎜以下を2％、炭化物粒φ2㎜以下を2％含む。
22　10 YR4/4：褐色土　しまりやや有り。粘性中。焼土粒φ10㎜以下を5％、炭化物粒φ10㎜以下を5％含む。
23　7.5YR4/3：褐色土　しまり有り。粘性中。炭化物粒φ3㎜以下を5％含む。
24　10 YR3/3：暗褐色土　しまり有り。粘性大。炭化物粒φ3㎜以下を5％、地山の崩壊土を20％含む。
25　10 YR4/4：褐色土　しまり極めて有。粘性大。焼土粒φ8㎜以下を7％、炭化物粒φ10㎜以下を5％含む。
26　10 YR5/6：黄褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ5㎜以下を2％、炭化物粒φ3㎜以下を5％含む。

SPG～SPH

9　7.5YR3/3：暗褐色土　しまり有り。粘性小。ボロボロした状態。焼土粒　20㎜以下を20％、炭化物粒φ3㎜以下を2％含む。
13　7.5YR5/8＋2.5YR5/8：明褐色土＋明赤褐色土　しまり無し。粘性小。ボロボロした状態。焼土粒φ5㎜以下を20％、一部ブロック状に含む。炭化物粒φ3㎜以下を2％含む。
16　焼土
27　7.5YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ5㎜以下を2％、炭化物粒φ5㎜以下を2％含む。
28　7.5YR4/4：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ5㎜以下を2％、炭化物粒φ5㎜以下を2％、灰化した凝灰炭（軽石）φ50㎜以下を含む。
29　10 YR4/6：褐色土　しまりやや有り。粘性小。さらさらした状態。焼土粒φ5㎜以下を5％、炭化物粒φ2㎜以下を1％含む。
30　7.5YR4/6：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ20㎜以下を20％、炭化物粒φ20㎜以下を5％、地山の崩壊土粒φ10㎜以下を5％含む。
31　10 YR5/8：黄褐色土　しまり有り。粘性大。炭化物粒φ2㎜以下を1％、地山の崩壊土を30％含む。
32　7.5YR3/4：黒褐色土　しまり極めて有り。粘性中。焼土粒φ10㎜以下を5％、炭化物粒φ5㎜以下を5％含む。
33　7.5YR5/8：明褐色土　しまり極めて固く有り。粘性中。焼土粒φ5㎜以下を10％、炭化物粒φ2㎜以下を5％含む。
34　7.5YR4/4：褐色土　しまりやや有り。粘性中。焼土粒φ5㎜以下を5％、炭化物粒φ2㎜以下を2％含む。
35　10 YR3/4：暗褐色土　しまり有り。粘性大。炭化物粒φ3㎜以下を2％、地山の崩壊土φ10㎜以下を5％含む。
36　10 YR4/4：褐色土　しまり極めて有り。粘性大。焼土粒φ8㎜以下を7％、炭化物粒φ10㎜以下を5％含む。
37　7.5YR4/6：褐色土　しまり有り。粘性中。焼土粒φ10㎜以下を20％、炭化物粒φ10㎜以下を10％含む。
38　7.5YR5/6：明褐色土　しまり極めて有り。粘性大。焼土粒φ10㎜以下を5％、炭化物粒φ5㎜以下を5％、地山の崩壊土φ3㎜以下を5％含む。
39　7.5YR5/4：にぶい褐色土　しまり極めて有り。粘性大。焼土粒φ3㎜以下を2％、炭化物粒φ3㎜以下を2％、地山の崩壊土φ3㎜以下を10％含む。

第82図　SI69竪穴住居跡カマド

床面は平坦でカマドの西側は幅約90cm×長さ約１m70cmの範囲で床面を約10cm掘り込み、そこに地山土がブロック状に多く混じった土を入れ、固く踏みしめている。主柱穴はＰ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５の４本と考えられる。Ｐ２・Ｐ３が竪穴住居跡の内部にあるのに対し、Ｐ４・Ｐ５は壁溝内または壁近くにあって、柱間距離は長軸が１m16cm（10.5尺）～３m28cm（11尺）、短軸が１m52cm（5尺）～１m76cm（６尺）で、配置は不整長方形となる。この柱間距離は同様の配置となるSI74竪穴住居跡の柱間距離のおよそ1.5倍である。Ｐ４とＰ６の間は壁溝が途切れＰ８土坑がある。Ｐ８土坑と反対側の西壁中央にもＰ１土坑があり、Ｐ１土坑内からは多量の遺物が出土した。

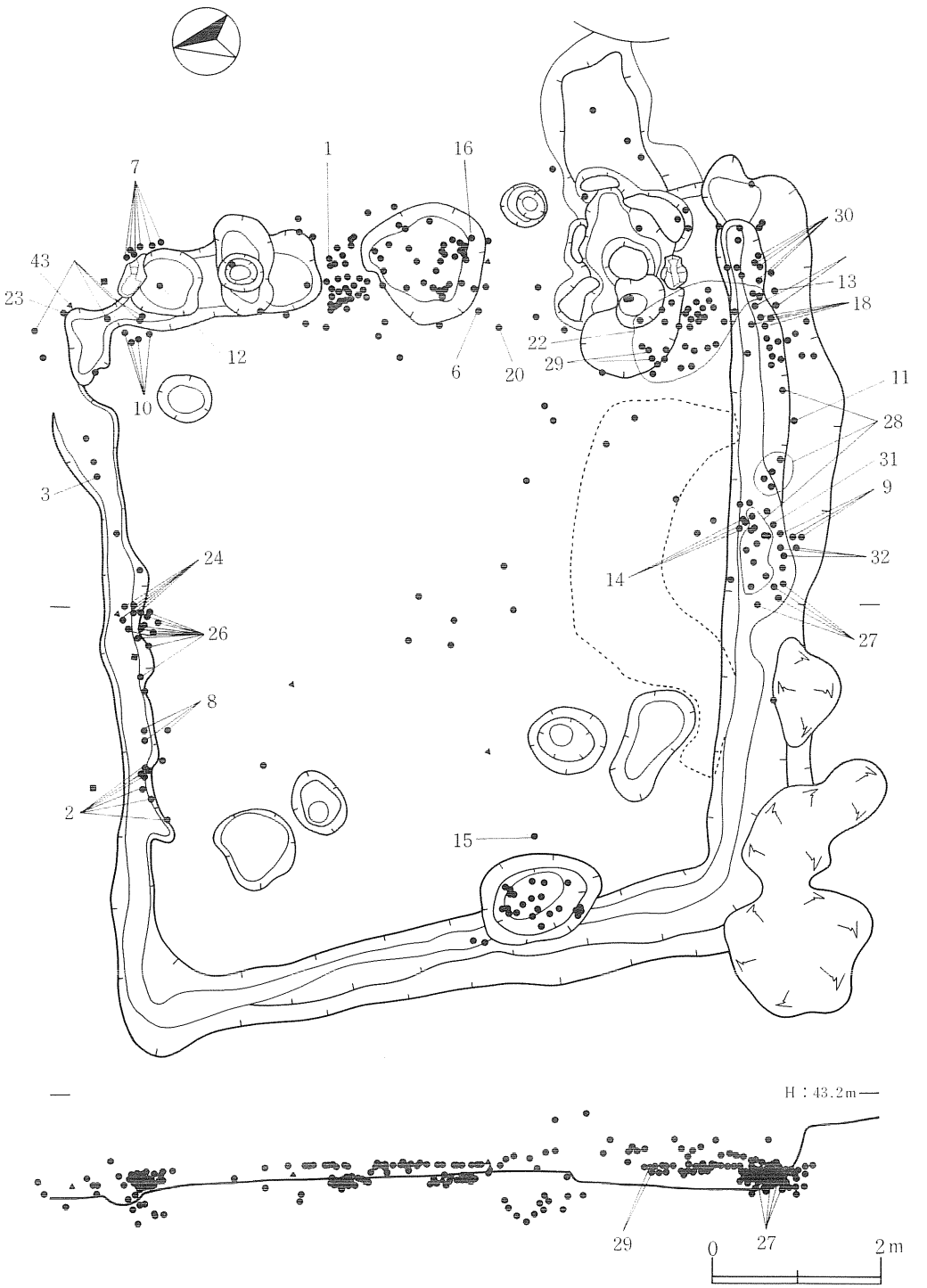
カマドは本体上部が失われ、煙道部と床面を浅く掘り凹めた燃焼部が残っている。燃焼部は壁より内側にあり、カマド部分には壁溝は初めから掘られていない。煙道部は天井はすでに削平されて残っていないが、火熱を受けた床面が残っている。先端はSK89土坑によって切られ煙出しは不明であるが、やや長めの煙道をもつようで、現存する煙道の長さは約１m70cmである。袖は軽石を芯材として粘土で構築されていたようである。カマドの主軸方向はS—86°—Eである。

埋土中には火山灰が多く含まれていた。特に南壁・西壁の壁溝内には5～6cmの厚さでレンズ状に堆積している。Ｐ２周辺から北東側にかけては床面を覆う直上の埋土が混火山灰土である。またＰ１の埋土中にも床面から10cmほど上部に竪穴住居跡の外側から流入した状態でレンズ状に厚さ約5cmの火山灰の堆積層がある。SI69竪穴住居跡が廃絶した後、完全に埋没する前に火山灰が堆積したと考えられる。南側の壁溝には埋土中に焼土が層状に堆積しているが底面や側面は焼けておらず、おそらくカマドの焼土が流入したものと考えられる。火山灰はこの焼土層より上層である。

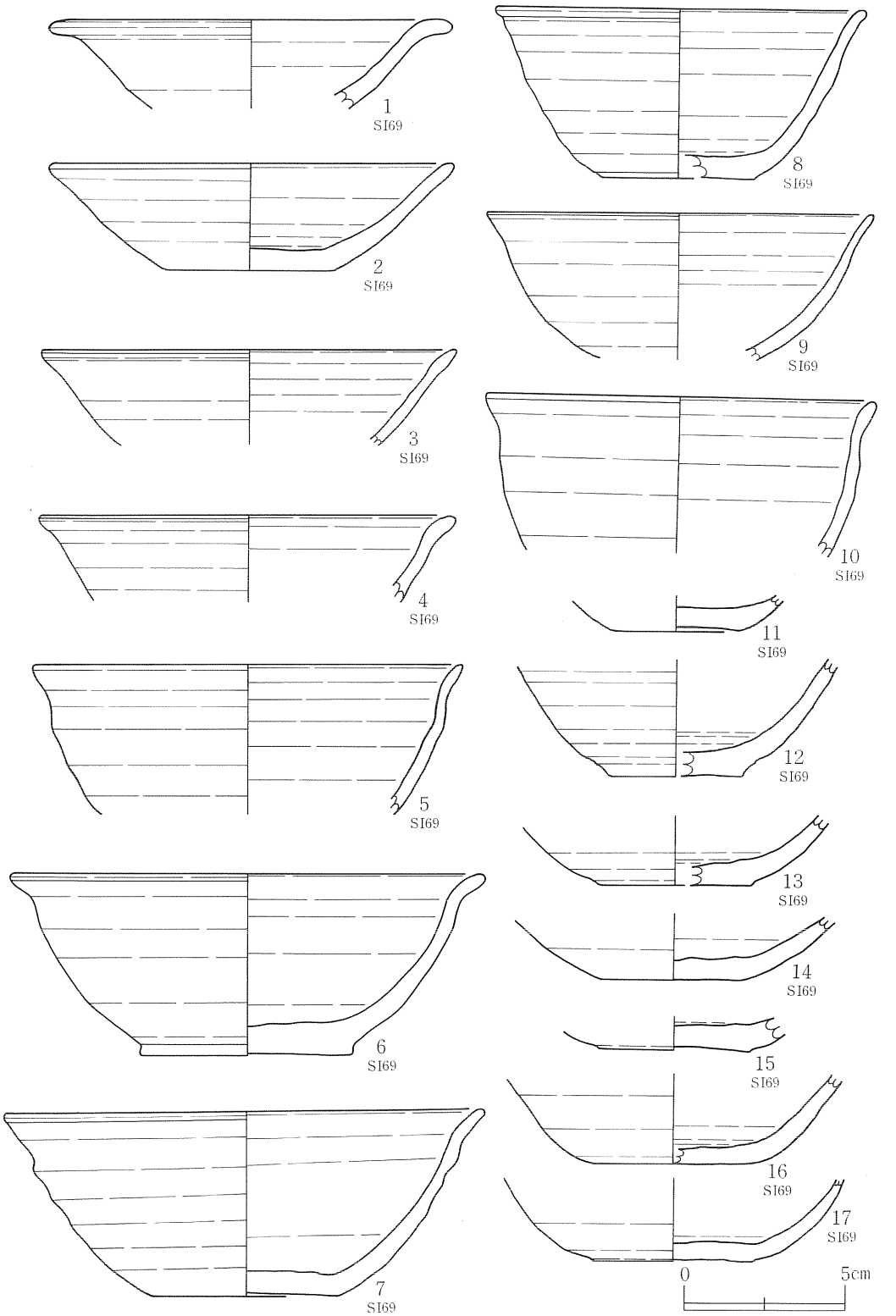
遺物は特に壁溝内とカマド周辺から多く出土した。床面からの出土は少なかった。またＰ１の底面からは多量の遺物がまとまって出土した。これらの遺物の中にはSI74竪穴住居跡出土の遺物と接合するものもある。平安時代の遺物はほとんど土師器で、須恵器は杯形土器口縁部の小破片が１点出土したのみであった。器種は皿形土器、坏形土器、甕形土器があり、甕形土器には小型で平底のもの、大型で平底のもの、丸底でタタキ目のあるものがある。

第84図１・２は皿形土器である。皿形土器には口縁部が大きく外反するものと直線的に立ち上がるものがある。１は口縁部が大きく外反し端部がやや肥厚する。２は直線的に立ち上がり、口縁部の外反は小さい。いずれも口径は12.7cmである。２は底径5.4cm、器高3.4cmである。
Ｐ１内からも皿形土器が１点出土した。第95図34は１と同じく口縁端部が大きく外反し肥厚するものである。口径は12.1cmとやや小さい。

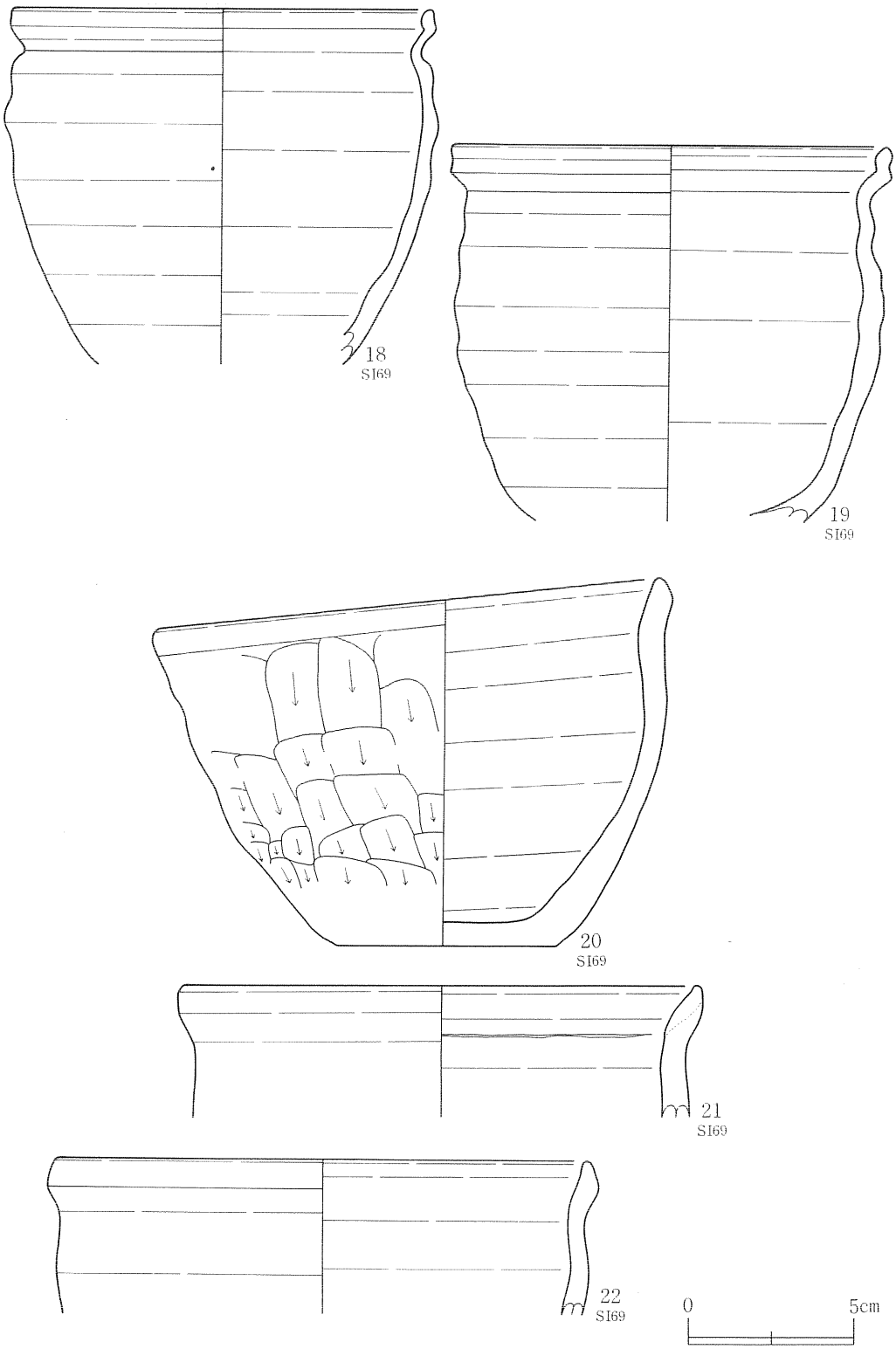
杯形土器にはいろいろな形態と法量があるが、全体に口縁端部が外反している。６は口径が



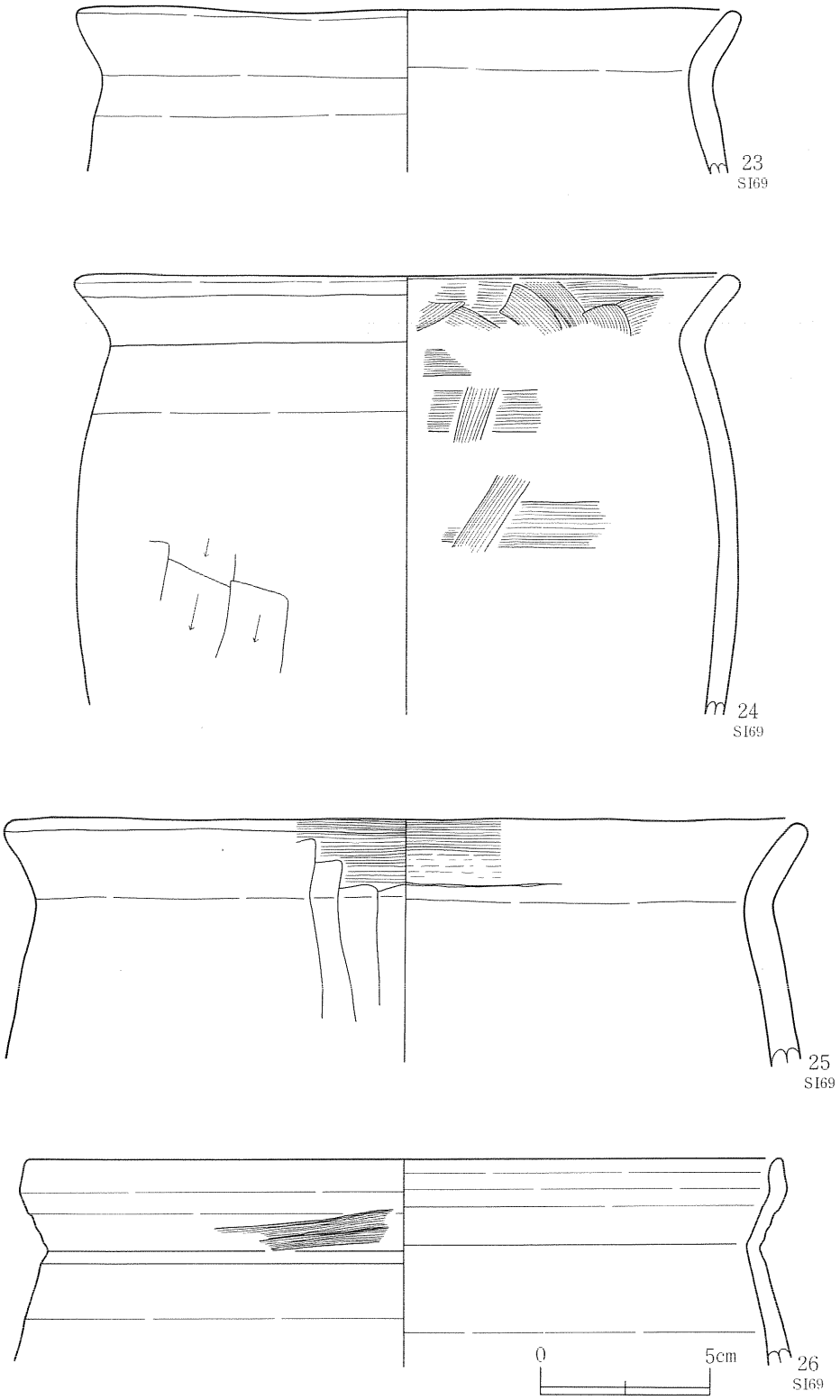
第83図　SI69竪穴住居跡遺物出土状況



第84図　SI69竪穴住居跡出土遺物(1)

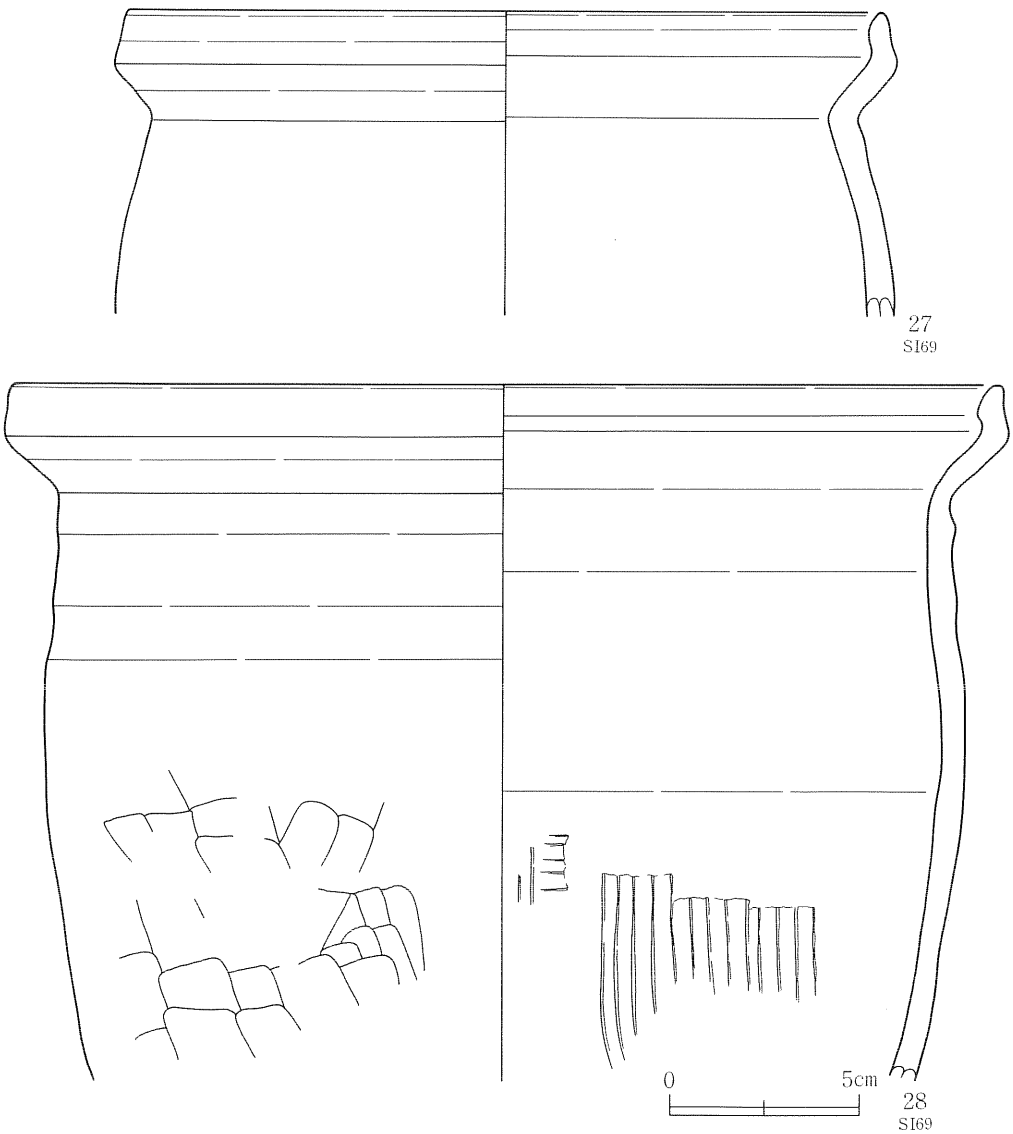


第85図　SI69竪穴住居跡出土遺物(2)

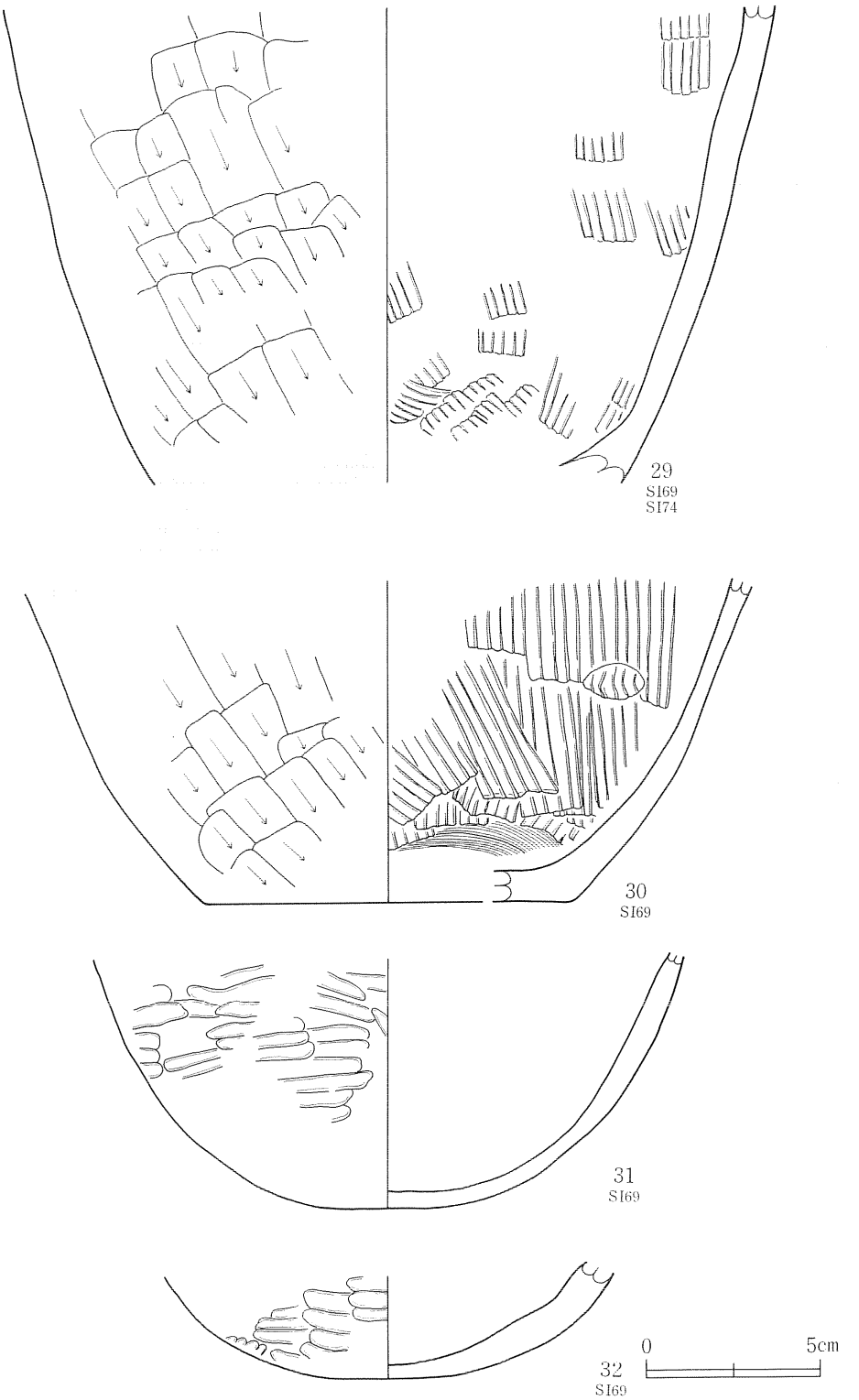


第86図　SI69竪穴住居跡出土遺物(3)

15cm、底径6.7cm、器高5.7cm，7は口径15.5cm，底径5.9cm、器高5.8cmと大型のものである。胴部は丸みをもって膨らみ口縁部が強く外反している。8は推定口径11.6cm、底径4.9cm、器高5.3cmで、口径に対して器高と底径が大きいものである。口縁はわずかに外反する。9は胴部が強く湾曲して膨らむもので、P1内から出土した35も同様である。9は口縁部がわずかに外反するのに対し、35は口縁端の下で強く屈曲し、肥厚する口唇部が大きく外反する。P1内出土の37は口径13.3cm、底径5.4cm、器高5.1cmで、口縁部は緩やかに外反している。42は口縁部が内湾している。口径15.7cm、器高8cm以上で大型である。皿形土器、杯形土器はすべてロクロで調整されており、底面は回転糸切りである。ロクロ調整後にさらにケズリ等の調整を加えるものはな



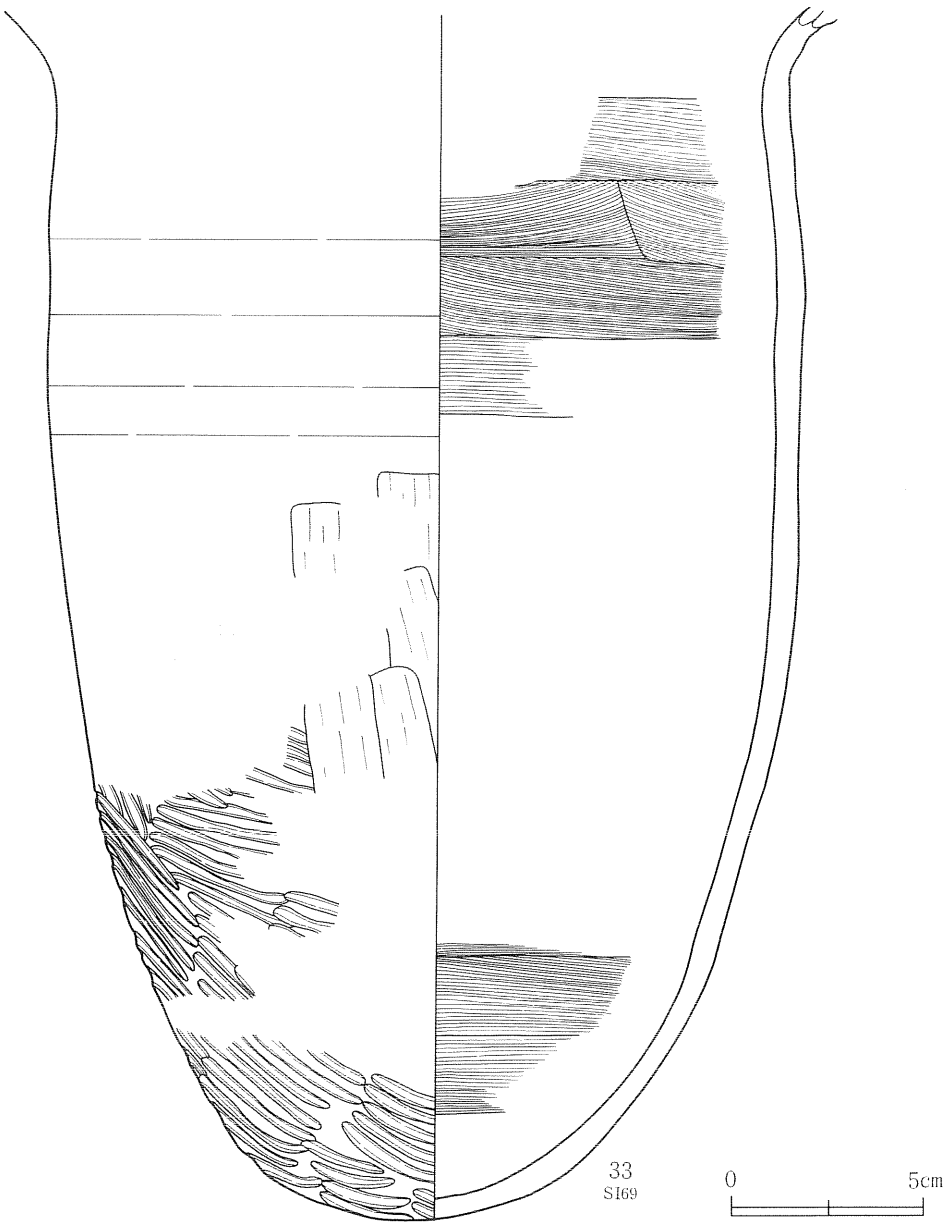
第87図　SI69竪穴住居跡出土遺物(4)



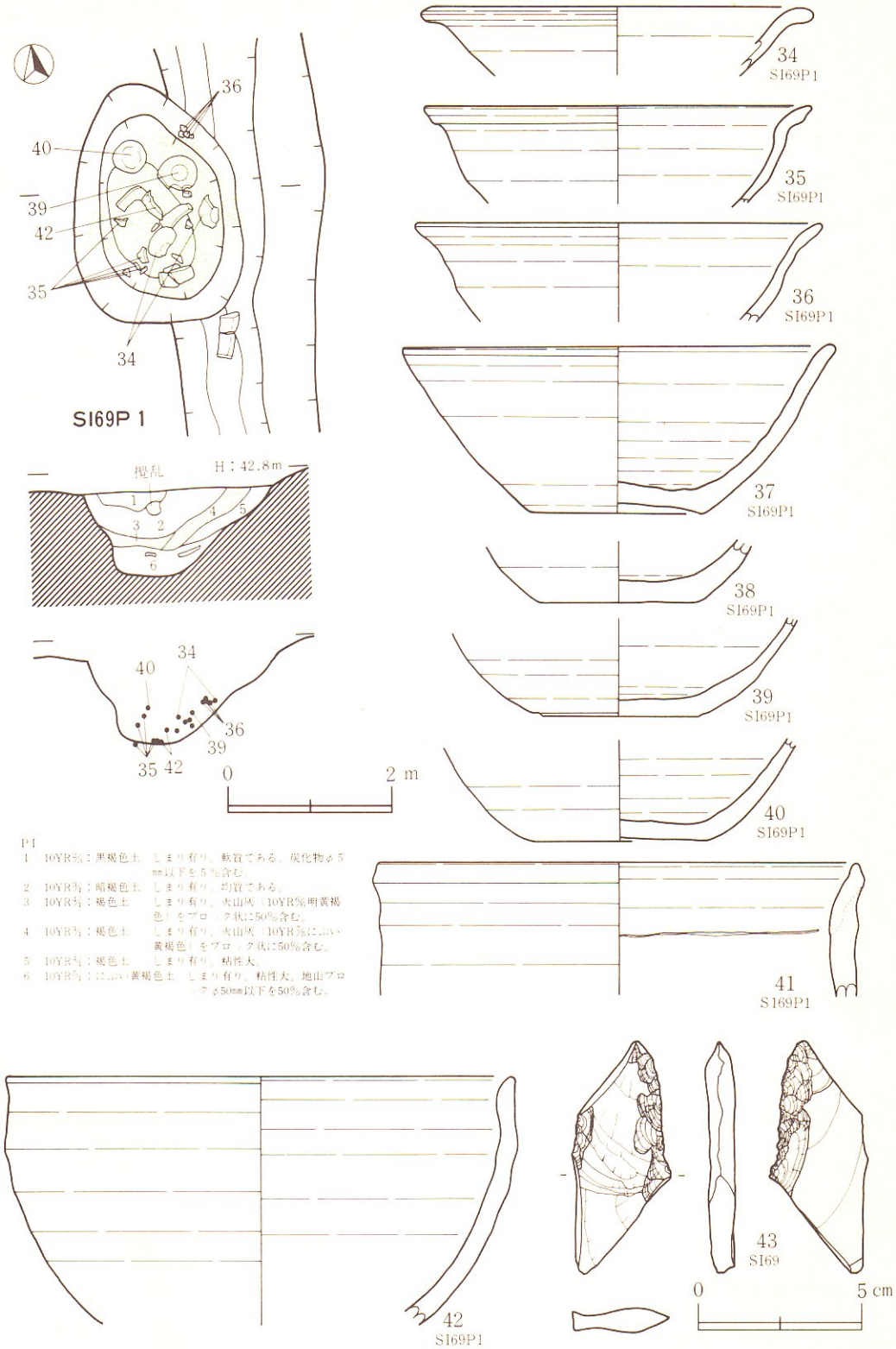
第88図　SI69竪穴住居跡出土遺物(5)

い。

平底の甕形土器は大型、小型のいずれもロクロを使用して成形しているが、口縁部の形態が2種類ある。また成形後の調整技法も各種がある。18～24・41は小型甕形土器である。18・19は体部にロクロ目が強く残り、器壁は薄手で焼成は良好である。胴部から口縁部にかけてはやや内湾気味であるが、口縁部は強く外反しさらに上方に屈曲している。20は内面にロクロ目が



第89図　SI69竪穴住居跡出土遺物(6)



P1
1　10YR5/1：黒褐色土　しまり有り。軟質である。炭化物φ5mm以下を5％含む。
2　10YR3/1：暗褐色土　しまり有り。均質である。
3　10YR5/1：褐色土　しまり有り。火山灰（10YR7/6明黄褐色）をブロック状に50％含む。
4　10YR5/1：褐色土　しまり有り。火山灰（10YR7/6にぶい黄褐色）をブロック状に50％含む。
5　10YR5/1：褐色土　しまり有り。粘性大。
6　10YR5/1：にぶい黄褐色土　しまり有り。粘性大。地山ブロックφ50mm以下を50％含む。

第90図　SI69竪穴住居跡出土遺物(7)

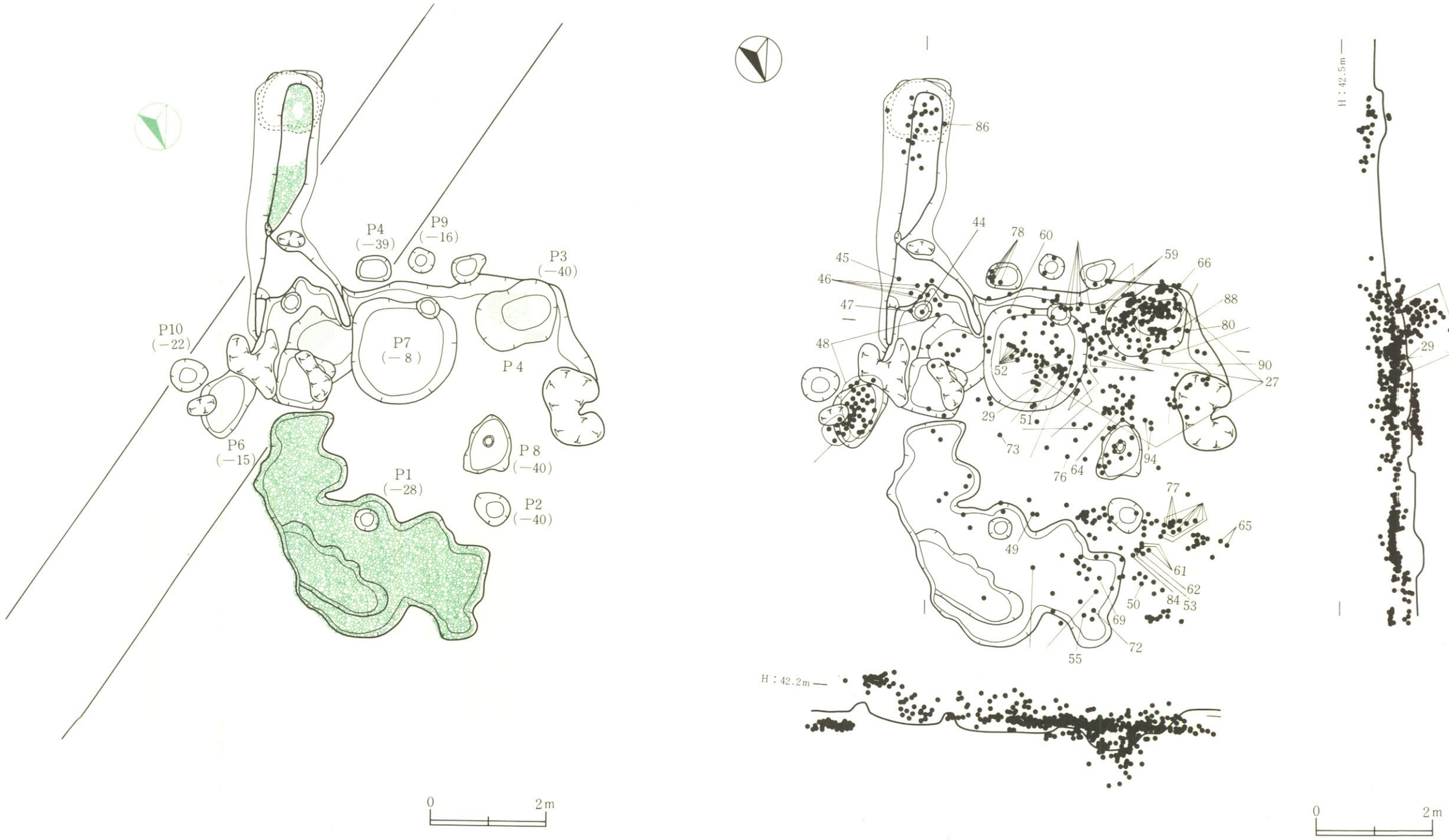
残るが、外面は全面が縦にヘラケズリされている。20～22は口縁部がやや外反し端部が上方に立ち上がる。

これらに対して23・24・41は口縁部がくの字形に屈曲し、端部が上方に引き出されないものである。大型の甕形土器も口縁はこれらの２種類があり、25は後者、26～28は前者である。24の内面にはロクロ調整後に不整方向のナデが施され、外面の胴部中央以下はヘラケズリである。25は外面に口縁部に及ぶ縦方向のヘラナデが施されている。28は上半部はロクロ調整であるが、胴部下半は内面がヘラ状工具の木口によるヘラナデ、外面はヘラ状工具の側面によるヘラケズリが入る。29・30も同様の調整のある甕形土器である。27は南壁壁溝内で火山灰より下から出土し、29はカマド近くの床面から出土して、いずれもSI74竪穴住居跡の床面出土破片と接合した。31～33は丸底で外面にタタキ目のある甕形土器である。33は長胴の砲弾形で、口縁部が外反する。内面は全体にヨコナデ、外面は上半にロクロ目があり、下半はヘラケズリで、下３分の１程にタタキ目がある。ヘラケズリはタタキ目の後に施される。この他に埋土中からは43の不定形石器が出土した。折れ面を残し、刃部が両面から剝離されるc_2類③Ａである。

SI74竪穴住居跡：（第91～101図、図版10・11・40・42・43）

LJ46グリッドを中心として、LJ46、LJ47、LI47グリッドにまたがって検出した。西側にSI69竪穴住居跡とSK89土坑、東側にSK90土坑、南側にSK87土坑が隣接するが、切り合いはない。全体に削平が著しく、竪穴住居跡の南側とカマド、煙道、それに貼床部分が残るのみで、北側はほとんど失われている。カマドは良好に残存し、特に南側に長く延びる煙道は先端の煙出し部まで残っていた。平面形は方形になると思われる。カマドは南壁の東寄りに構築されている。主軸はＳ－15°－Ｗである。南壁はカマドより東側が１m92cm、東壁は１mが残存する。南壁は高さ約20cmである。壁溝はない。

床面は平坦でやや北に傾斜している。カマド付近から中央にかけては床面を掘り凹め、その後に地山ブロックの多く混じる土を貼って踏み固めた貼床がある。主柱穴はＰ１～Ｐ３、Ｐ５と思われる。Ｐ３・Ｐ５は竪穴外にあり、SI74竪穴住居跡の主柱穴とすれば、上屋構造の想定が難しいが、SI69竪穴住居跡の主柱穴配置から考えて、Ｐ３・Ｐ４もSI74竪穴住居跡の主柱穴としておく。柱穴間距離は長軸が２m13cm（７尺）、短軸が84cm（３尺）～１m14cm（４尺）で、長方形に近い台形の配置となる。これはSI69竪穴住居跡のほぼ３分の２の規格である。SI69竪穴住居跡の各壁の長さと主柱穴間の長さの比をSI74竪穴住居跡にあてはめて竪穴住居跡の規模を推定すると、南壁約２m70cm、北壁約３m15cm、東壁と西壁が約２m85cmとなる。Ｐ３とＰ４の間には浅い柱穴が１本、カマドの東側でおそらくは南東隅にあたる部分にも１本の柱穴がある。南西隅と南東隅近くには竪穴住居跡に伴う土坑が１基ずつあり、カマド右横の壁際にも径約90cm、深さ約5cmの浅い掘り込みがある。Ｐ４は長径約72cm、短径約55cm、床面からの深さ約30cm



第91図　SI74竪穴住居跡、遺物出土状況

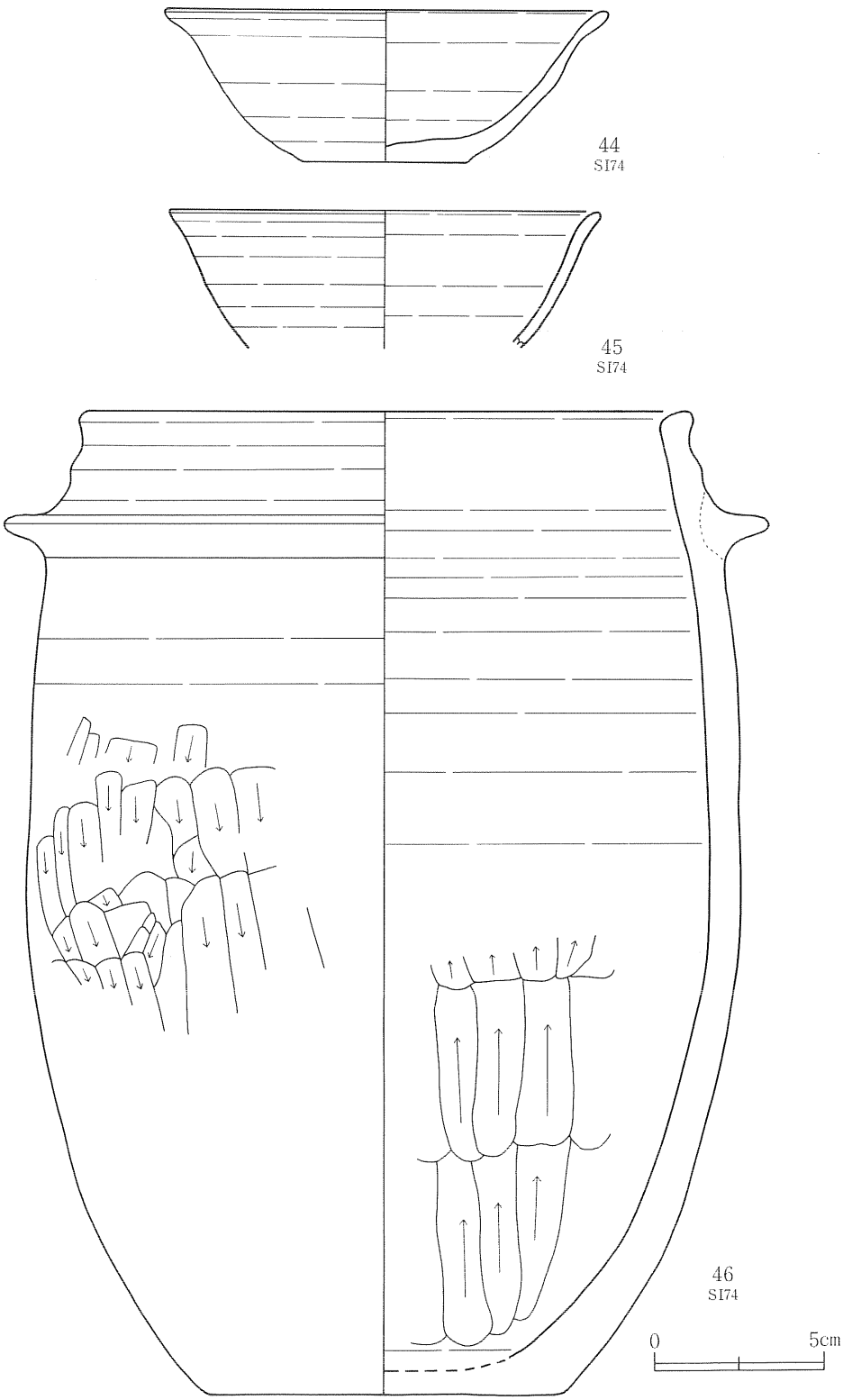
SI74カマド
SPA～SPB

1　10 YR ¾：暗褐色土　しまりあり、焼土粒φ5 mm以下1％、炭化物φ 2 mm以下1％、地山粒φ 3 mm以下2％混入。
2　10 YR ⅚：黄褐色土　きわめて固くしまっている。一部熱をうけて赤変している。煙道部天井。
3　10 YR ⅚：褐色土　2が熱をうけて赤変している。
4　7.5YR ¾：暗褐色土　しまりややなし、5 Y R ¾：赤褐色土がブロック状にφ15mm以下20%、炭化物φ 2 mm以下1％、焼土細粒φ 2 mm以下5％混入。
5　7.5YR ¾：暗褐色土　しまりややあり、焼土粒φ10mm以下10%、炭化物φ 3 mm以下5％混入。
6　7.5YR ¾：暗褐色土　焼土粒φ 1 mm以下5％、炭化物φ 2 mm以下5％混入。
7　10 YR ¾：暗褐色土　炭化物φ 3 mm以下2％、地山細粒φ 2 mm以下2％混入。
8　7.5YR ¾：暗褐色土　焼土粒φ 1 mm以下5％、炭化物φ 2 mm以下5％混入。
9　7.5YR ¾：暗褐色土　しまりあり、焼土粒φ 5 mm以下5％、炭化物粒φ 3 mm以下5％混入。
10　10 YR ¾：褐色土　しまりややあり、粘性大、焼土粒φ 3 mm以下2％、炭化物φ 3 mm以下2％混入。
11　10 YR ⅚：褐色土　しまりあり、粘性大。
12　7.5YR ¾：暗褐色土　しまりややなし、5 Y R ¾：赤褐色土のブロックφ10mm以下2％、焼土細粒φ 2 mm以下2％、炭化物φ 2 mm以下1％混入。
13　5 YR ⅚：赤褐色土　しまりあり、粘性大、熱をうけて赤変している。5 Y R ¾：赤褐色土の小ブロックφ10mm以下7％混入。
14　7.5YR ⅚：褐色土　しまりなし、もろい、焼土細粒φ 2 mm以下1％混入。
15　10 YR ¾：褐色土　地山崩壊土φ30%、焼土細粒φ 2 mm以下1％混入。
16　7.5YR ¾：褐色土　しまりあり、粘性大、焼土粒φ 2 mm以下1％、炭化物φ 2 mm以下1％混入。
18　7.5YR ¾：褐色土　しまりややなし、焼土粒φ 5 mm以下5％、炭化物φ 3 mm以下7％混入。
19　10 YR ⅚：褐色土　カマドのそで、しまりきわめて固い。
20　10 YR ¾：暗褐色土　しまりあり、炭化物φ 2 mm以下2％混入。
21　5 YR ⅚：赤褐色土　しまりややなし、焼土粒φ 5 mm以下7％、炭化物φ 2 mm以下5％混入。
23　5 YR ⅚：赤褐色土　しまりややなし、もろい、焼土粒子φ 5 mm以下5％、炭化物φ 5 mm以下7％混入。
24　5 YR ⅚：明赤褐色土　しまりあり、炭化物φ 3 mm以下2％混入。
25　10 YR ⅚：黒褐色土　しまりややなし、焼土粒φ 5 mm以下5％、炭化物粒φ 3 mm以下10％混入。
26　10 YR ⅚：褐色土　カマドのそで、しまりきわめて固い。
27　7.5YR ¾：褐色土　しまりあり、焼土粒φ 3 mm以下10%、炭化物粒φ 10mm以下10%混入。
28　7.5YR ⅚：褐色土　粘性大、炭を層状に含む。
29　5 YR ⅚：明赤褐色土　しまりあり、炭化物φ 3 mm以下2％混入。
31　5 YR ¾：明赤褐色土　粘性大、地山が赤変したもの。
40　10 YR ¾：褐色土　しまりあり、粘性にやや欠ける。均質にさらさらしている。

SI74
SPC～SPD

17　7.5YR ¾：褐色土　しまりややあり、焼土粒φ 5 mm以下7％、炭化物φ 3 mm以下10%混入。
18　7.5YR ¾：褐色土　しまりややなし、焼土粒φ 5 mm以下5％、炭化物φ 3 mm以下7％混入。
21　5YR ¾：赤褐色土　しまりややなし、焼土粒φ 5 mm以下7％、炭化物φ 2 mm以下5％混入。
22　5YR ¾：赤褐色土　しまりややあり、焼土粒φ 3 mm以下2％、炭化物φ 3 mm以下5％混入。
23　5YR ¾：赤褐色土　しまりややなし、もろい、焼土粒φ 5 mm以下5％、炭化物φ 5 mm以下7％混入。
24　5YR ⅚：明赤褐色土　しまりあり、炭化物φ 3 mm以下2％混入。
28　7.5YR ¾：褐色土　粘性大、炭を層状に含む。
30　10YR ⅚：褐色土　カマドのそでの崩壊土。しまりきわめて固い。
31　5YR ⅚：明赤褐色土　粘性大、地山が赤変したもの。
32　10YR ¾：褐色土　火山灰を微量に含む。サラサラした感じで、しまりあり、焼土粒φ 5 mm以下10%、炭化物φ 5 mm以下10%混入。
33　10YR ¾：褐色土　しまりややあり、炭化物粒φ 3 mm以下5％、地山の小粒φ 5 mm以下10%混入。
34　10YR ¾：褐色土　しまりあり、粘性大、焼土粒φ 5 mm以下2％、炭化物粒φ 3 mm以下5％混入。
35　10YR ¾：褐色土　しまりあり、焼土粒φ10mm以下10%、炭化物粒φ10mm以下10%混入。
36　10YR ⅚：明黄褐色土　しまりあり、粘性大、地山の崩壊土30%混入。
37　10YR ¾：褐色土　しまりあり、粘性大、焼土粒φ 5 mm以下2％、炭化物粒φ 3 mm以下5％。
38　10YR ⅚：明褐色土　しまりあり、粘性大、地山の崩壊土40%混入。
39　10YR ¾：褐色土　しまりあり、粘性大、炭化物粒φ 3 mm以下5％、地山の小粒φ 5 mm以下20%混入。
41　10YR ⅚：褐色土　カマドのそで、しまりきわめて固い。

第92図　SI74竪穴住居跡カマド



第93図　SI74竪穴住居跡出土遺物(1)

の楕円形土坑で、埋土中から底面にわたって多量の土器片が出土した。またＰ６は長径約56cm、短径約40cm、約60cmの楕円形土坑で、やはり中から多量の土器片が出土した。出土土器はＰ４がほとんど杯形土器であるのに対し、Ｐ６はほとんど甕形土器で、48の甕形土器上半部も倒立の状態で入っていた。Ｐ４の埋土には火山灰がレンズ状に堆積し、焼土や炭化物が多く入り壁面の上部は強く焼けている。

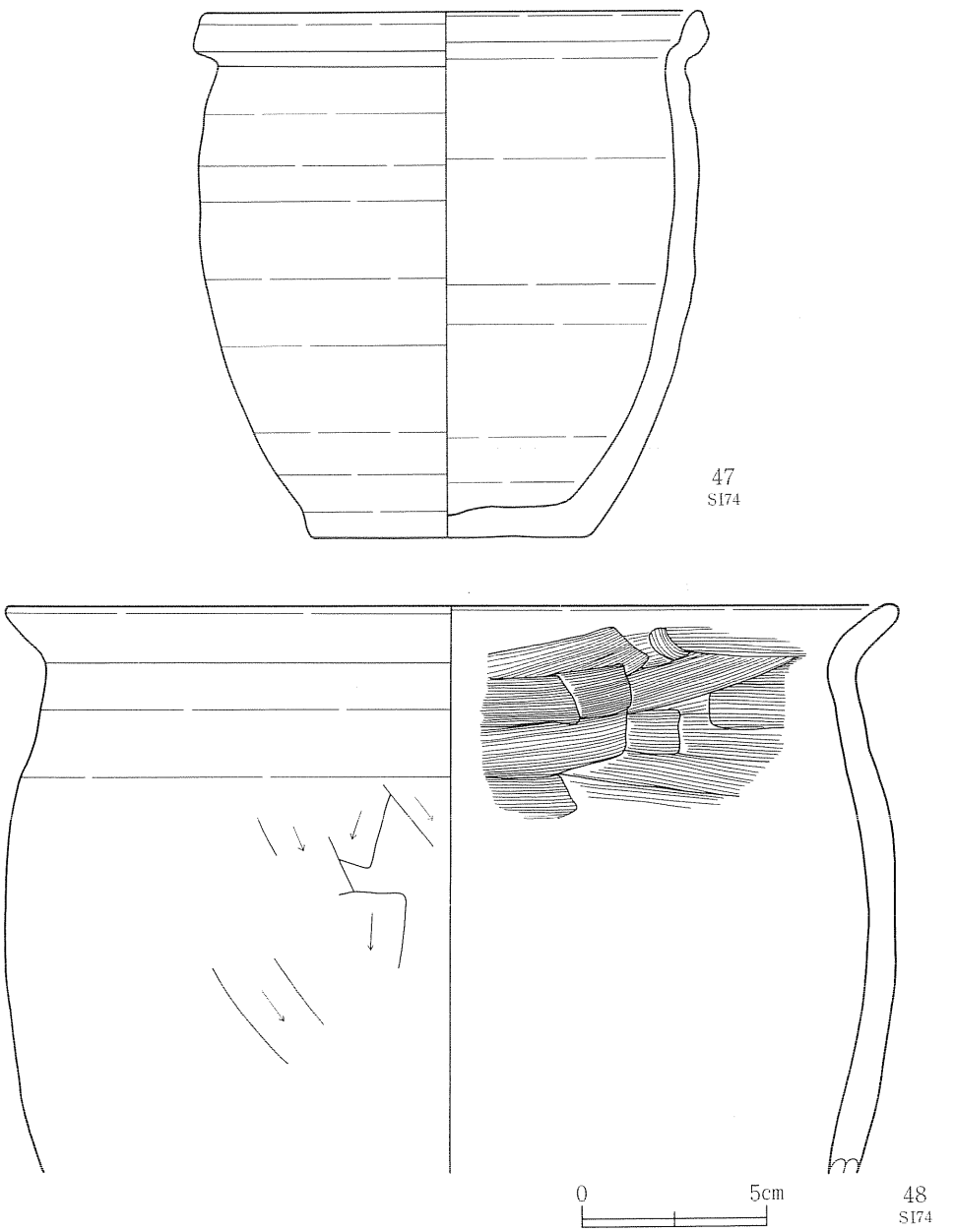
カマドの天井部はすでにないが、両側の袖は残り、煙道と煙道先端の煙出し部までよく残っている。カマド本体の掘り方は竪穴住居跡の壁よりも外側に突出しており、竪穴住居跡の壁は袖の中央部付近に取り付く。袖は粘土で構築されている。燃焼部はやや凹み強く焼けている。左右の袖の中央やや煙道寄りには小型甕形土器を倒立に置き、その上に杯形土器をかぶせた支脚が置かれている。小型甕形土器は口唇部がカマド底面に1～2cm埋め込まれ、その部分が浅いピットになっている。煙道は長さ約１m76cm底面の幅約52cm、天井部の幅約28cmである。煙道は基本層位第３層の褐色土を溝状に掘り込み天井を粘土で貼ったもので、煙道の中央部と煙出し部の周囲に粘土壁が残っている。煙道全体は火熱を受けて焼土化している。底面はカマド本体から煙出しに向かって緩やかに高くなる。土層縦断面図の14・12・7・9・6層などが煙道内に流入した土である。煙出し部は径約54cmの隅丸方形の地山に達するピットが掘られている。天井部の煙出孔は長径約20cm、短径約10cmの楕円形を呈する。

埋土には火山灰を多く含み、南壁、西壁の付近には竪穴住居跡廃絶後埋没しきらない状態で流入した火山灰が堆積し、竪穴住居跡の床面全体を混火山灰土が覆っていた。またＰ４の埋土中には火山灰がレンズ状に入り、混火山灰土が堆積している。カマド周辺の床面には焼土粒ややや大きめの炭化物が散乱していたが、床面は焼けていなかった。

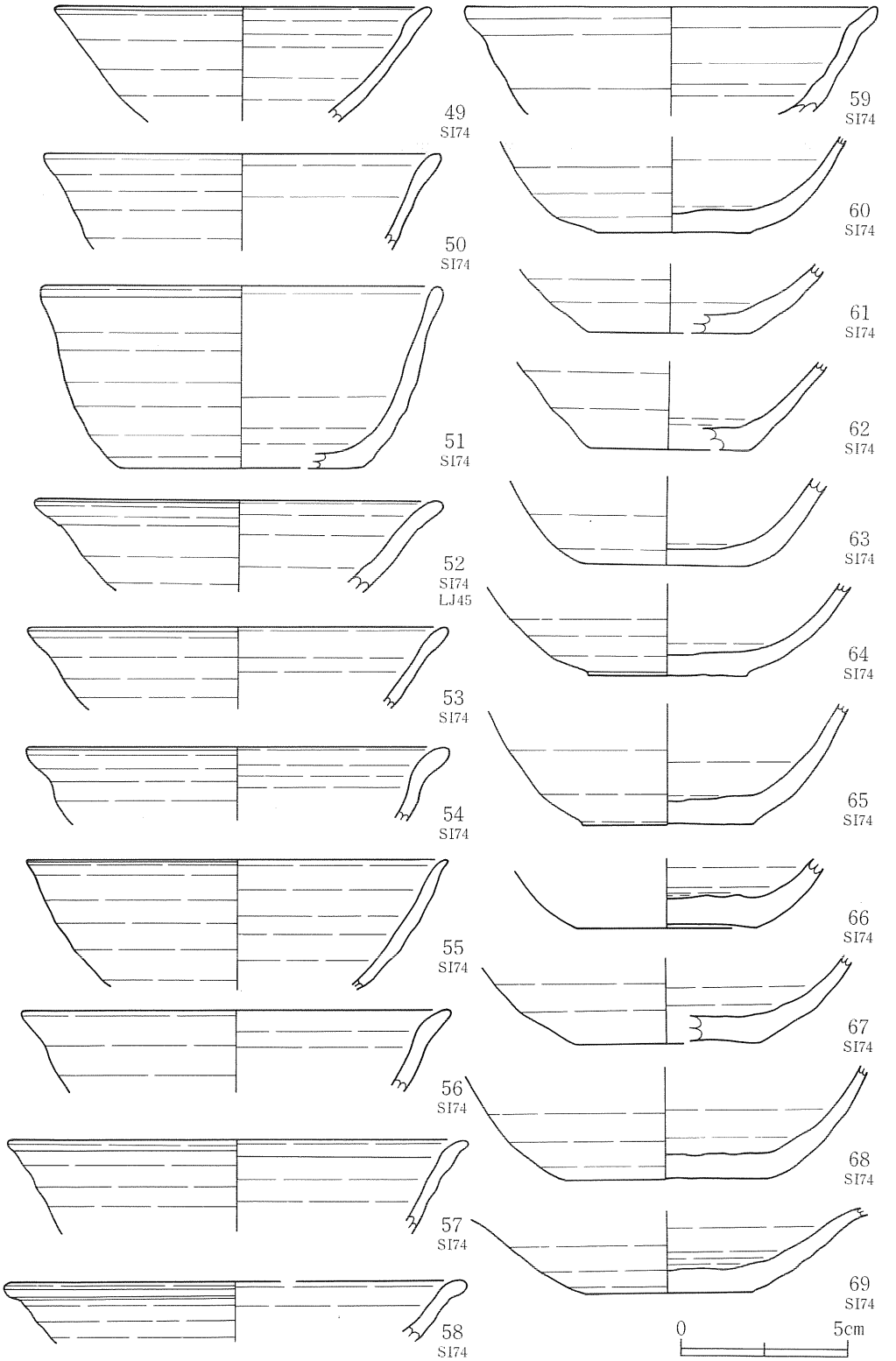
遺物は埋土中と床面から多量に出土した他、Ｐ４とＰ６の中からまとまって出土した。また煙道の煙出し部のピット内からも土師器の破片が出土している。須恵器は杯形土器の小破片が１点と壺形土器が1点で、他はすべて土師器である。

44～47はカマド内から出土した土器である。44と47はカマドの支脚として使われていたものである。ともに火熱を受けて磨滅している。44は胴部がやや膨らみ口縁部が外反する杯形土器で、口径13.2cm、底径4.9cm、器高4.5cmである。底面に回転糸切り痕がある。47は小型甕形土器で、内外面ともロクロ目が残る。口縁部は外反した後すぐに上方に引き出される。底面には回転糸切り痕がある。46は羽釜である。口径18.2cm、底径10.4cm、器高14.5cm、鍔の径22.7cmで鍔の部分が最大径となる。胴部中央が張り出し、胴部上半から口縁部にかけて緩やかに内湾する。口縁端から約3.4cm下に鍔がつけられる。鍔の幅は約1.5cmである。口唇部は平坦に調整されやや内側に傾く。口唇外面が突出気味に肥厚する。鍔と口唇部の間には明瞭な稜線が１～２本入る。上半部は内外面ともロクロ調整であるが、胴部中央から外面にヘラケズリ、内面にヘラ

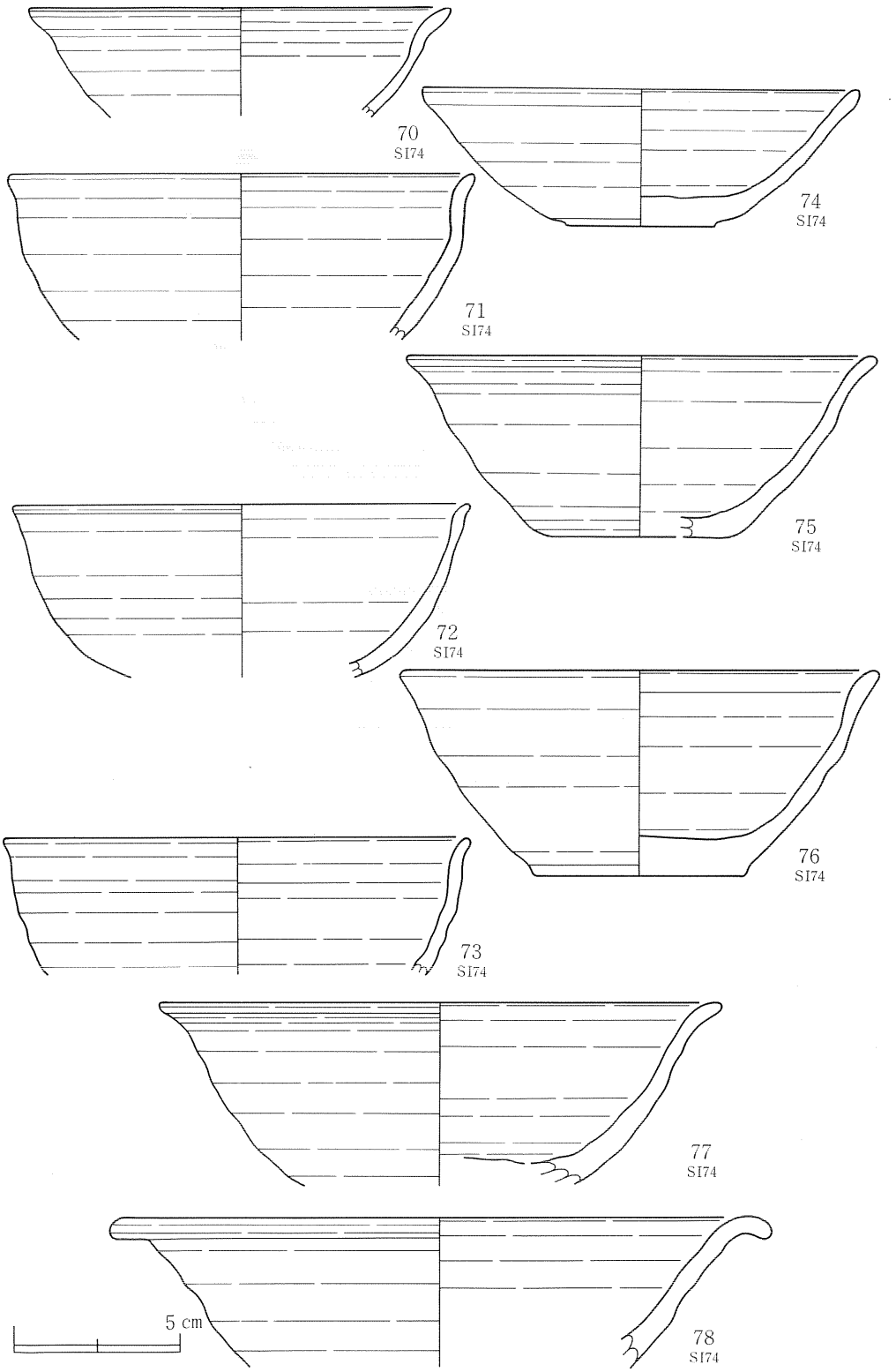
ナデが施される。この羽釜はカマド付近に破片が集中していた。２次的火熱をかなり受けていると思われ、磨滅して表面がボロボロになった破片もあった。45はカマド内埋土中からの出土で口縁がわずかに外反する土師器杯形土器である。48はＰ６から倒立状態で出土した。口縁部はくの字形に外反する。外面の調整は口縁から胴部の上部にかけてロクロ、その下はロクロ成形後ヘラケズリ、内面はナデである。



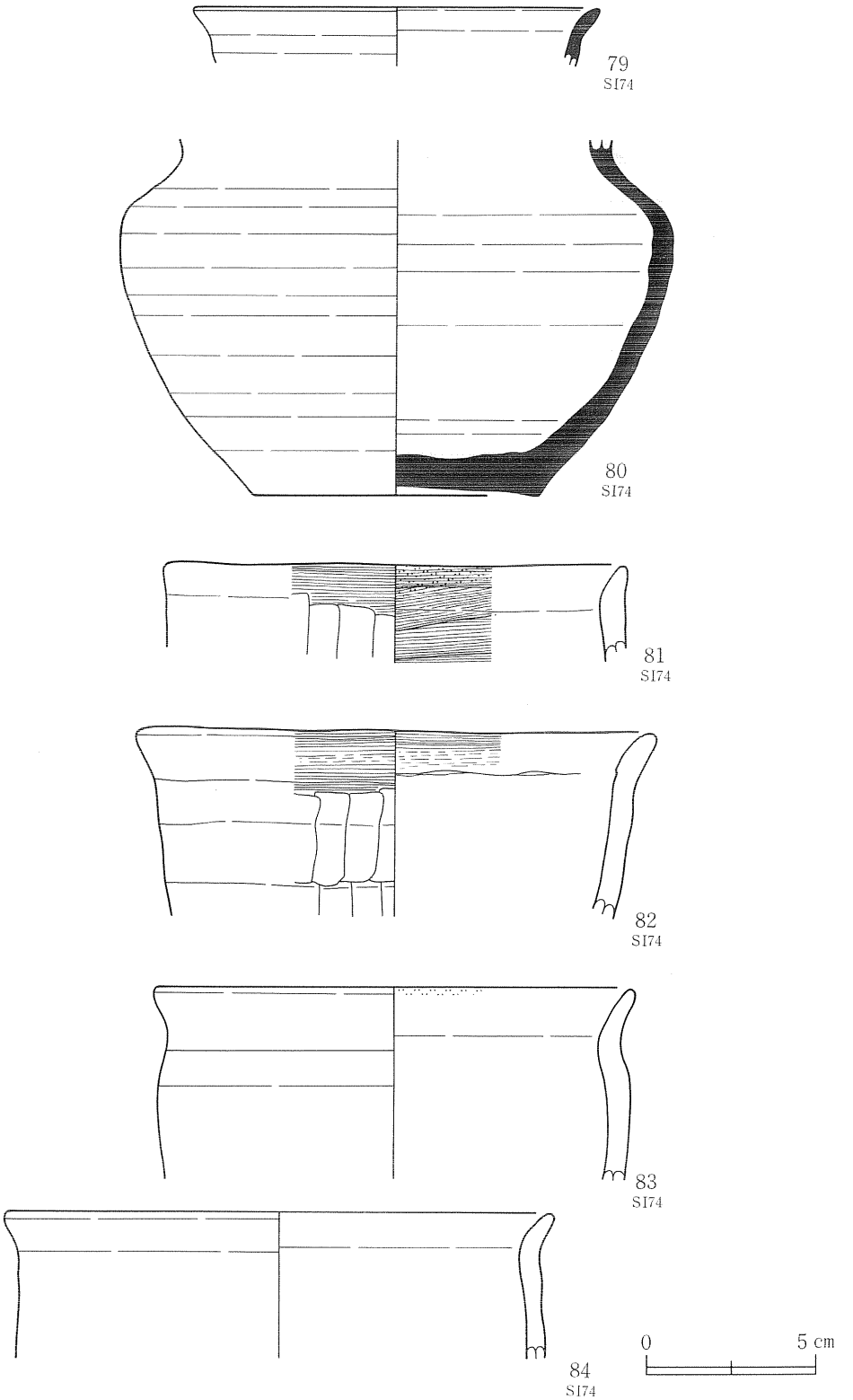
第94図　SI74竪穴住居跡出土遺物(2)



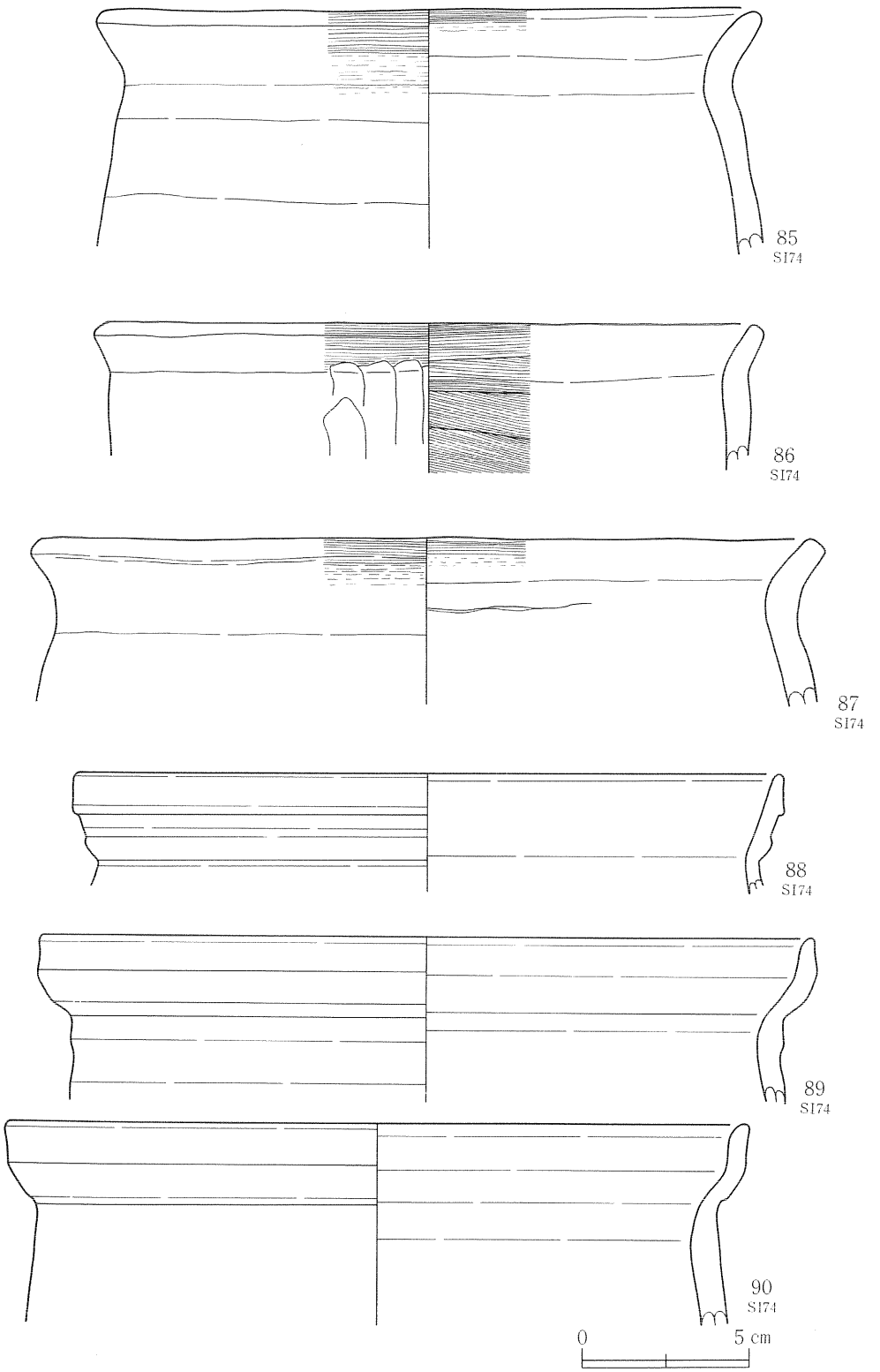
第95図　SI74竪穴住居跡出土遺物(3)



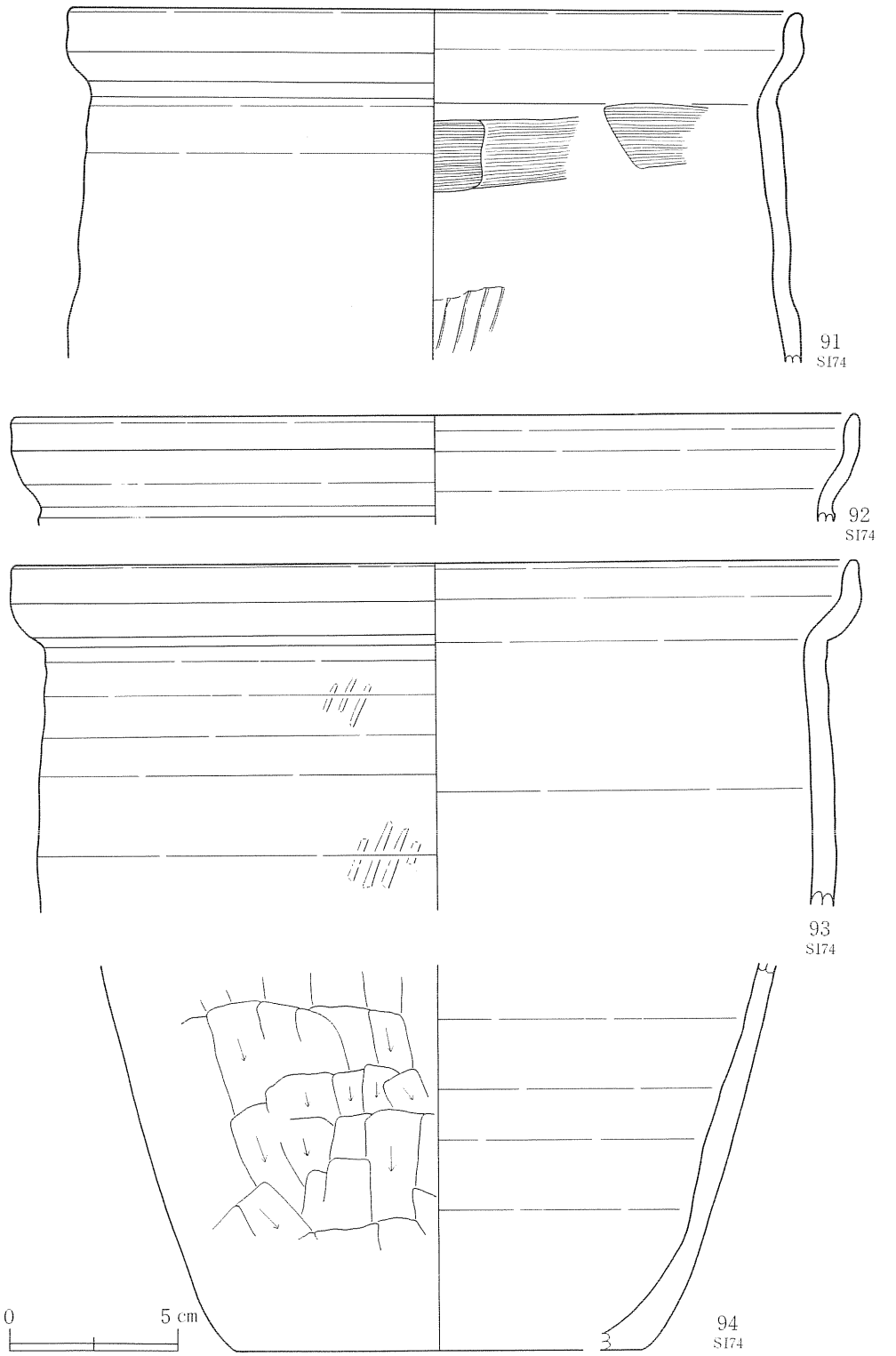
第96図　SI74竪穴住居跡出土遺物(4)



第97図　SI74竪穴住居跡出土遺物(5)



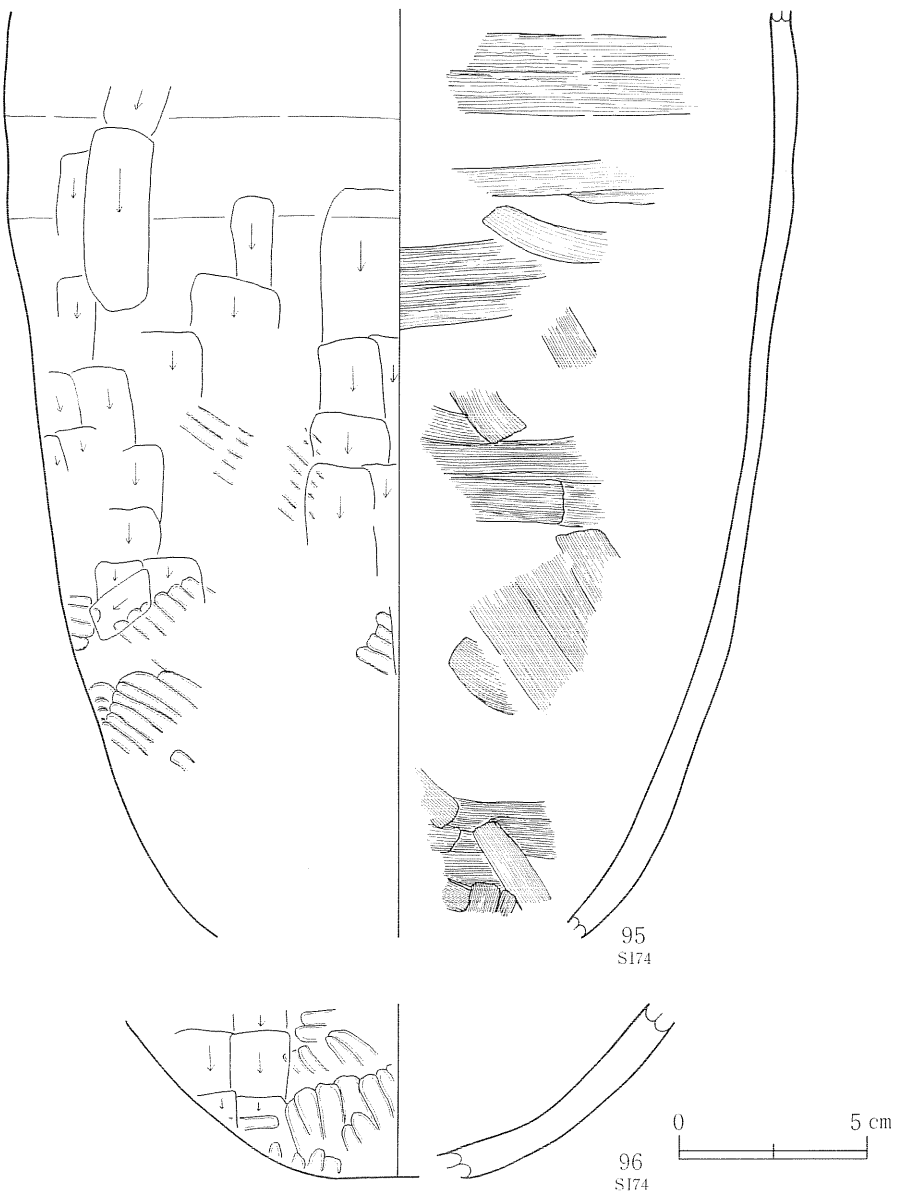
第98図　SI74竪穴住居跡出土遺物(6)



第99図　SI74竪穴住居跡出土遺物(7)

49～68・70～79・97・98・103～106は杯形土器である。79のみ須恵器で他はすべて土師器である。形態にはバラエティーがあり、口縁部が大きく外反して肥厚するものと、わずかに外反するものがあるが、口縁部が外反することは共通する。外反し肥厚する口縁部は皿形土器と共通している。胴部は丸みを帯びて膨らむものが多い。口径は11.5cmから20.2cmまでの範囲であるが13cm前後が最も多い。底径は4.7cmから6.4cmまでの範囲であるが5cm前後が多い。器高は51が5.5cm、74が4.1cm、75が5.5cm、76が6.2cm、103が4.3cmである。

69・99・102は皿形土器である。99は口縁部の外反が小さいが、100～102は端部が肥厚し大き



第100図　SI74竪穴住居跡出土遺物(8)

く外反している。器高は99が2.7cm、100が3.1cmである。

80は須恵器の壷形土器である。床面から出土したものと、SK108土坑埋土中から出土した破片が接合した。肩が張り口縁部が外反する広口の壷で、底面には回転糸切り痕がある。

81～84は小型の甕形土器である。いずれも胴部はあまり張らず口縁部がくの字形に外反する。81・82はロクロを使用せず外面がヘラケズリ、内面がヨコナデで粘土紐の接合痕が残る。83・84は内外面ともロクロ調整である。

85～87は口縁部がくの字形に外反する大型の甕形土器である。いずれもロクロ成形と思われるが磨滅が著しく判然としない。88～93は口縁部が外反した後、上方に引き出されるもので、ロクロ成形である。口縁先端の上方に引き出された部分が口縁部の1/3～1/2の長さを占め、口唇部は丸く調整されている。93は外面に部分的にタタキ目がつくが、その上をロクロ調整している。94は外面ヘラケズリの底部で、内面はヨコナデである。95・96はタタキ目のある砲弾形の丸底の大型甕形土器である。タタキ目の上にヘラケズリ調整を加えている。95は胴部上半はロクロ成形痕が認められ、内面はナデ調整である。

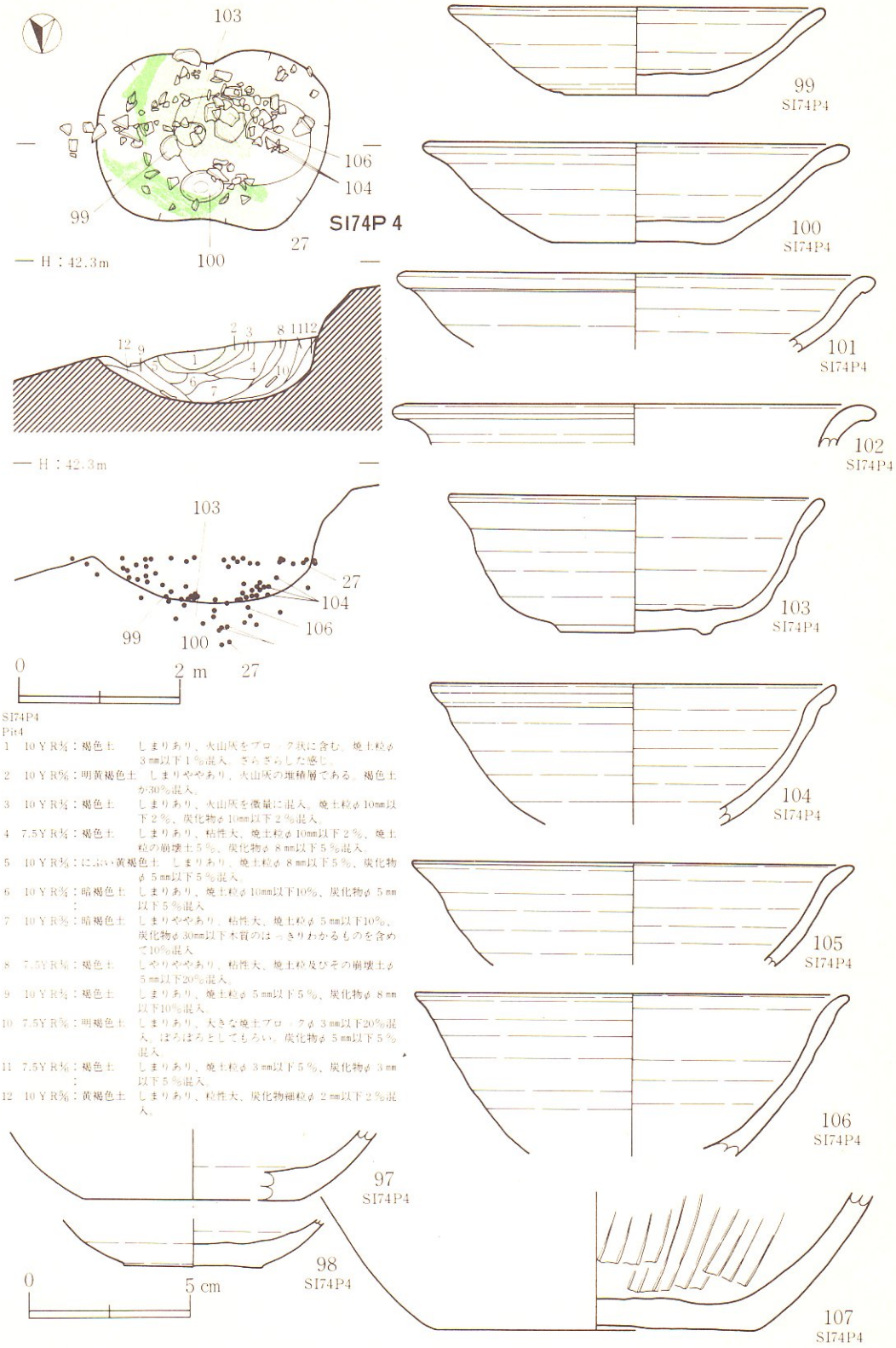
SK87土坑（第102・103図、図版11・43）

LI45グリッドで検出した。SK89土坑、SI74竪穴住居跡と隣接する。平面形は長軸約1m46cm、短軸約1m4cmの不整隅丸方形で、深さ約15cmである。底面の西側半分が約66cm×約45cmの広さで強い火熱によって固く焼け硬化している。その周辺の底面や壁も火熱を受けて焼土化している。東側半分は埋土中に焼土ブロックや炭化物が混じるが、底面、壁とも焼けていない。埋土中から底面にかけて多量の土師器が出土した。

108～115は杯形土器である。108は口径14.1cm、底径4.8cm、器高4.8cmで、胴部はやや丸みを帯びて膨らみ、口縁が緩やかに外反する。115は内面に細かいヘラミガキが施され黒色処理されている。底部から胴部が直線的に立ち上がる器形で、底部には高台がついていたと思われる剝離痕跡がある。116・117は口縁がくの字形に外反する大型の甕形土器である。いずれもロクロ調整である。118は口縁が外反した後、内側に屈曲して上方に引き出されたものである。119は小型甕形土器の底部で内外面ともにロクロ目が明瞭である。

SK89土坑（第104図、図版12・43）

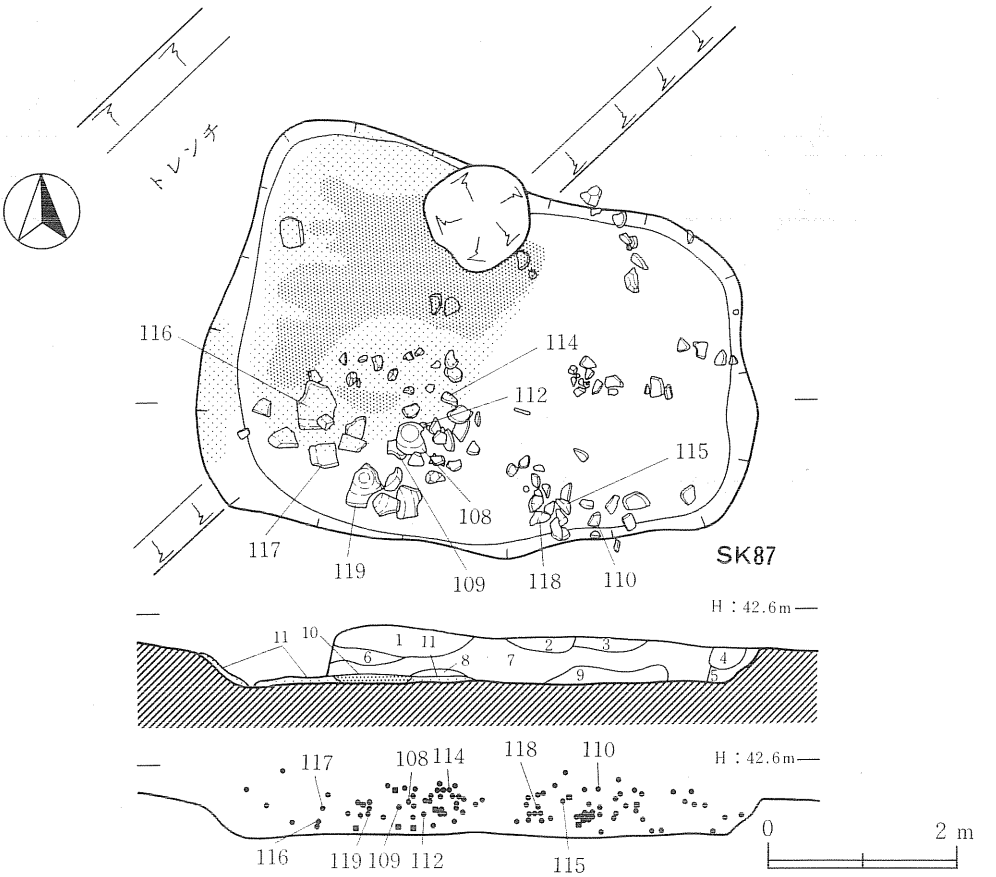
LH45・LI45グリッドで検出した。SI69竪穴住居跡のカマド煙道部を切って構築されている。基本層位第2層中で径約1m84cmのマウンドを確認した。このマウンドは地山の大ブロックを多量に含んでやや固く締まっており、土坑を覆っていた。土坑は平面形が径約1m80cmの不整円形で、深さは約55cmである。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面とは明確な稜をなす。埋土は孔隙が多くて締まりがなくボソボソしている。埋土の状態と土坑を覆っている地山ブロックを多く含むマウンドからみて、土坑は人為的に埋められたものである



SI74P4
Pit4

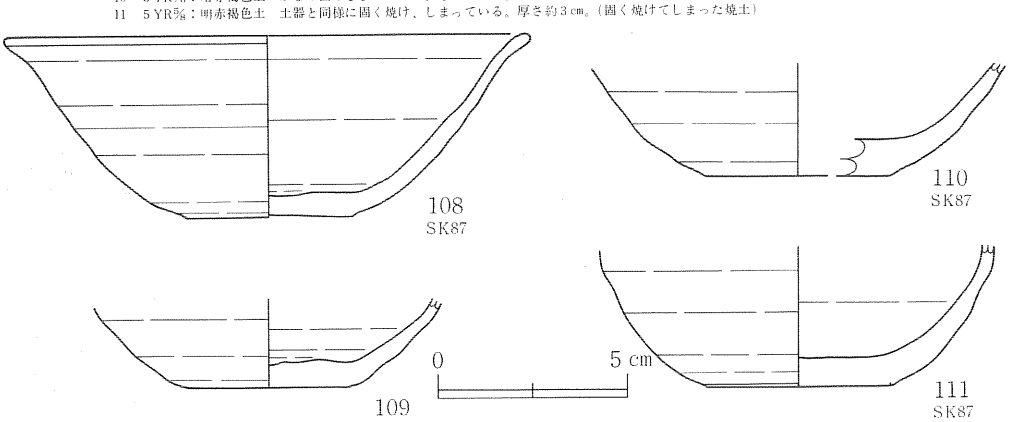
1	10ＹＲ3/2：褐色土	しまりあり、火山灰をブロック状に含む。焼土粒φ３mm以下１％混入。ざらざらした感じ。
2	10ＹＲ5/6：明黄褐色土	しまりややあり、火山灰の堆積層である。褐色土が30％混入。
3	10ＹＲ3/2：褐色土	しまりあり、火山灰を微量に混入。焼土粒φ10mm以下２％、炭化物φ10mm以下２％混入。
4	7.5ＹＲ3/2：褐色土	しまりあり、粘性大、焼土粒φ10mm以下２％、焼土粒の崩壊土５％、炭化物φ８mm以下５％混入。
5	10ＹＲ5/3：にぶい黄褐色土	しまりあり、焼土粒φ８mm以下５％、炭化物φ５mm以下５％混入。
6	10ＹＲ3/3：暗褐色土	しまりあり、焼土粒φ10mm以下10％、炭化物φ５mm以下５％混入。
7	10ＹＲ3/3：暗褐色土	しまりややあり。粘性大、焼土粒φ５mm以下10％、炭化物φ30mm以下木質のはっきりわかるものを含めて10％混入。
8	7.5ＹＲ3/2：褐色土	しまりややあり。粘性大、焼土粒及びその崩壊土φ５mm以下20％混入。
9	10ＹＲ3/2：褐色土	しまりあり、焼土粒φ５mm以下５％、炭化物φ８mm以下10％混入。
10	7.5ＹＲ5/6：明褐色土	しまりあり、大きな焼土ブロックφ３mm以下20％混入、ぼろぼろとしてもろい。炭化物φ５mm以下５％混入。
11	7.5ＹＲ3/2：褐色土	しまりあり、焼土粒φ３mm以下５％、炭化物φ３mm以下５％混入。
12	10ＹＲ5/6：黄褐色土	しまりあり、粘性大、炭化物細粒φ２mm以下２％混入。

第101図　SI74竪穴住居跡出土遺物(9)

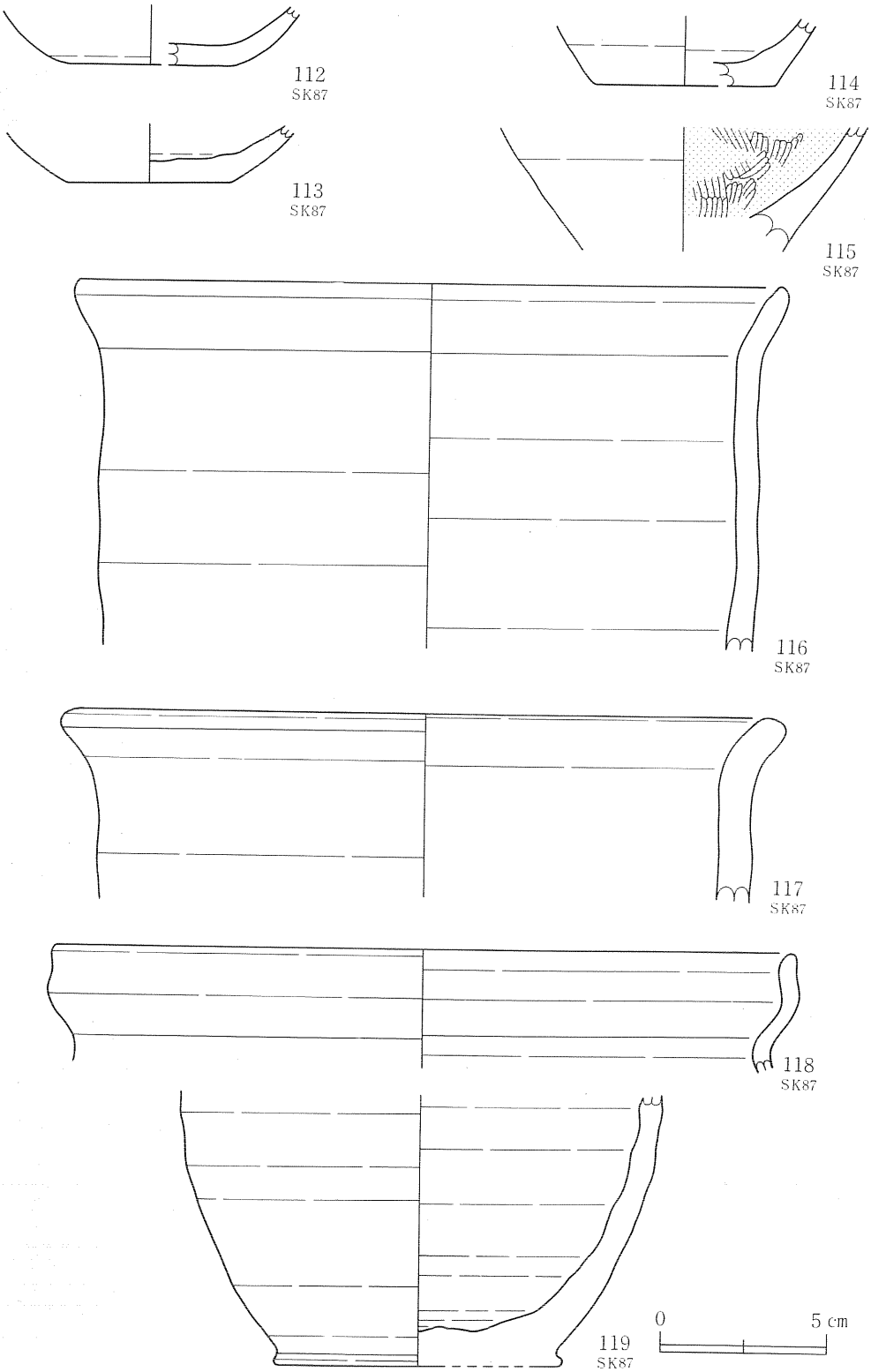


SK87

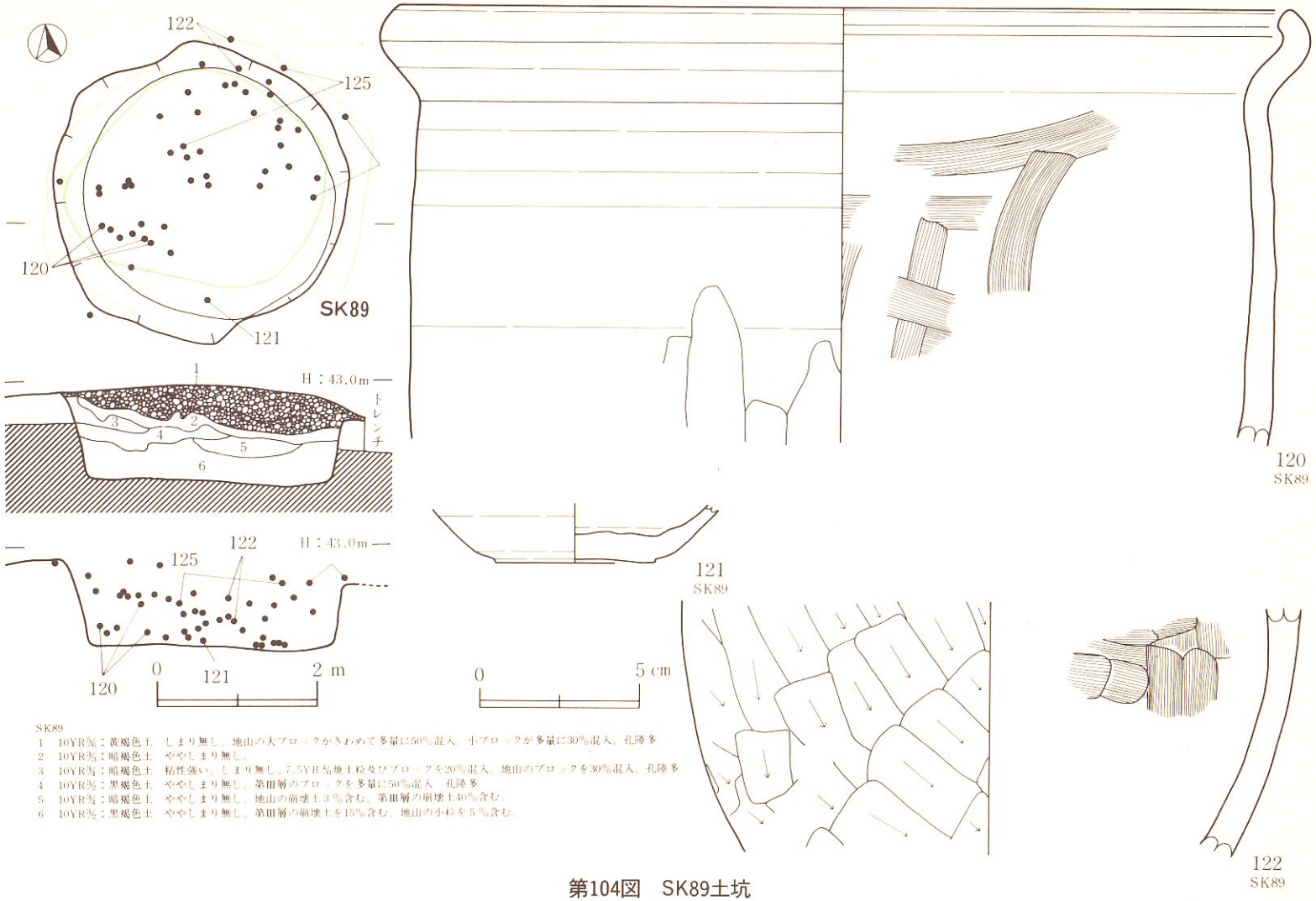
1　10YR3/2：黒褐色土　しまり無し。炭化物粒を多く含む（30%）。
2　10YR2/3：黒褐色土　ややしまり有り。焼土の細粒（2mm以下）を、多く含む（30%）。炭化物粒（5mm以下）を含む（20%）。
3　10YR3/2：黒褐色土　ややしまり有り。焼土粒（5mm以下）を、多く含む（20%）。炭化物粒（5mm以下）を含む（20%）。
4　10YR3/2：黒褐色土　しまり無し。炭化物（10mm以下、材質の木目が見える位の物）を、多く含む（20%）。焼土粒を含む（5mm以下、20%）。孔隙多。
5　10YR4/3：にぶい黄褐色土　しまり有り。炭化物（5mm以下）を含む（5%）。
6　10YR3/3：黒暗色土　均質で、さらさらした感じがする。ややしまり有り。炭化物（5mm以下）を含む（7%）。
7　10YR3/2：黒褐色土　ややしまり有り。炭化物粒（3mm以下、10%）、焼土粒（3mm以下、10%）を含む。土師器片が、多く包含されている。
8　10YR3/4：暗褐色土　しまり有り。焼土粒（3mm以下）を、多く含む（10%）。
9　10YR3/2：黒褐色土　ややしまり有り。焼土粒（3mm以下）を、多く含む（10%）。炭化物粒を含む（5mm以下、10%）。地山の崩壊土を含む（20%）。
10　5YR3/3：暗赤褐色土　かなり固くしまっている。厚さ約2cm。（焼土）
11　5YR3/4：明赤褐色土　土器と同様に固く焼け、しまっている。厚さ約3cm。（固く焼けてしまった焼土）



第102図　SK87土坑

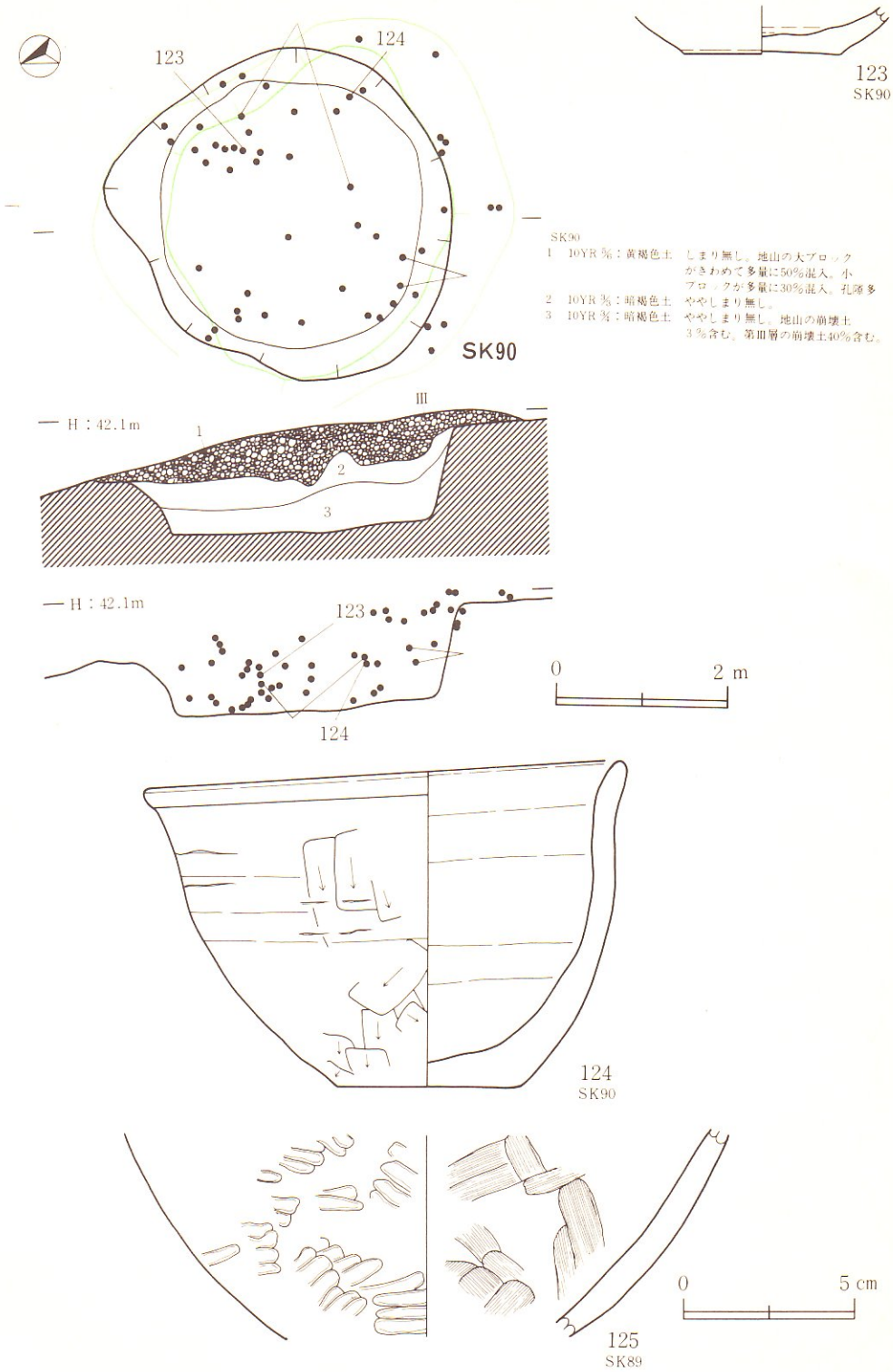


第103図　SK87土坑出土遺物



SK89
1　10YR⅝：黄褐色土　しまり無し。地山の大ブロックがきわめて多量に50%混入。小ブロックが多量に30%混入。孔隙多
2　10YR⅝：暗褐色土　ややしまり無し。
3　10YR⅝：暗褐色土　粘性強い。しまり無し。7.5YR⅝焼土粒及びブロックを20%混入。地山のブロックを30%混入。孔隙多
4　10YR⅝：黒褐色土　ややしまり無し。第Ⅲ層のブロックを多量に50%混入。孔隙多
5　10YR⅝：暗褐色土　ややしまり無し。地山の崩壊土3%含む。第Ⅲ層の崩壊土40%含む。
6　10YR⅝：黒褐色土　ややしまり無し。第Ⅲ層の崩壊土を15%含む。地山の小粒を5%含む。

第104図　SK89土坑



第105図　SK90土坑

と考えられる。埋土中には土師器が多量に含まれていたが小破片が多い。

120・122は同一個体で大型の甕形土器である。口縁部は外反した後、口唇部が上方に屈曲する。胴部上半はロクロ目が明瞭である。胴部中央以下はヘラケズリで、胴部下半から底部にかけては、密に深くヘラケズリが行われている。内面は不整方向のナデである。120はSK90土坑から出土した破片とも接合している。121は杯形土器底部で、底径は4.9cm、底面は回転糸切りである。

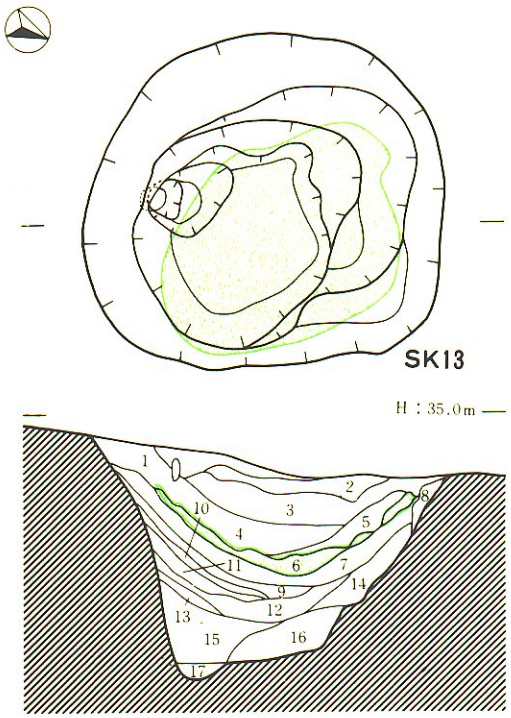
SK90土坑（第105図、図版11・12・43）

LJ46・LK46グリッドで、SI74竪穴住居跡の東側に隣接して検出した。規模、形態、埋土の状態とも、SK89と極めて類似する。土坑を覆うマウンドは径約2m40cm、土坑は径約1m90cmの不整円形で、深さは約55cmである。埋土中からは多量の土師器が出土したがほとんど小破片である。

124は小破片が多数接合したもので、口縁が緩やかにくの字形に外反する小型の甕形土器で、外面にはヘラケズリが施されている。125は丸底でタタキ目のある大型の甕形土器である。内面はナデ調整である。

SK13土坑（第106図、図版24）

LN52・53グリッドで検出した。中央部遺構群のあるテラス状の斜面より北東側約70mにあ

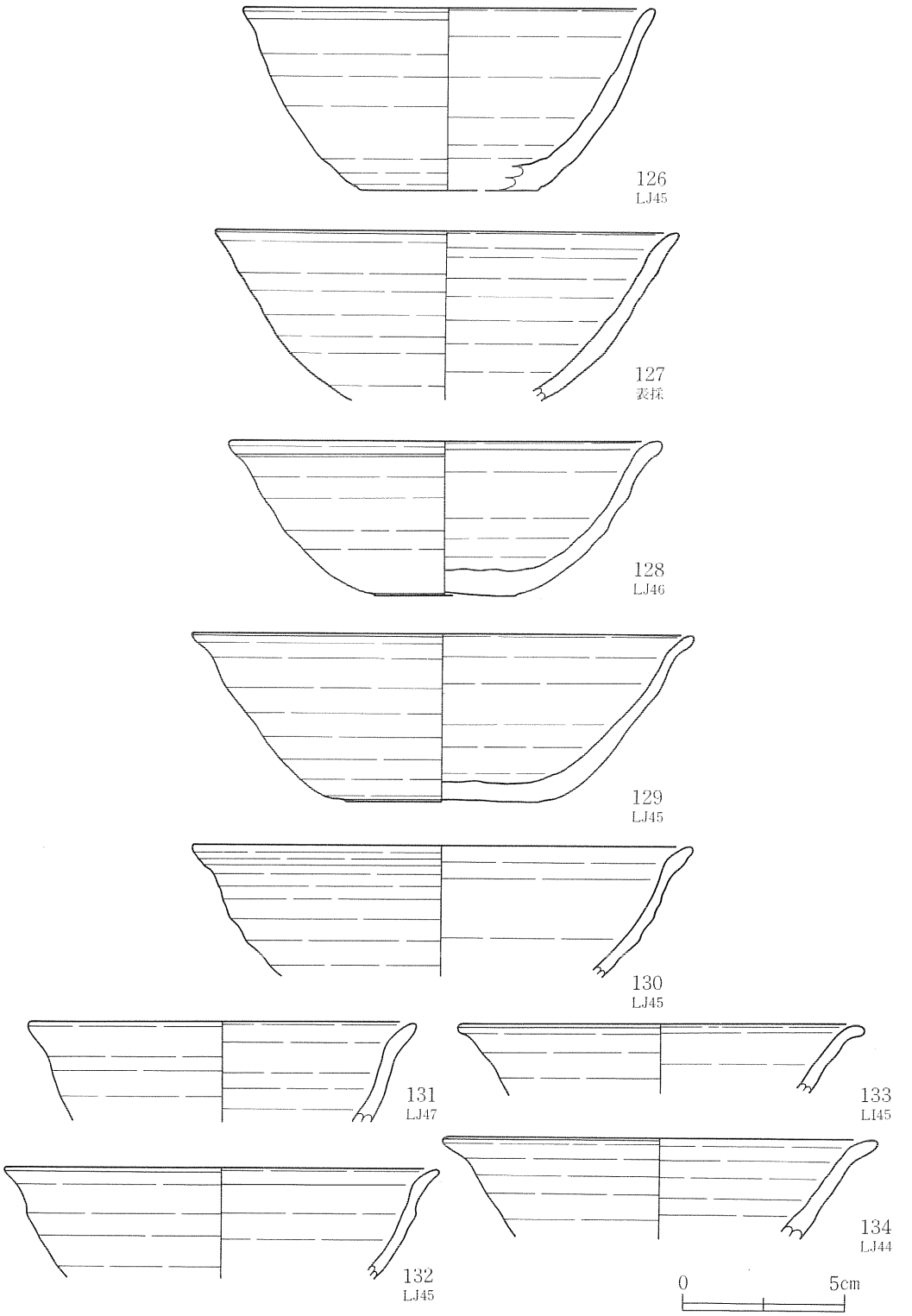


SK13

1　10YR3/3：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりやや有り。
2　10YR2/1：黒色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。
3　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。
4　10YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。
5　7.5YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。
6　火山灰層
7　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。
黄褐色粒φ2mm～5mm、7%。
8　10YR3/3：暗褐色土　基本的には、7と同じだが、粘性なく、
パサパサしている。
9　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。
黄褐色粒φ2mm～5mm、50%。
10　10YR3/3：黒褐色土　粘性有り。しまりにやや欠ける。
黄褐色粒φ1mm～3mm、10%。
11　10YR5/6：黄褐色土　粘性有り。しまりにやや欠ける。地山崩壊土。
12　10YR3/3：黒褐色土　粘性有り。しまりにやや欠ける。
黄褐色粒φ1mm～3mm、1%。
13　10YR3/3：黒褐色土　12と壁崩壊による地山土と混じり合った状態。
14　10YR6/4：明黄褐色土　地山崩壊土。
15　10YR5/6：黄褐色土　地山崩壊土。
16　10YR5/6：黄褐色土　基本的に、15と同じが、10YR2/1の土が、
ブロック大に混入。
17　10YR5/4：黄褐色土　粘性無し。しまり無く、ぼそぼそしている。
黒色土が、微量混入。

0　2 m

第106図　SK13土坑



第107図　中央部遺構外出土遺物(1)

り、北東から南西に入る沢の中央部に単独で構築されている。上端の平面形は長径約１m91cm、短径約１m74cmの不整楕円形で、底面は一辺約70cmの隅丸方形である。深さは約１m30cmの擂鉢形の土坑である。底面は平坦であるが、底面の南側隅に直径約20cm、深さ約70cmの斜めに入り込むピットがある。北側の壁には階段状の張り出しが２段ある。埋土は自然堆積である。埋土中央には火山灰がレンズ状に堆積している。火山灰の堆積は本遺構が放棄された後完全に埋没する前で、SI69竪穴住居跡の壁溝やＰ１土坑、SI74竪穴住居跡のＰ４土坑と堆積状態が似ている。他の遺構と離れて構築され、埋土中に火山灰がレンズ状に堆積する土坑という意味では、SK14土坑、SK16土坑、SK30土坑とも類似する。しかしSK16土坑以外の他の４土坑がいずれも壁や底面が焼けていて焼土や炭化物が堆積しているのに対して、SK13土坑は焼けておらず、焼土や炭化物が含まれていないという相違点がある。形態から考えて井戸の可能性もあるが完掘状態でも涌水はなかった。

2.　中央部遺構外出土遺物（第107～115図、図版43・44）

中央部遺構外出土遺物は、中央部遺構群の各遺構内出土遺物と接合するものも多くあり、遺物の出土分布状況からみて、中央部遺構群の各遺構に伴った遺物が流出して散乱したものと考えられる。

杯形土器（第107図126～第109図147・149、図版44）

126～136・147・149はいずれも口縁が外反する。128～136・149のように口唇部を外側につまみ出すように大きく外反させるものと、126・127・147のようにわずかに外反させるものとがある。口唇部が肥厚するもの（128・130・136）と、肥厚しないもの（126・127・129・131～135・147・149）がある。胴部は緩やかに膨らむものが多い。126・128・129・137～143・146・149の底部はすべて回転糸切り痕がある。142は底部周縁にヘラナデの痕跡がある。口径は11.3cm～16.2cmとバラエティーに富むが、13cm以下のもの、13.5cm前後のもの、15cm以上のものに分かれるようである。底径は4.4～7.4cmであるが、4.5cm前後のもの、５cm前後のもの、5.5cm以上のものに分かれるようである。144～146は高台付杯で、144・145は内面に放射状のヘラミガキが施され黒色処理されている。ヘラミガキは細い工具で行われ、部分的に不正方向になっている。144は細い高台が付き底部が少し下に突出している。145・146はハの字状に開く高台で、146は厚みがあり端部が角ばっている。高台付杯形土器は少量しか出土していない。147は胴部が膨らみをもち口縁部がわずかに外反するロクロ調整の杯形土器で、内面には放射状にヘラミガキが施され、黒色処理されている。外面は底部周縁に横方向でヘラケズリが入る。149は大型の杯形土器である。口縁部は一度小さく内湾した後強く外反し、口唇部はやや尖り気味である。

甕形土器（第110図150～第115図188、図版43・44）

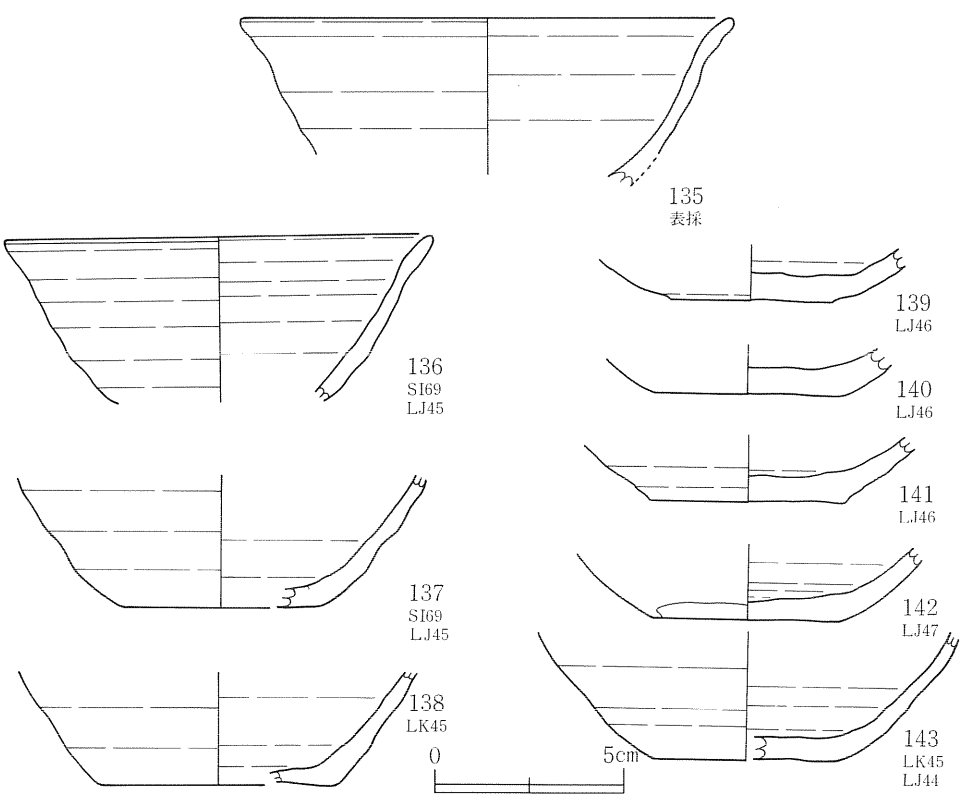
甕形土器は口径が18cm以下の小型のものと、18cmをこえる大型のものがある。口縁部はくの

字形に外反するものと、外反した後、口唇部が上方に引き出されて立ち上がるものとがある。150～160は口縁部が小さく外反し胴部があまり膨らみをもたない小型の甕形土器である。ロクロを使わず内外面ともヨコナデ調整をした後、外面には口縁部を除いてヘラケズリが入る。152・156・160は磨滅しているので調整は不明である。150～152・157・159の口唇部には、この部分にだけススが付着し黒色である。

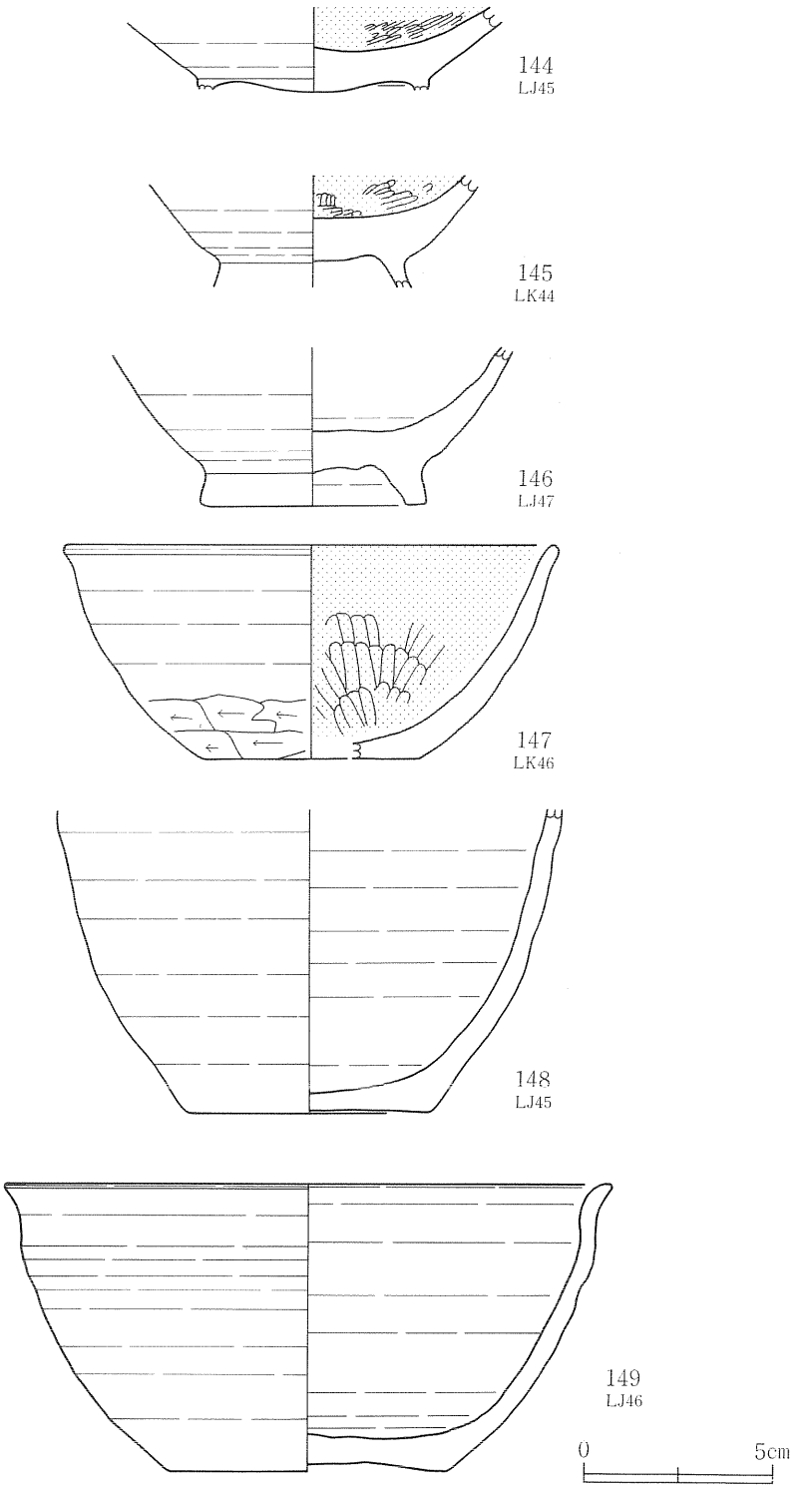
161～167・179・180は口縁部が外反した後、口唇部が上方または内側に立ち上がるものである。161・163・164は口唇部を細くして上方に向けて引き出すものである。162は口唇部が丸く肥厚する。165は外反した後強く内湾し、口唇部を丸くつくる。166・167・179・180は上方に引き出された口唇部の先端が細く、断面が3角形である。179の口縁部は上方に引き出された部分が、やや内湾気味に長く立ち上がり口唇部は丸みがある。

168～173は口縁部がくの字形に外反し、口唇部を上方や内側に引き出した屈曲部をもたない大型の甕形土器である。胴部があまり張らず最大径が口縁部にあるもの（168～170）と、胴部が張るもの（171～173）がある。いずれもロクロを使用していると思われるが、168・173は口縁部にヨコナデ痕がある。

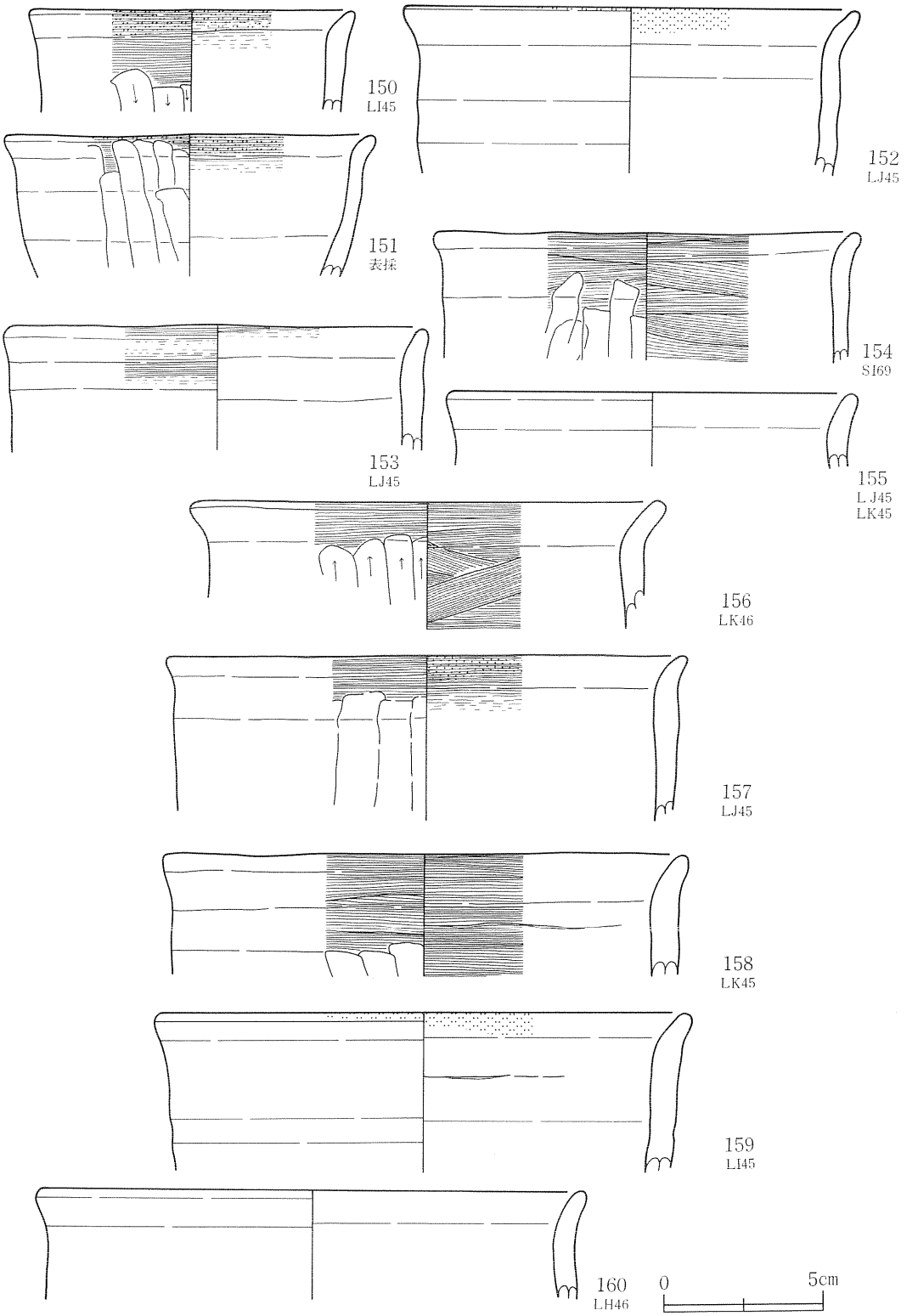
174～178・181・182・187・188は大型の甕形土器である。口縁部が外反した後、口唇部が上



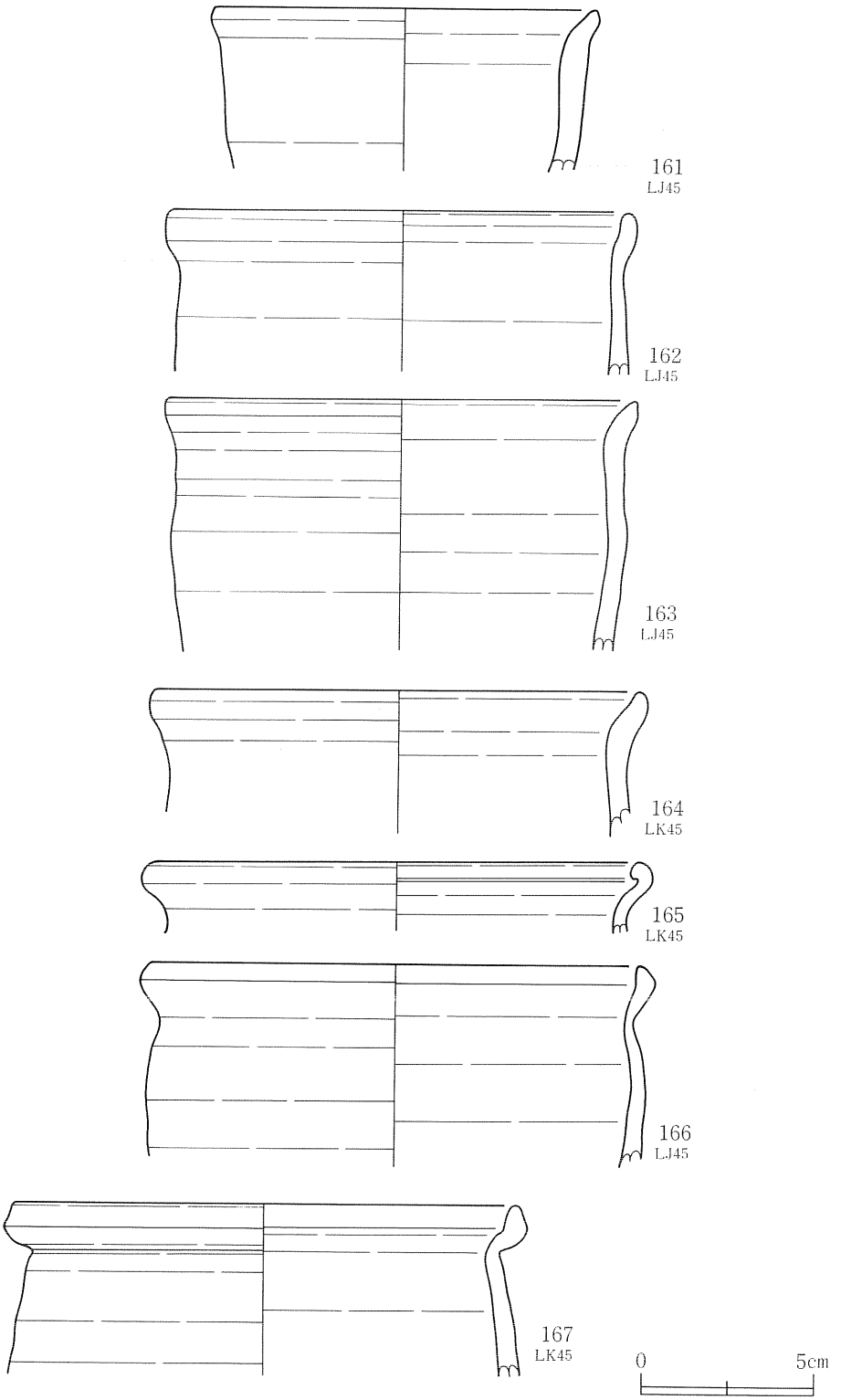
第108図　中央部遺構外出土遺物(2)



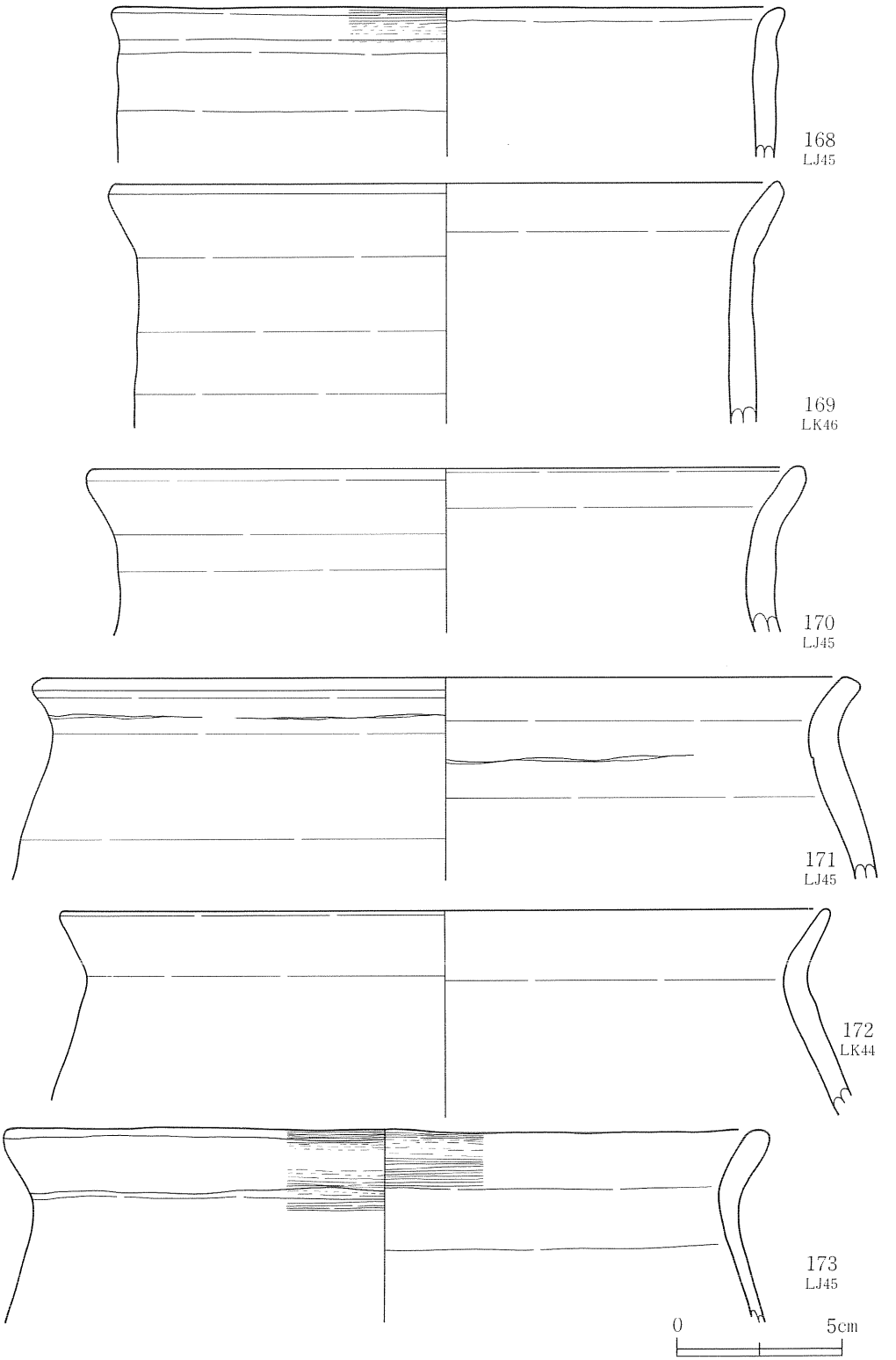
第109図　中央部遺構外出土遺物(3)



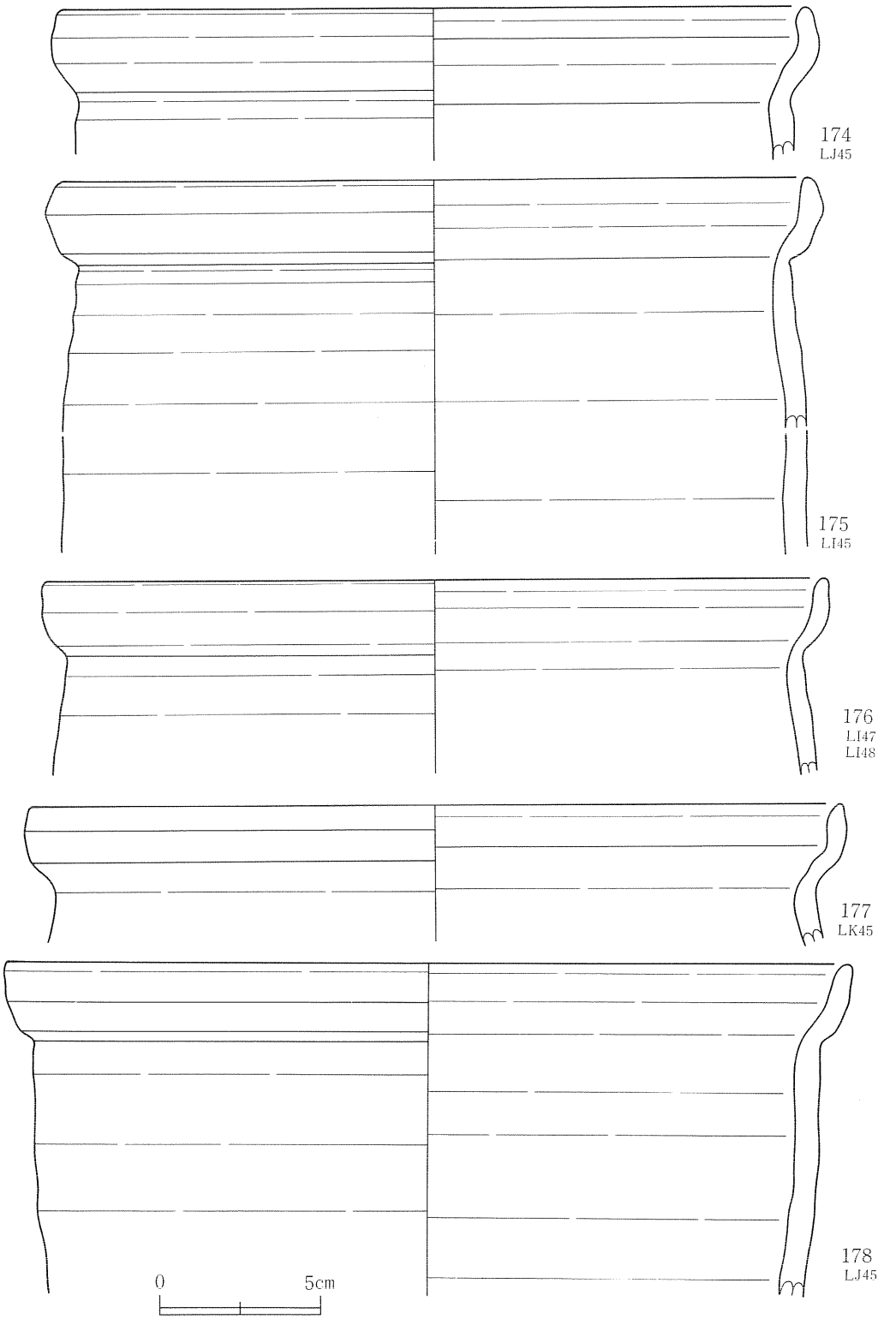
第110図　中央部遺構外出土遺物(4)



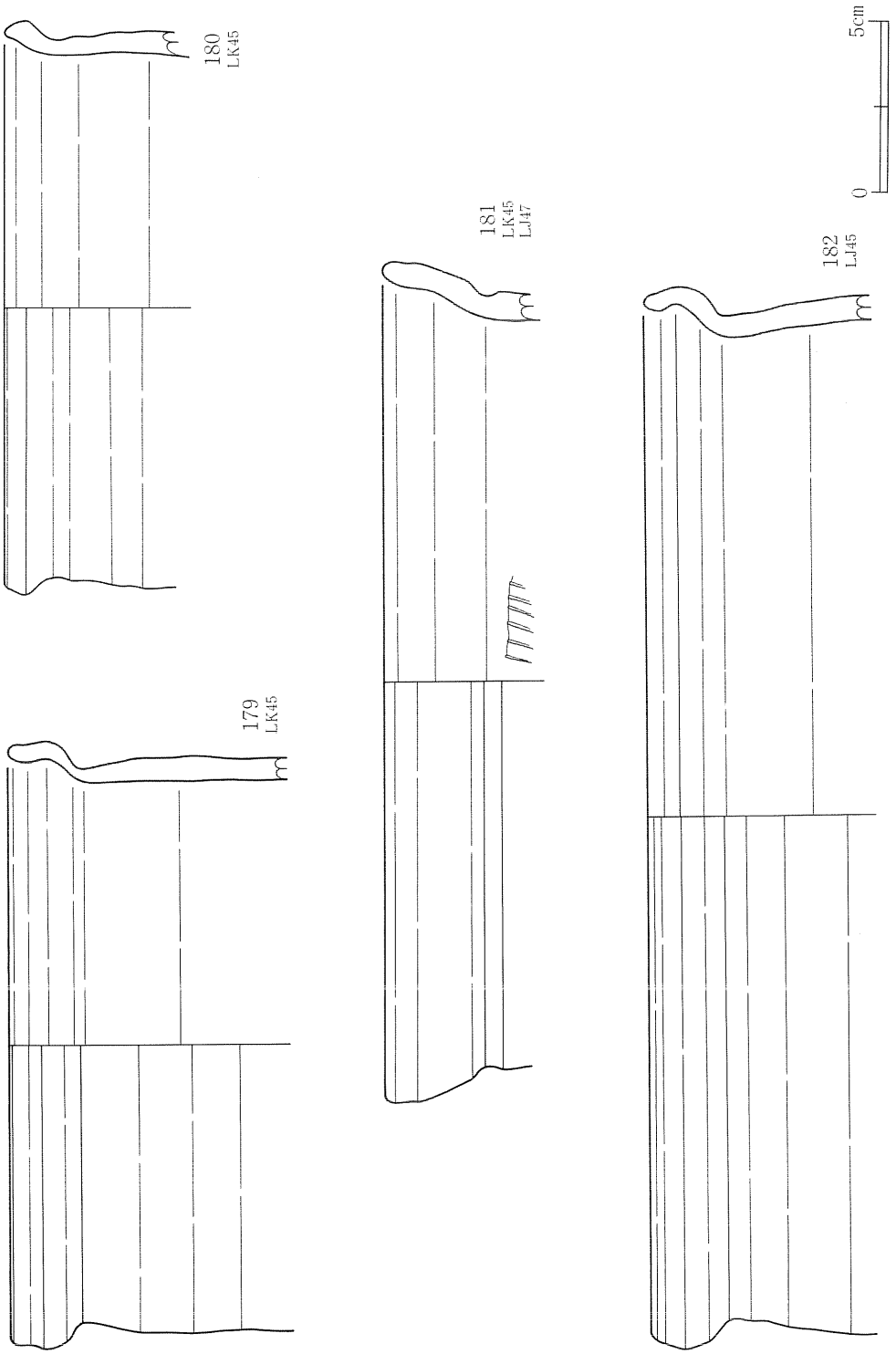
第111図　中央部遺構外出土遺物(5)



第112図　中央部遺構外出土遺物 (6)



第113図　中央部遺構外出土遺物(7)



第114図　中央部遺構外出土遺物(8)

方に立ち上がる大型の甕形土器で、いずれもロクロ調整である。上方に立ち上がった端部は、内傾するもの（174・182）、直立するもの（175～177）、外傾するもの（178・181）がある。最大径が口縁部にあるものがほとんどである。

185・186は同一個体の大型甕形土器である。２次的火熱を受けて内外面とも磨滅が著しく、外面の調整は不明であるが内面は全体が黒色処理されている。口縁部はくの字形の屈曲はもたず、胴部から連続的に大きく外反する。口唇部は面取りをして平坦につくられている。部分的に口縁部内面にはヘラミガキが、胴部にはヨコナデが認められる。面取りされた平坦な口唇部をもち内面が黒色処理された大型甕形土器はこの1個体のみである。

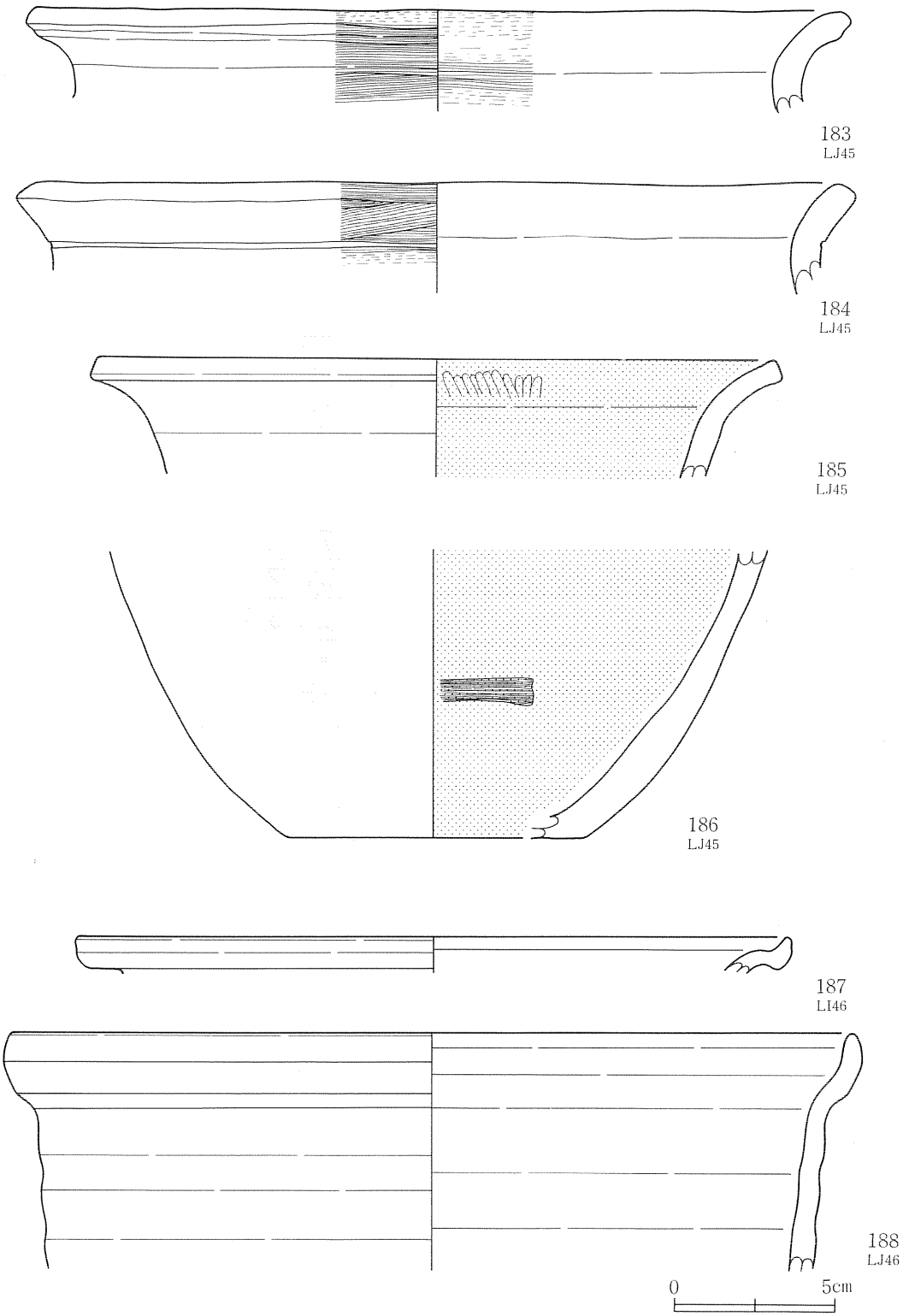
3.　南部遺構群の検出遺構と遺物

SB92建物跡（第116～121図、図版13・14・45）

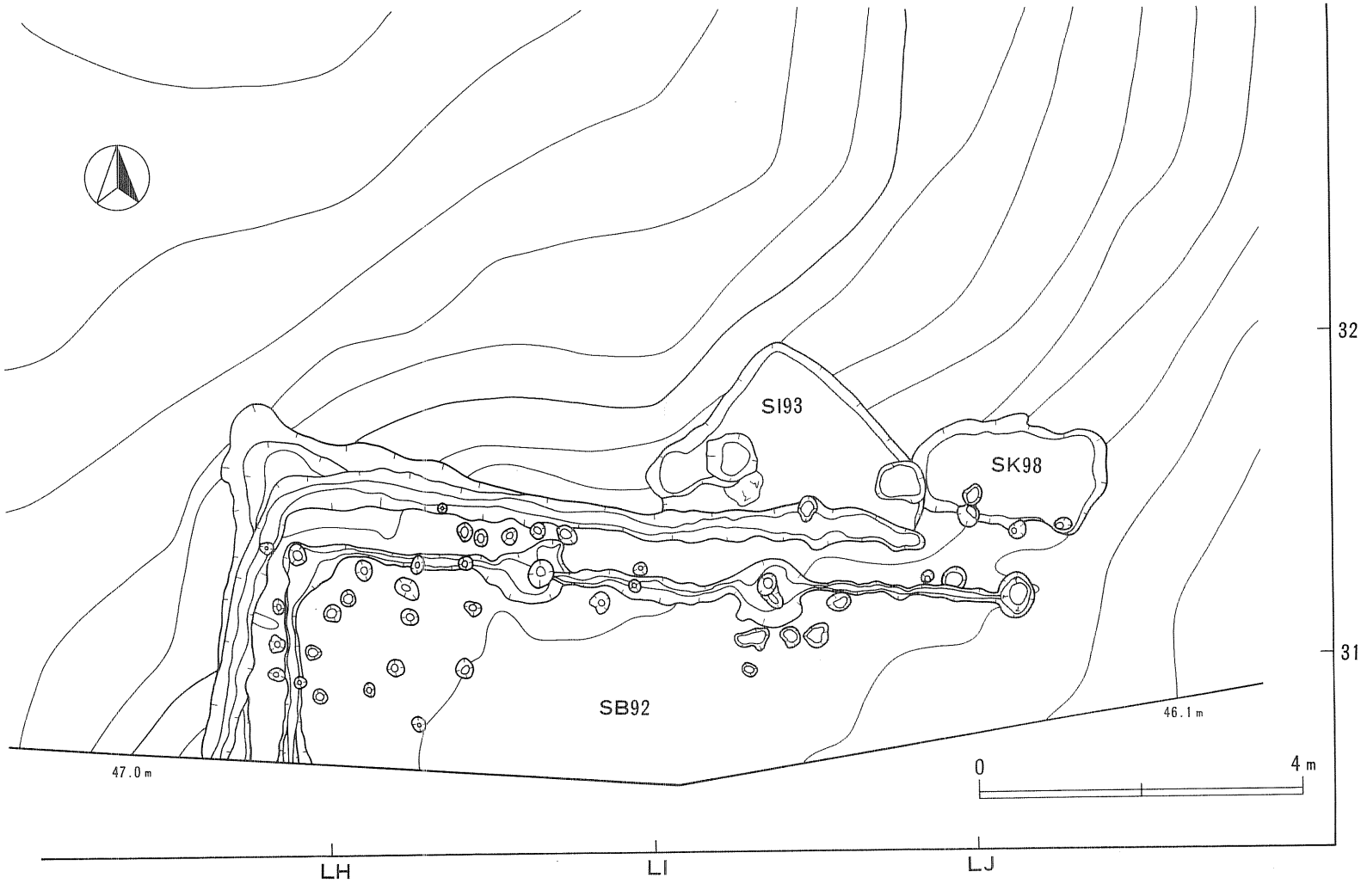
LH～LK30、31グリッドにまたがって、調査区南端の北西から南東に傾斜する斜面の中腹で検出した。遺構の大半は南側の調査区外で、北側の一部しか精査できなかった。北側にはSI93竪穴住居跡、SK98土坑があり、SI93竪穴住居跡を切っている。

斜面を掘り込んで東西約10ｍ、南北約5ｍ以上の平坦面を作出し、その内部に掘立柱建物を構築している。掘り込みの壁の直下には西側で幅約30cm、北側で約43cmの溝がめぐる（周溝）。深さは12～５cmである。北西隅はこの溝と掘り込みの壁が連続せずテラス状の平坦面がある。建物は東西3間（1間約3ｍ）である。主柱穴は東西方向に４本を検出した（Ｐ１～Ｐ４）。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３は55～80cmの円形の掘方がある。柱痕跡は直径20～27cmの円形で、深さは94cm～１ｍ21cmである。Ｐ４は斜面の下部にあり若干削平を受けているのでやや浅いが、本来は１ｍを超える深さであったと考えられる。この主柱穴間を結んで幅約20cm、深さ約13cmの溝が掘り込まれている。この溝の埋土には２列に並んで立てられていた板材が炭化して残り、焼土ブロックと炭化物が多量に含まれていて、壁溝であることが確認できた。柱穴間を結んで板塀がめぐる構造であったことがわかる。床面は平坦でやや固く締まっている。

平坦面を作出するための掘り込みの北縁で、壁と直下の周溝の間に長さ約７ｍ、幅約80cmの帯状に火山灰が堆積しているのが確認された。その内側の壁溝や柱穴部分では、埋土上層から焼土ブロックが堆積していた。埋土は炭化物を多量に含む黒褐色土で、床面の一部や壁溝は火熱による赤変部分があり、本遺構は焼失建物跡であると考えられる。火山灰及び混火山灰土の堆積は建物をとりまく周溝内から壁溝までの間に見られ、壁溝から内側の埋土には含まれていない。火山灰が埋土中に堆積しているSI69竪穴住居跡、SI74竪穴住居跡、SI100竪穴住居跡、SB24建物跡では壁の直下に火山灰層があり、床面全体に混火山灰土が堆積したり、遺構内の柱穴や土坑の埋土中に火山灰が含まれるのに対し、本遺構の火山灰の堆積状況はやや異なっている。これは火山灰が堆積する時点ではまだ建物壁の板材が残っていて、周溝のある掘り込みと

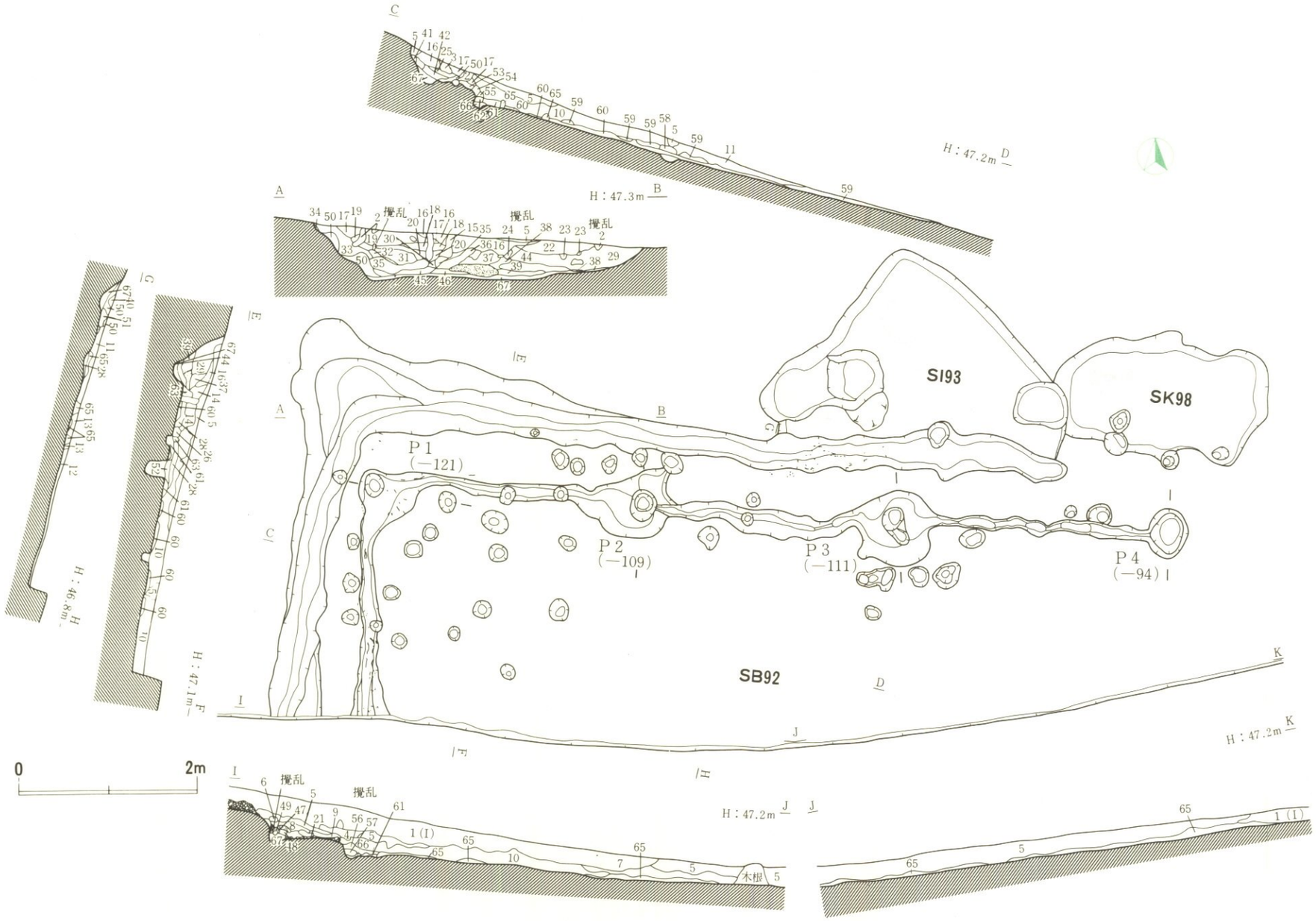


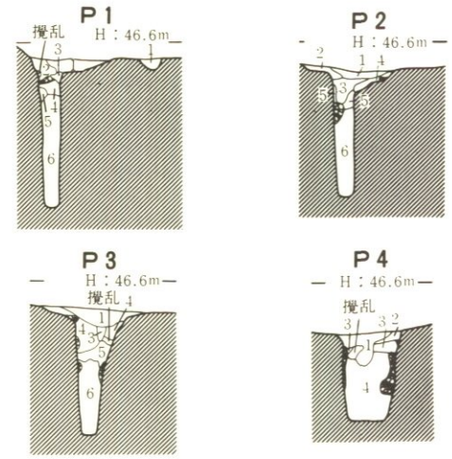
第115図　中央部遺構外出土遺物 (9)



第116図　SB92建物跡

第117図　SB92建物跡検出状況





P1

1 10YR2/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ2mm～5mm大10%、炭化物φ5mm大20%、地山ブロック状5%混入。
2 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、焼土粒φ5mm大10%、炭化物φ5mm大1%混入。
3 10YR2/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、地山ブロック状50%混入。
4 10YR2/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ3mm～5mm大5%、炭化物φ2mm大3%混入。
5 10YR3/1：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、焼土粒φ2mm大3%、炭化物φ1mm～5mm大5%、地山粒多量混入。
6 10YR4/1：褐色土　粒子細、粘性若干、しまりやや欠ける。焼土粒φ2mm～5mm大10%、炭化物φ2mm大3%、地山粒20%混入。

P2

1 10YR2/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ2mm～5mm大10%、炭化物φ5mm大2%混入。
2 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、火山灰を若干混入、焼土粒φ5mm大10%、炭化物φ5mm大1%混入。
3 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、焼土ブロック状50%、炭化物若干混入。
4 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ3mm～5mm大5%、炭化物φ2mm大3%混入。
5 10YR3/1：暗褐色土　粒子細、粘性なし、しまりあり、焼土粒φ2mm～5mm大10%、炭化物φ2mm大5%、地山粒10%混入。
6 10YR4/1：褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ5mm～7mm大10%、炭化物φ2mm大3%、地山粒20%混入。

P3

1 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒、φ2mm～5mm大10%、炭化物φ5mm大20%混入。
2 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性あり、しまりあり、焼土粒、炭化物若干混入。地山粒5%混入。。
3　地山粒及び、焼土粒のブロック。
4 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ3mm～5mm大5%、炭化物φ2mm大3%混入。
5 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりや欠ける。
6 10YR4/1：褐色土　粒子細、粘性若干、しまりや欠ける。焼土粒φ5mm～7mm大10%、炭化物φ2mm大3%、地山粒10%混入。

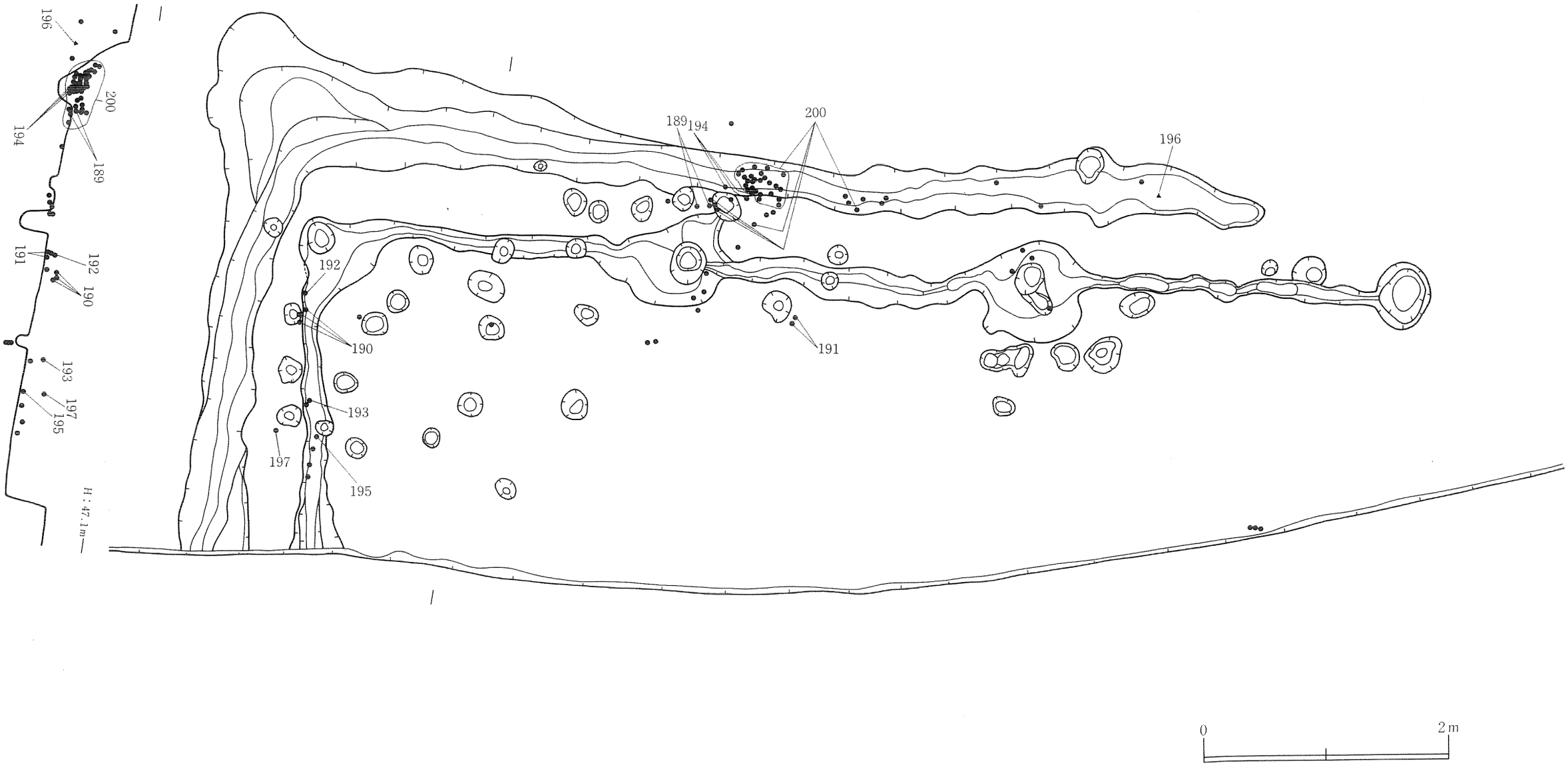
P4

1 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ3mm～6mm大3%、炭化物φ5mm大3%混入。
2 10YR3/2：褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、炭化物φ1mm大1%混入。
3 10YR4/3：褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒若干混入、炭化物φ3mm～5mm大2%混入。
4 10YR4/3：褐色土　粒子細、粘性若干、しまりなし、焼土粒若干混入、炭化物φ2mm～5mm大5%混入。

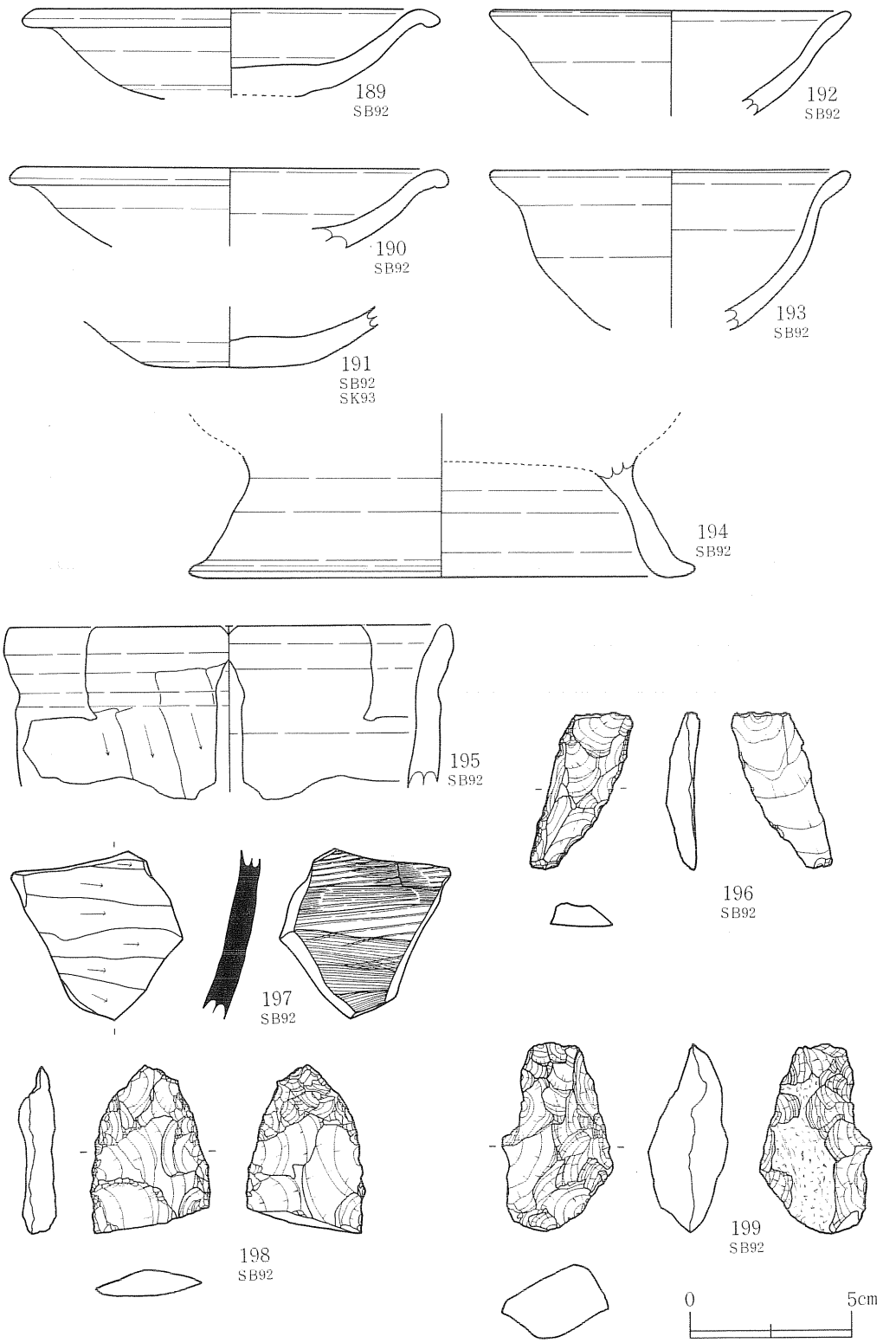
SPA～SPB　SPC～SPD
SPE～SPF　SPG～SPH
SPI～SPJ～SPK

1 10YR3/3：暗褐色土　（表土）粒子細、粘性若干、しまりあり、地山粒10%混入。
2 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒（10YR5/6）多量混入。
3 10YR3/2：黒褐色土　粒子ややや粗く、粘性なし、しまりなし。
4 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒多量混入。
5 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性なし、しまりややや欠ける。
6 10YR3/1：褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、炭化物若干混入。
7 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり。
8 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。炭化物、地山粒若干混入。
9 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒多量混入。
10 10YR3/1：黒色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。焼土粒φ1mm～2mm大10%混入。
11 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり。焼土粒若干、地山粒φ2mm～10mm大5%混入。
12 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒50%混入。
13 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒若干、地山粒φ2mm～10mm大5%混入。
14 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性なし、しまり強、炭化物φ2mm大1%混入。
15 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性あり、しまりあり、地山粒φ2mm～3mm大2%混入。
16 10YR3/2：黒褐色土　粒子ややや粗く、粘性なし、しまりあり、地山粒φ1mm～2mm大5%混入。
17 10YR3/2：黒褐色土　粒子ややや粗く、粘性なし、しまりあり、地山粒φ1mm大5%混入。
18 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性なし、しまり強、地山粒φ1mm大5%混入。
19 10YR3/2：黒褐色土　粒子ややや粗く、粘性なし、しまりなし。
10 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒φ1mm大3%混入。
21 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。焼土粒若干、地山粒多量混入。
22 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山ブロック多量混入。
23 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒（10YR5/6）多量混入。
24 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、火山灰を若干混入。
25 10YR3/3：褐色土　粒子細、粘性あり、しまりに欠ける。炭化物φ1mm大若干混入。
26 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒50%混入。
27 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、地山粒多量、焼土粒若干混入。
28 10YR2/1：黒色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ5mm～10mm10%混入。
29 10YR3/4：褐色土　粒子細、粘性あり、しまりあり、炭化物φ1mm大若干混入。
30 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性あり、しまりややや欠ける。地山粒φ1mm大20%混入。
31 10YR3/2：黒褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性若干、しまりあり、地山粒φ1mm大5%混入。
32 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒（10YR5/6）多量混入。
33 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山ブロック多量混入。
34 10YR5/2：黄褐色土　粒子細、粘性あり、しまり強。
35 10YR3/2：黒褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性若干、しまりあり、炭化物φ2mm～5mm大1%、一部ブロック状を呈する。火山灰を多量に混入。
36 10YR4/1：褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性若干、しまり強。炭化物φ2mm大若干、地山粒φ2mm～5mm大3%、火山灰を混入。
37 10YR4/1：褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性若干、しまり強。炭化物φ2mm大2%、地山粒φ1mm大若干、火山灰を混入。
38 10YR4/1：褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性若干、しまり強、地山粒多量に混入、火山灰を混入。
39 10YR5/2：黄褐色土　粒子細、粘性あり、しまり強。
40 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性なし、しまりあり、焼土ブロック2%、炭化物φ1mm大若干、地山粒φ2mm～大5%混入。
41 10YR5/2：黄褐色土　粒子細、粘性あり、しまり強。
42 10YR4/1：褐色土　粒子細、粘性あり、しまりなし。炭代物φ1mm大若干混入。
43 10YR4/1：褐色土　（火山灰）しまり強、地山粒、炭化物φ5mm大若干混入。
44 10YR4/1：褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性なし、しまりあり、焼土ブロック5%、炭化物若干混入。
45 10YR4/1：褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性なし、しまりあり、炭化物φ2mm～5mm大3%、火山灰混入。
46 10YR4/1：褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性なし、しまりあり、焼土ブロック5%、炭化物若干混入。
47 10YR4/1：褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。焼土粒1%混入。
48 10YR4/1：褐色土　（混火山灰土）粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。焼土粒10%、地山粒50%混入。
49 10YR5/4：褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。焼土粒、地山粒5%混入。
50 10YR3/4：褐色土　粒子細、粘性あり、しまりあり、炭化物φ1mm大若干混入。　黒色土
51 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性なし、しまりあり、炭化物ブロック状50%混入。　黒色土
52 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、地山粒多量、焼土粒若干混入。　黒色土
53 10YR3/3：暗褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒若干、地山粒50%混入。
54 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、地山粒多量、焼土粒若干混入。
55 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ2mm大1%混入。
56 10YR2/1：黒色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ1mm～2mm大10%、地山粒多量混入。
57 10YR2/1：黒色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、地山粒多量混入。
58 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性なし、しまりに欠ける。地山粒若干混入。
59 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒50%混入。
60 10YR5/6：黄褐色土　粒子細、粘性あり、しまり強。
61 10YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、焼土ブロック状50%、地山粒20%混入。
62 10 YR3/1：暗褐色土　焼土ブロック90%混入。
63 10 YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、地山粒多量、焼土粒若干混入。
64 10 YR4/6：褐色土　粒子細、粘性あり、しまり強。
65 10 YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりややや欠ける。地山粒50%混入。
66 10 YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性若干、しまりあり、焼土粒φ3mm大20%、炭化物φ5mm大5%、地山粒10%混入。
67 7.5YR5/6：明褐色土　粒子細、粘性若干、しまり強、炭化物部分的若干混入。一部礫も若干混入。
68 10 YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性あり、しまりあり、焼土粒、炭化物混入。
69 10 YR3/2：黒褐色土　粒子細、粘性あり、しまりあり、炭化物混入。

第118図　SB92建物跡



第119図　SB92建物跡遺物出土状況



第120図　SB92建物跡出土遺物(1)

建物壁の間のせまい凹部にのみ火山灰が堆積し、建物内には入り込まなかったことによるものと考えられる。

遺物は周溝内や壁溝付近から出土し、床面の中央部からはほとんど出土しなかった。189・190は皿形土器である。口唇部が外側にめくれるように大きく外反し胴部がやや膨らむ。189は底面に回転糸切り痕があり高台のない皿形土器であるが、190は高台部分から割れて欠失した破片で高台付の皿形土器である。いずれも胎土・焼成とも良好で堅緻である。191は杯形土器底部で、皿形土器に比べて胴部の膨らみが小さい。192・193は小型の杯形土器で、肥厚した口縁が大きく外反し胴部は膨らみがある。口径は約11cmと小さい。

194は高台付椀形土器の高台部分である。外側にハの字形に開いて底部に貼り付けられている。中央が最も薄く下端は肥厚する。外面の中央には稜をもち、先端は外側にやや上向きに細く引き出されている。焼成は良好で堅緻である。高台付椀形土器は調査区内ではこの一点のみの出土である。

195は小型甕形土器で、ロクロ成形後胴部の外面にヘラケズリが施されている。口縁部はやや外反した後上方に立ち上がるが屈曲はゆるやかである。197は須恵器壺形土器の胴部破片と思われる。調整は外面が横方向のヘラケズリ、内面が横方向のハケメである。

200は北側に周溝内から出土した土師器の短頸壷である。球形の胴部の中央よりやや上部に最大径があり、幅約1.8cmの口縁が直立する。口径15.5cm、胴部の最大径は31cmである。胎土には中粒砂を多く含み焼成はやや軟質である。内外面とも2次的火熱によって表面がはじけるように剝落している。ロクロは使用しておらず、外面の口縁部と胴部上半はヨコナデ、胴部中央から下半は縦方向のヘラケズリ調整である。内面は胴部上半は横方向、中央から下半にかけては縦方向のハケメであるが、縦方向に施した後にさらに横方向、斜方向のハケメが加わる部分もある。ハケメの幅は約2.2cmである。口縁部はヨコナデである。胎土・焼成・調整はSI93竪穴住居跡出土の甕形土器（第125図208）と極めてよく似ている。

埋土中からは縄文時代の石器も出土した。196・199は2次加工のある剝片で、196は薄い縦長剝片の表面両側縁に細かい2次加工を施しているが、刃部は作出されていない。199は裏面中央に礫皮面を残すが、側縁と表面の全面に2次加工が施されている。198は石槍の刃部である。両面全面に2次加工を施し、先端にはさらに細かい加工を施して鋭い刃部を作出している。

SI93竪穴住居跡（第122～125図、図版14・15・45）

LJ31グリッドで検出した。SK98土坑を切って構築され、南側半分をSB92建物跡の壁溝によって切られている。壁は北東壁と北西壁の大部分及び南東壁の一部が残存し、長さは北東壁は約2m75cm、北西壁2m40cm、南東壁約30cmである。壁の主軸方向はおよそN—60°—Wである。壁溝はなく、柱穴も検出されなかった。

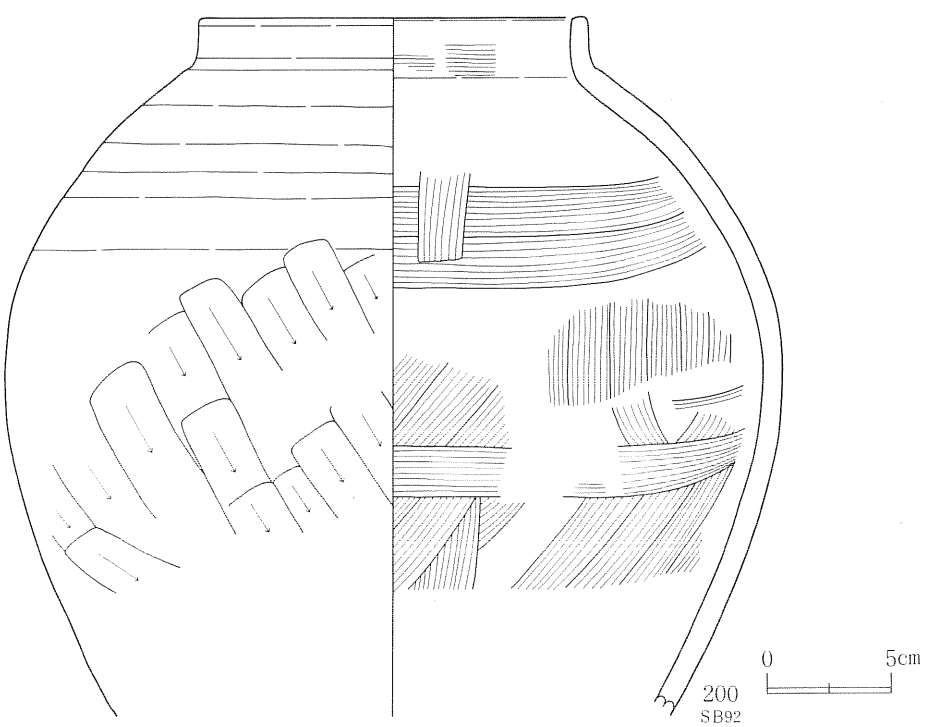
カマドは北西壁の南側に構築されている。燃焼部の底面が検出できたのみで、袖、天井、煙道は残っていなかった。カマドの火焼面は径約68cmの不整楕円形で、袖の芯材に用いられたと思われる径20cm程の角礫が周囲に残っている。焚口部には径約65cm、深さは約15cmの掘り込みがある。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北側で約37cm、南東側では削平されていて約５cmが残存する。床面は平坦で固く締まっている。東隅には長径約60cm、短径約45cm、深さ約５cmの不整楕円形の掘り込みがある。

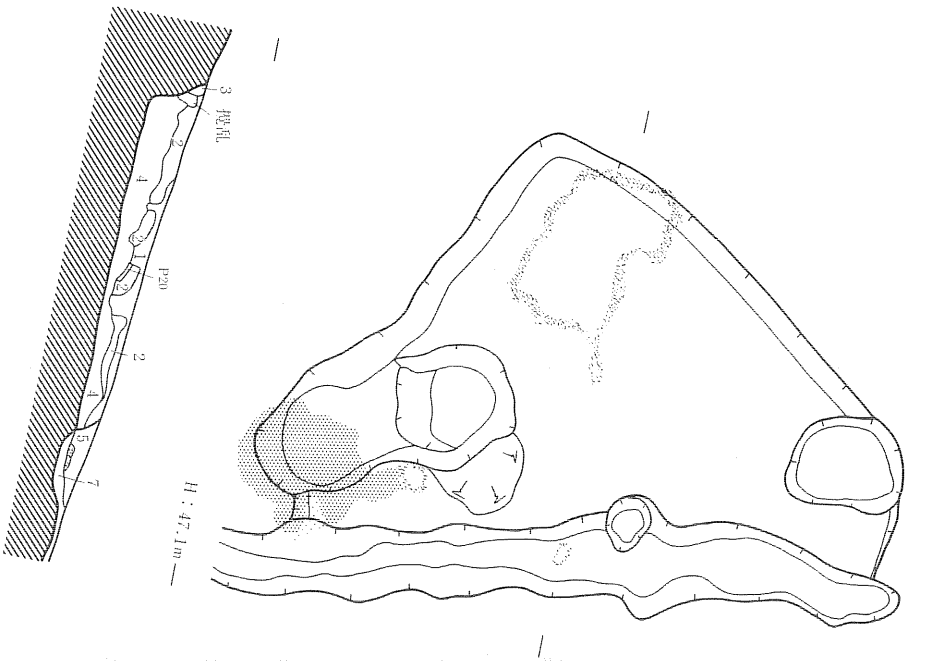
埋土には火山灰が含まれるが、床面直上の埋土４層には火山灰は含まれず、その上部に堆積する埋土２層が混火山灰土である。北隅付近には火山灰が小ブロック状にやや多量に含まれる混火山灰土が堆積している。

遺物はカマド焚口部の掘り込みの北側の床面で甕形土器が１個体横倒しになってつぶれた状態で出土した。また、カマドの周辺から須恵器甕形土器の破片が散乱した状態で出土した。カマド周辺には遺物が散布していたが、床面中央部や北側、東側では遺物は出土しなかった。

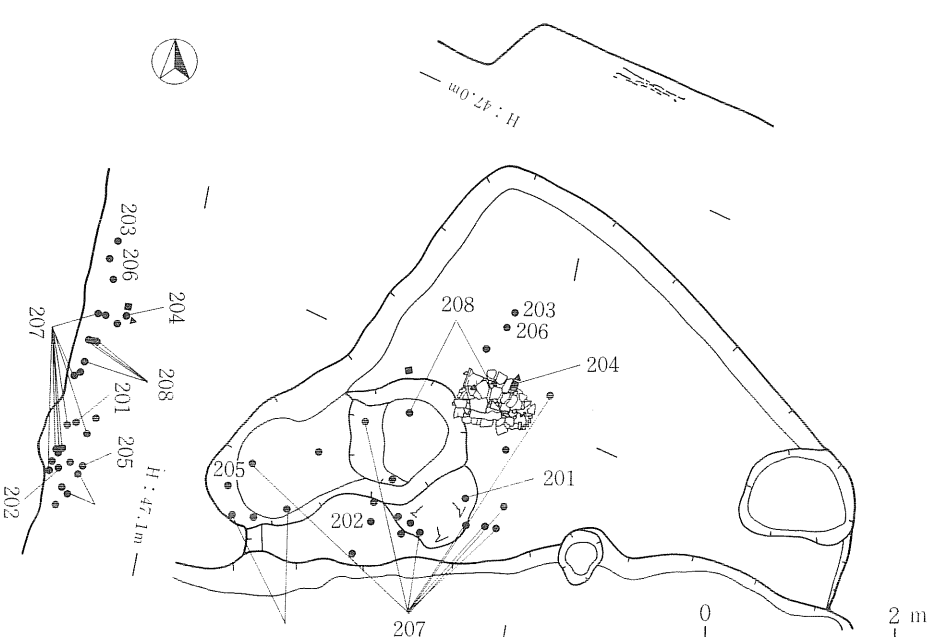
201～203は杯形土器、204～206は甕形土器である。201は口縁部が外反する杯形土器である。202･203はいずれも杯形土器の底部であるが形態は大きく異なる。202は底部から胴部にかけて膨らみ気味に立ち上がる。焼成は良好である。203は底部から胴部が急角度に立ち上がる杯形土器である。胎土は細粒砂を多く含む。焼成はややあまく表面が摩擦している。推定底径は



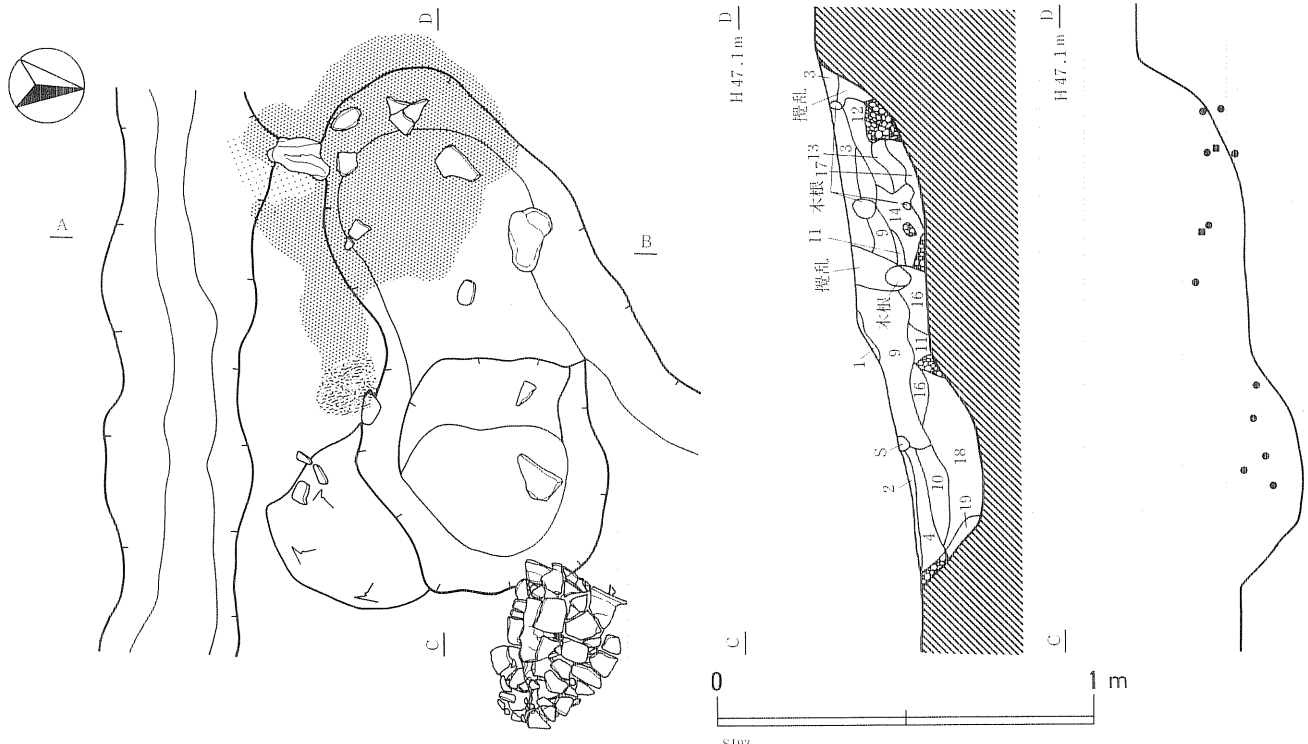
第121図　SB92建物跡出土遺物(2)



SI93
1　10YR2/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。地山粒φ1mm大5%混入。
2　10YR3/3：明褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ5mm大1%、地山粒φ5mm大2%混入、混火山灰土
3　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。地山ブロック状50%混入。
4　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ1mm大2%、地山粒10%混入。
5　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。地山ブロック状50%混入。
6　10YR3/4：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。地山粒多量に混入、火山灰混入、混火山灰土。
7　10YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。地山粒50%混入。



第122図　SI93竪穴住居跡



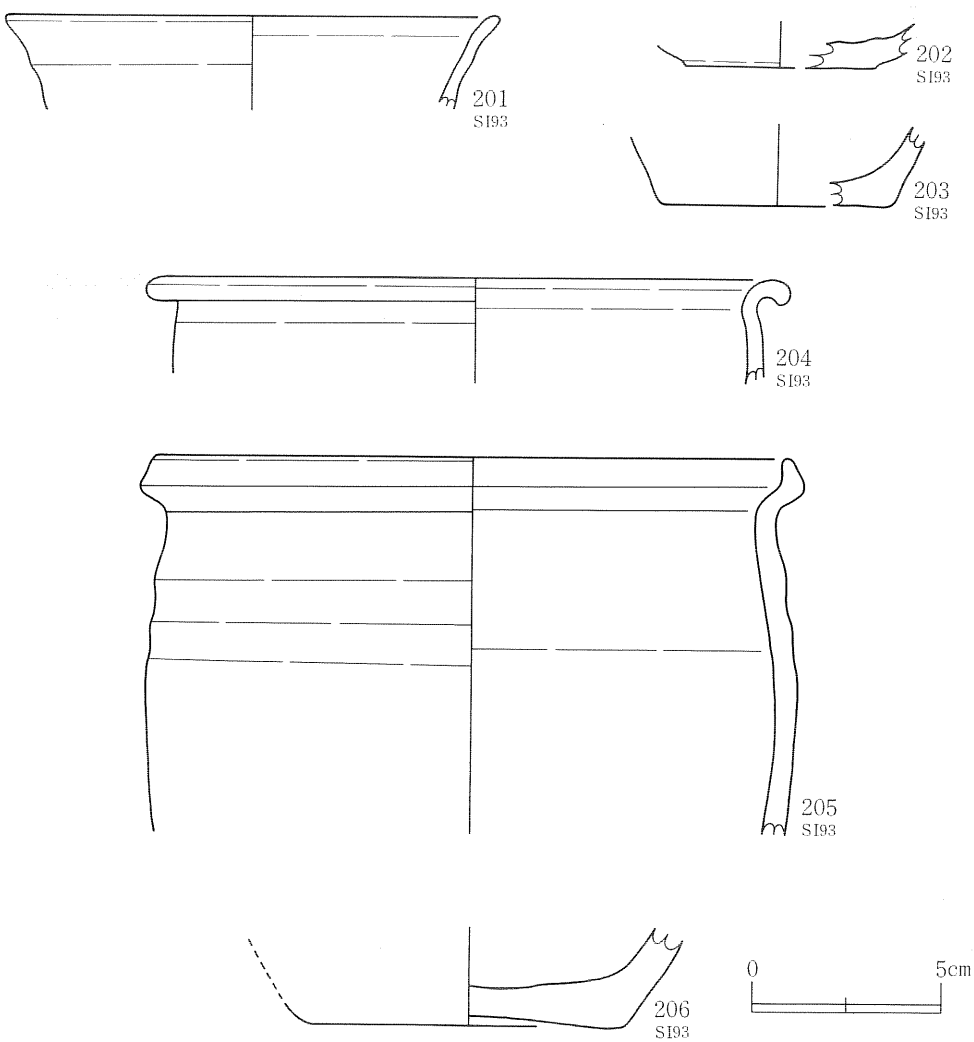
SI93

1	10YR5/2：暗褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。焼土粒・炭化物粒を含む。
2	10YR5/3：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物粒を含む。
3	10YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり有り。焼土粒を若干含む。
4	10YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり強。焼土粒を含む。
5	10YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。焼土粒・炭化物粒・地山粒を含む。
6	10YR5/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。焼土粒を含む。
7	10YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。焼土粒を多量に含む。
8	10YR5/6：黄褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物を若干含む。
9	7.5YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり有り。焼土粒を若干含む。
10	7.5YR5/6：明褐色土	粒子細かく、粘性強。しまり強。焼土粒・炭化物を含む。
11	7.5YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり有り。焼土粒を含む。
12	7.5YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり有り。焼土粒を多量に含む。
13	7.5YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまりやや欠ける。焼土粒を多量、及び礫を含む。
14	7.5YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり無し。焼土粒・炭化物を含む。
15	10YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。焼土粒、礫、地山粒を含む。
16	7.5YR5/6：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。焼土粒、炭化物粒を多量に含む。
17	5YR5/6：赤褐色土	粒子細かく、しまり有り。(焼土)
18	7.5YR5/6：明褐色土	粒子細かく、粘性強。しまり強。焼土粒、炭化物、礫を含む。
19	10YR5/6：黄褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり強。焼土粒を若干含む。

第123図　SI93竪穴住居跡カマド

203が5.1cm、204が6.4cmである。204は口縁部が外側に大きく外反する小型甕形土器である。器壁は薄手で焼成はややあまく軟質である。全体に磨滅が著しく調整技法は不明である。このような口縁部をもつ小型甕形土器はこの破片1点のみの出土であった。205・206はロクロ使用の小型甕形土器で、同一個体である。口縁部が外反し、端部が上方やや内側に引き出されて立ち上がる。先端は細く尖り、立ち上がり部分の断面形は3角形になる。底部はやや揚げ底である。摩擦しており底面の調整は不明である。胎土には細粒砂を多く含み、器面はザラザラしている。焼成はややあまく軟質である。

207はカマド周辺から出土した破片が接合したものである。最大径が球形の胴部中央にあり、口縁部がやや外反する須恵器甕形土器である。口径は約15.2cmである。肩が張り、頸部は直径約13.7cmとやや細く締まり、短い口縁部がやや外反して立ち上がる。口唇部は外側に張り出し断面三角形に作られている。胴部外面はタタキ目、内面はあて具痕の同心円文である。口縁部



第124図　SI93竪穴住居跡出土遺物(1)

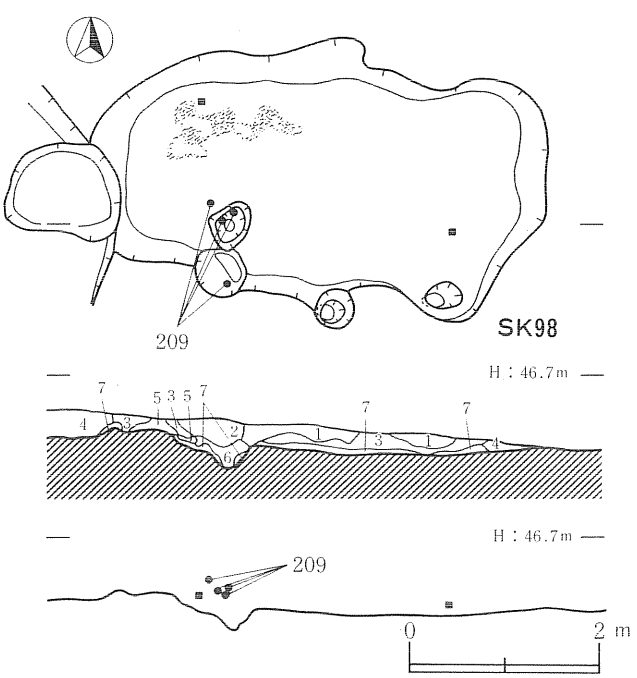
第125図　SI93竪穴住居跡出土遺物(2)

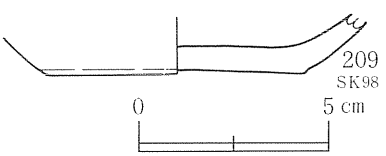
は内外面ともヨコナデである。

208は土師器の大型甕形土器で、カマド横の床面から横倒しになってつぶれた状態で出土したものである。長胴形で最大径は胴部中央よりやや上部にある。口縁部はくの字形に屈曲して外反する。口唇部は外側に面取りをして鋭角的に仕上げてあるが端部を上方に引き出さず、内側は平坦である。胴部下半は砲弾形にゆるやかに細くなり、底部はやや尖った丸底になると思われる。外面の調整は口縁部から胴部上半にかけてはロクロ調整、それより下部はロクロ調整後に縦方向のヘラケズリを施している。底部近くでは、縦方向から斜め方向に変わり、底面まで及んでいる。内面の口縁部はヨコナデ、胴部はハケメである。ハケメの方向は口縁部直下2.5cmが横方向、その下は底部まで斜め方向で螺旋形に回るが、胴部中央では部分的に縦方向に入る。ロクロ目の凹凸の強い部分では凹部全体にハケメが及ばず、横方向に帯状に空白の部分が残る。胎土・焼成・色調・調整技法はSB92建物跡出土の土師器短頸壺と共通する。

SK98土坑（第126図、図版15）

LK31・LJ31グリッドで検出した。SB92建物跡の北側に隣接し、SI93竪穴住居跡とは西端が重複する。SI93竪穴住居跡に切られており、この３遺構の中では最も古い。平面形は推定長軸約２m40cm、短軸約１m20cmの不整隅丸長方形で、深さは約14cmである。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。南側壁に沿うように３本の柱穴状ピットが並び、さらに内側に１本の柱穴がある。埋土は自然堆積で、底面直上には約40cmの褐色土が堆積し、その上には火山灰を含む黒褐色土が堆積している。北側の一部には火山灰がまとまって堆積している部分がある。





SK98

1　10YR⅔：黒褐色土　粒子細かく、無し。しまり有り。炭化物φ１mm大、１%、褐色粒φ２mm大、５%。

2　10YR⅔：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまりに欠ける。炭化物φ１mm大、若干、褐色粒φ１mm大、10%。

3　10YR⅔：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。火山灰を含む。炭化物φ１mm～５mm大、２%。褐色粒φ２mm大、10%。一部ブロック状有り。

4　10YR⅓：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１mm大、１%。

5　10YR⅓：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ１mm若干、褐色粒φ３mm大、20%。

6　10YR⅓：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物φ１mm大、若干。地山ブロック50%。

7　10YR⅓：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１mm～５mm大、１%。

第126図　SK98土坑

遺物は杯形土器底部が１点出土した。209は底径6.8cmの杯形土器底部である。胎土は極細粒砂を多く含み、焼成はややあまく軟質である。

SI100竪穴住居跡（第127～136図、図版16・45～47）

LM32・33、LN32・33グリッドで検出した。東側にはSK108土坑、SK101土坑、SN102焼土遺構、SN103焼土遺構、SN107焼土遺構がある。SX130柱穴群の範囲内にあり、11本の柱穴が本遺構の埋土上から掘り込まれている。

遺構は東から西に傾斜するゆるやかな斜面に主軸方向を等高線にほぼ平行に構築されている。平面形は東西約２m88cm、南北約２m60cmの方形で、南壁の西側、西壁と接してカマドが構築されている。主軸方位はＳ－10°－Ｗである。床面は平坦で北東隅に向かってやや傾斜している。床面のレベル差は最大で10cmである。壁は斜面上部の西壁で約47cm、東壁は約18cmが残存する。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。カマドの東側にはカマド煙道と平行に、南北約88cm、東西約48cm、深さ約６cmの浅い掘り込みがある。西壁の直下には、北西隅から南へ約72cmの地点から南側に、長さ約１m56cm、幅約37cm～20cm、深さ約６cmの壁溝がある。他の部分には壁溝はない。床面中央やや南寄りには径約67cm、深さ約11cmの円形の浅い掘り込みがある。南壁から南へ突き出た浅い掘り込みの中央にも径約40cm、深さ約５cmの円形のピットがある。

柱穴はＰ１～Ｐ３が床面で確認できた。径約15～20cm、深さ５～17cmと浅く、配置もSI100竪穴住居跡に適合しているとはいえず、地面を掘り込んで立てた上屋を支える主柱穴とは考えにくい。当初から上屋構造を支える柱穴は穿たれていなかったと考えられる。

カマドは長い煙道があり、煙道の天井部には土器を用いている。燃焼部は床面より約15cm高くなり、径約56cmの範囲で強く焼け赤変している。燃焼部を取り囲む袖は左右両側とも竪穴を掘る際に掘り残して作られている。右側の袖は西壁に接し、壁の途中に段を設けるような形で構築されている。燃焼部の中心には径約56cm、深さ約８cmの浅い掘り込みがある。この掘り込みの周囲は床面よりも一段高い平坦面があって、焼土と炭が多量に入った土が堆積していた。煙道は長さが約１m50cmと長い。上端の幅は燃焼部側が細く煙出し部側が広いが、下端は幅約16～20cmで、部分による差はそれほど大きくない。南側の先端に１辺約60cm、深さ約30cmの隅丸方形の煙出しのピットが取り付く。煙道の底面は平坦で、煙出し部に向かって若干上がっている。天井部には甕形土器（第129図211・第130図212）、鉢形土器（第131図214）、鍋形土器（215）を横倒しに入れて用いている。煙道内は焼けて赤変しており、煙道内の最下層は炭の層である。

埋土は自然堆積である。埋土２層中には火山灰が含まれ、西側ではまとまって堆積していた。第１次堆積土である埋土３層は締まりのある褐色土で、西側壁の直下では断面が３角形に堆積しやや厚いが、床面中央付近では厚さ４～８cmと薄く堆積している。この層には火山灰は

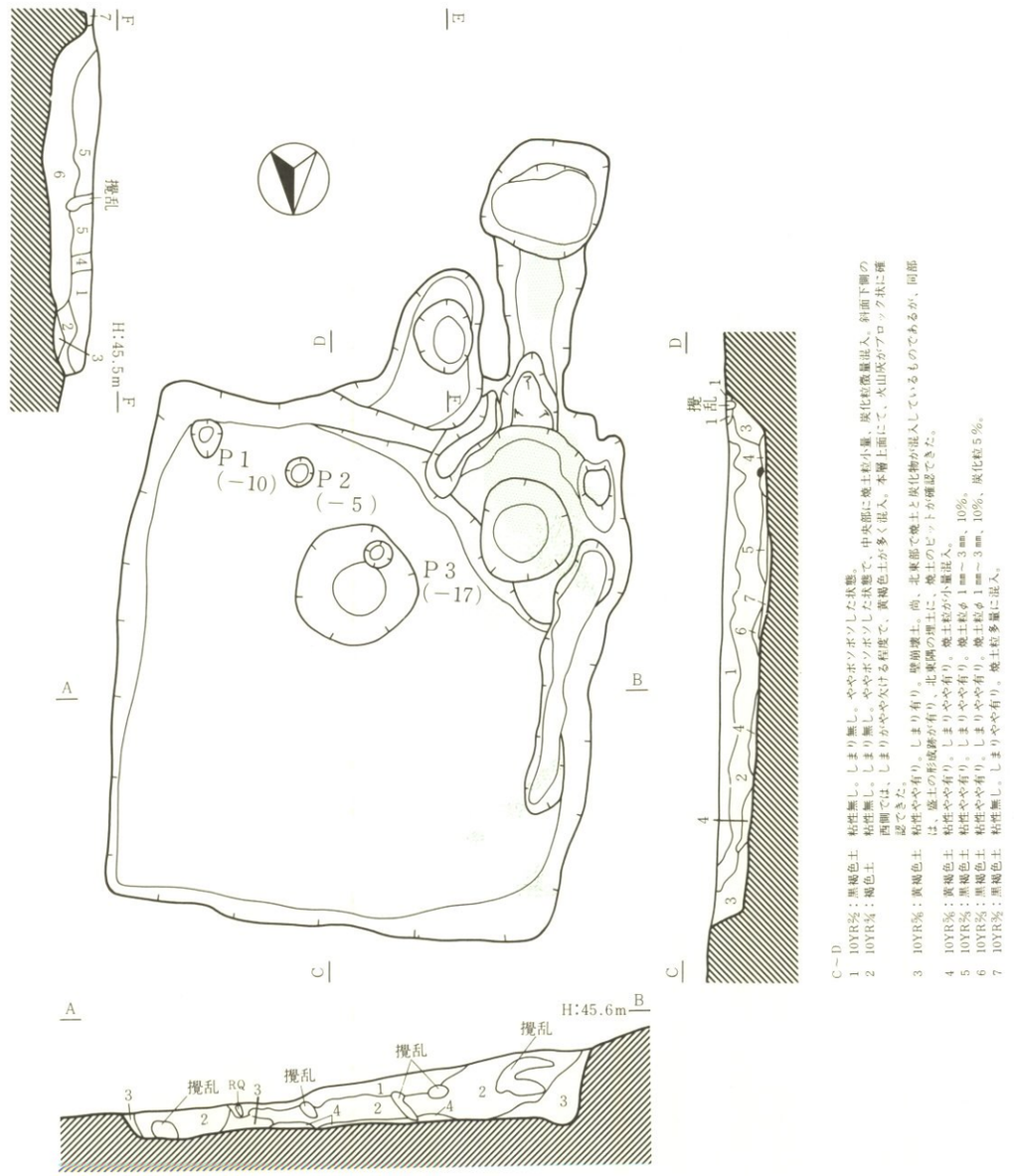
含まれない。火山灰は廃棄されて凹地となっていたSI100竪穴住居跡地に斜面上部の西側から自然の営力によって流入して堆積したものと思われる。

遺物は床面や埋土中から出土しているが、カマド焚口の周辺と南側の浅い掘り込み部分からは多量に出土した。床面中央から北側では床面からの遺物出土はほとんどなく、大半は埋土中から出土した。図示していないが床面中央やや北東寄りの地点で鉄製の刀子が1点出土した。

210は口縁が大きく外反し胴部がややふくらむ大型の杯形土器で、カマドの焚口付近から出土した。器壁は薄いが焼成は良好で堅緻である。211・212はカマド煙道の天井部に使われていた大型の甕形土器である。211は口縁が外反した後、口唇部が上方に立ち上がる。外反の屈曲もやや上方に向く。胴部中央より上半はロクロ調整、下半は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデで、底部内面はヨコナデである。器形が底部に対して口縁部が水平でなく斜めにゆがんでおり、器高は最大で33cm、最小で30.9cmと差がある。焼成は良好である。212は口縁部が斜め上方に外反し、口唇部が上方に立ち上がる甕形土器である。口唇部の立ち上がる方向と口縁部の外反の方向に大きな差がないため、口唇部の屈曲が外面でははっきりしているが、内面は連続的である。胴部上半はロクロ調整、下半はヘラケズリである。214もカマド煙道内から出土した。口縁部が外反し胴部上半がふくらむ鉢形土器である。口縁部はくの字形に屈曲して外反し、口唇部を断面形が3角形に尖らせている。胴部上半はロクロ調整であるが胴部中央から下半はその上をヘラケズリしている。焼成はきわめて良く堅緻である。215はカマド煙道内から出土した鍋形土器である。肥厚した口縁部が外反した後、口唇部がわずかに内湾気味に立ち上がる。胴部は膨らみをもたずに直線的に底部に続く器形である。上半部はロクロ調整である。胴部下半は内外面ともタタキ目があり、外面はタタキ目の上から胴部中央から下部にかけて幅が広くて深いヘラケズリを施している。底部近くはヘラケズリが及ばずタタキ目が残る。外面にヘラケズリが入る部分の器壁は薄く上半部は厚い。焼成は良好である。

216・217・223は皿形土器である。216は厚手で、外反する口縁部の断面形が3角形になるように丁寧に仕上げられている。内面には細いヘラミガキが口縁部では横方向、胴部では不整放射状に施され、内面と外反した口縁部が黒色処理されている。胎土は粒子が細かく焼成は良好で堅緻である。217は胴部が丸味を帯びて膨らみ、口縁部が肥厚してめくれるように外反する。焼成はやや甘く軟質である。223は口縁部が緩やかに外反する皿形土器で、口唇部は肥厚せずやや細くなる。焼成は良好で堅緻である。口径12cm、底径4.5cm、器高2.5cmである。

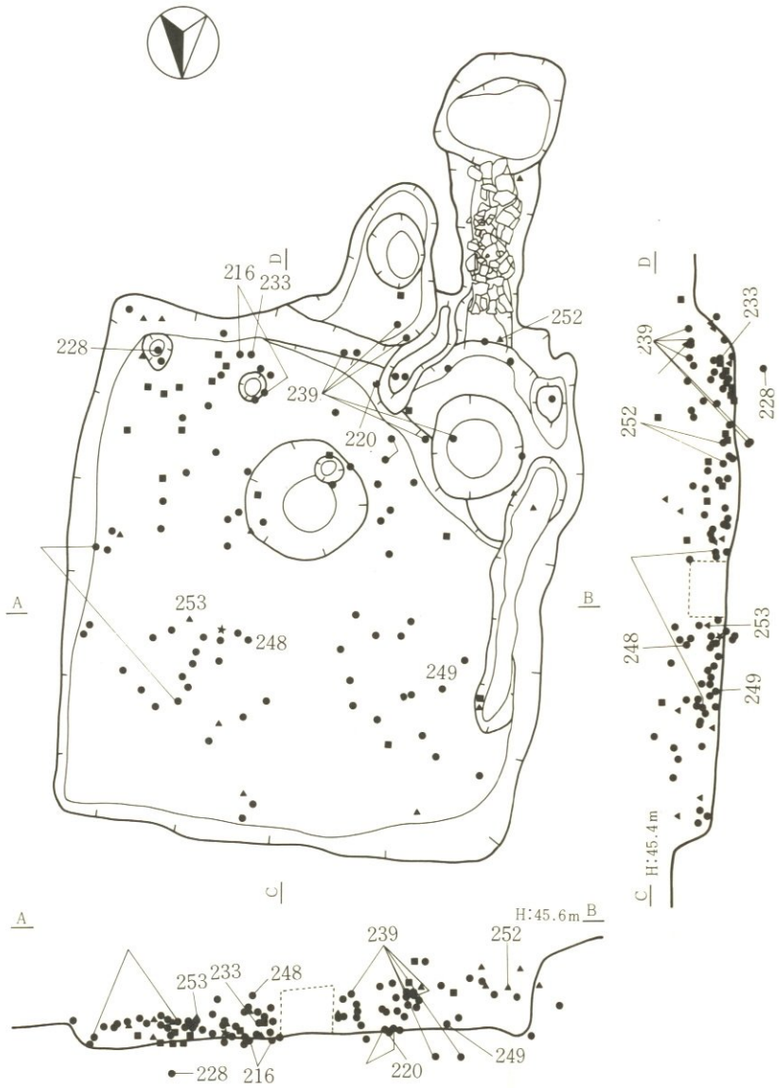
218～222・224～236は杯形土器である。218は口唇部が丸く肥厚し皿形土器の口唇部に似る。219・220・222・225・226・229・230は胴部が丸味をもって膨らみ、口縁部が屈曲して大きく外反して開くものである。222は口唇部のみが短く外反する。220は口径13.1cm、底径5.2cm、器高5.2cm、221は口径13.3cm、底径4.5cm、器高5.7cm、229は口径13.1cm、底径4.6cm、器高5.3cmである。



C～D
1　10YR2/3：黒褐色土　粘性無し。しまり無し。ややボソボソした状態。
2　10YR3/4：褐色土　粘性無し。しまり無し。ややボソボソした状態で、中央部に焼土粒小量、炭化粒微量混入。斜面下側の西側では、しまりがやや欠ける程度で、黄褐色土が多く混入。本層上面にて、火山灰がブロック状に確認できた。
3　10YR5/6：黄褐色土　粘性やや有り。しまり有り。壁崩壊土。尚、北東部で焼土と炭化物が混入しているものであるが、同郷は、盛土の形成跡が有り、北東隅の埋土に、焼土のピットの確認できた。
4　10YR5/6：黄褐色土　粘性やや有り。しまりやや有り。焼土粒が小量混入。
5　10YR5/6：黄褐色土　粘性やや有り。しまりやや有り。焼土粒が小量混入。
6　10YR3/2：黒褐色土　粘性やや有り。しまりやや有り。焼土粒φ１mm～３mm、10%。
7　10YR3/2：黒褐色土　粘性無し。しまりやや有り。焼土粒φ１mm～３mm、10%、炭化粒５%。

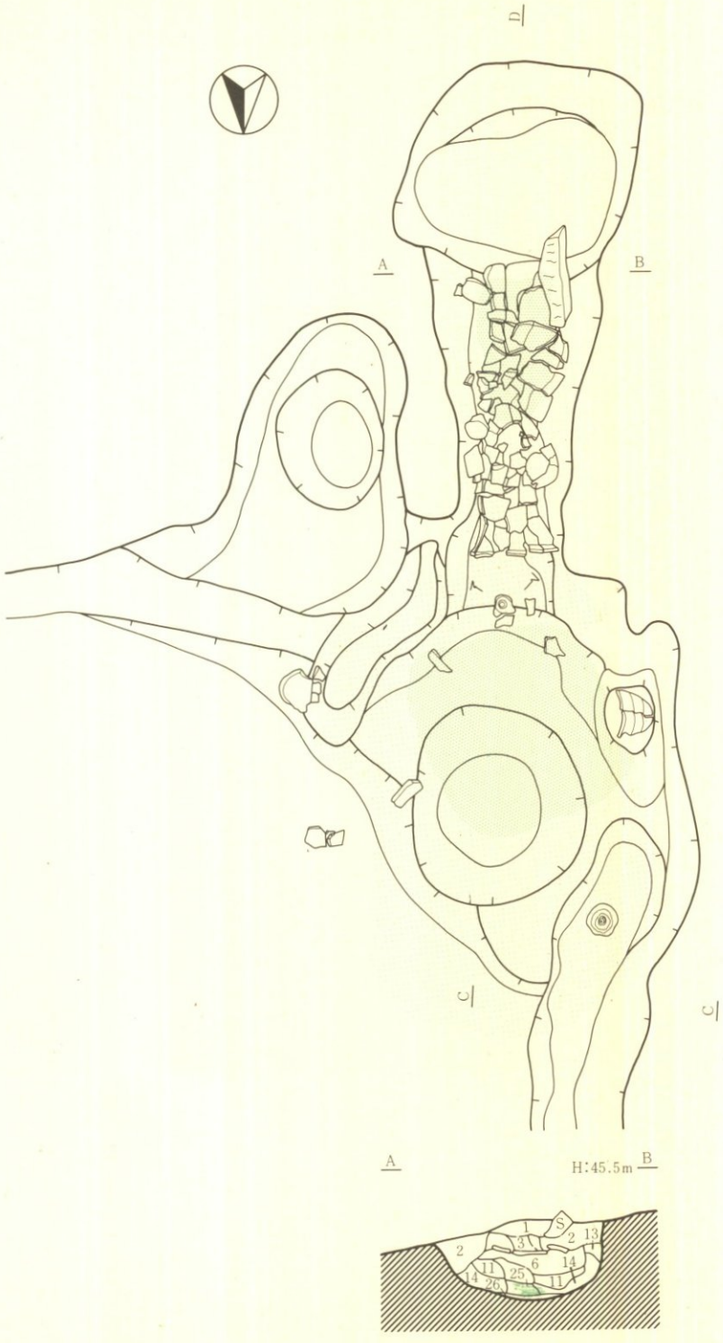
A～B
1　10YR2/3：黒褐色土　粘性無し。しまり無し。ややボソボソした状態。
2　10YR3/4：褐色土　粘性無し。しまり無し。ややボソボソした状態で、中央部に焼土粒小量、炭化粒微量混入。斜面下側の西側では、しまりがやや欠ける程度で、黄褐色土が多く混入。本層上面にて、火山灰がブロック状に確認できた。
3　10YR5/6：黄褐色土　粘性やや有り。しまり有り。壁崩壊土。尚、北東部で焼土と炭化物が混入しているものであるが、同郷は、盛土の形成跡が有り、北東隅の埋土に、焼土のピットの確認できた。
4　10YR5/6：黄褐色土　粘性やや有り。しまりやや有り。焼土粒が小量混入。

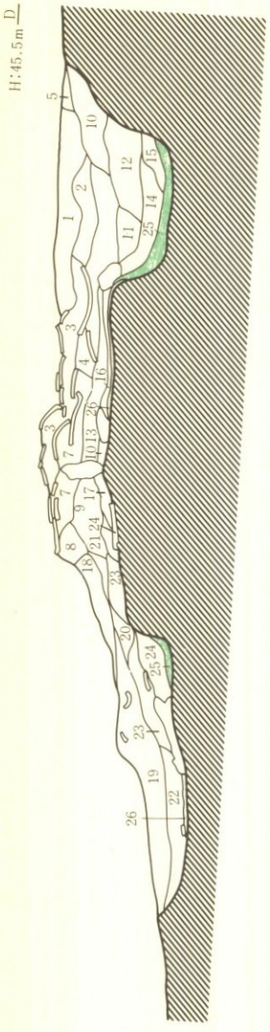
E～F
1　10YR3/4：褐色土　粘性無し。しまりやや有り。炭化物７%混入。
2　7.5YR3/4：褐色土　粘性やや有り。しまりやや有り。炭化粒φ１mm～５mm、５%。焼土粒φ１mm～５mm、５%。
3　10YR3/4：褐色土　粘性無し。しまりやや有り。炭化粒φ１mm～５mm、10%。焼土粒φ１mm～５mm、７%。
4　10YR5/6：黄褐色土　粘性無し。しまりやや有り、１と５の土の混じり。
5　10YR5/6：黄褐色土　粘性無し。しまり有り。２の土が、ブロック状に混入。張土か？
6　10YR3/4：褐色土　粘性やや有り。しまりやや有り。
7　10YR3/4：褐色土　粘性有り。しまり無し。



0　2 m

第127図　SI100竪穴住居跡



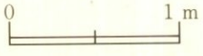


SPA～SPB

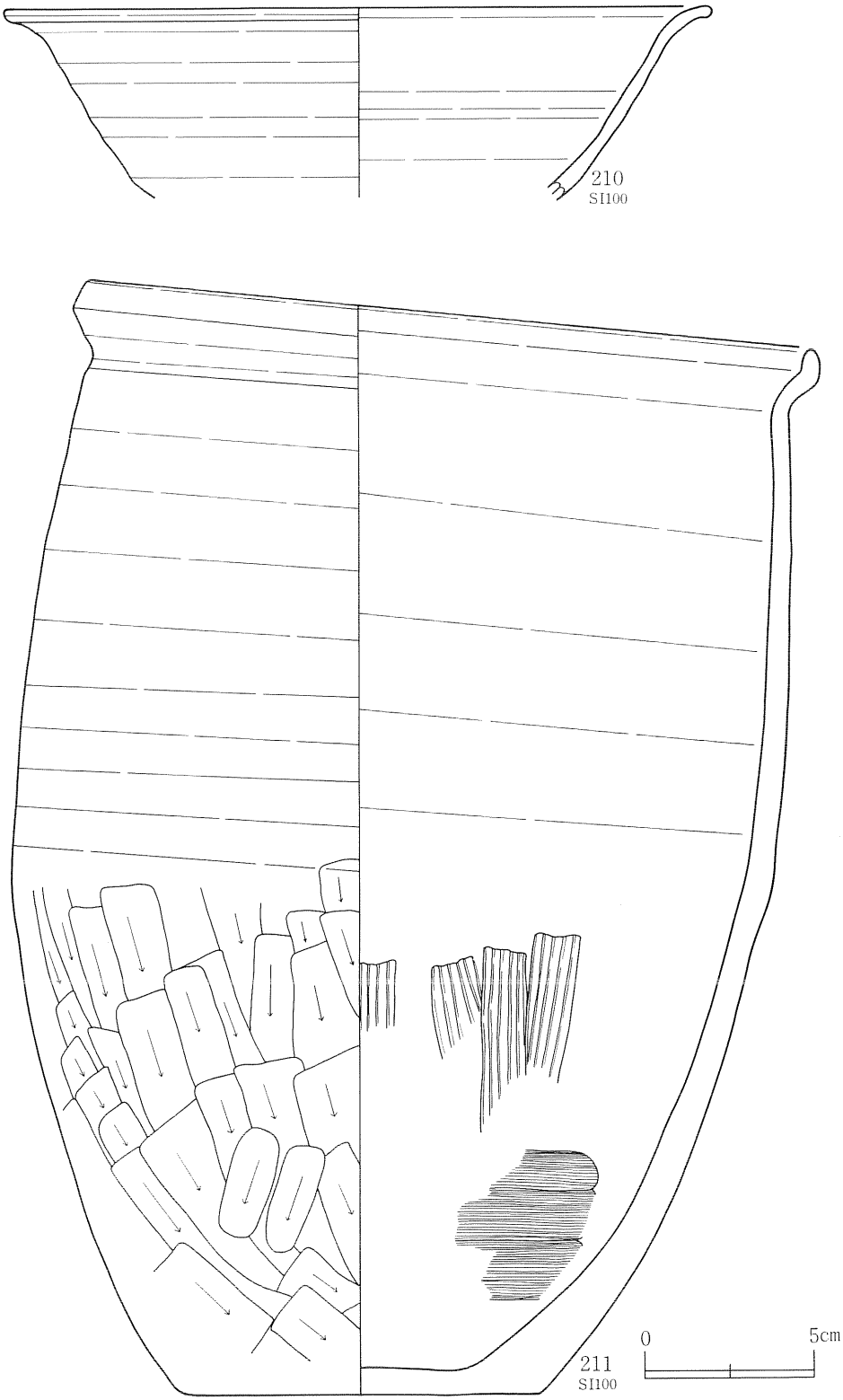
1　7.5YR4/4：褐色土　粘性やや有り。しまり有り。黄褐色土多量混入。焼土粒、炭化粒φ１ｍｍ以下微量。天井崩壊土。
2　5 YR3/3：暗赤褐色土　粘性無し。しまりやや有り。ブロック状に一層をなす天井崩壊土。
3　7.5YR3/3：明褐色土　粘性やや有り。しまり有り。焼土粒微量、黄褐色土の混入が認められる。天井崩壊土。
4　5 YR4/6：３と７の混じり。天井崩壊土。
5　7.5YR4/4：褐色土　粘性無し。しまり無し。焼土粒微量。
6　5 YR3/6：暗赤褐色土　粘性無し。しまりに欠ける。ボソボソしている。焼土粒φ５ｍｍ以下、10%。炭化粒φ５ｍｍ以下、10%。
7　5 YR3/3：暗赤褐色土　粘性無し。しまり無し。ボソボソしている。焼土粒φ５ｍｍ以下、５%。炭化粒φ５ｍｍ以下、５%。
8　7.5YR4/6：褐色土　粘性無し。しまり有り。焼土ブロック小量。炭化粒微量。天井崩壊土。
9　7.5YR4/6：褐色土　粘性無し。しまり有り。焼土粒、炭化粒微量。天井崩壊土。
10　7.5YR3/3：極暗褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまりやや有り。焼土粒φ５ｍｍ以下、10%。
11　5 YR3/1：極暗褐色土　粘性無し。しまり無し。ボソボソしている。焼土ブロック30%、炭化物30%。
12　5 YR3/3：極暗褐色土　粘性無し。しまり無し。ボソボソしている。焼土ブロック多量。炭化粒微量。
13　5 YR3/3：暗赤褐色土　粘性無し。しまり無し。焼土粒30%、炭化粒微量。
14　5 YR3/1：暗赤褐色土　粘性無し。しまり無し。黄褐色土ブロック状に混入。焼土ブロック30%。
15　5 YR3/1：極暗褐色土　粘性無し。しまり無し。焼土ブロック30%。
16　5 YR3/6：赤褐色土　13より炭化物多く、炭化物層的に一層をなす。
17　5 YR3/6：赤褐色土　16と24の混じり。
18　10 YR3/4：褐色土　粒性無し。しまり無し。ややボソボソした状態。
19　10 YR3/6：黄褐色土　粒性やや有り。しまり有り。
20　5 YR3/6：明赤褐色土　21と23の混じり。
21　5 YR3/4：にぶい赤褐色土　粘性無し。しまり有り。よく焼けている。（天井崩壊土？）
22　5 YR3/6：赤褐色土　粘性無し。しまりやや有り。焼土50%。
23　5 YR3/4：にぶい赤褐色土　粘性無し。しまり有り。焼土ブロック状で、よく焼けている。
24　5 YR3/3：暗赤褐色土　粘性無し。しまりやや有り。焼土多量、炭化物微量。
25　7.5YR1/1：黒色土　炭。
26　2.5YR4/6：赤褐色土　焼土。

SPC～SPD

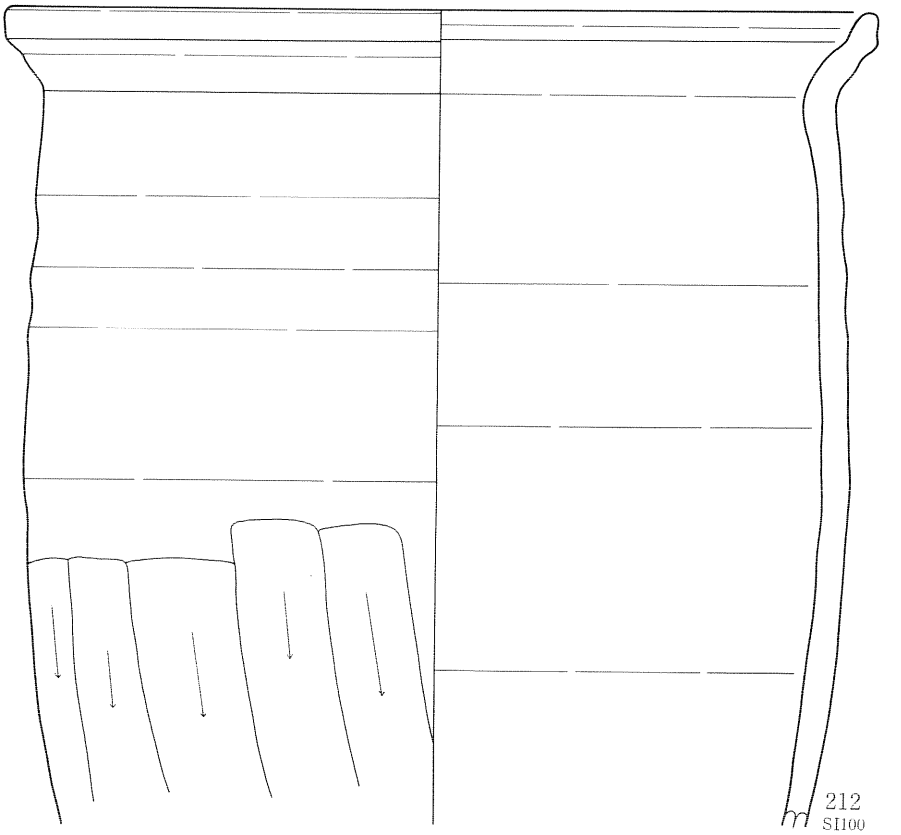
1　7.5YR4/4：褐色土　粘性やや有り。しまり有り。黄褐色土多量に混入。焼土粒、炭化粒φ１ｍｍ以下微量。天井崩壊土。
2　5 YR3/4：暗赤褐色土　粘性無し。しまりやや有り。ブロック状に一層をなす。天井崩壊土。
3　7.5YR3/3：明褐色土　粘性やや有り。しまり有り。焼土粒微量、黄褐色土の混入が認められる。天井崩壊土。
6　5 YR3/6：暗赤褐色土　粘性無し。しまりに欠ける。ボソボソしている。焼土粒φ５ｍｍ以下、10%。炭化粒φ５ｍｍ以下、10%。
11　5 YR3/1：極暗褐色土　粘性無し。しまり無し。ボソボソしている。焼土ブロック30%、炭化物30%。
13　5 YR3/3：暗赤褐色土　粘性無し。しまり無し。焼土粒30%、炭化粒微量。
14　5 YR3/4：暗赤褐色土　粘性無し。しまり無し。黄褐色土ブロック状に混入。焼土ブロック30%。
25　7.5YR1/1：黒色土　炭。
26　2.5YR4/6：赤褐色土　焼土。

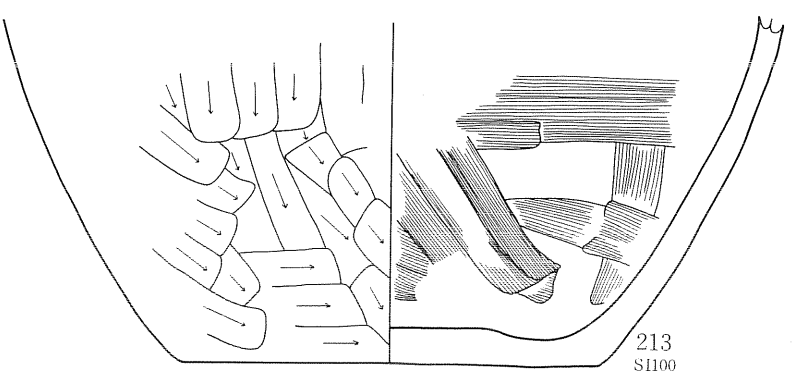


第128図　SI100竪穴住居跡カマド



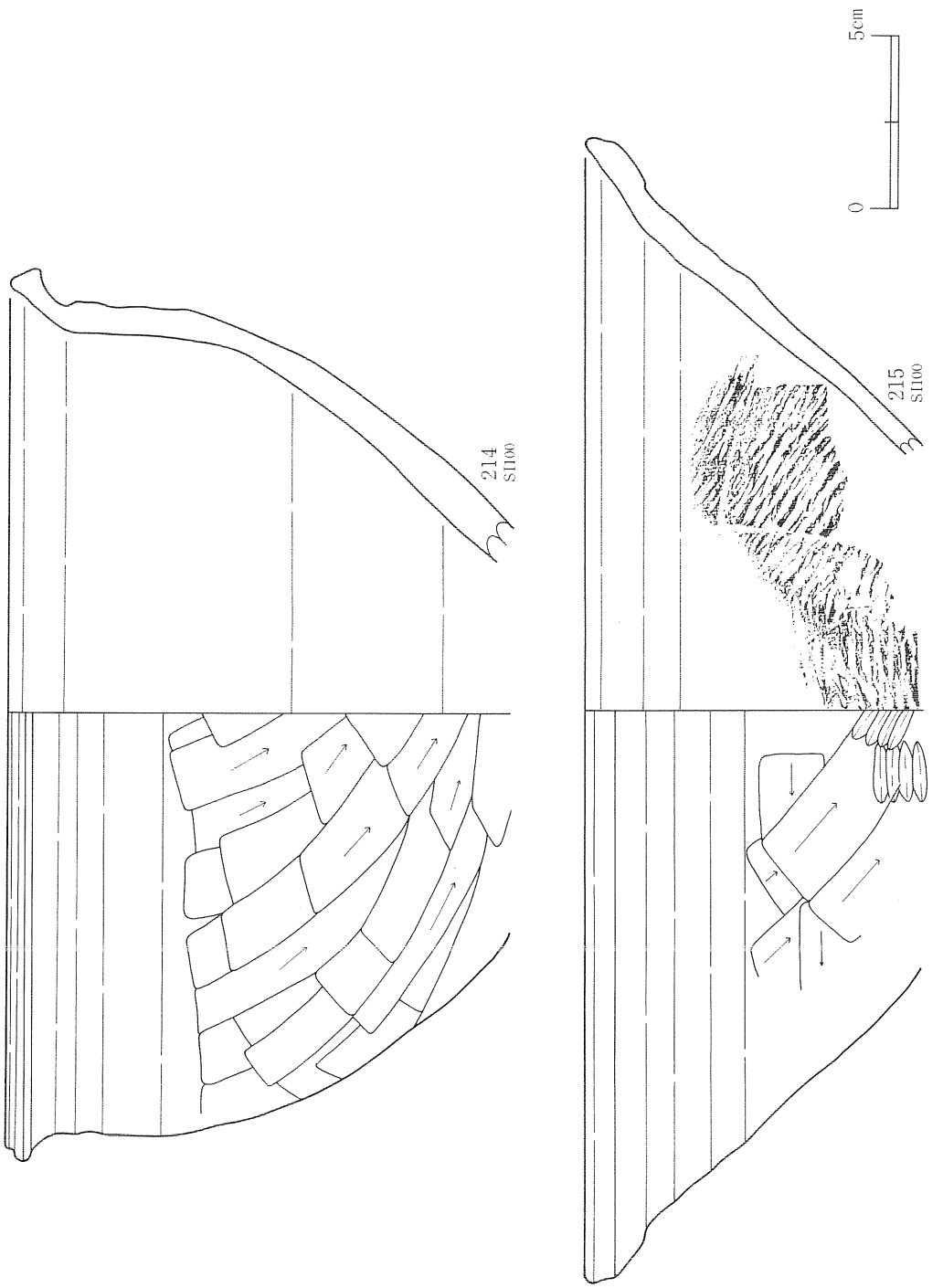
第129図　SI100竪穴住居跡出土遺物(1)



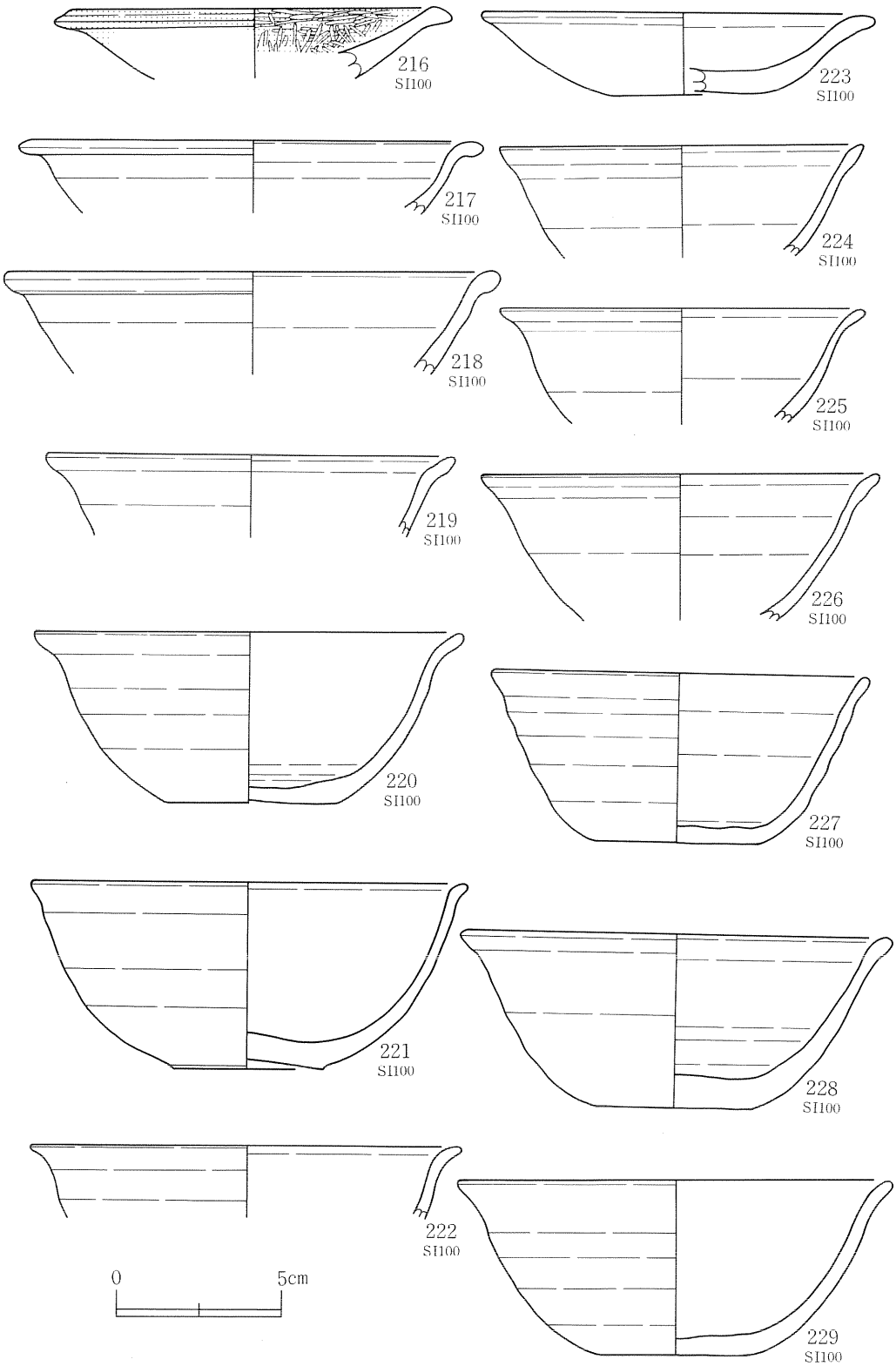


0　5cm

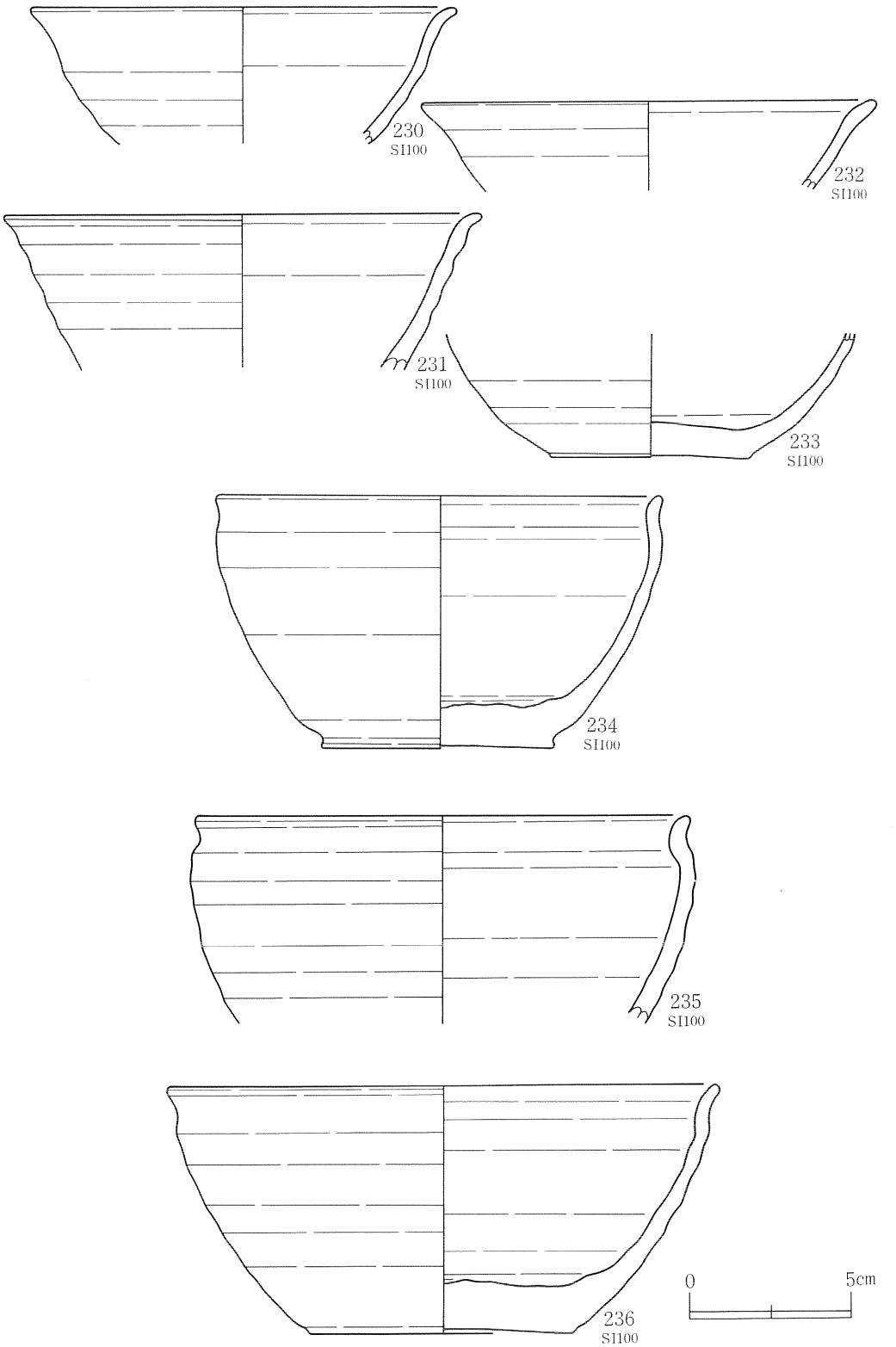
第130図　SI100竪穴住居跡出土遺物(2)



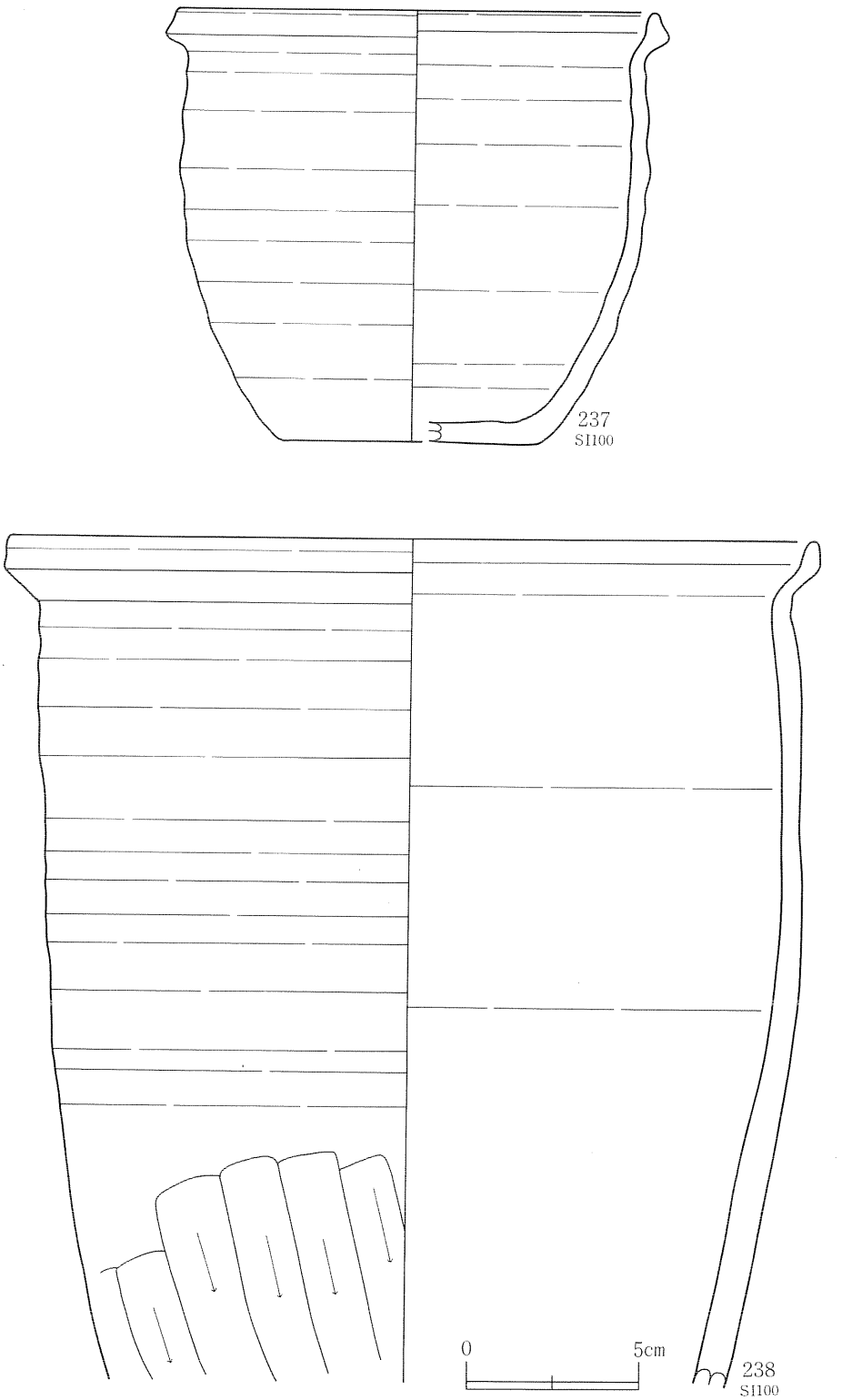
第131図　SI100竪穴住居跡出土遺物(3)



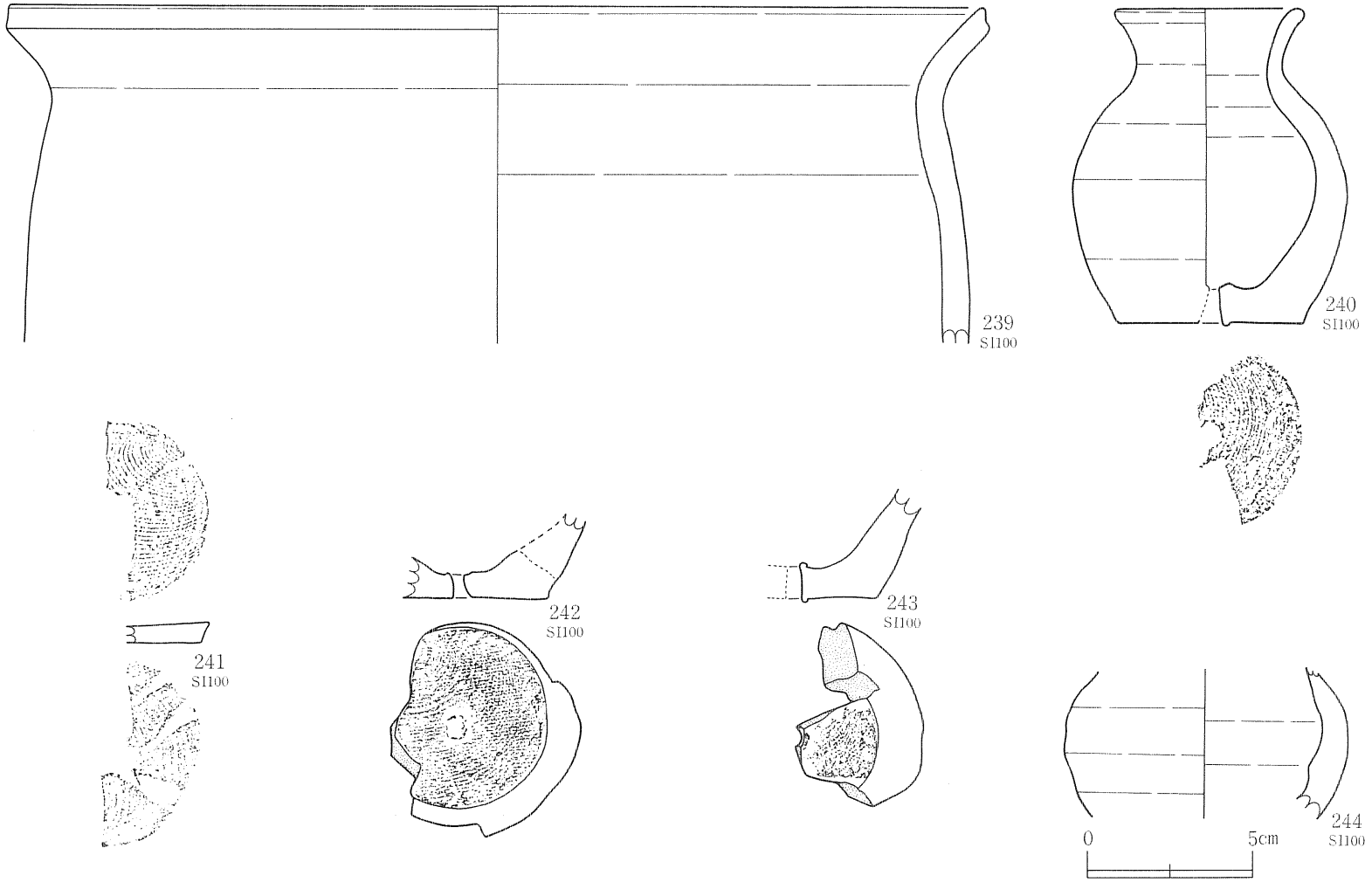
第132図　SI100竪穴住居跡出土遺物(4)



第133図　SI100竪穴住居跡出土遺物(5)



第134図　SI100竪穴住居跡出土遺物(6)



第135図　SI100竪穴住居跡出土遺物(7)

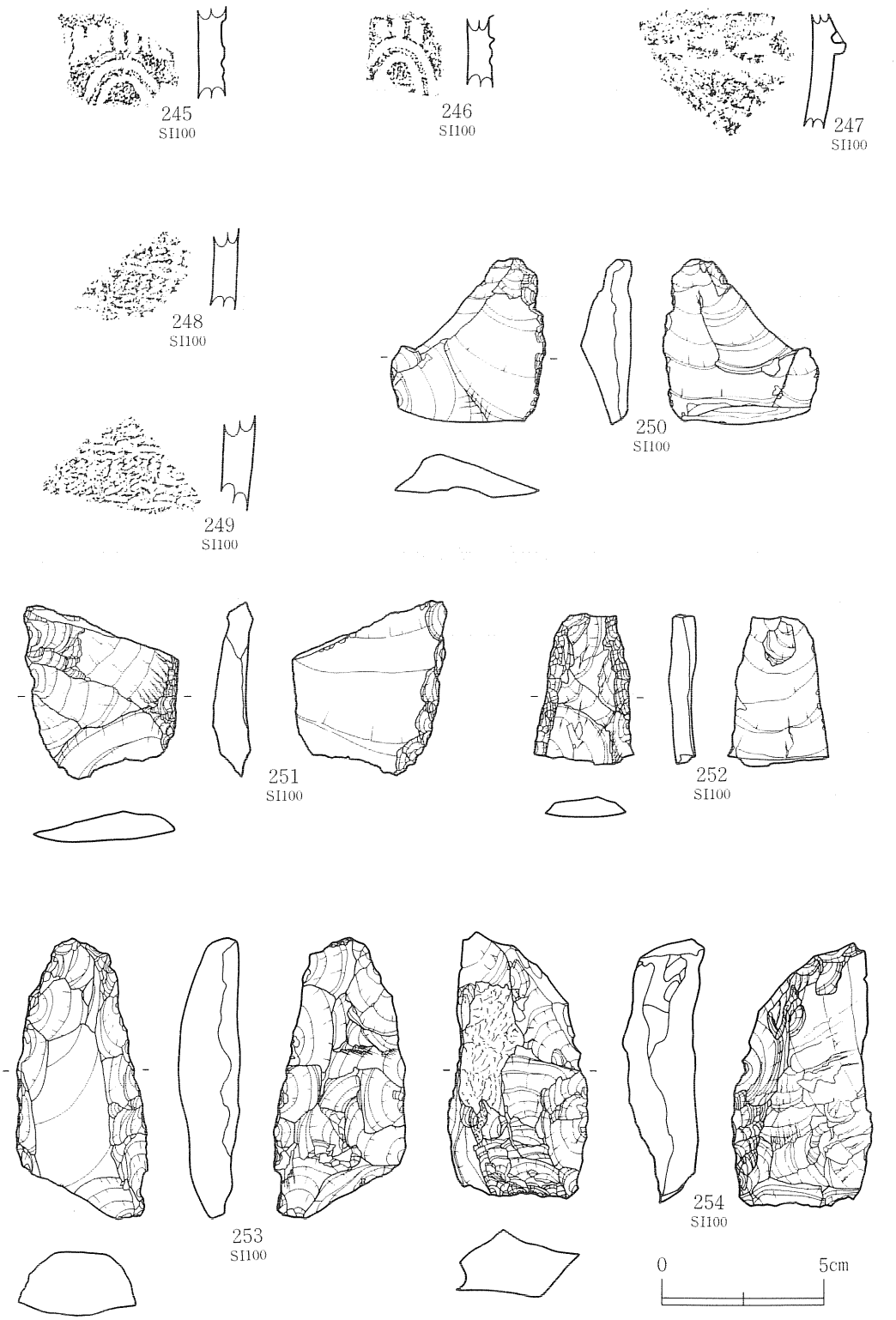
これらに対し224・227・228・231・232は口縁部があまり外反せず、胴部が直線的に立ち上がるものである。228・232の口唇部は肥厚する。227は口径11.5cm、底径5.0cm、器高5.1cm、228は口径13.1cm、底径4.8cm、器高5.3cmである。234～236の胎土は粒子の細かい粘土に中粒砂を少量含み、焼成がきわめて良好で硬質である。色調は赤みの強い橙色を呈する。240～244の小型土器の焼成、胎土、色調と同じである。胴部はやや膨らみ口縁部は一度内側に屈曲し、口唇部が強く外反する。口縁部が内側に屈曲する部分は明らかな稜をもち、234・235は最大径が口唇部ではなくてこの稜の直下にくる。底面には回転糸切り痕がある。237は小型甕形土器で全体がロクロ調整である。口縁部は外反した後、先端が上方に引き出され断面形が3角形となる。

238・239は大型の甕形土器である。238は212とよく似たつくりで口縁部がやや斜め上方に外反し先端が上方に引き出される。胴部下半にはヘラケズリを施す。239はSK101土坑の埋土から出土した破片と接合した大型甕形土器である。口縁部は緩やかに外反した後、細く上方に引き出され口唇部は鋭く尖る。焼成はきわめて良く硬質である。

240・242～244は小型の壺形土器である。240は口縁部が外反し口唇部が丸くやや肥厚する。肩は張らず、胴部中央に最大径がある。底面は平坦で回転糸切り痕が残るが、その上からヘラ状工具を押し当てたと思われる圧痕がついている。器壁は口縁部が薄く、胴部から底部にかけて次第に厚くなる。底部中央には焼成前に小孔があけられており、小孔の周縁には内外面とも粘土の盛り上がりが認められる。胎土は粒子の細かい粘土を用い中粒砂を少量含む。焼成はきわめて良好で硬質である。色調は赤みの強い橙色である。カマド周辺の床面とカマド横の浅い掘り込み部分から出土した破片が接合した。242・243も240と同様の小型壺形土器の底部と思われる。いずれも焼成前に底部中央に小孔があけられている。また、回転糸切り痕の上からヘラ状工具によるものと思われる押圧痕がついている。240・242・243は別個体であるが3個体とも底径は5.5cmで大きさは斉一性が認められる。242は胴部と底部の接合面で割れている。242と244は2次的火熱による黒斑が認められる。240～244の胎土・焼成・色調は233～235の杯形土器と同じである。

241は両面に回転糸切り痕のある焼粘土板である。表面と裏面では直径が異なり、表面のほうが約6㎜大きい。厚さは5～6㎜である。裏面には回転糸切り痕の上からヘラ状工具による押圧痕が4ケ所に残っている。表面は回転糸切り痕のみである。この焼粘土板は240のような小型壺形土器を製作する際に、底面をロクロから一度切り離した後でさらに底面の厚さを薄くするために回転糸切りを行った際にできた粘土板を焼成したものと思われる。

SI100竪穴住居跡は縄文時代の遺物包含層を掘り込んで構築されているため、埋土からは縄文土器と石器も出土している。245・246は同一個体で、胎土に繊維を含む。半截竹管による連続刺突が横位にめぐり、その下には同じ工具で山形の文様が描かれている。248・249は同一個



第136図　SI100竪穴住居跡出土遺物(8)

体で、LR縄文と綾絡文が施文されている。胎土には繊維を含む。247は隆帯の上に斜めに棒状工具で刺突を加えている。隆帯より上位は無文で、下位にはLR縄文が施文される。

250は微小剥離痕のある剥片である。剥片の末端側は折れて欠失している。表面の右側縁に使用痕と思われる微小剥離痕がある。251は折れ面のある不定形石器C_2類③Bである。表面の左側縁に刃部があり、対辺は刃つぶしが両面から施されている。252も不定形石器でC_2類③Bである。表面左側縁が刃部で、右側縁には刃つぶしが片面にのみ施されている。253は箆状石器a類の刃部が折損したものと思われる。254は礫皮面を残す厚手の剥片の一部を折り取り、細かい加工を施したものである。直線的な端部に刃部を作出しており箆状石器のb類である。

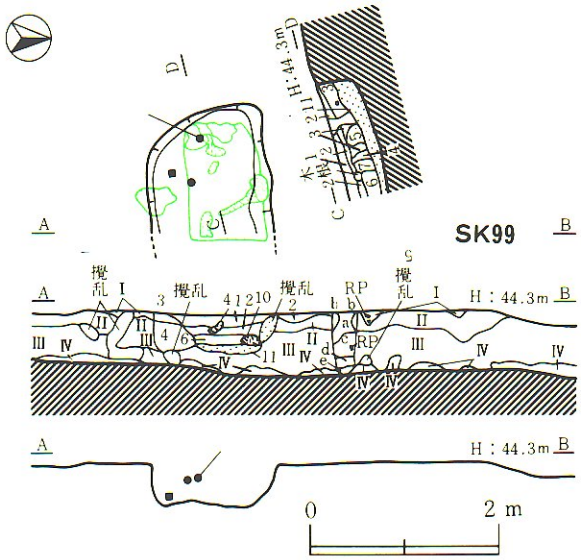
SK99土坑（第137図、図版47）

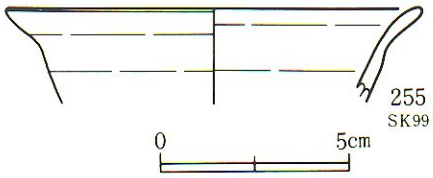
LP32グリッドで検出した。東側は耕作による削平で失なわれている。残存する上端部は幅約66cm、長さ約68cmの不整方形であるが、本来は長さが2倍くらいの不整長方形のプランになると思われる。深さは約20cmである。底面は焼けており、埋土最下層には焼土がブロック状に3～12cmの厚さで堆積し、埋土中には焼土粒や炭化物を多く含んでいる。底面近くには火山灰が入る。255は埋土中から出土した杯形土器である。口縁部は大きく外反して肥厚する。推定口径は11cmと小型である。

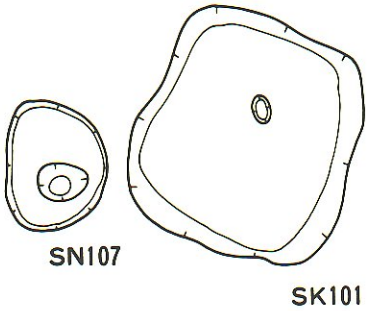
SK108土坑（第137図・138図、図版17・18・47）

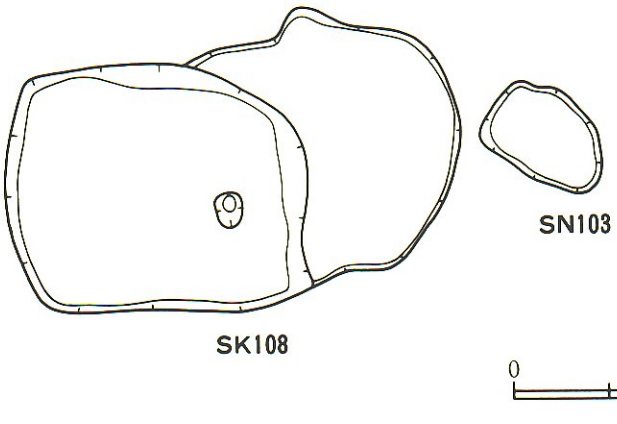
LN32グリッドのほぼ中央で検出した。LN32、LO32、LP32、LN33、LO33グリッドの範囲には、部分的な焼土の堆積と焼土遺構が分布しており、SK108土坑の確認面上にも焼土が部分的に堆積している。SK108土坑も検出時点では焼土を伴った不整楕円形のプランであった。全体の平面形は、長軸約2m45cm、短軸約1m30cmの東西に長い不整長方形である。東側には1段低い長軸約1m60cm、短軸約1m28cmの方形の掘り込みがある。深さは西側の不整楕円形の部分が約18cm、東側の長方形部分では約30cmでどちらも底面は平坦である。埋土の状況からみて2時期の遺構が重複しているものと考えられる。東側の長方形の掘り込み部分の底面と壁面は焼けており、最下層には土の混じらない炭化物の単純層が堆積している。その上層には焼土粒の混じる暗褐色土、黒褐色土が堆積する。西側の不整方形部分は埋土の上部に焼土層があり、その下層は強い火熱をうけて焼土化している。ほぼ同一レベルで、東側の方形部分の埋土上層にも焼土層が入っている。すなわち、当初から方形の掘り込みとそれに続く浅い不整楕円形の土坑が構築され、東側の方形の掘り込み部分で底面や壁面が焼けて赤化するほどに火が焚かれた。そして、土坑全体に埋土が流入し全体が凹み状になった時点で、その中で強く火が焚かれ、埋土上部の火焼面とその上に堆積する焼土が形成されたと考えられる。

遺物は方形の掘り込みの埋土中から256の杯形土器が出土した。口縁がわずかに外反しやや肥厚する。口径は12cmである。方形の掘り込みの埋土中の上層の焼土より下、底面に堆積する









SK99

Ⅰ	10 YR3/2：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１～２mmを１%、褐色粒φ２～３mmを10%、一部ブロック状に含む。遺跡基本土層の第Ⅰ層である。
Ⅱ	10 YR3/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１～２mmを１%、褐色粒φ２mmを３%、焼土粒φ５mmを若干含む。遺跡基本土層の第Ⅱ層である。
Ⅲ	10 YR3/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１～２mmを３%、褐色粒φ２mmを10%、一部φ10mm大のブロック状に１%、土師器片を若干含む。遺跡基本土層の第Ⅲ層である。
Ⅳ	10 YR3/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１～５mmを５%、褐色粒φ１～３mmを10%含む。
Ⅴ	10 YR3/4：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり強。炭化物φ１mmを若干含む。
1	10 YR3/2：黒褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。火山灰を若干、炭化物φ２mmを５%、焼土粒を若干含む。
2	10 YR3/3：暗褐色土	粒子やや粗く、粘性無し。しまりやや欠ける。火山灰を一部ブロック状に含む。
3	10 YR3/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。火山灰を若干、炭化物φ１mmを１%、焼土粒φ１mmを若干含む。
4	7.5YR3/4：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。焼土粒を多量に含む。
5	10 YR3/2：黒褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。炭化物φ１mmを１%、焼土及び焼礫をブロック状に80%含む。
6	10 YR3/2：黒褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭化物・焼土粒φ１～２mmを10%含む。
7	7.5YR3/4：褐色土（焼土）	
8	10 YR3/2：黒褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。炭化物φ10mmを３%、焼土粒φ５mmを２%含む。
9	火山灰	
10	10 YR7/4：にぶい黄褐色土	焼礫及び火山灰がブロック状に堆積。
11	10 YR3/2：黒褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。炭化物φ１mmを１%、焼土及び焼礫をブロック状に80%含む。
a	10 YR3/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまりにかける。火山灰を若干、炭化物φ１mmを10%、焼土粒φ１～５mmを１%含む。
b	10 YR3/4：褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり強。炭化物φ１mmを５%、焼土粒φ２～５mmを３%含む。
c	10 YR3/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ１～５mmを２%、焼土粒φ２～６mmを２%含む。
d	10 YR3/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり無し。炭化物φ１mmを３%、焼土粒φ２～３mmを２%含む。
e	10 YR3/3：暗褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ１mmを１%、焼土粒φ１～３mmを１%含む。

第137図　SK99土坑、SK108土坑、SK101土坑、SN103焼土遺構、SN107焼土遺構、SN102焼土遺構

炭化物層よりは上で、第102図80の須恵器壺形土器の底部が出土し、中央部遺構群のSI74竪穴住居跡底面から出土した胴部の破片と接合した。両遺構は直線距離で約60m離れており、SK108土坑の埋土中に人為的に投げ込まれたものと考えられる。両遺構間及び両遺構の属する中央部遺構群と南部遺構群間には密接な関連性が認められる。また埋土中から257の２次加工のある剝片が出土した。素材剝片の剝離面を残さず表裏両面に２次加工を施しているが刃部はない。

SN103焼土遺構（第137図・138図）

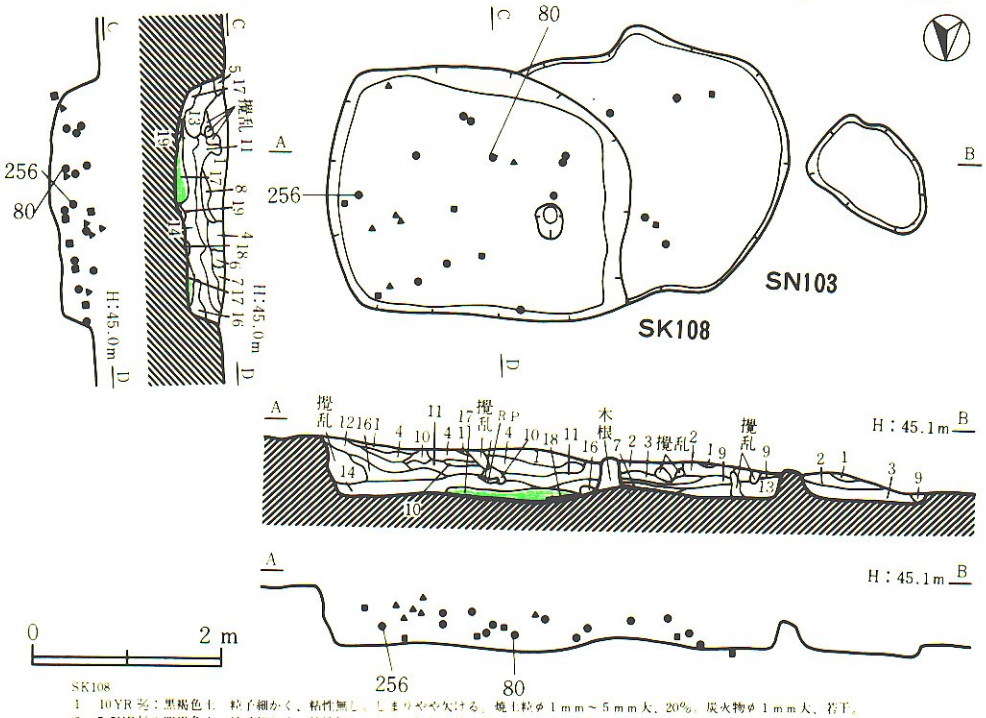
LO32グリッドで検出した。SK108土坑の東側に隣接する。長軸約65cm、短軸約45cmの不整楕円形の浅い掘り込みの埋土上部に火焼面があり、焼土が堆積している。当初は深さ約10cmの掘り込みであったのが、自然に埋没し凹地になったところで火を焚いたもので、２時期の使用が考えられる。このようなあり方は隣接するSK108土坑の東側の浅い掘り込み部分と共通する。遺物は出土しなかった。

SK101土坑（第137図・139図、図版17）

LN33グリッドで検出した。東側にSN107焼土遺構が隣接する。北側には、SN103焼土遺構、SK108土坑等がある、平面形は一辺が約１m20cmの隅丸方形である。斜面に構築されているので、深さは北側では約39cm、南側で約23cmである。底面は平坦で水平である。壁はほぼ垂直に立ち上がり断面形は箱形を呈する。底面と壁は強い火熱を受けて赤変し硬化している。底面には全面に厚さ４～９cmの炭が堆積している。埋土は炭化物、焼土粒、地山ブロックが混じる単一の褐色土で、一度に埋め立てられたものと思われる。埋土中に含まれる遺物は多くない。埋土上部から出土した甕形土器（239）の破片は、SI100竪穴住居跡の床面出土破片と接合した。258は口縁部が外反し口唇部がやや肥厚する杯形土器である。底部は埋土下部の炭化物層の直上から出土したが、接合する破片は埋土の褐色土中やその上から出土しており、土坑が埋め立てられたときに埋土に混じって入り込んだものと思われる。口径13.7cm、底径5.6cm、器高4.6cmである。261はロクロを使用しない小型の甕形土器で、内面には粘土紐の接合痕が残る。外面の底部周縁はヘラケズリ、内面の底部にもヘラナデを施している。260は折れ面を残す不定形石器である。素材剝片の鋭い縁辺をそのまま刃部として利用し、他の側縁に刃潰しを施している。262は縦型石匙でつまみ部を欠失している。263は扁平な自然礫であるが、縄文時代に人為的にこの付近に運び込まれていたものと思われる。

SN107焼土遺構（第137図・139図）

LN32グリッドで検出した。SK101土坑のすぐ東に隣接し、南側にはSK108土坑、SN103焼土遺構がある。長径約68cm、短径約53cmの不整楕円形の浅い凹みの中が火熱を受け赤変しており、その上に薄く焼土が堆積している。中心部をSX130柱穴群の柱穴の１本が切っている。遺物は出土しなかった。

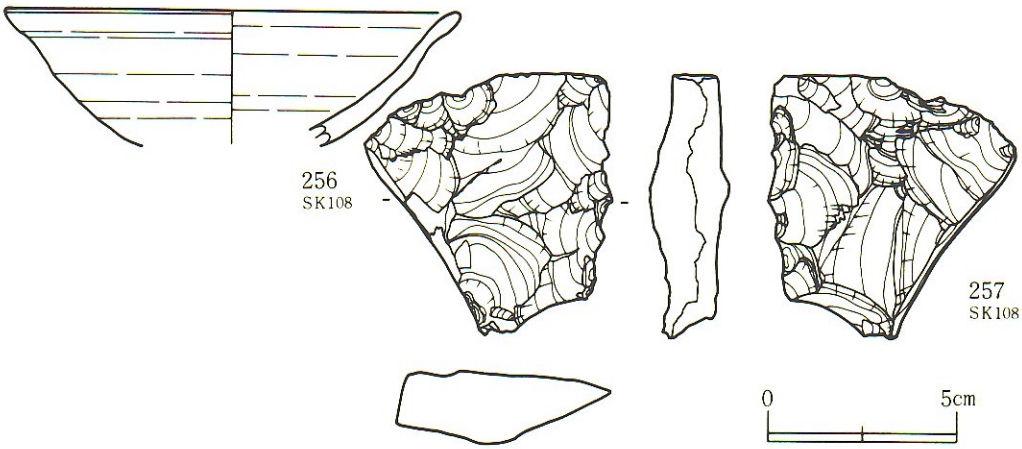


SK108

1　10YR 3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりやや欠ける。焼土粒φ１ｍｍ～５ｍｍ大、20%。炭火物φ１ｍｍ大、若干。
2　7.5YR 3/2：明褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり無し。焼土粒φ５ｍｍ大、３%。（焼土）
3　7.5YR 5/4：明褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。（焼土）
4　7.5YR 3/2：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。焼土粒φ10ｍｍ大のブロック状、10%。（焼土）
5　10YR 3/2：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりに欠ける。焼土粒φ２ｍｍ、２%。
6　10YR 3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりに欠ける。焼土粒φ５ｍｍ～７ｍｍ大、10%
7　10YR 3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりに欠ける。焼土粒φ３ｍｍ～５ｍｍ、５%。φ20ｍｍ大のブロック状も有り。
8　7.5YR 3/2：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。φ２ｍｍ～５ｍｍ大の焼土ブロックも含む。（焼土）
9　7.5YR 2/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりに欠ける。焼土粒φ１ｍｍ、20%。
10　7.5YR 3/2：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。焼土粒φ２ｍｍ大、10%。
11　10YR 2/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりに欠ける。焼土粒φ２ｍｍ～５ｍｍ大、２%。褐色粒φ１ｍｍ、10%。
12　10YR 3/3：黒褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。焼土粒φ１ｍｍ～３ｍｍ、５%。炭化物φ１ｍｍ～４ｍｍ、２%。一部ブロック状有り。加熱を受けているため、にぶく赤変している。
13　10YR 3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりに欠ける。焼土粒φ２ｍｍ、２%。
14　10YR 3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。焼土粒φ１ｍｍ大、１%。炭化物φ１ｍｍ大、２%。
15　10YR 3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。炭火物、焼土粒各φ２ｍｍ大、５%。
16　10YR 3/2：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ１ｍｍ大、若干。
17　10YR 3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。焼土粒φ１ｍｍ大、１%。炭化物φ１ｍｍ大、２%。
18　炭化層、焼土粒φ１ｍｍ大、１%。
19　10YR 3/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ１ｍｍ大。若干。
20　7.5YR 5/6：明褐色土　焼土。

SK103

1　7.5YR 3/2：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。φ２ｍｍ～５ｍｍ大の焼土粒も含む。（焼土）
2　7.5YR 3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。焼土粒φ２ｍｍ大、10%。
3　10YR 3/4：暗褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。焼土粒φ１ｍｍ大、１%。炭化物φ１ｍｍ大、２%。



第138図　SK108土坑、SN103焼土遺構

SN102焼土遺構（第137図・139図）

LO32グリッドで検出した。南側にはSN103焼土遺構、SK108土坑がある。平面形は長径約95cm、短径約50cmの楕円形で、深さ約13cmの浅い凹みの埋土上部で火が焚かれ、赤化した火焼面が形成されている。遺物は出土しなかった。

SK112土坑（第141図、図版18・47）

LR33グリッドで検出した。西側に約2m離れてSK111土坑がある。SX130柱穴群の範囲内である。平面形は長径約1m、短径約84cmの不整楕円形で、深さは約29cmである。底面は平坦である。底面と壁とは明瞭な稜をつくらず緩やかに曲線的に立ち上がる。埋土は自然堆積で、埋土中には多数の土器片が含まれていた。

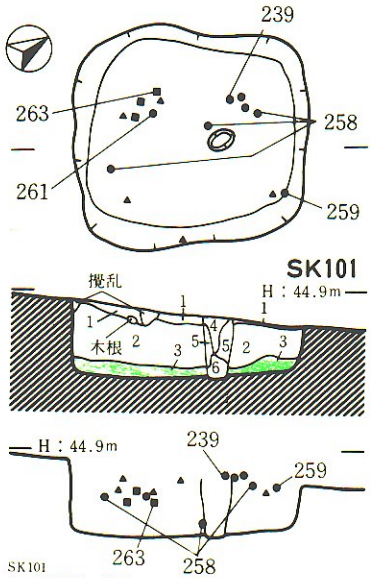
埋土中の土器はこれまで記述したような土師器とは明らかに異なるものである。264・265は杯形土器である。口縁部は外反せず、胴部から直線的に立ち上がる。内外面ともロクロ調整で底面には回転糸切り痕が残る。264は口径が11.3cm、底径5.6cm、器高3.8cmと小型で、他の遺構から出土した土師器杯とくらべて底径がやや大きめである。265は口径12cm、底径6.6cm、器高4.0cmである。焼成は良好で堅緻である。

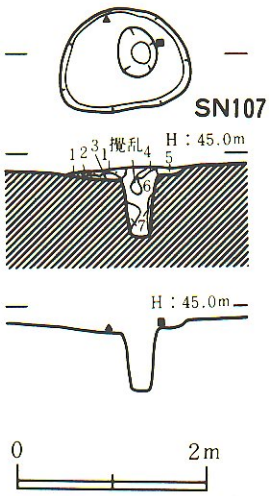
266～274は皿形土器である。266～269は灰色がかった色調で、器壁は薄手であるが焼成は良好で堅緻である。口縁部が外反し胴部がやや膨らむ。口径は11～12cmと小さく、底径も269は3.8cmで、他の遺構から出土している土師器皿形土器よりも小ぶりである。270～274は口径が11～12cmの小型の皿形土器であるが、他の遺構から出土した土師器皿形土器や266～268とは違って、外面に細くて深いロクロ目が残り器表面の凹凸が激しい。焼成は良好で堅緻である。口縁部は胴部からそのまま立ち上がり、口唇部がわずかに内湾あるいは外反気味になる。274は回転糸切り痕が残る。275～278は小型の手づくねの土器である。内外面に指頭押圧痕が残る。色調、胎土は266～269の皿形土器と似ている。

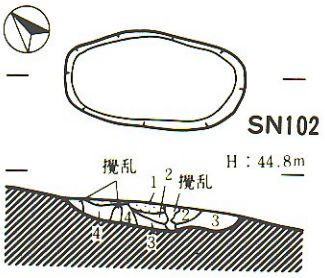
269は甕形土器の破片である。胎土には径約2～5mmの小礫を含み、器表面にも露出している。粘土の粒子は細かい。焼成はきわめて良く堅緻である。色調は、他の遺構から出土した土師器にくらべて赤みが少なく、黄褐色～灰褐色が強い。内面はユビナデ、外面は幅約5mmの植物の茎のようなものによる不整方向のナデによって調整されている。268・270・272・273・278には、内外面に漆のような黒色の液体が、流れて付着したような痕跡がついている。

SK115土坑（第142図、図版18・47）

LP34グリッドで検出した。SX130柱穴群の範囲のほぼ中央部にあり、南側にはSN110焼土遺構がある。平面形は長軸約1m25cm、短軸約85cmの不整長方形で、深さは18～25cmである。底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がり底面との間に明瞭な稜はない。埋土中からは多量の土器片が出土したが小破片が多い。281は口径9.5cm、底径4.2cm、器高3.8cmの小型の杯形土器で、







SN102

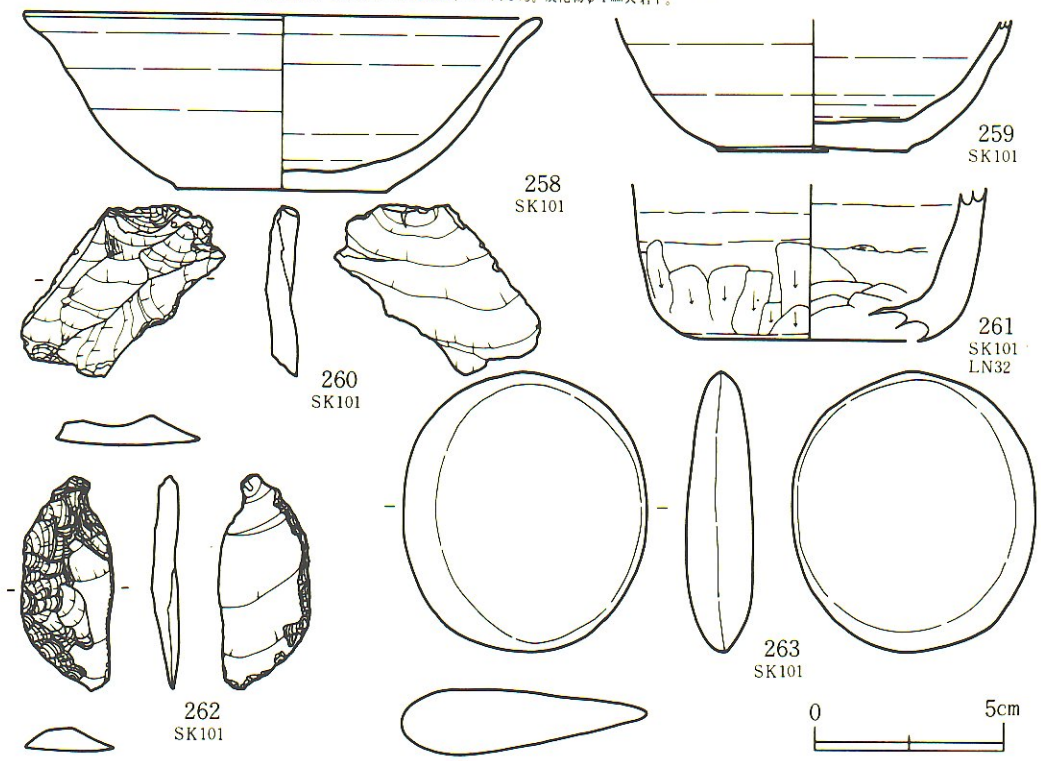
1	7.5YR㌢：褐色土	粘性若干有り。しまり有り。（焼土）
2	7.5YR㌢：褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。（焼土を多量に含有）
3	10YR㌢：暗褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや有り。炭化物φ1mm大若干、褐色粒若干、焼土粒若干。
4	10YR㌢：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり強。炭化物φ1mm大若干。

SK101

1	10YR㌢：黒褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。炭化物φ1mm～10mm5％、焼土粒φ1mm～2mm大10％。
2	10YR㌢：褐色土	粒子細かく、粘性有り。炭化物φ2mm～10mm大10％。焼土粒φ5mm3％。地山ブロック(10YR㌢)5％。
3		炭化物層、焼土粒φ3mm～5mm大10％。
4	10YR㌢：黒褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまりやや欠ける。焼土粒φ1～5mm大2％。炭化物φ1mm大2％。
5	10YR㌢：暗褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり無し。焼土粒、炭化物φ1mm大5％。褐色粒φ1mm大50％。
6	10YR㌢：黒褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり無し。焼土粒φ1mm大1％。炭化物φ1mm大3％。褐色粒φ1mm大5％。

SN107

1	7.5YR㌢：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。焼土粒φ1mm～5mm20％。（焼土）
2	10YR㌢：黒褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。焼土粒φ1mm～5mm大20％。炭化物φ2mm大2％。
3	10YR㌢：褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ1mm大若干。
4	10YR㌢：暗褐色土	粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。焼土粒φ1mm大1％。炭化物φ1mm大若干。
5	10YR㌢：暗褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物φ1mm～2mm2％。褐色粒φ2mm大3％。
6	10YR㌢：黒褐色土	粒子細かく、粘性無し。しまり有り。焼土粒φ1mm～5mm大20％。炭化物φ2mm大2％。
7	10YR㌢：褐色土	粒子細かく、粘性有り。しまり有り。焼土粒φ5mm大1％。炭化物φ1mm大若干。



第139図　SK101土坑、SN107焼土遺構、SN102焼土遺構

SK112土坑出土の270～274と同様の胎土、焼成である。胴部がわずかに膨らみ、口縁部は外反気味である。外面には深いロクロ目が残り階段状の凹凸が著しいが、口唇部は約8㎜の幅で平滑に仕上げられており、やや肥厚している。底面には回転糸切り痕が残る。282は皿形土器で焼成、色調が、SK112土坑出土の266～268と類似する。283はロクロを使わない皿形土器で、粘土紐の接合痕が明瞭である。全体にユビナデ痕が残り、外面はヘラケズリで調整されている。285は手づくねの皿形土器で器内外面に指頭押圧痕が残っている。薄手で焼成があまく軟質である。内面には光沢のある黒色～黒褐色の液体が、流れて付着した痕跡がある。

280は不定形石器で、表面の右側縁下半部に表面から細かい2次加工が施された刃部がある。表面は全体に、裏面は一部分に2次加工が施されている。

SK111土坑（第145図）

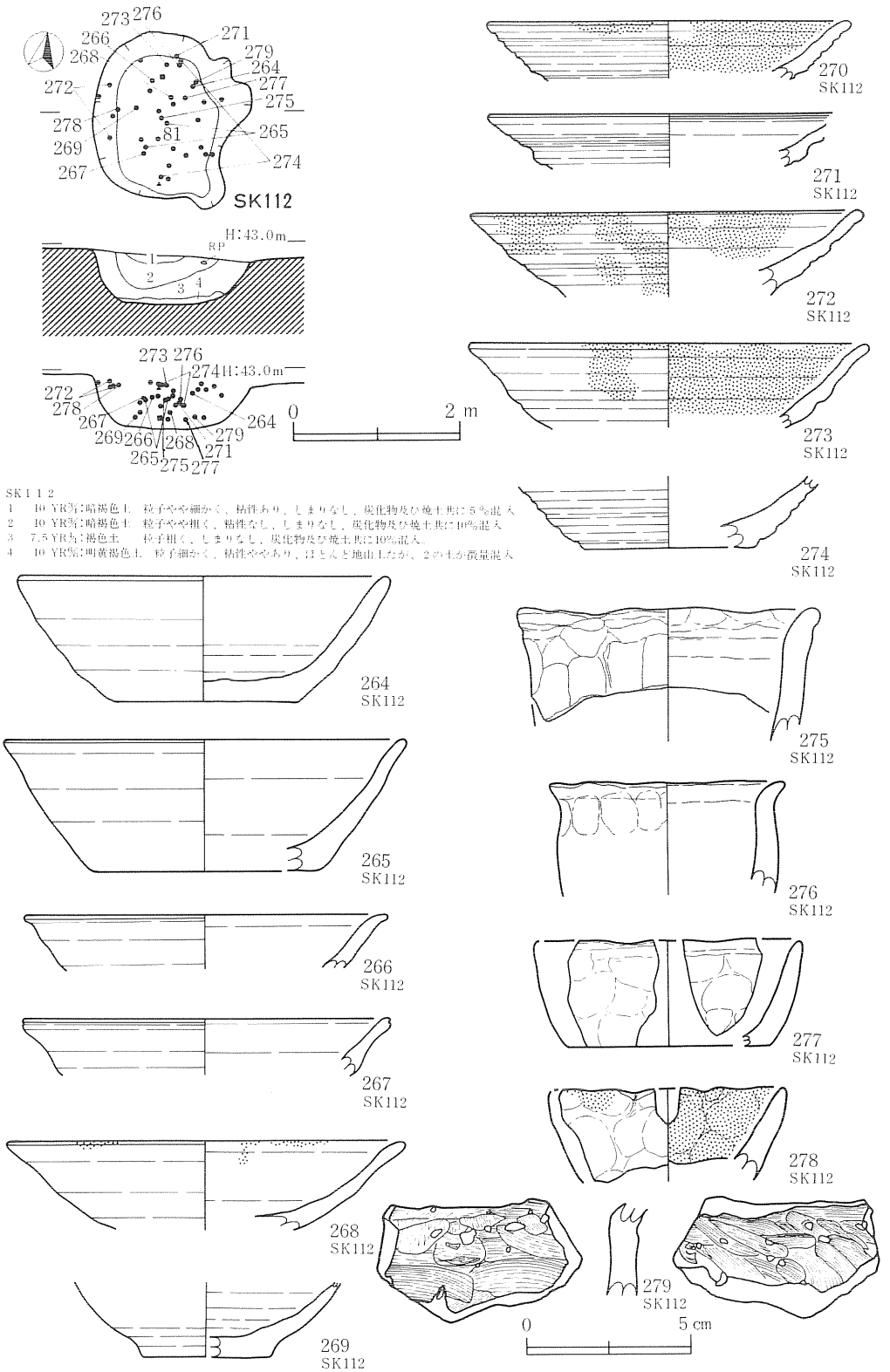
LR33グリッドで検出した。SX130柱穴群の範囲内にあり、西側にはSK112土坑がある。平面形は長径1m24cm、短径約1mの楕円形で、深さは約12cmである。底面は平坦である。埋土中からSK112土坑やSK115土坑で出土したような皿形土器の小破片が1点出土した。

SN110焼土遺構（第145図）

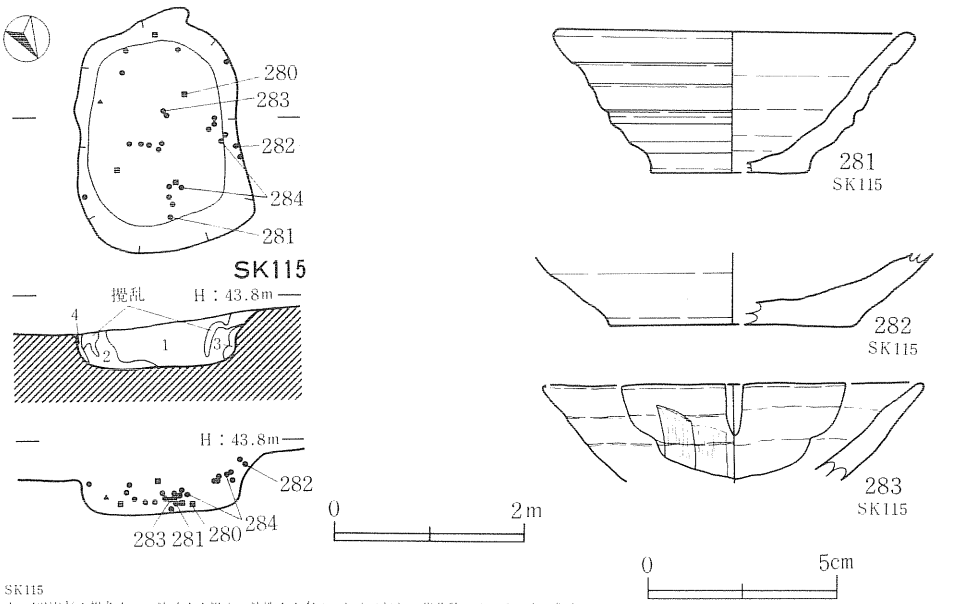
LP33グリッドで検出した。SX130柱穴群に属する柱穴2本によって切られている。長軸約60cm、短軸約48cmの不整方形の浅い掘り込みの中に火焼面があり、焼土が堆積している。遺物は2点出土した。286はSK115土坑出土の281と同様のつくりの杯形土器である。286は手づくねの土器で薄手で全体が磨滅している。この焼土遺構を切っている柱穴の中から和鏡と甕形土器の破片が出土した。

SK30土坑（第143図、図版22）

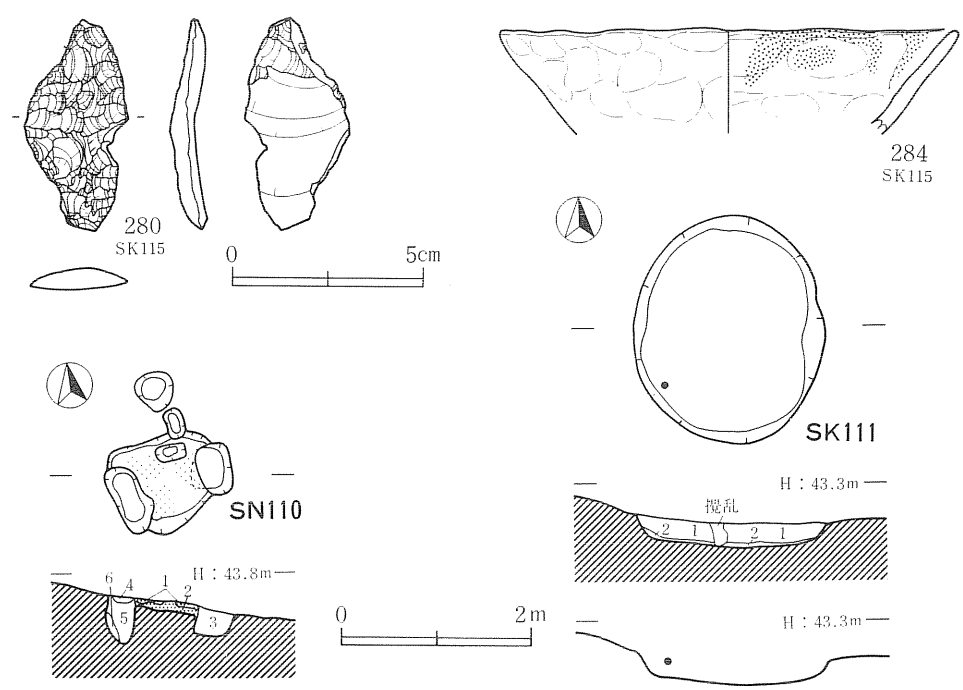
LT36グリッドで検出した。SX130柱穴群の範囲内であるが、周辺には他に遺構がなく、単独で離れた位置にある。SK30土坑付近は耕作と黒ボク土採取による削平をうけており、土坑のプランが地表面に露出していた。平面形は上端径約1m、底径約50cmの円形で、深さは約24cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに湾曲して立ち上がる。底面と壁面は強い火熱をうけて、赤変し硬化しており、北東側の壁面が顕著である。埋土最下層には厚さ約10cmの炭化物層が堆積している。この炭化物層を覆って火山灰がレンズ状に堆積する。北東側では部分的に火山灰層を切って上部から入り込んでいる炭化物層が認められた。遺物は出土しなかった。底面と壁面が焼け炭化物が堆積し、埋土中にレンズ状に火山灰が堆積する点は北部遺構群のSK14土坑と類似しており、土坑の性格、廃絶時期が共通すると考えられる。底面に堆積する炭化物と火山灰を切っている炭化物については^{14}C年代測定を行った。火山灰を切る炭化物が760年A.D.、底面に堆積していた火山灰が1440年A.D.という結果であった。またこの火山灰の分析を行ったが純度の低い灰白色火山灰かどうかは不明という結果であった。



第140図　SK112土坑



SK115
1　10YR塙：褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。しまり無し。炭化物φ1～5mmを5%含む。
2　10YR塙：褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。炭化物φ1～5mmを3%含む。
3　10YR塙：褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。しまりやや有り。1の土がブロック状に20%混入。
4　10YR塙：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性有り。しまりやや有り。1の土がブロック状に15%混入。



SN110
1　5 YR塙：赤褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。（焼土）
2　5 YR塙：赤褐色土　5 YR塙（明赤褐色）の土が、ブロック状の塊になって混入。
3　10 YR塙：黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。地山の土に、7.5YR塙（暗褐色）の土を微量に混入。ほとんど、地山に近い。
4　7.5YR塙：褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。
5　10 YR塙：褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。
6　10 YR塙：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。

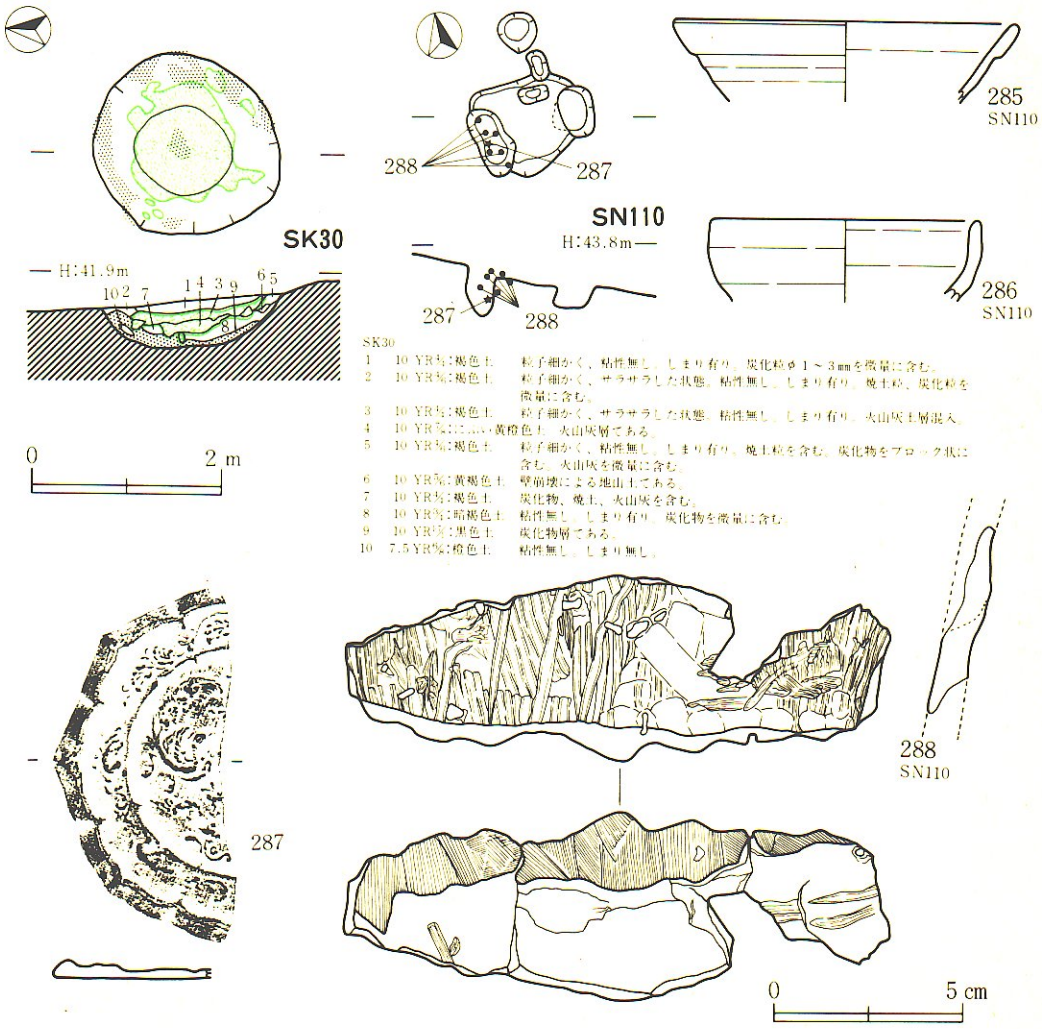
SK111
1　7.5YR塙：褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。φ1～2mmの炭化粒が全体的に3%混入。
2　10 YR塙：黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり有り。炭化物微量混入。（崩壊土）

第141図　SK115土坑、SK111土坑、SN110焼土遺構

SX130柱穴群（第143・144図、図版19・47）

LTライン～LMライン、32ライン、37ラインの範囲で合計807基の柱穴を検出した。この範囲内にはSI100竪穴住居跡、SK101土坑、SK108土坑、SK99土坑、SN103焼土遺構、SN102焼土遺構、SN107焼土遺構、SN110焼土遺構、SK112土坑、SK115土坑、SK111土坑、SK30土坑が含まれる。SI100竪穴住居跡、SK101土坑、SK108土坑、SN107焼土遺構、SN110焼土遺構とは切り合い関係があるが、すべてSX130柱穴群の柱穴が新しく各遺構を切っている。柱穴の埋土中には黒色土（10YR$^{2}/_{2}$）の入るもの、暗褐色土（10YR$^{3}/_{4}$）の入るもの、褐色土（10YR$^{4}/_{4}$）の入るものがあり、炭化物粒、焼土粒の含まれるものもあるが、埋土状態による柱穴配置の規則性は認められなかった。埋土中に土師器・縄文土器・石器等の遺物が入っている柱穴は113基である。これらのうちSN110焼土遺構を切っている柱穴のうちの1本から和鏡が出土した。

287は瑞花双鸞八稜鏡である。上下に位する稜尖と中央の鈕も含めて2分の1強が欠失する。鈕



第142図　SK30土坑、S×130柱穴群出土遺物

座も欠失しているのか素鈕なのかは不明である。界圏は階段式段圏で八稜形である。内区は外区より1.5㎜低い。縁は蒲鉾式膨側高縁で縁高は4.5㎜である。推定径9.5㎝、内区の厚さ1.5㎜、外区の厚さ3㎜である。鏡背の内区には鸞と瑞花が描かれ、外区には草花・花鳥が交互に配される。主要文様の鸞の配置が交互相対か左右相対かは不明である。製作の手法は繊細で華麗である。鋳上がりも良好で、表面は平滑である。金質は青銅製である。

287の和鏡と共伴して288の甕形土器胴部破片が出土した。胎土には粒子の細かい粘土を用い、径2～5㎜の小礫が混じる。小礫は器表面にも露出している。焼成はきわめて良く堅緻である。この胎土と焼成はSK112土坑内から出土した279と同じである。調査区内からは多量の土師器が出土しているが、この種の胎土・焼成のものはきわめて少数である。外面は径2～3㎜の植物の茎を束ねた刷毛状の工具によると思われるもので、上下方向に撫で、その後で、部分的に不整方向のヘラナデによってその痕跡を消している。また刷毛状工具で器面全体を撫でた後に、さらに径3～4㎜の植物の茎を1本だけ用いて上下方向に撫でており、沈線状になっている。内面は不整方向のナデを施す。器壁の割れ口には外面の調整に用いられたものと同じ植物の茎の跡がみられ、胎土にスサ状に植物の茎を入れていたものと思われる。この甕形土器は287の八稜鏡が廃棄された時点の遺物と考えられ、他の土師器よりは時代が下る可能性がある。

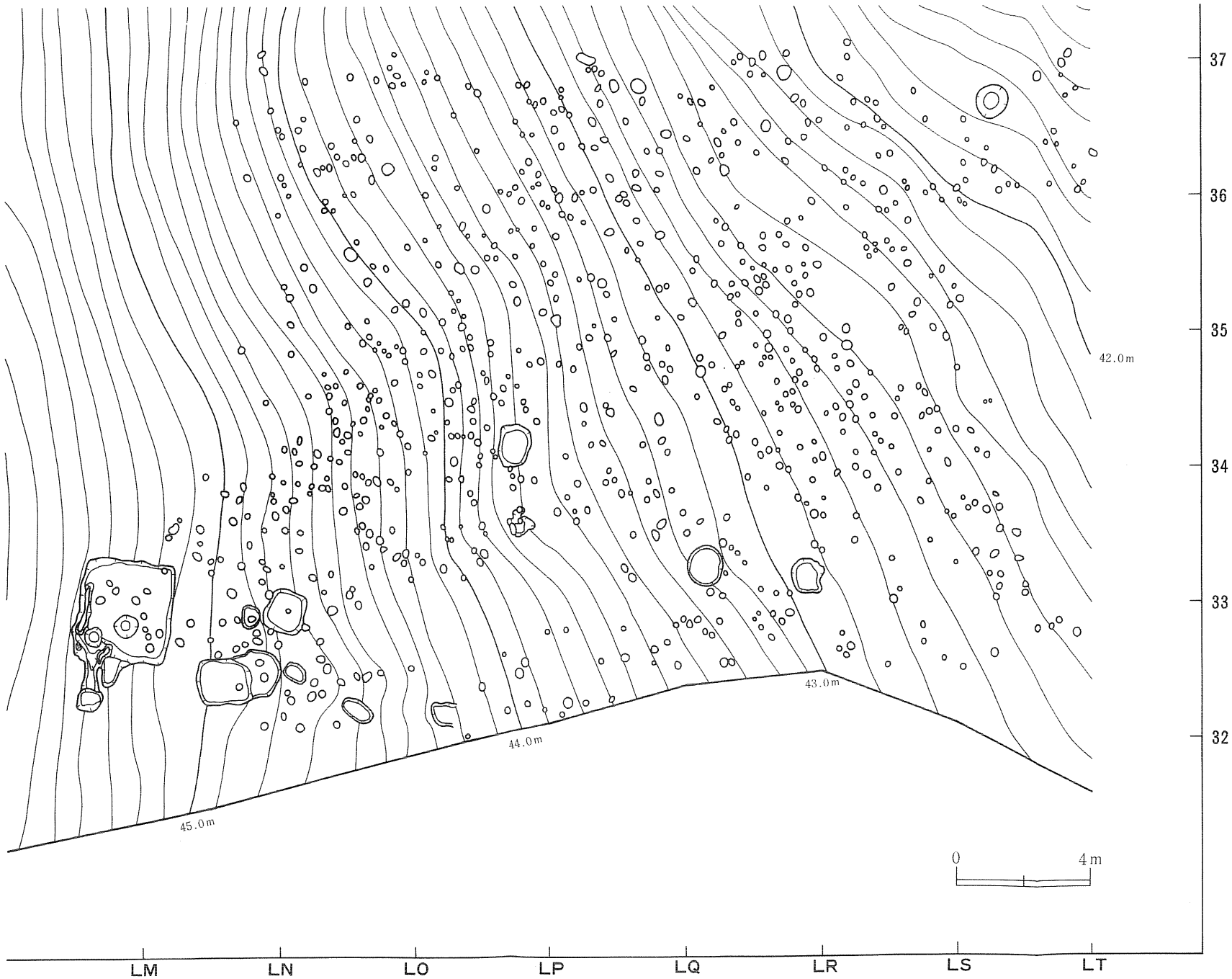
4. 南部遺構外出土遺物（第145図289～第149図348、図版47・48）

南部遺構外出土遺物は、南部遺構群の遺構内出土遺物と接合するものや胎土・焼成・色調の共通するものも含まれる。南部遺構群は南西から北東にのびる細長い丘陵の尾根線よりも南側の西から東に傾斜する斜面にあり、この斜面に散布する遺構外遺物は南部遺構群の各遺構に伴う遺物が斜面に流出して散布したものと考えられる。

杯形土器

289～294・305・306は中央部遺構群から出土したものと同質の土師器で焼成はややあまく色調は褐色味の強い橙色である。294以外は口縁が外反する杯形土器で胴部はやや膨らみ、器壁は厚手である。289・290は口唇部が肥厚せずゆるやかに外反する。290は口径13㎝、底径5.1㎝、器高5.0㎝である。292は口唇部が細く尖り端部のみわずかに外反する。305・306は口唇部が肥厚し外側に大きく引き出される。293は口縁部のロクロ目がきつく器壁が薄くなって外面に段差がつく。口唇部は大きく外側に開く。291はロクロ目の凹凸が激しく器壁は厚手である。口唇部が上から潰されるように丸くつくられている。口径13.6㎝、底径4.6㎝、器高4.2㎝である。294は口縁部が直線的に外側に開いて立ち上がる。307・319・329は同種の底部で307は底面が薄く揚底である。胴部は大きく膨らんで立ち上がる。胴部の膨らみ方からみて、305・306のような上半部をもつものと思われる。

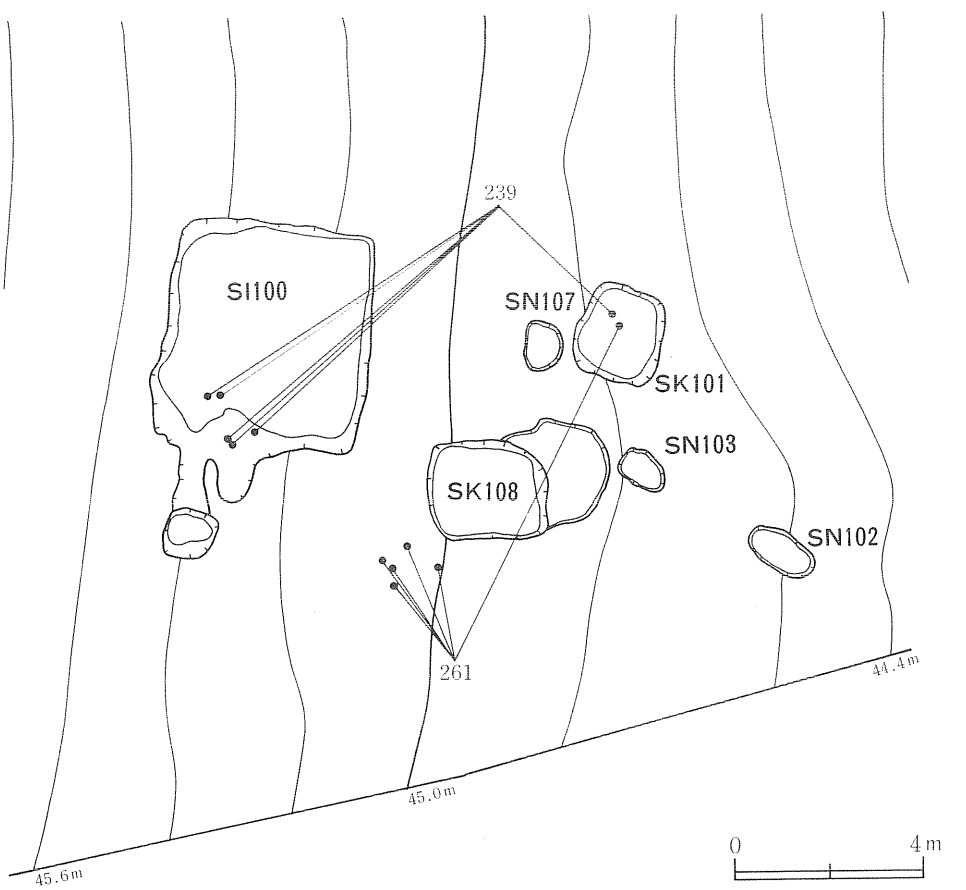
298～304、308～313、315～318・322は粒子の細かい粘土を用い砂粒をほとんど含まず、焼成



第143図　SX130柱穴群

は良好で硬質である。表面の色調は黄橙色～淡黄色で、表面が磨滅している部分はにぶい黄褐色である。全体に黒ずんでおり289～294・305・306とは明らかに異質である。内外面とも磨滅しているものが多い。器壁は薄手で、口縁部は直線的なもの（302・303）、外反するもの（298・301）、内湾するもの（299・300）がある。底面は回転糸切り痕が明瞭に残りやや揚底のものもある（308・311・315・316）。胴部は底部から直線的に立ち上がる。299は外面、302～304・311・313・318は内面、300・322は内外両面に光沢のある黒色の物質が付着しており、その周縁部は光沢のある薄い褐色のアメ状の物質が付着している。いずれもやや粘度のある液体が付着したものが乾燥したような状態である。322は内面は全面に、外面は口唇部から底部にかけて液体が容器内からあふれて流れ落ちたような痕跡がついている。このような特徴からこの物質は漆であると思われる。304は口径11.6cm、底径5.6cm、器高3.8cm、322は口径12.4cm、底径4.8cm、器高3.9cmである。

296・297・314・320・321・323～328は内外面に細くて深いロクロ目のあるもので、器面の



第144図　南部遺構間遺物接合状況

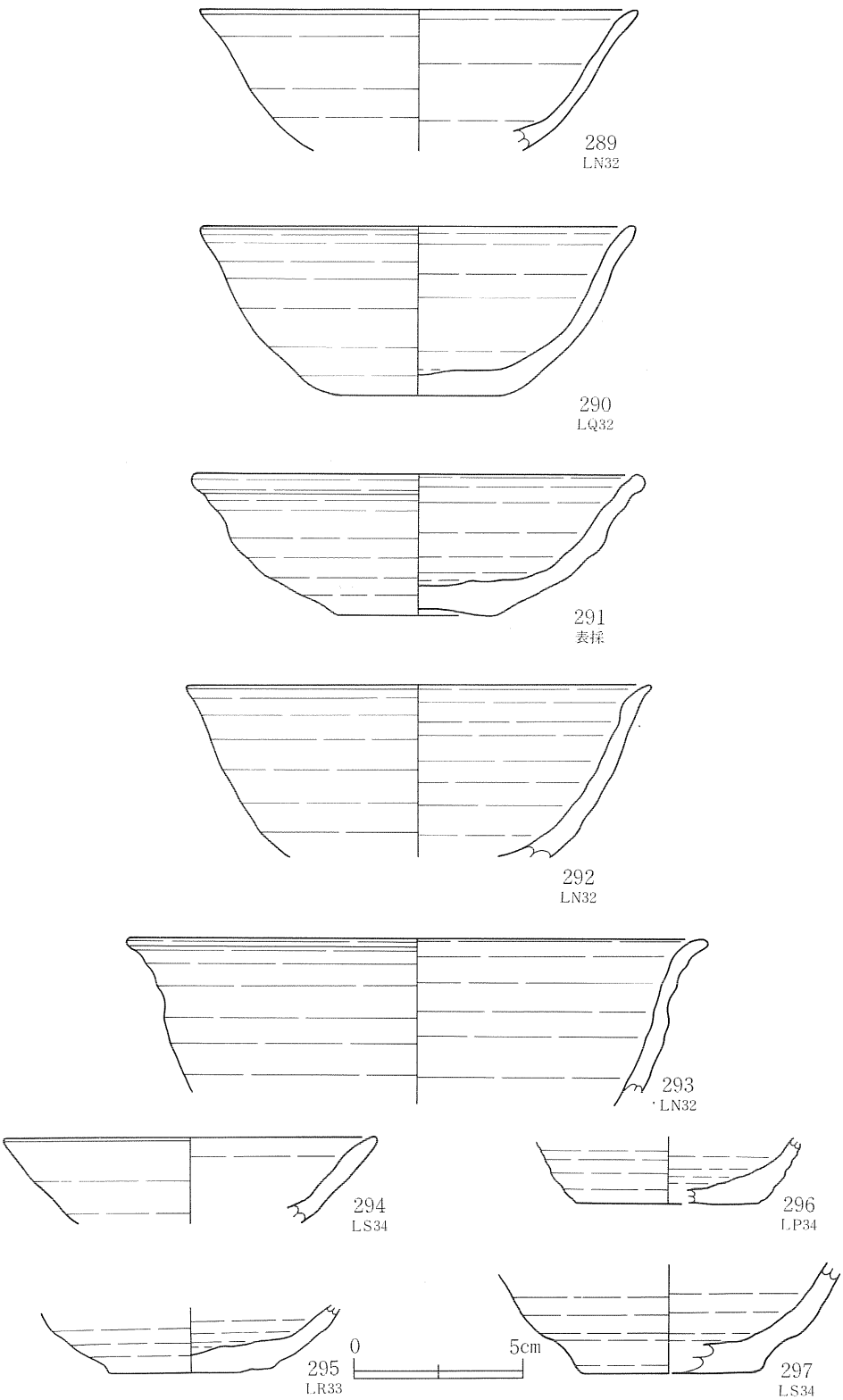
凹凸が激しい。320は底部から口縁部まで直線的に立ち上がる。口縁部には胴部にある深いロクロ目はなく1.1cmの幅で器表面が平坦に調整されている。口縁部直下は薄い。底面にはロクロを静止させ手持ちの糸を回転させた糸切り痕が残る。焼成はあまく軟質である。口径10.9cm、底径4.6cm、器高3.3cmである。321は325、332と重なって出土した。内外面とも漆が付着し外面は黒褐色で光沢がある。器壁はやや厚手で口縁部直下も厚さは変わらない。口縁部は320・321・323・324と同じつくりである。底部は中央がやや突出し平坦ではない。底面にはロクロを静止させて糸を回転させた糸切り痕がある。口径は11.2cm、底径5.0cm、器高3.6cmである。323は口縁部が外反し、324は内湾気味である。324の内外面には部分的に漆が付着する。325は内面に厚く漆が付着する。上半が欠失しているがその割れ口にも、漆が外面に流れ落ちるように厚く付着しており、上半部が欠失した後にも小皿として使用されていたものである。底面は糸切り痕が深く残り中央部が突出している。326～328は底部破片で、いずれも底面には糸切り痕が残る。327は中央部が突出気味、328は逆に揚底気味である。胴部には凹凸の激しい深いロクロ目が残る。

330～337はロクロを使用せずに製作された土器である。330・332には内面に漆が付着している。330は薄く小型で手づくねである。口縁部は内湾気味に立ち上がる。331も手づくねで成形し胴部下半をヘラケズリで調整している。内面はヨコナデ痕が残る。いずれも焼成はあまく軟質である。331の口径は約9.7cm、底径3.7cm、器高4.3cmである。333は外面の全面をヘラケズリで調整している。内面は指頭押圧痕が残る。332・334は幅約1.2cmの粘土紐の接合痕が明瞭に残る。外面はヨコナデの後、口縁部を残して上から下へヘラケズリを施して調整している。内面はヨコナデである。332は底面にもヘラケズリが施されている。口径11.9cm、底径5.3cm、器高4.0cmである。336も同様のつくりの底部である。335は粘土紐の接合痕が明瞭に残るが、内外面とも磨滅が著しい。337は厚手で胴部は膨らみをもち口縁が内湾する。外面の上半はヨコナデ、下半はヘラケズリ調整、内面はヨコナデである。

甕形土器

338は胴部上半が内湾し、口縁部がくの字形に外反する。胎土は粒子の細かい粘土を用い、径3～5㎜の小礫を含む。焼成はきわめて良好で硬質である。339・342・343も胎土、焼成がSX130柱穴群で和鏡と共伴した289と同じである。外面はわずかにヘラナデ痕が残る。内面は不整方向のナデで口縁部は内外面とも指頭押圧痕が明瞭である。339もロクロを使わず、内外面ともヨコナデ調整である。短く先端の細い口縁部が外反する。

340・341は口縁部がくの字形に外反する。どちらも焼成は良好で硬質であるが表面は磨滅している。胎土に小礫は含まず338・339・342・343とは異なる。口縁部はやや肥厚し口唇部は丸みをもつが口縁内面は平坦で、口唇部との間に稜がある。341も340と同様の甕形土器である。口



第145図　南部遺構外出土遺物(1)

縁部の屈曲が強く稜線が明瞭である。口唇部は平坦に面取りされ断面形が方形になる。347も口縁部のつくりは同じであるが、胴部は球形に膨らむ器形である。342は直立する胴部に外側に開く口縁部がほぼ垂直に屈曲する。屈曲部の外面には指頭押圧痕が明瞭である。外面はヘラケズリ調整である。

343は胴部中央が膨らみ胴部上半が内傾して、短い口縁部が立ち上がり外反する。外面の調整はヘラケズリ、内面はヨコナデである。口縁部には内外面とも指頭押圧痕が明瞭である。

344～346はロクロ使用で口縁部が上方に立ち上がる甕形土器である。344は口縁部がわずかに外反した後、上方に引き出されるが、しだいに細くなり先端が尖る。焼成は良好で硬質である。外面には部分的に浅いヘラケズリの痕跡がある。345は大きく外反した後、上方にやや外傾気味に立ち上がる口縁部をもつ。胴部と口縁部の屈曲部分には2条の沈線がめぐる。口縁部とそこから立ち上がる口唇部との稜も明瞭である。346の口縁部はあまり外反せず上方に長く引き出され、しだいに薄くなる。口唇部は344のように尖らず丸味をもっている。

348は鍋形土器である。口縁部は緩やかに外反して開き、先端は上方に細く引き出されている。胴部の傾斜は緩やかで浅い器形である。内外面とも磨滅しており調整は不明である。

5. 東部遺構群の検出遺構と遺物

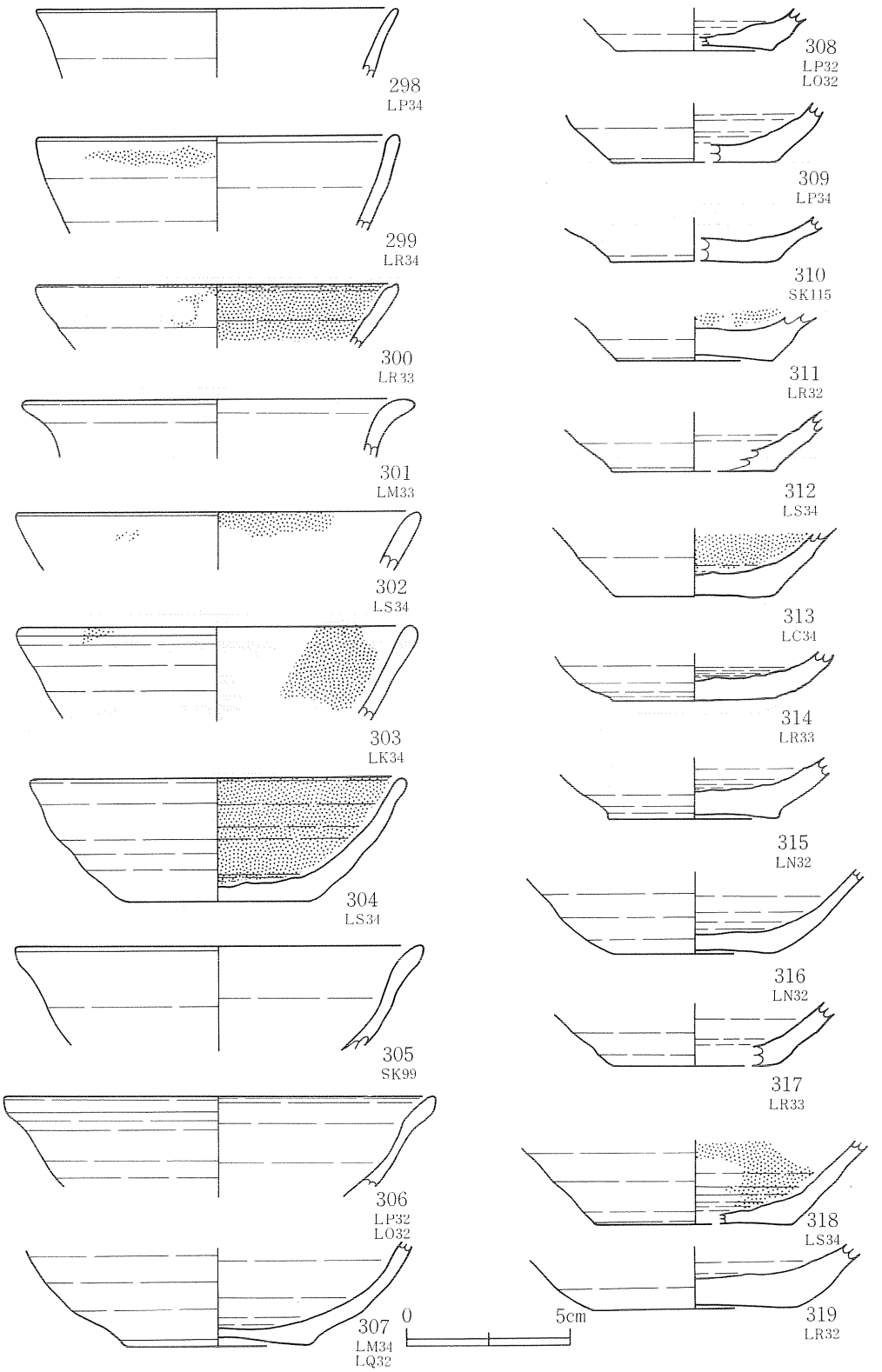
SB24建物跡（第150～154図、図版20・21・48・49）

MF46～48、MG46～48、MH47・48グリッドにまたがって検出した。調査区東側の北東方向に張り出す尾根の南側斜面に構築されている。南側は宅地造成によって大きく削られている。

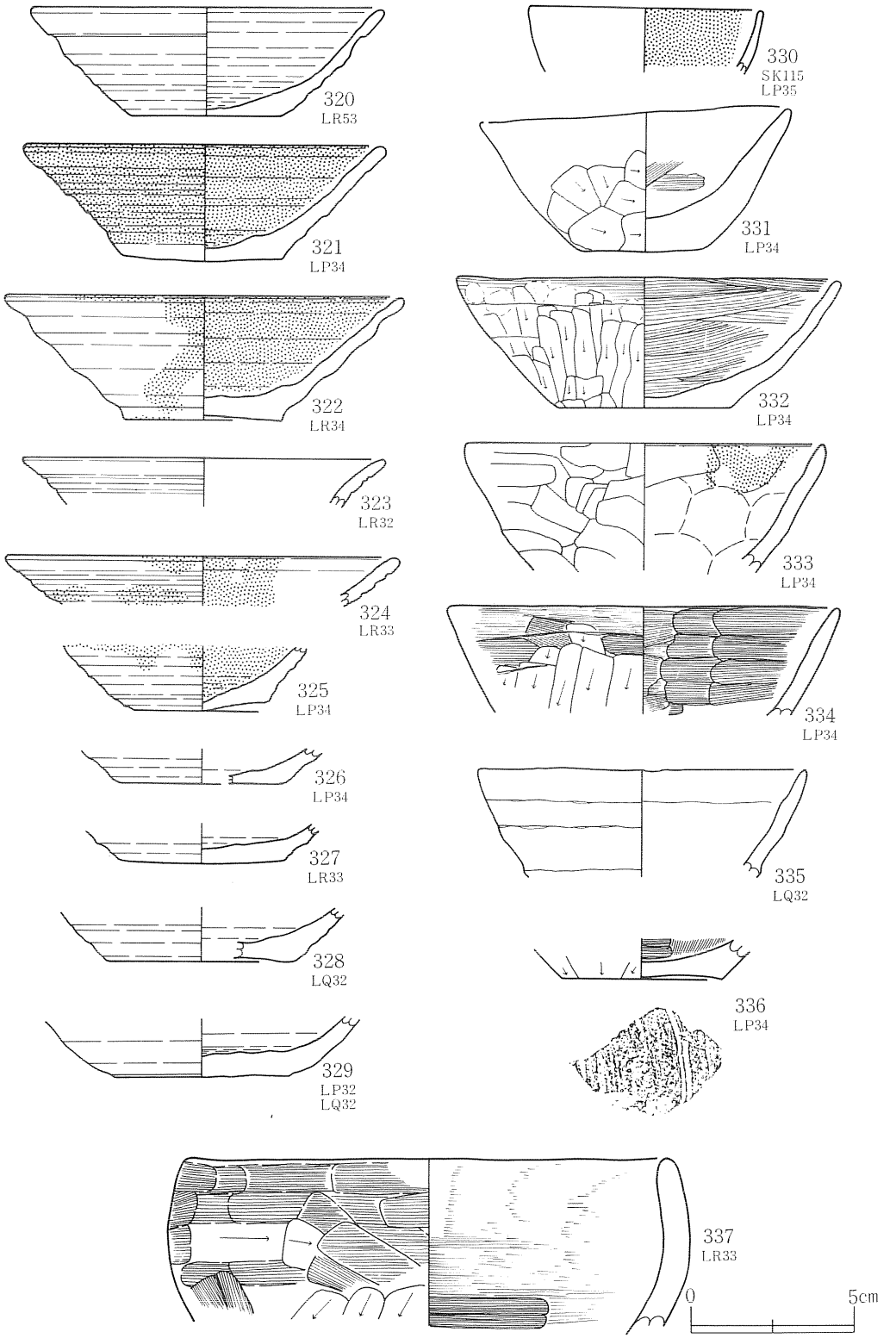
SB92建物跡と同様に、斜面等高線に平行に現存部分の長さ約7m80cm、幅約1m50cmの溝を掘り込んで、その南側に東西約約10m40cm、南北約8m40cm以上の平坦面を作出し、建物を構築している。溝の北端はほぼ直角に東側に曲がり、しだいに浅く幅が狭くなって、東端は北側に開いて曲がりながら約4mで自然に消滅している。溝の壁の高さは西側で約51cm、東側で約18cmである。溝の底面は平坦で、斜面上部にあたる西側も下部の平坦面のある東側も、底面から壁が急角度で立ち上がり、底面と壁との境界はどちら側も明瞭な稜線がある。この溝の南東側では多数の柱穴を検出したが、切り合っている柱穴も多い。

溝の埋土中には部分的に火山灰が堆積している。火山灰は溝の底面に土の堆積が始まった後、溝が完全に埋没する前に底面から約11cm上位のところに、西側の斜面上部から流れ込むように混土火山灰層として堆積している。また平坦面にある柱穴のうち、2本の切り合いがあるP1、P2柱穴の埋土の最上部にも火山灰が堆積していた。柱が抜き取られた跡が凹地となり、その部分に火山灰が堆積したものである。他の柱穴の埋土には火山灰は認められなかった。

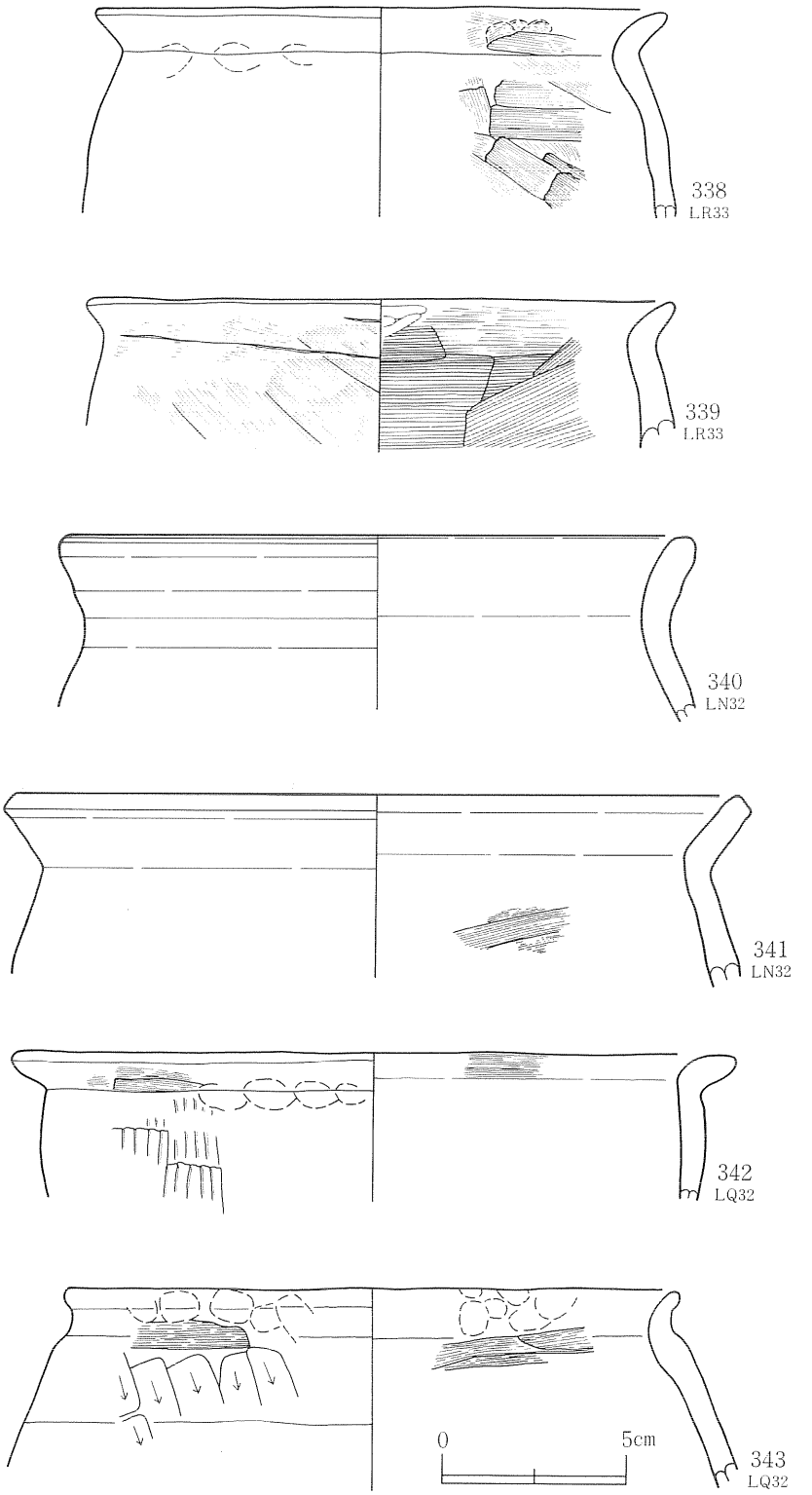
溝から東側約3mまでは地山まで削平して床面としているが、それよりも斜面下部の東側は地山の上に堆積する黒色土中に地山土をブロック状に含む土を貼っている。平坦であるが、全



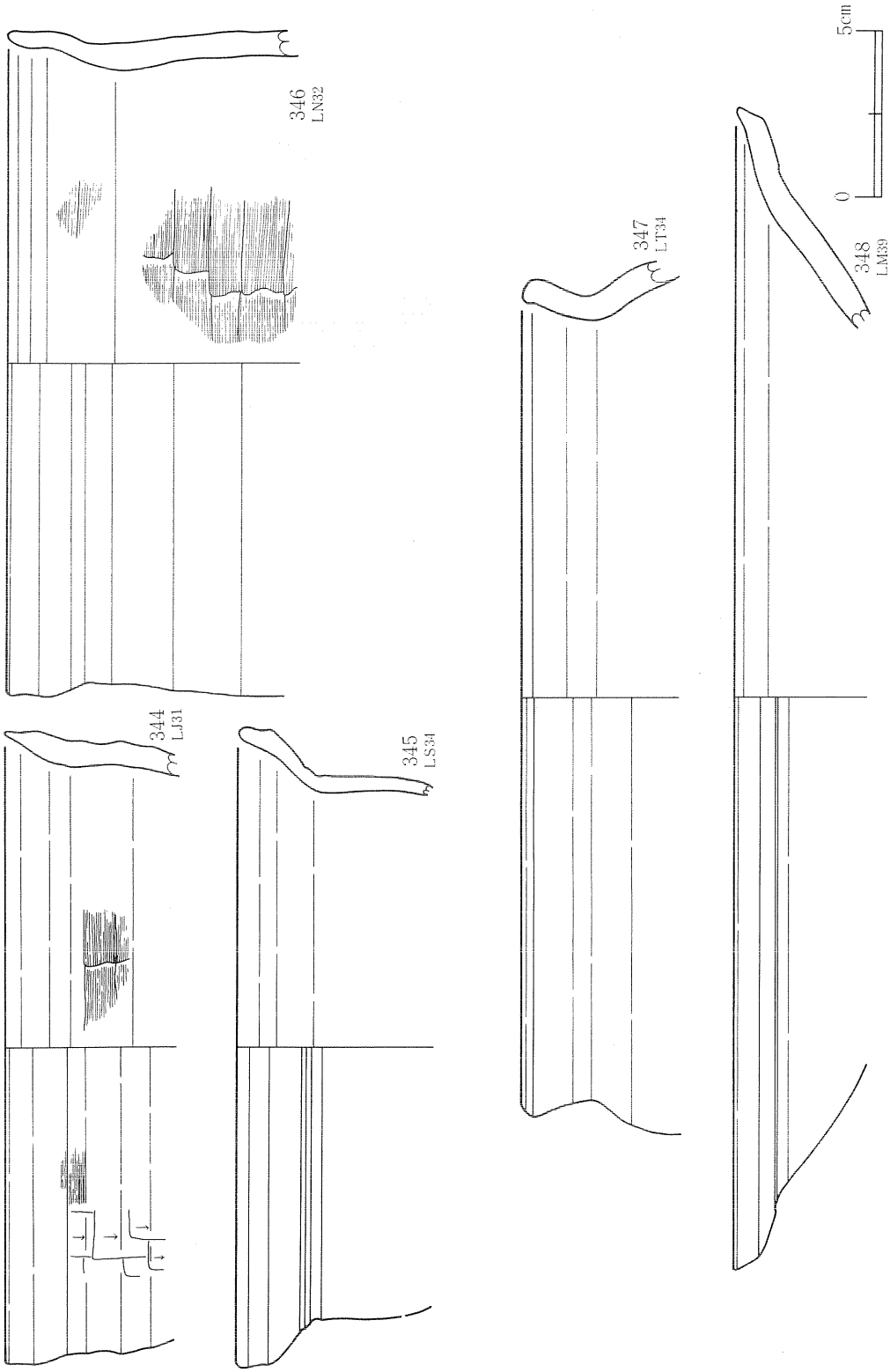
第146図　南部遺構外出土遺物(2)



第147図　南部遺構外出土遺物(3)



第148図　南部遺構外出土遺物(4)



第149図　南部遺構外出土遺物(5)

体に東側に傾斜しており水平ではない。中央部には長軸約３m20cm、短軸約１m50cm、厚さ約20cmの地山土が堆積したマウンドがあり、その北側にも同様の地山土がＰ６柱穴を覆って堆積していた。

柱穴はほとんどが円形または不整方形の掘り方をもち、埋土の土層断面から柱痕跡が観察することができた。Ｐ１・Ｐ２はＰ１が古く、径約44cm、深さ約80cmの円形の掘方に径約22cmの柱痕跡があり、それを切って１辺約45cm、深さ約45cmの不整方形の掘方に径約25cmの柱痕跡のあるＰ２が構築されている。柱穴の最上部には火山灰が堆積していた。Ｐ６はＰ５を切って地山より約11cm上位から掘り込まれている。Ｐ６の掘方には地山土のブロックを多く含む土が充填されている。Ｐ５は地山土のマウンドに覆われている。Ｐ７は黒色土中で平面プランを確認した。１辺約65cmの隅丸方形で、中心に柱痕跡があり、その周辺には地山ブロックを多量に含む土を充填している。確認面からの深さは約58cmあるが、地山を掘り込んでいるのは下部の約25cmである。溝のコーナーにあるＰ４・Ｐ11・Ｐ12は検出時点ではＰ４の掘方は見えず、Ｐ11・Ｐ12が地山面で黒色土のプランとして確認できた。その後さらに精査したところ、地山とみえた部分が地山土を固く貼ったものであることが判明し、断ち割ったところの土層断面でＰ４の掘方と柱痕跡が観察できたものである。したがってＰ11・Ｐ12はＰ４の柱を根元から切り取り、その跡を埋めてから掘り込まれたものである。

以上のような柱穴の状態を考慮して建物跡の柱穴配置を復元してみると、まず第Ｉ期の建物としてはＰ１・Ｐ3・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ7・Ｐ９による東西２間南北２間以上の建物跡が溝の内側に沿うように構築されたと思われる。Ｐ８・Ｐ29とＰ７を結ぶ線は建物の北辺と直角方向なのでＰ８・Ｐ29も第Ｉ期の建物内部の柱穴の可能性がある。その後建て替えがあり、第Ⅱ期の建物としてＰ２・Ｐ3・Ｐ12・Ｐ６・Ｐ10による東西２間南北２間以上の建物が、第Ｉ期とほぼ同じ位置でＰ３を再利用して構築された。第Ｉ期に比べて主軸がずれるが、溝が東側にほぼ直角に屈曲した後、先端がやや北側に開く方向と一致する。さらに第Ⅲ期として主軸方向を大きく変えてＰ14・Ｐ24等を使用する遺物が構築されたとも考えられるが、これらの柱穴については第Ｉ期または第Ⅱ期の建物内部の柱穴であった可能性もあり、第Ⅲ期の建物については、可能性の指摘に止めておきたい。第Ｉ期建物跡の柱間間隔は、Ｐ１－Ｐ３－Ｐ４が２m10cm＋２m60cm（７尺＋９尺）、Ｐ４－Ｐ５－Ｐ７－Ｐ９が３m20cm＋２m88cm＋２m10cm(10.5尺＋9.5尺＋７尺)である。第Ⅱ期の建物跡はＰ２－Ｐ３－Ｐ12は１m96cm＋２m42cm（6.5尺＋８尺）、Ｐ12－Ｐ６－Ｐ10は３m36cm＋３m40cm(11尺＋11尺)である。第Ｉ期は東西27尺であるのに対し第Ⅱ期は東西22尺で、間数も１間減っている。南北の柱間距離も約１割短くなっており、建物を縮小する建て替えであったと考えられる。

遺物は溝の中から出土し、溝の南端部近くにまとまりがあるが量は多くない。埋土中に含ま

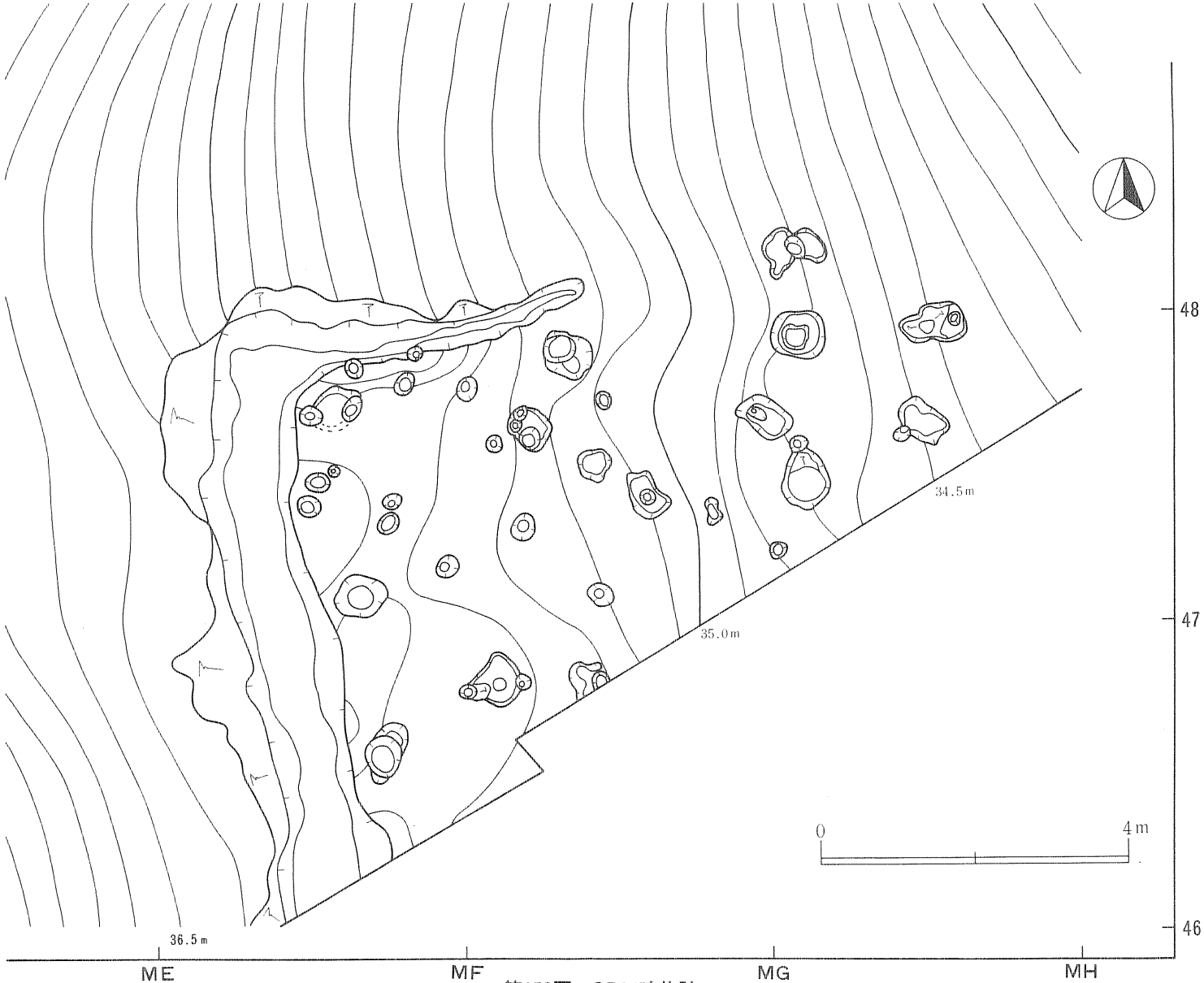
れる火山灰と同じレベルか、それより下層からの出土である。火山灰が流入する直前に廃棄されたものと考えられる。建物跡の上層の表土中にも遺物が含まれていたが、柱穴からはほとんど出土しなかった。土器以外ではＰ２の掘方の柱痕跡の根元に小児頭大の鉄滓が入れられていたのみである。

坏形土器は少なく図化できたのは２点である。349は口縁部が外側に引き出されるように外反するものである。350は底面に回転糸切り痕がある。

351・352は口縁部が外反する小型甕形土器である。351は胴部の器壁が薄く口縁部が厚い。外面が磨滅しているため不明だが、おそらくは外面に深いヘラケズリ調整を施したことによるものと思われる。352は胴部がやや膨らむ器形で、外面はヘラケズリ調整されている。353～356はロクロ調整で、口縁部が外反した後、口唇部が上方に立ち上がるものである。胴部から屈曲して外反した口縁部は逆にやや丸く内湾気味に外に伸び、さらに口唇部は上方やや内側に引き出されている。355は胴部と口縁部の屈曲が緩やかで連続的であるが、353・354・356は屈曲がきつく稜が明瞭である。口唇部は先端がやや厚めである。357は内面の調整がナデ、358はヘラナデで、358の外面はやや深めのヘラケズリである。358は溝のほぼ中央と南端から約４ｍ離れて出土した破片が接合している。

359は羽釜である。胴部から口縁部にかけて内傾し胴部中央に最大径があると推定される。口唇部から約2.4cm下に幅2.6cmの鍔が水平にめぐる。鍔の先端は薄くなり断面形は３角形を呈する。鍔から口唇部まではほぼ垂直で器表面も滑らかである。口唇部は丸く、SI74竪穴住居跡出土の羽釜のように口唇部が外側に突出気味に肥厚せず明瞭な稜もない。口径18.7cm、鍔の径24.2cmである。口縁部と鍔はロクロ目が残るが、内外面とも磨滅しており胴部の調整は不明である。

360・361は鍋形土器である。いずれも口縁部から胴部上半はロクロ調整され、その下に深いヘラケズリが施されている。胴部下半から底面は内外面にタタキ目があり、360はタタキ目のあとに内面の上部にナデ調整が施されている。胴部上半のヘラケズリはタタキ目のあとで施されている。360は外反する口縁部の器厚が胴部と同じで厚手である。先端が上方やや外側に立ち上がるが、口唇部は丸みを帯びている。胴部はあまり膨らみをもたず直線的である。器厚は口縁部から胴部下半まで厚手である。361も外反する口縁部の端部が上方に立ち上がるが、口唇部は先端が尖り断面形が3角形に引き出されている。口縁部は胴部に比べて器厚が薄く、底面も胴部に比べて薄くなり、360とは異なっている。器形は胴部が丸みを帯びて膨らみ、底面は丸底である。360は溝の北西隅から、361は羽釜や甕形土器とともに溝の南端部にまとまって出土した。361は口径38.6cm器高10.3cmである。



第150図　SB24建物跡

1　10YR 2/3：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。耕作土、食物根を多く含む。
2　10YR 2/3：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。ややしまり有り。食物根をやや含む。
3　10YR 2/2：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。褐色土 φ1 mm 以下を 2%、地山の土をブロック状に 15% 含む。
4　7.5YR 2/1：黒色土　粒子やや細かく、粘性無し。ややしまり有り。2 の黒褐色土をところどころにブロック状に含む。
5　10YR 2/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性やや有り。2 と 19 の土をブロック状に含む。
6　10YR 2/3：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性無し。褐色土 φ1 mm 以下を 5% 含む。
7　10YR 3/4：暗褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。10 の土 φ1～2 mm を 10%、4 の黒色土を 5% 含み、土師器片を多数含む。
8　10YR 3/3：黒褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。10 の土 φ1～2 mm を 10% 含む。
9　10YR 5/8：黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。
10　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。黒褐色土がブロック状に混入し、崩壊した状態。
11　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。13 の土 φ1～5 mm を 15% 含む。
12　10YR 3/4：暗褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。11 と 13 の土をブロック状に含む。
13　10YR 6/6：明黄褐色土　ややしまり有り。地山の土に黒褐色土がブロック状に 30% 混入。
14　10YR 2/3：黒褐色土　1 の土に 10YR 6/6（明黄褐色土）がブロック状に混入。
15　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。1 と 14 の土が混入したもの。
16　10YR 2/2：黒褐色土＋10YR 3/3：暗褐色土　粒子粗く、粘性無し。13 の土が微量、地山の土ブロック状に 20% 混入。貼土。
17　10YR 3/3：黒褐色土＋10YR 2/2：黒褐色土＋7.5YR 2/1：黒色土　粒子粒く、粘性無し。地山の土が混ざり合った状態で（φ1～2 mm）10% 混入。黒色土は粘性有り、ややしまり有り。
18　10YR 5/6：黄褐色土＋10YR 2/3：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。地山の土 φ1～5 mm が一部ブロック状に混入。
19　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。地山の土に褐色土が混入。
20　10YR 3/3：暗褐色土　しまり無し。15 の暗褐色土に 10YR 6/6：明黄褐色土 φ1～5 mm が細かい状態で 15%混入。柱痕。
21　10YR 3/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。13 の土を微量に含む。柱痕。
22　10YR 2/3：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性無し。地山の土がブロック状に 10% 混入。柱痕。
23　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。黒褐色土と地山の土と黒色土がブロック状に混ざり合った状態で混入。炭化物を含む。柱痕。
24　10YR 3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。地山の土が細かく（φ2～7 mm）ブロック状に混入。柱痕。
25　10YR 3/2：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。明黄褐色土を 20% 混入。
※ 20～24 は柱痕 Pit

ベルト 2
1　10YR 4/6：褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり無し。黒褐色土 φ1～3 mm を 10% 含む。
2　10YR 2/3：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。褐色土 φ1～3 mm を 3% 含む。
3　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり若干有り。黄褐色粒 φ1～5 mm を 3% 含む。
4　10YR 3/3＋10YR 3/4＋10YR 3/2：暗褐色土＋黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無し。褐色土 φ1～2 mm を 15% 含む。
5　10YR 3/3：暗褐色土　粒子粗く、しまり無し。黄褐色土をブロック状に 30% 含む。
6　10YR 5/6：黄褐色土　粒子粗く、しまり無し。植物根多い。黒褐色土 φ1～2 mm を 40% 含む。
7　10YR 3/3：暗褐色土　粒子粗く、しまり無し。黄褐色土をブロック状に 10% 含む。
8　10YR 5/6：黄褐色土　粒子粗く、しまり有り。黒褐色土 φ1～5 mm を 20% 含む。
9　10YR 3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、しまり無し。粘性若干有り。褐色粒 φ1～3 mm を 10% 含む。
10　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、しまり無し。植物根を多く含む。土師器片を含む。火山灰らしき砂状の土（φ1 mm 以下）がまとまって含まれている。暗褐色土を 20% 含む。
11　10YR 6/4：にぶい黄橙色土　火山灰。
12　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。土師器片を含む。褐色土を 5% 含む。
13　10YR 4/6：褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまり有り。暗褐色土 φ1～2 mm を 10%、赤褐色土 φ1～2 mm を 2% 含む。
14　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり無し。炭化物有り。褐色土 φ1～5 mm を 5%、暗褐色土 φ1～5 mm を 5%、赤褐色土 φ1 mm を微量含む。
15　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。灰白土を 15%含む。
16　10YR 4/3：にぶい黄褐色土　粉子粗く、粘性無し。褐色土 φ1～2 mm を 5% 含む。
17　10YR 4/4：褐色土　粒子細かく、しまり有り。地山の黄褐色土を 25%、褐色土を 10% 含む。
18　10YR 8/2：灰白土　粒子細かく、粘性やや有り。赤褐色土 φ1 mm 以下を 3%、黄褐色土 φ1 mm 以下を 5% 含む。

ベルト 3
1　10YR 2/3：黒褐色土　粒子粗く、植物根多く含む。
2　10YR 2/3：黒褐色土　粒子粗く、植物根多く含む。3 の土が 10%混入。
3　10YR 5/6：黄褐色土　地山の崩壊土。
4　10YR 2/3：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。3 の土がブロック状に崩壊。
5　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。地山粒 φ2～5 mm を 30% 含む。
6　10YR 2/3：黒褐色土　粒子粗く、粘性やや有り。地山粒 1～2 mm を 10% 含む。
7　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。地山粒 φ2～5 mm を 7% 含む。
8　10YR 3/4：暗褐色土　粒子粗く、粘性無し。3 の土 φ2～5 mm を 15% 含む。
9　10YR 5/6：黄褐色土　地山の崩壊土に黒褐色土がブロック状に混入。
10　10YR 5/4：にぶい黄褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。土師器片を含む。
11　10YR 5/6：黄褐色土　地山の崩壊土。
12　10YR 4/4：褐色土　粒子細かく、粘性有り。10 の土が 10% 混入。
13　10YR 2/3：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。炭化物 φ5 mm を含む。
14　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。7 と地山の土が 30% 混入。

ベルト 4
1　10YR 3/4：暗褐色土　粒子粗く、しまり無し。粘性やや有り。黄褐色粒 φ1～2 mm を 1%、土師器片を多く含む。
2　10YR 6/4：にぶい黄橙色土　火山灰である。
3　10YR 3/4：暗褐色土　粒子やや細かく。粘性やややあり。地山土が混ざり合った状態で 10% 混入。
4　10YR 3/2：黒褐色土　粒子粗く、しまり無し。粘性やや有り。地山の黄褐色粒 φ2～5 mm を 10% を含む。
5　10YR 4/6：褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。4 の土と地山の土が混ざり合った状態。
6　10YR 3/4：暗褐色土　粒子粗く、しまり無し。粘性やや有り。地山の土が崩壊して 20% 混入。
7　10YR 3/4：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。地山の土が混じり合った状態で 20% 混入。
8　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。地山の土が混入。
9　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。
10　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。1 の土が微量混入。

ベルト 5
1　10YR 4/4：褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。地山の土 φ1～5 mm がブロック状に 7%混入。
2　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。地山の土と 4 の土がブロック状に 20% ずつ混入。
3　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。地山の土に 1 の土が 5% 混入。
4　10YR 3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。しまり無し。表層の土と植物根が混ざり合って混入。

マウンド
1　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。地山の土と褐色土が混じり合った状態で、ブロック状に混入。
2　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性無し。1 の土がブロック状に 10% 混入。
3　10YR 3/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。表土と地山の土がブロック状に（φ1～5 mm）5% 混入。
4　10YR 3/4：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。しまり有り。地山の黄褐色土がブロック状に（φ1～5 mm）10% 混入。
5　10YR 3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまりやや有り。炭化物を含む。
6　10YR 5/4：にぶい黄褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。φ1 mm 以下の褐色土を 10% 含む。
7　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。褐色土を 10% 含む。
8　10YR 5/8：黄褐色土　粒子細かく。粘性やや有り。褐色土を 2% 混入。
9　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。
10　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。地山の土がブロック状に 30% 混入。
11　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。地山の土に褐色土が 5% 混入。

P 4. 11. 12
1　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや細かく、粘性無し。しまり強。黒褐色土（10YR 2/2）がブロック状に 20%、地山の明黄褐色土（10YR 6/6）が 2% 混入。
5　10YR 6/6：明暗褐色土＋10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。黒褐色土が 3%、地山の橙黄色土が 3%、黄橙色土が 2%、にぶい黄橙色土が 5% 混入。
6　10YR 6/6：明黄褐色土＋10YR 7/4：にぶい黄橙色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。地山の黄橙色土が 15%、浅黄橙色土が 5%、明黄褐色土 10%、黄褐色土が 5%、混入。

P5. 6
1　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、粘性無し。植物根が有り。ボソボソした状態である。柱痕。
2　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。しまり無し。地山の土と黒褐色土、褐色土、黄褐色土が混ざり合った状態で混入。柱痕。
3　10YR 7/8：黄褐色土　地山の土に、にぶい黄褐色土（10YR 7/4）がボソボソした状態で混入。柱痕。
4　10YR 3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。しまり有り。地山が混ざり合った状態でブロック状に混入。
5　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子粗く、粘性やや有り。しまり無し。地山の土ににぶい黄橙色の土がボソボソの状態で混入。
6　10YR 4/3：にぶい黄褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無し。黒褐色土に地山の褐色土 φ 1～2 mm が 20% 混入。柱痕。
7　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。ほとんどが地山の土だが、褐色土がブロック状に 5% 含まれる。
8　10YR 7/6：明黄褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。地山の土と黒褐色土、黄褐色土が混ざり合った状態で混入。
9　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。しまりやや有り。黒褐色土（10YR 2/3）を 15%、地山の明黄褐色土を 7%、炭化物を微量含む。柱痕。
10　10YR 7/6：明黄褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。しまり有り。地山の黄橙色土（10YR 7/8）を 3%、黄褐色土を 7% 炭化粒を微量含む。柱痕。

P17、18
1　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。地山の土が混ざり合った状態でブロック状に 15%混入。炭化物を含む。
2　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。1 よりさらに混ざり合った状態、柱痕。
3　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。地山の黄褐色土と褐色土を含む。
4　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無し。植物根、炭化物、土師器片を含む。柱痕。

第151図　SB24建物跡

5　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。地山の黄褐色土と褐色土を含む。
※１～２は pit17、４～５は pit18
P4、11、12
1　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや細かく、粘性無し。しまり強、黒褐色土（10YR 2/2）がブロック状に 20%、地山の明黄褐色土（10YR 6/6）が 2% 混入。
2　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無し。地山の明黄褐色土（10YR 6/6）と黄褐色土（10YR 5/6）がそれぞれ 10% 混入。柱痕。
3　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無し。火山灰がにぶい黄褐色（10YR 5/4）の砂状で混入。火山灰は粒子粗く、粘性無し。しまり無し。黒褐色土がひとかたまりになって包含されている。柱痕。
4　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、粘性やや有り。しまり無し。3 の黒褐色土が包含されている。炭化粒 φ1～3 mm をところどころに 10%、地山の明黄褐色土を 5%、浅黄橙色土（10YR 8/3）を 2% 含む。柱痕。
5　10YR 6/6：明黄褐色土＋10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。黒褐色土が 3%、地山の橙黄色土が 3%、黄橙色土が 2%、にぶい黄橙色土が 5% 混入。
6　10YR 6/6：明黄褐色土＋10YR 7/4：にぶい黄橙色土　粒子細かく、粘性やや有り、しまり有り。地山の黄橙色土が 15%、浅黄橙色土が 5%、明黄褐色土が 10%、黄褐色土が 5% 混入。
7　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり無し。
※２～４は柱痕、Pit 4 である。
P1、2
1　10YR 4/3：にぶい黄褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。火山灰を含む。パサパサした土。炭化物を含む。
2　10YR 5/8：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。火山灰を含む。パサパサした土。炭化物を含む。
3　10YR 5/8：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。火山灰を含まず。
4　10YR 4/6：褐色土　粒子粗く、粘性やや有り。しまり無し。地山の土と褐色土が混じり合った状態でブロック状に混入。炭化物と土師器片を含む。柱痕である。
5　10YR 4/3：にぶい黄褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。しまり無し。地山の土がボロボロした状態で 20%混入。
6　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。ほとんど地山に近いが、しまりが無い。
7　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや粗く。粘性無し。しまりやや有り地山の明黄褐色土を 15%、炭白色土を 3% 含む。
8　10YR 5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。明黄褐色土（10YR 6/8）を 30%、黒褐色土を 2%、粒子の粗い酸化鉄のような明褐色土（7.5YR 5/8）を 3%、ブロック状に含む。
9　10YR 4/4：　褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無し。明黄褐色土を 5%、炭化物を 3%、土師器片を多く含む。柱痕である。
10　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや細く、粘性無し、しまり有り。黒褐色土を 10%、地山の明黄褐色土（10YR 6/8）を 2% 含む。
11　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。1 の黄褐色土をブロック状に 10%、炭化物を微量に含む。
12　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや粗く。粘性無し、しまりややわるい。火山灰、炭化物を含む。
13　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。火山灰を含む。パサパサした土、炭化物を含む。黒褐色土を 10%、地山の橙土色（7.5YR 6/8）を 3% 含む。
14　10YR 7/8：黄橙色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまりやや有り。明黄褐色土を 3%、地山土を 10%、黒褐色土を 3% 含む。
15　10YR 7/8：黄橙色土　粒子細かく、粘性無し。しまり強。
※１～８は Pit 2、９～15 は Pit 1
P3
1　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子粗く、粘性やや有り。ボソボソした状態でしまり無し。柱痕である。
2　10YR 5/6：黄褐色土　黒褐色土に 6 の土がブロック状に混入。
3　10YR 4/4：　褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。地山の土と 2 の土がブロック状に混入。植物根、炭化物、土師器片を含む。
4　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子やや細かく、しまり有り。黒褐色土が混じり合った状態で、ブロック状に混入。
5　10YR 4/4：褐色土　地山の土と黒褐色土がブロック状に混入。
6　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子粗く、粘性やや有り。
7　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子粗く、粘性やや有り。ボソボソした状態でしまり無し。
P10
1　10YR 2/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまりやや有り。地山の黄褐色土が混じり合った状態でブロック状に 15% 混入。
2　10YR 2/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまりやや有り。地山の黄褐色土が混じり合った状態でブロック状に 15% 混入、柱痕。
3　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまりやや有り。地山の黄褐色土がブロック状に 30% 混入。
4　10YR 6/6：明黄褐色土　粒子やや粗く、粘性有り。しまり有り。ほとんど地山の土だが褐色土をブロック状に 10% 混入。
P7
1　10YR 3/3：暗褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無くボソボソした状態。地山の黄褐色土 φ1－7 mm を 7% 含む。
2　10YR 2/3：黒褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり無し。地山の土が混じり合った状態でブロック状に 20% 混入。
P21、22
1　10YR 4/4：褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。地山の土をブロック状に 10% 含む。
2　10YR 3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまりやや有り。植物根を含む。
3　10YR 4/3：にぶい黄褐色土　4 の土が混ざり合った状態でブロック状に混入。
4　10YR 5/8：黄褐色土　粒子粗く、粘性有り。しまり有り、地山の土に 1 の土をブロック状に含む。
5　10YR 4/4：褐色土　粒子やや細かく、粘性有り。しまりやや有り。地山の土と黄褐色土が混ざり合った状態でブロック状に混入。
6　10YR 5/8：黄褐色土　粒子粗く、粘性有り。しまり有り。地山の土に 1 の褐色土をブロック状に含む。
7　10YR 3/2：黒褐色土　粒子やや細かく、しまり有り、地山の黄褐色土をブロック状に 10% 含む。炭化物を含む。
8　10YR 5/8：黄褐色土　粒子粗く、粘性有り。しまり有り。地山の土に 1 の褐色土をブロック状に含む。
P14、15、16
1　10YR 4/4：褐色土　粒子やや粗く、粘性やや有り。しまり無し。炭化物を含む。地山の土がブロック状に 10% 混入。柱痕。
2　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。ややしまり有り。地山の土に褐色土が 3% 混入。
3　10YR 3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。地山の土がブロック状に 20% 混入。柱痕。
4　10YR 5/6：黄褐色土　粒子やや粗く、粘性有り。しまり無し。ややボソボソした状態。3 の土がブロック状に 10% 混入。柱痕。
5　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり無し。地山の土がボソボソした状態。柱痕。
6　10YR 5/6：黄褐色土　地山の土に褐色土 φ1～5 mm がブロック状に混入。柱痕。
7　10YR 3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。3 とほぼ同じ地山の土 φ1～5 mm を 5%混入。
8　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、粘性無し。6 の土がボソボソした状態で 30% 混入。
9　10YR 3/3：褐色土　粒子粗く、粘性無し。6 の土 φ 1～5 mm を 10% 混入。
10　10YR 5/6：黄褐色土　地山の土に褐色土 φ1～5 mm がブロック状に混入。
11　10YR 4/3：にぶい黄褐色土　1 の褐色土と 10 の土がブロック状に混入。
12　10YR 3/4：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり無し。10 の土が混じり合った状態でブロック状に混入。
13　10YR 5/6：黄褐色土　地山の土に 11 の褐色土がブロック状に φ1～5 mm 混入。
※３～６は Pit14、７～10 は Pit 15、１～２は Pit 16 である。
P19、20
1　10YR 3/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。地山の土をブロック状に 15%含む。柱痕。
2　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、粘性無し。1 の黒褐色土に地山の土が混ざり合った状態でブロック状に含む。
3　10YR 3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性無し、4 の土をブロック状に 10% 含む。
4　10YR 5/8：黄褐色土　粒子細かく、粘性やや有り。しまり有り。地山の土に 3 の暗褐色土がブロック状に混入。
※１は柱痕、Pit 19
P23
1　10YR 3/3：暗褐色土　2 の黒褐色土に地山の土が混ざり合った状態で混入。
2　10YR 3/2：黒褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまり無し。地山の黄褐色土がブロック状に 3% 含まれる。
P24
1　10YR 7/6：明黄褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。しまり有り。地山の土に黒褐色土が 5% 混入。
2　10YR 4/4：褐色土　粒子粗く、粘性有り。黒褐色土がブロック状に 20% 混入。
3　10YR 7/6：明黄褐色土　粒子やや細かく、粘性やや有り。しまり有り。地山の土に黒褐色土が 5% 混入。
4　10YR 7/6：明黄褐色土　地山の土に黄橙色土を多く含み、しまりが強い。
P8、29
1　10YR 3/3：暗褐色土　粒子粗く、粘性無し。ボソボソした状態でしまり無し。地山の土がブロック状に 10% 混入。柱痕。
2　10YR 3/4：暗褐色土　明褐黄色土が混じり合った状態でブロック状に混入。柱痕。
3　10YR 3/4：暗褐色土　粒子粗く、粘性無し。しまりやや有り。
4　10YR 3/2：黒褐色土　地山の土が混じり合った状態でブロック状に混入。
5　10YR 3/2：黒褐色土　地山の土が細かい状態で、ブロック状に 30% 混入。
6　10YR 6/8：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。地山の土に褐色土がブロック状に 5% 混入。
7　10YR 3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまり無し。パサパサした状態。植物根有り。
8　10YR 3/2：明黄褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。地山の土に褐色土がブロック状に 5% 混入。

6. 東部遺構外出土遺物（第156図～158図、図版49、50）

調査区北東側にのびる尾根の南側斜面からは土師器がまとまって出土したが、小破片が多く、全体の形態を復元できるものは少ない。この斜面にはSB24建物跡があり、さらに南側の削平された部分にも本来遺構が存在していた可能性もある。東部遺構外出土遺物はSB24建物跡出土遺物と接合するものもあり、SB24建物跡やその南側のすでに失われた可能性のある遺構に伴う遺物が、東側の斜面下部に流出または廃棄されたものと考えられる。土師器はSB24建物跡と同様に杯形土器は少なく甕形土器が主である。

杯形土器

362は口縁部が内湾気味に立ち上がる杯形土器である。器壁は薄手であるが、焼成は良好でやや硬質である。

皿型土器

363は小型の皿型土器で、焼成・色調・胎土は他の土師器とは異なり、南部遺構群のSK112土坑やSK115土坑及び遺構外から出土した杯形土器の一部とよく似ている。内外面ともロクロ調整痕が残り、底面は回転糸切り痕がある。胎土には粒子の細かい粘土を用い、砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で硬質である。表面の色調はにぶい黄褐色である。内面の胴部上半から口縁部にかけてと外面の口縁部には漆が付着している。口径8.6cm、底径3.5cm、器高3.9cmである。

甕形土器

364～366は口縁部がくの字形に外反する甕形土器である。365は外面がヘラケズリ、内面はナデで胴部上半は横方向、下半は不整方向である。胴部上半がやや膨らむが、直径は胴上半と口縁部でほぼ同じである。口径9.2cm、底径9.2cm、器高19.1cmである。366は口唇部が平坦にナデ調整されている。胴部上半はあまり張らず最大径が口縁部にあると思われる。367・368は口唇部が上方に立ち上がる甕形土器である。367は上方に立ち上がる口唇部が丸く肥厚し、断面形が楕円形になる。胴部は張らず円筒形である。368は上方に立ち上がる口唇部がやや外側に細く引き出され、先端が尖り断面形は3角形である。いずれも胴部の張りが弱いため外側に大きく屈曲して張り出す口縁部が強調される器形である。369は胴部下半から底部の破片で外面はヘラケズリ、内面はナデである。胴部が張らず円筒形に近い器形である。370は外面にタタキ目の残る丸底の甕形土器底部である。内面の調整はナデである。器壁は底面が厚く、胴部下半にかけてやや薄くなるようである。外面は磨滅が著しい。371は鍋形土器で、口縁部が外反し、肥厚する口唇部が上方に立ち上がり、断面形が3角形を呈する。胴部は膨らみがある。胴部上半は外面に横方向のヘラケズリが施され、胴部下半から底部にかけては内外面ともタタキ目が残る。器壁は厚手で胴部上半のみ若干薄い。全体の製作技法はSB24出土の360・361と共通し、口縁

部から底部にかけての器壁の厚さは360に、口縁部の形態と胴部の膨らむ器形は361に類似している。

7.　北部遺構群の検出遺構と遺物

SK14土坑（第159図、図版23）

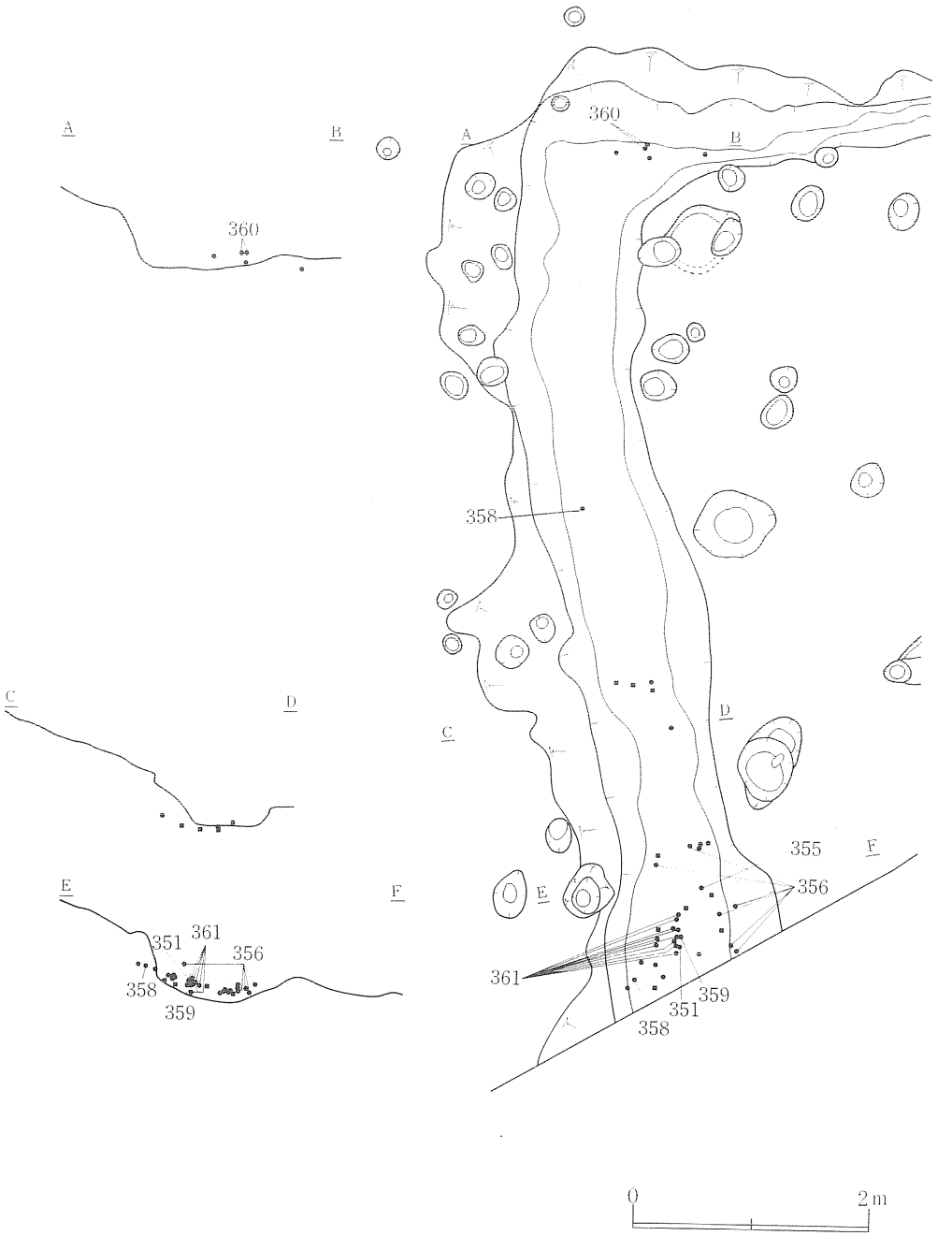
調査区北側の丘陵南斜面の下部、LG62・LH62グリッドで検出した。北側の斜面中腹にはやや離れてSK16土坑がある。平面形は一辺が約90cmの隅丸方形である。確認面でプランの縁辺には焼土が点在し、その内部には火山灰が円形に露出していた。底面は中央に向かって緩く傾斜し、径約35cmの円形の凹み状になっている。北東側では段差をもたず連続的な傾斜であるが、南西側では段が明瞭である。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、北東側では一部がオーバーハングしている。斜面に構築されているため深さは斜面上部側では約34cm、下部側では約20cmである。底面と壁面は強い火熱を受け固く焼け締まっている。壁のオーバーハング部分や底面の段は強い火熱によってもろくなった部分が崩壊したものと考えられる。底面には厚さ約８cmの炭化物の単純層が堆積し、黒褐色土をはさんで上部には火山灰がレンズ状に堆積する。底面に炭の層が堆積すること、土坑全体が強い火熱を受けていること、埋土中に火山灰のレンズ状堆積があることは、SK30土坑やSK101土坑と共通する。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK16土坑（第159図、図版24）

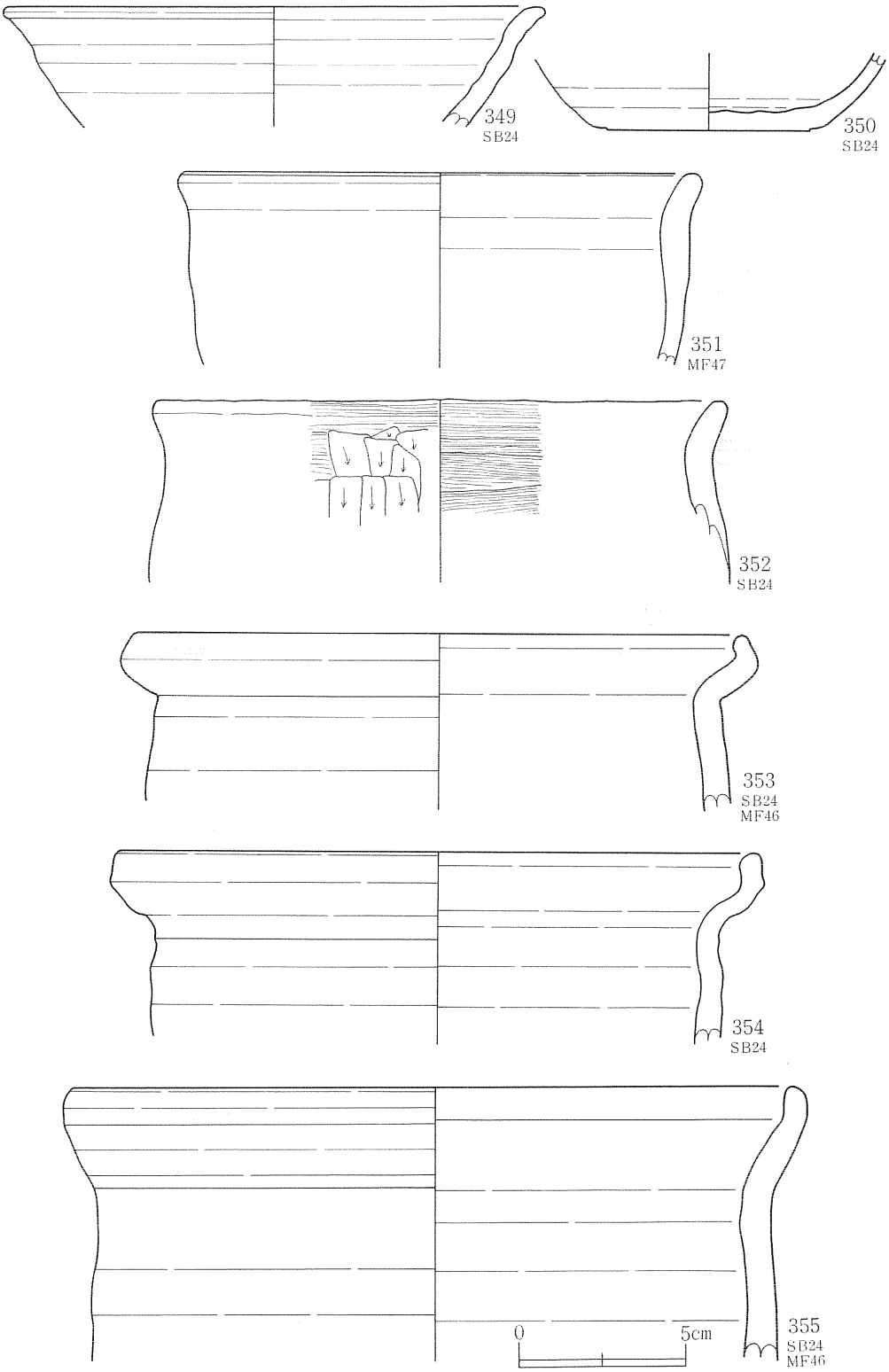
LG65・66グリッドで検出した。SK14土坑より北側の斜面上部に位置する。上端の平面形は長軸２m14cm、短軸１m84cmの不整円形で、底面は径約55cmの円形である。深さは斜面上部の北側で約92cm、斜面下部の南側で約65cmである。底面はゆるやかに湾曲し外傾して立ち上がり、断面形は擂鉢形をしている。底面・壁ともかなり堅緻であるが焼けてはいない。土坑の最下層には褐色土が薄く堆積し、中央部では約15cm埋没したところで火山灰の堆積が始まり４～５cmの厚さがある。その上部には斜面上部である北西側から黒褐色土、暗褐色土が流入し自然堆積している。遺物は出土しなかったが、火山灰の堆積状態からみてSK14土坑・SK30土坑などと同時期に廃絶したものと考えられる。

8.　北部遺構外出土遺物

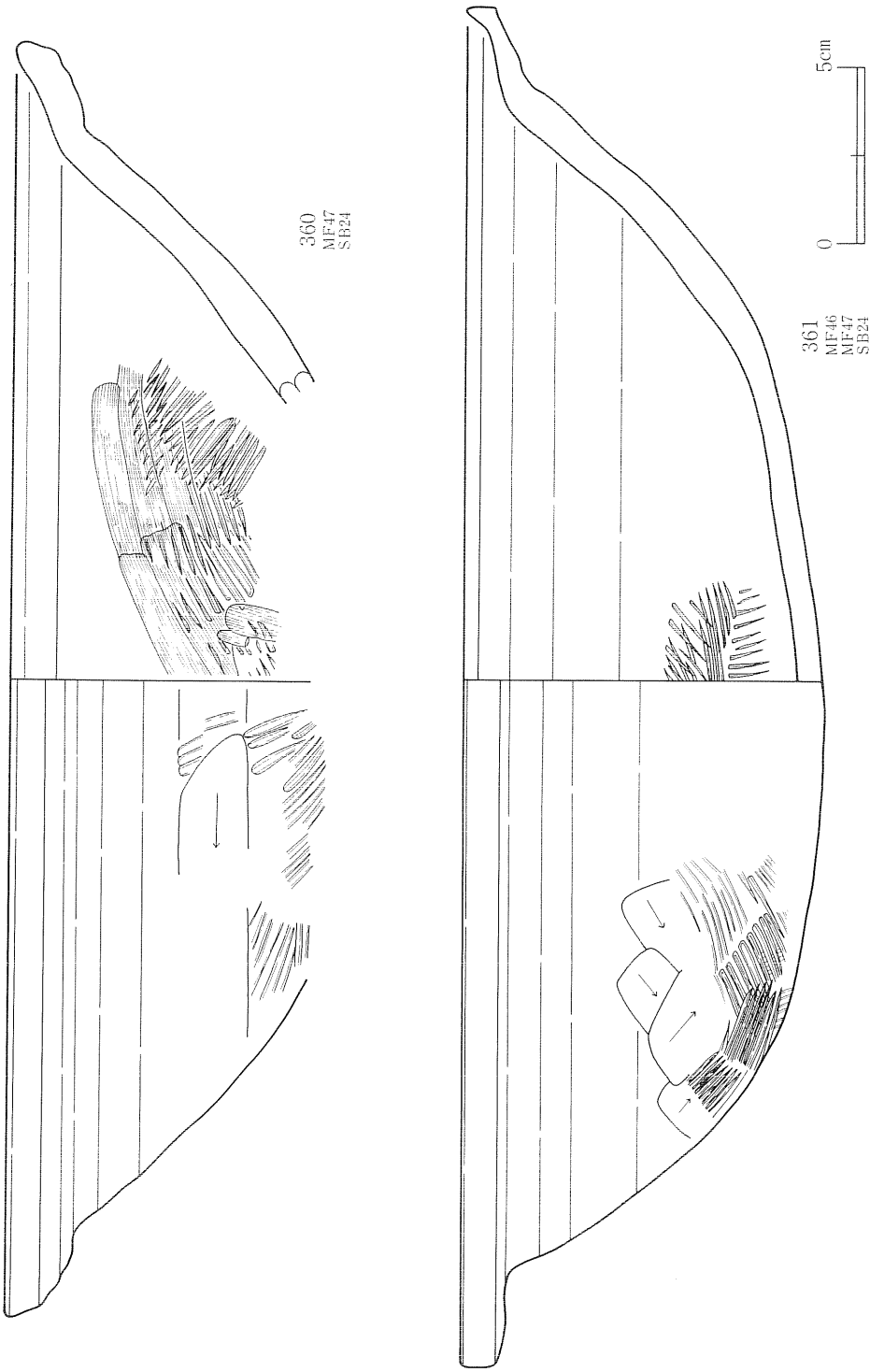
SK14の周辺で１点、丘陵上と斜面から各１点の土師器細片が出土した。細片のためいずれも器形は不明である。



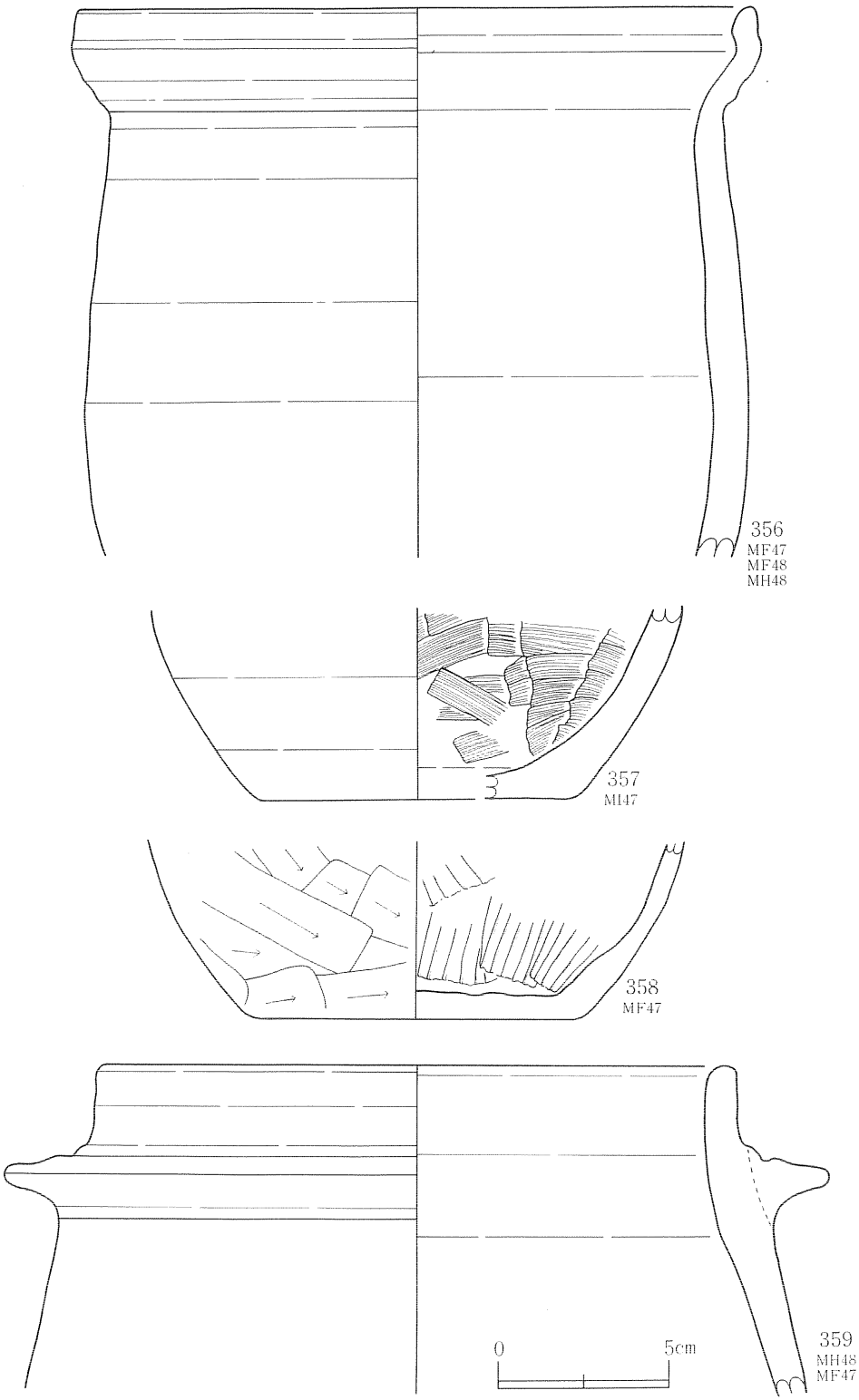
第152図　SB24建物跡遺物出土状況



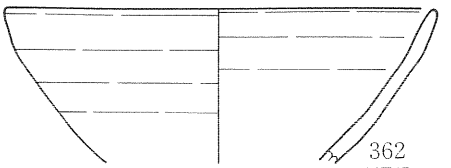
第153図　SB24建物跡出土遺物(1)



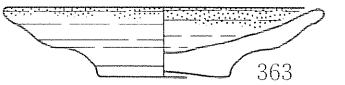
第154図　SB24建物跡出土遺物(2)



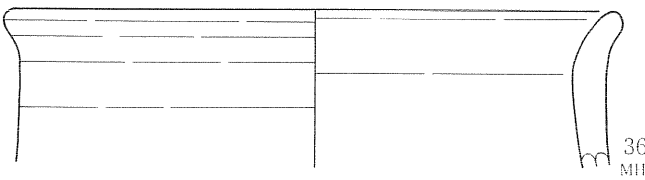
第155図　東部遺構外出土遺物(1)



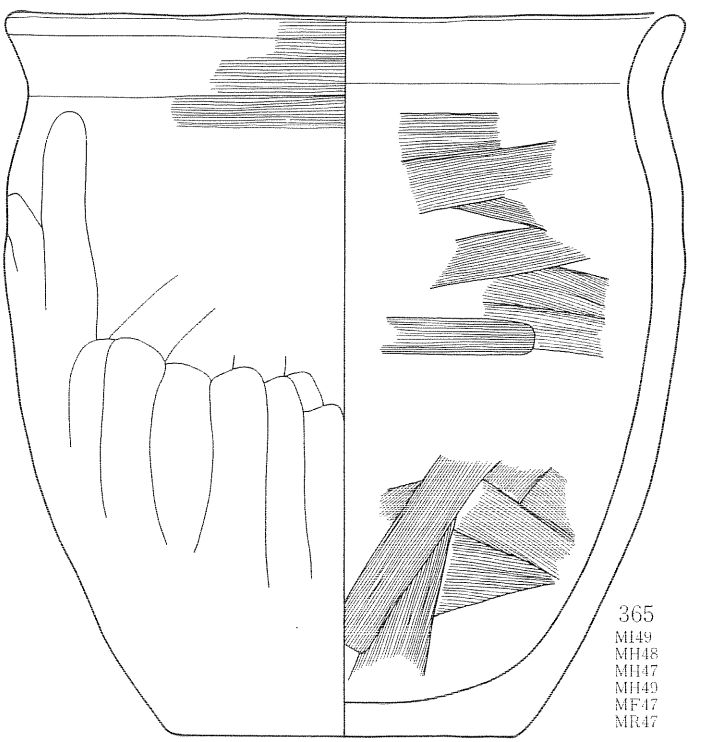
362
MF47
MH48



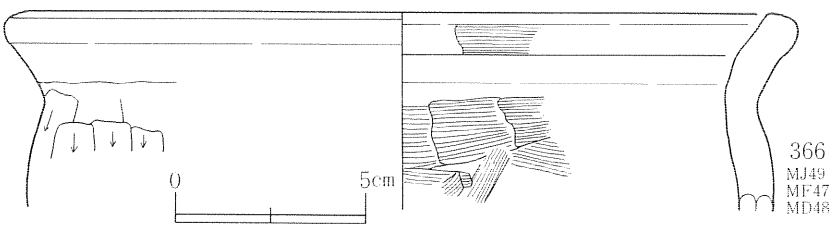
363
MH48



364
MH48

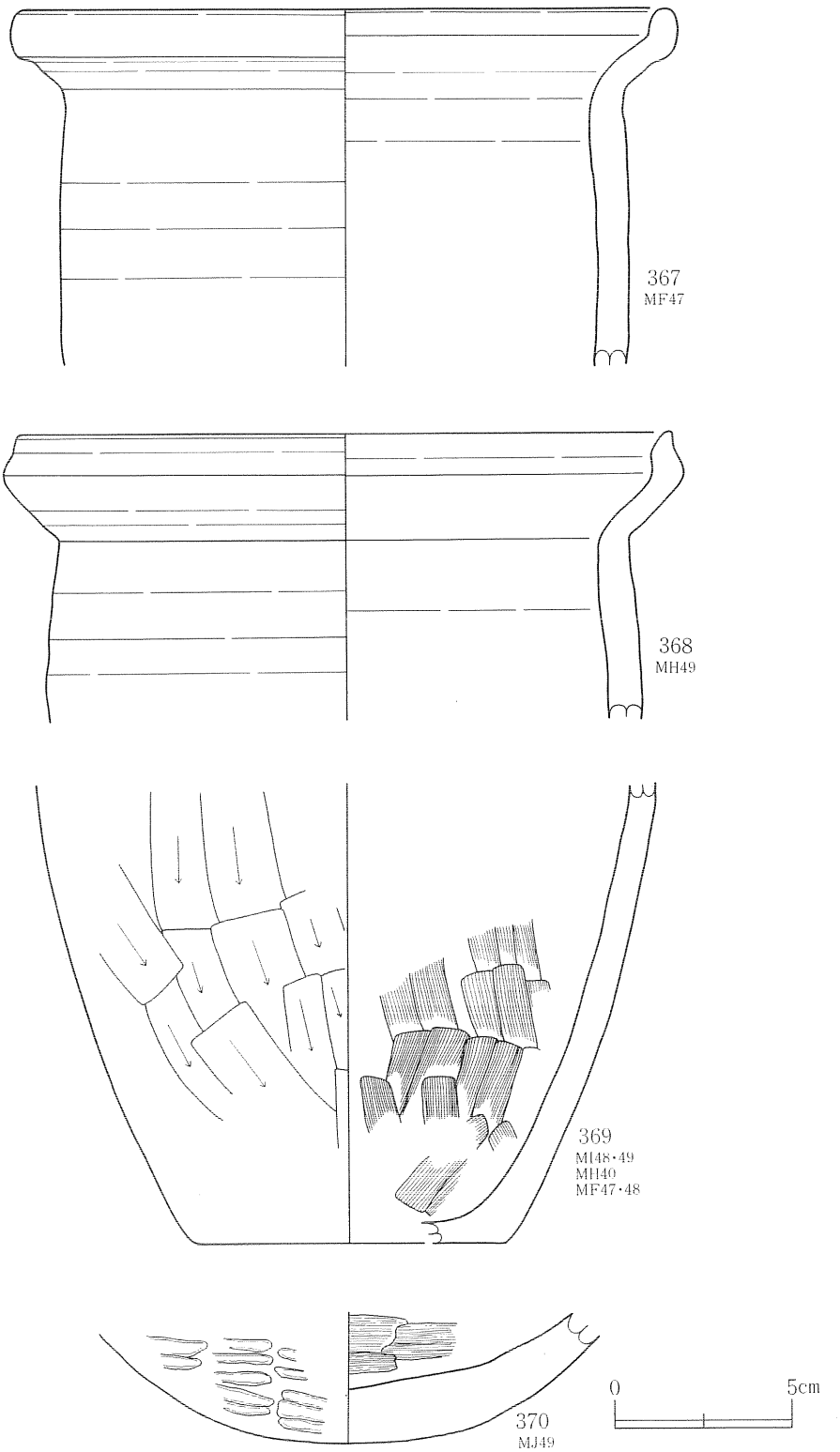


365
MI49
MH48
MH47
MH49
MF47
MR47

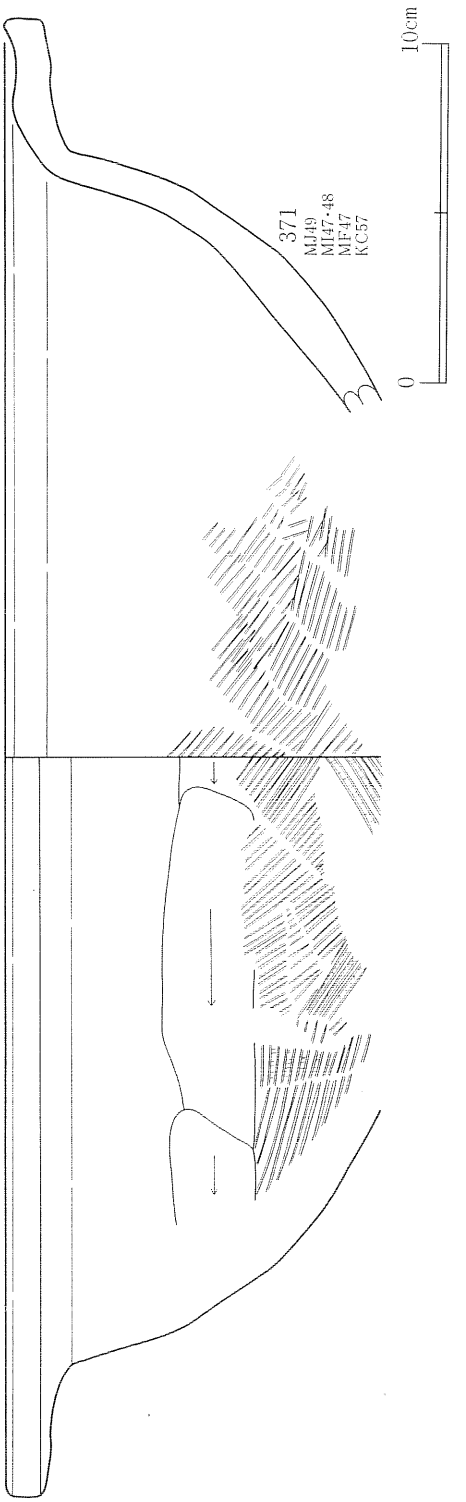


366
MJ49
MF47
MD48

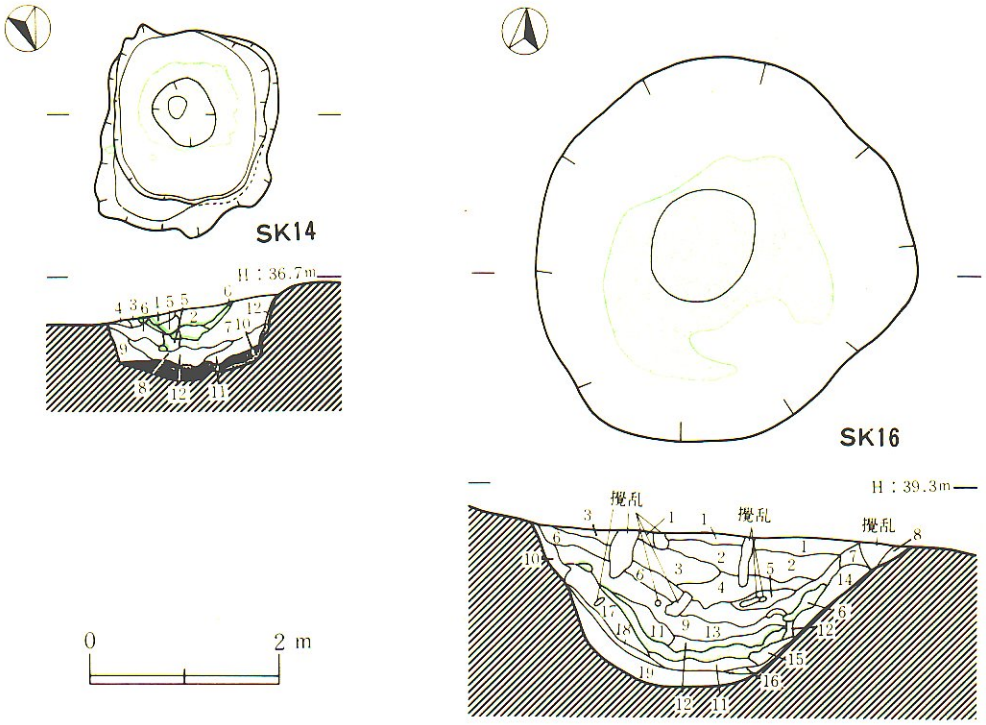
第156図　東部遺構外出土遺物(2)



第157図　東部遺構外出土遺物(3)



第158図　東部遺構外出土遺物(4)



SK14

1　10YR3/2：暗褐色土　粒子細かく、粘性無し。火山灰を多量に含有するため、パサパサしている。
2　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまりもあまり無い。炭化物1%、褐色粒φ1mm大3%。
3　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗いか、粘性無し。しまりは若干有る。褐色粒φ1mm大2%。
4　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや細かく、粘性無し。褐色粒φ1mm～2mm10%。
5　10YR3/2：黒褐色土　粒子やや細かく、粘性若干有り。しまりも有る。火山灰を30%程含み、一部ブロック状の堆積もみられる。
6　10YR3/4：にぶい黄褐色土　火山灰層
7　10YR3/2：黒褐色土　粒子細かく粘性有り。しまりはあまり無い。炭化物φ1mm～3mm大、若干含有。
8　10YR3/2：黒褐色土　粒子細かく粘性若干有り。しまりも若干有る。炭化物φ1mm～10mm大5%。焼土粒微量。
9　10YR3/3：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまりも無い。炭化物φ2mm～10mm大10%。焼土粒φ5mm大1%、地山ブロック20%。
10　10YR3/3：黒褐色土　基本的に、8と類似する。炭化物φ5mm大2%。褐色粒φ1mm～2mm大3%。
11　炭化物、焼土粒φ5mm大1%含有。
12　焼土ブロック及び焼けている壁。

SK16

1　10YR3/2：黒褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。褐色粒1%、径1mm、ほそぼそしている。
2　10YR2/1：黒色土　粒子細かく、粘性若干有り。赤褐色粒径1mm若干、褐色粒径1mm1%。しまりが有る。
3　10YR3/3：黒褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりかなり有り。炭化物径1mmから4mm2%、赤褐色粒径1mm大10%、小礫径5mmが若干。
4　10YR2/1：黒色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまりも有る。炭化物径1mmから5mm1%、赤褐色粒径1mm若干。
褐色粒径1mmから2mmが2%、小礫5mm若若干。
5　10YR^{17}/1黒褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり無く、ほそぼそしている。褐色粒径1mm3%、赤褐色粒若干。
6　10YR3/2：黒褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまり有り。炭化物径1mmから5mm5%、褐色粒径1mmから6mm6%、一部褐色ブロック有り。
7　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性無し。しまりかなり有る。黄褐色粒径1mm1%。（崩壊土）
8　10YR3/3：褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまりに欠ける。黄褐色ブロックを多量に含む。
9　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、しまりかなり有り。粘性若干有り。炭化物1mmから2mm1%、小礫3mmから10mm若干。
10　10YR3/3：褐色土　粒子粗く、粘性若干有り。しまりに欠ける。黄褐色ブロックをかなり含む。（崩壊土）
11　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまりに欠ける。炭化物径3mmから6mm3%、褐色粒径1mm大5%。
12　10YR3/3：暗褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまりかなり有り。炭化物1mmから2mm4%。褐色粒径1mm大2%。
13　10YR8/4：火山灰　部分的に、炭化物若干含む。径1mm。（黄褐色土）
14　10YR3/3：褐色土　粒子やや粗く、粘性有り。ほそぼそしている。
15　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。
16　10YR3/3：暗褐色土　粒子やや粗く、粘性無し。しまりかなり有り。褐色粒2mmから3mm3%。
17　10YR3/3：褐色土　粒子やや粗く、粘性若干有り。しまりに欠ける。（崩壊土）
18　10YR3/3：褐色土　粒子細かく、粘性有り。しまり有り。
19　10YR5/6：黄褐色土　粒子細かく、粘性若干有り。しまり有り。地山ブロックを多量に含有。

第159図　SK14土坑、SK16土坑

第3章　自然科学的分析

第1節　^{14}C年代測定

試料採取地点

8SD—1　SI69竪穴住居跡南壁壁溝内
8SD—2　SB92建物跡炭化壁材
8SD—3　SK101土坑坑底面
8SD—4　SK30土坑火山灰層の上
8SD—5　SK30土坑火山灰層の下

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

秋田県埋蔵文化センター殿　　1988年3月15日

1987年12月26日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で，標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値（B.P.）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ^{14}C%を付記してあります。

記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
CaK-13657	Charcoal from 下田遺跡 No. 1 8SD-1.	280 ± 80 A.D.1670
GaK-13658	Charcoal from 下田遺跡 No. 1 8SD-2.	1030 ±160 A.D.920
GaK-13659	Charcoal from 下田遺跡 No. 3. 8SD-3.	200 ± 90 A.D.1750
GaK-136660	Charcoal from 下田遺跡 No. 4. 8SD-4.	1190 ± 70 A.D.760
GaK-13661	Charcoal from 下田遺跡 No. 5. 8SD-5.	510 ± 80 A.D.1440

以上　　木越　邦彦　㊞